

少年／戦姫絶唱フェイト・シンフォギア

にやはっふー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は転生者と呼ばれる存在だ

何故転生したのか分からない、ただ前世の記憶だけを持っている

だが変わらない、変わっているとしたら、特別な力を持っている。

なら、できることはしよう、この姿の人物のようには思う

だから彼は血の歌を歌う、歌姫達の運命に巻き込まれる。それがどのような結末を迎えるか分からずに……………

主人公「だけどなんでアストルフオなんだよおおお!!?」

目次

1話・その始まり	1
2話・得意災害対策機動部	11
3話・彼に成れない	20
4話・二人の適合者	31
5話・迷走	41
特別編・少年のバレンタインデー	48
6話・最悪な物語、だけど	54
7話・つかの間	66
8話・純白の闇	75
9話・歌	89
10話・きせき	103
11話・ルナアタック後日談	109
フロンティア事変	
12話・新たな事件と異物の戦慄	117
13話・死の顕現	125
14話・抗う者達	135
15話・祭り、ひとときの休息	149
16話・咆哮	160
17話・運命	173
18話・白銀の騎士	184
19話・自分としての決意	195
20話・フロンティア事変のその後	210
空白期・外伝	

外の理・第1章、最・凶・爆・誕ッ!!	217
外の理・第2章、いざ進む	227
外の理・第3章、悪夢	236
外の理・第4章、混沌	246
外の理・第5章、関係	260
外の理・第6章、幸せ	268
Gの番外編・にんぎよひめ	278
21話・異聞の始まり	285
22話・舞台、固有結界	295
23話・暴走する愛	306
24話・外伝にしては酷い精鋭部隊	318
25話・白亜の城	330
26話・存在しない小さな願い	341
27話・話し合い	354
お気に入り300突破で考えた話	362
Gの番外編2話・日常	379
Gの番外編3話、響	387
Gの番外編4話、GからGXに入る前に	392
Gの番外編5話、危険地区がいつぱい	401
Gの番外編6話、こんなんしてた理由	414
魔法少女事変	
28話・解放された日々から	425
29話・錬金術師と龍崎アスカ	435
30話・血の歌姫と共に歩くために	443
31話・錬金術師対奇跡	454

32話・夏はサービス? | 466

33話・歯車は狂いだす | 478

34話・彼とオレ | 494

35話・もしも、かもしれない、都合のいい物語 | 506

36話・選択肢 | 516

37話・龍崎アスカ | 533

38話・無限なる夢幻の担い手 | 543

39話・魔法少女事変後・・・ | 552

平行運命編

40話・病み | 561

41話・限界 | 571

42話・恐怖を超える | 584

43話・平行世界 | 597

44話・出会いたくない出会い | 605

特別番外編、マリア・カデンツァヴナ・イヴの誕生日 | 615

45話・海上コンサート | 620

46話・愛ってなんだろう? | 631

47話・動き | 641

48話・敵の目的 | 652

49話・暴走による終焉 | 662

50話・平行の終わり、帰る世界 | 671

番外編

番外編・もしもの英霊達 | 679

番外編・やっちゃった♪ | 692

番外編・立花響の誕生日 | 707

番外編・二年そこそこの関係	712
番外編・平行世界の装者達	723
番外編・乙女な心	731
番外編・ハロウィンパニックシンフォギア	740
番外編・アスカの休日	746
番外編・リリイ	754
番外編・しないシンフォギア	766
セレナ・誕生日	777
アクシズ事変	
変わった世界はいまの世界	782
51話・終わらない	793
52話・錬金術師、シンフォギア、そして宿命	801
53話・禁断の力	810
54話・人の身超えし、その傲慢	820
55話・理想の聖杯	832
56話・愚者の石と愚者の意思	843
57話・特訓と過去	853
58話・歌姫の聖杯	865
特別番外編、小日向未来の誕生日	880
59話・星と霊長と理想	883
60話・グラランド・セイバー	893
61話・バースデー	905
62話・神秘を振るう不完全	915
63話・終わりと始まり、その後	926
最終回・彼女達の明日	933

1話・その始まり

それは夕暮れの中だった。

私は倒れ、奏さんは血を流している。

周りにはノイズが蠢く。私はここで死ぬのかな？

そう思っていた。あの人、奏さんが歌を歌うその瞬間まで……………

「!? ダメだっ」

それは見たこともない鳥の頭を持つ、獅子のような、メカメカしい生き物?のようなものに乗った、一人の少女。

「そのままじゃ死んじゃうっ。くっそ、頼む!! 諦めない、まだ諦めない!!」

その少女の胸の宝石から、一冊の本が現れる。それに、驚きながらも、これかツ!?!と叫び、それを広げ、光が放たれ、ページが奏さんを包み込む。

「君は」

「まだ助ける人達はいらんだっ、まだまだ戦う。まだ助ける、まだ救える。まだ諦めない!! まだ生きてるんだっ、諦めてたまるか!!」

その少女の声が響くと共に、生き物も吼えて、空高く飛ぶ。

それが最後であり、私が遭遇した事件。聖少女事件の一端である。

「あれから二年か……………」

「響、どうしたの?」

「ううん、なんでもないよ未来♪」

私の名前は立花響、彼女は幼なじみの小日向未来。大切な友人で、私にとって日向のように暖かい友人。同じ私立リディアン学院に通う、ピアノの音楽家を目指している。

そして、待ち合わせの場所で、静かにスマホをいじる幼なじみがあった。

「ん? やつと来た、二人とも」

そう言って、ピンクの髪、短髪で、男物を好んで着る幼なじみが近づく。近くの学園で一人暮らしで通う、幼なじみの一人だ。

いまでも男性服、ボーイッシュな服装だが、可愛い女の子。大切な友人だ。

「それで、今日はどうする?」

「ん〜私は少し、音楽関係かな? 新作のアーティストさんが最近話題だし、響は?」

「あつ、下着買おうかな? 少しサイズがきつくつて」

その時、ボーイッシュな幼なじみがこけそうになる。危ないな。

「ちよ、アスカ、どうしたの?」

「どうしたじゃないよ響っ、オレを連れてランジェリーショップ行く気か!」

「問題ないよ〜」

「あるだろおとおおお」

そしていつもいつも、同じ事を叫ぶ、幼なじみ、

「オレは、男だああああああああああ」

龍崎アスカ、可愛い、私とそう背丈の変わらない、男性と言いつ張る可愛い女の子だ。確かに生物学的には性別は男性だけど、女の子だ。

これは私、立花響を始めとした人達と、彼女、龍崎アスカの、物語……

「響、いい顔してもアスカの性別は変わらないからね」

「えっダメ」

「ダメだよっ」

—— 龍崎アスカ

龍崎アスカ、とある共学の学園に通う、普通の男子生徒である。

だが実際は違う。

俺は簡単に言えば、転生者である。

「響はなんでオレを男としてみないんだよ。園児の時に知ってるだろ」

「認めないよ私っ」

「いい顔でもう……」

……話が逸れた、オレは転生者。つまり、死んで、生まれたら、前世の記憶持ちと言う、とんでもねえ設定があるんだ。

赤ん坊の頃は黒歴史だ、母親もいまも若くてね、当時から記憶あるって知られたらなに言われるか分からない。ってか、終わる。あの母にバレれば終わる。

オレは時折ウインドに映る自分を見る。これが自分？ 違うと思いたいが違わない。

オレの前の世界、前世では、とあるゲームシリーズ、英雄のゲームがある。

その名は簡単に言えば『Fate／シリーズ』と言う。

このシリーズは色々な言い回しがあるが、悪いが自分はそこまで深くない。ただ、この作品で出てくるキャラクターは好きな者がいる。ほとんどの人間そうだろう。

ただ住みたい世界と言われれば大多数ノーと言えるほど、人の命が紙より軽く消し飛ぶ世界。それがFate／だ。

その中で、スマホゲームや、外伝とも言えるスピンオフで活躍した英雄がいる。

その名はアストルフオ。現在のオレの姿、声の元だろう。彼は三つ編みしてたが、オレはぶった切ってるよ。オレ男だからね。

彼も男だが、なんか失恋した仲間のために女装したらしい逸話から、女の子の姿であり、本人も可愛い物好きだからと言う理由から続けている。ちなみに理性が蒸発しているため、そう言う辺りは自分と違うのだろう。

神様転生だったら、オレは容姿に関してお任せを選ぼう。だがこれはないだろ。確かに好きなキャラだ、だが成りたい訳じゃない。

そして周りからは女の子の子としか見られないのは、悲しいんだ。

男からナンパや、変な目で見られたりするし、女子からもだ。オレの理性は蒸発では無く崩壊しそうだ。

けど耐えてやる。なんで前世の記憶持ちで生きてるか知らないが、オレは二度目の人生をまっとうに生きる。

(前の世界も普通に生きてたし、できることはしよう。せめて姿は似

てるんだ、彼のいいところくらいは引き継ぐ気で生きてやる)

そんなことを思う中、

「んでさあ、アスカはどれ着る?」

「アスカなら、白のワンピースより、こっちの……………」

「着ないからな二人とも」

ちなみにこの世界はノイズと言う、オレの世界にはいない物騒なもんがいるし、それに対処する力がある。

そう考えると、

「ん? 悪い、少しバイト先から呼び出し」

「えくまだ着せてないよ」

「頼むから店内とかで暴走しないでくれ」

「響、アスカが可哀想だから」

「あつ、うん。わかったよ……………」

渋々戻す響を見ながら、悪いと言って、バイト先に出向く。

二人に秘密にするのは、少し心苦しいな。

——立花響

「少し悪いことしたかな? アスカが嫌がらないからって、いつも悪いね」

「そう思うなら、アスカのこと男性として見たらどうなの?」

私達が話し合うが、頭の中でアスカを思い出す。

……………何故か、リディアン制服を着ているアスカが目に見えかぶ。

私は額に手を当てる。

「ごめん、少し重傷だわ私……………」

「……………私も……………」

小さい頃、幼稚園児からの幼なじみ、お風呂もその時入っているから、分かっているんだけど……………

「そう言えば響、リディアン音楽院で、最近噂になってる話知ってる?」

「あああの?」

最近、ピンク色の髪をした、女子生徒が姿をたびたび見せると言う、

謎の噂。

曰く、かなり可愛いらしい。

同姓の中で見た人も、恋しそうになるくらいに可愛いらしい。

「だけど、ピンク色の髪って珍しいから、分かるよね？」

「うん、アスカとおばさんもピンクだけど、あれならね……………」

そう言いながら、最近バイトが忙しい幼なじみの顔を思い出す。

——???

私立リディアン音楽院、その地下施設。

ここは日本政府のとある特別な組織、特異災厄対策機動部の本拠地である。

「お、来たかアスカ」

「ごめんなさい、後れた」

「いや、君の場合構わない。着替えるのにもな……………」

風鳴弦十郎、この組織を纏める司令官。何故かYシャツネクタイで、いつもこの姿に心痛めてくれている人だ。

「龍崎アスカ、二課に着任しました。連絡では、ノイズ反応が僅かにあったそうですね」

「ああ、だから念のため、装者は待機だアスカ」

そう言いながら、アスカの姿をよく見ている女性。19歳で、主にアスカのサポートとして活躍する、元装者。天羽奏。

「奏、見るのはやめてやれ。龍崎は着たくて着ている訳じゃないんだ」

そう言ったのは、天羽々斬の装者、風鳴翼。国民アイドルでありながら、装者として二課に所属する先輩。

アスカのことを鋭い目で見るが、悪気が無いのは分かっているので黙り込む。

「ところで、アスカちゃんは下どうしてるの？ 結構短いんだけど」

「ひゃうっ!？」

スカートの中に手を入れられ、スカートを抑えるアスカ。彼ははいま、リディアン音楽院の女生徒の服、これなら見られてもおかしくないとになり、着る羽目になっていた。

その悲鳴に、唇を舐め、獲物を狙う目になるのは、とある専門学者、櫻井了子。本人曰くできる女。

「本当に女の子かどうか、やっぱり調べないといけないわね……………」

「なんでだよ!? オレがここに来たとき、さんざん見たじゃないか!？」

涙目で緒川さんの後ろに隠れるが、同じ目つきなのは奏もであり、二人の様子のため息をつく翼。

司令官である弦十郎も、少し目頭を押さえる。

「ま、この調子で今日終わってくれればいいがな」

「それはそうですけど……………」

「その時、アスカのファツションショーやろうか」

「なんでだよ!？」

そう言いながら、ソファに座るアスカ。オペレーターの友里あおいさんが苦笑しながら飲み物を渡してくれたりする。

藤崇もモニタリングしながらその様子を見て、

「正直、アスカくんここに来て、女性仕草が自然に出来るようになりましたよね」

ソファに座る際など、短いスカートでの対処は、嫌でも身に付く。軽い肌のケア（周りがうるさい）もできる。

飲み物の受け取りも、男子と言うより、女子だ。

「……………殴るよ」

「藤堯さん、セクハラです」

そんな話を話しながら、本当に何もなかったことを祈る。

「そう言えば、今日翼さんの新曲発売日だな……………」

—— 龍崎アスカ

その時は唐突だった。アラームが鳴り響き、バカなことをしていた面々も真面目になる。

「状況は」

「ノイズ多数反応あり、現在避難警報発令。装者の方はすぐに出れませぬ。陸路をお願いします」

「アスカ、翼両名はただちに各自の移動、ただちに現場へ急げっ」

「了解っ」

車の中に急いで乗り込む、翼さんが隣にいるが、いまはいい。ペンダントと、周りの地形の把握を、奏さんが始める。

パソコンを操作しながら、ああくそと呟く。

「ヒポグリフは狭いから使いそうにない、翼、お前が前で。アスカは翼の援護」

「大群なら槍でバランスを崩します、翼さんは」
「任せろ」

車が急いで走る中、インカムから藤崇さんの悲鳴が聞こえる。

「? おいどうした!？」

『聖遺物っ、フォニックゲインの反応………これは、ガングニール!』

「は、はあ!？」

「!」

「ガングニールって、確か、オレが奏さんの素質と共に」

そう、オレが持つ力の一つ。その力で、彼女の力その物である、素質を代償に、彼女の一命を取り留めた。

その所為で、彼女は少なくとも、前のように戦える事が出来なくなった。それ自体、ガングニールと言う聖遺物が無いのだから当たり前だ。

それが、

「これって」

「ともかく現場へ急ぐぞ」

『お願いしますっ、いまモニターでノイズ他、数名の避難民もいます』

「一番の急がなきゃいけない情報じゃないかっ」

「ちっ、ここからヒポグリフは!？ こいつだけでも行かせるっ」

『少し………問題ないですっ、ヒポグリフ使用可能!!』

「よし、行けアスカっ」

「ああっ」

窓を開け、走行する車から身を乗り出し、スカートを気にせず、車の上に移動する。

「って、短パンか!？」

「どこを見てるんだよおおおおおっ」

短めの短パンだよ、悪いか!?

ともかく、静かにペンダントを掴み、そして、

『~~~~~♪』

歌を歌う、それは聖詠。

その瞬間、光が自分を包み込み、身体に機械を纏い、そして相棒と共に飛翔する。

——立花響

訳が分からない、突然身体が光ったと思ったら、姿が変わっている。

ノイズに触れても平気で、戦えると思ったけど、重くなって、動けない。

「!？」

そんな私に、ノイズが向かってくる。

だけど、

「させないっ」

一本の槍、それが地面に刺さると共に、周りにいるノイズは消し飛び、何体か転倒した。その槍に立つ後ろ姿に、私の胸が鼓動する。

あの人は……………

「あのと……………って」

よく見る、見た、その時、翼さんも空から現れた。

「アスカ!？」

「いまは何も聞くなっ、こっちも聞きたいことが山盛りだっ」

「行くぞアスカっ、貴方はその子を守りなさい!!」

後ろに乗せていた翼さんもシンフォギアを纏い、オレ達は戦場を駆けける。

『~~~~~♪』

——立花響

アスカがあの子のような格好、ってかアスカだ。アスカだった。

いまはスカートのようなフリフリを腰に巻き付け、左右にリボンのようなメカっぽい物をつけている。

ピンクと深紅色の紅、それと黒が混じった自分に似たような服？を着ている。

いまは両刃の剣を握って、槍と二刀流でノイズを倒していた。

『~~~~~♪』

身体をスケートのように回ると、スカートとマントが刃のようにノイズを切り裂き、滑るように地面を移動する。

槍も、剣も振るいながら、ノイズが凄いで迫るけど、本を取りだし、それを広げたら、ページの紙が舞って、ノイズを包んで吹き飛ばした。

翼さんも同じように、歌いながらノイズを倒す。

「……………すごい……………」

最後にアスカが槍を地面に刺すと、衝撃波のようなものが広がり、ノイズが体勢を崩すと共に、翼さんがフニツシュを決めた……………

「大丈夫？」

そう言って、私の側の女の子に話しかける。

胸の辺りに、紅い色の宝石を輝かせた、スーツの、可憐な戦士がいた。

「うん、このお姉ちゃんが守ってくれたの♪」

「……………」

私はその言葉を聞いて、少し驚く。私はそんなに凄いことは、

「そうか、凄いね。よくやった響、諦めずにいてくれて」

「アスカ……………」

そう言い、アスカも微笑む。

「うん、ありがとう、お姉ちゃん、ピンクのお姉ちゃん♪」

そして固まった。

さすがに少女の前いつものように文句もなにも言わず、可憐な少女は、

「うん、ありがとね♪」

必死にウインクして、女の子のフリをしていた……

2 話・得意災害対策機動部

全てのノイズを倒しきり、一課の人達が二課の人と共に現れる中、響の方を見る。

「響、平気……………なわけないか」

「アスカ……………その服、っていうか、私もだけど」

「まずは落ち着いて、解けるとか、いつもの自分、さっきまで着てた物を思い浮かべて、解除しろ」

それにぎこちなく頷きながら、響は目を瞑り、シンフォギアは光に包まれる。こっちも解除する。

こちらのシンフォギアはペンダントに変わるが、響のは、

(!?!? なんで響のは無い!?!?)

よくよく考えても響には聖遺物を持っている様子は無かった。リディアンの制服の中に隠れているか？ こちらを見る響に気づく。

「アスカ、その姿」

「えっ……………あ、気にするな」

響、翼と同じ、リディアンの学生が着る、女性制服。響はもの凄く見るが、それで気づかないのならいいだろう。

あつ、ダメだ。助けた子供さんと親御さんが、契約書類書くの見た。国家機密だからな、装者のこと。

「あ、あのくそれじゃ、私達はそろそろ帰ろつかアスカ」

「安心しろ、未来にはすでに手を打った」

その瞬間、ずらりと黒服の人達が我々を囲む。

翼も腕を組み、静かにこちらを見ながら、

「貴方にはこのまま、特異災害対策機動部へご同行お願いします」

ガシャンと響の腕に手錠する緒川さん。身内の扱いだ、初期は自分もだったので、なにも言わない。

助けを求める響を背に、相棒が乗る車の方へ移動する。

「奏さん、翼さんやその、響ですが」

「ん、まあ翼だよな……………なーんか、険しい顔し出してるし……………」
車が走り出す中、響が何か叫んでいないか不安になるが、それより

も、

「響のことだから、手を貸すとか、奏さんの変わりに頑張りますとか言い出す気がして、胃が痛い……………」

「そうなのか？ それは……………」

険しい顔をする奏さん、それに首を振る。

「私は復讐のためにノイズと戦おうとしたんだ、少なくともそれが始まりだ。そんなん他人に押しつける気は無い」

暗い顔のままそう言い、だからと付け加える。

「彼奴はきつと奏さんの優しいところしか見えてないですから、その」
「分かった、協力者とかになったら、よく話すよ。 GANG ニールの先輩だ、現相棒の頼みでもあるしな」

「お願いします」

だけどなくと険しい顔で、考え込む。

「翼だな、あとは」

「……………」

それに黙り込む。正直、まだ彼女と連携は取れていない。

「翼はまあ、お前にその、な……………」

「分かっています……………」

少しの間を置きながら、ともかく、本部へ行くことを考える。

「ところで、短パンは誰が用意した？ あたしらは用意してないぞ」

「言わないよ」

緒川さんがわざわざ特製品を用意してくれたんだ。

車から降りると、響は奏さんに気づき、こちらに気づく。念のため、側にいるが、詳しくは後でと言うしかない。

リディアン音楽院、その教師達が使っ施設の特別なエレベーターへたどり着き、そこから本部へ降りる。

苦笑する響に、翼は静かにたしなめる。

「愛想は無用よ……………これから向こうところに、微笑みなど無用だから（オレがこの格好の時点でそれを言うか）」

そして本部へたどり着けば、響の鞆から響のことを知った二課メン

バーのパーティー的な歓迎会であり、色々翼さんの思いが台無しである。

身体検査で響はそれで帰された。本部で色々話がされた後、正直顔を洗い、このまま二課で泊まることにした。

顔を洗い終え、鏡を見る。鏡にはアストルフオ、自分じゃない自分。「そうだ、メールで予定開けてくれて出しておくか」

響にメールで送っておく。まだ決まった訳ではないが、色々心配する。

「はあ……………」

顔を洗い終えて、数ある休憩スペースに座り込み、しばらくして学校へも休みを入れておく。

「響第一だ、だけど」

未来にこのことを黙る。響には酷だな。

自分は生前もそうだが、一人には慣れていると言うより、一人での行動ごとを好むし、誰かが関わる時は構わないと、その辺りは浮いていた。

まあ、向こうは女装させられたり、そのネタを扱われるから少し距離があると思われるのは知っている。

と、翼さんも女性シャワー室から出てくる。

「あっ、翼さん」

「?!?!」

!ど、こちらを見る際、何故かもの凄く驚いて、肩を掴む。

「貴方何を考えているの?!」

「えっ」

突然のことなので、よく分からない。

「い、いや、たぶん、翼さんと同じで、家に帰らず、ここで泊まっておく気ですが?」

「そうじゃないっ、自分の格好をよく見なさい!!」

その格好って、

「長ズボンにシャツ一枚ですけど、このまま仮眠室に行きますが」

そうだ、寝間着の長いズボンに、シャツ一枚。後は首にタオルをかけているだけだ。

湯気が肌からうつつすら出ているが、湯冷めしないだろう。シャワーだしね。ここのシャンプーとか使うのが楽なんだよ。泡立ち良いしね。

「貴方は他人の目を気にしなさいっ、女性がそんな薄着でうろつかな
い!!」

「オレは男ですッ」

それにあつと呟いた後、しばらく黙り込む。

えっ、なに、この人。オレの薄着見て瞬時に男だと言うことが消えたの？

その様子に、そそくさと立ち去る翼さん。あれ、オレって寝間着や普段着すら女性物にしないといけないのかな？

……泣いて良いよね？

——立花響

今日の放課後、翼さんに呼ばれ、私はまた手錠付きである場所に呼ばれた。

そこにはリディアンの女性制服のアスカもいる。正直、似合っている。

「まず響の力だが、オレと翼さんが持つこれだ」

そう言ってペンダントを胸元から出すアスカ、ごめん、見た目が女子だから気を付けて、ブラ付けてるのかな？ いやいまは違う。真面目に、

「アスカ、そう言えばブラつけてるのか？ いまなんか見えたが」

「付けてないよおおおお、オレは男だっ。女性物は服だけで下着は男性だよ!!」

「奏」

「ごめんごめん」

そう言われながら、しっかりと見せてくれるペンダントは、聖遺物と言われる物で、その欠片らしい。翼さんのは第1号の『天羽々斬』と

言うらしい。

それでアスカのは？

「オレのは滅茶苦茶らしい」

「滅茶苦茶？」

「響の聖遺物の話をしてからでいいだろ、オレはもう聞いてるけど、他の人はまだだから」

そう言っつて、話を聞かされる。二年の前、あの事件の時、私の心臓に残った欠片、あれが奏さんの聖遺物、第3号『 GANG ニール 』の欠片だった。

それを聞き、奏さんも翼さんも狼狽している中、それでもここに止まっつて、話をしてくれる。

「つまり、簡単に言えば、響、オレ、翼さんは、聖遺物、ノイズと戦えるいまの技術力じゃ分からない技術の物を、全うに扱える人材つてことだ」

「えっ、奏さんは……………」

「私は薬を使っつて、無理矢理適合率上げてたんだよ」

苦笑しながら言う奏さん、それに黙りながら、アスカを見る。

「えっつと、アスカはいつから……………」

「二年前のあの事件、二人が心配で、駆けつけた」

迷わずそう言っつたとき、私の胸が軋む。

「それじゃ、やっぱり」

「……………」

難しい顔をする。アスカはいままで戦っつていた。ノイズと危険な戦いをして、守っつてくれていた。

私達を、ずっつと……………」

「どうして話してくれなかつたの!？」

「それは俺達が彼に止めていたんだ」

そう言っつて司令官、風鳴弦十郎さんがそう言っつて止めてくれた。

「君のことは彼から聞いていた、GANG ニールの破片、奏くんも心配していたからね。彼には君の容態を見てもらうと共に、その日から協力者として活動してもらっつていた」

「それって」

「あの日、彼の聖遺物が彼と適合し、彼はぶっつけ本番で我々より、多くの活躍をしてくれた。これには、二課司令官として、何度礼を言っても言い尽くせられない」

「それには私もだ、私が強ければ、あんたや他の観客だつてって、何度も思ったよ」

そう言う二人の言葉は本心からだ。だけど私が聞きたいのはそこじゃない。

「じゃ、アスカは、アスカはずっと私を守ってくれてたの？ なにも言わずにそんな」

「そんなこと気にするな、第一、やれるのならやるがオレ。それに、本当に助けられたか、分からないしな」

アスカがあのこと強く気にしているのは分かっていた。こんなことがあつたんだ。

酷いよ、それなのにいつも私は嫌がるアスカに女装させたりして申し訳ないよ。

「それで、えっと、アスカの聖遺物って」

「彼の聖遺物は、特別中の特別、『融合型聖遺物アストルフオ』と我々はしている」

「アストルフオ？」

首を傾げる響に、了子さんが側にある大型モニターにある騎士の物語を映し出す。

「英雄アストルフオ、フランスのパラディン、シャルルマーニュ騎士団に所属する騎士で、彼は多くの逸話を持つ、ただの騎士なのよ」

「えっと……………それって」

「天羽々斬、ガングニールは、簡単に言えば英雄達が持つ武器や武器の名前だけど、オレのは違うんだ。オレの聖遺物はその時にあつた研究品、聖遺物として加工すらできないほどの欠片中の欠片だった」

あの日、ノイズが人を襲う場面や、人が人を押す瞬間に、身体が動く。できることが少ないのに、やれないと言うのに動いた。

その時、何故か欠片の聖遺物達が反応し、全て龍崎アスカの元に集

まった。

「それで生まれたのが、聖少女アストルフオ♪ 我々でも把握仕切れていない、聖遺物の融合と言う、イレギュラーの聖遺物を纏う、可憐な美少女のことよ♪♪」

「……………」

なにも言わずに、黄昏れているアスカ。でもごめん、私より似合ってるよその制服。

「それでその聖遺物の能力から、アストルフオって名前になったんだ。能力もその騎士がたまたま手に入れたアイテムに近いもんだからな」

奏さんがそう言い、私もと言う。

「私が持っていたガングニールを吹き飛ばす代わりに、私が薬の所為で負ったもんも吹き飛ばす、魔防の本」

「それと、相手を転倒、彼の場合、槍に触れた周囲の空間の重力を操る槍。他者の装者の力を上げたり、音波による攻撃する角笛。そして幻獣ヒポグリフと言う、自立型アームドギアと、普通のシンフォギアより、多数の能力所持している」

そんな裏側があつて驚きながら、私もガングニールにも、同じようにノイズへと対策できるらしいけど、

「アスカ、やつぱり……………その」

「未来には言えない、オレ達のこととは、他の組織、ノイズの対策に困る組織は、全部が全部良心的じゃないんだよ。その為にな」

「それに対してはすまないが、許可することはできない」

それには黙り込みながら、私は考える。

私の力が誰かを救えるのなら、私は……………

—— 龍崎アスカ

「悪い予感の方になっていく」

「……………悪い」

奏さんがそう呟き、それに首を振る。

「奏さん、ガングニールは奏さんの所為じゃないです。もし悪いと思うなら、その」

「翼と立花のことだろ？ 分かってる……翼の奴、立花が戦うって言ったら、険しい顔しやがって……」

あれは私のことやら、なんやらで色々勝手に考え込んでると言いながら、頭を抱える奏さん。

「ガングニールで誰かを守る、か……立花っていつもか？」

「……あの事件以来、酷くなりました」

「……そうか」

お節介、誰かが傷付くより、自分がと言う自己犠牲。それが酷くなつたのはあの事件以来だ。

あの調子じゃ、奏さんの変わりを、頑張つて勤めますと言い出しかねない。

「……二人でどうにかしないと」

「はい」

「それはまあ、お前と翼もだけどな」

実際、自分も翼さんと距離感を掴んでいない。

——天羽奏

龍崎アスカ、私の次に、翼の相棒になつた相手。最初は女の子と思っていたが、男性と知り、何言ってるか分からなかったから、確かに脱がしてみたら……まあ男だった。

色々な噂を逆手に取り、女装させたり、リディアンに入るためにも女子生徒の服を着たりしてくれる。それは非常に似合う。

だが、いまはそれより、翼とアスカだ。

この二人、二人が二人して避けている。

（片方は、私の命を救ったけど、私の人生、ノイズ殲滅つて言う可能性を消した）

最初は戸惑ったが、仕方ないと思った。自分は色々間違えていた。

だからこそ、今度は間違えない、裏方で翼やアスカを支えようと決めたんだ。

まあなにより、ガングニールは無くなつたけど、装者としての可能性は消えた訳じゃない。もしかすれば自分にあつた聖遺物だつて見

つかるかもしれない。だからこそ、アスカには感謝してもしきれない。

「ただ翼からすれば複雑な相手だ。」

自分達の不始末を最大限に押さえ込んでくれた、天羽奏を救った。

だが、私から戦う翼を奪った。翼が何度言っても分かっていると言わないが、分かっているにしてもそれがアスカを許せない壁になっている。

アスカもアスカで、それを気にしている。何度私がバカして、アスカをいじつても、改善しない。切っ掛けを作る身にもなって欲しい。いつの間にセクハラ女になってるんだぞわたしやく

そしていま、その翼を持った立花。それにどんな感情を抱いているか分かる。いい気分じゃないだろう。

「このままじゃ、問題が起きる。」

「……………はあ、裏方も大変だ」

そう言いながら、もういつそ、アスカをランジエリーショップに拉致ってやろうか？ もうそこまで墜ちてやろうか？ 翼、オメエが止めないと私は墜ちるところまで墜ちるぞ。

「今度何かあったら視野に入れよう。」

「そう思ったとき、警報が鳴り響いた。」

3話・彼に成れない

英雄アストルフオ、クラスライダーで、聖杯大戦において、黒のライダーとして顕現したポンコツ英雄だ。

なぜならば、彼は理性が蒸発しているうえ、彼が本来持つ宝具は、全てが全て、偶然手に入れた品々である。

彼は運良く、多くの道具を巧みに扱う騎士である。運が良いと聞こえは悪いが、それでも彼は英雄である資格はある。

それらの品や、仲間達。彼らに慕われた結果故に英雄だと思う。なら、自分はどうか？

自分こそ運良く手に入れた『だけ』の、ポンコツではないか？
その疑問は一月経っても消えない。

「響っ、後ろ」

「はいっ」

響の相手として戦う中、翼さんは一人黙々とノイズを倒す。

これは一月前だった。戦いの中、響はやはりと言うか、誰かの変わり、奏さんの変わりに、頑張りたいと言ったこともあり、溝が深まった。

誰も悪くないと言う言葉は誰にも届かない。強いて言えば、響は未熟でダメなのは分かり切っている、それでも前に出ろと言う環境が悪い。

自分は二人の気持ちを理解している。誰かのために頑張りたい響、自分の思いを剣へと例え、防人として戦う戦士であり続けようとする翼さん。

「はあああああああ」

自分も戦う中、奏さんも、響との交流しつつ、翼さんと会話している。だが一行に良くなならない。

オレは英雄に、アストルフオ、君にすら成れない。君のように、仲間を守れない。

「未来、響の様子はどうかかな？」

『……………少し無理してる、話してくれないけど。今日もレポートの山がまだあるんだけど……………』

「そうか」

学園側から急に響の対応を軟化できない以上、響の切り替えに時間がかかる。響個人が抱える問題は多い。

人間関係、ノイズ、そして友人。一番は友人であるが、自分も強く言えない。

『最近響、無理してるんだ。アスカ、なにか分からない？』

「ごめん、分からないよ」

『そう……………ごめんね、変なこと聞いて』

その声も元気が無い。そのまま切る、余計なことを聞いてしまう。

「……………くそ」

別に英雄に成りたい訳ではない。だけど、だけど、

「せめてこんな姿なんだ……………友達くらい、笑顔を守らせろよ神様……………」

そう、窓ガラスに映る自分に祈る。

生前の自分は剣道部にしか通っている以外は、ゲーム好きな学生程度。

よそ見運転で死んだはず、たぶん、見えたもん。

その事故は……………まあ気にしない。考えたところで意味無い。

それ以外は剣振ってただけだ。家、剣道道場だし、剣道好きだし、すいません、アサシンさん、竜殺し凄いと聞いてリスペクトしてます。

なんで死んだら赤ん坊で、可愛い幼なじみが二人いて、アストルフオで、特別な力がある？

もしも神様はいるなら、せめて……………

「彼奴らだけは笑ってて欲しい」

そして今日も、ノイズと戦う。

「今回は少し別れてもらう、急いで倒して立花ところに出向いてもらうから」

「分かりました」

奏さんと共に、ヘリからその場へと向かう。今回は三力所と、少し難しい顔になる。

ここ最近、頻繁にノイズが現れる。二課は本部最深部にある『アビス』に納められた完全聖遺物『デュランダル』が関係していると推測している。

完全聖遺物、自分達の聖遺物と違い、一度解放されれば、その力を別の人でも使えると言う、ロストテクノロジーの最先端だが、扱いが難しい。

その難しいには、国際問題まで加わる。誰もが日本政府がノイズ対策の独占を許す気はないようで、米国が暗躍しているとされている。それは弦十郎司令官達の仕事と言われている。

結局、ノイズを倒すしかできない。できない。

「……………」

窓ガラスに英雄が写る。彼がいれば、きつと笑って前に出て、どうか無い知識を使って、みんなの幸せを目指さだろう。

自分にはできない。だからこそ彼は英雄だろう。

「そろそろ着くぞ」

「ここが終わったら、すぐに響のもとに合流します」

そう言って、ヘリから飛び降りる。その様子に奏さんは難しい顔をして、

「まったく、あんな難しい顔されたら、セクハラもなにもできねえっての」

そう呟いたのがかろうじて聞こえた……………」

「いつもよりノイズが多い？」

そう、いつもより数が多い、これきついかなと思いつながら、しかも地下施設と、ヒポグリフが使えず、苦戦する中、通信が入る。

『まずいッ、アスカくんっ。そっちは出られるか!』

「!? どうした」

『完全聖遺物ネフシユタンの鎧を着た何者かが現れた!! しかも彼女

は響くんを狙っているらしい』

「……………はっ。」

なんだそりやと思いなながら、ノイズを倒すスピードを速める。
だが、数が多い。

「倒したらすぐに出向く、翼さんには時間稼ぎをつ」

『すいません藤堯ですつ、司令官はいま現場へ。現在翼さんは応戦中ですが、苦戦してますつ』

「!?」

その瞬間、無数のノイズが迫る。だが槍で転倒させ、槍を振り回す。
インカムの声が聞こえる。響の、

『お願い、出てアームドギアつ、奏さんの変わりに、私は、私は』

彼女のその叫び、悲痛な叫び、

『お願いっ』

いまの状況が分からない。だけど、

「ふざけるな響っ」

『!?!』

静かに叫び、ああそうかと納得する。

「お前は立花、立花響だろ、天羽奏じゃないんだっ。オレもお前も、できることなんか決まってる」

『あす、か……………』

「響、お前が誰かを守りたいんなら、オレだって手伝う。だけど、他人に押しつけちゃだめなんだ」

『アスカ……………』

「ああ、そうだ、オレは、いまのオレは」

装甲の一部から煙が吹き出し、力がわき上がる。歌が、喉から、口から叫ぶように出てくる。

「オレは龍崎アスカだつ、聖遺物アストルフオ!! 束ねていくつ」

槍を振り回し、ノイズを殲滅、それと共に剣を取り出す。アストルフオにも、この生物の欠片にも剣が無いのだが、何故か有る剣。なら、これを振るう。

「邪魔だああああああああああ」

爆走する、マントを翻すと共に、全てのノイズが切れ、そのまま外に、もう一人の相棒が待機していた。

「頼むヒポグリフ……仲間のもとに、オレ、オレ達の歌を届けろッ」
吼えるヒポグリフ、そのまま滑空して駆ける。

ただ早く、それは、

「はあ?」

奏の目の前で、消えた。

——立花響

私は役立たずだ、アームドギアも出せない。このまま翼さん達の足を引つ張る。

嫌だ、嫌だよ……アスカ……私は、私だって、

(誰かを守りたい……)

そう思ったとき、

「ちよっせえっ!!」

鎖の先端が黒い固まりのようなものが、翼さんに叩き付けられ、

「させないっ」

その前に、アスカが槍を突き刺して方向をねじ曲げた。

「!? 龍崎っ」

「テメエ、融合型!?!」

その時のアスカは、

「……………悪いね、やるときはやらないと!!」

いい笑顔でそう言った。

「融合型聖遺物アストルフオ装者、龍崎アスカっ。完全聖遺物ネフシユタンの鎧っ、回収させてもらおうっ」

「チッ、できるもんならやってみやがれ!!」

その時、アスカはヒポグリフから降りて、槍も手放して、一つの剣を持って、彼女に迫った。

「ぞっけんな!! アームドギア無しでアタシに」

「勝てるさ、オレはオレだからな!!」

鎖が交差して迫る中、アスカはその小柄な身体を駆使して接近し

て、剣を振るう。

その余波が鎧に触れると、鎧にヒビが、

「なっ」

「……………」

そのまま無心に剣を振るい、ただ鎖を避ける。いつものアスカから感じない、男らしさがある。

「なんでダメエ……………ただの寄せ集めの装者のくせに」

蹴りを放つネフシユタンの子だけど、剣の柄で防がれ、逆にダメー
ジを負ったりする。

ヒポグリフが取り出されたノイズを倒したりする。あの子の謎の
力、ノイズを操る力でも、ヒポグリフが私を助けてくれた。

「ありがとう」

ヒポグリフは咆哮して、翼さんも参戦しようとするけど、その気迫
に押される。

いつものアスカから感じられない、その気迫は、

「……………すごい……………」

—— 龍崎アスカ

「すう」

息を吸う、呼吸と歌と共に切り込み、ただ技の冴えのみで完全聖遺
物と渡り合わなければいけない。

向こうはそれなりに鍛えられているだろうけど、こっちは年期が違
う。

こっちに来る前も来てからも、ただ剣を振った。ただ剣技を鍛え
た。

見切れ、斬れ、穿つ。

「はああああああああああ」

それが龍崎アスカ、装者である自分だ。

「ふぎけるなっ、アームドギアでもなんでもない付属品でっ、勝てると思
うな!!」

そう言っつてオーバーアクションをした瞬間、後ろへと飛ぶ。

「!?」

身体を回し、突如空間からヒポグリフが現れた。
空間転移、これがヒポグリフと言うアームドギアが持つ能力。先ほど発現した物だ。

ヒポグリフに乗り、その手には槍を構え、静かに、

「穿て、ヒポグリフ!!」

「?!?!」

!!その槍で転倒し、体のバランスを無くして、ネフシユタンの子は地面に倒れ、その場に倒れた。

「悪いね、オレの勝ちだ」

静かに立ち上がろうとするが、その前に、翼さんが剣を向ける。

「……………龍崎、その能力は」

「いまは後だ、いまは」

「……………分かっている」

「……………」

その時、ネフシユタンの子は、

「なめるなああああああああああああああああああああ」

大量のノイズを爆発するように発生させ、それに周りがすぐに蹴散らす、

「ぎけんなぎけんなぎけんなぎけんなぎけんなああああああああ」

そう叫びながら、いまだノイズを出す。

「アスカっ、このままじゃ」

「分かっているっ、だけど」

自分は角笛の音波はあるが、あれは広げれば広げるほど、威力を無くす。響も拳しか対処できない。唯一出来るのは無数の刃を降らす翼さんだが、様子がおかしい。

「……………」

「翼さん？」

その時、インカムから、

『アスカっ、いますぐ翼を止めろッ』

「!?」

そして静かに、

「防人の覚悟、月が出ている内に終わらそう……………」

その戦慄が奏でられる。それはまさか、

「絶唱!」

「ぜっしょう?」

「言えば自爆技だっ」

「!? 翼さんっ」

ヒポグリフを呼び寄せ、飛翔して止めに入ろうとするが、ノイズが邪魔をする。

その間も、翼さんは命の歌を歌う。

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
その瞬間、高エネルギーが辺りを包み込んだ……………」

——???

「……………」

誰かが馬乗りになの、吐息のようなものが側にある。

目を開ければ、

「あっ、気が付いた♪ 少し残念」

「……………」

ぎや

ああああああああああああああああああああああああ

そう言つて、突き放す。それにいてつと言つて、もくとしりもちをついたお尻をさする。

「危ないじゃないか、急に突き飛ばして」

「いや、なにしようとしたんだテメエ!」

「テメエって言い方やめてくれないかな? そりゃ、少し口調は違うのはいいけどね♪」

そう言つて、マントを掴み、くるくる回る彼は、静かに微笑む。

「ボクは、シャルルマーニュ十二勇士アストルフ♪♪ ボクは君に会いたかったよアスカ♪」

そう言つてはにかむ彼は、腕を広げて抱きつこうとするが、それを避ける。

気が付くと目を覚まして、半身起こして、辺りを見る。ここは医務室、本部だ。

すぐに起きて、司令室の方へと走る。何人が止めようとするが、無視して、

「司令、響と翼さんは?!」

「アスカ!」

司令室にいる全員が驚くが、奏さんに詰め寄る。

「奏さんあの後、絶唱は」

「落ち着けアスカ、翼は絶唱を歌う前にお前が止めたつ。けどお前はヒポグリフの空間転移でぶっ倒れた上、翼も倒れた。まあ、お前のヒポグリフに体当たりだが、自業自得だからいいし、絶唱よりダメージ少ないからな」

「そうか……」

ほっとして、胸を下ろす。奏さんは静かに、

「それで、翼は勝手に絶唱歌うし、色々無理があるスケジュールだから、一遍検査受けることで強制入院。立花は旦那に特訓受けてる」

「特訓?」

「ああ、立花も、色々思うことがあったんだ。お前、数日寝込んでたんだぞ」

「マジか」

そして響は自分の力を高めるため、司令官の下で修行している。

話を聞き、納得して落ち着いて座り込む。

「ともかく、みんな無事か……ネフシユタンの子は」

「あの後逃げた、まあ仕方ないさ」

そう言われて、なら自分も少し休むかと思い、立ち上がる時、気づく。

「……………えつと」

「……………じゃ」

そう言っただけで奏さんは凄い速さで逃げた。えつ、この格好テメエの作業か!?

「なんでミニスカートなんだよおおおおおおおお」

医務室に入る際、服を脱がせ、女子服を着せられた。
女性の寝間着、どうも寝ている間に着せ替え人形にされたらしい。
もう殺せ。

4話・二人の適合者

「響の奴は修行ね……………」

少し緒川さんと話しながら、彼らの裏で色々合わせたりしている。こつちの学生生活はまあまあだ。元々学生二回目であり、優等生だったため、欠席補習だろうと挽回できる。その辺は響には悪い。

「それで翼さんは」

「しばらくは奏さんが話し合うそうです、彼女が側にいれば、僕より素直になってくれるでしょうね」

「謙遜ですよ緒川さん」

そう言い合いながら、少しだけ構える。

いま二人は軽い服装であり、木刀を持つ、前の感覚を取り戻すために頼み込んだ。

「…………正直、翼さんや響さん、貴方に辛い思いをさせてしまっているのが不甲斐ないんですよ」

「…………仕方ないですよ、人にはできることは、限られていますっ」

そう言いながら斬り合う。どちらも早く、緒川さんは驚くも、すぐに切り替えている。

「響には未来って友達が居ます。彼女に、うそを言えないから、何も言えずにいるんだと言ってます。だけど、オレは本当に響のためになっているか、分かりません」

「アスカさん」

「オレはもう装者の姿が女だろうと、オレは、響達を助ける剣になります。翼さんも、響も、守れる者達は守りたいです」

そう言って、一本取る。それに緒川さんは驚きながら、

「お見事です」

「オレは、進んでみせる」

アストルフォ、それだけは約束してやる。そう剣に決意する。

——風鳴翼

「……………私は……………」

いつの間にか二課が管理する医務施設の天井、それに奏から叩かれた。

「いたい」

「こおのおお、バカやろうが……………」

病院だから静かだが、曰く、緒川さんの変わりにしばらく自分が就くらしい。そう言われながら、長い説教が続く。

「あーあ、翼の所為でアスカのこと可愛がれないじゃないか。最近下着も付けさそうと思ってるのに」

「それはいくらなんでも」

そんな話をしながら、ほらと言って、彼の写真を見せる。全部はその、女装した写真だった。

「これでも見て、少しはその堅い頭を柔らかくしろ」

「……………私は」

「翼」

静かに抱きしめられながら、私に奏は静かに、

「私達の所為で取り返しのつかないことは多くあった、被害者であるはずの観客や、他にも沢山。私はお前だけに背負わさせていたんだな」

「!? そんなことはない、だって奏はもう戦えないっ」

「アスカの所為でか？」

「!!」

何も言えない。そうだ、私の中には龍崎に対して、そんな気持ちがあった。

龍崎はそれを知って、それでも距離は一定に保ってくれていた。なのに、

「私は……………」

「……………翼、お前にだけは言わなきゃいけない機密事項がある」

「えっ」

それに奏は離れ、そして静かに、

「翼はな、絶唱を歌ったんだ。これは限られた人しか分からない」
「!?」

それを聞かされ、自分の身体を確認した。だけど、

「いくら私の適正值でも、絶唱を歌えば、こんなに傷が浅いはずが無い」

「ああ、それもどうやら、空間を越えて来たアスカの力らしい」

「龍崎の……」

龍崎の何かが反応して、天羽々斬の絶唱の負荷を取り除き、破壊力に変えたらしい。

それほどまで早く、自分の元に飛んだため、ちゃんとした情報が無いと、司令官達が判断したらしい。

「元々龍崎は、旦那が私の身を心配したり、研究用に取り寄せた、欠片中の欠片だが、その中には聖遺物か分からない物も混じっていた」

「だけど、あの事件の所為で何が無くなり、何が聖遺物化したか不明だった……まさか」

「アスカの中には、まだ別の聖遺物能力があるかも知れない」

「だけど待って奏つ、アスカの聖遺物事態の問題は」

そう、考えて欲しい。龍崎アスカは複数の聖遺物の融合型と通ってはいる。融合型だから融合して適正していると、表向きにはそうしている。

だが、実際は違うのだ。実際の彼は、全く異なる複数の聖遺物と適合値が高いだけだった。

少なくとも、天羽々斬ですら、運用だけなら問題ないくらい、彼は適合率が高い。これは、人なのか疑うレベルだと、櫻井女史が言っていた。

「こんなことが表に出れば」

「ああ、彼奴の身体事態、外交問題になりかねない」

どの機関も聖遺物、シンフォギアの適正率の研究に、装者は不可欠。そんな中で彼は、あまりに特異点過ぎる。

私は、

「私はその可能性を引き出してしまったのか……」

少なくとも、彼は絶唱を抑える何かがあり、それを使用できる。それも融合型と言う、異なる聖遺物が一つになった聖遺物の力。

こんなことが別の組織に出回れば、彼は普通に生きることすら困難過ぎる。下手をすれば、家族にだって危険が……………

そんな可能性の一端を、私が……………

「ていつ」

奏がまた私を叩く。

「んな言い方すんなら、もういい加減にしろ。翼」

「奏……………」

「彼奴は、立花だって、みんながみんならしく頑張ってるんだ……………私も、いま生きてる」

「奏」

「生きてるんだ、止まりたくない。戦うだけが戦いじゃない、私はいまの私の力で、あんたの翼であり、彼奴等の翼なんだ」

「……………」

「なあ翼、昔の相棒からの頼みだ。彼奴らの翼になってくれ、そして、夢を忘れないでくれ」

そう言われ、しばらく検査のために席を外す。

奏はそう言いながら、私は考える。

私は……………夢を追っても良いのだろうか……………

——
???

「はあ、もういいわ」

「えっ……………」

この前の失敗、私はきついものがあると思った。

だけど、今回はあっさり終わった。

「な、なんでだよ、もういいのか」

声が震える、混乱する。なんで、なんでなんだよ!?

「もういいでしょ、食事にしましょう、クリス」

「……………ああ」

彼奴だ、あのピンク野郎の所為だッ。

私は知っている、あのピンクの装者の写真が、大量に部屋に飾られている。全てだ、いつもいつもいつもいつもいつもッ、それを見て、静

かに何か考えに耽つてる。

私を見なくなつたのも、彼奴が現れてからだ。

最近は茶髪も増えている。

許さない、彼奴らを、私は絶対に許さない。

——龍崎アスカ

「ふう……………」

休憩スペースで横になって、少し休んでいると、股をさわさわと触る誰かがいた。

「ひゃあうっ!？」

「もう、可愛いんだから♪」

そう言つて、股を抑え距離を取るオレ。櫻井良子さん、いつも肌を触つたり、服を替えようとしたりと、少し度が過ぎる。

「りよ、了子さん……………」

「もう、少し無防備よアスカちゃん♪ 誘つてるのかな？」

「オレは男ですよ!？」

それを聞きながら、スマホを覗いてにやにやしている。

「あら短パン？ もう、だれよ短パンなんかはかせたの？ せっか

く音消したのに、これじゃ意味無いじゃない」

「なに撮つてるの!？」

「もう少し触りたいわね、お姉さんの癒しのために、さわさわさせて欲しいわね」

「い、嫌ですつ。本当は本部にいる間だつて、リディアンの服は嫌なんですよオレ」

縮こまりながら、弱音を吐く。男らしくない？ この格好で何を言うか。だが、それ様子を眺める了さんの目が怖い。本能的に。

「もう、本当に可愛いわね……………連れて帰りたいわ……………」

獲物を見る目でオレを見る。止めてください、背筋が寒いです。

そうしているとき、了さんの手に鞆がある。

「アタツシユケース？」

「そ、ああ急いで弦十郎くんに届けなきや。それじゃね〜今度は、ぐっ

ふふ」

身を縮ませて、距離を取る時、本当に身の危険を感じるときがある。何だろろうホントに……………

とあるお偉いさん暗殺に伴い、デュランダル輸送計画が発令される。

このことは奏、翼両名には内緒で、自分達だけの作戦決行。それに響の様子を見るが、緊張しているが、危険な緊張ではない。

「俺とアスカくんはヘリからサポート、アスカくんはアームドギアヒポグリフを」

司令官に言われ、すでにシンフォギアを纏うオレ。ヒポグリフは自立型であり、ある程度なら、他の人の言葉も理解して動く。最優先は主の守護と命令、次に民間人の保護。その場合、二課メンバーの指示に従う。

ヘリに乗る中、響の方を見る。緊張しているが、無事を祈るし、サポートするしかない。

作戦が始まる。

「……………」

スカートなぞ翻ろうが自分には関係ないし、シンフォギアの姿だから見えても問題ない。少し気になるが無視だ。

ヘリから身を乗り出しながら、走行する車達を見る。ピンク色の車を囲み、黒車が囲む。その側でヒポグリフが飛んでいた。

いま現在、暗殺者グループの調査などの荒技で、一般道を全部貸し切りにしている。よくできたよなと思いつながら、響が乗るのは、了子さんのピンクの車だ。

「……………デュランダルか」

「気になるのか?」

弦十郎司令官も身を乗り出しながら、様子を見ている中で頷く。

アストルフオの仲間に、その聖剣の持ち手がいる。彼が言う『剣』はその可能性があるし、彼の言い回しが気になる。

このことは誰にも話していない。元々自分が前世持ちなのも黙っているし、正直話しても意味はない。

自分はアストルフオ達が出てくる物語ならともかく、ノイズが出てくるこの世界の物語は知らない。どうなるかなんて分かる訳ないし、そうなる保証もない。

「……………」

その時、橋が崩れたとき、車が落ちる。それをヒポグリフが助け、人命は助け出して、車の側に戻る。

「敵襲だっ、アスカっ」

「OKっ」

その時、アストルフオのもう一つの能力。殲滅型では無く、本来は妖鳥を払う音色だが、音波攻撃できる。ただし歌が歌えなくなるため、ほぼサポートとしか使えない。いまがその時だ。

取り出す瞬間、巨大な楽器へと変わる角笛を持ちながら、戦慄を流す。地下にいるノイズはそれに苦しみ、出ると共に消し飛ぶ中、側で司令官が指示を飛ばす。

「これは、誘い込まれてるか!?! おそらく近くの薬品工場っ。向こうさん、ヒポグリフの情報が流れているようだ!!」

ヒポグリフは三人、無理すれば最大四人乗れそうな大型獣であり、狭い場所や、壊すとまずい場所では運用できない。

誘い込まれるように、その薬品工場へと車が入り込む。

「!?! 煙が」

黒煙の所為で、工場で何が起きているか分からず、それに目線で確認してから飛び込む。ヒポグリフは近くにいる人達の安全第一に動くように叫んでからだ。

「ちっ、ノイズがおお……………!?!」

後ろから鎖のような鞭が放たれ、それを避ける。振り返ればネフシユタンの鎧を纏う、あの子が激昂して向かってくる。

あれは確か自己再生能力がある完全聖遺物であり、あの時の事件で奪われた物。なんでそれを、自分と変わらない子が着ているか分から

ない。激昂している理由も、

「お前が、お前が!!」

「な、なんだよっ」

「るっせえ、テメエの所為だ!!」

身体を捻ると共にスカートが伸びて刃になり、斬りかかる中、マントも掴み、剣を構える。

向こうはノイズを取り出しながら、向かってくる。何故か叫びながら、睨みながら、

「寄せ集めのくせにいいいい」

そんな中で歌が聞こえる。響の歌、響がちゃんと戦えている中で、デュランダルのカースがあることに気づく。

そして、

「!?」

それが何かに反応して、カースから出て空に浮遊していた。

「なっ、まずっ」

「!? 取らせるかっ」

二人同時にデュランダルへと飛ぶが、オレは違う。

「!?」

デュランダルを取ろうとしたネフシユタンの子へと抱きつき、それを阻み、

「飛べ響っ」

「うんっ」

「!? テメエら?!?!」

オレの背中を踏みつけ、デュランダルを手取る響。元々響が見えていたため、響にデュランダルを託す。それが、いけなかった。

ネフシユタンの子と共に地面に降りて、彼女を押しさえつける。正直、触れちゃいけないところに触れた気がするが、気にしない。

それよりも、

「!? 響」

黒い影が、剣を掲げる響を覆い、咆哮する響。

その眼光は紅く、獣のようだった。

「なん、だ……………響っ!!」

急いで槍を構え、転倒させようとする。まず剣を手放せた方がいい、そう判断すると共に、剣が、

『あああああああああああああああああ』

ネフシユタンの子に振り下ろされる。

もし、ここでそれが振り下ろされれば、どんな被害が出る？

もし、それを響が知れば、響はどうなる？

答えは分かる。

だから、

「頼むっ、オレに、止めさせろおおおおおおお」

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

槍が効果を発動する前に砕け、瞬時に出した本のページがすぐに燃え、役に立たない。

だけど、その手を掴むことはできた。

「!？」

壊せ壊せ破壊しろ破壊しろ破壊しろ破壊しろ破壊破壊破壊破壊ハ
カイハカイはかいハカイ……………

んなもんっ、望んでないっ!!!

頭の中に何か流れ込むが、こちらはそんな黒い衝動は別の意味で慣れてるんだよッ。黒い影が自分も包む、二人揃って飲み込まれる中、
だけど、

『ビビギいいいいいいいいいいいい』

『!？』

その後、光が世界を包み込んだ……………

——
???

デュランダル輸送は失敗、その後、アビスにて再度保管される。

その際の被害、二人の装者の尽力にて防がれ、死者0。施設もまた、

大がかりな被害もなく、奇跡と言って良い事案である。

デュランダルの適合者候補、ガングニール装者、立花響

そして、融合聖遺物アストルフオ装者、龍崎アスカ

必ず手に入れる、この二つを……………

5話・迷走

二課本部にて、精密検査を受けながらオレことアスカ。了子さんは静かに呟く。

「……………やっぱり男か……………」

「泣きますよ!?!」

病院で着る患者の服だが、それでもわきわきしながら上着を脱がされ、色々な線を付けられながら、検査される。

正直本当に目つきが怖いし、あとは助手の男女の人達も、目線を逸らす。上は見られても平気なただけ。逸らす意味を聞きたくない。

ともかく響と違い、自分のは異例中の異例、だからかどうか不明だが、

「完全聖遺物デュランダル、これはまず、響ちゃんの歌によって覚醒、起動したのは間違いないの」

検査されつつ、説明を受ける。今日も学園を休みながら、学校に向いている響の顔を思い返す。

出来る限り防いだが、それでも少し戸惑っていた。

「まず響ちゃんはデュランダルとの適合率が高い、これは確か。そして」

「オレもですか?」

それに静かに頷き、人の背中をスーと撫でる。悲鳴が出そうになるが我慢する。けどすぐに残念がる了子さん。これはセクハラだったっ!!

「ともかく、せっかくアスカちゃんが学校休んでくれたんだもの♪ たっっっぷり楽しみますか♪♪」

「……………」

響の時間を使わせる訳にはいかない。最近、未来との時間も割いてるし、学校のこともある。ならば自分でいい。響は時間がある時でいい。

そう言い聞かせながら、了子さんに耐えた。

「……………そしてなんでオレ、リディアン制服なんだろう……………」

泣きそうなほど小さく呟く。そう、自分はリディアンの女子生徒の制服に着替えた。慣れた自分が嫌になる。

缶コーヒーを両手で持ち、休憩スペースで飲みながら黄昏れる。アストルフオはどうしてこれに耐えられた？ 理性蒸発してたからか……………」

「デュランダル……………アストルフオの言っていた『剣』……………違う気がするし、そもそも、この情報を信じていいのか？」

アストルフオは夢、意識が途切れていた時の話だ。確証なんて無い。

だが、自分自体がすでにこの世界にとってイレギュラー過ぎる。なぜならば、前世の記憶を持っている。

思い返すは、親を早いうちになくし、爺さんが唯一の家族。その爺さんの元で剣道していた。

そして事故、よそ見運転だ。それだけだ。

「……………詳しく思い出しても、意味無いよな」

そう黄昏れて、立ち上がり、飲み終えた飲み物を捨てたとき、奏さんに尻を撫でられた。

「ひゃうっ!?!」

「……………確かに可愛い悲鳴だな」

そう言って距離を取るが、おいおいと苦笑する奏さん。真剣な顔つきで考え込まないで欲しい。

「なるほどな、んな小動物のように縮こまって涙目なら、そりや手出したくなるな」

「なにに納得してるんだよおおおおお」

腕を組み、頷き続ける中、奏さんに有ることを頼まれた。元々学校は休んでいるため、暇だから良い。

こうして彼女の元に出向くことにした。

病院の中、静かに扉をノックし、返事を待ち、中に入る。

「!? 貴方は」

——風鳴翼

この前のデュランダル輸送の案件、私と奏は外されていた。元々私は絶唱を歌ったのだから、当然だが、やはり気が重い。その結果、彼らに多くの負担をかけた。

それにより、彼らの立場が危険になる。完全聖遺物デュランダル、その覚醒に関わった以上、彼らはどうなるか分からない。

そう考え込んでいると、扉がノックされた。緒川さんか奏だろう。

「どうぞ」

「はい」

その声に驚き、振り返るが遅かった。

「うっ……………」

「……………まずは、掃除か」

そこにいるのは龍崎だった。まずは呆れながら、静かに掃除のため、エプロンをつけ始める。可愛い物だ。

正直、いまだ彼が男性と思えない。だって、

「それじゃ、少し待ってて」

家事がうまいんだもん……………」

本は取りやすく、読みやすいように置かれていく。洋服は変えと洗濯物に分けたりする。無論、種類別。

色々な私物も知っているため、よくしてくれている。

彼にはたびたび緒川さんの変わりに、奏と共に掃除してくれていた。正直最初はともかく、いまは抵抗できるほど私には資格が無い。

夏場のあれが出たときなんか、その……………頼もしかったなもの。

「翼さん？ 少し気分が悪い？」

「大丈夫だ」

そんな彼の後ろ姿、前は何も話しかける機会があっても、かけられなかった。

「……………」

「……………龍崎」

「アスカでいいですよ」

側に座り、ベット周りの掃除をし出す彼に、静かに、

「ならアスカ……君はなぜ戦う？」

「はい？ できるからですけど？」

簡単に答えた。

「……できるから？」

それに驚くように、簡単に言う。

言葉にすると簡単だが、彼の顔は、暗かった。

「できるからしなきゃダメなんですよ、だって、翼さんが戦ってるって知ったし……響や未来、ああ、未来も幼なじみの子です。彼奴らのことを考えたりすると、まあ、無視できないですから」

「君は……」

「それで守れてる訳でもなかったですけどね」

そう言って、ペンダントを握る。苦々しく、静かに、

「オレはアストルフオじゃないんです、英雄である彼のように、守れなかった」

「？」

なにを言っているか分からない。彼はよくやっている、いままでだって、

「オレ、響や奏さん、翼さんも何も、救った実感も何もないですよ。みんな」

悲しそうなんですもん。

これは彼の本心だ。苦しげに、そして本音だと分かった。

「彼奴はその、趣味が人助けで、色々あって、誰かを助けて生きていたって強く思ってますけど、オレには無いです」

そう言いながら、無いともう一度言う。

「オレにあるのは、ただ『やれる』ことだけだった。英雄みたいに前に出たいとか、勇気を持って前とか、そう言う理由は無い。はつきり言える、オレはただ、やれるからって理由……いえ、理由すら無い

んです」

だからと言う。

「翼さん、オレは良いんで、響とはよく話してください。彼奴はその、人との距離感が分からないから、最近詰まってる……」

「……君もだろ？」

そう言ってしまった。止まりそうにないと思いつつながら、静かに、

「私は君を憎んでいた」

「……」

「奏から戦う翼を奪った、例え奏を救うためでも……」

「……」

「……私は、君の友である資格は無い」

そう言ってしまう。

私の中でくすぶっていた、彼への不満。確かに彼は何かしらの使命も何もない、ただやれると言う理由からいるだけに、腹を立てていたのかも知れない。

「ただでそれで助かっている理由から、私は距離を置いていたのだ。しばらく間があいたが、

「それでも、やりたいですから、オレは翼さんを守ります」

そうはつきり言った。彼はそう、気にせず微笑んだ。

「待て、私は防人、この身は剣として」

「知りません、オレにとって翼さんは女の子です。守るべき人ですよ」

そう言っただけで微笑む。

彼はそう言っただけで、また片づけを始めた。

(……守るべき人、私が……)

そう言われたのは初めて……いや、

(私は色々な人に守られているんだな、奏……)

守ってくれている人達の顔を思い出しながら、私は彼を見る。いまは衣類の整理だが、正直悪い。

まさかジュースの容器がこぼれているとは、彼も呆れていた。

そつと顔を背けたとき、ドアがノックされた。

「失礼しま……アスカ!？」

幼なじみとして、彼はたびたび、片方の様子、片方から相談され、状態を知っている。正直、こうやって赤の他人に言うのも抵抗があるのだろう。

それもこれも、不甲斐ない俺達の所為だ。

「すまない、防衛大臣暗殺の件で、こちらもごたごたしている。それはギリギリまでにおきたい。本音を言えば、このままの状態だ」

苦虫をかみ砕き、彼にとって聞きたくない答えを言う。そのままコーヒーを口の中に流し込む。

「確かに、いま本部は防衛強化されましたけど、色々と国際問題の点が酷くなりましたもんね」

藤堯の言葉に、場は少し重くなる。

彼もまたコーヒーを流し込みながら、静かに、

「ネフシユタンの鎧、それと、ノイズを操る聖遺物ですよね？」

「ああ、無論、こちらで調べているよ」

「……………」

静かに目を閉じながら、融合型聖遺物アストルフオを見つめる。

（融合型）

現在平行線で、あの場にあつた聖遺物、無くなった物、それかどうか調べていた物、それら全て調べ直している。

正直、彼はやはり特殊だ。あまりの特殊に、彼の履歴を調べてしまう事態になったが、それらしい不審な点は、書類上無い。

（……………アスカくん、君は）

その先を思う瞬間、警報が鳴り響いた。

特別編・少年のバレンタインデー

Fate／シリーズ、とある場所で会議が始まる。

「この作品はFate／シリーズと戦姫絶唱シンフォギアのコラボです」

とある魔術師が呟いた。

「正直、Fate／シリーズの黒い面はこのシリーズよりも、シリアスモードになれば人がゴミ、どころの騒ぎじゃないくらいに死にます」
「ああそうだな、元々のシリーズを考えれば、それくらい当然の結果だ」

外套で身を包む暗殺者はそう頷き、わくわくしながら黒いフード被った騎乗兵が手を挙げた。

「はいはい、それでそれで？ キャスターは何が言いたいの？」

そうのんきに聞くと、キャスターは静かに、

「これは一度、戦姫絶唱シンフォギアの主人公さんに、お礼と言うか、今後のことを考えて贈り物を贈るべきだと私は思います」

そう言つて、丁度二月ですしねと言つてから、

「ライダーアストルフオ、貴方には、オリジナル主人公龍崎アスカと一緒に、プレゼントは私達♪♪的な状態になっていたくださいますッ!! このメディアに任せてくださいッ」

「いいよ〜」

「……………」

まともな者達は固まり、息を荒くして手をわきわきさせている裏切りの魔女。

その時、とある場所で逃げ出した男の娘がいた……………

——VSアーチャー

「いやだああああああああああああああああああああ」

何故走る、ここはどこだろう？ そんな描写はしない。彼は逃れられない、神の手のひらにいるのだ。

「ふざけるなッ、なにされるんだよ!!」 キャスターメディアさんつて

マジか!? なにされるか分かったもんじゃねえよッ」

ちなみに彼は装者としての力を失い、ギアも纏えない。なんて言う悲劇、彼はいまはただ逃げることしかできない、狩られる側の人間だ。「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

涙を流しながら走る彼に向かって、矢が放たれる。即座に身体能力、天性の直感にて、身体を反らして、避けた。

ちなみに彼はリディアン制服、スカートは緒川さんが用意してくれた短パンで下着を隠しているため、どれほど翻ろうと問題ない。

ニーソックスでの絶対領域なるものを見せながら、服のふくらみの所為で、彼に少々の胸のふくらみがあるのでは?と思わせる。

尚、男子学生服、彼の学園での制服は少しぶかぶかであり、マニアックな人には受けがいい。

「なんだこの説明ッ!! 矢の攻撃に対しての説明しろよおおおおお」

「それには同意する」

やれやれと言いながら、黒い弓を構える、肌は褐色、白い髪。赤い外套を纏うそれは、英霊『無銘』であり、此度の聖杯戦争で弓兵の位で召喚されし英雄だ。

「エミヤああああああああああああああ」

真名を看破する、アニメからこのシリーズを知った龍崎アスカは叫ぶ。だが、

「悪いがこんなバカげたことに時間を割くつもりは無い。早々に片を付けさせてもらおう……身体は剣でできているッ」

彼は宝具、固有結界の詠唱に入る。まずい、まだ物語が始まったばかりだと言うのに、この英霊は空気を読んでいない。龍崎アスカよ、なんとかするんだ。

「この説明文はなんなんだああああああああ、そもそもギア無しで英霊と戦えるかバツカああああああああああ!!!」

このBGM流すから大丈夫。みなさんも脳内再生をよろしくお願ひします。

「……………えっ……………」

こうしてアーチャーエミヤは倒された。

「ま……………待て……………なにが、どう」

あのBGMが流れれば君は敗北する運命フエイトなのだよ。

「そんな……………ばか、な……………」

——VSバーサーカーとランサー

「この世界がギャグでできていてよかつ……………って今度は二人かよつ、つてかまズくないか!!?」

そしていつの間にか彼女らの要望で道場にいる龍崎アスカ。

「……………道場?」

「その通り!!!」

そして床からぶち破つて現れる、ランサーこと、

「ランサージャガーマンの力とか色々無視して現れたツ、藤村大河あああああ見ツ参ツ!!!」

「同じく弟子一号ツ、バーサーカーに頼んで変わってもらつた聖杯戦争版つ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンツ。私がイリヤだ!!!」

「何故床から!?!」

イリヤとタイガーが現れ、憤怒しながら龍崎アスカを睨む。

「ふざけるんじゃないわよツ、いくら私が一般人だからって私の出番の数の低さ!! 出られるんなら素人だろうが玄人だろうがどこだつて出てやるわよツ、てかなんでジャガーマンは私の姿で出てるツ!? 私を出せよおいツ」

「オレに言われてもツ」

「それより私は平行世界の私しか出てない件について!! 私も出せよツ、クロエとイリヤとイリヤと美遊で!!!」

「イリヤが二人いるだろうってか、クロエの中身はある意味君で、イリヤは身体なんじゃないのか!?!」

「二んなもん知るか!!!」

「なんでさ!?!」

叫ぶ中で、竹刀片手に持つ大河と、全身から令呪を纏うイリヤ。本気モードで龍崎アスカを狙う。

「お兄さんには悪いけど、キャスターの手によって男性として生きられないくらいな目に遭ってもらうよ」

「怖いよッ」

「大丈夫!! 教師である私がギリギリまで見極める問題ないわたんんッ」

「たぶんって」

二人はじりじりと彼を囲むが、彼は少しばかり余裕だった。

(エミヤでは無い以上、二人はただの魔術師と教師?だッ。魔術師に気を付ける、オレ男性なんだっ、まだ捨てられないし、中身はもうオツサンなんだぞ。これ以上女装してたまるか!!)

——VSアサシン

「えっ」

その時、銃声が鳴り響く。それにばたんと倒れ、身体を動かすことはできず、その場で痺れている。

「悪いが、僕は卑怯者^{アサシン}。開戦から終わらせてもらったよ」

一人のアサシンがそう言う中、二人は静かに、

「ナイスっ!!」

「お父さん大好き♪」

「……………」

大河が縛りながら、イリヤはだっこをせがんでいて、アサシンは静かに応じる。

「マスターの命令なら仕方ないな……………」

「えへへ♪」

「それじゃ、この子をつれて、会場へ行きましょう。それじゃ」
シーンを変えます。

——あつ、セイバーこの人です。

「余は来た、余は聞いた、ならば後は用意するだけだ!!! ローマを愛す

るローマ市民よ、待たせたな。我が名は赤セイバーこと、薔薇の皇帝ネロ!!」

「資金提供ありがとうございますごいます皇帝ネロ」

「有無、良い仕事をするが良いっ」

そして彼もまた、来た。

「あつ、アゝスカ♪」

薔薇のお風呂に入りながら、身体を洗っているアストルフオ。ちなみに他に人もいる。身体を綺麗にするように言われたからである。そこに、

「それじゃ、まずは」

「剥くかツ!!」

セイバーの言葉に、一人の男の娘は悲鳴を上げた。

とある帰り道、戦姫絶叫シンフォギア、主人公兼ヒロイン、立花響は鼻歌を歌いながら帰る途中であった。

「立花響だな」

「!? 誰ですか貴方は!」

「そう構えるな、私のことは………麻婆神父と呼ぶが良い」

それに彼女は呆れるが、私がすべきことは別にある。

「此度、戦姫絶唱シンフォギアと、我らFate／シリーズの物語。Fate／シリーズのシリアス要素を出す際、君を精神的に追いつめることがあるのでね。その詫びと、今後ともよろしくを意味し、君にFate／シリーズの代表として、ある物を渡しに来たのだ」

「Fate／シリーズで………」

「ああ、これを君に………」

そう言いながら、私は数枚の写真を彼女に渡す。彼女はそれを見て、雷に打たれたようにマジマジと見た。

「内容はさすがに薔薇風呂の様子は外してあり、その後アストルフオと同じ衣装の双子ファッションから始まり、キャスターメディアが望むコスプレ写真でできている」

途中からからの心は壊れた音を聞き、少女と成った龍崎アスカの写

真。おっと、私の言葉はすでに届いていないらしい。

「データはありますか!？」

「ここに」

「ありがとうございます!!」

「いや、これからF a t e / シリーズ要素があるこの作品で、ヒロインと主人公を頼むよ。それではこれで」

「はいッ、待ち受け待ち受け♪」

すでにデータを待ち受けにする様子であり、私は喉を鳴らしながら、静かに去っていく……

「ああ、夢落ちなどにしないため、最後にバレンタインデー用………写真の最後は、ウェディングドレス、ミニスカート、双子ファツションであり、大きなハートマークチョコの端をアストルフオと共に口を加えた龍崎アスカ。ちなみに二人の身体は密着していてリボンでラッピングしている様子で幕を下ろそう………おっと」

すまない、これは小説であった。

「それではこれで、幕を下ろそう………」

微かな笑みを私はしながら、静かに戦姫絶唱シンフォギアの世界から去っていく。

「ちなみに私の出番は無いようだ………」

それでは、この世界の愉悦はどれくらいか、試させてもらおうか。

そして私はその後、この世界の麻婆を巡る旅に出た………

6話・最悪な物語、だけど

今度もまたネフシユタンの子が現れた、しかも響を狙ってた。

ヒポグリフを取り出して、駆け抜ける。こちらは他の装者対策か、バラまかれたノイズを倒していた。

「こちらアスカ、殲滅完了。響は」

『こちら本部藤堯、それなんですが……………』

藤堯さんが言いにくそうに、話してくれた。

響が未来の前で、シンフォギアを纏ったらしい。そしていま保護しているらしい。

目の前が暗くなった気がした。

「…………アスカ」

本部へ先に戻ったオレの顔を見て、シンフォギアの格好で出迎えた。

それを見て、未来は何か言いたげに、だけど飲み込んで静かに目を伏せながら、

「いつからなの……………」

「…………オレは二年前から、響はつい最近」

「アスカは、知ってたの？ 響が危険なこととしてるって、知ってて止めなかったの!？」

それを言われて押し黙る。止められない、止められなかったなんて理由にならない。

「アスカどうして、どうして止めてくれなかったの!？ 知ってるのに、アスカ」

「……………」

静かに、ただ何も言えない。

そうだ、なんでだ。分かっていた、響が止められないからって、だからって、考えること自体してなかった。

「アスカは響の味方だって思ってたのにつ」

何も言えなかった。

それに何も言えず、それでも言うことがあれば、

「未来」

「……………」

「オレはいいよ」

静かにそう言っつて、その場から離れる。

「だけど、響は悪くないから、少しぎくしゃくしても、冷えたら直つてくれよ」

それくらいしか言えなかった……………」

——風鳴弦十郎

「お前はいいのか」

「……………」

無心でただひたすら木刀を振るう。いつもなら嫌がる女装も気にせずだった。

ただ木刀を振るい、ただ静かに、

「……………」

「……………」雪音・クリス、ネフシユタンの鎧を纏う装者。だが、様子を見る限り、敵の親玉と一悶着があつたようだ」

それにぴたつと止まり、静かにこちらを見る。

時折見せる、彼の顔つき……………」

「フィーネなる人物が、彼女からネフシユタンの鎧を奪い取つた。が、彼女はイチイバルと言う聖遺物装者でもあつた。だが」

「仲違いですか?」

「そのようだ、向こうはどうやら響くんを狙っている」

それに表情は変わらないが、反応した。

「無論、君もだぞ」

それには反応せず、聞き流した。

「雪音クリスくんは、過去に装者候補として上がって行方不明になつた人物だ。出来れば彼女は保護したい」

「分かりました」

しばらくしてまた素振りを始める。こうなると話を聞かない。

仕方なく出ると、緒川がいた。

「司令、彼は」

「分かっている」

時折感じる太刀筋、彼の書類上、女性ファッションデザイナーの母親と、彼女の会社の運営関係並び、仕入れ先の交渉などのマネージャーをする日本人の父親から生まれた一人息子だ。

だが、

「時折感じる、剣技の冴え、武術らしいのは剣道部であり、大会出場はしていないが、後輩指南などで彼らは上位選手。なにより」

「はい、最初、それもコンサート的事件もそうですが、彼はすでに戦いと言うものを一通り理解してます。少なくとも、実戦では無いですが」

それらしい経歴は一切無い。切り捨てるべきものは切り捨て、やらなければいけないことはやる。そんな印象である。

なにより、ここ最近はそれが出始めている。前はコンサート被害者への中傷被害に関することで、ああやって悩んでいたりを覚えていく。

ああなると、ほぼ無頓着で、ひたすら時間が過ぎるだけだった。

「考えることは沢山だが、それこそやらなければな……アスカには、子供だと自覚して欲しいものだ」

そう苦笑する。それが無理な話と知りながら……

——龍崎アスカ

学園を休み、部屋の中で剣を振る。司令達には身体を休ませると言う理由である。

「……………」

スマホを見る。メールも何もない。両方から……………

「……………」

静かに広い部屋で剣を振る。別にゲーム機とテレビなど、後は家事

ができればいい程度の物しかない。友達も呼ぶ気はない。響と未来は女の子だから、呼ばないとすでに言っているし、いま来るはずもない。

「……………あ、着替えるの忘れてた……………」

リデイアンの女性制服。だが着替える気にはなれない。普段なら家に帰れば速攻なんだが、いまはする気は無い。

その時、ガラスに自分が映る。アストルフォには似合わない顔をしていて。

「……………違う、オレはいま、龍崎アスカじゃない……………」

前世の自分だ。

「……………死んでも治らない、か……………」

そう思い、こうなるとどうすればいいか分からない。言われても直らなかったのだから、仕方ない。

別に構わない、何故、じつちゃんはオレのこれを、危惧したのだろうか？

また素振り始める。静かに、静かに……………

その時が来る前で、静かに振るう。

——雪音クリス

私の所為でノイズが、関係ねえ人達を巻き込んだ。

なんでだよフィーネ、そこまでして私が邪魔なのかよ……………

「くそ……………」

顔を上げ、ノイズどもを睨む瞬間、それは静かに現れた。

「平気」

「テメ……………ピンク」

「……………」

いつもよりも無表情で、あの時、何か不気味な感覚だ。

歌も歌わず、シンフォギアを操っていた。

「なんで、なんでテメエが!!」

「……………全くだな」

そう無表情で言っていると、

「うおおおおおおおおおお」

道路を足で踏ん張るだけではぎ取り、拳で吹き飛ばしてノイズを吹き飛ばした。

それに続くように、彼奴がスカートの上で斬り伏せた。彼奴は、

「アスカっ、ひとまずここは任せたっ。俺はこの子を」

「って、お、おい」

「分かりました」

——龍崎アスカ

司令官が人やめたような動きした。あの人英霊か？

いまは気にすることじゃない。

「……………」

ただひたすらにやるべきことだけをし、それだけを考える。

胸の歌が出てこない。ギアが重くなることはないからいい。

考えない、ただ考えずに、ただ……………なにも……………

カンガエナイ……………

『……………』

——風鳴弦十郎

「アスカっ!!」

その姿は黒く、静かにギアに飲まれていくようだった。

その姿に、クリスくんが驚いていた。

「あ、それは……………」

「知っているのか!？」

「知っているものにも、彼奴、デュランダルも持ってねえのに、暴走してる!？」

「!!？」

デュランダルの暴走状態!? すぐにインカムでモニタリングを確認させるが、

『アスカくんの心拍数並びに脳波異常有りませんっ、ですがフオグニツクゲインが通常より安定していませんっ!!』

「なんだと!? おいアスカっ、俺だ、分からないかアスカああああああ」

黒い獣はただ無言のまま、流れ作業のようにノイズを討つ。

その様子はいつも、彼が素振りする時の顔に似ていた。

(迂闊だったっ!!)

不安や辛さを表に出す響くんと違い、彼は静かにため込んでいた。それがいま出てきたのか、

「これで何が大人だあ? くそつたれッ!!」

自分の迂闊さを呪いながら、歯ぎしりする。

「…………ちっ、しゃーねえ、これだから大人は」

その時、聖詠を歌い、イチイバルを纏うクリスくん。それは、

「アスカを止めてくれるのか?」

「テメエらのためじゃねえ、あたしは、彼奴が嫌いなんだよッ!!」

そして彼に弾幕を張りながら、突っ込んでいく。

その後ろ姿こそ、俺は不甲斐ない大人の証かと、静かに飲み込むしかなかった。

——雪音クリス

「ちよっせえ!!」

弾丸が何発も当たってるって言うのに、あの野郎、こっちを一切見ない。私は眼中にないように、

「ぎっけるなよ!!」

ノイズと共に弾丸が当たりながら、それは私を無視する。

何度も何度も何度も何度も!!

ふざけるな、私は、私を、

「私を無視するなあああああああああ」

その時、背後に違和感を感じた。ノイズが迫っていた。

「しまっ」

その時、黒い腕が私を無視して、助けるように伸びて貫いた。

「てめえ……………」

『……………』

そのノイズが消えたと共に、シンフォギアを解く。
その時のそいつは、血を流していた。

「えっ……………」

「ノイズ殲滅した……………」

そう言っつて、私の頭を撫で、少し息を吐く。

「平気、雪音クリス」

「……………お、まえ」

始めから自分は敵ではないから、無視していた。

傷付こうとも無視していた。

「なん、でだよっ、なんで後ろから撃たれてるのに!？」

そう言われたとき、少しだけ間を置いた。

「……………ああそうか、だからか」

「？」

「……………オレがああなると、周りが分からなくなるから、危機感感じたのか……………ははっ」

そう言っつてその場に座り込み、静かに苦笑する。

「なに一人で納得してるんだよテメエ」

「いや悪い……………どうもオレ、やっぱり」

静かに、顔を伏せながら、

「人の気持ちなんて分からない、機械人間なんだ……………」

そう言っつて、力無く笑う。

……………何を言っつてるんだ。

「お前……………」

「……………変わらないか、オレ」

そう黄昏れている。なんか、むかつく。

なに一人で納得して、一人で解決してるんだこいつ!!

「ぎげんなよっ!!」

ントを刃のように冴え渡らせた。

——龍崎アスカ

夕焼けの中、二人が笑い合う様子に、少しだけ暖かくなる。そう言えばホント、こつちじやあなることは少なかつた。母親と父親いたし、二人がいたからだ。

こちらに気づき、未来がこちらに駆け寄る。

「アスカっ」

「未来……………」

「ごめんアスカっ」

そう言つてオレに抱きつく未来。その目に涙を溜めながら、

「私、私……………」

「……………いいよ、未来には、いつも助けてもらつてる」

それに首を振る未来だが、オレは違うと言う。

「だって、オレはいつも響と未来に助けられてる。いま、よく分かつたよ」

「私も……………」

静かに頷きながら、未来の涙を拭き、優しく微笑む。

そうだ、オレはこの世界で、前の世界で無くしたものを受け取つて
いる。

それを、しっかりと自覚した……………

あの後、色々大変だつた。二課の人達に、未来と響を届けたりした
から。

未来には、シンフォギア姿をはつきり見られた。

「なんか、ホント、女の子みたいで可愛い……………」

そしてシンフォギアを解いた、リディアン制服も見られた。写真に
撮られた。

隠していたから、これでいいと言われたから黙つた。ポーズも取つ
て、三人で撮つた。待ち受けにされた。泣いていいかな？

その後、二課の外部協力者、これは元々オレの提案で、最悪の最悪、

未来に響の学園サポートを頼む係りである。これも今回の件で通したらしい。

本人的には最終手段だったが、こうなればと言った。

司令官には、

「もう暴走しません。彼奴らが仲直りしましたから」

「……………アスカ」

「暴走した理由も、できれば落ち着いてから……………正直、話したくないんです」

「……………分かった」

こうして後のことも話、オレは動く。

暗闇の中、一人ぼつぽつと歩く、あの子を見つけた。

「雪音っ」

「!？」

驚く前に、手を掴み、にっこり微笑む。

「それじゃ、行こうか♪」

元々、ノイズや何かの襲撃を考えられた位置にあるマンションである。ここに一度泊めることを決めていた。司令官には何も聞かず、見ないと約束させてだ。

「オメエ、なに考えてる」

「別に、少し恩返しだよ」

そう言っつて、エプロンを着て、いつものように簡単な食事を作り、食べさせた。

渋々食べているクリス（本人がそう呼べと言うので）であり、しばらく睨んでいる。

「ほら、着替え無いから、いざとなればジャージ使って寝てくれ。オレの部屋、布団だからな」

「……………ああ」

そう言いながら、それと共にシャワーも使えるぞと言いついておく。

と、

「……………顔はやめて」

「ふんッ」

腹を殴られ、その場に崩れ、浴室に出向くクリス。
その場でしばらく倒れている。

——雪音クリス

「……………おとこ……………わたし、男に負けた……………いや、フィーネ女だからいいんだよな……………えっ、あれで男……………おとこ？」

しばらく湯船の中で混乱に混乱してから、この調子で寝間着を借りて、布団で寝る。彼奴は寝袋があり、それでリビングで寝ていた。

その後は朝食食って、出ていった……………途中で自分が何してるのか、悶絶した。やっぱり彼奴嫌いだ。

エプロン似合ってたし、飯うまかった。

……………おとこ？

疑問に思いながら、時間が過ぎてった……………

7話・つかの間

それは携帯に突然だった。

『アスカへ、今度の休日、翼さんと奏さん、未来とで買い物するから、来るように♪ ああ、翼さん達のことを考えてね♪♪』

そんなメールを見て思ったことは、

「……………中性的な衣装にしろと言うことだな。女装じゃないよな女装じゃな」

待ち合わせの場所で、奏さんと翼さんに出会い。奏さんに怒られた。

「なに考えてるんだよつ、ここはスカートだろ!？」

「……………」

よどんだ目をしているだろう。まあまあと翼さんがたしなめる中、それでも考えたんだ。

わざわざ中性的な衣装にしてもダメなのかと、世界が暗く閉ざされる。

後れてきた響達、響にも、スカートじゃない!?と言われた。もうやだ。

「なんで休日まで女装しなきゃいけないの!？」

「いいから最初は洋服店でいいな響っ」

「はいっ、アスカには急いで似合う物をつ」

もう仲良いよなと思いつながら、静かに女性服専門店に出向く。静かに二人を見るが、静かに顔を逸らす。助ける気は無いらしい。

「……………もうやだ」

それから、色々だった。何故洋服店でゴスロリ着せられたりしたり、買い物したり、翼さん達に気づくファンがいたり、ゲーセンでぬいぐるみを取ってあげたり、カラオケ行ったり、楽しんだ。

「龍崎は、その……………本当に、そのな」

「男だよ……………なんで疑問に思うんだよ……………」

翼さんはもうあれだ、落ち込んでいた。オレの肌つや触って驚いたり、服着たら可愛いと驚かれたり、歌歌ったらこの調子である。「嫌だって、カラオケで本人より本人の曲で得点出せばなく」

そう言いながら笑う奏さんをほかほかと叩く翼さん。

仕方ないじゃないか、それ以外知ってるのは前世の曲でいまは無い。後は翼さんソロ曲しかない。

その様子に、響達は昔を思い返す。

「いつやく正直、幼稚園で知り合って、そのまま長付き合いですからね、私達は」

「そうだよ、アスカとも、小さい頃でしたけど、お互いお泊まりしたり、お風呂入ったりしましたから、その、ね……………」

二人とも信じられないと言う顔で思い返す。なんでだよ。

「二人とも、そろそろ泣くぞ。なんでそんなにオレを女の子にしたいんだよ」

そうだ、二人とは長い付き合い、女の子と男の子だ。だがこの調子だ。

「だってアスカと買い物行くと、私と未来よりナンパされたり、可愛い服似合うしつ、その肌だって化粧品使っていないでしょっ!!」

「確かに……………少しずるい。響だって、使う物くらい気を付けてるのに」

「オレは男だぞ、臭わない程度のシャンプーだけでいい」

だから安い物使っているが、ほかほか叩かれていた奏さん達が止まる。

「……………待て、いまのは聞き捨てならない。あの肌つやは天然だったのか?」

「その肌つやは天然かアスカ……………少し触らせろおおおお」
「なんでさ!?!」

その後、女子から頬や背中など、素肌を触られた。しかも途中から奏さんと響の様子がおかしくなって、途中でやめてもらった。怖い……………

そんなこんなで夕焼け空、奏さんと翼さん、響が仲良く話し合う中、

未来はオレに話しかける。

「ごめんねアスカ……ずっと、響のこと守ってたのに」

「いいよ、未来の気持ちは分かるうとすれば分かるはずだったし、分かってたはずだったんだ」

そう、そう思いながら静かに歩く。

「戦いの場は必ず守るよ、それだけは約束する。だから、未来は、彼奴の側にいてくれよ」

「アスカ……」

その言葉に頷く未来を見ながら、少しだけ過去を思い出す。

前世、その時の過去。

現実から逃げていた、自分を……

奏さんから翼さんのコンサートチケットを受け取った。元々、この長い体調管理のために、アイドル活動を休んでいた翼さん。今回で復活するらしい。

とは言え、自分はこういうのに興味ないのが本音だ。この前聞いたし、こういうところがいけないんだろう。

だけど、オレは結局ダメだった。

「アスカっ、大見得切ったんだっ!! 男として活躍しろ!!」

『分かってますよッ』

ノイズが発生する、しかもコンサート近く。ギリギリで避難地区では無いが、早く撃退しなければ、コンサートが台無しになる。

だけどオレは、響、未来、翼さんや奏さんのため、自分だけに任せてもらった。

我が儘言った以上、男を見せなければいけない。

「まあ、あの格好でそれはその……」

『セクハラです藤堯さん』

現場ではクリスがいた。どうやらクリスを狙うノイズらしい。しかも会場近く、彼奴らの大切な日に横やり入れたノイズ。しかもクリスを狙う。

『許す気はない!! ヒポグリフっ、行くぞ!!』

何個の大型ノイズへと突進しつつ、片腕でクリスを掴み上げ、背中に乗せてから、戦い始める。

「テメ、なんで!?!」

「守りたいからだ、でいいだろ? あと翼さんのコンサートだから、ノイズ邪魔。クリスもどうだ? このまま天井から聴くっての?」

確かオープン的な会場だったはずだ。

「ぎっけんな!!!」

戦いながらのやりとり、槍と剣を振る舞わしながら、ヒポグリフを操る。

空に浮くのは魔笛で払い、本で阻んだりして、滑空しながら、射撃している。爆撃機のように、ノイズはすぐに落ちていく。

「相性いいなオレら」

「な、なに言ってるんだバカっ!!」

遠距離攻撃無いんだ。魔笛は歌をやめないとさすがに使えないんだよ。

真っ赤に何故かなるクリスと共に、ノイズを蹴散らし、全て終わった後、その場に下ろす。

「クリス、向こう、フィーネから命を狙われてるなら、オレ達のもとに来てくれ」

「ハッ、やだね。誰が行くか」

「クリス」

その後ろ姿から、何か言いたげだった。

クリスが何を感じているか分からない。そう、いつもそうだ。だが、

「クリスっ」

いまはそれでも構わない。その腕を無理に掴む。

「離せよっ、テメエもなに考えてるんだっ」

「オレはお前を守りたい」

「!」

驚くクリスだが、すぐに顔を歪める。

「お前も大人だからとか、んな理屈かよ!？」

「? なんだそれ?」

「!」

クリスの側に立ち、その手を握りしめ、

「オレはクリス達を守りたいから我が儘言ってるだけだよ、それだけだ」

それに驚くクリス、しばらく黙り込むが、だけどその手をふりほどき、その場から跳んでいく。

その姿を見ながら、ただ黙るしかない。これ以上追っても無駄だろう。

「……………やっぱオレ、他人の心分らないんだな」

そう呟きながら、コンサートへ急いで戻る。

緒川さんのおかげでコンサートには別で聞いていたと言う話になり、そのおかげで、

「もし私達に内緒でなんかしてたら、この前買った服装でまた遊びに行こうぜ」

「はい奏さんっ♪」

緒川さんに涙目に訴え、苦笑して頷いてもらった。回避できたが怖い。響が即答して、ちゃんと保存してるからねと、満面の笑みの未来が言う。

オレの味方は緒川さんと司令官しかいないと、心から思った……………

—— ???

「やっほ〜♪」

そんな日々であったのだが、また白い世界だった。そこにいるのは、三つ編みをした彼、アストルフォが笑顔でいた。

「……………なにか文句があるか」

なんとなく、自分は彼に何か言われても仕方ないと思う。それに彼はふむふむと顔をのぞき込む。

「少しは君の悪いところ分かったんだね。ボクも、少し心配だな。君のその悪い癖」

「……………」

それを言われ黙り込むと、急に抱きついてくる。止めて欲しいのですぐに引き離れた。

「ひどくくくボクのなにが嫌なんだい!？」

「男同士っ」

「ボクは気にしないよっ♪」

嬉しそうに微笑みながら抱きつこうとしたり、引き離したら涙目になったり、そしてウインクして満面の笑みを浮かべるアストルフオ。忙しい奴だ。

無理だろ男同士だよ。てか、オレにそんな趣味はない。

どんなに可愛くても、性別の壁は越えられない。

さて、現実逃避はいい加減にして、この妙な空間を見渡す。

「もうこれが夢か現実か分からないけど、アストルフオ」

「なあにく〜？」

「オレになにさせたい？」

「……………」

その時、アストルフオは固まった。

明らかにおかしいんだよ、オレ事態、過去の自分を知っていたり、面白いようにこの世界が特別に抱える問題に首を突っ込んだりと、色々都合が良すぎる。

だが、英雄願望やら、なんやらなんて無い。元々自分は流れ作業的に生きてきた人間なんだ。本当になんなんだと問いかけたい。

アストルフオはその問いかけに、静かににつこりと笑う。

「君が決めていいんだよ」

そう言いながら、得意げにくるくると周り、楽しそうに両手を広げる。

「この世界で生きる君が決める、ボクの方であろうと、いまは君の力だっ♪ なにより、君は何が有ろうと、誰かを守るために使う意志の強さは知ってるっ。ならボクは文句なんて言わない♪♪ むしろ君のことが大好きだよアスカ♪」

「答えになってない」

「それじゃ、君はこの世界に転生して嫌だった？」
それには、

「いいや、響達を守る力があるんだ、むしろ感謝してる」

そう、即答できる。最初はともかく、いまははつきり言える。
守りたいと言う願いがある。なら、彼の力は助かっていんだ。
それでもだ。

それでも理由が知りたい。何故自分なんだと？と……………

「ごめん、それは言えない」

その言葉だけは、暗い顔でそう呟いた。

「いずれ君は知るだろう、君が何者か、君の運命が何なのか。きっと分かる日が来る。本当はあり得ないんだこの状況。ボクも分からないのが正しい」

そう言いながら、彼はごめんねと言い、しょんぼりする。

「ボクにできることは、君の言うところ。できることだけなんだよ、それは頑張るよボク♪♪」

そんな言い方されても困ると、髪をかきながらため息をつく。

「……………んなFate／シリーズじゃねえんだ……………」

その時、背筋が凍り付く。

「……………Fate／シリーズ？」

Fate／シリーズは必ず、過酷な運命、宿命がある。

主人公に思い選択が架せられたり、人の命が簡単に潰える。

欲望、色々な思い、運命、定められた事柄に、主人公は翻弄される物語。

まさかとは思う、傲りたくないが、まさか、

「気づいた？」

その時ばかり、アストルフオの笑顔は、ぞつとした。

「待ってくれ、あれは物語、創作物の」

「だけど君はこうしてボクと話して、創作物のような世界にいる」

「……………」

そうだ、ああそうだ。何故気づかなかった？ やはり変わらないのか。

自分は根本的に見ていなかった。考えれば前世の記憶持ちであり、自分が知ることが当てはまる力なら、それが取り巻く環境だつて当てはまる。

ならもしかしたら、とんでもない、考えられない規模で動く、あの物語、聖杯。そんなものに、自分と言う存在が関わっているんじゃないか？

それを知ったとき、考えたとき、足が不意に、後ろに下がりがかけた。だけど、

「響」

その言葉に、それは止まった。

「……………守りたい？」

その言葉に、震えながらも、臆しながらも、それでも、一歩前に歩いた。

それに満面の笑みを見せ、それにアストルフオはとても嬉しそうに周りではしゃぐ。正直冷や汗は止まっていなかった。

自分がうる覚えで知っている物語は、聖杯大戦など、多くの一般人が巻き込まれたりする物騒極まりない出来事ばかりだし、サーヴァントの能力もだ。正直関わりたくないのが本音だ。

だが、それでも踏みとどまるくらいしなきゃいけないらしい。まだ決まったわけではないが、それでもちらつく影は、ノイズより問題だ。「やっぱり思っていたとおりだよ♪ アスカ♪♪」

もうアストルフオを引き離す気も起きない、いまは安心して良いだろう。仲間がいるんだ。ポンコツでも英雄らしい英雄が、わざわざ自分に手を貸してくれている。

主人公のように成らなくても、抗って見せなければ、彼に悪い。

「ちやんとできるかな？」

「それこそ分らないよ。それはアスカの、アスカ達のがんばりさ♪
♪ ボクらは応援してる」

アストルフオのボクラと言う言葉に疑問に思ったが、辺りが光り輝く。

正直このアストルフオが、自分の知るアストルフオで、ボクラと言

う部分が、他の彼らを言っているのなら、やはり自分が取り囲む問題は、ノイズやいま生きている世界だけで終わる規模では無い。

聖杯。

それを囲む物語が、どのような形であれ、自分と言う存在に関わっている。

不安そうな顔をするが、アストルフオを見ると、信じてると言う顔していた。

「選びの時間が近づいてる、君の選択を後押しする。アスカ……………」

そう言われたアストルフオ。おそらくだが、彼が貸せる力は限られていて、それでも、自分を応援すると言っていた。

なら、

「頑張るよ」

その一言に、彼は頬を赤く染めて、満面の笑みを浮かべた。

そしてオレは夢の世界から覚めるように、ノイズ警報と共に目を覚ました……………

8話・純白の闇

それはスカイタワーを襲う、ノイズの群れであり、急いで飛び出そうとするが、司令官から待ったがかかる。

『あれは陽動だ、君にはヒポグリフのみ現場に向かわせてくれ。君自身はここ、リディアン音楽院で待機して欲しい』

「リディアンって……本部が襲われるんですか？ そんなこと」

『いまは詳しく言えない、頼む』

そう言われ、ヒポグリフだけを飛ばし、リディアンで待機していたら……

「はあああああ」

生徒達に襲いかかろうとするノイズを断ち切り、急いで守る。軍事に属する人達もいる中でも、早く動き、早く倒さなければいけない。

いまもまた、三人組の生徒の避難誘導する人を守ったばかり、

「ここで最後か、君達、他に誰か奥にいない？」

「！ 友達が一人、他にいないか見に」

「分かった、悪いけど貴方はこの子達を安全な場所に、オレがその子共々、奥の確認します」

「わ、分かりました」

そう言つて、奥に進むが、この先は、本部へ直轄するエレベーターがある。もし誰もいないなら、本部を見るべきか。

そして銃声が聞こえ、床を滑るように移動すると、

「未来っ」

「アスカ!？」

「アスカさんっ」

「緒川さん伏せてっ」

身体を捻り、スカートで斬り潰し、共にエレベーターに乗る。もう建物内に人はいないと、彼女達に聞いた。

「緒川さん、未来」

「助かりましたアスカさん」

緒川さんが拳銃片手に、いまだ状況が分からない。

「現状は、オレはまだ、スカイタワーが陽動としか」

それを聞きながら、拳銃をリロードしながら、静かに、

「我々二課が独自に調べた結果、米国はある科学者と繋がりがあり、その人は二課に属する学者です」

「……………二課の学者って」

その時、了子さんしか思いつかない。それに静かに頷きながら、続ける。

「彼女の目的はカ・ディングルなる塔の建設です。そして、塔はどこに隠されていたかというと……………」

「了さんはこの建設に関わってた……………まさか」

それに頷きながら、エレベーターの外を見る。

ここはスカイタワーが三つほど収まるほど深い。つまりここですぐでかい塔を作っていたらしい。

「ともかく、早くここ」

「!？」

エレベーターが到着する前に、剣を取りだし、それを防いだ。

鎖のような鞭、それが緒川さんに放たれ、それを防ぎ、すぐに二人してエレベーターを未来と共に降りた。

「は〜いっ♪ アスカちゃん♪♪」

そこにはネフシユタンの鎧を纏った、櫻井了子がいた。

「……………了子さん、あんたが、フィーネ？」

「ああそうよ、龍崎アスカ」

「クリスの命を狙ってた、いままでのこと全部？ マジか」

「だめよアスカちゃん、そんな言葉遣い。せつかくの可愛い顔が台無しよ〜」

「ふざっ」

その手から銃のように無数のノイズを放ち、二人に襲いかかる。それを無理飛ばしたり、剣で斬りつけたりするが、それを余裕を持ちながら見る。

「貴方の戦法はこの二年間でよく分かった。自立型のヒポグリフ、魔防の本、魔曲を奏でる角笛、触れた空間の重力操作する槍。一番驚いたのは剣術だけど、どれもこれも、大きく立ち回り戦う。ここで華麗に舞えるかしら？」

狭い通路の中、すでにヒポグリフは響達の下であり、いま現在響達を運んでいるだろう。

槍は出せない、大きすぎて邪魔。魔笛もまた、至近距離での戦闘に向かない。

魔本は無理だ、それ以上の攻撃が向こうにある。最後の剣術は、「後ろの二人を見捨てれば、私に一太刀浴びせさせられるぞ？」

変に動けば、二人がノイズに触れてしまう。できないと知りつつ、そう微笑む。

鎖が振るわれ、必要に二人を狙う。それを弾いたりするが、ノイズが同じように迫る。こちらの体力切れを狙っているか分からないが、明らかに遊ばれていた。

「悪いが、遊んでいる暇は………無いっ」

「そうか、なら!!」

瞬間、振るわれていた鎖がうなり、腕に巻き付いて片腕が持ち上げられたが、

「!」

マントとスカートを伸ばし、ノイズを切り伏せた。ノイズは倒せたのならば、片腕で槍を取りだし、投擲ぐらいと思った矢先、未来に鎖の刃先が投げられた。

「チッ」

それに手を伸ばせば、腕を貫かれ、

「ハッ」

その時、天井に鎖が絡まり、両腕を吊された。片腕は貫かれ、両足は瞬時に出てきたノイズが拘束する。

「アスカ!」

「!」

緒川さんが躊躇いもなく、フィーネに弾丸を放つが、装甲ではない

肌であろうと、傷が治った。

「ネフシユタンの鎧は自己修復があつてな、おかげでこの通り。ソロモンの杖があればノイズも取り出せられる」

「どうして……………」

もう一つの完全聖遺物を見せながら、彼女は近づき、猟奇的に微笑み、そつと手を置いた。

「ひゃう!？」

「戦場でそんな悲鳴を出すな」

そう言いながら尻を撫でないで欲しい。だが気にせず、彼女は欲しかったおもちゃでも手に入れたように、こちらを見る。

「融合型聖遺物、いや、この場合二人と言うべきか？」

「！ まさか」

「ああ、立花響も手に入れるさ。この身体、完全聖遺物の制御も、彼女と君のデータがもとだ」

そう言われながら、肌など至る所触られる。いつもよりも酷い。

「最初は聖遺物のみ融合である君が有効的にデータを取れていたが、それと比較すれば立花響のデータはより貴重度が増した。異なる聖遺物同士の融合、人間と聖遺物の融合。それらの架け橋になる、君らはある意味において、アダムとイブだろうか？ イブとイブと言わなくもないが」

そう言われながら、一通り触った後、満足げにする。

「あ……………アダムと……………イブって……………」

何故か不自然に、身体から力が無くなつていく。その様子を見ながら、

「歴史の分岐点、君らはそのような偉業を成す人物だ。当然、手元に置いておくさ。二人とも可愛がつてやるから安心しろ。とくに、な……………」

いつもより酷く触ってくる、そう思い、身体を動かすが、思うように力が入らない。その様子にもうつとりと見ている。

どんどん意識も飛びかける。アームドギア、せめて魔本でも出せればいいのだが、このままでは無理だ。

「アスカっ」

「……………楽しんででもいられないか」

そう言い、二人を見た。まずいと、ギアに力を入れようとしたとき、上から気配を感じた。

天井が崩れ、それと共に拘束がゆるんだ瞬間、最後の力で左右のノイズを、スカートの刃を伸ばして倒し、その場に倒れる。そしてあの人が前に出てきた。

「貴様は……………」

「よお子」

「私をまだ、その名で呼ぶか」

風鳴弦十郎、彼が現れ、未来がこちらに近づく。

「にゃ、にゃんで……………」

「アスカ!？」

緒川さんはすぐ触られていた場所見ると、何かの穴を見つける。これはと睨むと、ニヤリとしながら、注射針を投げ捨てた。

「おいおい、いくらなんでもやりすぎだぜ?」

「それくらい大目に見て欲しいものだ、私はたびたび、目の前でそれを我慢していたのだからな」

そう言つて、身体が麻痺り、未来がオレを運ぶ。

「正直、女を殴るのは趣味じゃないが、これ以上は見過ごせないな」

「全く、それは私の所有物にするんだ。見逃して欲しいものだ」

そして語る、元々米国を追っていた情報部は、いつしか子である彼女が繋がっていて、なにかしら動きがあると感づいていた。

だから後は証拠と、陽動に陽動をぶつけた。保険として自分をここに置いて、

「相変わらず食えない男だ」

「それじゃ、大人しく話を聞かせてもらおうぞ」

そして地面を蹴る。粉々に砕けると共に、それに鞭のような鎖が振るわれたが、それを避け、僅かにあるでっぱりを掴み、天井にぶら下がると、人間業ではない。

完全聖遺物であるネフシユタンの鎧と融合している。そんな話を

していたフィーネに対して、司令は互角にやりあっていた。
苛立ち、大きなそぶりで攻撃するが、それも防がれ、拳をたたき込む。

人の動きじゃない。

「知らないでか!! 男の鍛錬なぞ飯食って映画見て寝る!! それだけだ!!!」

ふざけてるような動きの中、未来に支えられた状態、未来に寄りかかりながら、震える手を広げて、魔本を取り出す。これが薬なら、魔本が取り出してくれる。

取り出された魔本が、ギアや身体の動きを阻害する毒素を吸い取り始める中、こればかり本物の魔本より応用が利いて助かる。

「さて、話を聞かせてもらおうか」

「くっ………くそがああああああ」

また鞭を放ち、それを避け、また一撃を放つ。その瞬間、

「やめてっ、弦十郎くんっ!!」

その一言で動きが一瞬、一瞬止まった。

その瞬間、鎖が司令官を貫く、
はずだった。

「!!」 ちっ、アストルフオの魔本か!?

本のページが刺さるであろう場所を防いだ。だが鎖を使い吹き飛ばすと共に、司令官から何かをかすめ取る。

「しまっ、アビスへのカードキーが!」

「後の楽しみのために、体の自由だけ奪う薬を使ったのがいけなかったか………まあいい。後で回収するでしょう」

ノイズを大量に取り出す中、そして奥へと進む。司令の叫びを無視して、魔本のページで壁を作り、なんとか防ぐ。

「俺としたことが………」

「……………」

その間に身体の様子を見る。微かに動くし、麻痺が消えたように思

う。これなら戦える。

「これなら……………」

瞬間、槍を投擲し、ページの壁に集まっていたノイズを吹き飛ばす。その後はデュランダルが保管された場所見る。

「待てアスカっ、このまま行っても、お前が捕まるだけだ!!」

「だけど、響達が来るまでの時間は稼げます」

「!? それは……………」

「行かせてください、無論、倒してもいいでしょ? あの人の、了子さんから話を聞くために」

そう言われ、どうするか考えるが、歯を食いしばり、背を向けた。

「響くん達が駆けつけるまでの時間稼ぎだけだッ、他は諦めろ!!」

「はい、未来を頼みますっ」

そして未来の叫び声を無視して、奥の部屋へと走る。

デュランダルが安置されている部屋の前、狭い通路へとたどり着く、ここでも武器が一通り使いにくい。

「ふむ、考えていたよりも早く治癒したか。まあいい、楽しみが舞い込んだと思えばいいか」

「……………了子さん」

「お前もそう言うか? 龍崎アスカ」

そんなこと言うならセクハラやめて欲しい。

「正直そう言えない。あんたはクリスを傷付けたし、傷付けちゃいけない、二課の人達を傷付けた。だけど、それでもだ」

正直気持ちの整理なぞできてない。だけどいまはやらなといけない、槍と剣を構える。歌はいつでも紡げる。

「融合聖遺物、聖遺物の寄せ集めでありながら、聖遺物単体と同一の一品。お前と立花響の特性は、まさに歴史のパラダイムシフトに属する。だが一つだけ気になる」

「?」

「お前は何者だ? なぜあのような剣筋を持つ? ただの人間ではないのは明らかだ、あれは長年、ただひたすら剣を振るった剣士の剣筋

だ」

その言葉に、僅かに笑う。

「前世持ちの人間って言ったら信じる？ オレは前世で問題児、剣を無駄振り続けた子供だよ」

そう、いつもいつも暇な時間、無意味に近いほど剣を振るっていたんだ。その感覚も無くしていない。しかもノイズとの戦いのこともあり、経験は鍛えたんだ。

それに眉を動かし、口元をつり上げた。

「どうやら、お前は生かしたままその細胞一つ一つ可愛がらなければいけないようだ」

「やめてよセクハラ……………」

そんなやりとりは二課でもしてた。

そして剣と鎖がぶつかり合う。

鎖やノイズを槍で粉々にしながら、それでも再生し、すぐに攻撃に回る鎖。

だが、それに食いつくのは、ただの付属の剣だった。

「~~~~~♪♪!!」

槍を振るう中、いつしか槍を捨て、叫ぶように歌を歌う。

叫びの中、ついに顔を歪め始め、攻撃が激化し出す。

「もういいっ、消えろ!!!」

「ここで止めるッ、響達のためにも、ここで止める!!」

剣を振るいながら、一気に近づく。

それに驚き、その剣を振り下ろす。

「オレには司令官のような手は通じないッ、あとで文句は聞く!!」

その一降り、たった一筋の一閃。

背後から鎖が迫るが、それより早く斬りつけ、その後動く自信はあった。なによりここで攻撃を逃せば、次はない。

そう思い、渾身の一撃を放つ。

「……………」

歪んだ笑みで砕かれた……………

——フイーネ

「危ないところだった」

防壁を消して、それを見る。背中から無数の鎖に貫かれ、カランと手から砕けた剣が落ち、貫いたまま愛おしそうに近づく。

「しまった、殺してしまったか?」

身体をあちこち触れながら、即死かどうか確認する。やはり殺した。

「全く、お前の聖遺物は魔本による防衛のうえ、主体は槍とヒポグリフによる戦闘スタイルだと言うのに……まあ、お前が剣の装者なら、いまの一撃が届いていたよ龍崎アスカ」

ただ運が悪かった。もし立花響のように身体事態が聖遺物と適合していた。

風鳴翼のように、剣の装者。雪音クリスのように、自分の性格など知っていたら分らない。

なにより自分が防護壁を作れることも知らなかった。

はつきり言う、龍崎アスカに、決定打になる獲物が、

「付属品の剣のみ、それがお前の敗因だ」

何度も完全聖異物であるネフシユタンの鎧を斬り壊した剣が、最後に壊れていなければ、自分の負けだった。

砕けた剣を見下ろす。これは最初から防壁を使っていたらそれを砕いていただろう。技でそれが出来るのは先の魅力的な言葉が関わるだろう。本当に惜しいことをしたと思いつながら、ふんと翻る。

もしそれに気づかれていたら分らなかった戦い。だがもう遅い。

「前世持ちか、はあもつたいない。だがいいか、身体があれば問題ない」

後で死体は回収するため、通路の隅に置く。後々の楽しみだ。後はデュランダルの装置をいじりるため、静かに出ていった……

——???

親が死んだ。じつちやんだけになった。さすがに涙が出た。

悲しいから、何かしたいから、剣を振った。じつちやんは止めず、静

まった。

角みたくないものを生えて、雷を纏って、心臓の部分が紅く輝く宝石が埋め込まれていて…………

その手に剣のような巨大な剣が握られて、髪から尻尾のようなものが伸びていた。

「バカな、死んだはず…………心臓は止まっていたぞ!」

その言葉に、私は凍り付く。

アスカが、死んだ?

「うそ…………」

だっと思いま、目の前に現れた。いまアスカは目の前に、

『全員そこから逃げろオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

そう師匠が叫んだ。翼さんが私を捕まえて横に飛ぶ。

そして、アスカが、叫んだ。

『壊セ、滅ボセ、破壊セヨ!!
ブラッド・オブ・バルムンク
幻想邪剣・天聖失墜』

そう叫んで、辺り一面をなぎ払った。

——風鳴翼

「こ、これは…………」

カ・デインギルを破壊し、だがそれ以上に何かを秘めた力を持つ、血を吐き出しながら、その場でうなるアスカ。

建物の多くがその一撃で破壊され更地になり、彼はいつもの彼と違うなにかのようだった。

その姿は、まるで竜のような姿。

「あつ、はは…………あつはははははははは」

櫻井女史はその様子に狂ったように笑いながら、その顔を歪めた。

「バルムンク!! そう言うことかつ、くそがッ。このタイミングで新たな聖遺物に覚醒したか龍崎アスカ!!」

その言葉に、私達が立ち上がりながら構え、だがと何か考え込む櫻井女史。

「もしかすれば、あるいは、そうかつ!!」

二つの鎖をアスカに放つと、黒い闇に飲まれた。それに微笑み、静か

に鎖から電流が流れる。

僅かにうめくが、すぐに落ち着き、アスカは地面に降りた。

「ははっ………ははははははは、カ・ディングルのために、苦労していたが!! まさか二年の装者だけで、私の悲願が叶えられる可能性が出るとはっ」

「なに言ってるんだテメエはよっ!!」

その瞬間、櫻井女史に雪音がイチイバルを放つが、その弾丸を、アスカが全てたたき落とした。

「なっ………」

「ふむ、ちゃんと制御できたか、フアフニール」

「フアフニール?」

「ジークフリートに出てくる、悪竜の名だ。龍崎アスカはいま、その悪竜そのものになった、しかも、本来自分を殺す英雄の剣を持って」

紅い心臓から、紅い神経が伸び、目や口から紅い液体を流す。

その痛々しさに、立花は狼狽していた。

「死の淵に、まさか悪竜と化してでも私を止めようとしたか!? だが、私は二年間、龍崎アスカのフォニックゲイン並び、各方面のデータを取っていた。理性が無くなり、獣と化したこいつなぞ操ることなぞ動かないっ。デュランダール!!!」

その言葉に、デュランダールが現れ、それをアスカが手に取り、二刀流のように握り、こちらを、睨んでいた。

「さあ、デュランダールと竜殺しの魔剣っ。龍崎アスカ、それだけで月を破壊する主砲は完成するッ!!」

アスカは言われるがまま、二つの剣を天へと掲げる。それと共鳴するように巨大なエネルギーが集まる。黒と紅、二つの光。そして歌声。

「ぜっ………しよう………」

ただ歌声ではなく、様々な音が無理矢理奏でられ、一つにされた雑音に近い音が、世界に轟いている。それはまさに、竜の咆哮のように………

「ああそうだ!! 龍崎アスカが扱う大量の聖遺物に、完全聖遺物デユ

ランダルの絶唱による砲撃ッ、これならば月は安易に破壊できる。ああ、なぜ私はもつと早く、これに気づかなかつた……龍崎アスカを手中に収めるだけで、月を破壊できたッ」

陶醉しきった顔でそう言う中、大気が震え、空が紅く染まる。

それはまさに、月の破壊を歌う。悪竜の歌。

だが、そんなこと、

「そんなこと人のみでできるはずがないッ」

ただ一つの聖遺物での絶唱で、人によつては死に至る。それが完全聖遺物であり、また複数と言うことは、

「だな、龍崎アスカは壊れるだろう」

私の言葉に否定もせず、即座に答えた。それに私達は戦慄する。だが、

「だがどうした？　いまこいつは立花響の応用で、ネフシユタンの鎧ともリンクしている。それならば死にはするが、肉体は保てる。動く人形になるだろう。そうだ、むしろその方がいいだろう。こいつには新世界のアダムかイブにでもなってもらおう。悪竜の子なら、ぴつたりだ」

その言葉に、私達の意志は固まる。

「フイイイイネエエエエ」

「櫻井女史っ、私達は貴方を絶対に止め、アスカを取り戻すッ」

「そんなこと、絶対にさせないッ」

「来いッ、いまより相手にするのは、その名を轟かす、悪竜だッ!!!」

咆哮だけ轟かせ、雷を纏い、二本の剣を持ったアスカが、私達に向かつてくる……………

9話・歌

親が死んだ。悲しい。

一人は悲しい、だから考えないように逃げていた。いつも逃げていた。ゲーム、後輩の指導、学業、なんでも。

考えられることを考え、できることをして、やりたいことをして、現実を見ないように生きて、逃げ続けた。

そんな自分が英雄に成れるはずも、まして、彼女達と共に生きる資格は無い。

世界は、無音と純白で包まれた……………

——???

『アアアアアアアアアアアアアアアア』

悪竜の咆哮よりも轟くは、雑音のように奏でられる、数多の絶唱。それに鼓動するように、空に紅と黒のエネルギー弾ができあがりつつあり、世界を紅く染め上げている。

「まずは櫻井女史から救い出すっ、鎖を破壊しろ二人ともっ!!」

雷を纏い、剣を振るう。その一つはデュランダルだが、

(早いっ!?)

三人の連携はよくできていた。うまくクリスが弾丸を放つが、それを巨大なデュランダルを振り回して防ぎ、もう一つの魔剣。バルムンクで翼と互角に……………

(違う)

自分よりも早い太刀筋で、天羽々斬を捌いている。

剣の腕はアスカと言う素材が上であり、その上で巨大なエネルギー弾が完成しつつある。

『特大のフォグニツクゲイン反応、とんでもないエネルギーで形成されていますっ!! こんな物放てば並の絶唱どころの傷ではありませんツ、なによりここら一带余波だけで消し飛びます!!』

『エネルギー量から推測、月を確実に壊すエネルギー弾って……………』

『だそうだった、なんとしても完成する前に阻止するんだ!!』

通信機から入る声に、その黒と紅の球体を見る。まるでアスカの命を吸っているように、大きく、見るものを恐怖に陥れる。世界を紅く染め上げる。

「ダメ……………ダメだよアスカああああああ」

拳を振り下ろすが、闇が吹き出し、赤い液体と共に、響を捕まえて、大地へと振り下ろし投げ飛ばす。

「アスカ……………」

悪竜アスカはただ口から赤い液体と、光が鼓動するだけ。ファイーネや鎖、球体に対する攻撃全てを阻むことに、思考が止まりかける。

「立花止まるなっ」

「いま彼奴を助けたいなら動けッ!!」

だが、その痛々しい彼を見て……………

「……………できないよ……………」

首を振り、涙を流す響。

二人は攻撃の中で、悪竜が持つ両剣から闇があふれる。

「!?」

『A a a a a ツ!!!』

黒い波動が二人に放たれ、吹き飛んだ。

「くっは」

『翼ッ!!』

通信機より奏の音が響く中、すぐに悪竜の視線を感じ、千ノ落涙を放つが、その全てが身体に触れても弾かれる。

「なに?!!」

竜の咆哮と共に剣が振り回され、クリスが銃撃が放たれる。だが全て弾かれて、すぐに位置を変える。

「無駄だッ、悪竜を殺せる魔剣はこいつが持っている!! 何人もこいつを殺すことは愚か、傷付けることも出来ないッ」

「いやっ、まだだッ」

すぐに影縫いを放ち、悪竜を一瞬止めた瞬間、響が駆ける。狙うは、

「二つ!!」

その拳が鎖が埋め込まれた部分に、二つとも放たれ、鎖を掴む。

「チイイイ」

「そのままぶっ壊せッ」

クリスの叫びに、頭部に繋がれた鎖を引っ張る。

身体を覆うのは泥のような感触の闇、その衝動に繋がっているだけで、頭部に繋がっているわけではないのは、手応えで分かった。

「ゴツオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

アスカの身体を足蹴にしても、壊すか引き抜こうとするが、その時、アスカの両肩から、

「!? 立花離れろッ」

竜の爪のような腕が生え、それに捕まれ、爪が食い込むが、

「これくらいいいい、へいきッ、へっちやらああああああああ」

『A a a a a a a a a a a a a a a a』

それでも手を離さず、ふりほどこうとする悪竜。クリスと翼は視線で領き、了子を見た瞬間、

「悪竜ッ」

その瞬間、叫び声が放たれ、黒紅い雷が全体を覆う。

そばにいなかった二人は避けたが、響は、

「アアアアアアアアアアアアアアアア」

雷に撃たれながらも、それでも離れず、涙のように血を流しながら、けして離そうとしないが、剣が響へと刃先を向けた。

「離れる立花ッ」

天ノ逆燐、それを放ち、クリスは舌打ちして響を無理矢理回収する。

巨大な剣が、悪竜へと激突するが、

「!!」

その手応えがおかしすぎた。

まるで、地面に突き刺さったかのように、手応えがおかしすぎた。

『……………テンガイ、あきれうす』

そう竜の目で睨みながら、

『ガイボウっ、けいろーんッ』

その瞬間、翼は何かに穿たれたように、何かに貫かれた。

「がっは!!!」

!?!?!」

「翼さん!!」

「なっ、狙撃?! 空から!!」

そしてその時、何故か夜空に輝いているのは、

『?! 射手座?!』

オペレーターからの声から、それは分かった。

その射手座、本来射手座は矢を引き絞っているはずだが、その星座からは、矢は無くなっていて、輝きも無くす。

「これは……龍崎アスカ自身の絶唱? だが威力も何も……」

了子すら分からない事態を引き起こす中、剣を構え、霧が辺りを包み込む。

「!」

クリスは何かやばいと思い、すぐに辺りに銃撃で霧を吹き飛ばす。だが、

『解放ッ、じゃつく!!!』

瞬間、霧に触れていたクリスは、切り刻まれた。

「がっ、ああああああああああ」

「クリスちゃん!!」

翼と響はクリスの爆撃で助かり、クリスも霧を晴らしたおかげで、軽傷に済んだが、片腕が切り傷でズタズタに切られていた。

「二人とも!!」

「問題ねえッ!! まだ動くッ」

「あす……!!!」

そして悪竜の泥から紅い液体混じりながら、流れ出る。

目からも血を流しながら、三人を見ていて、その様子に歯を食いしばる。

「私達より、このままでは」

「彼奴の方が先に死んじまうッ」

「アスカ!!」

腹を貫かれた翼だが、内蔵などは無事と確認し、静かに目を閉じて、アスカを見る。

「……二人とも、私が道を開く。その瞬間を逃すな」

「!? まさかあんた」

「ここで歌わずッ、いつ歌う!!!」

そう叫び、翼は駆け出す。

二人が何か叫ぶ前に、デュランダルを居合いのように構えているアスカを見た。

『がいぼう………』

翼はその瞬間、時が、

(………止まった?)

『オキタアアアアアアアア』

剣筋が同時に三度、同時の突きが放たれた。

「!」

気づいたときにはすでにデュランダルが回避不可能の位置に同時にある。

(貫かれ)

「アスカああああああああああああああああああああ」

その一つを拳で碎き防ぎ、その通路から攻撃をギリギリにかわし、クリスが追撃に弾幕を張る。

「絶唱すら使わす気無しかくそッ」

「立花、腕は!?!」

「へいき………へっつちや………あつ、ううぐ………」

デュランダルの一撃を真っ向すら受け止めて、ギアが破壊され、腕があらわになり、血を流す。流しているだけで、碎けたりしてないだけマシと、思いながら前を見る。

「………くっ」

その時、ガツシャンと音が鳴り響く。

「!!!」

剣を天へと掲げ、剣同士ぶつけたアスカは、静かに、

『からだ、ハ、ツルギでデキテイタ………』

その瞬間、泥のように空で固まりに成りつつあるエネルギーから、雨のように、

「まずいつ、散れえええええええええええええええええええええええ」

剣のような斬撃が降り注ぐ。

クリスの爆撃よりも酷い音を鳴り響かせ、空を見上げながら、血を吐き出す悪竜。

固まりは出来つつありながら、装者達は、

「クリスちゃん……………」

クリスがむしろ雨に突撃して弾幕を張ったが、ほぼ直撃して落ちて、翼の方は、

『翼あああああ、返事しろっ、翼!!』

翼はその場に動かず、通信機から奏の叫び声だけが響く。

「つば、あああああああああああああ」

立ち上がろうとしたとき、片足に激痛が走る。黒と紅の泥の剣が、突き刺さっていた。

「あつつつ、ぐっ……………アス、カ……………」

「どうやら、これで終わりのようだな。まさかたった一人でカ・ティンギルの大変わりできる、それだけでなく、未知の力を解放するとはな」
静かに見下ろすのは、先史文明の巫女である、彼女だけだった。

「……………了子さん……………」

「もうすぐだ、もうすぐバラルの呪詛をうち破れる、これで終わりだ、やっつと、私の悲願が叶う!!」

悪竜と化したアスカは静かに剣を構え、響へ近づいていく。

「アスカっ、アスカお願いっ。お願い、アスカっ」

「無駄だ、完全に意識は聖遺物に奪われ、私と言う制御下にある。龍崎アスカはもはやただの人形だ。なんなら、私の下に就くのなら、お前の言うとおりに動かしてやろうか?」

そんなことを言われながら、響は叫ぶ。

「アス」

その時、振るわれたデュランダルは紅い血しぶきを舞い散らす。片腕の装甲が剥がれた。

剣が掠めただけで血が流れ、そのまま地面に叩き付けられ転がる。それでも悪竜の眼光は鋭く、響を見つめる。

「アス、カ……………」

響の眼前には、悪竜に成り、全身から血を流す幼なじみ。

「……………いや……………」

そのまま静かに剣を掲げ、

「こんな……………いやだよ……………アスカ……………アスカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

大学のキャンパス、スマホをいじりながら、外を見る。

「おーい、またFGOやってんのか？」

「いいだろ、好きなんだから」

「おま、ゲームするか剣道してるか、勉強してるかだな」

「そんなんだろ？ 大学生ってのは」

そんなたわい話をしながら、はあとため息をつく。

「ん？」

「どったの？」

「いや、なーんか呼ばれた気がしたけど……………気のせいだよな？」

そう言いながら、一度止めてから、窓の外を見る。その様子に、

「そう言えば、お前、同期の奴から色々一悶着あったろ？ いいのか」

「少し間置くよ、あれは……………自分が悪いって」

そう言いながら、立ち上がり、帰る支度をする。

同期と別れ、静かに帰る。

いつもの通学路、この時間はいつも通っているが、通っているという実感は無い。

早く帰り、ゲームするか、予習するか、食事の下ごしらえするか、剣を振るうか。

「機械人間か……………」

できること、やれること、したいことをする日々。別段困ることもない、何も気にする必要は無い。ただ淡々と過ごす自分が強く、熱心に前に進む者にとって是不愉快だったのだろう。

ただのヒートアップした結果だ。気にせず歩きながら、道路で止まる。信号が赤だった。

「お母さくんっ」

「信号赤よっ、少し待ちなさいっ」

向こう側に母親がいる子供、それを横目で見て、すぐに信号を見る。もうすぐ変わるだろう。

(そう言えば今度誰育てよう、イベントに備えてアストルフ育てるか、だいたい条件をクリアーすらから助かるんだよな、弱いけど、そこはサポートとして誰使おうかな……………)

などと考える。いつもそうだ、いつも、現実を見ながら見ていない。何かを考えて、考えないようにしている。それか、全く考えないようにしている。

と、信号が変わった。一步前へ、

(で……………で)

その時、真横を見た。ブレーキをかける、と思ったが、(……………は……………)

世界が止まった、こいつ、このスピードで止めてない。片手で通話してる、こちらを見てない、ってか、まずい。

マジか？ このまま跳べば避けられる。跳ぶしかない。

と、隣から誰か声があったのを思い出す。

そして世界が反転した。

「おいつ、ひき逃げだっ!! 救急車っ、早くしろっ」

「き、君大丈夫か!?!」

「ひ、ひでえ血が」

なんかすっげえ痛い通り越してる気がする。意識おかしくねえ？

声出ねし、やべ、死ぬなこれ。

……………別にいいか。

何かしたい訳でも無い、夢も何もなかった。

夢ってなんだっけ？ ってか、なんだろう。何か忘れてる。

ゲームのイベント？ 剣道部の指導役の変わり？ ああそうだ。

「……ども……ぶじっ？」

その時、オッサンがどいてくれた時、子供がいた。何か聞こえる、心配そうに涙目だが、無事そうだ。

「ぶじで……よかつ……」

近くに来たとき、ただそう呟いた。それだけだ……なんか呼吸できない。ダメだな……

視界が暗くなる、その時、ゲーム画面の携帯を見た。それを見て、心配して泣きそうな子供にどうすればいいか分からなかった。

先ほどまで考えてたからか、ただ印象が深かったからか、あの英雄が過ぎり、そのまねごとをして、微笑んだ。

笑い方って、こんなんでもよかつたか？

「……先生、患者の意識がっ」

そう言つて看護師が叫んだが、意識が虚ろ。身体が痛い、いつ死んでもおかしくない気がする。

苦しいとかも分からない、やっぱり機械なんだろう。

「……このバカ孫」

じつちゃんが先生と共にいるが、その顔は暗い。

ああ死んじゃうのかと理解した。

「ごめ……先、いく……」

「……」

なんか夢を見てた気がする。可愛い幼なじみとか、ドジな先輩とか、姉御な人とか、ツンデレな子とか、おい、女子度高いな。他いな
い？

そんで、なんかした気がするが……ま、いいか。

結局一人だ。ああいいさ。

一人だ、結局。一人でいいさ。

「先輩っ」

そう言つて、流れ込むように後輩や同期が入る。先生が招き入れ

た。

「ふぎけんなよつ、俺はまだ謝ってねえんだぞつ。死ぬんじやねえよ!!」

「先輩、俺、俺……………」

「全く、子供救うって、ゲーム好き極まりだな……………バカ野郎……………」
……………何が起きてる？

なんでみんないる？

自分は一人だ。ただ逃げていた人生だった。

そうだ、真つ白が嫌で逃げていただけだ。本心なんて、無かった。

「……………これがお前の人生で得た物だ」

じつちやんが涙目でそう言う。この人が泣いた所は見たことない。自分のために、涙を押し殺していた人なのに……………

「お前は心を閉ざしていた、けどな、それでもお前がしたこと間違いはない」

「お兄さんっ」

その時、知らない親子が入る。

あの時の子は、頭にネット？みたいなもんつけている。頭ケガしたのか、悪いことしたな。

「お兄さん大丈夫？ お兄さん」

「……………ごめんなさい、貴方のおかげで、娘は娘は」

涙ながら喋る母親は、娘が自分の身体に触れないようにたしなめながら、その様子を見ている。もう助からないと知っている。

子供の方には、言えないな。

「お兄さん、今度お礼したいの、けどすぐにお家に帰れないんだつ。お兄さん、また会える？」

それにみんな顔が曇る。やめい、バレるだろ。

……………

「……………ごめ、んね……………おにい、さん……………少しねむい……………んだ……………」

言葉喋るのに、ここまで力使うんかい。

「そうなの……………」

顔が沈む少女に、静かに、

「ご、めんね……………だけど……………君は、げんきになっ、てね……………」
いまのはよく言えた。

「うん、元気になるよ♪」

その顔を見たとき、俺……………オレは思い出した。

「……………ああ……………」

こっちの身体は動かない。構わない、こっちは終わった。
だけど、

「じっ、ちゃ……………」

「……………」

……………」

「あたらしい、じんせい……………だいじな、もん、まも、るよ……………」

「……………気を付けろよ、お前は、いつも変なミスをするからな」

穏やかな声だった……………」

「……………はい……………」

そしてオレは意識が途切れた。

——立花響

「……………アスカ」

その時、アスカが止まった。

辺りから、校歌が流れる。リディアンの歌、この歌は、

「なんだこの歌は、不愉快なっ。悪竜っ」

鎖を引き延ばす了子さん、だけど、鎖はびくともしない。

「なに？」

アスカは静かにしていた。いつの間にか、絶唱の雑音が消えて

……………」

その目から、涙が流れ、私の頬に伝わった。

「……………アスカ」

—— ???

「おはよう」

そう言うのは女の子の格好をした英雄アストルフオ。

「おはよう」

そう言ったのはオレこと、アストルフオの姿に似たオレだ。

「んじや、色々ありがとな」

「んくボクはなにもしてないんだよねく全部君が引き寄せ、つかみ取ったものだから。だけどこれだけは言える、大変だよ」

真剣に尋ねられたが、その額にデコピンする。

「誰に言ってるんだよ。アストルフオ……みんなに借りたもんあるし、なにより、あっちでも向こうでもオレは一人じゃないんだ。だから平気だよ」

そう言われ、アストルフオは嬉しそうに微笑んだ。

「うんっ♪♪ ボクはここから応援するよアスカ♪

みんなの傷も治ってるから、心配しないでねっ」

「おう」

そして歩き出すとき、

「これ持ってけ」

そう言って、背後から投げ渡された剣を受け取る。それを見つめながら、次にその場にいる人達に、アストルフオ含めた人達に頭を下げる。

「ありがとうございます」

「礼はいい、ってか、それはお前の方がいいらしい」

そう言われ、少し驚く。そしてフンっと言って、鎧姿の彼の騎士はもう興味なさそうにしていた。それと共に一人、大柄の男が現れ、静かに頭を下げた。

「バルムンクを頼む」

「はい、あつ、電気之恩恵ありがとうございますっ」

「……………」

大柄の男の背中から顔を出して、彼女は頷いてくれた。

そして静かに、聞こえ出す歌の道を歩く。

「……………」

そしてその先に俺がいて、片手を上げていたため、その手を叩く。

景気いい音だ。

「んじや、頼む」

「ああ、やってやるさ。今度は、龍崎アスカとしてっ」

——
???

誰かと誰かが手をたたき合ったような音が鳴り響き、球体が壊れ始めた。それと共に鎖を引きちぎる。

「悪い……………少し死んでた」

「あす……………か……………」

その様子に顔を歪める了子さん。ノイズを放つが、デュランダルを投げて吹き飛ばす。いつの間にかシンフォギアが、黒いギアが消えていく。

「バカなっ、なぜ、なんでだ!?!」

「……………未来達のおかげだ、後は、響達かな?」

静かに歌を聴きながら、響に手を差し出す。その手を握り合わず二人。

光が高まり、二人の身体は光り輝く。

「響、オレ達はまだ立ち上がれる、戦える、いけるか?」

「……………うんっ」

輝きが強まる、その光と共に朝日が昇る。

それは四つの光。

「……………傷は癒えた……………なら、まだ飛べるッ」

『翼ッ』

「つたく、テメエ後で覚えてろよッ」

そう言いながら、二人も立ち上がり、光が周りに展開されていた。

「そんなバカな!?! その力はなんだ、何を持って戦う、何を纏う!?! その力は私が作った物か!?! お前達が纏うそれは……………なんだッ!?!」

「シンフォギアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

その時、四つの光が空へと立ち上る。

その中で異質なシンフォギアは一つある。

一つは悪竜を討ち、魔剣へと昇華した剣。

一つは如何なる銀よりも眩い銀の剣。

そして機械のようなヒポグリフに、槍がついた幻獣を従えた、一人の華麗な女騎士。

もう完全に彼だと思ふ、髪の毛の伸びたがもう迷わない。

「行くぜっ」

真の聖遺物装者として、彼はいま武器を構えた。

10話・きせき

新たなシンフォギアは、まあなんかより女の子っぽくなったよ。内心キレ気味に、だが、二振りの剣を構えながら、殿を勝手にする。

「行くぜっ、了子さん!!」

「ふざけるなっ!!」

無数のノイズが町に放たれる、それを見たが、すぐに鎖が迫る。銀の剣がなぎ払い、了子さんを見る。

「アスカッ、町は任せてッ」

「応ッ」

剣を振るう中、完全聖遺物を纏い、振るう了さんは顔を歪めながら叫ぶ。

「逃がすものか龍崎アスカ!! 貴様がいればいくらでもやり直しは効くっ。例え死体でもな!!」

「もう一回、死ぬ気は無いですよ。あれ、死ぬって痛いっての、思い出しましたから」

雷鳴を纏う二本の剣、それを振るいながら迫るノイズを討ち滅ぼし、ほぼ瞬間に近いほどの速度で斬りかかる。

「!? なんだその剣はっ」

何よりも銀色に輝く剣は、その輝きだけでノイズを焼き払う。

悪竜を滅ぼした魔剣は、その魔力が呼吸するように放たれ、ノイズを吹き飛ばす。

混乱する中、二本の剣がネフシユタンの鎧を切り裂くが、

「この程度」

「自己修復だろ!!」

砕けた鎧を見るが、それでも速度が追いつかない。剣の速さが再生を越え、攻撃もありとあらゆる角度から迫るが、まるで見えているように避けられる。

所々で残像を残す、それに顔を歪め、歯ぎしりをする。

（こいつを殺せたのは、こいつが剣の装者が無かったからだッ。それがいま剣の使い手として前にいる!?! それだけでこいつ、化け物か

!!?)

ノイズの弾幕も全て紙一重で避け、幾度もなく鎖を放つが、それすらはじき、ノイズを背後から迫らせたが、ヒポグリフが薙ぎ払う。

雷鳴を纏う幻獣、飛翔するヒポグリフにも新たな武器が備えられていた。両肩に槍と盾のような砲台が備えられている。弾幕を張りながら、援護していた。

「バルムンクに雷を纏う力は無い!? ヒポグリフに備わっている武装もだッ。それはもうアストルフオの逸話からかけ離れているッ。今度は何んの聖遺物を引き出した龍崎アスカ!!?」

「聖遺物じゃない……………これは『宝具』ッ」

「宝具!?!」

雷が魔剣の鼓動と銀の輝きを纏う中、ほぼ飛翔するかのようには戦場を滑り、舞うように鋭い斬撃と、重々しい斬撃が交互に放たれる。

「英霊がくれた、彼らがくれた、世界を変える力だッ」

「あり得ないっ、この力は一体っ、お前は何者だ!?!」

目が竜のような瞳になる。悪竜ではない、これはセイバーである彼の力、半竜と言うべきか、成りぞこ無いと言うべきか。

そんな感覚の中、静かに見切り、叩ききる。

「くっ」

あの時負けたのは、剣がダメだっただけではない。逃げるために振るっていたからだ。

だが、いまは二人のセイバーから渡された剣がある以上、負けられない。ない。

二つの剣が、ネフシユタンの鎧を砕く。了子さんは顔を歪める。

「まだだ、デュランダルッ」

その声でデュランダルが了子さんの下に呼ばれると共に、ソロモンの杖を自分に突き刺す。

「なっ、なにをする気だ!?!」

その時、無数のノイズが、彼女の下に集まる。

「ノイズに取り込まれて……………」

「違う、ノイズが取り込まれてる!?!」

叫びと共に、町の方に出向いていたみんなも近くにいたので下が
り、構える。

取り込まれたノイズの力で、竜のような赤いものへと変貌した了子
さん。その一撃が放たれるが、ヒポグリフで空へと転倒、方角を変え
たが、爆発が凄まじい。

「了子さん……………」

「来るぞっ」

無数の鞭のような攻撃の中、翼さんとクリスが攻撃を放つが、びく
ともしない。

「無駄だ、所詮は欠片、完全聖遺物に勝てるものか!!」

その言葉に、翼さんとクリス、二人は何か気に気づくが、

「!」

片手で持つ魔剣が騒ぐ。

「そうか、あれは竜か……………なら、行くぞっ」

静かに、二つの剣を構え、地上すれすれをヒポグリフと共に飛ぶ。

「っ!! 来るか」

無数の鞭が放たれるが、ヒポグリフを信じ飛翔し、静かに剣を構え
る。

彼の魔剣、悪竜ファブニールを打ち倒した、伝説の魔剣。

「真名解放」

それは邪竜葬り、世界に今、落陽に至る。

「幻想大剣・天魔失墜!!」

いまの彼女の力に竜が加わっている、伝説に語られる悪竜を撃ち取
りし魔剣が放たれるが、それはデュランダルと言う高エネルギーと自
己再生能力が留める。

「だがそのてい」

「白銀の王命に従い、審判を下す……………真名解放」
「!？」

だが太陽よりも輝く銀の閃光が重なる。

「燦然と輝く王剣ッ!!!」

バルムンクを叩くクラレント、その二撃がネフシユタンの鎧を越

え、爆音を轟かす。

それと共に、デュランダルが吹き飛ぶ。

「しまっ、くそがあああああああああああ」

取り戻すために動くが、それを翼さんとクリスが止めた。

「そいつが切り札だ、正気を取り逃すなッ、つかみ取れ!!」

「ちえっせいっ」

「はいっ」

響がそれを掴み取ると共に、辺りの空間に力が満ちる。

全身から黒い闇が響を包むが、それを防ぐため、了子さんは攻撃を放つが、

「させないっ」

ヒポグリフが空高く飛び、槍で全て曲げて、攻撃の一部を貫く。

「邪魔をするなっ」

響のもとに、響の仲間達が集う。

そんな中、

「!?!」

ヒポグリフの背に、誰もいない。

——立花響

「響っ」

闇に飲まれかけている時、アスカが側に来て、一緒にデュランダルを握る。

「悪いがこれは聖剣だっ」

闇に飲まれながらも、それでも、

「オレはもう、闇に飲まれないッ」

そう私と共に、

「一緒に、了子さんを連れ戻すぞ」

その言葉に、

「響いいいいいいいいアスカああああああああああ!!」

一緒にいる人達と共に、

「この衝動に、飲まれてなるものかっ」

光り輝く聖剣を握りしめる。みんなと一緒に、

「その力、一体何を束ねた!!?」

「響き合うみんなの歌声がくれた、シンフォギアですッ」

「真名解放ッ」

聖剣デュランダルが振り下ろされると共に、ネフシユタンの鎧が共に消える。

その様子を見ながら、全ての力が消えたように、アスカだけ意識が途絶えた。

——???

「かくして、英霊を束ねる者と、歌を束ねる者達が物語を終わらせるか……」

そう言いながら、それは静かにその光景を見る。三人の少女達が、欠けた月の落下を止めに、羽ばたいていく。

「欠けた月の落下か、だが彼女らなら、いや、彼らなら問題ない」

そう言いながら、静かにその場から姿を消すために歩き出す。誰にも姿を見せず、彼は静かに、一人、宝具を使う、存在を見る。

「何者かがこの事態を引き起こしたか、まだ知り得ない事柄ではあるが、さすがにここまで力を引き出せば、聖杯や座が黙ってはいられないだろう。だが自分には関係ない、この物語は彼の者達が紡ぐ物語、か……」

そう言いながら、何かが飛翔するのを確認する。それは装者を追う、一人の戦士と幻獣の飛翔である。

「……………宝具、英霊、聖杯の物語。そして装者、聖遺物、血の歌姫の物語。交差しだした運命か……………理想通りであることを祈ろう……………」
そして静かに、その場から立ち去った。

——龍崎アスカ

出遅れた、少し気絶していたら、了子さんが自分は破壊しか選べないとしか言って、月の欠片落下を始め、響達はオレを置いて月の落下止めに出向く。

「ふぎけるなあああああああああああああああああ」

加速するヒポグリフ。悪いが、こっちは、

「こっちはすでに、月往復してるんだよっ。ヒポグリフッ」

駆け走る幻獣の咆哮と共に、三人を見つけ、そして、

「オレは、守るって約束したんだああああああああああ」

三人の歌姫の下へ、駆けつけた。

――立花響

月の落下を止めるため、私達は空へと飛んだ。

だけど、了子さんは何が言いたかったのかな？

『早くしないと、奪われるわよ………』

その意味だけが残ったままだった。

そして目を開けたとき、

「………ん、目が覚めたか」

「あす………か………」

そこにいたのは、あれ？

「少し休んでて、もうすぐ地上だ」

「………うん………」

いつもよりかっこいい、アスカだった………

こうして私達は無事、地上へ帰ることができた………

11 話・ルナアタック後日談

『一期ラスボスと対談』

「やああああめええええええてええええええええええ」

「いいじゃないの♪ もうこっちは死んだ身だからもう気にしないわ。龍崎アスカに着せたりしたかったことをここでする」

「呪詛とかそう言ったのは!？」

「それは本編並びにSSでやり尽くしたわッ!!」

その時、葉を撃ち込まれ、縄で手足を縛られる。

「こ、こりえにや……………」

「ふふふつ……………大丈夫、可愛がって、あ・げ・」

その時、櫻井了子の目には

「りや、りやめえ……………て……………」

可愛らしい、涙目のアスカがいて……………

カチツと、何か、スイッチが入った……………

「はっ、夢っ!？」

そんな夢を見て、飛び起きるアスカであった……………

『事件後』

「ううつ……………で、なんで監禁ですか？」

「すまない、今現在装者は行方不明、死んだことしておきたいんだ」

「いま色々な国が、この騒ぎでかき回ってるんだ。我慢してくれ」

「それは……………」

奏さん達がすまなそうな顔をして、仮本部にいる。傷が癒えていない者もいるため、なにも言えない。オレです。

「アスカ、未来になんて言おう……………」

「諦める、オレは……………メイド服レベルを着る覚悟はした」

「かつこよく言うなよ……………」

クリスにそう言われたが、きつとそうなる。

実はいま、完全に見た目アストルフオだ。髪が伸びた、三つ編みだ。おとおおいいいいいいいい!!?!?!

「はははっ、もうダメだオレの人生……………」

「まあともかく、服買ってきたから着てくれ」

「はーい……………」

と、衣類の中を見る。下着の方は見ないのだが、

「……………奏さん、なんで女子服しか」

「……………それしか用意しねえからな」

「奏!?!」

元相棒の叫びを聞きながら、彼女はなにも言わない。

『雪音クリスの苦しみ、だから』

私はここにいていいのだろうか、なんとなく輪に入ってはいるが、私のしたことは許されない。

ソロモンの杖の所為で、どれだけ犠牲者が出たか……………

「隣座るぞ」

「!? な、なんだよっ」

「いいだろ」

アスカはそう言い、勝手にしろと言って、静かにする。

しばらくその場に、隣にいてくれている。

(……………なんなんだよ……………)

それでも、嫌じゃなかった。

『雪音クリスの苦しみ、真』

目が覚めると、

「あっ、起きた? 朝食作ったから、少し待ってて」

目の前に美味しそうなポトフの鍋を持ち、可愛いミトンをつけた。女の子が微笑んでいた。

エプロン姿、ナフキンも可愛い。三つ編みを軽く首に巻き、慣

れた手つきで料理して、鼻歌を歌う女子。

「……………」

アスカをとりあえずはたいた。周りにいた響達も驚く。

「な、なににするのクリスちゃんっ」

「るっせえ!! てかお前どうしてそうエプロン似合う!! フリフリの着てる!? 女子力高いんだっ!!」

「な、なんでオレ怒られるの……………」

『女子力の高さ』

風鳴翼の部屋

「あーまた飲みかけ多い。全部飲んでからって言っただろ、ラベルも。気を付けなきゃだめだ。あー色落ちする物が纏まつてる……………」

「すまない……………」

食堂

「……………」

食器を洗い、次のご飯の用意をしながら、自家製の浅漬けなどの様子を見る。

「あつ、ウチの平気かな? 一応気を付けているけど……………みそと漬かけ物……………乾物も、雨ざらしにならないように、家の中でしておいたけど……………」

司令部仮

「……………」 あつ、藤堯さん、友里さん、茶菓子と飲み物補給しておきました。ゴミがあつたら言ってくさい」

「あつ、悪いわね」

「あ、ありがとう……………」

とある場所

「いたつ、あー唇切っちゃったよ」

「あー動くな響。使っていないリップあるから、やるし、塗るよ」
「うーごめんアスカ」

立花響の部屋

「……………はい、ボタン付いたよ響」

「わくありがとうアスカ♪」

「……………」

裏

「おいなんか彼奴の女子力高すぎないか!? 私ら裁縫もなにもできないぞっ」

「あー彼奴ああいう感じだぞいつも」

クリスが叫び、藤堯も一瞬女の子にしか見えなかったと苦笑する。奏は慣れているので遠い目であり、もう翼のために女子の衣類の扱いも覚えたらしい。

静かにコーヒーを飲む司令官。その様子を見守る。

「主婦か!? ってか、本当に彼奴は男か!? くっそくっそなんであたしはこんなイライラすんだよおおおお」

『再会』

夕焼けの中、やっと再会して落ち着いた未来。響と抱きしめ合いながら、それを解き、次にアスカを見る。

「アスカ……………アスカ、髪が」

「うん、一部伸びてるんだ。あとでき」

「切らないでね」

「いやき」

「切らないでね」

「い」

「切らないでね」

土下座して、着せ替え人形になる変わりに、三つ編みの女子力高い姿だけ勘弁してもらう。後日、リディアンの友人達を含め、彼の黒歴史は増えた。

『やっと……………』

大切な人達が戻ってきた。いまは部屋で、仲良く三人で休んでる。

「未来く未来く♪」

「もう、なくに響」

「えへへ、呼んだだけだよ」

「もう……………」

そんな感じで、親友の一人はそう言いながら、私は髪を梳かす。

「可愛いよ……………アスカ」

「ウン、ウレシイヨ」

もう一人の幼なじみも戻ってきて、私はいま彼女の髪を編む。響も編む中で、嬉しそうに笑う。

「なんだか幸せだな……………やっぱり、未来は私の日だまりで、アスカはなんだろう？ 絶対に隣にいる人かな？」

「もう響ったら……………けどそうかも知れないね」

アスカはいつも響か私の隣、そう思いながら、

「あつ、リボンが曲がってる。直すねアスカ」

「ウン……………」

可愛い、リボンをつけたローズピンクのゴスロリ。やっぱりアスカは似合う。響も嬉しそうに腕に抱きついていて、私も抱きつく。

「それじゃ、撮るから、動かないでね」

「はーいっ♪」

「……………いっそ殺せ」

「増やすよ」

「は〜い♪」

少し本音が出たけど、もう大丈夫。アスカの笑顔は何枚も写真に納め、私達は幸せな日々を過ごしています。

今度は何が良いんだろう。アスカは可愛いから……………響といっぱい話し合って、そして着てもらおう。私はいま、幸せです。

『能力確認』

「モードレットの剣に、ジークフリートの魔剣……………アストルフオの宝具だけじゃないよな。雷は……………フランケンシュタイン？」

自分の能力把握しながら、家を片づけつつ、考え込む。

「ん〜オレの知ってるアストルフオであって違うって言ってたから、アストルフオはアストルフオだろうけど、何かが違う……………まさか、

ジャックの能力使えるのか？ できれば本人に会いたいぞ」

エースです、満場一致でエースだろあの子。ただ格好は可愛らしくしてあげたい。ああいう子にこそ、可愛い服着せるべきだ。

後は、欲しい能力的にアタランテやケイローンだろうか？ 仲間と言うカテゴリーに収まらなかったらだが、収まるんなら、オレはあの宝具も使えるのだろうか？

「盾っぽいヒポグリフにあったけど、あれモードレットのサーファーっぽかったし……謎だ」

そもそもオレ自身だ。明らかに、一度死んだと思ったら、戻って、ここに戻ったぞ。なんだこれ？ 輪廻転生大丈夫か？

「うっわああ……少しあの世界っぽいぞ、嫌だぞ、あの世界の理はノイズよりも軽く命飛ぶ」

この身体は剣でできてないよ。アストルフオだよ。三つ編みは悲しみと共に切り落としたよ。

「あく会ってみたいのは借りてる人達除けば、エミヤ達と、やっぱりジャックだよなくアストルフオが一番に会いたい。文句言いながら、ちゃんとお礼言いたい」

黒髭とかは見かけた瞬間デストロイしなきゃなとか考えつつ、やはり色々、自分のことを考えないといけない。

一度何もせず、あの感覚に捕らわれないか、頑張りたいのだが、「まだまだやることいっぱいだよ、アストルフオ。よろしく頼む」

どこから「OKっ♪」と聞こえてきそうな気がしながら、明日の献立考える。

いまはゆつくり、傷を治す……色々な傷、

「……男性服が、無い!?!」

奏さんに処分されたらしい。

「ふっざけんなあああああああああああああ」

深夜の夜、俺の叫びは隣を気にする程度だが鳴り響く。

『あれやあれ』

渋々、買い物するしかない。男子の服を着るんだが、どうしても女

の子っぽい。やっと三つ編みぶった切ったのに……

「ん、なんか騒がしいぞ」

何かの追っかけが右往左往している。

興味ないので動いていると、

「あつ」

サンングラスの女性を見つけてしまった。

「悪いわね、助けてもらって」

「いえ、いいですよ」

知り合いにも似た人いますしと思いつながら、まあ考えずに、隠したりして、行きたい場所、ホテルの道を教えた。

「助かったわ、少し下見したかったただけなのに、つい見つかってしまって、困っていたの」

「そうですか、よかったです」

なんかこの人、キリつと言う擬音がつきそうに、しっかりしている。ウチの子らにも飲ませたいね爪の垢。

そんなことを考えていると、もう少しと時に、

「そう言えば、貴方はいいの？ 私のこと」

「ああ自分、歌とか、モデルとか興味は無いですし。やっぱ、プライベートはプライベートだと思いますからね」

そう言うのと、少しだけ不機嫌そうにむっとなるが、気にせずに案内する。

そしてもう人気のない、ホテルへの道へとたどり着く。

「ありがとう、ここまでくれば問題ないわ」

「そうですか」

そう言って頭を下げ、お互い別れるだけだが、自分の認知度が低いのは少しだけ気にくわないようで、

「これはお礼よ、私のファンにしてあげる」

そう言ってそっと近づき、ほっぺにキスした。

その瞬間、真っ赤になり狼狽し、その様子に悪戯に笑い、すつと去っていった。

「だ、誰だったんだろう。あの人……」

まだ頬が赤く、そのまま去ることにした。

「ママ、ごめんなさい。少しファンの人に見つかって、その後、例の融合型と偶然会ったわ」

『なんですか？』

「問題ないわ、別に向こうはただのアイドルか何かと思ったようだし、写真通りの女性だったわ」

『そうですか、彼女に対して情報は少ないのですから、気を付けてください』

「ええ、そうそうへまはしないわ」

そう言って通話を切り、静かに微笑む。

「以外とその辺にいる子みたいね、ただの挨拶に、男の子みたいに真っ赤になって。まさか、そう言う趣味なのかしら？」

そう苦笑しながら、くすつと笑う。

こうして黒歴史と言うものは生み出されていく……

フロンティア事変

12話・新たな事件と異物の戦慄

それはとある空間であった。

「やあ」

「……………」

それにとつて、はた迷惑な存在が話しかけてきた。おそらく、今回の仕事にも手を出さないし、何もしないだろう。唯一、出歩く切っ掛けになってくれたなと思わないだろう。

だから静かに剣を振るう。当たらない、斬れたのは、魔術のみ。

「おおつ、さすがだ。術式まで斬られてるよ」

「……………」

それを無視して、静かに歩く。

その様子を見ながら、やれやれと思う。

彼の思うとおり、何もしない。せいぜい、繋がりぐらいは強めてあげようと思わないし、自分はまだそこまで彼に思い入れがない。

それに、彼で無くなった方がいいのかも知れない。彼の為に、彼の物語のために。

そしてのぞき込む世界を、美しき、血の歌を歌う、歌姫が住まう世界を。

「だけど、私はハッピーエンドが好きなんだよな……………」

そう静かに呟いた。

——龍崎アスカ

ルナ・アタックと呼ばれる事件から三ヶ月後、自分は検査を受けていた。

いまは出たデータ全てを見直している。それもそうだ。自分について、話さないといけない。

「はあ、前世の記憶、Fate／シリーズと言う空想上の英霊達の力か」

話をするのは風鳴弦十郎司令官。一応司令だけには話しておいた。自分が振るう、二本の剣や、アストルフオと言う存在。色々話し終えて、少し考え込む。

「話しても、オレがなんでアストルフオの姿に似ているか分からないけどね」

「だけどと、付け加えて、

「アストルフオと信頼していたり、友達、仲間、縁がある者達である武器は使える。宝具。英霊が英霊としての証である、逸話の結晶」

「ジークフリートの竜殺しの魔剣、モードレットが父、アーサー王の宝物庫から持っていった銀の剣、フランケンシュタインの雷、アストルフオの宝具。」

「自分はそれらを使える。もしかすれば、

「アキレウスの恩恵もあるし、下手をすれば関わった英霊だと、アタランテ、ジャック・ザ・リッパーや、ケイローン。貸してくれそうなのはな……………」

「そう考えるが、司令が少しだけ顔を歪ませる。

「欠片の聖遺物の中に、アタランテに関する物があつたが」

「うわっ……………」

「それ連動するとジャックの宝具にも目覚めるだろうか？　そう言えればアタランテにも会ってみたいな。」

「現実逃避はここまでだ。」

「ともかく、オレに関することは話したよ」

「ああ、これで氷解した。前世の記憶か……………」

「コーヒーを飲みながら、連絡が入る。どうやら検査結果が出たようだ。もう動いたりしても問題ない。装者として連携特訓は出ていたが、やはり負担が多い。」

「君は月まで全力を越えて出向いて戻ったからな。むしろ、三ヶ月で装者として本調子になったのは早いだろう。話しによれば、一度致命傷で死んだんだろ？」

「そう言えば、悪竜化が関係あるのかな？　傷は無かったし、ジークフリートの身体の恩恵も発動したのかな？」

「それも調査中だ。仮説では、バルムンクの刃についた、悪竜の血による絶唱の恩恵だろうか……………」

そう言い、部屋から出て、話しながら別れるところまで話す。

「あの、このことは」

「響くんを始めとした装者には内緒か？ それは心の整理か？」

「オレ、これでも大学生ですよ。酒は飲んでましたし……………正直、また人生スタートは戸惑いました。壁は出来ないと思いますが、やっぱり色々……………」

いやまさかとは思う。だけど……………

『お願いお願いお願い〜これ着てくださいっ♪』

『わーわーわーお年玉くださいわーわーわー♪』

は、無いだろうが、勉強に泣き付かれる可能性は高くなるだろう。ただでさえ高いのだ、嫌だ。

そんなことで、このことは司令官にだけ伝え、風鳴翼のコンサートに出向く。

「響とクリスは、ソロモンの杖の輸送か。間に合えばいいが」

そう思いながら、すでに司令とは別れていた。

「ごんちは」

「あつ、アスカ」

「未来、と、えつと……………響の友人の人達ですね」

「はいっ」

「えつわ〜ほんとH!!」

「女の子みたいっ!!?!」

現在リディアの女子服です、慣れている自分が怖い。いま特別席の部屋に集まり、様子を見に来た奏さんが入る。

「おっ、アスカ。ついに女になると決めたか」

「違うよっ、翼さんの関係者で男性は困ると思ったし、この場でオレだけ男だと浮くからだよっ」

そう言いながら、あつははははと笑う。もう嫌だ。

ニーソックスの替えの替えとか、色々と気を遣うんだ。もう嫌だ、

思考が女子になりつつある。

そう考えていると、そつと後ろからはい上がるように現れ、肩を叩き耳元で、

「このまま肌つやのケアもしようかアスカ？」

「未来っ、未来は敵だね!!? 信じてたのにつ 最後まで信じているのにつ」

微笑む幼なじみに、それでケアしてないのと三人の女の子が驚き、ほっぺとかさわり出す。

奏さんも触ったあと、翼さんの様子見に出向く。さすがに一曲歌いたくても、いまは限界が先に来るらしい。

元々は装者としての副業だが、副業として見ていない翼さんのため、いつでもサポートできる位置にいたいと言う本音と、一緒に歌いたいと言う本音がある。これは黙っているべきか、しやしやり出るべきか。

(これは緒川さんと相談だな……………)

「ま、マジでこの肌つやは天然物!？」

「アニメなの、男の娘は天然物はアニメなの!!? この世界はアニメでできていたツ!!」

「本当にぶにぶにです……………」

「ホント、これだけはずるいよ……………」

すいません、現実逃避してます。いまだ変わらないですはい。

変なところ以外は無視しつつ、海外のアーティストと歌うらしいので、携帯でその情報を見る。

「マリア・カデンツアヴナ・イヴか」

そしてコンサートが始まる。

響達から連絡無し、司令官から連絡無し、いま現在の現状は、

「……………アイドルって、テロ宣言? しかもあれは」

「アスカ……………」

二人の歌が終わった後、マリア・カデンツアヴナ・イヴはテロ宣言と共に、操られるノイズを取り出した。

「マリア・カデンツアヴナ・イヴが装者?! しかも GANG ニールの欠片からの」

纏うギアは GANG ニール。響と違い、マントを羽織っていて、槍も持つ。

要求内容も滅茶苦茶であり、何故か観客も離してくれた。翼さんを除いて…………

「向こうはどうも、翼さんが装者と知っている。中継はまだされているから、装者として翼さんは戦えない」

「ど、どうするんですか!?!」

「ともかく君らと共に、観客を外に出すのがオレの役目だ、後はどうとでもなる。ってか、向こうは装者の力だけは警戒してるから、緒川さんに任せるしかない」

緒川さんなら思いついていることを実行するだろう。ならそれを待つだけ、いま響達は向かっているだろう。

ソロモンの杖、ノイズを操ってるのは十中八九それしか無い以上、輸送している響達に何かあったのだろうか、緊急事態になっていないだろう。

なら響達は無事だが、ソロモンの杖は奪われている。そして響達のことだ、いま全力で向かっている。

「それに、翼さんは生身でも強いよ」

ここ最近、剣道で勝てないからって、よく稽古つけてるからねとは言わず、観客達と共に、一旦は外れる。

—— ???

「……………向こう側は動いたか」

それは静かに暗闇から這い出る。

静かに、誰にも気づかれずに……………

「ならば我もまた、動くとしよう……………」

そしてまた暗闇へと消え、機を待つ。

—— 龍崎アスカ

緒川さんが電気を止め、中継を止めたことにより、動けるようになる。

急いで乱入するが、乱入者は自分だけじゃない。響、クリスもいる。そして、他にも装者がいた。

「響っ」

何故か呆けている響に、丸鋸のような物が迫る。時折思うが、シンフォギアってなんだ!? 女性しかいないのか!? 昔の人は何を考え
ている!!?

「ヒポグリフっ」

ヒポグリフが持つ盾を取りだし、ヒポグリフ事態で防ぐ中、響の方を見る。

「アスカ……」

「?」 響どうした? まあいい、ともかく話聞くためにも、いまは戦うしかない。悪いが手を貸してくれ、あの子達は本気だ。本気の子を無傷で捕まえるには、戦力が無きや無理だ」

そう言ったとき、丸鋸の子がこちらを睨む。黒いツインテールのよ
うな、ピンクの装者だった。

「貴方もその人と一緒に偽善者なんだね……そんなこと、平然と」
「偽善? 悪いが響と違ってオレは偽善だ」

「!?」

平然と肯定すると、もの凄く睨まれた。仕方ない、こればかりは、
「オレはやりたくないからやらない、やりたいからやるって人間だ。
だから、無傷とは言わないが、三人ともここで捕まえるっ。この力は、
争うために使いたくないんでね」

「アスカ……」

後ろからその言葉を聞く響。クリスと翼さんは呆れながら、側に来
る。

観客席から見下ろす三人組。うち二人は睨んでいるが、気にも止め
ない。

「二人とも冷静になりなさい」
「アスカ」

「分かったよマリア」

「君達は……………」

「イガリマ装者、暁切歌!!」

「シウルシヤガマ装者、月読調ッ」

こうしてフィーネを名乗る組織が、目の前に現れた。

だが、

「翼さん、クリス、こっちは事実上5人だ。ノイズはヒポグリフに任せて、彼女達を」

「心得た」

「任せな」

「響……………頼む」

「……………うん」

全員が戦闘態勢に入った。

その瞬間、死を感じた。

無様でも何でも良かった、その場から勢いよくオレだけが飛んだ。オレだけに放たれた攻撃を避け、振り返る。

「? テメ、なにし」

その瞬間、ヒポグリフが止まった。

「えっ」

「デス?」

「?」

「これは」

ヒポグリフはその瞬間、首が切り落とされ、その場で壊れた。だけならばいいが、アスカ、自分がいた場所も斬られていた。

ヒポグリフに斬撃が最初に当たって、少しでも後れていなかったに、死んでいた。

「……………だれだ」

三人なぞ無視して、それを見た。

がしやん……………がしやん……………と、暗闇からそれが現れた。

「な……………んだ、あれ……………」

「!? 全員気を引き締めろッ」

「!!」

「デデス!」

「マリア!」

「二人も気を抜かないッ」

それは死だった。それこそ、死と言うモノだった。

「…………………………なんで」

それは大剣を持つて、静かに現れた。

それは静かに、死と言う福音を鳴らしながら現れた。

それは、静かにこちらを見た。

「なんでグラランド・アサシンがここにいるんだよッ!!」

その言葉に肯定するように、骸骨から青い瞳がのぞき込む。

「龍崎アスカ……………首を出せ」

そう言つて、一人の偉大なる暗殺者が、一人の装者へ死を向けた

……………

13話・死の顕現

「……………」

それは大剣を担ぎ上げることせず、静かにこちらに歩く。それだけで汗が止まらない。

ヒポグリフは逃げるように指示したのに、かばったようだ。本当にかと自分を疑うが、いまそれを気にしていたら、本当に犠牲になってしまう。アームドギアはまだ治ると心の中で、ヒポグリフが叫ぶ。

だから逃げろと、

「響クリス翼は来るなツ、こっちだグランドアサシン!!」

こっちはもうマリア達、三人の装者に構っていられない。遠くへ走る様子を見ながら、ほうと感心していた。

——???

「感心だ、己が命より、彼の者達を優先するか。せめてもの手向け、いだろう」

その言葉に、飛ぶアスカへと剣を掲げて、

(まさか)

「ふん」

届いた。

一降りの剣は会場の壁も何もかも真つ二つにして、それを切り落とす。

音などしない、彼は暗殺者なのだから、瓦礫の音も静かに落ちた。

周りの少女、装者達は動きたくても動けない。

怖い、死ぬ。その二つが頭から離れない。

モニターからも息を殺すオペレーター達がいる。モニター越しでも殺される。そう本能が確信するからだ。

「……………避けたか」

「あつ……………ぐつ……………これで避けたじゃない……………」

手から肩までの皮が剥がれ、血が流れる。ギアも粉々に砕け、剣も持てない。バルムンクも砕かれた。

「なんでだ、なんでグラウンド・サーヴァントが顕現してるうえ、これは、本物!」

「そう思いたいやも知れぬが違う、我はいまはただのアサシン。異世界であろうと、我がそうそう顕現することはできぬ故に」

「……………十全じゃないのに、これか」

そう言いながら、アスカを影で覆うほど側に来た。

足跡も何も聞こえない、本気ではない。彼の本気は知っている、物語の中であり、現実で知ってはいないが、それを越える実力がある。それが分かるからこそ、死ぬとしか思えない。

「ここなら外さぬ」

「……………」

燦然と輝く銀が手元にあるが、それを強く握り、僅かな生のため、振るう気だ。

その様子を見て、彼はますます惜しいと思いつつ、依頼を全うするため、剣を握る。

「これで終わりにしたいものだ……………首を出せ龍崎アスカ」

その瞬間、大地が削れる。大きく、それはもう、クレーターのよう削れて消える。

それには、少しばかり手を抜きすぎたと、己を恥じる暗殺者。

「いまの剣撃は、攻撃するためではなく、生きるために飛ぶためか」

剣の一撃で放射された勢いのまま飛び、剣閃を避け、頭上にいる。魔力放出により、剣を噴射口にして飛ぶ。暗殺者は静かに動くだけだった。

彼は動かない腕はそのままにして、静かに銀の剣を掲げる。

「燦然と輝く王剣ツ!!」

銀の一撃が放たれるが、片腕を静かに上げて、防いだ。

「……………へ……………」

弾かれた衝撃で地面に落ち、バウンドするが相手は見ている。それは手をひらひらさせ、対して効いていない。

あり得ない絶望が、目の前にいる。

「さすがに侮っていた、か……………本気でやらねば非礼であろう」

響の拳を離す中、静かに剣を引きずりながら、他のノイズは睨んだり、近づかれただけで消し飛んだ。

「龍崎アスカ、あまり多様したくは無い。が、一応は汝の不憫さ、理解はしている。必ず、首を出せと言ってから殺そう。グラント・アシンであり、山の翁としてな。正直、我の流儀に反していること故。せめて辞世の句を考える時間はくれてやる。無論、抗う時間もな」

そう言って闇の中にとけ込む。

グラント・アシンである彼から、命を狙われた。

「やべ、普通の人なら発狂してそう」

そう思う中、ノイズが迫る。

「うおっ」

「アスカっ」

翼が斬り、クリスが撃つ。気のせいか、ギアが重い。

『ぎ、ギアの適合率が下がってます。これは』

「毒か？ なら魔本で吸い取れるはず」

そう言つて、動く手で魔本を取りだし、ページが舞い、全員に張り付くと、何枚か黒く成り、消し炭になる。

どうやら、空気中でギアに害あるものがあるらしい。

「これは、どうするか………三人でいけるか？ オレは本でサポートするしかできない………」

腕はけて動かさず、骨まで見えてもおかしくない。ギアのおかげでそれは防げたようだ。

「分かった、なるべく焦らず、急ぐっ」

響を下に、三人の絶唱を纏める。

そのサポートの中、誰かの視線を、と見られてる見られてる。

「意外と勘がいいな」

「見物か」

グラント・アシンがそう言つて、私の後ろから剣を肩に置く。やめてくれ、それで肩たたきなんて酷すぎる。

「私がこういう性格なのは知っているだろ？ たまには実況つても

もしてみたいしね」

「……………」

おっと、そんな話をしていると、そして三人の絶唱の光が天へと上り始め、新たな物語の幕が上がる。

「私としては、彼は菌車の一つだと思っただけど」

「それについては同感だ、だが、あれがそう下した以上、サーヴァントたる我らはそれに従うのみ」

「真面目だね、キャスターとアサシン、私達しかいないじゃないか」

「……………その代わりに、我が動きやすいがな……………また境界へ戻ろう」
「彼を本気で殺すのかい？」

それに、

「我が洗礼をはね除けられんのならな」

そう言つて、消える。

「……………そう、か……………そうかそうか。確かにそれくらいしなきゃ、自由なんて与えられないのか。君が出てきた理由は少し分かったよ」

満足そうに微笑んだ後、花だけがその場に残った……………

—— 龍崎アスカ

「……………」

腕の傷は特性の機械で覆い、何日かすれば癒える。だが、精神がま
ずい。

精神薬を飲みながら、静かに呼吸する。汗が流れ、視界が定まらな
い。何人かのモニターを見た者達は、気を失った人もいる。

それに、命を、狙われた。

心音が爆発しているのが分かる、あれ、オレなに言ってる？ 分か
らない分からない分からない分からない分からない分からない分か
らない分からない分からない分からないワカラナイワカラナイワカラナイワカ
ラナイわかかかかかかか

「アスカ!!」

その時、何かがオレを包んだ。

奏さんが、静かに抱きしめていた。ダメだ、いまはそれにすがりた

い。

呼吸が定まず、荒い。女性の胸の中とか考えていられない。オレは、あの、アサシンに命を狙われている。

「大丈夫、悪い……………悪い……………ほんと、悪い……………」
なぜか奏さんが謝りながら、緊張の糸が切れて、意識が飛ぶ。

——風鳴弦十郎

「ふう……………はああああ……………」

呼吸を整え、やつと本調子かと、歯を食いしばる。

あれほどの殺気、いや死を自然と放つ存在。初めて見た。

何人か動けず、俺ですら指示を飛ばせられなかった。その所為でアスカは傷を負い、装者達の心にも傷を負った。

アスカが殺されそうだったのに、何もしなかったという事実。いま翼達はシャワー室で汗を流している。正直俺もこの冷や汗を流したい。

「……………ギアの適合率の低下に加え、マリア・カデンツアヴナ・イヴ、フィーネなる組織の探索並び、本当の目的を知ること。それとアスカを狙う、骸骨の剣士」

「……………何者ですか？ アスカくんは、グランド・アサシンと言ってましたし、印象的に、知っていたようでした」

「……………ともかく一日置く、本人も喋るだろう。問題は装者達や俺達だ」

仲間を見捨てかけた。これはいまだに飲み込めない。アスカはなにぶん、多くの者達と仲が良い。モニター越しとは言え、ただ見ているだけ過ぎた。

奏が良い例だ、彼奴が一番響いている。

そして眠れぬ夜が来る。俺は静かに、構えるしかないのか……………

——龍崎アスカ

恥ずかしい、奏さんに抱きついたまま寝てしまった。何歳だオレ。精神入れたらそこそこのオッサンだぞ、奏さん19くらいだぞ。

司令室では多くの人達がいる中、オレは、

「オレは生前、前世の記憶を持って生まれた」

とりあえず、女の子かばって死んだこと以外、普通に話す。あれはただの事故だしね。気にしていない。

「んで、ゲームの中にいる、アストルフオと同じ容姿で、今に至る」

「そんなことが……」

翼さん達は驚く中で、響、頼んで未来も呼んだ。もう隠し事したくないからだ。

未来は事件のことを話だけで聞くが、多くの人達の顔を見た所為か、青ざめて待っていた。

「…………そのゲームは、英雄を、サーヴァントって言う使い魔として、使役して戦う魔術儀式に巻き込まれた青年から、色々な物語がある。全部の共通点は、聖杯、英霊と言う名の、歴史に名を刻んだ人達だ」
何故その話を今と言うものは、いまはいない。顔色を見て、関係ある話と全員が分かるからだ。

「始めに言っておく、オレが使う、アームドギアやこの容姿が、その英雄が使う必殺技、宝具と言う、その英雄が英雄である証の武器なんだ」
「!？」

司令を除く誰もが驚く中、アストルフオはゲームの中で実在していると言いながら、それに加えて、あの話、夢などにアストルフオが現れる話もした。

あれが現実なのか、ただの妄想なのか分からない。だけどいまは現実として捉えて話す。

そのアストルフオが関わった物語で、関わった英霊が持つ、武器を、自分が持っていると伝えながら、次の話をする。

「本題だ、あれの正体だ」

山の翁、ハサン・サツバーハ。暗殺教団の教主。

歴代の中で長い間、多くの暗殺者が引き継ぐ名であり、それと共に、多くのハサンが存在する。

だが彼はそれとは全く違う。

彼はハサンを暗殺するハサン。自分達の信じる道を踏み外したハ

サンを殺すために、完全に表からも裏からも姿を消した、存在すら不明の暗殺者。

まさに伝説と化した暗殺者を断罪する、最初で最後の、ハサン。その偉業は轟かず、されど偉業はある。

そして死後、英雄達は世界の外側、英霊の座に登録される際、彼はアサシンと言う、座に登録されたが、その偉業故に、他のアサシンよりも位の高い座。グラント、冠位の座に登録された。

グラント・アサシン。彼を見た者はいない、なぜならば、見た者は死んでいる。だからこそ、その座についた、偉業のアサシン。

「確かに言った、アサシンとして位は下げてあれなんだ。あれは死そのものの体現なんだ、逃げることは許されない」

「……………」

しばらくの間が訪れた。

——雪音クリス

「なに言ってるんだお前……………」

そう言うしかないじゃないか。

「お前の話は信じるよっ、てか、お前って色々知りすぎてるからな、むしろ納得だっ。だけど、それなら、お前は」

「死ぬな今度こそ」

力無く笑う。それに他の奴も叫ぶ。

「諦める気かアスカ!! このままでいいはずはないッ」

「そっだよアスカっ、いざとなれば」

「手を出すなっ」

すぐに声を遮る。手を出すなって、

「一人で戦う気か!? その腕はどうしたんだよ!?!」

「あの時は動けなかったっ、だが次は私も駆けつける!!」

「ダメだ、翼さん、クリス、響はもうアサシンに向かわないでくれ!!」

オレはそう言うために全部説明したんだ」

なに言ってるんだと叫びながら、あたしらは叫び続ける。

「それはあたし達が返り討ちに遭うからか!?!」

「大丈夫、へいきへつちやらだよつ。アスカを助けない方が」
「ダメだ、許可できない」

——風鳴翼

……………いま、叔父様、司令がなにか言った。
許可できない？ 全員が振り返り、司令を見る。

「……………正気か旦那、それはアスカにだけ全部任せる気か!? それは」
「だからと言って、死に行くようなものだ。アスカも戦うな、全力で逃げる。それしか、現段階で我々があれに対して対抗する唯一の手段だ」

それに、黙り込むしか、できない。

この身は剣として鍛え、防人としていたつもりだった。だが違う。
「いま仲間のために前に出ず、何が防人ですか!?! 司令、お願いします」

「ダメだ、いまのまま、我々があれに勝てる手段は無い」
「なら鍛えますっ、その時までっ」

立花はそう言い、雪音もみな、震えながらも拳を握りしめる。

「司令、オペレーターとして、今度は中断しませんッ」
「我々も覚悟を決めましたッ」

「旦那ッ」

こうして、最終的に組織ファイネを追うと共に、我々の強化合宿は始まりながら、その日を覚悟する。

もう逃げない、止まらない。この身は剣として、アスカを守る。守られ続けた借り、返させてもらうぞアスカ。

——小日向未来

こうして、情報部の人達が動く中、響達は少しでも強くなるために特訓しています。私は響のためにレポートを取りながら、みんなの特訓に手を貸します。

けど、ご飯の準備とかはアスカに奪われます。なんでできるのアスカ……………

「けど、アスカはその、前世があるんだよね？ 前は女性」

「男だよつ、もうお願いだから考えてくれつ。中身はオツサンだ、頼むから女性服着せるの止めてくれよね」

そう言われるけど、もうだいたい手遅れだと思う。

話を聞く限り、だいたい落ち着いてるから気にしなくても良いと思うし、可愛いし、問題ないと思う。可愛いし。

「可愛いから問題ないよつ、それと、今度からお年玉とかくださいねっ♪」

「おい響いいいいいい」

「諦めろ、前世は前世で、いまははまだ。お年玉はダメだがな」

「別に良いだろ、もう女装はよ。もういつそ、下着も女性物にしちまえ」

「……………実は用意が」

「奏サン!？」

実はねアスカ、ここにいるみんな、たぶん司令官さん以外、みんな持つてるよ。アスカの女装姿の写真。

「アストルフオの所為だつ、なんでローランが錯乱したからって女装した!? 百歩譲っても喚ばれた際、なんで可愛い物好きだからってやめなかった!!？」

「アストルフオさんもいれば双子ファツション……………」

「響!!？」

あつ、やってみたいなそれ。

そんなことを思いながら、時間が過ぎていきました。

14話・抗う者達

いまは使われていない施設、だが大量の資材などが運ばれていると知り、いま装者達はそこへ攻め込んだ。

『いいか、ハサン・サツバーハが現れれば全員逃げることに、これは司令官としての命令だ。忘れるなよっ』

そう言われながら、ノイズが現れ、復活したアームドギアを振るう。最近二刀流に成りつつあるな。

みんなの身体に張り付いていたりする本のページがいくつか消し炭になる。どれも毒素を吸い、効果を失った。

「アスカ、10枚補充してくれっ、そろそろ切れる」

「こちらもだ、適合率を下げるガスはどうも強力らしい。すでにギアが重さを感じる」

「ごめん、こっちもお願いつ」

「魔本持ってくれよっ」

そうして奥へと来ると、妙な気配に気づき、それに止まるように指示をする。

「あれは………」

「!? ウエル博士」

響の言葉に振り返る。どうやら、ソロモンの杖輸送時にいた学者で、行方不明として扱われていたらしい。

だが、ここにそれを持って現れた。クリスは睨みながら、静かに構える。

「テメエがソロモンの杖を」

「ええ、仕方なかったのですよ」

そして怪物が迫る中、何か違和感を感じて、建物の瓦礫を投げ飛ばす中、クリスが弾丸を撃つ。だが、

「なんだこいつ!? あたしの弾丸を」

めり込んだ弾丸が体の中に飲まれていく。まるで吸収されているように、ヒポグリフが中で騒いでいる。あれとぶつけるわけにはいかない。

「まさか、聖遺物を取り込む聖遺物!」

「そんなんあるのかよ!」

その怪物らしきそれはうなり声を上げて、すぐに襲いかかる。

「だが、それでも対処するしかないッ」

ノイズがウエルが持つソロモンの杖より取り出され、もう一つ謎の生物聖遺物も襲いかかる。だが響が拳を叩き付けるが、吹き飛びはするものの、あまり効いていない。

「ネフィリムッ」

エネルギーのような物はどうやら飲まれる可能性がある。ならと、
「これでどうだ!!」

バルムンクの衝撃波に、しめたと言う顔になるウエルだが、それは地面のコンクリートを巻き込み、それをぶつけるようにダメージを与える。

僅かにエネルギーを食っているが、瓦礫が当たり、それでもダメー
ジらしい様子はないが、ウエルは舌打ちし、眼鏡を直す。

「くっ、やはりガスで弱らせないとダメか………戻りなさいネフィリム」

「なんか知らないが、あれを放っておけないッ。全員」

全員が頷き向かうが、ノイズが大量に前に出る。

ネフィリムと言う聖遺物は静かに檻の中に仕舞われている中、それに突貫する。

「ただのノイズなら」

「問題無いッ」

響と共に道を開き、翼さんが剣を構え進む。クリスが周りのノイズを吹き飛ばす中、地面からノイズが吹き出す。

それに戸惑うが、

「翼さんッ」

「任せろッ」

急いで三人でウエルを捕まえたが、飛行型ノイズが檻を持っていく。

『翼っ、そのまま走れッ。なにがあってもだ』

「奏？ 分かったッ」

ウエルを捕まえた後、翼さんが駆ける。建物の外に出る中で、その時、潜水艦が飛び出て、それを踏み台に飛び上がる。

「よし、そのままファイリムってのを破壊……!!?」

まさに絶妙のタイミングでそれを阻む、黒い槍。朝日と共に現れたのは、

「マリア・カデンツァ・イヴ……」

「いいえ、違います」

それにうつすら笑みを浮かべ、

「彼女はフィーネ、私達を導く、新たな道しるべですっ」

そんなことを言うウエル。響が了子さんと眩くが、なんとというか、違う気がする。

「響、惑うな。了子さんは、もう了子さんなんだろう？」

あの後話を聞いた、フィーネである了子さんは、最後に了子さん、自分達が知る彼女だったらしい。なら、はっきり言える。

だが、

「ともかく、あの人 came と言うことは他の子達も来るぞ」

「!」

構えながら、静かに対峙する二人を見てみると、全身が寒気に襲われた。

「こ、れは……」

「!?!」

海面の上、槍の力で浮き、片手で檻を持つマリア。

静かにそれを見つめていた翼さん。

そして我々は、それを見た。

朝日が差し、無くなっているはずの闇の中で、

「さあ龍崎アスカ……首を出せ。始めるぞ」

死が現れた。

——私を実況するよ

そこから現れたそれに、弦十郎は叫ぶ。

『全員戦線離脱ッ、ウエル博士だけでいいッ。すぐに逃げろ!!』

だが、その前に、それが動く。

「手を抜き、力が制限されているとはいえ、この名は安くないぞ龍崎アスカッ」

もうすでに側に来ている。クリスと響が動きかけたが、睨まれた。

それだけで一瞬、動きが止まった。だが、

「だからって」

「止まらないイイイイイイイイ」

「!!」

アスカはバルムンクとクラレントの両剣で、魔力放射、ブーストした勢いのまま斬りかかる。

その意志の強さに、内心感心しつつも、彼の狙いは変わらない。

「来い」

響とアスカはタックを組み、剣と拳が交差する。歌が重なり合いながら、腕一本で大剣を振るい上げ、迫る弾丸も防ぎながら捌く。

「切り裂けええええええ」

「貫けええええええええええ」

「フンッ」

アサシンは剣を振り下ろした後、すぐの剣を横に振るう。刃では無い方向でだが真っ正面から受け止めたため、アスカは両腕で防いだためか、装甲が砕けた。

血しぶきが舞うが、それでもアスカはけして目を背けず、それでも手に持つ剣に、

「ここなら、真名解放ッ」

雷が彼から放たれ、暴れ狂う。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

「!?!」

銀の剣と魔剣、雷の力を同時使用してぶつけると言う荒技を使用。元々、魔力放出のようなまねごとで、剣の戦法と合わせ、色々と考えている。

だが意味は無い。

「はああああああああああ」

雷が刺さるように、剣の魔力を纏い向けられるが、その場に踏み込んだアサシン。足場に亀裂が走り、その場で止まるだけと言う暴挙で防いだ。

アサシンに突き刺さる雷は、彼が持つ魔力、否、纏う力にて塞がれた。

顔を歪め、それでも剣を離さず、だが、

「……………終わりだ」

そのまま剣を振り、アサシンは剣を振るう。

だが止められるはずもない、正面からぶつかれば碎ける剣撃。

それを理解する故に、彼は剣をぶつかると、その力を真つ正面から止めず、勢いを殺さず、跳び上がる。

つばぜり合いにけして勝てないと知り、その勢いを利用して、軽い身体を利用して、アサシンが引き起こす剣風に乗り、最小限のダメージに留めて吹き飛んだ。

「むっ」

彼の強すぎるが故、彼は木の葉のようにバランスを失うものの吹き飛ぶ。軽傷に終わり、響、クリスはウエルを持って、その場から離れていた。

その後、その場所は粉々に砕け散り、静かに後ろを見る。

「なかなか……………ん？」

もう二つの旋律が流れる。戦艦の上で戦う二人の戦慄ではない、別の戦慄が、響、クリスへと迫ってきた。

「ちっ、んな時にっ」

「!？」

ピンクと碧、二人の奏者が現れる。

「悪いデスけど」

「その人、必要なの」

アスカはそれを見て動こうとしたが、その前に現れるのは、死だった。

「悪いが止めさせてもらおうぞ、龍崎アスカ」

「グランド…………いや、アサシン。なんで、オレを狙う」

「理由は分かるはずはない、汝は運命により定められた、魂だと言うことは言っておこう」

「？」

よく分からないことを彼に言いながら、静かに、

「龍崎アスカ、その魂を縛る器。破壊させてもらおう、その魂は、もうこの物語に必要な無いッ!!」

鳴り響く鐘の音が聞こえかけた。だが意志の強さで弾き、剣の魔力を放射しながら歌う。

彼も血の歌を歌う中、剣を振るう。

また回避する戦法でアサシンとぶつかり合うかと、アサシンは今度は剣風を引き起こさず、剣を振り下ろす。

と、

「やらせるかッ!!」

…………えっ？

いま、普通の人間が、アサシンの大剣の刃を、拳で打ち止めた!!!

「はああああああああああああああああああああああああああああああ」

「ヌッ? はああああああああああああああああああああ」

地面がへこみ、大剣が弾かれ、男、風鳴弦十郎のシャツは消し飛び、血を流すが薄皮だった。

「はああああああ…………さすが、伝説中の伝説、効いたぞ」

「貴様…………人間か? いまの一撃、バーサーカーやヘラクレスと同等やも知れん…………」

物理攻撃の基準を考え、そう告げると、それに得意げに笑う。

「俺がギリシャの英雄か? それは光栄だ」

「…………司令?」

「アスカっ、ここは俺が止めるッ。お前は響くん達の援護にいけッ。どうせ止まらないんだろ?」

そう言いながら、ボクシングのポーズで、彼は戦う気らしい。
その様子に、ふむと考え込みながら、

「致し方、無しかッ」

「おうともッ、俺の部下はやらせはしないッ」

——龍崎アスカ

い、いま目の前で起きたことを話すぜ。司令が拳でキングハサンの大剣止めたうえ、本人からバーサーカーかヘラクレスと同等とか言われた。あの人死んだら英霊になるのか!?

ともかく、そう言われた以上、信じるしかない。剣の放射、ヒロインXの応用で飛び、シウルシャガマの装者、月読調と響の下に飛ぶ。よりにもよって苦手意識がある子に当たるとは……………

「響ッ」

「アスカ!? アサシンさんは!?!」

「司令と戦ってるッ、信じられないが神話と対等に戦ってるぞ!!」

調と言う子はなにを言っているのか分からない顔をしながらも、こちらを睨む。

「なんで私達の邪魔をするの……………私達は」

「? 悪いが止めなきやいけない理由を、しただろ」

「……………それは」

「会場で楽しみにしていた人達、マリア・カデンツアヴナ・イヴと言うアーティストを信じていた人達を裏切った。それでも、自分らが正しいって言えるのか?」

それに調と言う子は黙り込む。何か驚き、首を振る。

「……………なにも知らないくせに」

「だから戦うんだよ、何も知らない、知りたくても知る術が無い。マリア・カデンツアヴナ・イヴを慕っていた人達の代わりに。偽善? いや偽善で。元々、オレはどうしても偽善だ」

二人の間に立ちながら、静かに前を見る。

「君が偽善を嫌うのは構わないが、全てを救うなんて思えないが、救いたいって思う仲間がいるんだ。オレは、それを応援したいからついて

るだけだ」

「アスカ………」

「オレは決めたんだ、偽善でもいいから、戦う。オレは新しい人生で、大切なものを守ると決めたんだ!!」

それだけは変わらない。歌と歌がぶつかり合う中、碧の子、暁切歌の刃が迫る。

「ふぎけるなデスっ、自分のことだけ言ってるんじゃないやねえデスっ」

「切ちゃん」

刃を振り切り、クリスと合流して、響はまだ戸惑う中、それで、

「なら君らは響やクリスの何が分かる？ オレの何が分かる。言うけどオレのこと初見で分かる人なんていないんだ。人生二度目だからね」

「何言ってるんデスカ!?!」

その時、ノイズがまた放たれる。まだいたかと、内心呆れながら、あの二人はその場から離れる。

「くっ、司令がいるし、ノイズを」

「行くぞ」

「うんっ」

と動こうとしたとき、

爆音のような余波が放たれた。

司令部変わりの戦艦がひっくり返りかけ、翼さんが落ちかけたり、ステルスのようなもので姿を消していた、マリア達の船が見えたり、ノイズが消し飛んだりした。

だけど動けない。

その原因は、

「う」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
「は

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ついに両腕で剣を振り下ろしたハサンと、血だらけの司令官の激突
だった。

えっ、なにあれ？

その瞬間、爆発も起きたような音が鳴り響き、二人は吹き飛んだ。
それでも少し浮く程度で、すぐに地面に着地して、勢いを殺す。

ノイズはすでにいないが、余波だけで自分達は戦闘不可能なまで体
力が削れた。

「ぐっ……………骸である我に、膝を折れせたか……………」

「はあ……………はあ……………さすが暗殺教団の始まりと終わりか……………」

剣を地面に刺し、支えにするハサン。司令は肩で息しながら、口元
の血を拭う。

「名を聞いておこう、異世界の者」

「日本政府所属、特異災害対策機動部二課、司令官、風鳴弦十郎ツ。趣
味は映画鑑賞だツ!!!」

「我が名はハサン・サツバーハツ、最初にして最後の山の翁なり!! で
きることなら貴殿の首を、境界の土産に持ち帰りたいところだ!!! そ
の首、そして我を見て、生を謳歌すること、誇るが良いツ」

その様子に我々は戦慄するしかない。

「さ、さすがです師匠……………」

「お、叔父様……………凄い」

「すっげえとかの次元違うからな。あの暗殺者、次元の通信すら斬る
人だからな」

「ま、マジか……………」

そんな様子を見ながら、辺りを見渡す。

「……………向こうもさすがに逃げたな……………」

『もうステルスが作動して追えません……………』

『なにより、もう戦える奴がない……………つてかこつちもボロボロだよ旦那の奴』

もう姿がないマリア一派。その騒ぎの中で剣を担ぎ、闇がアサシンを包む。

「どうやら貴殿がいる中で、龍崎アスカの首は取れぬようだ。元より、我らが盟約にて、物語に深くも関われん」

「……………何故アスカを狙う？ 彼が第二の人生を歩くからか？」

その言葉に沈黙し、しばししてから、アサシンは目を光らせた。

「そのようなことは些細なことだ。問題は、彼の者の魂。偉大であり、愚かであり、救済であり、破滅たる魂が問題だ」

それに全員が驚く中、闇が深まりながら語る。

「彼の者が事故にて死んだのは、運命故だ。そうなるように、された」
「なんだと!？」

それには驚き、目を開く。だがそのまま続ける。

「歴史の分岐点、それを支える者、それを成す者。それは時に、救世にも破滅にもなる、可能性を秘めた魂。その権利を持つ、物語を語り部であり主人公。それが、龍崎アスカの魂の役目」

……………ああ、これFateだ。オレはそう思った。

聞いてはいけない気がした。

何故か嫌な汗が流れる。

「どうやら、本能が自分の存在を分かり始めたか。そうだ、龍崎アスカ、否、抑止力の一つよ」

抑止力、人類、星を守る役目と言う名のシステム。

自分は、ああ自分は、

「……………アスカ？」

「……………俺は知り、教え、導き、糧になり、始まり、終わるモノ……………」

……………何を言ってる？ ナニヲイツテル？

「お、レは……………」

知らない何かがある。

知らない情報がある。

知りたくない真実が、

「オレは、抑止力……いや、はっ？ えっ……」

「意識し出し、魂の情報が出始めたか。お前は今までのお前の情報を引き出している、英霊召喚もまた、いずれかのお前が持つ素質から、英霊アストルフオの情報。そして英霊の情報を引き出したのだ」

「そ、んなこと」

「できないな、普通なら。だが、お前は無意識にできるよう定められた、特別な魂だ。起源程度のアクセスや、聖杯、英霊の座への介入は動作無い。現状お前はそれらと契約している」

「……起源って、英霊の座は分かるけど。確か魔術師が目指してるけど、至ることはできない領域だろ？」

「……やはり引き出しただけで、全て知っている訳ではないようだな」

それは静かに納得して、静かに告げる。

「お前は世界より、抑止力の役目を与えられた魂。ありとあらゆる可能性、平行性、次元世界にて、世界の命運を分ける戦いに、英雄として、罪人として、傍観者として、被害者として、仲間として、ただ知るだけの者になる定めを与えられた、魂だ」

「……」

「あ、アスカ？ どうしたのアスカ？ なんで黙るの？ なんで何も言わないの!?! ね、ねえってばっ、アスカ!!!」

「……」

……

「あすかつてだれだっけ……」

オレはいま、オレか？ あれ？ 自分はいま、なんて名前だ？

「……アスカ……」

響は青ざめているのを見ながら、山の翁を見る。静かにその顔を見て、目を瞑る。

「異世界に流れし、物語に役目を担い、最悪を回避する者。その魂を回収するが為、その魂を縛る器となった生命体、龍崎アスカの破壊こそが、我ら、星と霊長より依頼された使命、グランド・オーダーなり」

足下がふらつく、なに？ オレって抑止力なの？ Fate／シ
リーズのあの？

いや、そんなものは、

「お前が空想物として知るのは、たまたまだ。平行世界、無限とも言うべき可能性の世界なら、そのような事態もあり得る」

否定を消された。

「お、オレは、なに、も」

「お前では無い。未来のお前、過去のお前が、物語に関わる人物として生き、その物語を回避、または手助けする役目。分かるだろ？」

無限の可能性の中で起きる、最大の災いを回避するため、そうなるように運命と未来を微調整する役目。

「……………あれ……………」

なんでそんなこと思った？

響か誰かに引っ張られているが、反応できない。

「はつきり言おう、龍崎アスカ」

聞きたく、無い。

「……………自分と言う魂の役目は、無限の可能性に紛れた、最大の最悪な^{物語}未来を、異物という形で介入し、そんな可能性を無いもの、または少しでも軽くすること」

「アスカ!？」

「アスカテメつ、なに言い出してるんだアスカ!？」

異物として関わり、都合の良いように変える。

俺は彼で、私で、俺で、僕で、儂で、で……………

「……………だがこの世界は対象世界じゃない」

震える声でそう言った、いや、分かった。

オレと言う用意された異物は、この世界のためにあるんじゃない。他の世界で、こんな物語に関わり、響達のような者達と関わり、調整するのが役目だ。

だから、彼女達といういまは、

「いまは」

いま、ここにいることは間違いだ。

「……………アスカ……………なに、言ってるの……………」

「……………」

だって俺はこの世界を良くするためにいるんじゃない。その為に『ある』んじゃない、『いる』んじゃない。

その為に、自分は抑止力として定められている訳じゃない。

「お前は这个世界に不要だ、お前はいなくても、物語は寸分変わらず終わっていた。お前がどう生きていようと、意味は、無い」

自分は聖杯を得る者になったり、阻む者になったり、求める者になったり、それらを目指す者の協力する者になったり、または語る者になる役目。

物語に都合のいい、都合良くいる人物に『成る』のが役目の抑止力。

「オレは、龍崎アスカは……………这个世界に『いない存在』」

「アスカ!! ねえアスカつ!!!」

「オレは、私は、僕は、俺はッ」

ゲームで言うところの、都合良く配置された重要人物として、用意されている、キャラクターと言う役目を担う。使い捨ての命。

「……………思い出したか」

「……………あ……………」

あ

ああああああああああああああああああああああああああああああああ

闇が消え、その場に崩れるオレは、役目を思い出して、いまは情報に耐えられず、意識を手放した。

ただ思い出した、自分の役目。

自分は、良くも悪くも物語の重要人物として、世界に介入し、抑止力として無意識に行動して、星と霊長が定めた最悪な可能性を潰すキャラクターだ。

そしてこの世界、星と霊長の世界ではない、響達の世界に関わる必要性は無いことを、知ってしまった……………

15話・祭り、ひとときの休息

理由は分からない。だが、抑止力と言うものは、星または人類消滅を回避するためのシステムだ。

そして何故か分からない、だがはつきりだ。はつきり断言できる。自分はそれだと。そう言うシステムの一部だと理解した。

自分の事故は運命で定められていた。それは不必要な時代、世界、場所に生まれた場合は魂の休息と言う意味合いを込めて見逃さされていただけで、管理から離れたわけではない。だから、そう言ったケースは短命だとも理解した。

だが一番理解できないのは、自分がこの世界にとって意味がない？ ああそうだ、この世界に自分を管理する存在意識は決して関わり合えない、全くの別世界。ここに自分が『ある』のがおかしすぎる。直ちに戻らなければいけない。

だがそれは龍崎アスカの死を意味する。魂が必要であって、器である肉体はいらない、むしろ邪魔でしかない。

そしてもう一つ分からない。ここは彼の存在がないのなら、自分と言う存在が生まれる必要性は全くない。龍崎アスカの存在は不要その物であり、この世界にとっては害悪とも言うべき、異物その物だ。
……ならば、

オレは、龍崎アスカの人生は、なんだ……………

「……………朝か」

最近寝不足であり、精神安定剤を飲んでいる。

潜水艦で寝泊まりしながら、日々学校まで行く。正直、アサシンがどこから見てもおかしくないが、それは気にしない。

向こうは事情の知らない人達の前では、姿を現さない。彼はアサシン、そこはむしろ強すぎるが故に信用できる。見られてはいるだろうけどね。

そんな日々の中、

「アースカっ♪」

響が満面の笑みで現れる。当初、色々話し合ったが、こちらが聞く耳を持たなかった。そんな時に、

「これ、学祭のチケツト♪ ここなら、少しは気が安らぐと思うから……」

「リディアン新校舎の……響」

「はいこれ夏服ね♪」

「……うん」

——立花響

あれから抑止力と言うものの存在が何か話し合い、仮説が師匠達から話しかけられた。

曰く、アスカと言う存在の次は、世界を変える誰かなのかも知れない。

無論本来ならばかばかしいと言うが、誰も言わなかった。

「魂を解き放つと言っていたからな、少し考えられないが……そうも言っていない。なにより、アスカがいるいまが本来あり得ないだろ？」

「なら私はなんだ!? 彼奴がいなかったら私は死んでたぞッ」

奏さんは叫びながら、そうだと強く思う。

私も、アスカがいなかったら、どんな辛い思いをしたか分からない。アスカがいなくてもいいはずはない。少なくとも、もうアスカはいるんだ。

「……ともかく、フィーネと言う組織、アスカについての問題。俺達が抱える問題がでかくなる一方か」

「ですが、アスカも彼らもどうにかします」

「ああ、もう止まってる暇はねえッ」

「……私も、私もアスカを守りますっ。いつも守られているから、今度は私が、アスカを守りますっ」

そう言う話をした時、アスカからアサシンさんは、あまり被害を広げないだろうから、監視はあっても、戦闘中や周りに被害が出る手段はしないと言う。

ので、私達の学園祭に呼んだ。女子服で♪

.....

「で、弁解はあるかな響?」

「ごめんなさーいーいーいーまさか、普通に着るなんて思わなかったんですー」

絶賛未来さんに怒られました。

学園祭で、それでもみんなと共に巡る。

「ほら響、食べ過ぎだ」

「アスカごめんね」

そう言いながら、少しだけ戦いを忘れられる中、そう言えば、コンサートの話があった。

実はクリスマスちゃんを出す予定で、翼さんが裏で色々しているらしい。みんなも出るらしい。楽しみだ。

その時、頭の中で一瞬あることが浮かんだ。

「あつ、ごめんねアスカ。私、用事があるから少し、未来、クリスマスちゃん、会場案内よろしく」

「ん? どうしたんだ彼奴?」

「?」

二人は?が浮いていた。

分かっている、分かっていますよ、いまはそんなことしてる場合じゃないのは分かっていますよ私。

だけど、だけど.....

「.....かな、でさん.....」

「.....響、お前もか」

穏やかな顔で、そこに奏さんが颯爽と登場した。これで決まった.....

——雪音クリスマス

音楽コンサート、自由参加のはずが、あの人の所為で参加する羽目になった。

悪くなかった。歌うことが楽しかった。
だけど、

「ここからは私達のターンデスっ」

「私達が勝ったら、そのペンダントをもらいますっ」

そう言つてステージに現れ、歌い出す。

その様子を見ながら、あのバカが青ざめている。

「お前、まさか負けるとでも思ってるのか？」

「い、いや、その、違うんですよクリスさん」

……

気持ち悪いことにさん付けで呼んでくる。

「奏、なぜそんなに青ざめている？」

「い、いや、ななな、なんでもないぞ翼」

なんで血の気が引いてる？

「あれが天然物か……」

「私達、女の子ですのに……」

「この世は残酷だ……」

「ど、どうしたの？ 二曲目歌えないのがそんなにショックだったの
!？」

何故灰になっているんだあの三人？

こうしてあの二人の曲が終わった。

「いっやく飛び入り参加のお二方も素晴らしいっ。で・す・が、まだ参
加者はいますっ。彼女の曲が終わり次第、終車発表ですっ」

「私達が負けるはず無いデスっ」

「うんっ」

ステージから降りながらそう言うと、その時、ステージから靴音が
鳴り響く。

「それでは、次の方は飛び入り参加で匿名希望っ、名前は」

その時、知っている者達の世界が止まった。

「……………私の名前はアストルフオと言います、それでは聴いてくださ
い」

紛れもない、少女になった。濁った目の彼奴が、いた……………

そしてステージは、熱狂に包まれた……………

——天羽奏、数分前

「というわけで、コンサートに出て、クリスと対決だ」

「……………なんで？」

「私達に任せてくださいね」

「可愛くしますよ」

「最強兵器男の娘っ♪ 本物お願いします♪♪」

「それじゃ、可愛くするからね」

「……………」

一人の少年は、少女へと変わり、彼いな、彼女は完璧に女の子になり、少女として歌うと心に決めた。

……………

「……………彼奴って男か響？」

「自信持てなくなってきました」

「服着てから、彼奴女の子になったな」

「はい、もう何か壊れた音しました。やはり、タイミングがまずかったかと」

「……………あたしら、無事で学園祭終われるかな？」

「……………泣いて謝るしか……………無いんじや無いでしょうか……………」

「……………」

やべっ、どうしよう。

——同時刻、マリア・カデンツァヴァ・イヴ

米国の秘密機関がついにここに来た。ウエル博士は躊躇いもなくノイズを放つ。

多くの人の命が消える。これが正しいことか分からなくなる。

だけどしなきやいけない。そう言い聞かせていた……………

「!？」

だけど、側で無関係の子供達がいる。すぐにノイズを引くように言うが、博士はする気も無いうえ、自分が出てても間に合わない。

これが……………正しいの？

(セレナっ)

その時、だった。

『はあああああああああ』

一人の男性が、ノイズを倒した。それに私達は驚いた。

『無事か？ なら急いでここから離れるんだ』

『う、うん』

急いで逃げていく子供達、それにノイズが向かってくる。

だが男性は気にせず、その剣を振るう。その姿は、

「……………騎士？」

モニターに映る蒼と銀の騎士は、静かにノイズを倒し続ける。

それにママや博士は出るように言う。私は静かに、彼のもとへ走り出す。

「……………」

大量の炭が舞う中で、それでも銀色に輝く鎧は燦然と輝き、仮面の隙間から、覗く瞳は鋭く、こちらを見る。

「貴方は何者？ その鎧はなに？」

炭化した死体が舞う、ノイズも人も関係なく。

そんな中、私が現れたことに、騎士は剣を肩に担ぐ。

「……………お前は、何故今頃現れた？」

「質問に答えなさい」

僅かに心に何かが刺さる。それでも振り切り、彼を見るが、彼のその眼光は、胸に刺さるように、こちらを見る。

「マリア・カデンツァヴァナ・イヴ」

「私はフィーネよ」

そう、私はフィーネで在らねばならない。そう叫ぶと、彼はため息と共に首を振る。

「はあ、一面を使用されたとは言え、このような形、場所で喚ばれるな

んて……………」

そう言いながら、騎士道なぞ俺には向かないとも文句を言う。

「まあ、あり方から考え、このような裏方が俺に合っているがな。生前もそんなもんだった。この世界で紡がれる物語もまた、無関係な品物……………」
「そこまでお節介を焼くのもな」

「なにを言っているの？」

「……………」いや、ただの愚痴さ。令呪なんてもんに縛られている、哀れなもの使魔のな」

その瞬間、銀色の鎧が光る。いつの間にか銀色の輝きに包まれた剣を構えていた。剣は光の所為で、分からない。

「……………」いずれ運命があんたを潰しにかかる、だが、調整する魂ならあるいは……………」

「!? 待ちなさいッ」

剣を地面に叩き付け、閃光のように世界を覆う銀。その場にはもう誰もいない。

「何者……………」調整する魂？」

なぞの言葉を残したまま、ここから立ち去るために動く。

——暁切歌

「まさかあんな隠し球が控えていたのはずるいデスッ」

「もう凄く気合い入ってたっ、ずるいっ」

時間があれば、私達だってもっとやれるデスよっ。だからと言って負けを認める訳にはいかないのデス。

世界を救うために、ここで立ち止まるわけにはいかない。

そうこうしていると、彼らが来るデス。

「待って、切歌ちゃん、調ちゃんっ」

「響、さすがにいきなり名前呼びはどうかと思うぞ」

そう言いながら、くっやっぱり可愛いデス。

もう周りの人達が男女関係なく魅力してるデスよ、なにをすればあ
あなるんデスカ!?

「二人とも、話を聞きたいんだけど」

「ここでやるつもりデスか？」

「まさか、君らこそやるつもりなの？」

そう言われ、私達も黙り込む。

「私達は私達、世界を救うために動いてる」

「世界を救う？ なにから」

「それこそ、知らないんだから邪魔しないで欲しいデスっ」

他の装者も来る中デスが、別に困らないデス。

「……………」

静かにこつちを見る、あの人は偽善者デス。何も知らないのに助けるとか、言いたい放題に言う人デス。

「君達に一つ聞きたい」

「なんデス？」

「君達は君達で世界を救いたいのか？ それとも、世界を救いたいのか？」

それに何を言っているか分からないデス。結局同じじゃないデスカ。

「それ、同じだよ」

「違うよ、前者はいまの君達だけだけど、後者は他にも人が手を貸してくれる可能性がある。君達は」

「そんなの、誰も手も借りる訳にはいかないデスっ、ママやマリア以外、信用できないデス」

「ならこのまま敵対するの？ このまま争い続けたら、それこそ何も守れない」

「貴方達が戦わなければいい」

「それはできないよ、その時、オレは死ぬ。あのアサシンの手でね」

その時、背筋が凍り付くデス。

分からない、あれは怖いとしか分からないデス。

何故かは知らないデスが、この人の命を狙っている。骸骨の存在。

「……………あれはなんなの」

「オレの命を狙う人を越えた何か、って言うしか無いね。オレも分か

らないうちに、命狙われてるから」

なんデスかそれはと、周りを見ると、全員顔をしたにうつむいてたデス。

(本当に命を狙われてる………あんなのに?)

そう思ったとき、心臓が捕まれた気がしたデス。

「聖遺物が必要みたいだけど、渡せない。響のは体内に融合しているものだし、オレは命を狙われているとかじゃない、大切な友達から託された物でできてる。クリスや翼さんのだって、全部が全部、自分や誰かの大切なものを守るために、ある。君達が言う守りたいものがない以上、力を貸せない」

そう言われながら、何かが揺るいでいる気がしたデス。

だから、私達は勝負すると約束させて、その場から去ったデス。

「切ちゃん………」

「大丈夫、大丈夫デスよ調」

そうデス、きつと大丈夫。

そう思い、私達は戦いに備えるデス。

だけど知らなかったデス。

私達の出した条件『装者だけ来る』と言う条件が………

死を意味していたなんて………

——龍崎アスカ

「………学園祭の記憶がまちまちな気がする」

「忘れろ」

クリスからそう言われ、響は未来に必死に誤り、翼さんは何かショックを受けていて、奏さんは奏さんで戸惑う。

だが、いまは、

「本当に、自分達だけで行くのか?」

リディアン音楽院跡地、彼女達の指名した場所。

人気のない、あの荒れた場所なら、

「………アサシンは動きます」

それに全員が黙り込むが、

「オレはそれでも、行きます」

そう、行かなきゃいけない。

オレは、龍崎アスカの人生は、無くてもいい人生じゃない。

「援護射撃は任せな」

「我々も、できる限りサポートする」

「お願いします師匠っ」

心の中のアームドギア達、それに全ての命を預けて、

「必ず帰ってきます」

そう決めて、動く。

そこは夜に近づいていた。正直、あの子達が来るとは思えない。

「あの二人はいい子だけど、博士の方が外道だろうな」

「あくじゃ」

「ネフィリムがいると思うのか？」

そう話ながら、すでにシンフォギアを纏い、ガスに気を付けてながら、カ・デインギルを見る。

「…………アスカ」

「…………大丈夫、へいき、へっちやらだろ？」

「…………うん」

響が手を握り、それを離れたとき、それは、現れた。

重々しい鎧の音、剣を引きずり、静かな呼吸音。

気配がないのにあると言う、矛盾する、その姿を見た者は死しか与えなかった存在が、静かに現れた。

「…………話は聞いていた、すまぬが、龍崎アスカ。お前の相手は我だ」
「……………」

「そこに隠れている獣と、殺す価値すらもない生き物、出てこい」

それに、ノイズと共に、ネフィリムと言う獣。ウエル博士も出てくる。

「あんたが何者かは知りませんが、殺す価値もないいき「黙れ小物」」
その時、辺りに殺気が包まれ、それだけでノイズが何体か消し飛ん

だ。

「……………見ているか、弦十郎。貴様もそこから見守るか」

そう言い、虚空を見たとき、オペレーターから僅かな悲鳴が聞こえたが、そのまま拳を固めて、仕事を全うする。

「ほう……………覚悟を決めた者達か……………別の者達はどうやら、戸惑っているようだが」

「あの、カメラ越しで様子見れるってどんな技能ですか？」

さすが次元の会話をぶった斬った人だ。向こう側が分かる様子だ。

そして剣を引きずりながら、静かに、

「己が何者、否、なんなのか知り、それでもか？」

「……………」

その様子を見ながら、静かに、

「ああ、それがオレの意志だ」

「……………それでいい、それがお前と言う存在の役割」

剣を構えながら、周囲に闇が漂う。

「無意識か、あるいは意識的にかは我すら知らぬ。だが、星と霊長の手により、必ずある最悪なもしもの世界に送り込まれ、それを無いものにするモノよ。お前はそれでいい、そうする権利がある。無論、それを阻まれるものだがな」

「ああ、それは嫌でも分かる。それが自分の役目、星と霊長に管理された、自分の役割だ……………」

その言葉に、否定は出来ない。何かははっきりと告げているからだ。ここは、いるべき場所じゃないと……………

「だがいまここにいる以上、悪いが抗う。それが、オレの答えだ」

アストルフオ、いまはお前の勇気を貸してくれ。

剣を、竜殺し、銀に燦然と輝く剣を握りしめ、多くの雷鳴を纏う。

「さあ始めよう、龍崎アスカ。首を出せ」

「ヒポグリフツ、行くぞ、みんなッ」

「「おうっ」」

「僕を無視するなッ、ネフィリム!!」

こうして交錯する戦いが始まった。

16話・咆哮

戦いが始まった。

龍崎アスカはその命を狙う山の翁。

三人の装者には、無数のノイズとネフィリムが迫る。

勝つ見込みがあるとすれば、まずアサシンとして彼は現れていて、何故か手を抜いている事実。

本気ならすでに終わっている、それでも死んでいないのは、本気を
出していない証拠。

だが、

(侮っているわけでも何でもないッ!? だからこそ)

一步踏み出して進むしかない。魔剣と王剣の魔力放射と共に地面を滑り、ただ剣と剣がぶつからないようにして斬りかかる。

「ほう、つばぜり合いはせぬか………」

「一撃で壊される、未熟なオレだからか、宝具じゃないからか知らないが、あんたにそんな無謀はしない!!」

一撃の剣撃のみ意識して避けるが、大気が震え、大地は砕け、世界が震かんする。

グラウンド・アサシンの一撃一撃だけは、ただあるだけでノイズが壊れていく。

歌いながら、それらを避けるのではなく、剣風に乗り、舞うように避ける。ようは木の葉に見立て、剣を避けている。

その気になれば木の葉は碎けるだろう、それも考慮して避けなければいけない。

睨まれるたびに心臓が止まる。息が、歌が止まりかける。

『~~~~~♪』

だが、この戦場に流れる曲は一つじゃない。

(そうだ、オレは、龍崎アスカは異物じゃないッ!!)

ここにいると言う意志のみ剣に乗せて、振るう。

——また実況するよ

彼はいま、アサシンの言葉を否定するために戦っている。

異物、不必要。それら全てを否定する剣撃に、彼は嬉しそうに答えている。

だけど、彼はそれで試練を終わらす気はない。この程度で、彼が本来至る道筋から外す訳にはいかない。それなりの覚悟が無ければ許されないのだから……

(なにより、覚悟を決めた武人に対し、その命奪う気で挑まず、何が山の翁と言う?)

一降りが命を刈り取る一撃の中、剣撃の隙が見えた。

だがアスカは乗らず、けして魔力放出による高速移動をやめない。

(ほう、さすがに分かっているかッ)

歌を紡ぐ中、それは分かっている。

(勝敗は霊核を壊すことッ、だけじゃない!! 相手が相手ッ、霊核が壊れて、サーヴァントとして肉体が維持できなくなっても戦えるッ。消えるまでの数秒が、俺にとって何時間だ!! 壊してもすぐに行動出来なきゃ意味が無いッ)

相手はわざと隙を、大きな隙、霊核へと届く隙を見せている。

だがそれに手を出せば? 答えは分かる、死しか無い。

時折見せられる、生への道筋に食いつかず、真の意味で掴み取るまで戦わなければいけない。

彼が勝つ条件は、五体満足で動ける状態下であり、剣を二本使い、魔力放出によるブースターでの行動力使用。

それをこなしながら歌い、威力を上げ、相手が放つ死のプレッシャーに勝たなければいけない。

「ふんっ」

「!!?」

大剣を大きく下に構え、足を踏み込んだ瞬間、数メートル地面がへこんだ。

風が止むように、殺意が消えたが、それは一点に集まっていると知る。

(ま・ず・い・い)

「破ッ!!」

両手で斬り上げられた剣は、天を斬り、それを全力で避けた。
「つておい、やりすぎだアサシン!!」

「ぐ、グラウンド・アサシンの剣撃が雲どころか、大気圏を斬りました!!!」
「なっ、大気圏だど!? ならオゾン層は!!?」

「大気圏ごと、有害物質や太陽光も、全部ですッ。空間全てを、斬りま
したッ」

オペレーター室から聞こえる絶望に、地面に降りて前を見る。正直
逃げたいが、

「!?!」

「……………」

その身体が、蒼黒い闇が吹き出していた。

ひび割れした身体、それでも気迫は増している。

(……………そうかああああああああああああ)

それに光を見るように、剣から魔力を放ち、接近する。

(ほう、気が付いても、希望にすぎりながら、尚向かう……………誠に、惜
しいッ。この身が、この身体が、耐えられぬことが我は恥ずべき思い
だッ)

グラウンド・アサシンである、彼はいま、顕現するためただの暗殺者
へと力も何もかも下げている。五体満足、本気で戦えない。

だが、現在彼はそのようなことは構いなしに、本気の本気、自分
と言う存在として、剣を振るつていた。

その所為で、身体が着いていけず、壊れだしている。

「死の嵐の中ッ、生き延びよ龍崎アスカアアアアアアアアアアアアア」

ここにいるのはただのアサシンではない。自分達が信仰する道を
踏み外した者、技術を慢心、衰えた者を殺し、次へと繋ぐ道を選んだ
教団の長。

故にこの者に引導を、故にこの者に活路を与える事を選んだ。

己を殺せば例えなんであろうと、この世界に滞在することを許され

るだろう。

元より星と霊長は彼の回収を、さほど急いでいない。

だが手元に置く、彼の魂の役割とはそう言う流れである。理不尽極まりない理由から、いま命を狙われているのだ。

だからこそ、魂の進化。より強固なる魂へと昇華する人生を歩む、そう言う結果を見せなければいけない。それがアサシンが彼に与えた、勝利条件だ。

それすらできないのなら、躊躇いもなくその命を斬る。境界を彷徨い、斬った者の命を刈り取るほどに昇華した、その剣にて斬る。

(ああ全く……いま我が行為こそ、この首を切り落とした気分ツ。されど、若きその才能、立ちほだかる壁になるのも、また一興か!!) 元々グラウンド・サーヴァントとして渋々受けた依頼だが、このやり方で問題ないのなら、自分は問題ない。

汗を斬り、闇風を斬る竜の眼光。その目と剣を見ながら、静かに木の葉を砕くために、その力を振るう。

その死の風に乗り、かわし、僅かでも速く、限界が来るように切り傷でも剣撃を放つ竜へと昇華した戦士を見ながら、微かに笑う。

「聴くが良い!! 晩鐘が汝の名を指し示すか否かを!!」

ゴオオオンカアアアンと、鐘の音色が響き、プレッシャーから息が
できなくなる。

だが歌う。

(来るかッ、宝具!!?)

「告死の羽根——首を断つか否かッ」

(死ねないッ、まだオレは……生きていたいんだッ)

いまだ自分の動き、一つでも逃さぬように見開く瞳、自分が首を断った者達とは違う、自分の首を狙う戦士に、けして力抜かずに叫ぶ。

『アズライル
『死告天使』』

迫る死への一撃、それを防ぐことはできず、避けるために、全神経、全能力を込めた。

瞬間だった……………

「立花ッ」

そう、私達側が思ったとき、いつの間にか時間が経ちすぎていた。私も彼も、アサシンも。本来の時間の流れから外れたように戦っていた。私達でさえそうなのだから、彼からすれば相当だろう。

そんな世界から外れた時間の中で、いまだけかみ合った。少女の腕が、ネフィリムと言う怪物に、食われ……………

「響イイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

死の鐘は、静かに響き渡った……………

——
???

「なっ、なんだあの戦い……………」

「ノイズが、剣風だけで消し飛ぶ……………」

「アスカ……………」

時間がかみ合う前、彼女達はあり得ない速度の戦いを見ていた。だが、一人だけ、

「くそ、くそくそくそッ。僕を、僕を無視するなあああああ。ネフィリムッ」

その時、無数のノイズが槍のように、ネフィリムが背後からアスカへと迫る。

「!! 駄目ッ、アスカッ」

「立花、待ッ」

「……………あ……………」

そのつぶやきと共に、もう一つも落ちた。

煙が晴れると共に、全ての者達がそれを見る。

「……………たちばな……………」

「……………うそだろ……………」

敵である者達も含め、それを見た。ある者はモニター越しに愕然となり、ある者は信じられず、何度も首を振る。ある者は頭がおかしくなったように、叫んだ。

鐘の音が鳴り響き、純白の羽根が舞い上がる中、一人のアサシンは、このような結末に剣を強く握る。

「剣士として、その魂の器として、そして龍崎アスカとしての覚悟。しかと見た」

だがと……………」

「その運命背負う魂、返してもらったぞ」

肉体が斬られた、一人の遺体があった。

その顔は即死であり、それでも静かに血を流す。

その様子に、キャスターも静かに現れる。その足下には花が生え、静かに見下ろす。

「少し残念な結末だけど、まあ仕方ないね」
「……………」

そう残念がりながらだが、まるで気に入った物語が、道半ばで終わってしまったかのようない方だった。

唯一山の翁だけ、この行為こそ、納得できず、自身で首をはねそうなほど、怒りに燃えている。だが、それを自分がすることこそ、侮辱と知り、こらえている。

二人の装者は叫ぶ、ノイズの拘束を吹き飛ばす。

その言葉が、二人が動く切っ掛けだった。

翼はすぐに斬り返し、クリスは無限に、それこそ限界を超えてでもここで殺すかのように、彼を背にして咆哮するようにありつたけ放つ。

弾幕が迫り、うわああああと叫ぶキャスターであり、アサシンは、

「……………キャスター」

「無理だよつ、こんな乱戦じゃ転移できない。そもそも彼女達を止めることもできないって!!」

装者達は獣のような目つきで、ただひたすらに目の前の人物を殺しにかかる。

「さすがに我らは霊核のみの亡霊……………それど」

「分かっているつ、彼女達に壊されると言う意味を、彼女達に渡すのはまじつ。全く、グランド・サーヴァントの異名はホント嫌だよ。わざわざ生きてる私に霊核作って顕現させて……………そんな私達を殺したら、最悪この子ら神か英雄化してもおかしくないぞ」

いま彼女達は神世の存在を殺しにかかる。それを殺すと言う意味だけは、事実は避けたい。彼らだけの、抑止力と言う存在である彼らの事情。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

天羽々斬が、キャスターの服を着ると、小瓶が落ちる。

しまつと眩く、キャスターだが、その時、小瓶が閃光のように光る。

「!!?」

それに二人は驚く。全く……………

「どこの世も、理想通りにはいかないな……………」

そう眩き、静かに力を振るう。

その瞬間、無限の剣が、彼女達を阻んだ。それは無限の剣、荒地と化している大地へと生み出された刀剣類の存在。グランド達は自分気づく。

「……………何故貴殿がここに」

それはキャスター以上に顔を隠す。衣類はまるで中身のないようになびく中、コートのそれは、静かにしている。

「……………ああ、だからか。だから、星も霊長も、手放しても問題無いはずの彼を、手元に置きたがるのか」

「……………そう言うことか、道理でグランド・サーヴァントを動かしたのか」

「そう言うことだ、グランド・アサシン、グランド・キャスター……………そして、いまの輝きを見て、星と霊長には自分から伝えている。それで戻ってこられたならと言うようにな」

「……………はあ、分かった。君がそう言うなら、私達はそうさせてもらおうよ。元々、私達も乗る気で無かったしね」

キャスターは何かを唱えると、龍崎アスカの遺体を草木が包み込む。

それに二人の少女は叫ぶ。

『貴様らッ』

『まだ彼奴をッ』

そして世界を震えさせる少女の咆哮。それには、

無数の剣が峰で叩き付けられた。それと同時に、無言のままに、アサシンが一撃の剣をたたき込め、立花響を地に倒す。

地面にヒビが入る。だがそれでも尚立ち上がるその胸に、鉋物が生えているが、それを無視して、気絶させる。

『立花!?!』

『テメ……………テメテメテメテメエエエエエエエエエエエ』

その様子に沸騰しそうな顔で、二人の少女から笑みが消えていく。だがキャスターは静かに、

「まだ可能性があるよ」

『!!?!』

その言葉に、何を言っている?と言う顔をするが、

「彼の魂、アサシン。境界を歩くアサシンに斬られたのに、魂だけは健在、むしろ活性化した。まさかだと思うけど、龍崎アスカは、私達や、私達に指示した者の予想を超えだした」

「もし彼の者が死より生還した暁には、もう我らは奴を殺す必要はない。それが運命に決められた魂の運命だ」

『どういうことだッ!?』

『いまさらそれはどういうだああああああああ、彼奴が、彼奴がああああああああ』

クリスが獣のように叫び、翼も剣を向け続けるが、無数の剣が空に浮く。

「……………あまり挑発するな」

「君が言うかな？ まあ僕らも、いま決められたことを知ったとしか言えないね。ともかく、あの状態で生還はできて、それができれば星と霊長はもういいんだろ？」

空に浮かぶ衣類のフードは、静かに頷いた。

「……………キャスター」

「ええっ私かい!? まあいいよ、君は完全に切り離されたときに、捕まえてくれ。私は傷でも治しながら、静観してるよ」

すでに闇が吹き出し、剣が彼らの逃走を手助けするように動く。衣類の存在はすでに消えている。

「はあ、運命ってのはホント。だからか聖杯は私達にこんなことやらせたのか。全く、彼がそう言う存在だったとはね……………ま、いまは去らなきゃね」

そう呟きながら、静かに彼らは去る。

それと共に龍崎アスカの遺体は消えた。

数時間後、元々荒地地と化した場所だが、より原型を留めず、三人の装者を回収された。

風鳴翼は迫ってくる刀剣全てを破壊しているが、ほぼ絶唱をしたように血を流し、最後の一本を破壊後、その場に倒れる。

雪音クリスは、吐血しながらもまだ動き、標的を探し出そうとするため、無理矢理司令官、風鳴弦十郎が制止させた。

立花響……涙を流しながら気絶する少女が一人。胸から生える
鉾石など、不可解な点が見られるが、それよりも、
ただ静かに、止まらない涙を流し続け、気を失っていた……

17話・運命

それは、砂のように光景が砕けていく世界。ここは夢、ある者の精神世界。

生きてきた記憶が、景色が、人物が、知識が、全てが粉々に散り、砂へと消滅する。

一人の男が立っていた。

一人の少年が座っていた。

だけど何も反応しない。

ただ、いくつかの人物だけが壊れない。

それだけはけして壊れず、白の世界に存在する。

「壊すべき何だけど……ああ、やっぱり私は、何もしいんだな……」

ため息をつきながら、壊れていく世界を眺めていた……

——小日向未来

その日、響達の顔は酷かった。たった一人、彼を除いて……
だって、彼はいなかった。その場に、いなかった……

「……アスカ……アスカ……」

涙を流しながら、状況を聞いて、私も青ざめた。

友達が、どうなったか分からない。全員が精神的に酷い状態と判断した司令官が、いまは休むように言っ、いま私達は学校帰り。

響は、

「もうへいき、へいき、へっちゃらだよ」

そんなことを言うけど、誰もそんな風に見えなかった。

何より、響の GANG ニールがまた暴走したらしい。その胸、傷口から鉱石が生えていたと、いま調査中らしい。だからこそ響はより戦うことは許可しないと、私に言ってくれた。

響以外の装者、翼さんクリス。彼女達の顔も酷い。

クリスは平気だよと、翼さんも平気だとしか言わない。

誰も、平気じゃないよ。アスカ……

「きよ、今日はどこ行く？ ふらわーに行くのうか？」

「あ、いいねそれ」

そんな会話の中だった。

「ふらわー？ いいね、花の名前か」

白いローブの男性を見た瞬間、響の顔が変わった。

鞆を投げて、そのまま殴りかかるかのように睨んでいる。そんな響は見たことない。

「はあ、嫌われたか。まあ、龍崎アスカを殺したんだ。当然か」

「えっ……………」

そう言つて、石階段に座り、たい焼きを食べている男性が、そよ風のように、無視できない言葉を簡単に呟いた。

「あ、すかを……………殺した……………」

「ああうん、私と同じ、グラント・サーヴァントである、アサシンがね。私もその為に顕現して、この世界にいるんだ」

響の拳を握る音が聞こえる。私も、

「なんでそんな、そんな簡単に言えるんですか!？」

この人は簡単に、アスカのことを簡単に言う。

そう言われ、ふうとたい焼きを一つ食べ終えて、

「私達も事情があるんだ、彼を殺して、次の人生を歩ませないといけな
いからね」

「次の人生？ なんです、なんでアスカがそんな。死ななきや、アスカが死ななきやいけないんですか!?!」

私達はこの人のことを見る。だけど、私達の印象は、見てない。

この人は私達を見ていない。まるで一枚の絵画のように、線引きさ
れている。

「……………インカムは付いてるか？ これは彼に関わる人達が聞くべ
きだから」

「……………」

静かに私は響の変わりに携帯を操り、目の前で突きつけた。

それにありがとうと言われた。私も不思議だ。不思議と嬉しくも
何ともない、むしろ怒っている。当たり前だろう。

「さて我々が龍崎アスカを殺さなければいけない理由、それは、彼がこの物語に関係ない人物だからだ」

『……………どういうことだ』

私の携帯から、司令官さんが呟く。何かある際の通話、まず話を説明して突きつけたため、あの人も、ううん、全員が同じ感情で、話を聞いている。

「彼は特別だ、特別すぎて特別なんだ。ゲームとかアニメとか分かるよね？」

「えっ、ええ」

ついアニメの単語で答えた板場さんが答える中、それに、

「なら、もしもだ、もし物語の中に、主人公も主人公を導く人物いなかったら、どうなると思う？」

「そりゃ、物語事態って言うか、そもそも主人公がいなきゃ何も起きないし……………」

「そうだね、そして世界ってのはそんな都合が付かない。だからこそ、彼が必要なんだ」

何を言いたいか分からない、その人は遠い目で告げた。

「私達の世界はね、物語、歴史、または分岐点。その時、その場に、その人がいなければいけない時の保険をかけている。そう、導く者や、主人公を、保険として用意しているんだよ」

「……………えっ」

—— ???

ある時は、未来に英雄に成った自分と対面し、己の道を知った人物だったのだろうか？

ある時は、本来短命な生命体だが、英雄の心臓を受けたり、竜になった人物だったのだろうか？

ある時は、月の主導権を賭けた戦いに、身を置く人物だったのだろうか？

だが必要だ。そう、世界には必要な物語。一つ間違えれば星も人類も何もかも消え去る物語。

だと言うのに、バットエンドは許されない。トウルーで無くても、被害は最大限に抑えなければいけない。

だから保険がある、だからこそ『それ』はいる。

代わりか当事者か、もしくは被害者か加害者か、ただいるだけか、知るだけか、ただそれだけの存在が必要だった。

世界は欲した、英雄か英雄を導く者か、その糧になるか友となるか、敵か悪か、被害者でも何でもいい。

分岐点、パラダイムシフトたる存在に足す何かが必要だった。

だから、一つの魂に、全てを背負ってもらった。

「それが、彼、この世界、この次元、今世の器龍崎アスカとして、ここにいた魂の正体だよ」

「……………抑止力」

アスカが言っていた、抑止力。世界が害悪など、何かあつた際止める存在の力。

それに領きながら、たい焼きを食べる。

「これもまた、抑止力の一つ。彼はただ、サポートか担う役をする魂だよ。平行世界とかも入れれば、彼は偉業は数知れずだろうね」

「けどまあと付け加える。」

「だからこそ、負担があるんだ。一つの魂に、いくら浄化、輪廻転生があるからって、そんなものを背負っていたら壊れるから、休み休み。まあ関係ないときはホント関係ないらしいよ。実際前世は普通の学生だったろ？ 彼、あれもお休み期間だよ」

その時も歴史が分岐することが、側であつたのかも知れないし、無かったかも知れないと言う。

「けどね、それでも長く一個人でいられるのも困るんだ。時には人類史が消え去る事件すら起きることもあるから、そんな何もない時を過ごされても困るようだ」

そう言つて、ため息混じりに、

「まったく、私は言われたとおり、死ぬ切っ掛けを作ったとはいえ、いい気にはなれないよ。前世の彼には悪いけどね」

それに全員が凍り付いた。

「……………なに言ってるんですか」

響の声が、低かった……………

「……………」

それでも彼は、手のひらに、きらきら綺麗なチヨウチヨを作り出した。

「私はただ、彼がかばうだろうと選択をする少女に、親御さんと別れて、道路越しになるように、この子で子供の目を引きつけた。おかげで前世の彼は、その少女をかばって、見事に死んだ。英雄だね彼は」
その時、ゴンツと拳をたたき込む音が鳴り響く。

それは、

「奏さん……………」

いつの間にか奏さん、アスカのサポートで、アスカに助けられた人。その人がいつの間にかいて、拳を振り下ろした。だけど草木の壁で防がれている。

「……………ふざけるなよ……………」

血を流しながら、草木の壁に拳をめり込ませ、奏さんは睨み続けた。

「彼奴が子供をかばって死んだ？ 交通事故だろ？」

「ああ、よそ見運転は本当だよ。だけど避けられる未来だから、少し細工を私にしろ。それが世界からの指令オーダーだった」

「だからした？」

「ああ、彼の世界では役目も何もなかったからね。もう死んでも問題なかった」

その言葉に、奏さんは拳をめり込ませた。壁を突き破り、白い人の襟を掴む。

「ふざけるなツ!! なんで彼奴がテメエらの都合で殺されなきゃいけない!!?」

「それが彼の運命だ」

「ふざ」 「ふざけてない」

白き人は静かに、そして遠くを見る。

「彼はそう言う魂なんだ、ただそれだけだ………英霊の座に登録され、都合良く喚ばれるよりも、カウンター・ガーディアン守護者として永劫に戦い続けるよりも酷な運命を、世界から勝手に選ばれた魂。それが龍崎アスカと言う人物が背負う運命だ」

必要なときのため、彼は時折運命により早い段階で死ぬ。

仕方ない、なぜならば、

「世界はゲームやアニメのように都合良くできてない。都合良く未来を動かす運命力が必要不可欠だ。彼はそれに、たまたま選ばれた魂だ、ただそれだけで、私達に命を狙われた」

「………なんでだよ………なんで」

「必要だろ？ 主人公のいない世界に、魔王だけいるなんて、最悪過ぎる。だから彼は主人公になってもらわなければいけない。そして」

時にはその物語が、あったことになっていなければいけない。

「だから彼は悪役にもなってもらおう。始まりの役、終わりの役。どちらでもないければ物語、人類史、世界史は存在しない。悲劇も奇跡も同時に無ければいけない。彼はそれを補助する役なんだ」

飛行機を創り出す偉人、国を立ち上げた英雄、国を滅ぼした大悪党、そして、別の可能性。もしもの物語で、あり得たかも知れない最も最悪な出来事を、彼と言う異物を持って、緩和、もしくは回避するのが役割。

居なくても良い、だが居なければいけない。彼と言う魂に、意見なぞ存在しない。そもそも、聞く必要も無い。

「だって彼はそんなことは知らずに、生きて、演じてくれている。どの世界でも、星と霊長の意志なんて考えず、自分の意志で、彼らの迷惑通り、正規の物語通りの役目、もしくは、あり得たかも知れない、より良い歴史を作り出す。誰も悲しまない存在だ。ま、真似したいとか、そう成りたいなんて、私は一切合切も思わないけどね」

「………」

私、私達はどんな顔をしているだろうか？ きつと酷い顔をしてい

る。

「……………それじゃアスカは……………アスカの前の人生、その前も、その前もその前も前もツ。その人達の人生は」

「確かに自ら選んだだろうけどね、そうなるように多少誘導はあったよ。彼らは」

自由なんて、ほんの少し。例え用意されたルートだろう、すでに別のもう一人の自分が作ったルールだろうが、それを自ら選んだと思わなければやっていられないだろう。

「……………酷い……………」

「ああ酷いね、だけど彼がそんな役目をしていなければ、人類も星も、滅亡していただろう……………そしてそんな魂が、管理から外れ、別の異次元世界へと転生した」

それが龍崎アスカ、私達の世界だった。

「だけど、彼は結局、支え、糧になる存在だ。常軌を越えた、世界の命運に関わり、またその際、前の時聖杯にアクセスし、手に入れた過去の自分。マスター素質を手に入れ、英霊アストルフオをイレギュラーなやり方で召喚し、彼を通し、英霊の力を手に入れた。それが龍崎アスカの、融合型聖遺物、シンフォギア・アストルフオが生まれた理由だね。きつともう生まれまいだろう、聖遺物の融合なんてね」

そして、アスカは偶然転生先で、響に、聖遺物に出会った。この世界の大事件、分岐点を担う、少女達と関わる立場に行き着いた。そう語る。

彼のおかしな点は多く、曰く、一つ、彼はまずゲーム、空想物という形で、魂のルールを定める存在を知っていたと言う、偶然。

二つ、死んだ後の偶然、転生先の母親が、アストルフオの血筋。少なくとも、この世界でアストルフオと言う人物の血を引く、血脈だった。

三つ、彼自身、死ぬ間際、喚んだ。

サーヴァント、自分の定め、運命を喚んだ。

四つ、そして転生先に、世界を担う少女がいて、関わりだした。

完全な異常事態、世界からすれば予測していなかったこと。自分の

世界の抑止力が、別世界での抑止力として活動し始めた。それも引き出した力を使い。

「彼は聖杯の力を無自覚に使用している、君らも驚いているはずだ。全ての聖遺物に適正があることを。当たり前だ、もしもか、それともそれ以前前か、彼は別可能性で、それらの使用者として、別物かそれ自体を扱っていたんだから、適正がある」

「……………」

つまり彼は、全く違う人物、世界、物で、

「ガングニールや、翼さんの天羽々斬、クリスちゃんのイチイバルを使う人だった……………」

「未来先か、過去か、平行世界。それも分からない。本人だろうがもう分からないよ、あまりに多くの別人、別の魂になってるから。もしかしたら、円卓の騎士だったかも……………」

なにげにモードレットの王剣に認められているからなど考え込む白い人に、奏さんは手を離す。

「だからって、なんで殺されなきゃいけない……………彼奴が何をしたんだよ」

「……………」

それに、悲しそうに……………

「彼じゃなく、君らだろ？ 全ての聖遺物に適正する。これ、他の組織や国家に言えるかい？」

それに今度は関係者が凍り付いた。

白い人は早口に告げた。

「ああそうだよ、彼は強力すぎるんだ。この世界ではもうルナ・アタックでもう物語を終えている。もう十分、関係ない世界に爆弾を送ったようなものだ。星も霊長もそんな感覚だよ。元より、彼はいてもいなくても、君らならどうにかできる問題だ。例え彼のおかげで生きてる命があるうとも、変わらない。君がいて、何かできたかい？」

「あ……………」

奏さんはそれを言われ黙り込む。響はすでに拳を緩めていた。少女は静かに呟いている。「だってそうだ、これじゃ、これじゃ」と、

「じゃ、アスカは、アスカはなんですか!!? アスカの人生は」

「酷い言い方だけど、そんなものを尊重するより、新たな波乱を回避する方がいい。全ての聖遺物適合者なんて言う肩書きを持った爆弾を置くよりもね」

はつきりと告げた。

「彼はいても、君や他の装者がいれば解決する。むしろ彼がいる所為で君らに負担がかかる、そう判断されたが故に、この世界で彼の物語は終わりを決定された。だから全力で殺しにかかった。出来る限り、この世界の物語に関わらないよう、主力人物である君らと戦わないようにね」

響は座り込みそうになるのを、未来達が支え、奏もまためまいがする。

「嘘だ、彼奴が死ぬのに、んな理由認められるかッ」

「認められる必要は無い、運命とはそう言うものだ。人に許可をもらう運命なんて存在しない。世界はいつだって、勝手に運命を人類に架す」

それでも認められない。ここで認めたら、龍崎アスカがしたこと全てが必要無いと認め、そして彼が死ぬのは、自分達が勝手に問題を引き起こす可能性があるからと認める。

そんなこと認められない。

「まあ、まだ可能性はあるよ」

「えっ」

全ての者達の声が揃った。

「本来境界に存在するアサシンの剣で斬られたんだ、器も魂も、壊れているはずなのに、彼ね、まだ龍崎アスカと言う自我が残ってる。肉体は私が治してるから、後は境界の呪い、グラランド・アサシンの死に抗い、この世界に生きるのなら、この魂はもうこの世界の物だ。天寿を待つことにする、それも世界が決めたことだ」

元々アサシンや私に勝てればそうだったと伝え、それに目に光が戻る。

「ほん……………」

「ああ、だけど、彼の剣は死。しかも彼は、その直前生きることをやめた」

「……………」

声にならない悲鳴が聞こえた気がする。全員が振り返る。

響が自分を抱きしめる。側にいる未来もまた、静かに抱きしめる。

「だけど、壊れていく精神世界の中で、この世界の記憶だけはヒビが入る程度だよ。以上かな？ 私が君らに言うべきことは」

そう言つて、いつの間にかたい焼きが無くなっていた。

この人は、結局何がしたいのだろうか？ そう思う少女、未来は静かに尋ねる。

「貴方は」

「私はね、人間じゃない。この身体は聖杯が渡した仮初めの身体だ。そして本来は死なない、静かに暮らしている、花の魔術師だよ」

「それって」

「ブリテンのアーサー王をそそのかした、バカな魔術師さ。彼女には……………いや、やめておこう。意味無いね、この世界じゃ男性かも知れないし」

そして静かに去っていく。

その場には花が生えていた……………

「まあ一つ言えるのは、彼の人生は作り物ばかりだったのが、いまだけ、今回だけその外枠から外れたってことだね。私としても……………一度くらい、自分の意志だけで物語を生きて欲しいと思っっているよ……………」

そして花が舞い上がり、そこに白い人はいなくなっていました。

——
???

砕けていく世界の中、それは、そこにいた。

「……………壊れていくね、君の世界」

それは答えない。

「……………だった、もしかすれば、あるいはの可能性。それらを確定する

存在か、そんな魂の役割があるなんて……世界はどうあっても、どんな手段を取っても、世界存続を優先するか……」

だが何も答えない。

「ま、そんなものか……アーサー王も性別違いでいるくらいだし、もう何がなんだか分からない。都合良くその世界にもアーサー王がいる世界なんてね。その都合を付けるが君なら、君はやっぱり円卓の騎士……もしくは、彼女のもしものかな？」

なにも言わない。それに黙り込んでいると、

「ん？」

だがその手には、携帯が握られていた。

「……君は好きなんだね、その中に君と深い縁がある英霊でもいたのかな？」

そう言いながら、それを握り続けた。

「……」

それからなにも言わず、崩壊する世界の中で、彼が目覚めるのを待つ……

18話・白銀の騎士

壊れていく、壊れていく。以前の自分、記録、聖杯に登録されていて、自分に写された記録が壊れていく。

「……………多いな」

死の刹那、だからこそか、過去や未来、平行する自分の能力、素質へのアクセス。それと共に英霊の召喚など、ホントよくできたキャラクタ―は感心しながらも、それに驚いた。

その膨大な記録、本来は正史では無いと言う理由から、ちゃんとした場所に保存されていない記録の膨大さに、それを必要な物だけを引き出したこと。圧倒される。

多くの時代で、語り部や吟遊詩人だった。

ある時は勇者や英雄、または友か仲間。名のない仲間だったりする。

または被害者か加害者、様々な一面を見せながら、その歩みは止まらない。

なぜなら全てリセットされるからだ。

どんな悲惨な人生、過酷、苛烈、どんな人生、物語を歩もうと忘れて、そしてまた歩くのを繰り返す。

「……………そして」

そしてただの人の時代、だが、そのほとんどは長生きできないか、突然のことで死んでいる。

他者として傍観すればするほど、後悔、絶望、希望、救済を抱きながら歩く理不尽な運命。

たった一つ共通点があるとすれば、彼が彼である生きる意味が、全て同じであることと気づく。だからこそ、彼は自分達の前に一度現れたのだろうか。

「全く……………普段絶対に現れない彼が現れたときは、驚いた……………だがまあ」

忘れるから問題ない。なんて残酷な言葉だろうと、彼は思う。

壊れ行く世界の中、ただ静かに、外の様子確かめる。

「ふむ、もうだいぶ日にちは経ち、タワーがノイズに襲われてるな………? あれは………」

——マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴ

ママが月落下の阻止のため、他組織と協力するしかないと判断した。

だが、彼らは私達を裏切り、さらに暴走したドクターの所為でノイズがタワーを囲む。それでも彼らは我々の命を狙う中で、

「また貴方………」

銀色の鎧を着込む騎士が、静かに兵士達を鎮圧した。殺してはいない。

そばで震え上がる親子を見ながら、

「一般人、死に慣れていない者の前で人殺しする気は無い」

そう言いながら、黒のガングニールを纏う私を見つめ、静かに言う。

「早く行け、その子らとこれらは俺が見る」

「逃がしてくれるの?」

「あんたを止めるのは、俺の役ではないのでね。令呪ももうすぐ無くなるしな、後は奴の気合いだ。俺の役目じゃない」

そう言いながら、静かに私は立ち去るのを見つめる。

その騎士は、なぞの言葉を残していく。

「………止めてくれる人………」

そんな人がいるのなら、早く現れて欲しい………

小さく呟き、私は私のすべき事のために動く。

——
???

ノイズを討ちながら、静かに爆発するタワーから、先ほどの子が出るのを確認しながら、周りを見る。

ビルの上から、ほぼノイズは駆逐し、一般人の被害も抑えたのを見る。てか、俺達がいるのだから、出るはずもなく、悪くて物が壊れたり、けが人が出た程度だろう。

「だいぶ片づいたし、もう一般人はいない………で、何用だアサシン？」

そう言うと、闇の中からそれは現れ、白銀の騎士を睨む。

「いまだ骸の身体に亀裂が入るものの、すでに治りかけたグラウンド・アサシン。」

「治りかけ程度でも、彼のサーヴァントは自分と格が違いすぎる。ただいるだけでノイズと言うただの固まりは消し飛ぶのだから、被害が出るはずもない。」

「貴様、何者だ？」

「だいたいを終え、自分と言う異常事態を察して現れた彼の者に対して、剣を肩に置きながらため息をつく。」

「平行世界、別可能性軸の英霊。クラスセイバー」

「それだけは素直に言いながら、静かに見る。」

「あの魂に喚ばれた者、以前。あれの英霊版だ」

「その言葉に、少しばかり驚きながら、お互い間合いの中にいる。別に戦う気はないが。」

「ほう………ライダーアストルフオではないのか？」

「それもだ。俺の方はいまのまままで顕現も何もしないままだったから、気づかれないのも当たり前。なにより大元は全く同じだ、気づく方がおかしいし、俺はもしもの英霊だ。察しても、正史の俺と誤認するからな」

「そう言いながら、それは静かにノイズが消えたことを見る。」

「俺の方は令呪がある所為で働いているだけだ。もう二画使用している、悪いがこのままあれが消えるのを待つ」

「貴様はマスターである奴が消えることを望むか？」

「仲間からは無感情、無関心、無責任と言われててな。俺には関係ない」

「そう言つて霊体、姿を消す白銀の騎士を見ながら、彼も消える。」

「……………ここに来られるんだね」

「花の魔術師、ご苦労だな。そんな男女、もう無理だろ」

消える前に、来世、己の次を見る。無様に原型は無く、ほぼ魂のみ、肉体の形は無くなった、自分だ。

そう言い、思いながらその辺であぐらをかき、ただ座る。

「君がここに来られたということは、君は彼だね？」

暗殺者ですら察することが出来なかった魂の気配に気づく。腐つてもキャスターの最高位と言ったところか。

「チツ、こんなのが俺か。ライダーアストルフオの影響があるからと言え、情けない。まさか女になるなんて」

睨まれてもなにも言わず、ただそれはそこに座っている。

思い出が壊れ出す。二課を始め、家族や、幼なじみの思い出が砕けようとしていた。

「……………聞こえるか？ 来世」

だがなにも答えない。

「その神の槍を纏う子は、融合の適正率が高く、身体事態が飲み込まれかけている。このままじゃ死ぬぞ」

だがなにも答えない。

「……………このままか？ このまま終わるのか？ この世界、龍崎アスカと言う物語はこれで終わりか？ 答えろ」

だがなにも答えない。

「……………その程度か、俺達の物語なんて……………選ぶのは、自分じゃない自分の時だけ……………俺の物語はなんだろうな？ 他の俺は俺ではなく、あの独りぼっちの王様を殺す騎士だしな……………」

なにも言わず、ただ時間が過ぎる。ここと世界の時間はかみ合っていない。もう分からない、これはもう……………

「……………もういい。結局俺達は、何も決められないんだ」

そう呟いた瞬間、戦慄が、歌が響いた。それに二人は立ち上がる。

「なっ、精神世界、夢の世界で誰が干渉を!？」

「これは……………!？」

???

携帯が鳴っている。メールだ……………
静かにメールを見る。誰だ？

『題名アスカへ、届いていますか？』

アスカへ、未来が攫われた。これからフロンティアって言う場所に
出向き、助けます。

もしかしたら私、その時に聖遺物の融合で死んじゃうかも知れない
らしいんだ。

アスカ、アスカもこんな感じなのかな？ 自分より、私を優先した
アスカ。ごめんね、私は、私が助けたい人のために、この手を伸ばす
よ。アスカがくれた、助けてくれた命なのに、ごめんね。

私がアスカに助けてくれたのって、これで何回目だろうね？

コンサートの時、ノイズから奏さんを助けたり、

その、悪のりした人がウチに石投げたときも、家族ごと泊めてくれ
たり、女装して、あのもやもやくってした雰囲気壊してくれたり、ホ
ント色々。

勉強教えてくれたり、私の我が儘聞いてくれたり、ホント、どれく
らい言えばいいんだろうね？

だから、アスカの人生が無駄だなんて誰にも言わせない。

いない存在だったのかも知れないけど、ここにいる私達は、貴方を
知ってるんだよ。

最後に会いたかったな……………それじゃ、ごめんアスカ。だけど必
ず、私はみんなと手を繋いでみせるよっ
』

……………

……………あっ……………

あのバカはッ!!

『『令呪を持って命ずるッ』』

携帯を壊れるように握る。だが、壊れたのは、過去の自分。立ち上がると共に、砂になっていた景色が戻り、自分が現れる。

『グランド・アサシンの死の呪いを断ち切れッ!!』

そこにいるのは、ある英霊と同じ姿の、リディアン音楽院の制服の、少年だった。

目の前にいるのは花の魔術師と、オレのサーヴァントだ。

なら利用するだけだ。それも仮面の奥から微かに笑みを見せる。

「応ッ」

その様子にはかばかしいように、だがすつきりした様子で銀の騎士は剣を構える。

だが、キヤスターは意識だけ覚醒した彼を見ながら、冷酷に告げた。

「それでも足りないよ、君はすでに三画使用している」

後はこの世界からの脱出、それにいまここにいるサーヴァントを使うのはいい考えだ。だが足りない、死その物である存在が断ち切ったのだ。まだ足りない。

だが、オレはニヤリと笑う。

『二度令呪を持って命ずるッ』

「……………あッ」

キヤスターは間の抜けた声を上げた。そうだ、ここは全てのオレの情報がある精神世界であり、夢だ。

何処かの世界、時間、次元で使っていない、手に入れた令呪が存在する。

瞬間、窓ガラスのように使われなかった、自分の令呪が浮かび、使用された。

「つて、それってありなのか!?!」

その令呪だけが輝く、無数の令呪は、星のようにあり溢れている。『断ち切れセイバー!! 三度命ずるッ、断ち切れッ。四度、断ち切れッ。五度、断ち切れッ!!!』

手に持つ携帯も光り輝く、まるでそこからもあるように、何百、何千の令呪を使う。これがオレが歩んだ道の、過去の自分がくれた対

価、あるいは、抗いだ。

いままでの道は、その時の自分にとって選んだ人生だ。役目が決まっただけでも、その役目の中で決めたことはその時の自分の意志だと、はつきり言える。

だが、このオレと言う自分は、完全に外れているのなら、好きにさせてもらおう。

それが、自分達の答えだ。

その後、道化に戻ろう。また演じよう。いずれかの英雄、反英雄、怪物、なんであろうと、もしもや、成ればいけない存在に成り、歴史を守ろう。その時の自分は、これが自分だとはつきり言うだろうからな。

そして、はつきり言う。これがオレだッ。

『断ち切れッ』

大勢の声が被る。この一度だけは迷い無く、全員が決めた『自分の選んだ、自分だけの選択肢』なのだから。

振り下ろされた銀の閃光が、死を吹き飛ばすと共にそれと共に駆ける。

——花の魔術師

「あつはははは……出て行っちゃったよ。ああ……」

深いため息をつき、別の場所に現れ、静かに座り込みながら、

「人間って、ほんつと凄いな」

そう優しく微笑む。

——帰った

「つて、どこの空と海イイイイイイイイイイイ!!」

出てきたのはどこかの大海原の上だった。

「おいしいおいしいおいしい、シンフォギアシンフォギアああああ」

急いでそれを歌う。

歌うとき、微かに感じ取る。いつもと違う、それに……………

——月読調

ドクターのやり方に賛成できない。だから私は、船の人達を助けるために動いた。

だけどうして？ どうしてなの？

「切ちゃんっ」

そんな私に、切ちゃんが刃を向ける。

ドクターもだ、それは分かる。ドクターは本気だ。操る神獣鏡の装者のお姉さんを使って、私へ攻撃する。

その時、刃のような白銀の壁が、私達を守った。

「デス!? 調……………助かったデス、けど」

「誰だ!？」

その時、白銀は、蒼い、雪のような人だった。

「で、なんで俺もいるんだよ?」

一人は燦然と輝く銀色の甲冑を纏い、騎士のような人が、蒼い盾と銀色の剣を持って呆れていた。

「二応、まだ令呪が有効だ。活用しろ、しかしその格好……………」

それはまるで銀世界から生まれた妖精だった。

可憐で可愛らしく、それでいて凜々しい。美しい、不思議な魅力を持つ、一人の装者。二つの剣を構え、八重歯を見せて笑う。

「別にいいさ、守れば。もうシンフォギアの格好がどうなってもな」

銀世界から現れた、一人の騎士と可憐の騎士がそこにいた。

「きれい……………」

「アスカ……………」

「お、まえ」

「ああ、ごめん二人とも。けど、ここからは龍崎アスカは異物じゃないから、参戦させてもらうよっ」

そう言って、歌と共に、無数の光のレーザーが放たれた。だけど、

「ヒポグリフっ」

そのヒポグリフが肩に付けた盾が展開して、壁のように防いだ。そ

の光を見て、騎士の人がうげつと呆れていた。

「アキレウスの神秘か?! 竜殺しの魔剣とかといい、どういう経緯で手に入れた……ひでえ人生しか歩んでないのか俺はっ」

「全く同感だよ」

そして可憐な騎士は私に近づいて、私を抱き上げた。

「!?!」

「この子を戦艦の方につれてく。イガリマの子頼んで良い?」

天羽々斬の装者達へそう言う。二人とも驚愕していた。

「……………全く、出てきてすぐに」

「ちっ、しゃーねーな。後で文句なり説明なりしろよアスカっ」

そう言っつて二人の装者は切ちゃんの上に、ヒポグリフと言うアームドギアに、白銀の騎士が乗る。

「馬よりか早そうだ、俺はこれで動くぜマスター」

「ありがとう」

飛翔するヒポグリフは飛び立ち、急いでその場から私を連れて離れていく。いまはもう大人しくするしかない。

可憐な騎士は蒼と銀の光が翼のように広がり、そのまま飛び立つ。

「これもなんのだ……………ドラゴンのみみたいだが……………」

「……………あ、あの……………」

やはりあの時、死んでもおかしくない怪我を負った、いや死んだ人。

私の、私達の所為でだ。なのに平然としている。

私の視線に気づいたとき、少しバランスを崩す。

「つと、ちゃんと捕まっ……………!?!」

その時、何かが神獣鏡の元に、飛び込んだ。

「響……………彼奴、ってかあの装者は……………未来」

そう言っつと、知っている者達が戦い始めたようだ。それにどうするか考え込んでいた。

「……………どうするの?」

いまこの人は海の上に浮いてるけど、私を抱えて、いま戦い始めた装者の元になんていけないのだろう。

だけど、

「…………しばらく抱きついててくれる？ 幼なじみの大げんか、止めないといけないんだ」

「…………私を危険にさらすの?」

酷い方だ、だけど、

「守るよ」

この人はすぐにそう答えた。

「…………偽善者」

「知ってる、けどね」

その人は、

「オレ、それでもいいから君達を、響達も救いたい。それくらいやらせてもらえなきや、やってらんない人生だもんでね」

どんな理由かは分からない。分からないことだらけで頭が一杯一杯だ。

だけど、その顔は、私達と違って、迷ってない。

(…………信じるの…………私…………)

そう思いながら、そつと抱きついた。

「ありがとう、月読」

「…………調」

そう呟くと、

「それじゃ行くよ、調っ」

それは蒼と銀のマントのような翼を広げて、羽ばたいた。

——立花響

「未来ううううううううう」

一つの光が私達を貫いた。

そして意識が…………

「二人ともおとおおおとおお」

急いで私達を抱き上げ、近くの誰もいない船に乗る。

私達が驚き、目を見開いた。

「アスカ……………」

「…………ごめん、遅くなったよ」

「あす」

その時、装者、シンフォギアが解けた。

「えっ……………」

「……………」

着ていた服が元に戻らないため、アスカがマントで私達をくるむ。きっと、未来のように真っ赤になってる。見られた、もの凄く見られた。色々言いたいことがあるのにッ。

「……………色々」

その時周りからノイズが現れた。

「つて空気読めよおおおおお、ジークフリートさんでも読むぞここッ。テメエら覚悟しろッ。調もここにいろっ」

蒼と黒の魔剣と、銀と蒼の王剣が突然現れ、歌を歌う。いつの間にか、マントが取れているから、私達が着ている。

「邪魔だッ」

たった一降りで、雷鳴降り注ぎ、剣風がノイズを吹き飛ばす。魔剣と王剣に驚きながら、

「ともかく、三人を船に。そろそろ」

そばの海面から潜水艦、二課の本部が出てきて、そこからすぐに奏さんが出てくる。

「アスカ!? お前、その格好」

「話は後、オレの替えを二人に。話はそれからだ」

「……………ああ」

力強く頷き、こうして私達は再会する。

「……………俺は完全に無関係だよな」

そう言っただけ見知らない騎士の人は、ヒポグリフから下りて呟く。その手に、アスカの王剣を握りしめて……………

19話・自分としての決意

司令室で、何故かクリスが翼さんを撃ち、切歌と言う子と共に逃亡。まあ、これはきつとソロモンの杖に近づいたためだろう。

それを言った途端、司令官は苦虫をかんだ顔になる。やりそうだからだ。

「クリスくんはソロモンの杖に対して、ずいぶん責任を感じていたからな……」

情報整理の中、調ともう一人の自分がいる中での会話。着替えた未来はすまなそうな顔をするが、それは響を助けたいと言う思いを利用したウエル博士が悪い。

あの野郎だけは切り刻もうと思いつながら、久しぶりにおにぎりなど食べる。飯食いながら、未来が解いた、古代の遺産を映像で見る。

「そしていま、フロンティアってもんが現在も浮上中」

未来が使った聖遺物、神獣鏡。その性能は能力の無効化だった。

聖遺物相手に対して、絶対の強さを持つ。ある種、ジークフリートの魔剣のように限定されているが、その分効果を発揮すれば恐ろしい物らしい。

それでフロンティアの封印が解かれ、それにて月の落下を防ぐ。

月の落下、数多の国や組織が観測していながら、混乱を防ぐため秘匿するのはいいが、自国を最優先するあまり、現状悪い状況に陥った。

それに業を煮やしたのが、ナスタージャ教授と、彼女の元にいた、ファイネ候補の装者達であり、マリアはファイネの名を騙り、ファイネとして、フロンティアを使い、月の落下を防ぐつもりらしい。

「って待てアスカ、なんでマリアがファイネじゃないって分かる？」

「もうあの人は表に出る気は無いし、ってか、目の前にいる」

「！」

どうも魂、気配に敏感になっている。それに関して当然だろうと言う我がサーヴァント。

「オメエはただでさえ、根元にアクセスしているうえ、輪の外に保存された、正史外の情報を手に入れた。そのうえ、死そのものと言っても

過言じや無い、アサシンの宝具から生を取り戻して戻った。魂が普通の人間より、英霊、神霊に近くなるのは当たり前だ。そもそも魂のランクを言えば神霊と同義らしい」

「……………さすが抑止力ってか」

そんな会話する二人もそうだが、いま司令室内は驚き、一斉に視線の先、調へと注がれる。

「わ、たし、が?」

「だろうな、話聞く限り、その子からは二つの魂が感じられる。ま、いまの俺とこいつの関係みたいだな」

「お前は独自に保存された過去の記録から喚ばれただけだろ?」

「似たようなもんだろ? 気にするな面倒」

そう言つて、過去、別平行世界において、ある英霊の代わりにその英霊の名前で活躍した、別の物語がそう言う。真名教えろセイバーと聞きたくない。

「だいたい分かるだろ?」

そうだよ分かるよ、燦然と輝く銀の剣と、特殊な盾。そして正体を覆い隠す全身鎧って……………

「オレ、女性版が好きって仲間内で話し合ってたぞ」

「正規の記録だと女性って……………語りの中じや男性なのに……………もうなにがなんだか分からない。誰に文句言えばいいんだ」

鎧着たままの俺もオレも肩を落としながらそう言う。

調は少し戸惑うが、平気平気と言っておく。かなり奥にいる。そう出てくることはあり得ないほどに。

「んでだ、ウエル博士は、自分達の活躍を大きく見せる意味を込めて、米軍、追つての人達をノイズで虐殺。ってところか。それを止めてたのが調」

「その男、世界を救わず、破滅させるな。少なくとも」

気のせいか頭の回転がいい、アストルフオの見た目のくせにやはりオレらしい。こういうことに関して、すぐに結論付けた。

無論、誰も否定できない。それほどまでに、頭のおかしい身勝手な人間だと言うことだ。

「見逃せられる話ではない、我々二課もフロンティアに出向く。すでに各国の組織が陸に乗り出している」

「我先に世界を救う、か？　ばかばかしい、英雄なんて面倒なのにな」
「ああ全くだよ、アヴァロンで大人しくお茶してるのがいいのに………あつ、お茶菓子あるかな？　なんでもいいよ、せつかくだし」

いつの間にかいた花の魔術師もいる中、友里さんにそんなことを言う。オレはとりあえず、全てのユーザーの代わりに殴っておいた。

「ちよ、酷いつ。痛いじゃないか!!」

「るつせえ、テメエの所為で多くの人達が悲しみに落ちてるんだよ。真剣なもんにも心痛めてるのは分かるが、他にした行いでも迷惑かけてるの自覚しろ引きこもり」

そもそもこれの所為でアルトリアさんはあんな悲惨な過去持ちになったのだ。ユーザー代表として、殴らなければいけない気がする。「と言うわけで殴る」

「ちよつ、それはいまの君には関係ないだろ!?　それに気を利かせて身体くつつけた後は服もくつつけて、薔薇で包んでたんだよ」

「なぜに薔薇!?!」

「着替えを頼んだ英霊が薔薇の人だからだよ、座に走って、服を着替えさせて欲しいって言ったら聖杯大戦並みの戦いが始まったときは驚いたけど、急いでたから薔薇の人に頼んだんだつ」

「やめて、ちよつと待つ、少し待て、えつ、薔薇？　もの凄く嫌な人しか思いつかないんだけど」

「大丈夫つ、変なことはされてないよ。短パンまで手を伸ばしたけど止めたからねつ。それ以外はスルーしたけど」

「おおおおおおいいいいいいいいいいい」

そしてもう一人の俺は静かにキャスターを捕まえた。

「おいテメエ、何故お前で服着せなかつた？　そもそも座に顔ほどの事案じゃねえだろ？　人の来世をなんだと思ってる？」

「女の子の服は眺めたことはあるけど、着せたことなんてあるはずないだろ!?　しかも現代服なんて特にそうだし、女の子の衣類一度脱がして着せるなんて趣味も無いしね!!」

「ぎっけんナツ!! 頼んだ英霊が一番悪いだろがああああああ」

「黒い髭のライダーだけはまずいと思つて外したのにツ、どうしてこ
うも怒られなきやいけないんだ!？」

「それは当たり前前にアウトだバカ花魔術師!!」

「理不尽なっ!!」

そしてそれを捕まえてから、

「おいこいつも戦力入りさせるぞマスター」

「おう、むしろ盾にしろセイバー」

「えっ、ちよっ。私はここでお茶飲んでるよ!!」

そして、わめく魔術師は無視して、出入り口に出向く。

「それでは、全員準備は良いかッ」

「私は良くないよッ、えっ、ちよっ、本気かい!? 人使い荒いなもうっ」
大陸へと我々も突き進む。

「いい加減に腹くくれキャスター」

「はあいいよ、もう。ま、さすがにここまで関わったんだ。この物語く
らい、ゲストとして出ても文句は無いだろう。彼もいるしね」

そう言われた白銀の騎士は、静かに剣を、クラレントを構えながら、

「それじゃ、サーヴァントセイバー出るッ」

そう言つて、魔力放出と共に大地駆ける。その様子にやれやれと思
いながら、静かに走る魔術師。走るな、魔術使え。

それを追うように、バイクのエンジンを暖めている翼さん。

「別口を私が、雪音は任せろアスカッ」

「ああ、コンソールルーム、またはコンピューター室は任せてくれ翼さ
んっ」

そう言い合いながら、お互い別の方角へ羽ばたいていく。

——マリア・カデンツアヴナ・イヴ

月の落下を止めるため、多くの人達のフォグニツクゲインを束ね、
歌にする役目。それを担ったはずなのに、できなかつた。

それどころか、ドクターが裏切り、月の落下を加速した。

「人類は増えすぎ何ですよおお、僕が新世界の英雄として救いますから、そんなに止めたきや近くに行けばいいんですッ」

そう言つて、ネフィリムと同化した腕で、ママがいる施設を切り取り、空へと放った。

「き、さまあああああああ」

ガングニールを纏い、斬りかかる。だけど、薬による適合率を上げなければ纏えない私では、先のこともあり、すぐに力つきる。

だけど、

「邪魔だ壁えええええええええええ」

壁を壊して、あの騎士が現れた。

「アア？　ここに司令室かなんかか？」

「き、貴様らは!?　装者じゃないのにノイズを!!」

「貴方は……………」

静かに現れた二人組に驚く中、ふうと一息つく白い誰か。

「全く、やつぱり呪文唱えるより殴った方が早いや、次セイバーで出るべきだよ私」

「グラント・キャスターがなに言ってる……………」

そう言いながら、静かにドクターがノイズを放ったが、二人は杖と剣で吹き飛ばす。

「な、なんだお前ら!」

「英霊、とある儀式にて喚ばれる、過去の英雄だ」

そう言いながら、私達は驚いた。

それに顔を歪めたのはドクターだった。

「え、英霊だ?!　認めるかッ、僕が、僕が英雄だッ」

「それ英雄王の前で言えば、貴様程度の雑草、散りになるぞ。マーリン、この状況分かるか？」

「真名で言うの、まあいいけどね。少し待ってくれたまえ、向こうもナスタージヤ教授つて人助けてる頃だしね」

「……………マーリン!?　まさか、アーサー王の」

魔術師マーリン、アーサー王を導いた魔術師。その名前を聞き、ああと頷く。

「ただ、王をそそのかした魔術師だよ。まあいまは関係ないよ、君は護衛を頼むよセイバー」

「はいよ」

「それと、あれあれ」

そして一つのモニターを指さす。それを見ると、そこには、

『ホオオオオオオオオオ』

ヒポグリフが空へと放たれたはずの私設を受け止め、地面に戻している。その時、その主である彼が……………

「……………いない？」

「あつ、騎獣だけに押しつけたな」

「あつははは……………」

——暁切歌

私が私で無くなる。そう思いこんでいた。

だけど違った、フィーネは調だった。だけど、もう止められない。

絶唱のイガリマが向かってくる。

ああ、これできよならデスね。

そう思ったとき、

(あの人もこんな感じだったデスカね……………)

あの時の装者の人を思い出しながら、何故か生きていた。

(できればどうやって生きていたか、聞きたいデス……………)

そしたら、調と仲直りしたいデス……………

……………

「デス？」

「えっ」

無数の本のページが私達を包んでいる。

「危ないなもう……………まさか絶唱でぶつかり合ってるなんて」

「貴方は」

「どうして」

本を閉じながら、私達に近づく。

「調、少し落ち着いて、フィーネ……………了子さんのこと話してられる

か?」

「うん………ありがと、アスカ」

「………」

訳が分からない、その後、私達の様子を見てから、あの茶髪の人を追いかけて、猛スピードで駆けていった。

「あの人、あの人達が言ったの。私の中のフィーネは目覚めないって、あの人はもう、表で悪者するの疲れたから、眠ってる。だから、私は大丈夫だよ切ちゃん」

「調………」

私達はちゃんと話し合えば、心に抱えていることを話し合えばよかった。

あの人達には感謝しないといけない。おかげで、大切な家族を、守る覚悟ができるのだから。

——白銀の英霊

「ちっ、おい花の魔術師、どうにかしろ」

踏みつぶす、斬り壊す、握りつぶす。

ノイズとか言う兵器は、英霊であるこの肉体を炭化できない。その様子に男は奇声を上げる。

「何故だ!?! 何故貴様らは僕を邪魔をする!?! もう月の落下は僕にか止められない!!!」

「んじゃ月壊せばいいんじゃね?」

「いやダメだから、元の軌道に戻さないとダメだから」

「めんどくせえ」

両方うるさい。一方は僕が救世主だとわめき、もう一方はおやつ食べたいなと子供のように言う始末。愚痴を呟く、もううんざりだ。

「はあ、私は別にこう言った機械的な術式の専門じゃないんだよ?」

一応言葉は分かるけど、もう適当にスイッチ押すか、別の場所からの操作可能にする程度だな」

「後者にしろバカっ、もう一度言うバツカっ。精密機械にそれは無いぞバアカっ」

「はいはい……はあ、英雄英雄って、なんで好きこのんでんなもんに
なりたがるかも分からない。その所為で、説明書無しに機械操作しな
きやいけないんだからもう」

そう言いながら、ノイズが大群が襲いかかるが、剣に銀の光が集ま
り、一降りで断ち切る。

「安全圏で菓子つまもうとしてたテメエが言うなマーリンっ。こつち
は魔物が出れば斬り殺しに出ないといけないし、世継ぎ、血筋問題で
アーサー王はどんなひでえことになったかッ。後始末したが、正史
じゃねえから平行世界扱いでさんざんなんだぞ!？」

「……君、やっぱり円卓の騎士、その別可能性だよね？ クラレント
持ってるし、円卓の騎士だね、私に恨みあるね？」

その言葉を聞き、静かに兜を外す。その顔を見て、気まずそうにす
るマーリン。ザマア。

「うわあ、君も女の子なのかい。彼のこと言えないじゃないか」

「そこじゃねえよっ。そして俺はしつかり男性だ!! だああああ、テ
メエが導き手でありながら、どんだけあの人苦労かけた!?! 本来な
らテメエが平行世界だろうと関係無く殺してるッ。むしろブリテン
と関係ないいまだからこそ、テメエを殺せるッ」

「君、無関心、無感情、無神経だろ!？」

「テメエとランスロット卿は別だッ、ガウエイン卿もだッ。くそっ、考
え出したら殺したくなってきたッ。円卓の騎士どもっ、仕事やら王の
子供やらサボり魔の俺に全部押しつけやがってッ。ガウエイン卿は
王のやること全部正しいとのたうち回るしッ、ランスロット卿は王妃
に手出すしッ、その所為でアグラヴェイン卿は告発したりするしッ。
俺が内密にしようとな努力してるのに他の騎士どもは他の騎士ども
はッ」

「待った待ったッ、君は可能性軸の円卓の騎士だからねっ!! 正史の
彼らに飛び火は酷いよっ。そりゃみんな残念だけど!!」

「分かってるッ、本来の歴史じゃ、俺は王を殺す叛逆者だッ。くそっ、
それも円卓の騎士どもの所為だッ」

その言葉に、本当に嫌になる。確かに王のやり方には賛成しかねる

ことがあった。だからと言って、あの女の言うとおりに玉座なんて面倒なものに座る気は無かった。

王の資格？　いらん。本来の自分は、なぜそれを欲しているのだろうか？

「国や世界を救って何がしたいんだか、面倒通り越して、やりたくねえな」

「そんないい方をしていると、

「なんで……………」

「ん？」

黒い姿の彼女が話しかけてきた。

「なんで世界を救いたくないって言えるの……………」

その顔を見ながら、

「俺はそばで国一つ守ろうと、心身を削った王を知っている」

「そうだ、俺は彼女、母上とも言うべきか、父上と言うべきか。あの女の所為で分からないが、王を知っている。

「誰にも理解される、理解者も得られず、王と言う理想像を押しつけられて、何一つ、休まるひとときも与えられず、不老の力で誰かに殺されるまで永劫を、王として生きた王をな」

ガウエイン卿は全部正しいのたうち回り、ランスロット卿は王妃に手を出すし、アグラヴェイン卿はそれを告発しようとしたり、他の騎士も王は人の心が分からないと言う。

いや、分かるかそれ？　そう言う風に、我々が、ブリテンと言う国そのものが押しつけたんだぞ？

「賊殺すために、宝物庫から適当にこいつを手を取ったら選ばれたから分かる。選ばれるってのは、理想像を押しつけられるってことだ。望んで成ればいいが、それでも、成りたくないとか心から思う」

俺の可能性では、王はランスロット卿と王妃のことを許した。ただ生まれた子供は王の子として扱われたが、仕方ないと納得。二人は許された仲であった。

その後俺は色々あってから、とりあえず円卓やめよと思ったが、まあ死んだ。仕方ない、俺の物語はあり得たかも知れない物語、適度で

いいんだろう。

ま、いまはそんな経験を得た俺として、

「貴様に問おう、血の歌を歌う歌姫よ。貴様は世界を救いたいのか？

自分で世界を救いたいか？」

それは意味は同じでありながら、やろうと言う思いは違う。

「私は……私は世界を救いたい……」

「それは」

「あの子が守りたいと、妹が守りたいと望んだ、世界だから」

勝手だ、だからこそ、

「それでいいんだよ、王だの英雄だの聖剣なぞ関係ない!! 俺が望むのは、結局自分で選んだ道を、自分の満足な人生と言えればな。世界を救う? んなもんついででっ、お前は妹が守りたいと願ったからで守ればいい。それが不純だのなんだの言うのなら俺が、いや……オレが斬るだろうよ」

ニヤリと獰猛に笑い、結局そんな生き方が出来る奴が英雄だと思いつながら、ノイズを切り伏せながら。飛び込む子を隠すため。

「お前の手に血は似合わない」

「貴方は」

飛び込む影に驚く黒の歌姫、飛び込む影に、自分では、部外者ではできない願いを告げる。

「頼むぞ、真成る神の槍、いや、全てを繋ぐ手を持つ者」

「だ、誰だ!!」

「撃槍、ガングニールールーッ!!!」

——龍崎アスカ

そんな叫びと共に、しばらく待っていたら、やっぱりかと響が出てくる。ついでに過去の自分が出てきた。

「よ」

「ようって!!」

その顔はなんとと言うか、ある叛逆の騎士を銀髪の蒼い瞳に変えて、

男性にしたような顔立ちだ。

その場で崩れ落ちなかった自分を褒めたい。

「ぎ、残酷すぎる………なんでだああああ、オレの方が男性なのになんでだああああ!!?」

「嘆くな、嘆くのはこっちだ。あと、俺も男だぞ」

いま現在、アストルフオのシンフォギアスーツはもう女の子。むしろそっちの方がしっくりくる。セイバーの目が辛いぜ………

ともかく、

「翼さん、クリス」

「……………」

やってきた二人。クリスは睨んだだけで人を殺せそうなほど睨んでいる。やっぱり一人で死んだことがそれほどまでに気に入らなかつたらしい。

それは翼もであり、実は船で回復した際、いまは戦場と言っていたが、刃のように睨んできた。睨まなかったのは響と未来だけ。まあ未来は後は怖いです。

「!? なんか来るぞ」

「!?」

その言葉に、地面からネフィリムが表れた。これは、

『聞こえますか?』

「ナスタージャ教授!」

『それはドクターウエル、フロンティアと融合を果たしたネフィリムです。このまま放つてはおけないもの。すみませんが』

「倒せつてことか、分かりやすい」

「だそうだ、できるかアスカ?」

「響」

「うんつ、へいき、へつちやらだよ♪」

我々全員が武器を構えると共に、駆けだした。

—— ???

「ふむ、これでもう問題は無いか」

モニターで操作など、ここでするべきことをし終えた様子を見て、彼は呟く。

「感謝します、私の護衛なぞ。まさか、貴方のような方に守られるとは」

「気にするでない、ここでの我は暗殺者でも無いのだろう。もとより、本来の役目として活動する気はない」

そう、彼は表に出ず、自分を見た者は例外を除き、死ぬ相手だけだ。だが今回は例外過ぎるのだろうか？と領きながら、

「キヤスター傍観者のつもりか？」

「おっとバレた」

やはり本家のように気配消しは無理だ。彼、反射的に斬りかかろうとしたしね。

なぜここに？ 霊体って便利だね、移動が早い。

「70億人分のフォグニックゲイン……世界が、歌で一つに……」
あるモニターでマリアと言う歌姫と共に、世界が歌う。その光を見ながら、彼女は涙する。

これを見ながら、後は彼らがネフィリムを倒すだけだが、

「だが月の施設が機動した、この世界の物語は、また動き出した」

「……………はい」

「だが我らは手を貸さぬ、なぜならば、我らは外の理。故に今回のみ」

だが、だからこそか、彼らが、全てを束ねる。

もう彼はこの世界で活動する抑止力として、星と霊長は定めた。本人の意思は関係ないが、そこはこれ以上言わない方がいいだろう。

結局星と霊長の意志は曲がらない、彼の魂は自分達の所有物。あれはそういうものだからね。

ま、どの時代の彼だろうと、自分の意志だと、きつと言えると思うけど……………

「ああそうだ、彼が精神崩壊から脱した理由を伝えておくよ。貴方から彼らに伝えて置いてくれたまえ」

彼の魂をつなぎ止めた少女の歌を聴きながら、私は微笑みながら、その光景を語ろうか……………

空はすでに大気圏すれすれの中、七人の装者が揃う。

その歌を束ねるため、一人の騎士が前に出る。

「さて、これで俺は役目終わらせてもらおう。いいか俺ッ、これがこいつの真名だッ」

そして歌姫達の前に出た白銀の騎士は、剣を地面に刺し、叫ぶ。

『去れッ、ここより先は我が守るべき土地と者住まう地ッ。刃向ける者よ、銀の裁きを受けよ!!!』

銀の王剣が燦然と輝く、銀の世界が広がる。

『燦然と輝く、銀世界の剣技ッ!!!』

雪降る銀の世界、影は蒼、幻想的な世界から解き放たれる光が、ネフィリムを襲い。

その光景を見ながら、彼の騎士は黄金の粒子へと変わる。彼は本来の彼では無い、故に消えやすさは、私達よりも強い。

「行けッ、守るべき友がいるのなら、幾たびの忘却の中であろうと、幾万の人生の中であろうと、俺達は友を救う意志は奪わせるなッ!!!」

その言葉に頷くように、彼らは飛翔する。

—— 龍崎アスカ

ネフィリムとフロンティアの融合が解かれ、ネフィリムをソロモンの杖で、ノイズがいる宝物庫へ押し込んだ。

だが、ネフィリムの鞭のようなものが、アガートラムを纏うマリアを捕まえた。

「!! させないッ」

魔剣と王剣が輝きを増す。その勢いのまま宝物庫に乱入して、手当たり次第にノイズもネフィリムを叩ききる。

「先行しすぎだアスカ」

「ま、あたしらもやることは変わらないけどなッ」

「マリアを」

「助けるデスッ」

「いっくよおおおおおおおおおおおお」

ノイズをあらかた片づけた後、出口を開いたら、ネフィリムが前に立ちふさがり、炎の固まりを作る。

「炎は任せろッ、ネフィリムを」

「分かったわっ」

「分かったッ」

そして、二振りの剣を握りしめ、ヒポグリフと共に駆ける。

剣の魔力と共に飛翔するヒポグリフは、一隻の船のようだった。

『真名解放ッ!! 天魔失墜の竜殺しッ、燦然と輝く、銀世界の剣技!!』

二振りの剣撃が炎とネフィリムを叩き、そこに六人の歌がたたき込まれる。

夕焼けの中、最後にソロモンの杖で扉を閉めた未来と、戦った響に泣き付かれながら、少しづつが悪い。

「もう勝手に傷付かないでっ」

「絶対なんだからねっ」

「……………分かったよ……………」

そんな中、彼らが現れた。グランド・サーヴァント。

山の翁、花の魔術師マーリン。それら警戒する一同だが、なぜか安心した。

「オレはここにいていい宣言か？」

「ああ」

そうアサシンが答えた。

「だが忘れるな、汝が死んでも、運命の輪から逃れられない」

「君は、時には主役、脇役、悪役、被害者、観客。どれにでもなつて、その物語を補強するのが役目の抑止力。それだけは変わっていないよ」

「それって」

次の人生は波乱に満ちている。そうでなくても、早く死に、そんな人生を歩む。そういう役目だと告げながら、

「それでも、龍崎アスカの物語は、終わらず理由にはならないよ」

「……………なら進めばいいよ、その宝具達と共にね」

20話・フロンティア事変のその後

『ともかく番外で彼らの会話、分かりやすくしてます』

学生A「あーうん、仕方ない」

白銀の騎士「もう真名バレてない?」

アスカ「よかった、オレそのまま」

という対談現場、

学生A「いや、ってか俺は運命力つてもんに殺されたって言うか、ほぼ物理だな……………」

白銀の騎士「俺なんかばつさり切られてるけど、よさげな理由じゃねえよ。そもそも下手すれば俺もだぞ」

アスカ「そしてオレに至るか……………」

学生A、白銀の騎士『てか、俺はなんで女装してるんだよ』

アスカ「……………響達や周りに迷惑かけたからね……………」

そう言いながら、死んだ目で乾いた笑いをする。

メイド服であり、ガーターベルトなど、ミニスカなど、しかもアストルフオと同じ髪の長さ。もはや女の子のようになってる。

アスカ「下着は許してもらったよ、それでも下着まだ用意された日は死んだと思ったよオレ……………」

学生A「待つて、ちょっと待つて、お前の前自分だけど? なに、次こうなる?」

白銀の騎士「……………マジか」

前世達は絶句する。来世はこれに至るのだ。もう一度言う、至るのだ。

アスカ「このまま話を延ばして、女装期間を終わら」

響「アスカく次はゴスロリだよく来ないと中也だからねえええ……………」

目がドス黒い何かの少女が伝えてきたため、目から光が消え、席を立つ。

アスカ「私はアスカ、女の子……………私女の子……………はっはは……………」

自分を少女と言い聞かせて席を立つ来世を見ながら、前世達は何も言わなくなる。

学生A「……………行つてらっしゃい」

白銀の騎士「どの時代も俺は大変なんだな……………」

そんなトーク誰も求めていないだろうから、別の話をしよう。
すると、

山の翁「……………」

白銀の騎士「アサシンか、なんで出てきた」

山の翁「決まっておろう」

風鳴弦十郎「……………」

学生A「えっ……………」

『最強の頂』

「それじゃ始めるか、山の翁」

「全力を持って参る……………風鳴弦十郎、首を出せえ!!」

「この首は安くないぞ、山の翁!!」

ぶつかり合う、最強達。激突する。

前の番外にいた二人「おい、俺らまだい」

何かを言う前に吹き飛ぶ二人。

『そして本編後日談』

とあるデパートで、

「これ可愛いな、これどうかな?」

「これなんてどうでしょうか?」

「これホント天然? マジか、マジなのか」

一人の少女が言われるがまま着せられながら、買う。

クリスはいいい気味だと言わんばかりに見ている、未来も静かに着せる。
る。

「なんでエクストライブ時は完全アストルフオになるんだらう……………
いつ切つていいの髪……………」

そう呟くが、アスカの頬をさすりながら、未来が呟く。

「切っちゃダメだよアスカ…………私達がいいって言うまで…………可愛
いよ、本当に可愛い……………」

未来が少し、いやかなり怖い。三人の友達さんや奏さんにももみく
ちやにされながら、服を着替えさせられる。

もういやだなと、心が壊れかけている……………」

「……………なんでオレ男なんだろう……………」

「……………」

クリスは少しだけまずいかな？と言う顔でアスカを見た。

『三人の装者とマムの今後』

とある地下施設、日本国家が管理する牢屋だが、ここは二課の人達
をサポートする人など、つまりある程度融通が利く場所である。

ウエルは完全な有罪だが、他の人達はまだ猶予があるとと言う話で通
り、いま現在難しい話の中であった。

「だけどもあ、だいぶ落ち着いて、こうして話せるようになってよかつ
たよ」

「これお土産、後で食べてね」

「わーいデス♪」

聖遺物は取り上げられていて、全員が統一された服だが、それでも
満足そうにしていた。

「みんな丸くなったな」

「女子に言う言葉じゃないよ翼さん!」

そんなことをしながら、今後のことなどの話を弦十郎がし、三人と
雑談する装者達。

「とりあえず、早く出られたらクリスマスやオレの家のそばだから、よろし
くな」

「決定事項!?! 決定事項かおいッ」

「別に良いだろ、時折飯食うに来るし、部屋掃除するし」

「お前が勝手にしてるだけだろっ、私の部屋来たときにッ。飯の支度
手伝うだけでいいのよ……………」

少し恥ずかしそうにするクリス。翼はけして話に入ろうとせず、目

を背ける。ちなみに翼が使用している部屋に行き、片づけたりするのは緒川を除けば誰なのかは、言わなくても分かるため、なにも言わない彼女だった。

「これから楽しみデス」

「うん」

二人の後輩は楽しそうに頷き合う中、よかつたと、

「ああこれ、簡単な小テストのプリント。後は参考書とかあるから、これ置いて」

「持つて帰って」デスっ!!」

躊躇いもなく置いていくことにした。

「それでは、貴女は前世を持つ人なのですね」

「あつ、ああ?」

少し首を傾げながら、こちらに話が振られ、アスカが前世を持ち、色々あったことを説明する。

前世は学生、だが世界の都合で物理的に死を早められて、どうもその寸前に抗ったのが変な方向になって、今にいたり、許されたらしい。

「それじゃ、あの騎士は」

「いずれかの前の自分です、まさか円卓の騎士だったとはな……………」

そう言いながら驚き、この姿も、別視点から見たアストルフオの姿に近いと説明する。なんでと言う声を無視して、

「びっくりね……………」

「ですね、アストルフオは男性と聞きますが、まさか女性の見た目だとは」

「? いえ、アストルフオはローランの狂乱を落ち着かせるために女装してますから、史実も男性です。まあ、可愛い物好きだからと言う理由で着てますよ、理性蒸発してますから」

「そうなの」

「デスけど可愛いデスね、男なんて嘘みたいデス。よかつたデスね、女性に見える人で」

二課のみんなが首を傾げる中、奏はもしかしてと、

「お、おい……………いいか、アスカはその姿でも、男性だぞ」
「「えっ……………」」

だが仕方ない。現在、情報漏洩を防ぐため、リディアンの制服姿もはや二課の制服と言っても過言でもないほど、二課IIである。

それに光が無くなつていく本人。

が、

「みんな、アスカは男性だよ」

調がなにげなく、すぐに答えた。それに二課全員が驚いた。

「なんだと!？」

「アスカを初見で男だつて分かるなんて!？」

「そんなことがあるか!!？」

「本当なの!？ 調ちゃん!？」

「つて、マジで分かるのかっ!？ これが男だつてッ」

そんな反応に対して、目から光が消える本人。

「もう女でもいいよ……………だけどありがと、調」

その様子に、さすがに驚き気づく面々。

「す、すいませんっ、始めといままでで女性とばかりっ」

「ご、ごめんデス」

「ごめんなさい、つい……………」

三人が誤り、もうと調が微笑む。

「ダメだよ、見た目で判断しちゃ。けど、私も最初はね、少しして気づいたの。ごめんねアスカ」

「調……………それだけでいいよ、ありがと、調……………調はいい子だなく……………」

「ううん。本当に、別にいいんだよ……………」

その時、全員から少し顔を背ける。

僅かな影で、うつすら微笑む調。

「!？」

「? どうしたクリス」

「い、いまフィーネが笑った気がして」

「? あの人は私の中にいるけど、表に出て塗りつぶさないって、奥に

『決着付かず』

「はあ………はあ………これが英霊か、俺もまだまだか」

「骸である我的膝を折り、剣を折るか………風鳴弦十郎。その名、しか
と覚えたぞ………」

そう言い消える中、弦十郎は口元の血を吹き、静かに微笑む。

こうして一つの決着が片づいた………

空白期・外伝

外の理・第1章、最・凶・爆・誕ツ!!

フロンティア事変後、本部は騒がしいことが多かった。

まずはフィーネとして活動したテロ組織に関する人達の後始末。残念ながら米軍も関わることであり、マリアは偶像のアイドルを押しつけられる形で、偽の情報操作などするしかなかった。

変わりに暁切歌、月読調に関しては自由が利き、彼女達は保護は問題ないらしい。ナスタージャ教授も、こちらの協力者として確保することはできる。

「とはいえ歯がゆいかな」

「ですね」

緒川さんと共にそう言いながら、オレが淹れたコーヒーを飲む司令。一番の問題であるオレは、給仕をしている。

龍崎アスカと言う存在。それは全ての聖遺物の適合率がある、聖遺物研究者からすれば喉から手が出てもおかしくない素質を持つ。

「ただでさえ、装者のことは各国いまだに情報収入等々。頭の痛いことばかりだからな、ま、どうにかするさ」

「ですね、それくらいはしてみせますから」

「すみません……………」

そう言いながら、オペレーターの方々にも飲み物を出す。『メイド』がいる。いまだ髪も切らせてもらっていないオレです。

大規模な事件や、国の闇が関わる本事件。その影響は一般人にも大きく関わることになり、いまだ学校は休み中のため、その間のメイドだよ。

この数日間、メイド服に慣れた自分が嫌だ。

「……………はあ、精神安定剤が手放せない」

そう言って、休憩室でカップセルタイプを飲むのだが、正直本当に疲れる。

だが、一番疲れているのは司令達だから文句は言わないし、これは

目の前で死んだオレの責任だと納得する。

「アスカ〜いるか」

「奏さん？ なにか？」

「うんにゃ、少しな。クリスン家で装者達の成績確認する方針だよ。この辺りは旦那個人の意志だから、強制はしないけど」

「ああ、教える側ですね？ 別に良いですよ、メイドとして頑張ります」

「ははっ、やらせておいてあれだが、まあいいや。部屋で着替えて良いからな」

「は〜い」

こうして会話を終えて、クリスの家にメイドが来た際、クリスはどう見慣れたためか、なんとも言えない顔をする。

クリスの部屋に集まり、勉強をする装者の中、一番の問題は、

「あ〜〜もう頭がパンクしそうだよ〜」

「響〜」

未来に怒られながら、簡単に要点をまとめ教えているのだが、やはり覚えることが多いため、響が苦戦する。

「ど〜してアスカやクリスちゃんは平気なの〜」

「ちゃん付けすんなつ、わたしやくお前と違って勤勉なんだよっ」

「オレは元大学生だ、高校レベルは解ける。てか推薦枠じゃないが、これでも前世じゃ、まあまあ成績優等生だった」

「マジですか〜」

正直に言えば、勉強の方はじつちゃんを安心させたいのと、分からないと家事がうまくいかないからだ。もう働ける人がいない、家の把握しなければいけない、バイトしなきゃいけない。バイトでもレジ打ちなどで、やらなきゃいけないことが多すぎて、覚えたくなくても覚えたと正解だが、いまはいい。

「私も、アスカから教えてもらったことがあるからな」

「そう言えばそうだな」

ここには奏さん、翼さん、響の友達の三人や未来。できれば早く切

歌、調も交えたいと思うくらい、平和だった。

「テレビ電話くらい許されればいいんだが、まあ、私設の人が司令官関係者で固まってるだけマシか」

「そうだな、旦那やみんにはホント助かってるよ」

そんなことを言いながら、紅茶を淹れていると、妙な気配がする。

「!？」

その時、装者達、奏も気づき、ベランダを見ると、窓が、勝手に開いた。

「誰だっ」

「私だよ」

そこにいたのは、花の魔術師、マーリンだった。

司令室、正直マーリンは気にしなくても良いのにと言うが無視して、心配する未来も含め、多くの者達が、司令室に集まる。

腕組みする司令の前でも気にせず、茶と菓子を食べながら、一息つく。

「ふう、分かっていたが、この前から少ししか経ってないからって、警戒しすぎじゃないかな？」

「お前は悪党だろ？」

「あつははは、よく言われる」

そう微笑みながら、スコーンを食べる。

「うんうまい、君、なにげに料理うまいね」

「でだ、忙しい時になにしに来たんだよ」

「君に抑止力として指令を頼みたい」

その時、全員がかなり殺気立つ。元より、オレと言う抑止力に仕事させるため、殺して転生させられるようにする。これがマーリン達が最初にした行動だ。仕方ない。

「ストップストップ、さすがに死んでくれはもう言わないよ」

「……………まあ信じてやる」

あそこまでしておいて掌返しは、アサシンの人がキレて、何をしてくすか分からない。さすがの星と霊長も、彼の流儀を曲げさせてまで

自分を殺させようとしたんだ。これ以上はさすがに問題だろう。

「その通り、さすがに分かるね」

「一応、ゲームで出てくるサーヴァントは確認したからな」

「それだよ」

「ん？」

突然のことに首を傾げると、紅茶を一口のみ、静かに言う。

「ちなみにそのゲーム、どこまで知ってる？」

「は？ いや、クリアはしたぞ。番外編は知らないのが多い、武蔵の後は……知らない。そもそも詳しくは誤差は」

「あるけど、そこまでなら、頼みたい。少し英霊として、手を貸してくれ」

「……………話が見えない」

それもそうだねと微笑みながら、菓子を食べて、少しずつ順を追って説明する。

「実は少し、正史世界の一つ、君の視点で言えばグランド・オーダーの物語で、問題が起きた。それで、君は死ななくてもいいから、君はサーヴァントとして、一回特異点修復に参加して欲しいんだよ」

「なぜまた？ ってかFGO？ なら他のサーヴァントは？」

「ま、待ってアスカっ。なにがなんなの？ FGO？」

「ああそうか」

フェイト・グランド・オーダー

この物語は魔術師達の物語、平行世界の一つで行われる。

大まかに言えば、科学も取り入れた魔術師達が、未来を観測している際、突如未来観測が不可能になった。これにより世界が終わるところを察した機関がある。

機関の名前は『カルデア』で、彼らは何らかの理由で、ある時期を境目に、人類が減びることを証明してしまい、それを回避するために準備を行う物語。

とある事件があり、マスターは一人だけになり、また、特殊な環境下に置かれたためカルデアは無事だが、カルデア以外の世界、人類は消滅してしまう。

このままではカルデアを含め、人類史は消滅するため、マスターは英霊達と共に、壊された人類史の修復し、またそれを行った存在と戦う物語。

「かみ砕けはこんなところか」

「確か、それでお前、ガチャってか、課金ゲーではまってたんだったな」
クリスがそう言うのと、全員が？マークでクリスを見る。

「ああ、飯時とか、暇なときに話してたんだよ。またこいつらみてえなのが来ると思ったしな」

「クリスちゃんだけ〜？」

「聞かれなかったから」

オレにぶーたれる響は無視して、それでと付け加え、

「ちなみに人類史はちゃんと守られ、一般の人は一年の忘却。知らない間に一年間経っていたと言う事実だけ残り、カルデアは世界を救ったんだ」

「…………それは」

「いま忙しいだろうね向こうの世界、なんせ、秘匿する魔術のことは言わず、どうして一年知らないうちに経ったか、とか、もう色々さ」

「それだけじゃなく、サーヴァントもだろ？　ダ・ヴィンチを始め、歴史を揺るがしかねない英霊や、神霊まで喚んだんだから」

「ああうん、私は面倒だからアヴァロンに帰って、時々お菓子食べに行く程度にしてるよ。他のサーヴァントは知らないけど」

「やめてやれよ」

こいつにお茶をお代わりとか出すのやめようかな？　話の中心自分だし。

そう思いながらお茶菓子とかの替えを出し、それでと付け加える。

「それでね、また妙な結界空間ができるらしいんだ。それが星と霊長から伝えられた話だから、間違いない」

「それでオレ？　けど」

「ああ、問題ないよ。死んでくれは言わない。ただカルデアはさつき言ったとおり、魔術師側からも、世界側からの問題で人手不足なんだ。なによりサーヴァント、彼に力を貸してくれている人達も動けない場

合がある」

「何故だ？」

「有名人過ぎて動けない、君のようなアイドルみたいだね」

翼の疑問に答え、それに司令は、

「なるほど……様々な組織や機関から監視された状態では、有名な英霊達を動かせられないと？」

「話が早くて助かるよ、そもそも何名か私のように勝手に動いたり、扱いが別の意味で難しい者もいる。英雄王って言えば、君は分かるね」

「ああ、動かないなそれは」

それにと、カルデアが手薄になると、色々と盗み取ろうとする輩もいるから、防衛で腕に覚えある者も残らないといけならしい。

だからと言って放置も無理だから、

「彼は新たに、サーヴァント召喚、契約をする。君には悪いけど、魂だけの存在になって、サーヴァントとして彼と契約。今回だけの契約で、抑止力から恩恵をもらって顕現したと説明して、その問題を解決して欲しい」

「……話は分かったけど、その間、オレは？」

「あー平気だよ、連絡というか、君のことが分かるようにモニタリングできるようにしておく。その所為で時間がリンクするけどね」

まあしないと肉体と魂が外れかねないと、さらっと無視できないことを言う。

紅茶の中身がそろそろ尽きる。わざと苦みが出るように出してやる。

「能力とかは？」

「高いよ、って言うか君はグランド・アサシンの死に勝ったんだ。高くない方がおかしいよ」

それに納得、他の手を借りたがそう言う扱いらしい。後は、

「オレが断れば？」

「えー困る」

それだけなら断るぞと思うが、さすがに無視したくないなとも思う。

カルデアは、正直別視点ではあるが思い入れはある。だから手は貸したいと思っっていると、

「これ、性別変化薬なんだけど、これを彼女にわた」

「おいやめろ」

どうもいかないと女性になるらしい。響お前はなに両手揃えて受け取ろうとしてるんだ。幼なじみとして泣くぞ。奏さんも。

未来と翼さんに説教受けている者達は無視して、とりあえず、受けるしかないらしい。司令はため息と共に、サポートすることになった。

「おいこつちに対して詫びろ」

「じゃ折角作ったこれを」

「クリス」

聖詠しようとするクリスに慌てるマーリン。ごたごたのまままだよ
おい。

まず色々付けてから、肉体の方のモニタリングの準備をして、静かに薬を見る。

マーリンからはこれ用だから大丈夫と言うが、あれの言う大丈夫を信じて良いのだろうかとも思う。

だがもうやることになり、ナスタージヤ教授や、心配して監獄で様子を見るマリア達もいる。

もう腹を決めてから、飲む。

「……………眠い……………」

そう言って、眠りについた……………

——
???

「先輩準備は出来ました」

「ああ、ありがとマシユ」

今回のため、現地入りする前に一人、サーヴァントを召喚することになった。

新たな不明な特異点。そこに出向くのはいいが、多くの制約や、い

つの間にかいなくなつたサーヴァント達。色々な問題を抱えてのレイシフト。

不安があるが仕方ない、マシユがいる。それなら、怖いものは無い。
「先輩……………」

「大丈夫、きつと、俺達に力を貸してくれる英霊が応えてくれるよつ」
そう言い、静かに召喚の儀をする。

光の輪が集まり、静かに、そして辺りが光に包まれた時、観測しているダ・ヴィンチちゃんも驚いた。

『な、なんだこれはっ!? 神霊のたぐいか!? 二人とも、かなりの大物だよっ』

通信の中驚きながら、光が収まり、煙と共に咳き込む声が聞こえる。
「だーりーもう、マーリンの奴。召喚つてこんなに煙いのか!? 後どうなつてる? 召喚成功してる? ちゃんとカルデアマスターのものとかな?」

そんな声に、俺とマシユは顔を合わせる。

マーリン、彼の関係者からはいい顔はされないし、いい人? と言う疑問符が必ず付くのが彼だ。

だが彼はグラランド・キヤスターで、花の魔術師、アーサー王伝説に深く関わる存在だ。彼と関わり、今回の召喚に伝えてくれたのなら、円卓の騎士か、それ以上の人だろうか?

「えつと、君は」

「あつ? ああ、藤丸立香? それにマシユさんだね、先輩サーヴァントの」

「えつ、わ、私? 先輩、ですか?」

先輩と呼ばれ慣れていないマシユは少し嬉しそうにしているが、だが、すぐに絶句する。

そして俺も、そんな俺達に気づかず、彼女? は言う。

「オレはアストルフオの力を借りた、まあ、マーリンが今回の件だけに呼んだもんだよ。真名はアスカで頼むよマスター」

「あつ、ああ……………つて、アストルフオ!? 容姿、アストルフオを借りてるの!?!」

「だからですか…………でも」

「ん？ ああそうだけど…………」

あれ？ 向こうもしかして、アストルフオと似ているから、俺達が戸惑ってると思うてるのかな？

「ああ、クラスとか分からないから、マシユさん、ステータスの見方教えてくれないかな？ 自分のクラスと能力はほんと、なにぶん英霊じゃないんだオレ。今回用だからね」

「は、はい…………」

俺もマシユが教えている間に、ステータスを見る。

そして、固まったのを見ながら、よく見る。

真名アスカ・リュウザキ クラス・セイバー

属性・中立・善・星 性別男の娘

保有スキル

【対魔力EX 如何なる洗脳、呪いの反射。令呪に対しても対抗できる】

【騎乗B アストルフオの力を借りている為、幻獣などに乗り、操れる。またバイクの免許は持っている】

【直感A 数多の死線を渡り、命を狙う行動をする者や、悪意や殺意に敏感。戦闘時ワンランク上がる】

【魔力放射A+ 魔力を放射してあらゆるアクションを加速する】

【戦闘続行A 諦めが悪い。しぶとい】

【花の悪戯推測不能 花の魔術師による援護、一時的な契約であり、彼を一時的に英霊化させている。アストルフオとの縁がある、とある別世界の人間。容姿がアストルフオに似ている。無論男性だが、英霊として活動させるには、この肉体しか無かった。ごめんね♪】

【■■■推測不能 とある力、別の形に変化させたため、現状魔力不足は無い】

——アスカ

外の理・第2章、いざ進む

カルデアのシミュレーションルームで身体を動かし、この身体で戦えることを確認して、レイシフト前に来る三人。

オレことセイバーと、シールドであるマッシュさん。そしてマスターだ。

「マスター他にサーヴァントは呼べないの？」

「ああ、何人かはいない、何人かは国や組織から隠してる。後はまあ、今回の件にそれほど乗る気じゃないとかね」

苦笑しながら、こちら側の用件は伝えている。アストルフオもどきなのは伝えている。いないサーヴァントには、アストルフオもいるらしい。

何故かは分からないが、多くのサーヴァントが行方をくらましていたりする中で、いまの謎の空間を感じたカルデアチーム。

こうして出向くことになったらしい。

「攻撃は君に任せる、俺が攻撃サポートするよ。防御系統はアスカだと回復に回した方が早いし効率がいいな。マッシュは俺の援護と、アスカの補助を」

「はい」

「それじゃ」

「行くよ」

光に包まれ、数秒の浮遊感の後、地面に着地する。レイシフト成功らしいが、

「ここは………ロンドン風城下町？」

「造りからして、アスカさんの推測通りかと」

「そうか………ともかく人が来る前にダ・ヴィンチちゃんに連絡を」

立体映像が現れるが、ザーとノイズしか出ず、ん？と全員が首を傾げた。

「変ですね、通信が繋がらない………」

「霊脈は分かる？ その所の為かも知れない」

「ん、それはマシユさん、お願いします」

「分かりました」

マシユさんが確認しようとした時、瞬間、剣を抜き、居合いの如く、それを弾く。

甲高い金属音を始めに、無数の弾丸が放たれる。

二刀流で全て弾き、マシユさんは即座に切り替え、盾で全員を覆う。

「二人とも」

「エネミーです、数は分かりませんか」

「弾丸からして銃使い……………英霊だとアーチャーかライダーか。サーヴァント反応が分かれば良いんだけど」

「通信ができれば分かりますが……………」

「二人とも、いま気配は」

「……………来る」

盾を構えるマシユと共に走るが、別の方角から来る狙撃は剣で防ぐ。

「マシユは悪いけどそのまま走行。アスカは盾で防げない正確射撃を防いでくれ」

「了解」

銃撃の嵐の中、それら全て叩ききる剣の中、それは、

「!？」

現れた。

「「ノツブっ!!!」」

瞬間、オレは意識が吹き飛び、鬼神のごとく切り刻んだらしい……………

——藤丸立香

「……………コロシツクシタ？」

セイバーこと、マーリンの頼みで、今回限り召喚に伝えてくれた英

「ノブ!？」

「遅い」

冷ややかな一言と共に、斬撃が三度同時に放たれ、回転するように身体を動かし、地面を回る。

気づいたときにはすでに斬られていて、大型のノブに対しても、

「ニセ無明三段突き」

その瞬間、急所全てに一瞬で撃ち込み、静かに、

「切り捨ててご免ってねっ」

ウインクすると共に剣を仕舞うと、全てのノブは倒れ、消えていく。

あれ？ この子本当にアストルフオの姿なのか？ スペックは遙かに違うよ!？」

「わ、私の、私の宝具がッ。私の宝具が!!」

「落ち着け沖田っ、あれはニセと当本人も言っているっ」

「落ち着けるはず無いじゃないですかッ、宝具が無い沖田さんは一体なにが残るといいますか!？」 もうこうなれば北歐かどつかの神の槍手に入れて、みんなの手を繋ぐ歌を歌うしかないじゃないですか!!」

「おいそこの漫才サーヴァント」

「誰がじゃっ」

「っっていうか、ああ♪ マスターさーんっ♪ 沖田さんですよ〜来てくれたんゴフッ」

「沖田平気か!？」

「先輩、血、血っ」

俺にかかった血を拭いてくれるマシユ。とりあえず沖田と信長がここにいるのは、

「これってぐだぐだ?」

「うむ………しよーじき、わしらも来たばかりだが、これらがうろちよろしてるから、またわしの悪い心とかがの〜」

「ですね〜さすがに飽きましたね」

「もう沖田、そういうこと言わないで欲しいわい。ネタ切れが分かってしまうじゃろ」

「ともかくマスターさん達と、私の宝具泥棒さんが来てくれて助かりました」

意外と根に持つな沖田。まあ、本当に宝具レベルだけど、そんなに魔力が使われた感覚は無いんだけどね。

そんな話をしていると、隅っこからまた、

「ノブノブ」

「斬っ」

ともかくここにも敵に出会うだけのようだから、どこかに隠れよう。

全員顔を合わせ、殿をアスカに頼んで進むことにした。

「あれ？ 切り込み隊長も取られてない!! 沖田さん、沖田さんの立ち位置がっ。ど、どうすればいいのですか、沖田さんの未来は如何に?! 未来〜!! 未来〜」

「おぬしがみらい言うと、なぜかみくくと読む者が居るからやめいっ………何のことだろう？」

下水道らしき場所に隠れたが、やはりかなり違う。

「ここは………綺麗すぎる」

「ん？ どゆことだ？」

「この時代とかだったら、下水道のにおいは酷いつてこと？」

さすがアスカだ、マシユもそれに同意するように頷く。

かつてレイシフトの際もそうだけど、ここまで真水のような下水道はそうはない。となるとここはどこだろうか？

「歴史の分岐点、あるいは閉ざされた空間………経験から後者かな？」

固有結界系かな？」

「それなら術者がいるよね？ 聖杯かな？」

「聖杯ですか」

「聖杯………なんかあるたびにそれがあるだけで納得するのう」
「ですね〜」

あまりそれを言わない方がいいんだけど、まあ気にしたら負けだな。

そう思っていると、外のちびノブ達がうるさい。なんだ？

「アスカ、気配を消してみてきてくれ」

「分かったよ」

「…………あれ、本当に私達のポジションが」

「安心せい沖田よ、あれはあれだ。ゲスト出演なただけだ、古株ならどっしり構えておれ。男なんじゃし、ユーザーも離れることないじゃろ」
「それもそうですね♪」

無視しよう。

——アスカ

いまサーヴァントとして視界共有できるか少し試して、できなくても側なら使える通信機を使い、様子を見せている。

「ノブ達なにしている？ 大型テレビ？」

配線に苦戦しているが、あるちびノブがうまく設定した瞬間、歓声が湧く。そしてテレビを始め、大ガラスなどの普通のガラスに何かが映る。おいテレビはなんだ？

魔術的なそれを見ると、謎の黒いフードの何かが映る

【は〜いみなさ〜んっ♪♪ ニーんばーんはー♪♪】

『ノブーーーーー』

声は加工されていなければ女性の声、ん？ 少なくとも信長の声ではない。沖田でも無ければ誰だと思いつつ、それはテレビ番組のお姉さんのようにテレビ側に話しかけてくる。

【今日はずっと嬉しいニュースよ〜♪ なんと、この結界内に、藤丸立香お兄さんが来てくれました〜ぱちぱちぱちぱち〜♪♪】

『ノブノブ〜』

【これで計画第二段階は完了しました〜】

それに戦慄する。つまりこうしてカルデアマスターである彼が来ることはすでに計画とやらに組み込まれ、いま策にはまる。

今頃マスター側は騒がしいだろうと思いつつ、様子を見ていた。

【という訳で、計画第三段階で〜すつ。それでは】

テレビ側からノブと言う声、カメラマンもノブかいと思いながら、切り替わるのは、スポットライトに映り、拘束台に乗せられている。「セイバーランスロット、トリスタン」

そこにいるのは二人のサーヴァント。どちらも円卓関係者じゃないかと思いつつ、何が起きるか見ている。

『不覚………』

『まさかお酒に薬が盛られていたとは………』

『うっふふ、それではこれより、大々的な計画プランスリーの説明ですっ』

そ・れ・はと楽しげに、

【私、浮気が文化って言う人のは、取って言いと思うの】

瞬間、ゴム手袋を付けたナイチンゲールが現れる。準備万端、女医さんが現れた。

『ブチ取ります』

『何を!!?』

【それでは、まずはここにいるサーヴァントさん達は、男は男。女の子は女の子と分け分けするべきです。その中ではつきりしない人は取り、可愛い子も取り、浮気が文化な人は取り、悪い人はついでに取ることにします】

『ノブブブブブブブブブブ』

ちびノブよどこに歓声を上げる瞬間がある？ えっ、マジか？ 二人がどんだん奥の部屋に連れて行かれていく。

しばらくして絶叫する男性の悲鳴が響き渡り、沈黙が辺りを包む。

【オッホン………それでは、メディアさん。判定官メディアさん】
『ここに』

大人のメディアさんは、どうも向こうらしい。やばいな、あの人神代の魔術師なんだけどなくと奥から血だらけのナイチンゲールさんを無視する。

『オペは成功しました、黄金になって消えないようにして拘束してい

外の理・第3章、悪夢

走るアストルフオウくんを追いかけけるのは、全てを壊し、全てを潰し、血走った目のバーサーカーナイチンゲール。

「必ず取ります!!!」

ここで捕まればオレの人生は全て終わりを告げる。だがいまの彼女を止めるには、一人では無理だ。すでにこの事態は連絡している。

「マスターッ」

「信長ッ」

「鉄砲隊ッ、テエエッ」

無数の種子島から銃が撃たれ、それを肉体で受け止めるバーサーカーがいるが、すぐに沖田とマシユが前に出る。

だが目が赤く光り、刃は通らず、盾の打撃も効きづらい。それにマスターはすぐに判断する。

「アスカッ、地面を」

すぐに地面を壊し、その瞬間、地面が割れて地下へとバーサーカーは落ちていき、瓦礫が蓋をする。ここに来る前に仕掛けていたらしい。だが安心できない。

「どうも彼女は狂化だけじゃないらしいッ、もうこうなれば」

「本拠地だねマスターッ」

もうこの事態解決を優先するなら、あの場所に出向く方がいいと領き合う。

「ああッ、急がないとランスロット達が」

「いえ先輩、あれらは無視していいと思います」

「むしろ手遅れ感パっないのう」

「ですな〜」

マスターはそれになんとも言えない顔をしてから、我々は走り抜ける。

ちびノブ達の目をかいくぐり（所々におやつを投げ込み、それに食いついている暇に進む）で、なんとかちびノブ達が多くいる建物に侵

入した。

通信機を使うマシユさんとオレ。これで発信元がここと知り、辺りを確認する。

「相手は謎のパワーで強化されたナイチンゲールと、メディアと言う西洋の術師か。どうするのじゃ?」

「正直、キャスターとバーサーカーは明らかに何かの補助受けてる。仲間が欲しいところだね」

「なら地下に行けば、黒髭辺り手遅れでも盾に使おう」

「いいですねそれ、それくらいなら穀潰しも役に立ちますよアスカさんっ」

「やめてあげてマシユ」

「こういう時はなにげに得意な沖田、侵入し、静かに目的の場所へと進む。」

「やりました、沖田さんの未来はここにありましたよ」

「じゃから、みくと読まれそうだからみらい言うのやめい」

「何の話をしてるんだよ……」

そして謎の巨大ホールのようなステージがある地下へとたどり着く。

全員が?であり、そして周りの牢屋には、

「マスター? マスターなの?」

「その声は、メアリー?」

「マスターさんですか!?!」

「トナカイさんっ」

「マスターッ」

よく見ると牢屋の中には何名かサーヴァントがいて、すぐに確認する。

「アンとメアリーと、ジャンヌリリイか」

「私だけかなり略されましたっ」

「是非もないよネっ」

驚いたことにアルトリアリイとメドゥーサランサーこと、アナちゃんもいる。

そして、

「アスカ……………」

「アストルフオ!?」

「アスカっ!! アスカが助けに来てくれたの!？」

「アストルフオ、おま」

「アスカが女の子になってる!？」

「いますぐ座に帰すぞお前」

そんな会話の中にもまだサーヴァントがいる。

「エミヤ、無銘、君達もここにいたのか。それに」

「マスターさんっ」

「ごめんなさい、凡ミスしちゃった」

「申し訳ございません……………」

「つて、はっ!! イリヤとクロエと美遊!？」

交互に守護者達と娘達を見ると、見るなと言う顔をする関係者二人。

ともかく、守護者達二人の檻に近づく。

「おい守護者、テメエら守護者のくせになにしてるんだよ」

「すまないが、私達は所詮使い魔だ。元来抑止力として改良された君とは違うんだ……………」とはいえ、君はだいぶ分かるようになったようだな?。」

「当たり前だろ、何度死んで魂だけになった状態で記憶の引き継ぎしてると思う?。」

エミヤと無銘、アストルフオはオレがなんなのか分かってる。何故かは知らないが、オレはそう理解した。向こうも知っている様子だ。

「ともかくサーヴァントでもこの檻は?。」

「すまないが生憎と二流でね、壊せないのさ」

「下は無事か?。」

「青髭らは連れ去られていったが、まだな」

そんな話をしながら離れ、辺りを見る。キャスターがいれば少し分かるが、どうも、檻は鉄格子だけで扉や鍵穴は無い。

ステツキはバシャバシャとフラツシユを、おそらく撮ってる。やめて欲しい。

「これは凄い、短パンを脱いでくださいっ、どうして履いてるんですか!?! 真の魔法少女なら中までしっかりしてくださいよッ」

「ふざけないでくれっ、いいからこの牢屋からみんなを出す方法を考えてくれ、壊せばいいのか壊せば!?!」

尻尾やマントで顔などを隠して叫ぶと、檻の中から声を荒らげる者がいた。

「!? それは無理だ!! ついさつきクー・フリーンがやったら牢屋の中だけが爆発し、壁が何も予兆もなく潰しにかかったっ。螺旋剣を持つ者もそれで牢屋に潰されて、いまさつき連れて行かれたんだ」

「おそらくこの牢屋で我々が疲労するのを待っているのだろう。この牢屋の防御性能は、僕たち、中のサーヴァントの魔力だ」

守護者二人からの言葉、つまり中にいる者達の魔力で、この牢屋は強固なものになるらしい。中にいる者ももちろん、外の者も下手には出せないようだ。

だが少しだけ、知りたくない事実が……………

「えっ、兄貴、連れてかれたの……………」

無銘は顔を背けた。慈悲はないらしい。

……………よし。

「ルビーさつきからオレの写真撮ってるんだから、撮影料に案出せ案」
「スルーですね分かりました。できればポーズも撮って欲しいですが、魔術陣の解析始めます。サファイヤちゃん」

「了解しました」

それと共にノブノブと言う声が、

「くっ、ちびノブ達が」

「任せてくださいよ、沖田さんがばっさばっさと斬りますから♪」

「仕方ない、ここは俺達が。アスカ、君にみんなを任せる」

「問題ないよ、オレは特別ゲスト。やれないのならやれるようにするだけさ」

そう言つて、二手に分かれる。

だが、

「ノッブっ!!!」

「来いわしょッ」

『ノブブブブブブブブブブブブ……………』

「おおっ、なんかおおっ!?!」

「切りががあります!!」

「マシユッ」

「はいっ」

向こうは無数のちびノブが流れ込んでくるらしい。途中で詰まるとかなんとか聞こえるが無視して、二つのステッキを見つめると、

「これは……………ハッキング完了しましたよ♪♪」

「でかしたルビー」

「?!? で、ですが姉さんこれは」

「ええ、ま、まるで私が仕組んだようなネタが……………カメラモード」

「待つてルビー!?! いま不吉な言葉が聞こえたんですけど?!?!」

突然牢屋のホームのど真ん中がせり上がり、何か舞台のようなものが現れた。

「……………なにこれ?」

「どうもそこで用意された歌を選び、歌わないと駄目のようです。しかもステージに立つとアイドル衣装に替わります」

「なんでさあああああああああ?!?!」

もの凄くスポットライトが回り、どの位置だろうが、見せ物として吊るし合い確定である。死ねと?!

ルビーが後ろからさあさあ録画モードで押してくる。

「いや待てオレ、別にアイドルだからって女性限定じゃないよね?」

最近の響達とカラオケだって行ってるんだ。大丈夫、大丈夫だッ。男性アイドル衣装ならギリだよ」

そう言い聞かせステージの上に立つと、衣装が替わる。

……………世界が制止した。

もう言うよ、女の子アイドル衣装にチェンジして、ルビーがハイテンションで撮影する。オレは短いスカートを抑え、マイク片手にその場に座り込む。中身を知りたくない。

「いいですよ〜すつ〜くいいっ!! まさに魔法少女アストルフオウくんです♪♪ いい表情です、これでイリヤさんも混ざればグツトですつ。はい、泣き顔いただきましたあああああッ」

「ルビイイイイイイイイイイイ、お願い、やめてあげてええええええお兄さんのライフはもうゼロよおとおおおおおお!!」

「えっ、これであの人何時間歌うの?」

「さ、サファイヤ!?!」

「……………三曲です」

美遊が尋ね、返ってきた答え。絶望が辺りを支配した。

だが、

「……………三曲か……………あつははは……………三曲か」

そう言つて、静かに立ち上がる。

オレ、いや……………私はいま手段なんて考えてられない。

「私は女の子ツ、アストルフオウくんつ。歌いきつてみせるツ!!」

『無駄にかっこいいよこの人っ!!』

イリヤと無銘は諦めの窮地に至った彼に拍手を送りかけたが、まだ早い。

こうしてルビーが勝手に歌を流す。もうカラオケだ。

だが別に構わない。

「ああそうだ……………この様子を、元の世界の知り合い達が見ていようと、本当に女の子になるよりかはマシだ……………」

「お兄さん……………」

イリヤは涙の所為で顔を背けたが、クロエがそれを首を振ってやめさせる。

「イリヤ、いい。これは覚悟よ、男の覚悟。目を逸らしちゃだめ」

「クロ〜わたし、私見ていられないよ〜」

「泣き言は言わない、あの人の覚悟を受け取った後、私達はこのどんちやん騒ぎを起こした奴を倒すためにも、見なきや駄目よイリヤツ」「クロエ〜」

「こ、これはそこまでのことなの……………」

そして彼……………彼女は歌い出す。

覚悟を決め、自己を殺し、全てを解決するため、戦力確保のために、歌う。

「好きなアイドル歌手の歌を脳内再生してください。沖田さんです」

「是非も無いよネっ♪♪」

「ああ、振り付けもしないと駄目ですよルビーちゃんですっ♪♪」

「フオウ!？」

何名か泣きそうな顔、可哀想な顔、辛そうな顔、嬉々とした者もいたが、ステージを見守った……………

——藤丸立香

彼はその後、表情まで要求される謎の術式解除を乗り切った。

その後、牢屋全てが解放され、みんなが出てくると共に、彼の目が鬼種、いや竜種へと変わったように、ちびノブ達を切り尽くした。

「……………あつは」

そう、

「アツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

壊れたよ、アスカ。

「お、お兄さん……………」

「トナカイさん……………」

イリヤは涙を流して、手に取るルビーが「満足です……………」と言うので壁に叩き付けながら移動。何名か怯えていたが、俺は優しく、「お願い、優しくしてあげてね……………」

魔王のようにもうちびノブ達を倒しているアスカ。令呪で止めることもできないな。さすがに俺もあれは……………

「あの目、なかなか良いですね。新撰組に入って欲しいです」

「ウム、わしも欲しいのう。今度カルデアで呼ばぬか？」

「やめてあげてください」

マシユの真剣な言葉を聞きながら、無銘とエミヤを見る。

「二人とも頼むよ、相手は少しばかり搦め手使うみたいだ。解析は二人が頼りだ」

「了解したマスター」

「問題ない、彼のように理性崩壊はしないよ」

少し辛辣な言葉だが、エミヤの場合しかたない。

そう思いながら、ついに扉、大きな扉を破壊するアスカ。ガルルルとうなる様子に、マシユがハウスですツと言うけど、やめてマシユ。

「ここは……………」

「よく来ましたわね」

そう言つて、黒服の女性が現れた。

黒いフードで分からないが、ここが本拠地であり、主のいる場所らしい。

奥の部屋から知り合いの男性の悲痛な声がうつすら聞こえる。宝具がその辺に転がっている。これはそつとしておこう。

「君は誰だ」

「私？ 私は」

そう言つてフードを取る。それに数名のサーヴァントに震かんが走る。

「ママ!？」

「アイリスフィール・フォン・アインツベルン!? まさかこの騒動は」

「違うわ、私は」

そう言つて、アイリスは杖を、

「……………はっ?」

何かりりカルな杖を取りだし、光りが世界を覆い隠す。

全員が戦闘態勢に入ると共に、現れたのは、

少女になった、アイリス。

「私は魔法少女プリズム・アイリちゃん♪ 人々の愛と希望とその
他もろもろを守るために、顕現したサーヴァント、可憐に登場よ♪」

満面の笑み、ウインクしてそう告げた。

その姿はまるである日出会った、テストAMENTと言う存在そのもの
だった。

「.....」

そしてほぼ同時に、イリヤ、クロエ、無銘、エミヤは膝から同時に
崩れた。

「な　　ん

で

さ

ああああああああああああああああああああああああああああああああ
アスカは強く咆哮した。ああ、俺もそう思う。

外の理・第4章、混沌

現れただけで四人のサーヴァントを戦闘不能にし、我々に驚愕を与えたのは、魔法少女と名乗る、とある女性である。

「大変です先輩っ、四人とも魔力が急激に減ってますッ」

「四人ともっ、な、なんで!？」

困惑する我々の中、彼女は妖艶に微笑みながら、オレを見る。

「別視点から私達を『見た』ことがある貴方なら分かるわね？ 抑止力さん？」

『ッ!？』

「……………オレのことが分かるのか、聖杯になった人」

正確には、聖杯の殻だったか？ 確か聖杯の入れ物として用意されたホムンクルス。それが彼女達だ。

それに微笑みながら、ステップを踏む。

「さすがね、まさか私程度と踏んでたけど、まさか抑止力が出てくるなんて……………冠位の英霊が来なかっただけマシね」

「あんたは誰だ!？ 抑止力って分かるんだ。アイリさんじゃねえだろっ」

その叫びに、復活する四人。起きあがりながら、彼女を見る。

「ぼ、僕としたことが……………すまない。不甲斐ないところを見せた」

「ああ……………酷いめまいが起きたよ」

「大丈夫……………に、偽物なら大丈夫」

「まったく、一瞬消滅しかかったわ……………」

そんなことを言うが、彼女は優しく呟く。

「ぶんぶん、偽物なんかじゃないもんっ。所々にアイリスの要素たっぷりよっ、ぶ〜」

血を吐くエミヤ、イリヤも倒れかけたが、クロエと美遊に支えられている。

頬をふくります彼女は、杖をくるくると回しながら、静かに、

「私はアイリス、聖杯により消滅した女性の童心。それをくみ取って生まれた、『偽物に近い本物』よ」

僅かばかり暗闇のような魔力、黒い何かを見せる。それに青ざめるエミヤとオレ。

「まさか、アンリマユ?!」

この世全ての悪とされた存在。ただ悪と言う概念にされた反英霊。意味もなく、悪とされた英霊のはずだ。その英霊が聖杯にくべられた所為で、聖杯が汚染され、何があっても壊すことにて願いが叶う願望器へと変わったのが全ての始まり。そうゲームを始めて知った。「残念、それすら無い、ただの泥よ。そもそも、魔法少女にそんなの似合わないじゃないの!!」

「怒られてもな……だが、それすら届かないって言っても、魔力がある特別なもんだろ!？」

「ええそうよ、塵のようになったアイリスフィールと言う人物の、僅かな我が儘が集まった存在。ま、それはもう関係ないけどね」

後ろを見る。イリヤとクロエは困惑する中、彼女達には悪いが詳しく説明できない。あの子達の世界では、それが無かった世界だ。

そして無銘は静かに苦々しく泥を見る。彼にとってそれは、無視できない存在であり、エミヤもまた、銃を構える。

「あんたの狙いは何だ? まさか全てを泥に染めたり、この世全ての悪を生み出すことか?」

「いいえ、違うわ」

「ならなんだ……」

緊迫する中、マスター達も黙り込む中、彼女は真顔で、

「私はただ、魔法少女が恋愛して結婚する世界を創り出すだけよ」

……………

ワレワレのシコウは止まった……………

くねくねと頬を赤く染めながら、僅かによだれを流しながら言う。

「私はね、いまの世界観、倫理観を壊してくだしく恋愛する世界を作りたいだけなのよ」

「いつ

や

あ

ああああああああああああああああああああああああああああああ

「い、イリヤ落ち着いてっ!!」

「……………ぐふっ」

「じいつ、ちが、アサシン気をしつかり待てええええええええええ」

後ろが騒がしい、マスターに任せよう。

「……………それは確かに、抑止力出るべきかどうか少しフリーズするわ」

「おかしなことかしら!? 可愛いものが可愛いものと結ばれるべきなのよっ」

「おかしいよ、お前どっかでバグ拾ってるぞ!!」

「おかしなのは貴方よっ、これを見なさいッ」

そう言った途端、ノツブくと言う声と共に、歌が流れる。先ほどのライブ映像。

この程度で心折れないぞ。

「もう折れた心折ろうとしても無駄だぞッ」

「折れてるんだね……………」

メアリーが悲しそうに見つめてくる。よく見るとアンやアルトリアリリイもだよ。悲しいよ。

「こんな可愛いのに、男の子のはずが無いじゃないッ。貴方は女の子であるべきよ!! それを否定されるなんて……………神や世界が許しても、私が許さないわッ」

「ふざけるな、もう何度も言うがオレは男だ。生まれてこの方男で精神年齢前世引き継いだ所為で若人通り越して老人化しているが男だ男性だ。結婚するんなら女性がいい高校生男子だオレは」

もう何度言ったんだろうか分からない言葉が続ける。ホント、響や奏さんにも何度言っただろう。だから着ないと何度。

「だから私は変えるッ、この世界を始め、聖杯全てにアクセスして、関わる魂全てを女の子と男の子ではつきりし、愛し愛する世界にするの♪ もちろん、ぐっふふふ……………」

「駄目だ、腐ってますよイリヤさん」

「いつやああああああああああ実の母親に似ている人が腐女子

いつやああああああああああああああ

「似てるんじゃないかって、平行世界のママよ♪」

「ぐふっ」

「じいさあああああああんうううううううううううううう」

ああこれ以上会話すると色々精神的な限界を感じる。正直もうオレが駄目だ。いまだに流れる映像を止めるために、武器を構える。「そんなくだらないことを全平行世界代表として止めるッ、止めてみせるッ。っていかいまは外れてるオレは関係ないのに巻き込みやがって!!」

「本音言ってますね、あの人」

「よっほど女装が嫌じゃったんじゃないや……」

「マシユ、リリイ、ジャンヌリリイ、アン、メアリーっ」

「任せてください先輩っ」

「頑張りますですっ」

「精一杯頑張りますっ」

「あんな黒髭みたいなのは細切れだよアンっ」

「海賊を舐めるなよっ」

なにげにみんな戦えない四人を放置しているが、それには仕方ないと頷き合い。

「美遊、沖田、信長は四人を」

「分かりましたっ」

「うむっ、是非もないよネっ」

「はいっ」

実際弱っているため、戦えると言おうとするが、

「うふっ♪♪」

血吹いた、無理だった。

そしてアスカの元に、アストルフオが来て、槍を構える。

「こうして肩を並べるとはね」

「問題ないよ、ボクらは二人で、顔合わせも戦うのも初めてだけど」

「ああ、それ以上の信頼があるッ。負ける気は無い」

その様子を、息を荒くして見ている者が二名（一つステッキ）がい

るが無視して、肩を並べて戦おうとすると、

「とは言え、一人じゃないわつ。メディアさん、ナイチンゲールさんッ」

床から生えてくるナイチンゲール。メディアさんはカメラがある部屋から出てくる。かなり物理的に出てくるな。

「それだけではないのよ、アストルフオウちゃんのため、特別ゲストがいるの♪ 必ずアストルフオウちゃんを女の子にしなきゃ、みんな悲しむから……………」

「誰も悲しまないよっ」

「ボクは男の子でも女の子でも問題ないよっ!!」

鼻血を出しかけるメディアさんとアイリちゃん。ついでにステッキ。だが、

「セイツバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「もの凄くここで新キャラ出すなッ」

「新キャラではありませんッ、謎のヒロインXです!!」

そう言つて、剣を構え、いざと言う顔をするが待つて欲しい。

「アルトリアああああああああ、後ろの人、泥とか色々あるから止めるよ」

「私は謎のヒロインXです。泥とかアイリスフィールとかシロウとは無関係のセイバーさんです。なにより……………：貴方というセイバーはここで討ち取らないといけないッ。そう、なんですかそんなどこぞのサンタ幼児聖女のような属性てんこ盛りっ、ふざけるな……………：セイバー・オブ・セイバーの座は渡しません!!」

「いらないよ、オレは人間で抑止力だからまちまちだ
ああああああああ」

「セイバーはみなそう言うんだああああああああああああ」

向かってくる謎のヒロインXに対して、二刀流で対応する。そう、もう一本、バルムンクを使つたいつもの戦い。

「戦い方も被つてるじゃないですかああああああああああ」

「リスペクトしてるだけだああああああああああ」

「貴方は、貴方だけは……………貴方だけは絶対にここで倒す!!」

「取りましょう……………全てのために……………あつ、いけない鼻血が……………」

鼻血を拭いて戦いが始まる中、もう体力が無い四人は完全無視して始まった。

「セイツバアアアアアアアアアアア」

向かってくるエクスカリバー二本に対して、こちらは滑るようにかわして、アストルフオと連携する。

踊るように舞い、そして、

「華麗に刺すよっ」

「斬っ」

「くっ!!」

アストルフオも能力が上がっているかのように動くが、実際は違う。連携がここまでかみ合うとは。向こうもそれに気づいている。

「チイイイイイイイイイイイイ」

「アストルフオっ」

「OKっ♪♪」

スピードに物を言わせ、こちらの大技の隙を作ろうとするアストルフオに、ヒロインXは苦虫を噛むような顔をする。

「いまだっ、バルムンク、クラレント」

「ちよっ、その剣は不肖息子の!!」

だが何か言う前に、魔力放射で接近して、たたきつづす。

「峰打ちだよっ」

「がっ」

だが全力魔力放射による、王剣と魔剣の峰は峰だろうか？

そう思いながら倒れたヒロインXを無視して、アストルフオと共に、アイリを見る。

えっへへとよだれを流している。腐っているな。

だが急に真剣な顔になる。

「アストルフオ、こちらにつきなさい。そうすればアスカを嫁にしてあげるわ」

「今日はいいい日です、最高の素材と出会えました。帰ったらウェブへアップしなければいけませんね」

「そんなことさせないよルビーツ」

ああそれは俺もさせられないな。そんなこと。

そう考えながら、よだれを流していた彼女はうふふと笑う。

「この状況で笑えるとは、とんだ阿呆よのう」

「さすがにもう手出しできないんじゃない？」

「そうですね♪ 海賊の私達が言うのもあれですが、お縄についてください♪」

そう言うが、彼女は静かに、

「いいえ……………サーヴァントがどんなに頑張っても、私には勝てませんよ」

その瞬間、急に力が吸われ出した。

「なっ」

「なん、じゃと……………」

サーヴァントのみんなだけじゃなく、俺の魔力も、令呪が、

「消えっ、ていく……………」

「バカな!? 我々の魔力を吸うことはできても……………マスターから令呪を奪ったとでも言うのか……………」

さすがに無銘が顔を上げるが、微かに黄金の粒子まで見え隠れする。

まともに立っているのは、彼女しか居ない。

「あっはははは、さ・す・が・に、もう立っている子はいないわね」

それに辺りを見れば、ナイチンゲールやメディア、ヒロインXからも魔力を、ちびノブまでから吸い取っている。

「君は……………」

「お前、始めから……………」

そう言うアスカの言葉に、満足そうに微笑み、るんるんと言いなが

ら部屋の中心に来て、自分から胸に手を差し込んだ。
取り出したのは、黒い聖杯。それにうっとりしながら、見つめてい
る。

「……………エミヤ」

「……………泥だ」

微かに聞こえた声に、泥と聞いて、アスカが顔を上げる。

「泥……………悪意、人類史がため込んだもの」

——アスカ

元々このシリーズは、願望器、聖杯を賭けた戦争であった。

だが、アニメの様子を見て調べたが、聖杯は前の前で、とある悪意
の固まりである反英雄を組み込んだ所為で、全ての願いを破壊するこ
とでしか叶えられない『欠陥品』になり下がったのが、全ての元凶な
のだ。

つまり泥のような黒いそれは、悪意そのものである。

「そう、私はね。破壊された泥の残りもの。それもね、こんな姿を取る
ようなものなのよね」

そう言いながら、黒い聖杯、小さなそれをくるくる回しながらス
キップする。

「べえつにいく世界を泥で覆うとかく破壊するとかくそんなこと考え
てないの。私は小さなこの泥の本質で動く。女の子は女の子、男の子
は男の子同士の恋愛。そして、アストルフオウくんのような子を女の
子にする。そう、世界そのものをそうする。それが私の願い」

そう言いながら、笑う。

色々な意味で怖いなそれ。

「邪魔することはさせないわ、カルデアと言う、最も多くの英霊と契約
したマスターと共に来た、多くの英霊達を燃料に、奇跡を起こす、偽
物の本物になる。これが私の計画。もう遅い、貴方を取り込めば、
きつと多くの英霊が駆けつけるでしょうね」

そう藤丸立香を見る。元々狙いは、

「先輩だった……………」

「始めからマスターさんが来れば、それで解決してた？」

「わしらが迷い込んだのは」

「すでに使ったら、本質的に来れる子が早めに来ただけ。まあ遅かれ早かれ、この世界に藤丸立香と縁がある英霊全員呼んで取り込む気だったから、牢屋に入れたり、取ったりしたけどねっ♪」

その最後がおかしいのですが……………」

「後はあれよ、藤丸立香争奪戦とかそう言うのすれば、わんさか英霊がこの世界に来るわっ。そうすれば、世界の一つや二つねじ曲げられるほどの魔力が貯まるわよ♪♪」

確かに貯まりそうで怖い。どうやら、

「お主はここで倒しておかなければ」

「いけないようだ……………」

立ち上がるサーヴァント達、それを見て、微笑むのをやめ、いや、

凶悪に歪めて笑う。

【出来る分けないだろ魔力の分際で】

その瞬間、聖杯から泥が流れ出る。アイリにまとわりつき、鞭のような放たれ、全員が避けたり、防いだりする。

その様子に苦もなく操り、その様子を見ていた。

「どうする……………剣の動きも悪いが」

「同感、このままじゃ」

全員が中心に集められるように動かされ、メアリーと視界が合い、いまは考えずに協力して弾いている。

マシユはマスターを拾い、盾で防ぐが、

「霊体である僕らは問題だな、宝具を撃てそうなのは」

「すいません、あまり考えずに使ってしまったので」

ヒロインXがそう言う。メディアもナイチンゲールもいるが、ナイチンゲールはオレを見て手を伸ばすのでやめて欲しい。

「ならどうします……………正直、魔力が」

「美遊、私達は？」

「イリヤさん達は問題ないですが、火力不足ですっ」

「イリヤちゃんの魔力を宝具に渡すことは!？」

【させると思うか!!】

無数の槍のようにそれが放たれるが、全員が避ける。

そしてなにより、

「どうやら本体はアイリの姿を借りてはいるが、あの黒い聖杯だ………そこまで届く一撃は複数の宝具ではないと無理だっ」

エミヤの話に、全員が苦虫を噛むが、

「……………複数？」

オレはそれを聞いて、

「だからかマーリンッ、それならそう言え!!」

気合いを入れて鞭を弾き、

「ルビーとサファイヤ、オレに魔力をツ。オレは複数の宝具使いッ。同時使用可だ!!」

それを聞き、全員の目の色が変わる。

無数の鞭が槍のように放たれるが、リリイ達が防ぎ、イリヤと美遊にも放たれるが、シールドの盾で防がれ、杖二つが投げられる。

「アスカッ」

受け取ったアストルフオが投げ渡してきて、それを受け取る。

「もう衣装に文句は言わんッ、ただし全力で魔力を貸せッ!!」

「了解ッ!!」

魔力の光が辺りを包む、そこに無数の泥の固まりを放つが、燦然と輝く銀と魔竜の血を浴びた剣で斬る。

そして現れたのは、

「マジカル少女アストルフオちゃん、大サービスモードですっ♪♪」
「姉さん……………」

歯を食いしばり、考えるのをやめ、目の前の敵を見る。

メディアが鼻血を出して倒れたのを視界の端、アストルフオがいつけええと言うが、何名か口を開けて固まっていたのを無視、下半身のすーすーする短パンが無いんじゃないか感覚も無視して、オレは、

「真名、解放!!」

その見た目とは裏腹の、凶悪な魔力をはき出す。

「食われる前に、斬るッ」

竜の瞳になり、耳と尻尾を立てて飛翔する。

銀と紅、黒と蒼の魔力は雷鳴と成り、一つの剣となり、突進する。

それに対して、泥の固まりを壁にしてぶつけた。

【いただきます♪♪】

その一言と共に泥が魔力を飲み込んだ。

だが、

歌が世界に響くと共に、魔力の剣は泥を突き破り、アイリの後ろに隠れている眼光、紅い眼光を見て、笑いながら魔力の剣を振り下ろした。

——藤丸立香

「先輩無事ですか!?!」

「俺は問題ない、アスカは!?!」

建物も壊す一撃の中、アスカが飛翔して現れる。

一見可憐な少女だが、まあ男の子だろう。アストルフオが抱きつこうとするが、持っている女性を見る。アイリスだ。

「マスター」

「これは……………」

まるで眠っている様子であり、メディアに見せた。

「どうやら泥に操られただけのようね……………気づかず、向こう側にいたけど、彼女は操られて、器にされていた。それだけのようよ」

「あい分かった、ともかくお主は鼻血を拭け」

「リリー達、彼女には近づかないように」

ヒロインXがリリー達を守りながら、いまだ鼻血を出すメディア。無銘はとりあえず、コートをアスカにかける。いまだにルビーがハイテンションでシャッター切る。

「……………お願いします、この姿を撮らないでください……………」

はつきり言えば、美遊とイリヤの二人のコスチュームを合わせ、アストルフオとアストルフオウくんを合わせた美少女だった。

震える彼には悪いことをした。我々は彼に何も言えない。

「うふふ………」

よだれを流しながら微笑むアイリスもどうしよう。本当に操られていたか少し不安だ。と、

「ダ・ヴィンチちゃんからだ」

『もしもし、どうやら無事ことが済んだようだね。いまその世界の分解が始まったよ。何名か男性サーヴァントも戻ってきた、まあ何名か精神的ショックが大きくて立ち直ってないけどね』

今回は妙なところで人の心に傷を付けた事件だな。言わないでおくけど。

アスカの身体も黄金の粒子になり始めた。

「アスカ、もうお別れ？」

「みたいだな………アストルフオ、それじゃ」

「うん、それじゃ」

その様子じゃ、お別れのようだ。急いで俺達も駆け寄る。

「助けに来てくれてありがとうアスカ」

「アスカさん、本当に助かりました。ありがとうございます」

「マスター藤丸立香、マシユさん。それじゃ、縁が有れば」

そうやって立ち上がると、何故か、

メアリーが水着で着ていた物と、同じタイプの水着を着ていた、アストルフオウくんがいた。

「いい仕事をしました」

ルビーがそう言うと共に、真っ赤な顔でその姿をさらした彼はいなくなつた。

同時に俺達は、静かに涙を流した………

泥が這いずる。

【何故だ……抑止力だからだったか……】

その時、空間が消える。また散りへと戻るのだろう。

自分は所詮、器にされたモノの童心、悪戯心の残りのようなものだ。消える。

【ふざけるな……どんな手を使ってでもまた……】

だが、それは次の瞬間、剣に刺される。

【……なっ……】

『魔力切れ近くになっても動く、悪あがきが取り柄の奴に当たったのが運の尽きだ。悪意の固まり、まあ小さな小さなものだったが』

それはなんと言うのだろう。ただのコートや布、マフラーなので素顔、素肌を隠した何者か。

その剣を見ながら、分からないと泥は目で見渡す。

無数の刀剣類があるが、これは無銘などと言う、剣が根元の魔術師では無い。

【お、前、ダレ、だ!?!】

『……ただのセイバーと言っておこう』

散りすら残さないほどの剣が突き刺さり、泥は消える。

世界が本格的に崩れ始めるのを見ながら、それは静かに還っていった……

外の理・第5章、関係

全てを終えたカルデア、多くの傷跡が残る中、ダ・ヴィンチちゃんだけ腕を組み、ふむと考え込んでいた。

「空間が壊れ始めていたが、本当に全て終わったのかな？」

少しだけ検査、調査してみると、ごく僅かだが、まだあった。

そう、あった。すでに空間を支えていた元凶、僅かな泥であるそれは消えている。謎のサーヴァントの手により、消されていた。

それを見たダ・ヴィンチ。そのサーヴァントをスキャンしようとする、機器が突如悲鳴を上げ、エラーを表示している。これを見ていると、

「やめておけ」

そこに、金色の鎧を脱ぎ、ワインを楽しんでいた英霊が現れた。それには少しばかり驚き、納得してやめた。

「英雄王自らが止めに入るような存在ね。天才としては解明したいところだが」

「二度も言わせるなたわけ。今回の件はただの悪意が、あれの領域に引っかけたから出てきたただけだ。あれはそうそう人の世に出ることは、いや……………」

そう言いながらグラスの中身を飲み干し、静かに己の宝物庫にしま

う。

「人の世に常にありながら、常でない。相も変わらず矛盾の存在、実に不愉快だ。あれがそう言うもので無ければ、不敬罪で消している」

「……………」

それをしないと言うことは、あれと言うのはそれほどこまで高位の存在。神霊、いや、この英雄王がやめると言う行動をするのなら、神霊であるはずはない。

「それなら、なんなんだろうね……………」

そう思いながら、もう一人、アスカと言う英霊として、手を貸しに来た子も見ることが、その魂の性質に、少しばかり驚く。

「令呪が効かない……………ああそうだろうね、これじゃ効くはずも無い」

検査結果を見て、さも納得する。もしかすれば彼もまた、謎のサーヴァントと関わり合いがあるのだろう。

「当たり前だな、今回は道化の祭り、愚か者が混じっただけのこと。ま、その事実を本人に言うか言わないかは、お前に任す。余が許そう」
そう言つて去り、あーあと微笑みながら、グラフを見つめていた
……

——
???

朝日が差し込み、目を覚ます。

私は立花響、目が覚めるとそこには、

「フォウフォオ、フォウ♪ おはよう響♪」

耳と尻尾を持つ、アストルフオウくん。エプロン姿で可愛らしくウインクしていた。

末期だと、私は悟った……………

「と言う夢を見たんだよ未来」

「ああうん、実は私も……………」

「やめてやれよ……………」

——立花響

あれからアスカは殺してくれとしか言わなくなり、一度家に帰った。

正直、アストルフオウくんはあまりにツボなので、写真の一枚か二枚は欲しいです。ですがみんなが言うにはやめておかないと、アスカが理性崩壊するのでだめと、保管は仕方なくするが、閲覧禁止らしい。それでもアスカの傷は深く、男装に戻っています。

……………

ああ違う、元に戻ってます。

「響、どうした？」

「いえ奏さんっ、少し頭の中で過去を振り返ってただけですっ」
いまは元気付けられるために、料理の材料、簡単な鍋物を作るために、アスカの家に出向いています。

クリスちゃんが何度も注意を言い、部屋に入ると、

「……………ごめん、まだ元気無い」

「……………飯は食え」

「……………うん」

クリスちゃんの言うことを聞き、部屋に入れてくれます。

——龍崎アスカ

「さすがに辛い……………」

「元気をさせアスカっ、私から見えていい振り付けだったぞッ」

翼さんはそう言うと、クリスが奥へ連れて行く。怒鳴り声と説教が聞こえ、うなだれながら戻ってきた。

そうか、やっぱりみんな、オレが女の子のような振り付けと笑顔して、歌って踊ってるの見てたのね。

辛い。

「ま、まああれだ。元気出せ、私ら全員、ちゃんと忘れるから」

「えっ」

響と奏さんを連れて行くクリス。未来もついて行く。翼さんに料理させられないから全員出ていくのは怖いんだけど……………

仕方なくテレビを見る。いまアイドル番組見ると精神崩壊起こしそうだから、どうしようかな……………

「ああ、ところでどんな鍋にする？ 私はできれば豆乳鍋などにチャレンジしたいんだけど？」

元凶は黙って帰って欲しい。静かに睨む。

そこにさも当たり前のようにいる花の魔術師。ただ一言言おう。

「帰れ」

「えっ今回の一件が解決したこと伝えに着ただけなんだけど」
「帰れ」

「おま、アスカのことを考えろよ……………」

「食い入るように見てた人達には言われたくないよっ」

「この世界に味方はいない……………」

落ち着いてから、マーリンが言うには解決したらしい。

「まあとりあえず、できればそうそう問題が起きないことを祈ろうよ」
「……………やっぱり『また』があるのか？」

「それは当たり前だろう？ 君は抑止力だ、またがあることもあるし、無いこともある。ま、私達抑止である英霊や存在が声を掛けられることは無いはずだ」

むしろと言いながら、白菜を食べ、

「君はこの世界の一部だ。この世界の問題の方が、君にとって危険だよ」

実はあの身体、アストルフオの霊体をベースに、抑止の力を加えたらしい。正直急ぎの作業だから、あれだった。

だが自分が問題なく動けるように、色々考慮と配慮は最前線でしたと言う。

「君が使う力は異常だからね。いくらなんでも向こうでも違和感なく使えるようにするのは骨が折れたよ」

「それならアスカにさせんなよ」

「それを私に言われてもなく……………ほんと、今回の件は誰も得しない事件だよ」

そう話ながらご飯を食べる中、少し考え込む。

「……………そっち側なら援護するが、こつちの問題は我関せずか？」

「そう。あつ、豚肉もちょうだい」

未来によそつてもらいながら、受け取り、ふーふーしながら食べる。

「まあ祈りくらいはするよ、君には数多の世界で借りがあるんだから」
「はいはい……………」

スープを飲みながら、少し落ち着き、また、落ち着いてから考える。

「今回のこと、オレがこの世界に転生したことと関係ないよな？」

その言葉に、マーリンは静かに、

「……………さあね……………」

花の魔術師は少しわざとらしく間を置いてから、そう答えた。

どうもオレの死、前世には、まだまだ裏があるらしい。

「正直それも考えてるよ、やれやれ……………アヴァロンで隠居しているはずなんだけどね私。考えなきやいけないことが多いし、伝えられない件もある」

伝えられない件。それには少し覚えがある。

謎の英霊、剣を使うそれだろう。

「グラランド・サーヴァントだろ？ 諦めろ」

「ビーストならともかく、ほとんど雑務なんだもんなく」

それにと、

「君の件も、まだ色々だよ。彼の方で君も含めてケアしてるから、あまり今回引つ張りすぎると、自分のことで失敗するから。早く元気になるんだね、この子達のためにも」

「……………あんたに言われたら終わりか」

酷いなくと言うが、身に覚えがあるためそれ以上は言わず、手を合わせてごちそうさまと言って、こちらを見る。

「それじゃ、またね」

「嫌だよ」

「違うよ、もう一つの君に対してだ」

「それも嫌だよ」

「酷いなく彼女達に薬渡してないのに」

そんなことを言いながら、窓から帰っていった。

——藤丸立香

「はあ、それで無銘、みんなは？」

「だいぶ落ち着きを取り戻している。最初の二人はもう忘れてるよ
うに意気投合しているよ」

カルデアの食堂で、無銘と話し合う。今回の件で色々した。

まずルビーから記録データを奪うため、令呪を切った。ルビーにも効いて良かった良かった。

そしてメディアからもデータ取り上げたりと、色々。さすがにカルデアの方も、通信はなかったが、データは見えていたらしい。消せはしないが、公にはしないと、ダ・ヴィンチちゃんが言っつて、管理するらしい。

「ともかく、今回は私も少し響いたよ。しばらくは料理人ぐらいの仕事だけにしてくれマスター」

「ああ、分かったよ」

そんな時に、いつも時々来てお菓子食べたりして帰る。アヴァロンから通う彼が入ってきた。

「やあ、さつきぶり」

「? マーリン。なにを言っているの?」

「いやなに、もう一人の君のところで鍋をいただいてね。それで」

「……………えっ?」

「マフスター♪」

その時、アストルフオが後ろから抱きついてくる。

最近、アストルフオのスキンシップが、前々より積極的にしてくるようになったな〜と思いつながら、背中に張り付くこの子を取り外す。布団にも入るし、お風呂にもね。どうしたんだろう?

無銘は何も言わず、マーリンは静かにお茶菓子を頼みながら、ここは平和だった。

——龍崎アスカ

みんなの反応があれです。

司令達は優しいです、クリスはなにかあれば言えと優しくなりました。最近は何が良いです。

調子ちゃんとよく会話します。信じられる人の一人です。切歌ちゃんとかとマリアさんは何かストップがかかる。やはり言われる前に気づ

いてくれたのは大きいようだ。二人に悪いよなこれ。

翼さんと緒川さんは別の意味で辛いです。あの二人歌唱力と振り付けと、変なところに目を付けています。

奏さん、言わせないで。

幼なじみ達、信じていたものに裏切られた気がするが、こちらの様子を見て未来はこっち側のような気がするけど。持つてそうだけだね。

さすがにそろそろ元気な姿を見せないといけない、そう思い、司令と共に司令室へ歩いている。

「辛くはないか？」

「……………もうこれには慣れました」

リディアン女学院の女性服、やはりここに来るとこれに着替えなければいけない。それに慣れてしまった。

「やはり、早い段階で考えるべきだった……………すまない」

「いえ、こればかりは仕方ないです」

そう思いながら、ただ一つ、

「それにやっぱり、こんな姿でも、やらなきゃいけないことから目を背ける気はないですよ」

いま装者はノイズの災厄が無くなったいま、新たな方法で世のために活動する。これを前提に組織を動かすのが、現状なのだ。

オレ一人、いつまでも引きこもってはいけない。

「……………オレはオレとして、頑張る。いろんな人にその姿、見せなきゃいけませんから……………」

「……………そうだな」

ただ、思うことは一つ。

「もうアストルフオウくんには成らない」

それだけは心に誓いを立てた。

「……………ん」

家から騒ぎ声が聞こえ、中に入ると、

「あつ、ア〜スカ♪」

響達が料理したり、掃除したりと、なにしてるんだかと思う。

「いやね、アストルフオウくんの写真は欲しいけど、アスカには悪いと思ってるから、元気になって欲しいんだもん」

そう言いながら、響は少し抱きついてくる。響は顔がゆるみながら、

「やっぱりアスカが側にいないと、ね……………」

「……………はいはい」

もうこの年齢で抱きつかれても困るので剥がしながら、しばらく大人身内に落ち着く。

よく考えればまだ響はオレが目の前で死んだことがあつたりするのだから、あまり元気ない姿は見せられない。

「……………あーもう」

ともかく、あの花の魔術師が言っていたとおり、気にしすぎているらダメらしい。

早く切り替えるかと思いつながら、部屋に入っていくことにした。

外の理・第6章、幸せ

朝日が入る、今日は洋食のつもりだから、すぐにできるため、睡眠に時間を割くつもりだった。

龍崎アスカ、前世で英霊アストルフオと契約し、その後転生先が彼と関わり合いがある血脈だからか、その容姿は彼とよく似た男性である。

だがアストルフオは男の娘と言われるほどの美少女であり、数多くの傷を受ける羽目になり、その傷は常人ならどうなるか分からないほどである。

ちなみに前世は普通の日本人男性、二十歳過ぎの大学生のため、考えてみて欲しい。計り知れないほどの心の傷だ。

そんな日々の中、彼はシャツと短パン姿で布団の中で寝ていて、何かを、

抱きしめながら寝ていた。

……………

「ん？」

それに頭が覚醒し、目を見開くと、自分に顔を埋め、幸せそうに寝る。

銀髪の少女がいるので、思考が停止した。

「おかあさん……………」

寝言でそう呟くその子は、前世大切にしていた英霊である。

『もしもし、実はこの前の件で、少しばかり契約のパスがおかしくなって、一人そっちに行っていないかな？　いま調べたらいいんだけど、いないんだよ』

「まずテメエはどこから電話してる？　グラランド・キャスター」

『えっ？　話聞いてアヴァロンだよ。ここ電話線とか引いてるから』

業者さん呼ばなくて苦労したと愚痴りながら、理想郷とも呼ばれる

場所に呼ぼうとするなど思いながら、ベーコンを焼く。

「おねえさん、わたしたちの席はここ？」

「ああ、もうすぐ作るから少し待ってろよ」

電話片手にいそいそと料理している。クリスに面倒見てもらいながら、いまの彼女の状態を聞く。

「さすがに魂食らい？ だったか。んなことさせられないんだが」

『ああ問題ないよ、君の魔力で現界してるだろうからね。数日すればもとのパスになるから、問題ないから面倒見てよ。向こうには私がメールなりなんなり出しておくよ』

「お前現代かぶれ過ぎないか？」

現代魔術師は科学を嫌悪しているのに、その最高位とも言えるグラウンド・キヤスターが躊躇いもなく使ってる。これ聞けばどれほどの魔術師が発狂するだろうか？ 元々おかしい価値観がよりおかしくなるなど思いながら、ご飯を持ってくる。

「えっと、アサシン？ しばらくはオレがおかあさんになるみたいなんだ。令呪も浮かんでるし、嫌じゃない？」

「うんっ♪ おかあさんは、おかあさんと同じだから、わたしたちは別に良いよっ」

そう言いながら、美味しそうな朝食を見ながら、それじゃいただきますと言いながら、ご飯を食べる。

興奮したように喜びながら食べるアサシン。よごれた口元を拭いたり、面倒を見ながら、その容姿を見る。

自分が知る礼装そのまま、さすがに連れて歩けない。

「クリスマス、悪いけど下着と洋服頼めるか？ 話の通りだから、司令にはオレから連絡する。今日は休みで良かった」

そうやれやれと思いつつながら、食べ終えたら膝の上に載せて、よしよしと頭を撫でる。

「別に構わないけどよ……平気か？」

少し鋭い目で言うが、それにはのほほんと、

「問題ないと言うか、その辺り気にしてたら身が持たないが正しい。令呪はこの通りあるし、いざとなれば切るよ」

そう言つて、心臓の部分。胸に現れていた令呪を見せる。おかげでシャツと短パン姿のままだが、クリスは気にしなくなっていた。

わーかったよと言つてから、食べ終えたアサシンに洋服買ってきてやると言つて、別室に連れてサイズを計ると共に、連絡をしておく。

しかし、

「まさか食費を削つてガチャつたジャック・ザ・リッパーが家に来るなんてな」

念のためにアサシンちゃんと呼びながら、ぼーとしている今日この頃である。

正直、色々とツツコミが来そうな反英霊。

彼女は本来生まれるはずか、不幸にも生まれなかつた子供達の集合体。怨霊だ。

それが何故殺人鬼の名前を借りているのかは、縁があるからである。としか言えないのだろうか？ 素人であるオレではそこまでだ。

女性を多く殺し、今だ正体不明の殺人鬼。その器を借りて現界する彼女達を優しくするが、余りすぎると腹を切り裂かれるので、気を付けないといけない。

「つてくせにな〜……………」

「ジャック、はいアーン」

「あーん♪♪」

パフェを食わせたり、連れ回したりしてあげるオレである。

クリスは呆れながら見ていて、その様子に真顔で、

「実はオレ、ジャックを課金ゲー時代、食費削つてまで手に入れたほどの思い入れ深く、当時知り合いからロリコンと言われても悪いかと反論したほどだ」

「真顔でアホなこと言うな」

いまはジャックのリクエストで可愛らしいワンピース姿に、顔の傷は絆創膏や化粧などで隠して、こうして連れ回している。

クリスは家が隣であることもあり、前世のことやら色々話す機会があり、ジャックのことはよく知っている。

だが、

(ま、こいつのやりたいことは分かるか……………)

生まれるはずが、親の都合で生まれることすらされず、またはできなかつた者達。

聖杯への願いは、また母親の中に戻りたい。

それを聞けば、何も言えなくなる。この子は悪で間違いないだろう、目的のためなら躊躇い無く人を殺す子だ。だからこの子を悪とはつきり言える。

だが、けして忘れてはいけないのは、彼女を裁く際、けして自分は正義では無いことも、忘れてはいけない。

そして、オレで現界している。戦う必要も、聖杯も関係ないいまは、サーヴァントの身分で幸せに過ごして欲しいと願うのは、間違いかどうか分からない。

分からないがいいだろうとも思いながら、手を握り散歩する。

「けどクリスはいいのか？ これは」

「別に。部屋にいてもバカが来るし、わたしは構わない」

そう言つて、ジャックを真ん中に、二人して散歩する。

誰かに見られながら……………

遊園地、ジェットコースターに乗ること十回。

「す、少し休ませろっ」

「おねえさんよわーい」

「なんだとツ、いいだろ。また乗るぞジャック!!」

(おいおい……………)

オレはヒポグリフや自身の飛行で慣れているため、ジェットコースターくらいは平気だが、何度も乗るのはクリスは疲れたらしい。

だがジャックは楽しんで、遊園地を満足している。

そんな中で買い食いしながら、ジャックは年相応にはしゃいで、楽しみ、笑顔である。

その様子を見ながら、オレは少しだけ微笑みながら、抱きついてきたりするジャックを受け止めたりして、楽しむ。

「というわけでき、少し回線引きたいんだけど、業者に頼めないかな？」

「貴方は一度斬るべきでしょうか？」

アルトリアがそう聞きながら、俺はまあまあと止めておく。

便利になるからいいじゃないかと本気で言うマーリンだが、このままじゃアヴァロンが現代風に開拓されそうだ。

「いや、影の国にも少しばかり欲しいぞ。あそこは暇だからな」

人理修復し終えたら、行き来してくる人の一人がそう言いながら、ズタボロな何かを床に置く。ああ、また弟子さんかと思いつながら、少しは大人しくして欲しい。

「いやしかしなマスターよ、わしの国はほんとに暇なんぞな。伊達や酔狂で言っている訳ではないのだよ」

「そうだよ!! 少しはいいだろう!!」

二人とも真剣だが、ともかくそつとしておこう。

「それじゃマーリン、ジャックは向こうの、アスカくんの元にいるんだね？」

少し心配だ。マーリンの話では、彼は魔術師では無いが、特別だと言いつ、サーヴァントは最終的にどういう存在かも知っていると云っていた。

だからと言って、彼は自分と同じ、優しい類と言われている。自覚があるだけ少し心配だ。

自分もジャック、ナーサリーやジャンヌリイにも優しすぎる。よく注意を受けたりするのだが、やめることができない。

例えばそれで彼女達に殺される可能性があるとしても……………

「大丈夫かな……………」

「危険な思考のサーヴァントは向こうには居ないらしいから問題ないと思うけどね」

「……………ん？」

いまなんて言った。

「マーリンツ、いま危険な思考のがない？　なら、サーヴァント事態は!?」

「ん？　それは」

それを聞き、少しだけ俺は焦った。

心配だ。

——龍崎アスカ

「つたく……………ホントガキだなこいつ」

「子供の集合体だから、仕方ないよ……………」

そう言い、背負いながらすーすーと眠る可愛らしい少女。

スカートの中にナイフやらなんやらを隠し持つ子とは思えない。可愛らしいこのうえないし、笑顔を振りまき、楽しんでいた。

「……………聖杯つてのに戻れば、このこと忘れちまうんだよな……………」

夕焼けの中でそう呟くクリス。それにああと呟く。

「確かそういう仕組み、この子達にとっていまは夢を見ているようなもんだ」

「夢か……………」

顔を埋めて、おかあさんと嬉しそうにオレを呼ぶこの子。

だが、オレの中でそれを呼ぶべきに相応しいマスターは一人だけではないかと思いつながら、帰路を歩く。

家の中で、目を覚まして、ご飯を食べて元気なジャック。ハンバーグがお気に入りらしい。

そして、

「ほら、頭洗うから、大人しくしなさい」

「はい」

目を瞑るジャックの頭を洗いながら、一緒にお風呂に入る。

湯船の中、ふうくと落ち着き、ジャックも疲れを取る中、どんどんと言う音と共に、誰かが浴室前に来る。

『おいアスカっ!! お前いま風呂か!! いまジャックはどこだ!!』
「? ここだよ」

そう返事をするな、しばらく沈黙が来る。

なんだ? もう身体も洗い終えたし、身体を湯船で暖めるだけだぞ?
?

そう思っていたら聖詠が流れ聞こえてきた。何故だ!?

「待てクリス!! なにがどうし」

『るっせえ、お前風呂出たら覚えてろよっ!! 年齢考えろバカ!!』

「?」

「えへへ」

嬉しそうにするジャックが甘えてくる。別に気にせず、風呂に入り、出たら殴られたよ。なんでだ?

「でだ、オメエまさか」

「一緒に寝るらしいから、一緒に寝るぞ」

髪を拭いてあげ、髪を乾かして、丁寧に髪の手入れをするオレはそう答えると、クリスが顔を赤くして、睨む。

「お前、オレが変なことすると思ってるのか? オレはジャックは大切なだけだ。変な想像するのは響達だけにしてくれないか?」

「おまつ、だけど」

「それに」

クリスだけ奥に連れて行って、ここそそと話す。

「ジャックの性質は変わらないんだ、令呪があるオレが面倒を全部見ていた方がいいんだよ実際」

「……………ほんつとうに、妙なことは無いんだな?」

「やめてくれ、お嫁さんや恋人は欲しいと思うけど、そんなに飢えてない」

それを言われ、むすつと言う顔で叩かれ、クリスは隣部屋に帰っていく。

そんな様子を見ながら、少しだけ話しながら、すやすやとジャックを寝かせる。

(明日も現界してたら、学校休んで面倒見るか)
そう思いながら、密着するジャックの優しく撫でながら、目を閉じる。

——
???

それは静かに、部屋に入る。

二人の少女（片方は少年だが）がいて、幸せそうに寝ている。

その様子にほっとする中、静かに、

「やつと姿を見せたけど、魔力は平気？」

「!?」

耳と尻尾を立てて、びつくりする彼女に、アスカはむくつと起きあがる。

「魔力はある？ 無理してないか？」

「……………いつから」

「いいから答えろ、それからだよ。アタランテ」

アタランテ、女神アルテミスを信仰する狩人であり、その恩恵と技でその腕の逸話がある。

その為に求婚者が多く、徒競走で勝負して、勝った者の伴侶になる。だが負ければ射殺すと言う勝負をしたが、男が黄金のりんごと言う神話のアイテムを使い、それに目が眩み負けてしまう。

女神の加護は純潔の誓いのため、罰を受けて雌獅子に変えられたと言う逸話から、彼女は獅子の耳と尻尾を持つ。

「でよかったのかな？」

「おおむねな……………」

軽い食事をもらいながら、アタランテはそれを受け取る。

デザートにリンゴの物ももらいながら、軽く微笑む。

「リンゴは敗北の原因だけど、嫌いじゃないんだろ？」

「ああ、すまない……………」

食事を受けながら、サーヴァント契約をさせてもらい。それでやつ

と落ち着けると、しばらく待つアスカ。

「ジャックのこと見てたの？」

「……………汝は別視点から、自分とあの子のこと」

「聖杯大戦だね……………」

それに悲しそうに頷きながら、寝ているあの子を思い出しながら、
「……………正直、汝に甘えていたためか、こちらに気づかれずだった。油断してしまった」

「別に出てきてもらって良かったよ。むしろ一般人に知られる方が危険なんだし」

「……………すまない」

そう言いながら、静かに時間が過ぎていく。

「それでは、自分はこれで」

「待て待て、どこ行く気なの？」

「……………救えなかった自分が、顔を出す訳にはいかない」

そう言いながら、それに、胸を見せる。胸の令呪を、

「!? ま、まさか」

「言っておくけど、オレは本気だよアタランテ」

「いやっ、こんなことに令呪を切るなマスター!!」

だが、

「もう敵味方じゃないし、カルデアに戻れば仲間で、守るべき子だろ？」

一緒にいられる間、君はあの子を庇護したい。正直に言えば、聖杯に願う願い、叶わないだろうと思ってる」

「? それは自分の願いか？」

子供全ての幸せ、だが、

「それは理想的すぎる。オレだから分かる、それは永遠に願われながら、永遠に叶わず、永遠に叶うと言う、矛盾の願い。聖杯だって無理だろう」

「……………抑止である汝に言われるとは」

少しだけ悲しそうになるが、すぐに、

「だから君が叶い続けさせなよ、アタランテ。子の守護者」

「!?」

顔を上げて見たのは、一瞬、別の人。マスターの顔とも言える人だった。

「君が叶えるんだ、聖杯に頼らず、おれたちはずっと君を応援するし、手を貸すよ」

それに黙り込むしかない。

彼は知っている、自分が過去の大战でどんなことをしたのかを。

「おかあさん……………」

目をこすりながら、起きてきたジャック。アタランテを見て、顔を下げて、アスカへと抱きついてくる。

あまり気にしてないようだ。

「アタランテ、マスターとして命ずる。カルデアに戻るまでオレと共に、この子を庇護してくれ」

そう言われ、少しばかり戸惑いながらも、はにかみながら、

「分かりました、マスター」

そして、

「んで」

クリスはイチイバルを構えそうなほど不機嫌になりながら、アスカを睨む。

少し気になって、何故か持つ鍵を使い入ったクリスが見たのは、美人と言えるアタランテと共に寝る。アスカであった。

何故か、正座させられながら、ジャックはトーストを食べながら、アタランテは弁解する。

「ま、マスターは妙なことをする人ではないので、矛を納めてくれっ」
「お、オレも気が付いたらアタランテがジャックごと抱きついてて驚いたんだっ」

「……………ともかく、全員に連絡すんからな」

「……………嫌な予感しかない」

「……………すまないマスター」

だがしばらく家族が居る状態の中、ジャックの面倒を見てもらうアタランテがいるため、学業は疎かにならないで済むのであった。

Gの番外編・にんぎよひめ

我が学園の学園祭が始まる。

一人の少年、ピンク色だと言うのに、男性であり、ショートの彼、龍崎アスカは静かに委員長達の話聞く。

「龍崎さん、いままでお休みの間で、我がクラスは劇になりました。龍崎さんはどんな役がいいでしょうか？」

そう、女子委員長に言われたため、

「オレは休みが多いですから、みんなが迷惑関わらない役でいいです。文句言う資格は無いで」

「皆の衆ツ、龍崎さんが人魚姫OKだそうよッ!!!」

『……………ッ!!!』

声にならない歓喜の悲鳴が轟き、!!アスカはえつと言う顔になる。

——とあるファンクラブ会長

龍崎アスカ、男の娘。我が校の有名な学生で、休みが多く、そんなイメージ故、病弱な美少女と言うイメージが固まりつつあるが、中学剣道部であり、大会は出ないものの、指導された後輩は多くの大会で、連覇などの、成績を残す。

もうすぐこのファンクラブも代替わりになる中で、このイベントはなんとしても成功させなくてはいけない。

いま我々はクラス、学年の枠組みを外れて、全ての熱意をこれらのイベントに納めるために暗躍している。

「それではそなたのクラスで、アスカ様を人魚姫にすることはできるのですか？」

覆面をつけた女子生徒が尋ねてくるため、私は静かに頷いた。

「すでにこれを……………」

テーブルに、キャミソールと短パンだけの彼の写真（貴重な資料写真です）が何枚も置かれ、全員が歓喜に満ちるが、大人しくさせる。

「こ、これで男なんて……………あり得ない……………」

「生足……………生足……………」

「すべてと言う情報が入っているぞ、残念だがドレス姿を優先するため、それらは封印するしかない」

「己教師めええええええ」

全く、彼はこの程度ならいいやと平気で肌を見せるが、これは危険すぎる。全く、自覚が足りない。これは我々のネットワーク内でしっかり管理しなければいけない。

ともかく、これで彼は抵抗無く、人魚姫をやることは決定した。それに多くの同胞は歓喜し、隠しカメラやビデオなど、映像を残すために動く。

彼の男性制服もいい。大きくなることを考えた故か、少しぶかぶかで、袖が手を少し隠すなど、もういい。

中には彼に告白する男子がいるため、色々後始末に手間取るが仕方ない。

「ドレスと人魚姫、楽しみにしなさい」

「楽しみと言えば、翼様も来るんですよ、ウチの学園祭」

「ああ、姫と姫の競演………いい………」

こうして時間だけが過ぎていく。

——龍崎アスカ

いま土下座してます。

「い、いきなり部屋に来て掃除して、なんだと言うんだアスカ!」

「今度オレの学園の学祭に来るので、学祭のことを響達に秘密にしてください」

もうね、あの姿を見られたら、それを映像なりなんなりに残されたらね、死ぬよ。

下半身は人魚で、上はキャミソールでへそだし、肩を出した薄着。アクセサリーで可愛く仕上げられた自分見て、あれ?と思つたよ。

ドレスもまた気合いが入りすぎてるけど、文句言う資格は無いんだ。学業ガン無視していたから、仕方ないんだ。

「というわけでお願い、翼さんは無理なのは分かるけど、せめて奏さん達は」

「…………分かった、いいだろう」

「本当ですか？」

「…………ただな」

少しだけむすつと言う顔で、頬を赤くする。

「ただ、私のことを翼と呼べ。いい加減、他人行事みたいに話さないで欲しい」

「…………それは」

「いいだろ？ それとも、雪音のように嫌なのか？」

そんなことを言う翼さんは珍しい。

なら…………

「分かったよ翼、これからお願いします」

「…………ああ」

こうして軽い食物を用意してから帰る。それにしばらくしてから、

「これでどうにかなる……………」

——風鳴翼

今日の仕事は学園祭、多くの場所を廻り、歌を届けると言う内容で活動中だ。

その活動の中で、学祭にも出る。その中に、まさかアスカが通う学園があるとは、楽しみだ。

アスカには悪いが、彼の人魚姫は気になる。

「翼さん、これがアスカさんの学祭のパンフレットです」

「ありがとうございます」

緒川さんと共に車での移動中、内容を見る。どうやら、男女交代の人魚姫。なら王子は女性がやるのかと思いつながら、大きくアスカの写真が貼られている。

「……………」

それをしばらく確認してから、うん…………

「…………女性にしか見えないな……………月読はよく気づいたな」

「そう言えば、僕らの方も、メデイカルチェックしてもらうまで、女性

装者として登録しようとしてましたもんね……………」

この話はアスカには絶対に言えないな、彼は少し気にしている。

正直、私も奏に「女なら、もう少し部屋を片づけろ」と言われたり、歌い手としての活動の際も、バイクの趣味のことを女性らしくないからと、伏せるべきか会議された時は、少し落ち込んだからな。

私くらい、アスカのことを男性と見てやらなければ、最近剣の試合相手をしてもらっている。

長い年月、剣を振るった武士故に、彼には一度も勝てないのが悔しい。

「あつ、もうすぐ着きます」

「はい、分かりました」

そして彼の学園へとたどり着いた。

楽屋裏で私はアーティストの衣装を纏い、少しだけ劇などが見られるようにされていた楽屋に、少し感謝している。

学生の方々に一度礼を言ったら「風鳴さんにも、自分らの学祭を楽しんでもらいたいですから」と返してもらった。

こういうのを、平和と言うんだなと思いつながら、学祭の様子を見る。以外とカメラ切り替えがうまいなど、緒川さんも感心していた。

「と、そろそろアスカの出番か」

時折緒川さんが控えているが、女性の生徒が私の面倒を見に来てくれるため、気を付けながらだが、アスカの名前を言う。

そして……………」

「……………」

なんだろう、この敗北感。

アスカは始めから最後まで、声を出さずに、動きだけの演技力で動いていた。

海面から、豪華な宴をする船をのぞき込む仕草、その後、王子を助け出す様子は、まるで本当の可憐な美少女だった。

しばらくして、海の底で王子を思い耽る様子もまた観客を劇に入れ

込ませ、魔女の元に必死に出向く様もまた合っている。

声が無くなり、ぎくしゃくしながら、陸の仕事をする町娘の様子まで、完璧であり、その表情は勉強になると、不覚にも思ってしまう。

最後には、声の主に扮した魔女より、王子は健気な人魚姫を愛して、彼女とハッピーエンド。最後には真珠色に近い、ウエディングドレスと、卑怯にもほどがある。

それを着て、王子が着た際のはにかみは、可愛かった。

「ま、まさか全てを捨てて、成りきるとああも化けるとは……………恐ろしい人です、アスカさん」

「ああ……………」

私はこの後、歌わないといけないのか？

これに勝てるのか？

自信は……………

「ハッ、無くしてどうするッ」

高らかに立ち上がり、向こうが静でのエンターテイメントなら、こっちは動で対抗するしかないではないか!!

「翼」

そして、ウエディング姿のアスカが流れてきた。

「楽屋で聞いているよ翼、楽しみに」

「楽しみにしてくれアスカッ、私は負けないッ」

「……………えっ?」

そして、風鳴翼、いざ飛翔するッ

——龍崎アスカ

「……………」

バックに炎を背負った翼が去っていく。

「なんか、炎背負ってたな」

「……………アスカさん」

静かに肩を掴み、そして、

「アイドルデビューする気は無いですか?」

「なに言ってるんですか?」

「大丈夫、始めから男性だと公表すればいいだけです」

「なんの話!!?」

なんか知らないけど、もの凄く断った。つてか、翼の歌聞き終えたら着替えるんだよ。こんななんいつまでも着てられるか。

その時、大人のスタッフが駆け込んできた。

「た、大変です緒川さんっ」

「どうしましたか!?!」

なんでも翼のスタッフ側のミスで、もう一つの会場の方に、もう一曲の衣装などの道具を運んでいる。それに緒川は驚き、まずいと頭を悩ます。

「学園側には二曲で話を通して、時間も組んでます。学園祭とは言え、我々の都合で変える訳にはいきません」

「ですけど、どうしますか? 歌はともかく、衣装はいまのしか無いですよ」

「……………一つ、手があります。学園の責任者の方に交渉を」

「……………」

なんだろう、もの凄く嫌な予感しかしない。

——ファンクラブ会長

「……………」

私はいま、ドリーイイムを見ている。

風鳴翼と、我らがアイドル、龍崎アスカの夢のコラボ。

お互いがお互い、その場あわせだが衣装を作り合わせたデュエット。

もう私は……………

「満足だ……………」

「会長ッ、まだ終わるのは早いですっ」

「まだやることは山盛りですよッ」

あっ、ちなみに私がこの学園の会長です。

——風鳴翼

歌唱力、演技力、そして素材。

防人としても歌い手としても、私は彼には一歩及ばないと思う。
だがそれで諦める風鳴翼ではない。

「いずれ、この屈辱を晴らすぞ、アスカっ」

「……………ごめん、その話は無しにして……………黒歴史だから」

そして緒川さんや学園に、アスカアイドルデビューの話がたびたび来るらしい。無論、男性でもいいからと。

アスカの目から光が無くなった気がするが、私はいずれアスカに勝つ。

競い合う仲間と言う者もいいものだ。そう思い日であった。

21話・異聞の始まり

龍崎アスカ、現在司令室にて、自分に関する状況と、状態などの話し合い。話し合いにいるのは奏さんすら外した、二課のメンバーである。

いるのは二人の特殊な存在。

反英霊、ジャック・ザ・リツパーと言う正体が分からないまま傳承され、生まれる前に死んだ、子供達の怨霊の少女。いまはお菓子を幸せそうに頬に詰め込んでいる。

一人はアタランテ、逸話から獅子の耳と尻尾を持ち、女神を信仰する狩人の美女。なるべくその耳と尻尾を隠す衣装を着込み、ここに来てもらった。本題は彼女に詳しく聞きたためだ。

「それでは、まず順を追って確認しよう」

龍崎アスカの魂は、異世界では抑止力と言う役割を担う者である。

様々な出来事に、加害者、被害者、当事者、傍観者、それとも最も関係ない存在。

そう言った役割を演じて、出来事、物語を完結させるのが役割と解釈される。

そしてそれ以外で生まれ変わった場合、短命である。龍崎アスカの場合、前世は事故で死んでしまう。これも抑止力が早めにそうさせたらしい。

「だけど、偶然が重なった」

その学生は、空想物として、とある物語を知っていて、死の間際それに願った。

その結果、アストルフォオと言う英霊が応え、たまたま次の転生先が、アストルフォオの子孫であると言う偶然もあり、前世の記憶持ちで今に至る。

「こうすると、かなり無理がある気がしますが………何に願ったんですか？」

藤堯さんの言葉に、少し言いにくそうに、

「助けた子が泣きそうだったから、たまたま視界に入った携帯。つま

り例の情報に詰まったものが頭をよぎって、強く思ったんだ。泣かせずに、落ち着かせたいって。まさかその物語に関わる物が異世界で実在して、しかも深く関わってるなんて思ってもいなかったよ」

「それもそうだと全員が思う。ゲームの中で語られる物語、それに関わりあるなんて誰も思わないだろう。」

「だがそれに強く願う、結果的にこのような事態を引き起こしたらいい。」

「そして、この世界では、」

「数ある聖遺物全てと適合率があり、融合型と言う聖遺物で使用。確かに研究機関からすれば、君の身体事態、研究材料だろう」

「それには頭を痛める中、緒川さんが前に出る。」

「情報部のおかげで、アスカさんは女性ですね。ですけど」

「油断できないな、まあそれこそ俺達の仕事だ」

「……………できればもう女装したくないです」

「そろそろまた女性服、夏物を着ないといけない。肌を出すのは怖いと言うより、恥ずかしい。」

「だけど慣れてきた自分が、もの凄く怖い。」

「それには全員、視線を逸らした。」

「わざとらしく咳をして、弦十郎はすぐに目の前、女神の加護を持つ彼女に話しかける。彼女は耳と尻尾を司令室では見せながら、静かに向き合う。」

「まず我々が聞きたいのは、この説明は合っているかです。アタランテ殿」

「気を楽しんでくれ、いまの自分はサーヴァントで客人のようなものだ。まずマスターに関する認識は、吾々が聞かされたものと合っている」

「マーリンが言うには、そんな存在。だが、確実にまだなにかある。なぜならば、」

「英雄王ギルガメッシュ、彼の王もまた、それに詳しく知っている」

「!? 神世の英雄じゃねえかよっ!!」

「そしてそのような説明後、自分達のパス、契約が一時的に乱れ、」

ジャック……………この子の契約がおかしいことに気づき、他の者に伝える前に動いてここにいる。それ以上は。すまない」

「いや、だが……………」

司令、司令室は重々しい雰囲気に含まれる。

龍崎アスカのこと、魂と言うものがどんな役割か知ろうとすればするほど、暗闇か何かにはまっっていく。

それを知り、アタランテは助言する。

「もしかすれば彼は詳しく調べない方がいいのではないのかと、自分は思う……………契約のパスや、此度のこと、抑止力と言うものは、人どころか、神すらおいそれと近づけない神秘だ。ただ一言、それはそう言うもの。それで説明が終わる事柄」

「それができればな……………」

そう思いながら、オレは考え込む。

「イレギュラーはあまりに重なり起きすぎてるんだ、マーリンも気を付けろって、遠回りに言ってるのかも知れないし」

どうも心配、危険だよ？と軽く言われている感がある。今回の契約誤認とも言うべき、ジャックとの契約も気がかりである。

それにはアタランテも黙るしかなく、司令は、

「ともかくこれ以上の収穫がないのは分かった……………その契約が落ち着くまで、我々が貴方達の身柄の安全を保証します」

「すまない、助かる」

「？ なにか解体するの？」

「しないでねジャック」

大きなお魚か猪でも狩るかと言うと、アタランテは嫌な顔をした。そう言えば猪にはいい思い出はなかった。失態である。

「けど、願ったって、なにに願ったのアスカ？」

未来は首を傾げながら、とある施設で待ち合わせをしている。

詳しい話、難しいことや、他の組織や機関に自分のことは知られるリスクを外して話していたときだった。

「オレはアストルフオ、ゲームの中じゃ、理性が蒸発して、知り合いが

狂乱してるからって女装して落ち着かせるって言う英雄が頭をよぎったから、そのように、子供を落ち着かせるために笑いたいって思ってたんだ。アストルフォはポンコツ英雄って言われるけど、ある意味英雄らしい英雄なんだ。どんなことがあると、笑顔で苦難を乗り越える英雄。それがアストルフォなんだ」

響、クリス、翼、奏さんが未来と同じように聞く中で、へえ〜と言う顔をする。

「確かに、こちらの世界でも彼は理性が蒸発していますからね」

「ナスタージヤ教授っ♪♪」

ナスタージヤ教授を始めとした、牢屋に入っていた人達が一時的釈放の日、残念ながらナスタージヤ教授はこの後すぐに、日本政府の機関と言うか、司令官達の息がかかった施設に閉じこもるそうだ。

「元より、この足と目では、できることは研究程度ですからね」

マリアはしばらく日本政府で手続きしてから、米国で虚像のアイドル、スパイ任務していたと言う話で、戻ることになった。

せっかくちゃんとした衣類、響達を選んだり、用意してオシャレした洋服を着込んでいるが、切歌と調は素直に喜べない。仕方ないとマリアが何度も話し合う。

それでも司令官が目を光らせておくと約束してくれたこともあるので、信じることにしている。

「そう言えば、アスカはここでも女装なのね」

「……………うん、もう装者として活動中これらしいんだ」

「アスカは、その体質もあるからな……………夏服も準備してるから」

さすがに奏さんも言いにくそうに言うが、いまは女装するしかないのだ。

ともかく、しばらく雑談できるので、ナスタージヤ教授はこれを機に、こちらの話を聞くことにしていた。

「そう言えば、そのゲームは、どのような内容なんですか？」

「聖杯を巡るがテーマで、運命や定め、宿命が軸の Fate / シリーズですね。年齢制限もあるゲームですので、オレはそこそこしか知りません」

「そうなんだ」

「スピンオフ系も大量に出てるっていうか、全貌知るほどはまっつてなかったから……」

アンソロジーとか色々、剣道部で、後輩指導役。じっちゃんは老人ホームで一人暮らしなので、家事を勉強と同時進行でやらないといけない。

お金はじっちゃんが管理していたからいいが、それでもやれることは限られていた。

「どんな世界なんだ？」

「人の命が紙よりも軽く消し飛ぶ世界で、倫理観考える者が主人公でない限り真っ先に死ぬ世界」

間違つてないよな？ 魔術師の考えってそんなだもん。

「そんなゲームって……」

「けど、ゲームと言う概念だったらまあまああるだろ？ ゾンビ倒すゲームとかだつてあるぞこの世界でも」

それにまあねと思いつながら、

「実際、この世界の現実でも似たようなものでしょうね。ノイズもそうですし」

ナスタージヤ教授の言葉に、この世界も見方によればアニメやゲームかと納得する一行。しばらく雑談する。

「そう言えば、貴方は融合型ですね。竜殺しのバルムンクなど、多くの英雄の聖遺物が関わってますね。それも関係あるのでしょうか？」

「そう言えば……」

そう思い、霊体かして大人しくしている二人に心の中で話しかける。

（二人とも、カメラがあるからまだ会話できないけど、その辺り分かる？）

（申し訳ない、吾々はそれには関与してないはずです）

（分からない）

そう言われ、ごめんねと付け加え、二人のことも紹介したいが、ここでは無理なので、ジャックには後でアイスを食べさせないといけな

い。

「聖遺物って言えば、いま手元がないんですよね」

「そうなんデスか？」

驚く切歌に、ああと翼が答えつつ、説明する。

「一応ここは、様々な国が関わる施設だからな。緊急時以外没収されてしまったんだよ。緒川さんがそばで待機している、問題はないよ」
「それに、旦那がなんかあったようにアラーム鳴れば、あたしらの元に持ってくることも許可されてるからな。イガリマとシウルシャガマ、アガートラームも一緒だ」

「そうデスカ、ならあんし」

その時、響き渡る警報に、全員があっけにとられる。

「デス？」

全員がまず急いで緒川さんののもとに駆け出す中、さすが緒川さん、聖遺物が入った箱を持って、ここまで駆けつけた。

「みなさん無事ですか!？」

「緒川さん、状況は」

それについてインカムもみんな、ナスタージャ教授達にも付けてもらう中で、司令官と藤堯さん、友里さんの声が響く

『現在謎の高エネルギーを感知、付近地域に避難警告発令』

『並び、装者達と我々の活動許可、下りましたっ。現状は施設の間合む、地域住民の安否確保です』

『というわけだ、ナスタージャ教授達並び、現地人のあんぜ……』

とその時、インカムからノイズが入り、雑音の中、緒川さんが箱を開く瞬間、

「!？」

身体は浮遊感に襲われた。

「ぐふっ」

切歌、調がオレを下にして落ちてきた上、その前にオレが地面に落ちた。

緒川さんを見ると、ナスタージヤ教授を抱えて、特殊な車椅子も確保している。マリアは普通にその場に着地していた。

「?!?!? 響?!? クリス!!? 未来ッ!!?」

「翼さん!!? 奏さん!!?」

周りを急いで見渡すと、草原だった。

「はい!?!」

草原の中、緒川さんと共に来た警護の人などもない。響、クリス、翼、未来もまたいない中で、全員が混乱しかけたが、すぐに冷静に状況確認。

「聖遺物、シンフォギアは?」

「箱を開ける前なので………:ガングニールを始め、アガートラム、全聖遺物あります。アスカさん、アストルフオです」

「はい」

受け取ると共に、虚空を見ると、すぐに二人は私服では無く、礼装、英霊としての姿で顕現し、現れた。

「アサシンさんじょ」

「アーチャーです、しばし真名は伏せさせてもらう」

それに驚くが、切歌達は別のことに気がかりであった。

「私達の」

「シンフォギアを」

「ダメよ切歌、調。リンカーの無い私達では足手まといよ」

マリアがそう言い、それもナスタージヤ教授も頷く。

「現状使えたとしても使わせるわけにはいきません、あれは使った後の処置も必要ですから、いまの状況ではアスカさんが頼りです。緒川、さんでしたね。現状、シンフォギア以外の武器などは?」

「すいません、護身銃が一つ、弾もありますが、このような事態では意味があるかどうか」

「いえ、私の方はこの車椅子で、いざとなれば電気機器を使用して一人で活用しますが、マリア、申し訳ないですがそれまでは私をお願いします」

それに頷きながら、周りを警戒するため、銃を取り出す緒川さん。

切歌と調は緒川さんが持つイガリマなどを見ているが、ナスター
ジャ教授が一声かけてから、黙らした。

「ともかく、ここ」「わああああああああ」はど………!!?」

誰かの悲鳴、この状況で誰かいると知るが、知らない者の声だ。

………聞き覚えある気がするが………

「だけど、無視できない」

「ええ」

急いで駆けだして、その元に出向くと、少しずつそれが見えてくる。

「……………デス?」

「あれって」

「ドラゴン!?!」

それは小型のドラゴンで、火を噴いて、誰かを追いつめている。

その誰かを見て驚いた。

「デスウ!?!」

「アスカ!?!」

切歌と調はすぐに振り返る。目の前の飛竜に襲われているのは、見た目アスカとうり二つの少女……………

「じゃねえ男性だつ、くそつ。なんでいるんだアストルフオつ」

そう叫び、急いでアストルフオの聖詠を歌うが、

「……………?」

「えっ」

「!!?」

何も起きない、何度も口をするが、何も起きない。

「こんなときになんでき!?!」

「アスカ!?!」

ドラゴンと言うより、ワイバーン達が、アストルフオを囲み、火を噴き出そうとする。

それを見たとき、ナスタージャ教授は、

「仕方ありません、緒川さん、箱を」

「は、はい」

そしてナスタージヤ教授は、イガリマを取り出した。

——アストルフオ

「うわっ、まずいつ」

ワイバーンが一斉に火吐く気。このままじゃさすがに燃えちやう。

「くっ……………」

目を瞑ったとき、その瞬間だった。碧の刃がワイバーンをなぎ払った。

「えっ……………」

「ったく、大丈夫？ アストルフオ」

「あ、アスカ?!?!」

その時現れたアスカは、彼が着る蒼銀色のシンフォギアではなく、

「私のイガリマが——っ」

「緊急事態ですよ切歌」

そう、アスカが着ているシンフォギアは、イガリマと言うシンフォギアの姿だった。

「話は後だ、いまは回復しろっ」

そう言っつて、向かってくるワイバーンを鎌で真つ二つにする。

「~~~~♪」

イガリマの、切歌って子の曲と共に、ワイバーンを切り裂くアスカ。

「アスカ……………よし、ボクも頑張るよっ」

「契約していないのですから、いまはここにいてください、黒のライダー」

「あっ、それは……………」

「いいですね」

ここは仕方なく、大人しくする。せっかくのアスカとの共同作業なのに……………」

——龍崎アスカ

まさか他の装者のギアを纏う日が来るなんて……………」

だがそう言っていられない。

「来たか」

酸の霧が辺りを包み、一匹が断末魔の声を上げて、解体された。返り血すら浴びず、静かにナイフとメスを持つジャックは得意げであり、霧から飛び出たものは、一閃の矢で貫かれる。

前に出るのは、碧の鎌が刈り取った。

「この調子でかたづけろぞ、アサシン、アーチャーっ」

そして異物の物語が、幕を上げた……………

22話・舞台、固有結界

全てのワイバーンを倒し終え、イガリマを纏った自分を見る切歌が視界に入る。

「全部私のデス……………」

「仕方ない事態です、しかし、やはり適正があつたようですね」

「はい……………けど、何故切歌と全く同じなの」

唯一の救いは胸だろうか、切歌はあるが、こちらは無い。再現されていたら死を選ぶ。とか考えながら、

「アスカ♪」

そう言つて、笑顔で抱きつこうとするアストルフオを捕まえて、大人しくさせている。

「アスカが二人いる……………」

「けど向こうは三つ編みがあるデスよっ」

「女の子のアスカ？」

「ボクも男だよ？」

全員が驚く中で、そう言いながらへろへろとその場に座り込む。

「ううっ、魔力切れ……………マスターがいらないから……………」

「……………アストルフオなんだよな？」

それに静かに頷く。ナスタージャ教授が、アストルフオのことを話す。

「シャルルマーニュ十二勇士が一人、パラディンであり、王子でしたね」

「うん、ローランとの話だね。んで、ボクはアスカに呼ばれて、力を貸してる英霊」

それに全員が驚く中、アストルフオは静かに、

「ごめん、アスカ。ボクとマスター契約するか、魔力補給して」

「マスター契約はどうやるんだ!!？」

一つしかないので即座に動くと、少し名残惜しそうに、手を出してと契約する。

「別にアスカなら魔力補給でいいのにっ」

「絶対やだ野郎だろうが女子でもやだアーチャー生前に言え生前にツ
!!!!」

「そんな様子に、魔力補給の何が嫌なのか聞かれた。オレとアタラン
テは赤面するが、気にせずアストルフオが答えた……………」

「しばらくお待ちください。」

そして落ち着いた後、ライダーであるアストルフオで、オレに力を
貸している英霊。

「そう言えば、前にマーリンの所為でできた黒歴史の際には聞いてな
かったことがたくさんある。それを聞くことにしよう。」

「聞きたいが、オレと契約しているアストルフオでいいんだよな？
なんでできたんだオレ？」

「簡単に言えば、あの時、触媒は君の魂と携帯だね。それで聖杯にアク
セスできたんだ君は」

「聖杯とは、まさかあの？」

「アーサー王伝説などで語られる、願望を叶える聖杯です。彼らの世
界じゃ、主に重要なキーワードになります」

「本来彼らのゲーム内容、物語は、七騎、七人のマスターによる殺し
合いと言う儀式にて、六騎のサーヴァントを生け贄に、聖杯で願いを
叶える儀式だ。」

「聖杯の力で確か、世界の外の理、英霊の座に登録された英霊を、使
い魔として契約するシステムだったか？」と聞く。

「だいたいね、それでいいよ。詳しくは違うし、合ってると言えばそう
だし。月の聖杯戦争や、聖杯大戦とかもあるもん。それも少しずつ
違ったりする世界だってあるから、どれもハズレでアタリなんだ」

「確かにな、私も赤のアーチャーとして記憶を所持しているが」

「あー」

「黒のアサシンであったはずのジャックは首を傾げている。やはり
夢うつつのようなであり、個人差がある。唯一違いそうなのは、無銘と
英雄王など、特殊な者達だろう。」

「つまり、ゲームや本の話が、だいたい合っていたり、違っていたりす

るとも言える。ややこしい。

「仕方ないよ、君はそもそも、無限の可能性の中、最大の厄災を抑える運命操作の基盤なんだよ？ 全部説明できるほど、ボクの頭も賢く無いしね」

「それを言うか……」

それで話は戻るが、

「君が抑止力で、前世の死が訪れる本当の間際、まさに聖杯が君の魂に干渉したときのベストタイミングで、ボクを始めとした、聖杯、英霊の座にアクセスできたんだ。それが前世持ちの要因の一つ。それで呼ばれたのは、最も縁が合う、白銀の騎士の異名になった、叛逆の騎士さんと、ボクのことを考えていたことと、次の転生先が、ボクどもの凄く縁深い条件で、ボクを呼んだ。しかもボクの力を取り込むほどにね」

「インストール夢幻召喚」

英霊の力を自分の身体を触媒にして、喚んで使用する方法。それに近いのかなと首を傾げる。元々説明役や進行役ではないので仕方ない。

「まあ、だからボクは君の魂の隅っこと言うより、輪廻の輪辺りで、聖杯と君を繋げる役目してるんだ。ゆうごうかた、だっけ？ あれは聖杯の力でできてる偉業だよ」

それに少しだけ解釈して、口にする。

「つまりいまオレが聖遺物アストルフオが使えないのは」

「ボクがここに居るからだよ」

そう言えばあまりに違和感が無かったから気にしてなかったが、アストルフオウくんの時、マーリンが調整した偽りの身体だからであつた。シンフォギアとして『力』は行使は関係なかった。

「そういうことだよ、あれはアストルフオウくんだから近い力を使えてて」

「いまは龍崎アスカだから、使えないと……」

色々分らないことがあるが、やはりそういうものと理解して動いた方がよさそうだ。

「その辺りはマーリンに聞かないと分からないよ？　ボクもよく分からない」

今度会ったらつるし上げなきやいけないことを知りながら、情報交換をする。

他の人にも夢幻召喚インストールと言う、英霊の力を自分の肉体を触媒に使用する術のことを説明しながら、次にと、ナスタージャ教授が聞く。

「それで、アストルフオさん？」

「はいはい？」

「ここはどこか分かりますか？」

「ん〜固有結界の中だと思うけど、どうしてボクや君達に取り込まれたかは分からないよ」

「こゆうけっかい？」

切歌達に、固有結界。世界に自分の心象世界を、染みのように世界を塗りつぶすことで生み出す魔術。ついでに魔法と区別ありも説明しながら、話しておく。

いずれ消えると思われるが、それも確証じゃない以上、

「奏さん、翼さん、響さん、雪音さん、未来さん、私と共にいた人。もしかすれば他にもいる可能性もありますから、彼らを探さなければいけませんね」

緒川さんの言葉に全員頷き。

「はい、けど戦えるのが、マスターがいるサーヴァントと、オレ自身か」
「それもかなり特殊ですよマスター」

深刻にアタランテが進言する。曰く、本来の魔術師は一人が限界。だが抑止であるから命なりに問題は起きていないが、同時宝具使用なんてことはしない方が賢明らしい。当たり前か。

それと共に、考え込むこともあるなど、サーヴァント二人と難しい顔をする。

「どうしたんデス？」

「この世界にサーヴァントがいらないと言う保証が無いんだよ」

それに前の事件を思い返し、あーと何も言えなくなる。そう、それがある。

「英霊の座にいるの、反英雄って言う、悪名の人もいますからね」

「なにより、クラス名がある以上……………」

「バーサーカーだよね」

聖杯を巡る儀式で、七騎の英霊は、七つの位、クラスに当てはめられる。

その中に、理性を無くした者、バーサーカーと言うクラスがある。これが一癖も二癖もある。何よりアサシンもだ。

「山の翁は、確かな者ならちゃんと話せるけど、本当に殺すと決めた敵や、愚か者は、もう、殺したこと自体気づかれずに殺せる技量の持ち主だ。話しやすいのは」

「セイバーとランサー……………あとはボクと同じライダーと、キャスターは」

「キャスターこそやべえだろツ!? 青髭の旦那なんて出会った日には即座に殺すぞツ」

「あゝボクも、シエイクスピアには会いたくないな」

「それトラウマ引きずり出して敵を倒す作家の英霊だツ、誰も会いたくない!!」

後はアーチャーだが、それも人による。英雄王なんてやだぞ。

「ともかく、魔境に来たことは確かだ。急いで全員探さないと」

「分かりました、私は機器をいじり、連絡できるか賭けてみます。アスカさん、切歌と調、他の装者のギアを。いざとなればこれらを使ってください」

まさか、他のギアを纏う日が来るとは、もの凄く遠い目になる。

響のがまだマシか? 翼のは剣だけど、どうだろう。あまりジロジロ見てないので、どんな衣装か分からない。

ともかく話ながら、歩いていく。

死んだ。

「おかあさんっ、しっかりして!!」

「なにこれ……………」

誰かが呟く。素人から見ても分かる、罨と言わんばかりの宮殿があ

る。

そして魂が言うんだ。関わるな、関わるなと……………

「すいません、腹痛いんでここスルーしたい」

「マスター頑張つてよっ、そりゃ、ボクですら罨だつて分かるもん」

草原にぽつんと言えばいいのか、ドッカーーンと言うべきか、そんな感じで巨大な宮殿があるんだから、もう胃が痛い。罨過ぎる。

「ここまで罨らしいと、いつそ清々しいわね……………」

「アスカ、なにかこういうことする人に心当たりある？」

見た限り、ナスタージャ教授はローマ関係の装飾されているのとこのだ。

ローマ……………

「……………赤セイバーか!!?」

扉が開いた。それと共に音楽が流れる。

「……………誘われてるわね」

「誘われてるデス」

「赤セイバーか……………話が通じる相手に」

「赤セイバーって誰なの？」

「ローマ皇帝ネロ」

そう言いながら、入り口で彼女のことを説明。赤セイバーと言う名称で喚ばれるセイバー枠で、男女関係なく、自分の后にする女性。マスターを奏者と呼び、何故かアーサー王とうり二つという謎の事態であり、見た目女性度が完全に分かるのに、男装と言い張ると言うことなど、

「正直ローマ編でさんざん調べたから、いい人だけ……………美がつけば誰でも問題ないらしい……………」

周りを見ると、美少女と美少年と、彼女の好みにつっかかりそうだ。

「あのくそれなら、もし翼さん達が捕らわれていたら」

「……………行くしかないか、話が通じない人じゃないし」

そう言いながら、静かに中に入る。

豪華絢爛の中、黄金のオペラ会場。薔薇のにおいが満ちる気配、赤

い絨毯と、唯我独尊を顕現した世界。

そしてスポットライトが輝く、

「よく来たぞ、我が奏者よっ♪♪」

そこにいたのは、

「余は見た、余は来た、余はここに現れたっ♪♪ よく来たぞ、我が奏者っ」

そこにいた金髪の女性に、装者達は驚く。

「あれが、オレが知ってる世界のネロ皇帝だ」

「彼女が皇帝ですか……………」

そう言つて、周りを見てから誰もいないと確認して、

「じゃ、帰」

扉がばたんとしまり、壁となる。壁!?

「ふっふっふ、逃がしはしないぞ奏者よっ。ここは我が固有結界、黄金の劇場なり♪♪」

「固有結界デス!？」

「切歌、固有結界と言つても、彼女特有の別の物だ。この世界そのものの主じゃなく、この黄金劇場が彼女の固有結界だ」

「その通りだっ、さすが我が奏者だっ」

「!？」

「違ふよっ、アスカはボクのマスターだよっ」

「……………解体するよ？」

不機嫌な子達。その時ステンドグラスが割れた。

「!？」

「ミツコオオオオオオンっど参ッ上っ!!!」

「つて、ええええええええええええええええ!!?」

その時、和風の着物のような、ケモ耳の巫女が現れた。

「ご用とあら即参上っ♪ 貴方の愛するケモミミヒロイン♪♪ 貴方の愛するサーヴァントっ、キャス弧登場ですよ、マスター♪♪」

「な、なんでこの二人が組んで出てくる……………」

それに驚きながら、こちらを見たキャス弧。その時、耳と尻尾がぴんと立つ。

「マスター♪ コーンなところにいたんですね♪」

「待て待て、キヤス弧までなんでオレのことマスターって、言っちゃ悪いがFGOですらレギュラーとして扱ってないぞっ!!」

「そーんなことはささいなことです、なにより、分からないんですか?」

「え、な「はああああああああ」につてなに!?!」

またステンドグラスを破壊して、今度は静かに二人現れる。

褐色の肌、破壊の剣を持つアルテラ。そしてキヤスターの あれはハロウィン使用のエリザベートが現れた。ああ、エリザは使ってた使ってた。

「なによその反応は子ジカ!?!? あんた私をレギュラー枠だったでしょ!!?」

「いや、そのまあ……………」

まあ使ったよ、けどエース違うぞ。うちのエースは誰がなんと言おうと食費すら削って手に入れたジャックだ。ああ、その時ばかりロリコンだのシスコンだの言われても受け入れてやった。

「……………私にはいることすらなかった……………」

星5なんて無理です、他のセイバーさんが多かったし、知らないし、キヤラ的にはモードレッドが好きなんだ。しかも関わり深いなんて思わなかったけど……………」

「つてか、英霊達がオレのゲーム活動知ってるんだけどアストルフオ」
「元々、それを触媒に、繋がっている聖杯に横やり入れたんだよマスターは。そりゃ、中身と編成とか、分かるよ」

「お、オレの前世プライバシーが……………ジャック手に入れるのに食費を削り、じっちゃんに怒られたことや、リリイ系と縁が深く、ロリコン野郎と囁かれたことが」

「あつ、それ知らない知らない」

「マスター……………」

アタランテが呆れている。何名かも。ジャックは嬉しそうにして、腕に張り付いている。ははっ、これは開き直ろう。

「マスターひどいつ、ボクと言うサーヴァントがいながらっ」

「ウチのエースはこの子だ」

「ゲームと現実を間違えるでないぞ奏者っ、そして私との絆クエはM AXではないか!!」

「ミツコーンっ、早速間違えてる人がいるじゃないですか!! それなら私と旦那様で素敵なイベしましよっ」

「……………私は敵だったから、いまのうちに」

「待ちなさいっ、子ジカはわ・た・し・の、マネージャーよっ!!」

エース子を抱きしめながら、そんな混沌とした中、と静かにしていると、

「おーい」

「私達、いつになったら吊された状態で出てくるんですか」

「おおすすめまんすまん」

「奏さん!?! 響っ」

「男子上見るなっ」

そう一言掛けてから、ネロは指を鳴らすと、天井から、バラのツル棘無しに捕まる二人が吊されていた。律儀にスカートの中が見えないようにしたり、頭に血が行かないようにもしてた。

「ちなみに、入り口付近ですつとこの状態だったんだからなアスカ」

「早く入るなら入って欲しかったよ」

「こんななんと分かってて入れるか……………」

二人の文句を聞きながら、胸を張るネロは、まあまあ落ち着けて言うが、原因あんただよ。

「奏者よ、せつかく悠久の果てにまた出会えたのだぞ♪ また月の時のような過ごそうぞ♪」

「待ってくださいいなっ、それなら我々も含まれますよっ」

「あんた達は黙ってなさいよっ、今度は私も含まれるんだからねっ」

「……………月の時? オレの過去は月の聖杯戦争にもかよ。けど内容は知らんが」

悪いがあるのは知っているが内容知らないぞ、なにより、

「いまのオレは龍崎アスカだ、岸波白野?か、男性か女性かすら知らない。魂は同じかも知れないが違う、別人だ」

会話からして主人公だろうが、なにが、どうなのか全く分からない。
そんな風に聞くと、全員、

『……………』

それに、全員が一斉に黙り込む。そして一斉にオレを見る。なんか怖い。

「旦那様、貴方は少し、勘違いしておいでです」

「……………勘違い？ オレが主人公だから月の勝者と決めつけてるところか？」

それに、キャスタータマモから、狂気に近い何かを感じる。アストルフオ達にみんなの警護を頼み、ギアを握る。

「いいや、月の聖杯戦争での結末は奏者の考え通りだ。奏者は月の大戦の勝者、そして無限の可能性の中でそなたは、間違いなく、絶対に、月の聖杯戦争の勝者なのだ」

「つまり、裏を返せば、無限とも言うべき可能性と言う平行次元の中、けして間違えない当本人でございます」

「あんたは子ジカよ、けして、けしてそうじゃないわけじゃない」

その言葉を聞きながら、なるほどとナスタージャ教授は言う。

「無限と言う可能性の中、貴方達はその外にいる……………そしてまた同じ人物、いえ、魂に会うことなんて」

「不可能だ、完全に、それこそ聖杯に頼まなければいけないほど、けして届かぬ願いだろうな」

だが、

「いま目の前にいる」

「いま旦那様は我々の目の前にいるのです」

「悪いけど、また私のマネージャーにする」

「私も……………諦められません……………」

けして間違えない、唯一愛した魂が、目の前にいる。器など関係ない。

彼女達はそう言いたいらしい。

「……………本気か？」

正直そう言う狂気じみた考え方をするサーヴァントではないのは

知っているため、どうしても聞いた。そしたら案の定、全員が顔を背けた。

「……………これは、向き合わなきゃいけないんだろうな」

そう言っつて、聖遺物を纏う隙を与えているサーヴァント達を見る。

「分かっていますよ旦那様は旦那様でないことは、ですが」

「そうと分かっているても、私達はそなたを、そなたの魂を欲してしまう……………せめて、膝を折らせるほどの拒絶を示してくれ、奏者よ」

「……………ごめんなさい、私は悪い文明ですネ」

「……………」

そう言いながら、キャスター二人、セイバー二人。少し悲しいなとも思う。

それにはアタランテも顔を背ける。女性全員が、少しばかり共感する。

「好きな人の生まれ変わり……………」

「悲しいデス、もしもそうなら……………」

「……………そうね」

龍崎アスカと言う人物を否定してでも、前の人物である彼を求めてしまうと言うことに気づきながら、彼女らは武器を構える。

全員が事態をおおむね理解し、ネロは叫ぶ。

「我らが勝てば、そなたは我らの奏者として、月の時に出来なかったことを毎夜毎夜しようではないか!!!」

急に空気が壊れた。

「はいですよッ、一人子供三人ですネッセイバーさんッ!!!」

「……………」

頬を染めるアルテラ。なんにも言わないエリザさん。

「……………へい?」

「しかもッ、器は美少年と来たッ。分かっているなお前達ッ」

「ええ、ええッ、分かっています分かってますよッ」

その時、魂の奥から、すまない、そして少し泣いて良いかな?と言う感情が出てきた気がした。

気のせいにして、身の危険を感じて聖遺物を纏って戦う。

23話・暴走する愛

赤い剣を握り、黄金の劇場の主と、破壊の根元とも言うべき、剣を振るう化身が向かってくる中、後ろのキャスター達はサポートに徹する。

バカなあり得ない。キャス弧もハロエリも、スポットライト当たるための人なのに、捨てきるなんてあり得ない。

「結婚」

うんごめんなさい、怖いです。キャス弧マジです。あの人達、この一度に全魂込めすぎてないですか？ どこに分かっている、自分は彼ではないと分かっている要素があるのだろうか？

「援護は任せなさい……………」

「ああ、信じるぞ……………行くぞアルテラ」

「はい……………」

軍神の剣は三色の光を纏い振るわれる中、選んだ聖遺物は、響のガングニールを纏う。これは彼女達の想いを受け止める意味を込めたが、やべつ、重すぎるんだけど。

全員キャラと言うか性格とか遺恨とか全て消して、オレを手に入れるために向かってきた。

「ま、マスター!?!」

アタランテは叫ぶが、少し葛藤するが首を振る。ここは仕方ないが、自分でやらないといけないんだ。

それに獰猛な笑みを浮かべるネロとキャス弧。ごめん、いま揺らいだ。

——マリア・カデンツァヴナ・イヴ

ガングニールの拳の中で、彼は戦う。剣の刀身を叩き、なるべく彼女達を傷付けないように戦っているが、

「強化します」

「防護、次、そこっ」

ハロエリ?と彼が言う子が的確に彼の死角から攻撃し、キャス弧と言われた人が、剣を持つ二人を黙々と強化している。

二人もお互いがお互いの持ち味を殺すと、すでに分かっている様子で、交代交代で斬りかかる戦法だ。しかも始めは彼の体力削りで、確実に仕留めるように動く。

「な、なんデスカあの人達!? マジデスっ、愛した人じゃないから強く拒絶して欲しいとか言う割にマジデスよ!!?」

「酷い……………」

私はすぐに、アストルフオの方を見る。参戦できるかは無理だろう。だが、

「あの四人が何者か教えて、赤い剣士がネロ皇帝なのは分かっているけど、あとののは」

「えっ? そう言われてもな……………さすがのボクも知らないよ」

だがその中で、アタランテは弓と矢を持ちながら、その戦いを見ている。

「セイバーネロと、セイバーアルテラ。後は反英霊故、真名はおいそれと知られたくない者故に、いまは」

「アルテラ? もしや軍神アレスマたは、マルス由来の?」

それに頷く。それを目を見開くママに、尋ねてみた。

「ま、ママ!? それって」

「少なくとも、私達の世界で彼女は、五世紀の英雄にして、西ローマ帝国の滅亡を招いたとも言われる逸話です」

「一番気を付けなければいけないのは、その逸話だ」

「ああ、後は宝具だね」

アストルフオの言葉に、切歌は首を傾げた。

「ほうぐ?」

「必殺技みたいなものだよ、ボクならヒポグリフを呼び出して、空間を飛びながら、槍で刺すんだよっ」

「そう言えば、固有結界つてものは、ネロ皇帝が」

「彼女の逸話、黄金劇場に人を閉じこめた逸話から生まれた宝具だ。このように逸話、または伝承などから、我々は特殊な力や武器、能力を持つ」

「技なら使えば疲れるんじゃないの？」

「ああだが……」

そのネロ皇帝は控えるたびに、キヤス弧とハロエリに集中回復させている。もの凄い気迫を感じ、本気を感じる。

「あの二人、得にキヤス弧は術士としては格上、いや呼ばれる英雄の中で破格の一人だ。もう一人も長くマスターと共にいて、基盤は強い」
「長くなって……」

「ああ、もしかして、カルデアマスター？」

「もしかしなくても、彼女らはカルデアマスター関係での知り合いだ」
大型の施設により、一人英霊一人が限界だが、それを補助をして、限界を突破しているのがカルデアのマスターだ。

それで多くの英雄、神霊が集まり、多くの交流がある。

彼女達はそれで知り合い、その契約の繋がりがある自分達は、はつきり言えば顔見知りらしく、能力などお互い分かっている。

「英霊は、一度座に還れば、うたかたの夢のように、戦いを忘れたりするのがほとんどだが、今回はまだ一人の契約者と契約している故、自分分は彼女達を知っている。向こうもだろうが……」

「そう言えばそうだよ。アタランテ達は、契約が少しおかしくなつて、アスカに繋がってるから……あれ？ そいやなんでボク、カルデアの記憶あるんだ？ ボクの場合忘れてそうなのに」

「そこはしっかりとってくれアストルフォ……」

そんなやりとりの中、拳が空間を振るわす。ジャックが静かにナイフとメスを持っているが、

「むく術返ししてる……」

「汝の呪い対策か」

「呪いですか？ 彼女も」

「わたしたちなら、あれを解体できる。けど、キツネの所為で、反射される」

物騒なことを言う中で、キャス弧はにやりと笑う。

「おあいにく様です♪♪ 呪殺を始めとしたものは、こちらら専門ですのぞ」

そう言いながら、ハロエリは焦る。

「けど条件はまるつきり入ってるからね、気を付けなさい」

そう言いながら戦う中だが、正直、アタランテはどうするか考えている。

「マスターはこの戦いは、自分が背負う…………そのつもりです」

「…………確かに、横やりを入れるべきでしょうか？ 彼女達は、その…………」

緒川さんも、勢いとはいえ、これははじめのような戦いだ。彼女達からすれば、絶対にもう会えないはずのひと、偶然再会できたのだ。

もう二度と、それは、

「無いと思うよ。あつたとしても、それこそ本当に分からないほどに分からない」

「そうなの？」

「うん、アスカの場合は、本当なら引き出す必要もない、過去の情報を引き出した。聖杯からボクや、もう一人の自分の情報を無意識に、それは他の情報も。いまのアスカは、過去に歩んだりした人物の気配を僅かに出してるんだ。だけど」

「もう一度同じ流れに戻れば、もう分からなくなる」

「うん…………けどそれが本当の流れなんだ」

それなら、もしかすればこの必死さはやはり、

「…………手を出せないデス、生まれ変わって、知らない別人でも」

「好きな人なら」

「…………」

アタランテという英霊もその所為で、援護できない。

確かに、分からなくはない。そう思い、顔を上げた。

「子供は一人三人…………子供は一人、ぐへへへへ」

「待っておれよ奏者…………ウエディングは…………ぐふふふ」

「子ジカと毎日コンサート…………毎日…………」

現在、剣を振るう人以外、なにかがやはり違う気がする。

「ぼ、ボクの方が寒気がしたよ………」

愛が重いとはこういうことだろうか？

だからと言って、それでも本当なのだろう。

——アルテラ

私は迷っています。彼はあの『彼』ではない、月を管理する権利は昔に無くしている、すでに彼は違う別人だ。

だけど、いまの彼の魂がそばにいと、思い出す。

彼が頭を撫でてくれた、だっこや抱きしめたくれた記憶。優しい記憶、破壊しか無い、戦士でしか生きられない私に与えてくれた、優しい記憶。

だけど、座に戻れば私は結局戦士、あの記憶はもう一人の私の記憶のような扱い。彼との触れ合いも違う。

分かっている、分かっている。

「アルテラっ」

「!？」

「……………」

その時、彼は静かに、

『迷わなくて良い、全力で来い』

その時、四人のサーヴァントの動きが止まる。自分達も、一瞬ノイズが走ったように、彼が、別の人物に見えた。

女性だった、男性だった、アスカと言う人だった。

分からないが、彼らは確かに、拳に思いを乗せて、想いに応えることとはやめていない。

「……………ごめんささい、みなさん」

その時、三色の光を纏う、軍神の剣が輝く。

「響っ、力を貸してくれ」

その一撃、

「……………キヤス弧、ハロエリ」

のかとも思うが、

「その点はあれよあれ、ご都合な状態なのよ」

「簡単に言えば、それでも消滅した人であったと言うことです。勝利して天寿を全うするなりなんなりで、です」

そう言う可能性軸で、オレは月の聖杯戦争勝利者らしい。元であり、記憶は無いが、記録は引き出したとのこと。アストルフオもそう言いながら、ガングニールを響に渡しながら、立ち上がる。

「ありがと、キヤス弧」

「いえいえ♪ 我が儘にお付き合っていたいただいた身ですので、お気になさらず♪」

そう言われながら、やっと少し落ち着いて、本題に入る。

「それじゃ、ネロ、君達はこのことはなにか分かるか？」

「ん？ ここか？ 正直我々がいる時点で、世界と世界の間と言えるだろう。まあ、余達はあまり気にせず、汝とまた出会えることしか考えていなかったがため、深く考えておらんんだ」

「そう、なのか……」

そんな中で、キヤス弧はいはい♪と元気よく手を挙げて、

「で・す・が♪ この出来る良妻キヤス弧、しっかりこの霊核は把握済み。しっかり貴方様をナビゲートして差し上げますね♪」

そう言つて、オレの腕を掴み、その、胸を押しつけ、ハロエリ達サーヴァント組がばつと立ち上がる。

「おい待てキヤス弧よ……それはいささか反則だぞ？ なにより余達はすでに魔力を消費しておる。このままでは身体は維持できずに、消えるが定めだ。ここは場所を言い終えて」

「あつ、先ほどの治療でマスター契約したので、よろしくお願いします」

「!!?!」

そう言うのと、アストルフオ達もあつと叫び、キヤス弧は真つ赤な顔でデレデレになりながら、

「ああ、またマスターの魔力で顕現するなんて〜これはもう、責任を取つて、輪廻転生、責任を取つていただいてもらわなければいけません」

ん」

「待てッ、オレの許可無くなに」

「そ、そうだつ、いますぐ余とも契約をッ。あつ消える、消えちやう。嫌だッ、ふざけるでないぞキヤス弧ッ」

キヤス弧以外、黄金の粒子になりかけ始めるが、ハロエリは切歌を見た。

「私もっ、この際誰でも良いッ。このまま子ジカとお別れは嫌よッ。うおおおおおおおおおおおおおおおお」

「デッスウウウウウウウウウ」

「切ちゃん!」

黄金の粒子に成りながら、切歌にタツクルを放ち、無理矢理契約し、よしと微笑む。右手の甲に令呪が浮かんでいる。

その間にナスタージャ教授達に、

「あの、申し訳ございませんが契約をお願いしますっ。大丈夫、悪い文
明は全て破壊しますっ!!」

押し倒される切歌を筆頭に、勝手に交渉か契約をし始めるサーヴァ
ント。魔力云々は問題ないのだろうかと思いつながらてんやわんやで、
結局四人のサーヴァントが、奏、切歌、調と契約して、静かに核へと
歩く。

とりあえず、歩きながら色々説明。尚、アスカの扱いに関しては、
絶対契約と言わんばかりに厳しくされている。アストルフオも例外
ではなかった。

「それでは、反英雄と言う方も、サーヴァントとして呼ばれ、聖杯と言
う聖遺物を求め合う儀式。それが貴方の世界ではゲームなどの創造
物として語られていると」

「はい、えっと、キヤス弧とハロエリについては、反英雄ですので、詳
しい。キヤスターと言うことで納得を」

「そうですね、分かりました」

反英雄、悪名で有名になった者達。ハロエリはエリザベートがなん
やかんやでハロフィンの影響を受けた彼女で、玉藻の前であるキヤス弧

も、真名看破は嫌っている。

アルテラはすでに話したようだが、あまり詳しく詮索しないで欲しいと頼んだりする。ともかく、なんで月の聖杯戦争に関わってるんだろうとしか……………

(思うこともないんだよね)

何故かアルテラが関わっているとと言われて、すんなり納得する。やはりアストルフオの言うとおりに、過去の記録を引き出した所為か、幾分かあつさり意味もなく理解する。

確か初期アニメは見て、FGOでゲームは初なのに、なんでその前の作品に関わってることに納得してるんだろう？ よくて聖杯大戦だけだ。その辺りがそうなんだろう。

そう思いながら考え込む、その間と言うと……………

——天羽奏

現相棒は現実逃避している。

「奏者〜♪」

「マスター♪」

両腕に腰を折ってでも抱きつく美女、羨ましいと言う顔で見る褐色の人と、ハロエリ？と呼ばれている人も、色々と話したりしている。

「この奏者は可愛いな……………本当に……………色々したくなる……………ああホント……………このスカートでもいいなら……………」

そうぶつぶつ言いながら、スカートなど触られても無視している。

それはキヤス弧もそうであり、なにされても無視している。目がよんどんでいく。

それには、

「……………」

「デス……………」

「むう……………」

色々言いたいことがある三人もいて、ため息を吐く。

——龍崎アスカ

「洞窟？」

「はいマスター気を付けてください、妙な気配がしつぽにびんびん来てますので」

「……………行きたくない」

そうやってその場に倒れ、アストルフオ達が近づいてくる。

「どうしたのマスター？ なにか」

「な、なんだ……………手の震えが止まらない……………」

ジャックやアタランテも心配するほど、手が無意味に震えている。立ち上がる気力もなく、みんなが心配する。

「ど、どういうことなんでしようか？」

「うむ分らん。だが安心せい奏者よつ、現在こっちはセイバー二人にキヤスター二人、ライダー一人に、アーチャーにアサシン。戦えるシンフォギア装者なる者も一人いるつ。これで負けることはあり得ないぞツ」

「いや、現実ヘラクレスとか、ギルガメッシュとか、無銘さんとか出たら終わるからな。十二の試練の逸話から12回倒さなきゃいけない、化け物殺しの英雄なんか無理だからなつ」

他にも色々だ。英霊って真名や、その逸話からで能力が推測できたり出来るが、真名が分からない、時間が無い、準備できないのなら意味がないんだぞ。

「ともかく……………」

緒川さんが周りを見るが、巨大な岩壁のようなものが広く広がり、洞窟のように一つの入り口しかない。

「迂回するにしても時間がかかります、正直翼さん達もどうなっているか不安です」

「霊核を壊し、この空間を壊せば、大丈夫と思いますよ？ その辺りはお任せを」

キヤス弧の言葉を聞きながら、渋々中に入る。

そうだ、翼達のこともある以上、進むしかない。止まることなんて無い。

そう思っていた時期がありました……………

それは、悪夢だった……………

「!? 立花っ、アスカっ、奏っ」

「お前ら、逃げろっ」

そう言いながら、クリスと翼がいた。彼女達を守るのは、

「貴方は」

「……………いつが」

聖女ジャンヌさんと、こちらを睨む叛逆の騎士モードレッド、彼の騎士もまた、守るように戦っていた。

あの存在達に、

「あらあら」

一人はスタイルが良く、黒い髪であり、雷を操り、ナギナタを持つ、バーサーカーのクラス。こちら……………いえ、オレを見て満面の笑みで頬に手を置く。

「……………」

一人は黒い肌であり、あの仮面を外して、素顔を見せる。こちら、すいませんオレですね。を見てぼっと頬を赤く染める、一人の少女。クラスアサシン。

「シグ、ルド……………」

一人は長い髪、つてかももう全員美人美少女でいい、そして槍を構え、血走った目でこちら、ああそうだよオレだオレに手を伸ばしながら見る。クラスランサーの人。

「あら、あらあらあらっ」

そして、角のようなものを持つ、黒い着物、白い髪の美少女が、嬉しそうに、

「マ

ス

タ

ー

「♪♪」

オレ、たぶん、子ジカのようにがくがく震えている。
「あ、アスカ？ なに!?! 彼女達はそれほど危険なの!?!」
「アスカしつかりしてっ、どうしてももう倒れそうなの!?!」
「あの人達はなんなんデス!?!」
帰りゆ、ボクお家帰りゆっ!!!
「うあああああああああああああ」

——立花響

な、なにか知らないけど、出会い頭でアスカが叫び声を上げ、奏さんに腰にしがみつく。アスカの戦意がもの凄い速さで消し飛んだ。そして静かに、こちらを見て彼女達は微笑む。
アスカはもう戦えない中、私達のサーヴァント戦が始まった。

24話・外伝にしては酷い精鋭部隊

清姫、クラスバーサーカーであり、美形の僧に一目惚れし、彼に求婚したが拒絶された。

だがもう一度会う約束をしていたが、彼は清姫を恐れ、約束を破り、逃げ出した。

結果、彼女の思いは強く激しく、その身を変化させるほど強まり、蛇へと姿を変え、鐘に隠れた彼を焼き殺した。

源頼光、クラスバーサーカーであり、史実では男性だが、彼女だったのが彼の世界の真実であり、多くの神秘と対峙した、希代の神秘殺し。

だが彼女には色々な物語があり、狂っている。

母性愛が狂っていて、愛する者は子として接して、非人道なことすらいとわず、愛する者の敵を討つ。

静謐のハサン、クラスアサシン。その肌、否、彼女全てが毒でできている。少女は毒そのものとして、暗殺者の称号を持つハサンの人。

ブリュンヒルデ、クラスランサーであり、北欧の神に仕える戦乙女。彼女のことは悲劇として有名である。愛する者を失った少女。

「なお、彼女達の愛は重く、マスターに対する愛は深く、ランサーはシグルドさんと思い、愛し殺しにかかり、頼光さんは息子と思い、手元からけして離そうとせず、清姫さんは嘘言えば殺し、つねに背後に控え静謐のハサンさんは……あつ、この人平気だろ!? 毒で死なない人しか愛せないのならオレダメだろっ」

「マスターボクの方で魔防高いし、魂の質が高いから効かないよ?」

「なんてこつたい!!!」

——立花響

なにか虚ろになって虚空に向かって語り出したアスカの言葉、ぜ、全部怖いんですけど……

アスカは事実を知り、怯えながら、後ろに下がる。

「ま・す・たあ……………」

「ひい!!」

清姫と言う、黒い着物で、白い綺麗な人が、にんまりと微笑みながら、その白い肌をほんのり赤くしているけど、吐息と共に、火が出てくる。

「な、なんで絆Lvが高いの!? 霊基再臨!? お、オレ育ててないよね
きよひーさん!!?」

「そんなの、愛ッ、ですツ!!」

「なんでそこで愛!」

そんな叫びの中、全身をくまなく見るのは、全員だった。

「わたくし、いつもいつもますます旦那様あの愛を目一杯受けてましたから
「くす」

「あらあら……………母の愛に勝てないのに……………」

「ふふふふ……………」

四人の女性が色々怖いです。なんだろう、助けて未来う。

「わたくしはいつもますます旦那様あが『届け俺の愛ッ』と叫ぶたびっ、いつも
いつも出てましたわっ」

「それは私も」

「母もです」

「ふふふふ……………」

「ちつがああああううううもん、オレが課金十貯めたもんでガ
チャった時に願ったのは、レギュと二軍用と、イベ鯖が来て欲しかっ
ただけだよっ!! きよひーとか呼んでないっっていうか、なにかしらの
恐怖があつて、持つのも怖かったから……………その」

「何度でも会いたいのが故に、いつも外していたのは知ってますから、ご
安心してくださいな……………」

もうだめだと呟いて、奏さんに腰が抜けて抱きつくアスカ。ここま
で怖いのか?

それにはナスターシャ教授が、

「清姫伝説は、鐘に隠れた僧を殺す際、解けた鉄ですから……………そ

の」

「それは……………」

「怖いデス……………」

「あ、あと、オレの知ってる清姫なら、バレンタインデーイベは、自分をチョコにしてマスターにプレゼントしたり、ことある事に現れてマスターの正妻の座取ろうとしたり……………そのたびにスマホ持つ手が何故か震えに震えて、怖くて所持できないんだ」

「なんでと思い、アストルフオさんを見る。と、もの凄く言いにくそうに頬をかいて、

「そのね、あの……………別にアスカが僧本人って訳じゃないんだ。彼女の記録とアスカの記録で関わったのは、マスター時代だね」

「お、オレの過去、清姫のマスター?」

「はいっ♪♪ あなた様はわたくしと永遠の契りをかわし合った、安珍様の生まれ変わりですので。ねえますたあ……………ああますたあ……………」

「待つてよお、安珍の生まれ変わりじゃないなら違うよお。怖いよ帰りたいたいよお、もうやだよお」

目がとろけようにアスカを見てて、アスカは泣きわめいてる。

まるで昔おばさんと私と未来とで無理矢理、お洋服の交換会したときみたい泣きわめいてる。

私はその前に出て、説得しようと呼ぶ。

「ま、待つてください清姫さんっ。アスカはその、貴方の知るマスターさんかも知れませんが、生まれ変わりですっ。いまはアスカですっ、私の大切なアスカですッ」

「それもそれと言う視線が集まる。あれ? 私何か変なこと言っただかな?」

清姫さん達は、一斉に、冷ややかなでこちらを見た。

「……………分かってます」

「けど、変わらないよ?」

「ええ、そうですよ……………母の愛は、姿が変わっても変わりません……………永遠に……………」

「貴方は我々の言う人ではない、そう言つて邪魔したんですつ。
ますたあ旦那様、仕方ないんですつ。正直、ますたあ旦那様に会うためには、あのお二方が必要でしたので」

そう清姫さんが言つたとき、歌が響く。

天羽々斬、翼さんの剣を構え、

「みんな、とりあえず叩く。二人と翼、クリスを守るツ」

それに私以外の人達が武器を構え、私にアスカは、

「ごめん響……………けど」

「……………分かつたよ、けど、本気じゃないよね？」

「……………ネロ達と同じだよ」

「そゆとこ、マスターの好きなところだよボク」

「うむつ、余達も忘れるでないぞつ」

——龍崎アスカ

怖い、けど、そう言つてられない。

「翼やクリスを利用してオレを呼ぼうとしたり、ジャンヌ達にケガさせたんだツ。覚悟はいいな。清姫、源頼光、静謐のハサン、ブリュンヒルデツ」

「殺さなきや、殺さなきやツ!!」

「……………」

「あらあら、反抗期ですか、母は悲しいです」

「ますたあ旦那様」

さすがと言うべきか全く話が通じていない、こうなれば仕方ない。叩いて大人しくさせる。

「ネロ、アルテラツ。キャスター組はアストルフオ。響つ」

「分かつたよつ」

アストルフオもキャスター組と共に、戦えない人達のそばで待機、剣を持つセイバー組が自分と共に斬りかかる。響はジャンヌ達のそばに向かう。

「邪魔しないでくださいっ、わたくしはこのままますたあ旦那様と結婚式を

挙げなければいけないんですッ!!」

「それは余も同じだが、此度は我慢しておるんだッ。ウエディングはまた今度出会ったときに取っておく!!」

「もう色々困らせないでくれッ」

翼の曲を歌い、その戦いをする。翼とは何度も共に戦ったため、動きも技も、誰よりも知っている。その為か、アストルフオギアの次に、一番戦いやすいギアだ。

「!! いま浮気を受信しました旦那様ですたあッ」

「母は許しませんッ、なによりその格好はなんです!? 母と同じならいざ知らず、ちゃんとした娘として着物を着なさいッ」
「愛して殺しますッ」

雷を放ちながら、ナギナタで追い打ちする清姫? いかん混ざってるが使ってる。バーサーカーなのにランサーの武器使わないで欲しい。

(まずい、静謐が見あたらない!?)

「わたしを考えてくれたマスター?」

その時、一瞬だけ瞬きした瞬間、彼女が抱きついて、その顔が、吐息がかかる位置まで居た。

(まさか宝具!?)

いくらなんでも高速移動なんて無いはずなのに何故だ。まずい、彼女の宝具は接吻と言う形で相手を殺す。それは英霊でも二度すれば殺せる。

って言うかここでキスされれば色々死ぬのが確定する。

『熱く、熱く、蕩けるように……………』

憤怒して叫ぶ清姫、源頼光が冷笑、ブリュンヒルデは槍を強く握り、他は多数の反応を見せる中、時間がゆっくりと動く感覚。やはり宝具が発動している。

『あなたの体と心を焼き尽くす』

頬を赤くして抱きつきながら、唇が近づく。

『サバーニャ
妄想毒身』

そう言った瞬間、

銃声か鳴り響く!!

「影縫い」

緒川さんがそう呟いた瞬間、僅かに出来ていた影に銃弾を撃ち込んで、止めた。

「？」

「助かつ、たっ!!」

身体を動かした瞬間、ちゅと頬にされたが、何ともなく、その場から離れる。

静謐のハサンは頬を赤くして、クスと微笑む。

「死なないのが嬉しいの？」

静かに頷く。そう言えば、止められたとはいえ、宝具に昇華した死のキスを受けたのに、何ともない。

「マスターツ、マスターはあの人の死の洗礼をはね除けたの忘れたの!!?」

アストルフオの言葉に、初代であり最後であるハサンの死から生還したことを思い出す。そりゃそうだ、死なないなオレ。

少し濡れていた唇、キスすると共に頬を舐められたようで、毒でもある唾液を拭きながら、ネロとアルテラが即座に来る。

「奏者ツ、よくも奏者の頬にツ」

「……………貴方は悪い文明……………」

「いや、これ宝具で毒だから……………オレは平気だけど」

そう言いながら、その時、

「!!!」

雷が、炎が、魔銀の槍が巨大化する。

「あらあら……………ま・す・たあああ……………わたくしと言う者がありませんが、目の前で浮気ですかそうですか分かりました愛しましょうキスしましょういますぐしまししょうね……………」

「母は許しません……ええ許しません」

「愛し殺し愛愛愛愛愛アイイイイイイイイイイイイツ」

そして一人だけ、嬉しそうに、

「くすっ」

そう微笑んだ瞬間、彼女達がブーストした。怖い。

「これがバーサーカーの力か……」

もう内ランサーとアサシンが居ようが関係ない。向こうはバーサーカー陣営OK?だよ。そう思いながら、ちらつと見た。

「だ・ん・な・さ・ま? この状況でまだ浮気ですか? 分かりました、淑女としてたしなむ気でしたが、ここは正妻清姫、本気を出すしか無いようですね」

「悪いけど清姫、静謐、ブリュンヒルデ、頼光。まさかだと思うけど、オレが貴方達と戦うのに真っ正面から戦うと思っていたか?」

全ユーザーならこういだろう。い・や・だツと。誰もこの面々と真正面から戦う? 死ぬぞ。令呪も何も足りなくなつて、どうなるか分からない。

だからこそ、策を使うのみ。

「よしっ、キヤス狐ツ、準備は!」

「みこつと大丈夫ですマスター♪」

それに全員が驚く。念話つて便利だよ、魔術師達は真っ先に学ぶべきだね。こんな陣営に搦め手用意しない方が頭おかしいんだよ。

(いっぱい褒めてくださいねご主人様っ♪♪)

「(わかったよ) イチイバルツ」

そしてオレはギア、イチイバルを取り出し、全砲門解放する。

「アストルフォっ」

「全員OKっ!!!」

「!!!」

いつの間にか、全員助けられていて、イチイバル全力で放射。

爆音響く中でクリスの歌を歌い、天井を破壊しながら弾丸をなりふり構わずぶっ飛ばしながら、逃げる。

作戦としては、どーせあの方々は洞窟内なんて言葉忘れて本気出す

んだ。いずれ崩壊するならこっちが壊して、その隙に逃げる。それ以外にあり得ない。

実際その通りで、爆撃の隙間から、彼女達を無視して逃げ出す。

「ま、待ちなさい娘よっ、この状況でそれはっ」

「いままでの戦いでど、洞窟がっ」

「!!?」

「シグルドっ」

——雪音クリス

私のイチイバルを使って、あの話を聞かない四人組を埋めて、洞窟から脱出したアスカが、ギアを解除して、全員の前に現れた。

「ふう、どうにかなった」

「つたく、人のギアで滅茶苦茶すんなっ」

「悪かったよ、はい、イチイバルと天羽々斬」

「ああ」

返されたギアを見ながら、色々と話を交換する。

「気が付けば私と雪音だけで、他の者達と合流するために動いていたところ、あの四人組に襲われ、洞窟に隠れていたんだ」

「んで、あの、サーヴァント？　って奴らに助けてもらって、だいたいは事情が分かってんだ。まあ、オメエから少し聞いてなきや、完全に分からなかったけどな」

そう、私はこいつと飯食うとき、課金ゲームしてた頃の話聞いていて、少しだけ分かった。

「けどまあ、」

「あの金髪騎士が、叛逆の騎士モードレッドで、金髪がジャンヌ・ダルクか……」

「ああ」

その時、心配してかジャックが甘えてくる。まあありや心配する。

ジャックは正直、あの密閉された洞窟内で、酸の霧なんて発生させられないためか、後ろに下げられていたんだろう。

抱きしめ上げ、頬スリしながら、可愛がる様子に、後ろが叫ぶ。

「そ、そう、奏者ああ!? 余達と反応が違うぞっ」

「すまない、食費すら削って苦勞してガチャって手に入れ、最終戦でも活躍したこの子に対する思い入れは桁違いなんだ……あど怖かったんだよおおお」

そう言いながら、抱き上げて、くるくると回転する。ジャックは嬉しそうに笑いながらだが……

「雪音、どうしたその微妙な顔は？」

「いや、だっ……いや、もうなにも言わない」

「すまない……だが、やはり、自分としては、そのな……」

アタランテはそう複雑そうに言う。彼奴も彼奴で複雑だからな。反英雄ジャックのこと、感覚のズレが分かるため、どうしてもどう接すればいいか分からない。その正体も知っているからなおのこと……

とか関係なく、あれはやばい。ただでさえ回りがこいつにかける精神負担考えれば、少し壊れてもおかしくない。最近こいつ、ジャックからおかあさんと言われるたびに、不安があるが、いまは目を瞑ろう。ジャックもあたしのことを、おねえちゃんとか言ってくるし、もうどうすればいいんだろうな……

ひとしきり楽しんでから、アスカはジャックを抱き上げながら、

「とりあえずその人はルーラーのジャンヌ。ルーラーは特別クラスと覚えておいてくれ。それでセイバーモードレッド。クリスと翼を守ってくれてありがとう」

「いえ、いいんですよアスカさん」

「……………」

——龍崎アスカ

ジャンヌも、モードレッドも最終段階まで上げた子であり、全員その姿だが、モードレッドは何か複雑そうにこちらを見る。よく考えれば、

「モードレッド、クラレントを貸してくれてありがとう。いつも助かってるよ」

「……………別に、それはお前のももあるし、その……………お前のこと、気に入ってるから、いい……………」

そんなことを言われて、少し嬉しい。彼の騎士と呼ばないと、男女扱い嫌いな子だからな。ジャンヌにも感謝しながら、崩れた洞窟を見る。

「ともかく、ここから離れて、先急ごう。ジャンヌ達もマスター契約しない？」

「ですね、お願いします」

「おう、私らまだ平気か？」

そう言いながら、ジャンヌ達がクリス達と契約したりと、これで宝具は使えると話をしながら、少し振り返る。

それにモードレッドは、

「おい、あれは諦めろ。いくらサーヴァントでも、あれは終わって、座に戻ってる」

「ああん……………けどな」

正直源頼光は、息子ちゃんといえるんだからオレはいいだろうでいい。だが、ブリュンヒルデ、清姫、静謐のハサンは、そのな……………

「……………別の形だったら、受け入れたかったな」

友達、家族、そう言う暖かい物を求めているだけの彼女達なのに、なんでこうなったんだらうか？

そう思うと、そう思ってしまう。

「あーもうこのお人はっ、甘ちゃんですよ〜何回転生しても変わらないようです」

「子ジカらしいわ〜」

「ま、それは輪廻転生を続けても、忘れて欲しくない感情ではあるがな」

ネロの言葉に、周りは微笑む。

ともかく、

「未来が心配だ、早く奥の霊核へ。できればその途中で出会えればい

いけど」

「だね、急ごうっ」

そして我々は駆けだした。

——
???

静まりかえる、瓦礫の中、
ガツシヤと腕が生えた……………

25話・白亜の城

キヤス弧に案内されるがままに歩く。

たどり着いた場所は、大理石と間違えるほど真っ白な何かで作られた、お城だった。

「デス〜」

「きれい……………」

「アスカ、こんな城関係でサーヴァントは？」

「城を生み出すサーヴァントなんて出てきて欲しくないんだけど……………」

嫌な予感がする。こんな純白の城に住まう騎士達なんて、モードレッドがもの凄く嫌な顔をしている。聞きたくないが、

「似てるの？」

「……………ああ、ブリテンの城だ」

「えっ、ブリテンって!？」

「まさか」

その時、妙な力を強く感じる。装者であるみんなも、気配と言うものが分かる緒川さんもまた、それに気づく。

「これは……………」

「向こうか……………小日向のこともあるが、やはり」

「うむ、風鳴が考える通り、この固有結界事態どうにかすれば、汝らは元の世界に帰るがゆえ、壊した方が早いだろう」

ネロの言葉に、全員がギアを纏う。今度は調のギアを纏い、すぐに中心部へとたどり着く。

そこにいた者は、

「……………チツ、会いたくもねえ顔ぶれだ」

「……………円卓の騎士達」

円卓の騎士達、セイバー達だけならばよかったが、虚ろな目の赤い髪の女性と、何か諦めた顔の赤い外套の男もいた。

アーチャーであるトリスタン、ライダーブーディカ、セイバー達、ガ

ウェイン、ベデイヴィエール、ランスット（剣）がいた。

「……………よくもまあ、ブリテン関係者って感じだな」

「ブーデイカか……………しかし」

ネロもまた生前の関係者がいるが、その顔は曇っている。正直、ゲームで知る彼女らしからぬ顔つきである。

「彼女は最後まで抵抗してな、令呪で意識を封じられている」
「!?」

「……………よく会うな、無銘」

「言うな……………」

苦笑しながらこちらを見て、知らない者もいるのを見てから、ナスタージヤ教授が呟く。

「ブーデイカと言う英霊は、ブリテンのその後の女王の名前ですね。そして」

「円卓の騎士トリストアン……………」

悲しそうに呟きながら、他の騎士も剣を掲げる。

「同じく、騎士ガウエイン」

「同じく、騎士ベデイヴィエール」

「同じく、騎士ランスロット」

そして赤い外套の彼だけが分からないと見るが、

「あの人は無銘、ゲームでもあるだろ？ その逸話を元にした話の中、現代の人が関わるって。あの人はそれで、彼らと同じ席に座った、オリジナル英雄」

「同じと言うのは違う。私はそこまでたいそうな存在ではない、なにより、君とも違う。抑止力」

「名前とか無いのか」

「バランサーなり、調整者なり、逸話はさまざまだよ」

そう言いながら、無銘は夫婦剣を取り出す。後ろからかつんかつんと、誰かが現れた。

「未来!?!」

「未来?」

「……………」

響の言葉に、何も反応しない未来だが、その腕の甲には、

「令呪!? だけど、ブルーデিকাさんと同じ目つき?」

「黒幕がいる、彼女も操られ、そしてライダーは令呪と言うわけだ。我々も、仮初めのマスターとは言え、君らをうち破らないといけない」
円卓の騎士達は曇らせながら、それにハッとモードレッドが剣を構える。

「父上がいねえテメエらなんて敵じゃないツ、おいマスター行くぞツ」
「気を付けてくれよ装者達は宝具や、サーヴァントと戦った経験は無い。特に無銘は『根元』を知る、三流の魔術使いだ」

それにサーヴァント達が驚く中、一人やれやれと呟きながら、
「君のようにすでに知られているが厄介だな」

「レギュだったんだ、なによりこのシリーズ知ったのだから、セイバーとのアニメで知ったのが切っ掛けだ」

アーサー王と恋仲とか言うのは伏せてやるよ、と内心思いながら、
凜かも知れないしなとも思いつつ、静かに構える。

「それでは」

「未来確保第一で動くぞ」

「それには異論ねえよ蒼いの」

「うむつ、ブルーデিকাすまぬが倒させてもらおうつ」

「ミツコーンと……………ん?」

「行きますツ」

そして我々が地を蹴り、激突する瞬間、

天井から、何かが振ってきて、四人が復活した。

「シリアスブレイカーの私よりもブレイカー!!」

そんな叫び聞かなかったことにする。

——立花響

「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

瓦礫の下、円卓の騎士って言う人達がボロボロになって這い出てくる。

「えっ、なに? なんなの?」

「!? 立花気を付けろっ」

「まさか、生きていたのか!?」

そこにはボロボロの着物姿で、それでもうつすらと赤く頬を染めた、四人組が居た。

「ああ……………ますたあ……………ますたあッ!!」

無銘と言う人の頭を踏んづけて、辺りを見渡す。

「私が間違っていましたッ、過去の旦那様に捕らわれ、いまの旦那様を見ないなんて嫁失格でしたっ!! もう迷いません、アスカ様っ。此度もまた結ばれましょう!! 今度はウエディングドレスはお揃いで着ましよう。子供は何人ご志望ですか!!?!」

「母が間違っていました、金時も呼びましようッ。兄がいないのが不満だったのですね!! 母が悪かったですっ、今度は金時をこの場に呼び寄せましよう!!」

「愛された、殺さなきや殺さなきや殺さなきや殺さなきや殺して愛さなきやッ」

「私は……………ずっと触れていればいい……………ずっと……………」

そんなこと言いながら、アスカを捕まえにまた来たあの人達。

「なんで無傷なんだよ!!? イチイバルの弾丸と瓦礫で埋もれていたのに!?!」

「愛ですッ」

「なぜそこで愛!!?」

もう怖い。アスカが怖がった理由が分かる。瓦礫の下の人達が不憫で、モードレッドさんも、困惑してる。

って、アスカは?

そう思ったとき、調ちゃんの歌を歌いながら、一気に未来の元に距離を詰めていた。こういう時の動きは早い。

『令呪を持って命ずる、来たれ!』

歌を歌いながら、突然未来へ攻撃、α式・百輪廻を放つアスカだけでなく、現れた騎士の人達が突然その場に現れて、全部当たる。

「こっちはアニメ見てから小説くらいは読んでるんでね、令呪で呼ぶのは分かった」

そして未来を調ちゃんが移動する時に使う技で移動しつつ、未来を捕まえ、

『一画を用いてここにツ、来たれキャス弧ツ。再び一画用いて命ずるツ、呪詛の解呪をせよツ』

「ミコつと呼ばれて飛び出て、解呪始めますっ」

そして鏡をすでに持ち、令呪のブーストもある光が当てられた。未来は目を閉じたと共に、遠くからぶっはーと言う声が響く。

それは一人無事だった英霊。

「よし、身体が動くよおおお」

「ブーディカっ、無事か!？」

「ああうん、ネロ。さすがに貴方達以外が来たときは驚いたけど、マスター権はその子が持つてるから、どうにかね」

唯一無事だったサーヴァントが、心配そうに未来へと近づく。私達も一応、ほんと、

「えっと、奇襲ありがと、清姫、源頼光、ブリュンヒルデ、静謐のハサン」

隠れながらそう言うアスカ。それにみんな頬を赤くして、距離を測る。ネロさん達が睨みを利かせていた。

「奏者を娶りたいのはそなた達だけではないのだ……余とてウエディングドレス着せたくて我慢しているのだぞツ」

「そうですねツ、そしてそのまま……ぐふふ」

アスカがまた子ジカのように震えだしたよ、怖いよこの人達。

「子ジカ、私が子ジカって言っている意味が変わるから怯えないですよ……仕方ないけど」

「あの人達、悪い文明……」

「文明とか関係あるんデス？」

「それより、もう無害なら、瓦礫の下の人達はどうするの？」

「一応円卓の騎士だ、ほっとけ」

モードレッドさん、同僚さんじゃないんですかと聞こうとしたけど、ジャンヌさんが止めて、耳元で、

「彼女は叛逆の騎士と言う、円卓の騎士なんです。その辺りの気遣い

「目が覚めたようよ」

「マリアさんがそう言つて、未来が気が付いたことに、私達は安堵
逃げてアスカッ」

「そう叫んだとき、私達が光に包まれた。」

——龍崎アスカ

光が包むと共に、激痛が走り、その場に倒れ、ギアが解ける。

「アアアアアアアアアアアアアアアア」

その時、鎖のようなものが自分の『何か』を取り出そうとする。

「!? 魂から情報を取り出そうとしていますッ」

「破壊しますッ」

そう言つてアルテラが剣で鎖を壊そうとするが、壊れず、その鎖は魔法陣と繋がっていて、ブーディカ達が困惑する。

「ブーディカさん達、黒幕と言う方の狙いは!?」

「分からない、少なくとも彼女達狙いなのは間違いない!!」

その時、陣がまた生まれ、その様子に無銘が叫ぶ。

「サーヴァント召喚!?!」

「アスカを触媒に、誰か呼ぶの!?! けど誰呼ぶ気!?!」

アストルフオの叫びの中、それは、ノイズが走る身体で顕現し出し
めた。

「! お前……………」

「くっ……………」

「白銀の、騎士さん!?!」

それは白銀の名になった、とある英雄の別の可能性。オレの前世の
情報だった。

「彼から過去の、別可能性の彼を呼びだしている?」

「そんなことできないよッ」

アストルフオが叫び、ジャンヌは疑問に思いながら立ち上がり、警
戒する。

「どういうことですか!?!」

「ボクは他の人達よりも、正規の英霊として彼と契約したから、彼の記録はグラウンド達ほど分かる。彼の記録は、本来もしも、あり得た、かも知れない記録。本来は無い記録なんだッ。だから」

「英霊として座に登録されず、ならば彼として生まれた英霊は英霊にあらずッ。抑止力クラスの術者以外、英霊召喚ではけして呼ばれないと言うことか!？」

無銘の叫びに、意識が飛びかける中、マリアと奏が支えてくれる。アタランテを始め、多くの人達が回りを警戒する。

意識だけはつきりするが、声も何も、身体もうまく動かない。マリアはその様子を見ながら、無銘を見た。

「どういうことなの!？」

「英霊とは本来世界の外側で、データ登録された魂と思ってくれ。だが彼が別の英霊、別の可能性として活動した記録は無い記録として扱われている。本来一般、人間程度では知ることは愚か、それらを閲覧すること自体絶対に出来ない」

「だけどいまは登録されている方法で、アスカの過去を、英霊を召喚していると言うことなの?」

「ああ、言うなれば無理矢理正規の方法で、別の物語のキャラクターを別の物語に呼ぼうとしている。そうなればどうなるか想像できないッ、下手をすれば正規の歴史にも悪影響を及ぼすかも知れん!!」

言葉に肯定すると言うより、もっと酷いことになると言っている。モードレッドを見ると、モードレッドも胸を押さえ、息切れし出している。

「つまり、俺じゃねえ俺が、俺になろうとしてるってことか? ハッ、笑えねえ」

「それだけで無いッ、ブリテンと言う歴史事態に悪影響が出る話じゃないッ。彼の記録は無い記録だッ。それがあることになれば、その後無い扱いになる記録は、本当に無いことにされる!! 本来いるのいない英霊が彼と言う存在だッ、それがあると確定された瞬間、彼が裏で暗躍した歴史で回避された最悪な結果がそのまま現実として登録されるッ」

「ええつと、全然分かりませんッ」

響の叫びに、ナスタージヤ教授が深く考え込みながら、

「…………彼の魂は、歴史上に語られる史実とかけ離れた最悪な未来なら、かけ離れた最良の未来にする役目。ですが、平行世界ではそれは予測、あり得た可能性として扱われなければいけないと言うことですね?」

「さすがその通りだ。彼は所詮、もしもでなければいけない。正式に記録されてはいけない記録なんだ」

「そしてその魂、代役を担うのは一人。その魂が彼に固定されれば」
「その後のもしもにされた偉業が、無いことになり、タイムバラドックスなりなんなり、どうなるか予想すらできない。できたとしたら最悪な事態しか起きないだ」

そう言われたとき、白銀の騎士が顕現して、その場にひぎに付く。

「な、なんで正史がいるのに、俺が呼ばれてる……………」

「テメエが代理か……………くっそ」

その時、顔は似ているが男性と女性、銀色の鎧と燦然と輝く白銀と、血に染まった邪剣を持つ正式の騎士が膝をつく。

その時だった。

「モードレッド様、ようやく、召喚されましたか」

「えっ……………」

「なっ……………」

二人は驚き、目を丸くした。

そこにいたのは、13くらいのも、一人の少女。

「セレナ……………」

「!!?」

その言葉に、切歌達も驚く。マリアから話を聞く際、彼女の妹、セレナ・カデンツァヴァナ・イヴのことは聞いていた。

だが、その身体は、

「令呪!? 全身令呪を宿しているぞその娘!?!」

「ミコーン!!? しかもその人がこの空間を維持する霊核ですつ、この固有結界の術者でいよ!!」

令呪を全身に宿し、セイバー・リリイのような彼女がそこにいて、その笑みはオルタのようであった。ヒロインXが湧いて出そうだ。

そんなアホなこと考えている余裕は無いが、

「……………死の洗礼に耐えた身体ですか……………モードレッド様、しばしお待ちを。彼の器を壊し、貴方に肉体を与え、正式に英霊の座に登録します」

その時、サーヴァント達が全員驚き、無銘は武器を構えた。

「いまの話を聞いていただろ!? もしも叛逆の騎士の逸話から、白銀の騎士の逸話にすり替われれば、それだけで歴史が狂うッ。なにより、その後に辿った彼の記録にも影響が起きるッ」

「だから? たかが、表と裏の楔が解き放たれたり、世界が泥で埋め尽くされたり、月の戦いで文明が滅びたとしても、平行世界ですよ? 関係ありません」

何名かのサーヴァントの思考が止まりかけた。あまりにぶっ飛んだ事態過ぎる。

それを彼女は涼しげに、冷ややかに、全く何も感じずに言った。

「……………英霊として、どうやらこれは止めなければまずいですね」

「明らかにまだまだあるはずです……………」

「全く、バーサーカーですら肝を冷やさせる内容ばかりとは、抑止力として、彼の魂はよく働いているようだ」

そう言つて武器を構える中、キャスターキャス弧が、

「皆々様ッ、彼女の令呪でかなり魔力がお高いですつ。それと、肉体を傷付けずに倒すのであれば」

その瞬間、魔法陣が浮き出て、巨大な宝玉が禍々しく光り、いくつかの骸骨の兵士や、ワイバーンが生まれ出てくる。

「あれを壊せばいいんですよねキャス弧さんッ」

「イエースでございます響様ッ、ですが気を付けてくださいますませつ。どうも」

泥のような者から、人の形をしたモノまで這い出てくる。

「サーヴァントの情報だけで生まれた偽物ですね……………」

「小日向様、できればこのままマスターとして我々を使役してください……………彼女と、あなた様の友人を助けます」

「さすがに先ほどの汚名は返上しよう。これでも私も、抑止力の一人なのでね」

「解体するよ」

「せっかくのステージよっ、大いに暴れるわっ」

こうして、

「アスカ……………任せて」

「さーさっとなげつけてやるぜっ」

「防人の刃、見せてやろう」

そして装者とサーヴァントの戦いが、

「誰にも邪魔させない、誰にも……………モードレッド様は渡さないッ」
幕を上げた。

26話・存在しない小さな願い

無数にわき出る、エネミーの戦いの中、銀の腕を持つベディヴィエールが斬りかかるが、巨大な盾で防がれ、そして、槍が放たれる。「その槍はっ、アーサー王の!?!」

「私は仮にも父上の娘なんです、父から受け渡された円卓の盾と、この槍は本物であり、これは最大限に引き出せます。円卓の騎士ごときに倒されません」

「くっ」

「特にその人は死んでください、消えろ、虫のように消えろ」

見下ろすように冷酷に告げているが、ランスロットはもの凄く精神的にダメージを受けながらも戦い続ける。

「貴方、人の妹の身体で酷いこと言わないでッ」

「すみません、ですがこの身体はモードレッド様が生まれる世界に干渉する触媒。元々死んでる運命からすくい取ったんです、できれば気にしないでください。そしてラン、いえ穀潰しは死んでください」

そう言われながら、光り輝く槍が回転し、光の奔流が敵の兵士ごと潰している。

それでも尚、新たに作り出される中、それを避けながら、弾幕を張るクリスだが、盾を構えるだけで、城壁が生まれ、翼の戦慄もまた、城壁に阻まれる。

「あの力……紛れもない、ロンゴミニアド。王の槍を」

「ふざけるなあああああああああ」

叛逆の騎士モードレッドが立ち上がり、黒い血に染まったクラレントを放つが、それも城壁に阻まれる。

「!? ミコーンと来ました。エリさん、宝具で少しやつちやつてくださいな」

「私ので突破できるの?」

「確認ですので、申し訳ございませんが」

「まあいいわっ、全員下がちなさいッ」

突如魔城が現れ、その上でマイク片手に叫ぶ。

『鮮血特上魔嬢っ』

音波のような歌声が放たれるが、それを白亜の城壁が防いでいる。その様子に耳をぺたつとしていたキャス弧は顔色を悪くする。

「これは、ブリテン宮殿そのものの壁ですね……………あれ」

「まさか、城その物と呼んでると言うことか!？」

翼の叫びに、サーヴァント達は苦い顔をする。

「知り合いの方に、そのような宝具を使う方がいるので……………」

「もしかすればその盾」

「ご明察です、この盾は円卓の騎士が囲む場より、私のために作られた円卓の盾。これにより縁深い者、集う英霊を囲む力はこれ以上無い触媒です」

シールダーかと思う中で、となると視野するキャス弧。

「キャス弧、ここは任せたぞッ。城落としなぞ、簡単にできる者は、現段階では居ない以上、別口しか無いッ」

「分かっていますっのっ」

そしてそんな中、静かに、

「させるど？ この盾も槍も、加工済みですッ!!」

息を吸い、そして、歌を歌う。

「これは」

「まさか」

装者達が驚き、そして、彼女が駆け出す。城の壁が動き、まるで動く城塞となり、サーヴァント達に襲いかかる。

それは恨み、円卓の騎士は何も考えず、王を判断を疑わない者、民の身を案ずるが故、王を理解しようとしないう者、民しか見ない者、正しいことしか見ない者、王として国しか見ない者への、恨み辛みの怨嗟の戦慄。

それを巻き込みながら、ロンゴミニアドは輝く。

「消えろッ、あの人を苦しめたッ、愚かな者達!!!」

その光の奔流は、全てを飲み込んだ。

「……………助かりました、ジャック」

「問題ないけど……………ジャンヌ?」

「ええ……………」

緒川さんなどを守り、ずっと控えていたアストルフオを含め、三人以外立っていない。他のサーヴァントも、装者も先の絶唱で、倒れているが、生きてはいる。

「私も、この身体を使用している非礼は詫びます。本来死ぬはずだった時間からこの人は止まっていますが、生きていますのでそのまま返します。安心してください、生きてますので」

そうマリアにほほえみかけるが、マリアはその言葉に睨む。

「ふざけてるの?」

「貴方は妹さんが生きているのに、嬉しくないんですか?」

それに顔を歪めるが、すぐにナスターシャ教授が手を掴み。目できとさせる。

「その結果、別世界の方々の歴史をねじ曲げるのであれば、私達は抵抗させてもらいますよ。存在しないアーサー王の子よ」

「……………そうです、私はアーサー王の子として扱われた、王家の者です」

そう言っ、微笑みながら静かにそれを見せたとき、無銘も目を見開いた。

「バカな?! 鞄だと!」

「鞄?! ブリテン関係で鞄と言うことは」

「はい、父上の、聖剣の鞄です。だからこの身体、セレナ・カデンツァヴナ・イヴさんは生きて、治癒されています」

聖剣の鞄、それを持つ者に不老不死を与え、治癒能力も与え、解放すればありとあらゆる害悪を防ぐ、最強の鞄。

「ですので私を傷付ける人がいるとすれば、父上だけですが、ここに父上を呼べる方はいません。だって、誰もそれほどの腕前の魔術師であり、縁が深い者はいないのでから……………」

微笑む彼女は、静かに近づいてくる。それはいまだ抵抗している人物。魂から情報を無理矢理取れてはいるが、いまだ抵抗していた。

「アスカさん、ずいぶん抵抗するんですね。ですがいいません、私は貴

方を殺します、恨んでも良いです。ですが、貴方を殺して、モードレッド様を完全顕現させます」

「どういうことですか？」

静かに呟き、ジャンヌが前に出るが、すでに鞆の恩恵は解放つれていた。緒川さんが影に影縫いをはなつたが、それすら防いだ。

「……………私は生きているモードレッド様にも会いたいんです。歴史を歪め、叛逆の騎士から白銀の騎士モードレッドではなく、モードレッド様にお会いしたい。私の肉体は管理しています、セレナさんはお返します。私はモードレッド様と共に、別の世界で幸せに生きます」
そう言いながら、白亜に隠された肉体も出現させながら、それに驚く無銘。

「……………君は」

それに英霊達は絶句した。

「はい……………不老不死の身体は助かりました」

その周りには、大小異なる、杯があった。

サーヴァント達は絶句する。どれも本物だと分かる。

「聖杯ですか……………最悪です、マジですか……………」

「まさかこの空間も、盾も、鞆も、槍も、異世界に干渉する事例すらも」
戦慄するサーヴァント達に、虚ろな目でぶつぶつと……………

「長かった長かった長かった長かった長かった長かった長かった長
かった長かった長かった長かった長かった長かった長かった長
かった長かった長かった長かった長かった長かった長かった長
かった——」

槍を持つ盾の少女はそう言いながら、狂ったように笑い出す。

「まずは鞆を見つけたときは歓喜しました!! 後は父上からも
らった槍と盾で聖杯を探すために世界中を巡りましたよええ巡りま
したツ!!! 父上を始め、あのくそ花の魔術師マーリンからも隠れて聖
杯と言う聖杯を探し巡るのに骨が折れましたツ。その後は平行世界
の聖杯を見つけたすのにも骨が折れましたよええツ!!! 中には汚染
されて使えないものまであったんですから苦労しましたツ」

だが彼女には、アーサー王の鞆、ロンゴミニアド、円卓の盾があつ

そう叫び声を上げる、響は後ろに下がる。彼女の怨嗟を聞き、そして、

「……………正史の歴史と違うのは、ただモードレッド様が王位に、父上に認められることすらどうでもいい。短命で死のうがどうなるうかどうでもいい。あの人の口癖です、どうでもいいと、何度も言う……………」
だがクラレントに選ばれ、短命で無くなった。魔女である母親の言うことは、アグラヴェインと共に無視していた。

「アグラヴェイン卿とは何度も言い争い、穀潰しの不正を正そうとするのを止めたそうです……………トリスタン卿が去ろうとするのも、何度も呼び止めて、去るとしても外側から国を支えろと、役割を考えたり……………ガウエイン卿に、全ての王命が正しくても、民や他の者に正しさが伝わらなければ間違いだと何度も言ったり……………ベデイヴィール卿にも、他の円卓の騎士達にも、王として生きる父上の、人の心を捨てても国を支える意味を問い続けた……………」

遠く、遠く、虚空を身ながら語るのは、彼女のブリテンと言う国。その話を聞きながら、まるで、

「ほら、正史のブリテンと打って違って、平和な時代です……………父上も、機械のように冷酷でありました。ですが、国のためだと言う騎士達が多く、もしも冷酷過ぎるのなら、自分達がカバーすると、思う騎士がいましたよ」

だが魔女はその国を狙い、ついに命と引き替えに、魔竜を呼び寄せ、国を襲った。そして彼が戦い、散った。

「……………その後から、父上は変わりました。骨身を削ったモードレッド様のために、王としての判断と共に、民を思う判断も交えて考えるため、円卓を変えました……………なんでこの物語が違うと言うの……………なんであの方が叛逆の騎士が正しいの……………」

そして槍を構え、盾を構え、鞘を解放しながら、静かに、

「世界が壊れる？ 知らない、壊れてしまえばいい……………あの人が幸せなら、それでいい……………アスカさん、ごめんなさい、響さん、未来さん、ごめんなさい……………私は、私はただ殺すために、龍崎アスカを

作り出した。だから……………アスカさん」

死んで？

そして光の槍が、すぐに動く。その速さに、サーヴァント達は不意を付かれ、響は手を伸ばすが、届かない。

「アスカああああああああ!!」

そして、

「……………どうでもいいだろ、んなこと……………」

白銀の剣がそれを受け止めた。

白銀の騎士モードレッドの剣であり、雑音が走る身体で、僅かに笑う。

「あ、あああ……………」

「悪い……………サーヴァント、セイバーモードレッドif、顕現完了……………微妙だが」

そう言っつて、彼は愛している者の前に立つ。それに泣きそうになりながら首を振る。

「いや……………まだです……………まだ鞆が、鞆があります……………止められない、誰も私を」

「果たしてどうかな？」

「!？」

と、よく見た。

(……………あああ……………)

何故気づかなかった。

彼女はいつの間にか、設置していたものに気づく。無銘もまた、呼

び寄せていた。

「詠唱の準備は終えている、後は私と、君の縁に賭けるぞ」
「……………」

静かに笑いながら、静かに、

「縁なら強いだろうよ、エミヤ」

「……………ああ」

その光の光輪に、セイバーが降臨した。

それは男性のシルエットに、僅かに微笑するが、

「あつ……………」

言葉が出ない。

「アーサー・ペンドラゴン、セイバーとして顕現しました。マスター」

「彼も君なのかもな？」

「アルトリア……………じゃなくて……………悪かったな……………」

——小日向未来

始め、びつくりした。胸を鎖で何本を貫かれたアスカが、携帯メール画面で無銘さんを気づかれずに令呪で呼べと言う。

その前に、無銘さんに作戦内容を言う。内容はアーサー王の召喚。念話と言うもので会話したけど、不思議だった。

そして僅かに笑った無銘さんの合図で、呼び寄せて、彼のおかげで召喚されたのは、男性のアーサー王。

「話は分かった、僕もi fの者として、彼女を止めよう」

「くつ……………」

その時、彼女が纏う、鞆が砕け、本来の主、彼の騎士王の元に集う。だが、

「で、ですが、別軸の父上をお呼びしても、鞆は私用に調整してますッ。貴方では使えないッ、エクスカリバーだけで、ロンゴミニアドと戦うんですか!!」

「戦うさ、行くよ、モードレッド」

「……………ちつ、どうでもいいって言っていられないよな」

それに泣きそうなほど驚愕する。それでも盾を構え、静かに、

「待つてくださいい……………」

その時、誰もが驚き、振り返る。

「その人を止めるの、やらせてください」

「立花響……………」

拳を握り、静かに構える響に、白銀さんはアスカを見て、その場を譲る。

「……………なんで」

「だって、好きな人と、大好きなお父さんと戦うの、いやでしょ？」

「……………え……………」

力無く微笑む響に、涙を流しながらも、

「……………」

力を込めて、槍を捨てる。

「もういいです、こうなれば籠城戦です。時間が経てばアスカさんを砕いて、モードレッド様が顕現する……………この円卓の盾、ブリテンと言う国の歴史、その重み、砕けるのなら砕いて見せてください……………」

「うん、りょくかい……………」

両腕で盾を構える彼女の周りから、白亜の壁が現れる。響は歌を歌いながら、拳を握る。

「私は、モードレッド様を……………あの人の偉業を、世界に認めさせるつ
!!」

「アスカを、渡せない……………貴方を止めるツ、この拳にツ、全てを込める!!!」

白亜の城が生み出される中、響は真つ直ぐ、ただ拳を放った……………

「ごめんなさい……………」

一人の女性が、少女へと頭を下げる。

分かっていた。こんな計画が成功しても、あの人は悲しい顔をする
と分かり切っていたし、きつと銀の王剣を持って、変わってしまった
もしもの世界を正すために、平穩を捨てて進む。

だけど、捨てられるわけないじゃないか。

「ううん……………感じたよ、貴方の想い……………だからその、何も言えない。私は貴方の言うとおり、死んでたしね」

そう優しく言いながら、その人は私の手を取る。

「貴方はロンの槍を捨てる必要はあった？　あなたは踏みとどまったんだよ」

「……………わたしは」

彼女は優しく微笑んだ。

「ありがとう、貴方のおかげで、ママやマリア姉さんにまた出会えた」
そう微笑まれた。私は彼女を利用し、彼女の大切にものを傷つけたのに、どうしてお礼を言うの？　どうしてロンの槍を捨てたの？

答えなんてわかってる。

「……………ああそうか……………」

涙を流しながら、初めから分かっていたのに、分かっていたながら背けていたんだ。

「誰かを犠牲にするやり方は、あの人は嫌いって、言ってた……………どうでもいいもん、抱えるからって……………」

そう呟き、何かが砕かれた……………

——龍崎アスカ

「……………鎖が取れた……………」

そう言つて、自由になる中、周りが壊れ始める。

すつと糸が切れたように、響の腕の中に、セレナが、砕けた盾を持っている。槍もまた砕け散つて、欠片となり手の中にある。使い手の意志が敗北を受け入れたからだろうか？

『ごめんなさい……………』

静かにこだまする声に、だけどと付け加える。

『だけど私は英霊では無いですから、転生の輪で、貴方を見つけ、共に歩みます……………それくらいは許してくださいね』

「……………来世大変だな」

「人ごとか、いや、まあそうだな」

白銀も、アーサーも、オレもそっぽ向きながら納得する。その様子に全員から何か言いたげな視線を感じるが、全員無視する。

「……………俺達もここまでだ」

黄金の粒子になり、消え始めるサーヴァント達。静かに目を閉じる。

「結局、これはなんだったんだろうな」

「それはあんたがお姫さんの気持ち、踏みにじったからじゃないの」

ブーディカがそう言いながら、白銀を見るが、白銀はランスロット達を見る。

「円卓に問題持つのは俺の事態だけじゃないだろ？ お前らも反省点

があるんだから、聖杯戦争で共闘する時は遺恨捨てろよ」

「それを言われると……………」

何も言えない中、本来のモードレッドは白銀を睨む。

「……………まあ、お前の言い分も分かる」

そう言いながら、そっぽを向く。デレた。

思ったらこつち睨んだ、視線を逸らそう。

「結局、この空間は、彼の魂に惹かれた者達が集う、固有結界だったのだな」

「……………どんだけ聖杯や神秘に関わった……………」

よく考えれば、彼女の言う戦い以外にもいるし、ジャンヌをふと見ると、妙に頬を赤くして黄昏れていた彼女と目が合う。

「ミコーン……………またですか？ また別の人に手を出したんですかマスター!!」

『……………』

それに全員が一斉に我々と言う、オレを見た。

「待て、オレ関係ない。その時のだ」

「確かに」

「あつはは……………」

三者同じ魂の人物がそう言う中で、アストルフオは、

「まあね、知らない方がいいよ、アスカは」

「……………だな、過去のオレの偉業なんて知りたくない。クラレントとアーサー王で辛い気がする」

「言わないでくれ、僕だって来世に背負ってもらう気は無いよ」

「俺は違うから、ま、別の形で。頼むモードレッド正式」

「……………」

なにも言わず、腕を組んでいるモードレッド。デレ、

「お前いまなに思った？」

「すいませんッ、サーヴァントでセイバー組で好きなもんでいじりた
いんですはいッ」

素直に言ったら、真っ赤になって殴られた。ひでえ……………

「もしかすればこれで吾々のパスも直るかも知れないな」

「！」

その言葉にジャックは自分の身体を見る。そしてすぐに近づき、

「おかあさん、わたしたちにお別れ」

「ん？ なにして欲しい？」

「ちゅ〜」

「ん」

そうジャックに言われ、おでこにキスした瞬間、消えかけていた何
名かが元に戻る。

「そ、奏者ああああああああああああああああああああ」

「ふざけるんじゃないですよ星五つ程度がああああああああああああ」

「アスカーーーーーまた聖遺物動かすんだから、ボクもチューして
よおおおおお」

「愛殺すうううううううううう」

「ま・す・たああああああああああ」

襲いかかるのは危険なサーヴァント達、あれまづくないこれ？

「……………」

全員が迫る中、各々の相手に迫る中、アーサー王だけは少しだけ外
れた位置に移動する。装者達を見るが、冷ややかでした。

「さすがにね」

「まあね」

「一回責任取れ」

そして迫るサーヴァント達から、絶叫を響かせて、元の世界へと帰還した……………

ちなみにジャックとアタランテはいました。

27話・話し合い

異世界聖杯事変、のちにこう呼ばれる事件は幕を下りた。

二課は変化と共に、新たな装者二名を見つけだす。

アーサー王伝説から、聖槍ロンゴミアド装者、天羽奏。

同じく、円卓の盾装者、セレナ・カデンツァヴナ・イヴ。

この事件での被害者0名、建物は高エネルギーで半壊しているものである。

そして何故かナスタージャ教授の病状など、完治に近い状態であり、その後も良好である。

「で、現在加工中。しかし、二人揃って適合率高いか」

「ああ、しかも槍だ。ガングニールは響に渡した以上、こいつで頑張るさ」

そう言い、相棒解消することになったが、気にもせず、色々な手続きがあるため、マリア達はいまだ自由とは言えないが、別の場所で羽を伸ばしている。というよりか、

『私達もそっちがいいデスっ!!』

『美味しそう……………』

テレビ中継で、我が家のテーブルを見て騒いでいる。向こうは向こうで料理が並んでいるのだが、こっちは全部オレが作った。

「相変わらず……………」

「お前っ、なんで女子力高いんだよ」

「なんで文句言われなないといけないんだよ!?!」

エプロン姿で料理しているが、響も未来も頷いて、三人の友達も見ている。

「女の子……………」

「男だよ……………」

そう言いながら、新たな料理をテーブルに置きながら、モニターにセレナが映る。

『あの、アスカさん料理できるんですね。今度教えてくれますか?』

「? 別にいいよ」

『ありがとうございます、せっかくあの人ののおかげでママ達に出会えたから、みんなを守りながら、前に進んでいきます』

『セレナ……………』

そばで嬉しそうにするマリア。マリアはすぐに国外でアーティスト活動して、セレナは13歳で歳が止まっていたため、色々手続きするが、マリアとの関係はなるべく隠す方向らしい。

「まあ、マリアの方は、響と切歌達に手を出すとか裏で言っただもんな」

「ああ、こちら目も光らせてはいるが、明らかだからな……………だが落しどころはここだろうと、なにも言えないと、叔父様が言っていた」色々複雑な事情が分かる者達がそう話し合いながら、セレナ、切歌、調だけは歳相当の自由な生活を優先させたいと、マリアが言っているので何も言えない。

ともかく、セレナ達は今後、二課の組織で面倒を見ることになる。

『アスカさん、料理教えてもらうの、楽しみにしてますね……………』

優しく微笑むセレナに、ああと頷くが、少しだけ疑問に思うマリアがいた。

(……………まさかね)

冷や汗を流しながら、微笑むセレナを見つめる姉。

しかしと、色々と自分の情報を纏める。

「まずはオレは抑止力と呼ばれる、世界が崩壊する事態に陥るのを回避するシステムの一部分か……………」

主人公など、物語に出てくる大事な役の代役。

または、最悪な事態を極力避ける立場へ転生する者。

それにセレナも頷く。

『彼女と一緒にいたから知り得たことですが、アスカさんは、もしも、あり得た、かも知れない、そう言う平行世界の人物。それか別の平行世界すら悪影響をもたらす可能性がある世界、その抑止力として生まれる人物。そう言う『保険』が正式な立場のようです』

「英霊では無い英霊ってところだね」

正式な登録はけしてされず、それでも歯車として用意されている。

運命の齒車、頭の痛い話だ。

『彼女は、あまねく世界軸で聖杯を手に入れ、色々な問題を一つずつ見合った聖杯で、願いを叶えて、世界を欺いていたようです。アスカさんとして生まれたのは、さすがにバレた時は焦っていたようですけど』

ルナアタック事変のことを話す。だが、それより目がいつていた、彼、白銀の騎士と成ったモードレッド卿に、目がいつていた。

自分、龍崎アスカなど眼中になかったため、むしろこの事態を利用できないかと、ずっと見ていたらしい。

『…………正直、マリア姉さんのあの姿は…………』

『セレナ!? あの姿ってなに!?!』

『だって、ママ達のためだからって、持って帰るのは』

慌て出すマリアに、セレナは恥ずかしそうにしている。

切歌達は目を背けながら、オレは唐揚げを食べる。うん、いいできだ。

『ともかくアスカさんは、世界から許可をもらえましたから、この世界に龍崎アスカとして生きてても問題ない。それは彼女を通して、本来アスカさんの魂を管理する存在が決断したことです。もう心配ないです』

『…………抑止力か、エミヤくらいしか意味分らないんだけど』

『ただ、根元? ってのがよく分かりません。アスカさんは根元にアクセス可らしいですよ』

いまこの子からも凄いい情報を仕入れた気がする。セレナはそのまま、

『そもそも、アスカさんの魂事態が、すでに根元と繋がっているらしいんです。ですからグラランド・サーヴァント達が出てきたようですよ』

『……………そう』

そうか、そうだよなと納得する。

もしも、かも知れない、考えられる可能性と言う可能性の代理品であり、それらの中でまずい可能性の芽を変える役目。それは根元だと思おう。

「根元……確か、人が近づいてはいけない領域………だったか？」
「………はい」

アタランテは難しい顔で頷く。彼女も詳しくは、
「吾々は抑止力案件でもある、人類史修復のため、あるいは特異点にいました。マスターなら、自分が二度、特異点にいたことは知っていますね？」

「ああ」

竜の魔女に、バーサーカー・アーチャーとして、もう一つは航海時代、聖杯持ちの黄金ワカメが、かつての仲間の一人として喚んだ。

黄金ワカメと言ったとき、ぶつと吹き出したが無視して、そうすと頷くアタランテ。

こういう時、花の魔術師辺りが来ればいいのと思うが、そう都合良くいかない。

「ま、深く考えても、いまのお前はアスカだ。んなもん気にしなくてもいいだろ」

「………それもそうだな、いざと成れば、向こうから話しかけてくる」
そう言いながら、いまだオレに情報と聖遺物を繋げてくれているだろう、英霊アストルフオを思い出しながら、ペンダントを見る。

「彼奴との令呪が無くて、オレのサーヴァントならきつと助けてくれる。もう一人の二課、みんなの仲間としてな」

「アストルフオさんか、うん、そうだね」

「私は全然お話しできなかつたけど、ちゃんとお話ししたかったな」
そんな話をしながら、アストルフオは何となく、照れてそうな気がする。そんな風にパーティーをして、終わりを告げた。

片づけ等々し終え、寝間着に着替えて眠る。

そう、静かに………

「さてと、本題しますか大人の皆様様」

ジャックを寝かせたアタランテは、難しい顔のまま、現れる。

テレビ電話で映るのは、これからする話を話せる者達。響達には、話せない。

「まずアタランテ、あれから推測される話で、オレは」
それは少し躊躇うが、すぐに首を振り、

「長く、生きていけるか？」

それに、アタランテは唇をかみしめながら、静かに、目を閉じ、従者として答える。

「不可能の可能性が高いです」

『なぜだっ』

弦十郎、司令がすぐに尋ねたが、その答えは、

「貴方は抑止、世界を存続させるシステムの一つ。なら、時間も空間、時代も何も関係無くとも、管理されるべき魂」

そうだ。許した？ 違う。

そう思える。

「もしも抑止力に人権、多少の安全装置があるのなら、エミヤシロウと言う守護者の精神は摩擦しない」

100を救うため10を殺し、世界を存続させ続けた錬鉄の英雄。

骸の上に立ち、生前も救うために戦い、死ぬときだって誰かのために死んだ英雄。

どれほど殺した？ 頭がおかしくなるほど殺した。本人がいれば
そうしれつと言うだろう。それくらい、感覚がおかしくなるほど、彼は抑止力として働いた。

そしてその変わりとも言える、エミヤと言う守護者もいる。そう
だ。

抑止力は単純に、世界さえ救えれば、どれほどの犠牲が出ても気は
しない。世界のための犠牲。それが、その魂達とも言える。

そうじゃなきゃ、救われない。まあそれは外から見ただが、
「本人であるオレは無自覚。エミヤ達からすれば、望んだ道だ。どう
思われようと知ったことじゃない」

だが、その雇い主達の方針は、そう言ったものならば、本当にいま
のオレは、自由か？

答えは、

「否です」

アタランテははっきり言う。

「貴方はカルデアマスター藤丸立香、人類史を守る唯一一人のマスターである可能性を持っています。だから彼と契約する吾々が、貴方と契約しています」

「そして月の聖杯戦争。ああくそ、そうか……………」

許されていると思っただが、結局次は確定しているし、龍崎アスカとして生きていても、英霊、聖杯と縁が切られていない。むしろ強く、強く強く結びついていくのではないか。

聖杯にも意志があり、正史の記録から外れているとはいえ、聖杯を持つ、彼女の行動が完全に見逃されていたとは思えない。

考えすぎであつて欲しいが、これも彼らの掌の上。そう考えると、身体が震える。

『アスカくん……………』

『アスカさん……………』

ナスタージヤ教授と司令達が、何も言えなくなる。アタランテは静かに抱きしめる。

そのまま静かに、

「……………私はこうしていても、貴方ではなく、貴方の先、藤丸立香を見てしまう……………いまは貴方に従うサーヴァントなのに」

「あの人のことが大事ってことだろ……………もう一人のオレはモテモテでいいな……………」

「……………」

アタランテは静かに、強く抱きしめる。

「この場にいる限り、私は貴方の弓矢と成り、貴方の人生、そして大切な人々を守る狩人として居続けます。これは、これだけは、貴方だけに誓う、貴方への願いです……………」

「……………」

「忘れないでください、私達は過去の貴方を見ます。ですが、けしていまの貴方を蔑ろにしない。もう一度」

静かに微笑みながら、

「もう一度貴方に会えるのなら、今度は彼女に渡しません……………」

二人の男性を見て、一人の魂に狩人は誓いを立てた。

月と太陽の加護、純潔の狩人の言葉を聞きながら、少しだけ前を見る。

「……………司令」

『……………なんだ』

それは残酷なのかも知れないが、聞きたい。

「オレは……………龍崎アスカとして生きてますか？」

それを聞き、司令官、風鳴弦十郎は腕を組み、はつきりと、

『ああッ、世界だろうが神だろうがッ、それを否定する奴は俺達が許さ
ん!! 龍崎アスカッ、例え数多くの偉人、英雄として生きる定めだろ
うが、俺の部下は、龍崎アスカただ一人だ!!』

いまが見えなくなりかけていたが、それを聞き、頷く。

いまはそれでいいと思いつながら、支えてくれる者達に寄り添うこと
にした……………

——
???

草原が広がり、雲が流れ、蒼い晴天が広がる世界。

剣が、全ての剣が、ありとあらゆる剣が地面に刺さり、草木に絡ま
れていて、空に浮かぶ者達もあつた。

螺旋を描きながら、鞘に収まる剣達。無限の武器や防具があるが、
無限と言う言葉はある意味違ふとか、なにか引っかけかかっているか
と思う。

森羅万象、武器と言う武器、防具と言う防具が空に浮かび、雲無き
蒼穹の下に広がる世界に、誰かがいる。それに呼応したように、現れ
た。

「あの世界は物騒だな……………」

そう呟きながら、静かに背を向けながら言う。

「世界が抑止力である俺を放置したが、結局やることは変わらない。だから放置したんだよ。意味なんて無いからな」

太陽が無いのに、影が何度も回る世界で、それはため息をつく。そう言ったとき、彼はズタズタだと呟いた。なにがズタズタか分からない。

「お前は変わらない、俺達はけして変わらない生き方をしている。短命？ 違う、意味が違うんだ。俺達は」

何事もなく、淡々と興味もなく、当たり前前に、

「誰かのために命を捨てる存在だ」

そう告げられたが、何も言えない。つまりあれか。

「ああそうだ、星も霊長も早い段階で死んで戻るからいいと思ってる。正直、龍崎アスカとして生きようと、人の一生はたかが知れる。なにより俺なんだ、死ぬ機会なんて山ほどある。もう場所がわかった時点でもういい事案なんだよ彼らにとつて」

酷い話だがそういうもんだとそれは納得していた。

「理想通りに事は運ばないことを祈り、理想通りな人生であることは願うよ。お前はお前だ、だがその魂の様子から見て、何をきつかけに再度ここに来るか分からないがな」

呆れた様子であり、そして静かに身体を押しして、追い出す。

「来るなども来いとも言わない、お前の人生であり、流れに任せるよ。そして選択も間違えないことを祈ろう。それまで、あの子達を泣かせるな、俺」

そして、世界が暗転した。

朝日を浴びながら、静かに目を覚まして、静かに、

「……………頑張って生きるか」

そう呟いた……………

お気に入り300突破で考えた話

一人の少年？がいた。

それは日々、周りから女物の服を着せられたりする日々の中、血の歌を歌う、歌姫達と出会う。

彼女達の中で、彼も血の歌を歌う。

だから……………

オレは剣を握って戦う、迷い、なんでであろうと、守りたいから……………

「ん……………なんだ」

藤丸立香、カルデアのマスターとして、人類史修復をし、いまだカルデアに属する魔術師であり、取り柄は時折来る魔術師達ですら逃げ出す職場に、いまだ滞在すること。

別にやめる気は無いが、各国様々な組織から頭を下げられ、けしてマスターをやめないでくれと言われている。何故だろう？

とりあえず、布団の中のナーサリー達を起こさないようにして、布団から出よう。

「変な夢だったんだけど、分かるかな？」

「……………分かると言えばね」

ダ・ヴィンチちゃんは少し固まりながら微笑み、静かに言うべきか悩む。

「君はサーヴァントと縁が深いのは分かっているね？」

「？ ええ。ですけどそれはマッシュの盾、円卓が深く関わってるからじゃ？」

「どうもそれだけじゃないんだ。君の魂、素質事態が深く関わってる」「え？」

そして静かにモニターを操作して、何時か現れた彼、特別にカルデアに来てくれた仮サーヴァント。異世界で生きている人間、アスカくんが映し出される。

「彼はいずれかの君だ」

「……………はい？」

それから、モニターで写されたモニタリング、全てがとは言わないが、魔術的なもの、根本的なものが全て一致している。

だからこそ、彼は絶対命令権である令呪が効かない。だって本人だから。

契約のパスが一時混線し、ジャックとアタランテがアスカくんの元にいる。だって彼も藤丸立香だからだ。

「聞いたんだが、どうも多くの時代で、彼は同一の人物としていたらしい」

「聞いた？ 誰に？」

「人類史を脅かす人類悪がないのに、いまだのんびりワインなりを楽しむ、英雄の王様からさ」

ああと納得してしまう。

確かに、もうカルデアは、彼が楽しむ要素が一切無いし、付き合う意味が無い。

何人か、神霊レベルのサーヴァントがいまだ、遊び半分で居てはくれているが、彼らにはいるのは異常レベルなのは、一般枠から来た自分でもよく分かる。

神霊のサーヴァントはどうしていまだ、カルデアに居続けて居るんだ？

「助けてくれマスターっ!! アルテミスが結婚式を開くって訳が分からないことを言って探してるんだっ!!」

入ってきたオリオンをとりあえず引き渡して、話を続ける。

「神霊レベルの英霊が居続けるのは異常であるし、君も異常だよ」

「そうですか？」

「ああそうだ。君は、英霊に好かれすぎてているし、なにより平然と相手が出来ているんだ。並みの魔術師は、泣いて逃げ出す環境なのにね」

ああそうなんだ？ よく分からない。

「俺でも勘弁して欲しいときありますよ」

清姫、源頼光さん、静謐のハサン。みんな何度マイルームに侵入して来るんだろう？

そう言えば最近じゃナーサリーやジャンヌリイもそうだし、お風呂じゃアストルフもおかしい。最近はおント、スキンシップがおかしい。

「彼は君を通してアスカくんのことを見てるんじゃないかな？ 君の前世、来世だからね」

「そうか……会えない人に会えないのなら、まあ少しくらいはいいですけど」

それが一番凄いなだけだねと、ダ・ヴィンチちゃんは思う。

青髭が暴走しても、冷静に他のサーヴァントで止めたり、仕留めたりするし、シエイクスピア達の創作聞いたり付き合ったり、他にはアヴェンジャーとか、おかしすぎる人間関係や微妙な関係を、綱渡りしたりとおかしすぎる。

何より恋愛関係だ。中には彼に本気な者や、今世の仲として見たりする。つまり本気でアタックする。

英霊の本気だ、町どころか国一つ滅亡してもおかしくないのに、それが彼の手により防がされている。彼の手により起きかけているのだが……

（仮にどこぞかの組織が、彼を攫うなり、彼の家族に変なことをすれば最後、世界滅亡は決定事項だから、暗黙に手を出さないと決定してる。まさに核爆弾の管理人なんだよ君は……）

本気の英霊は、本当に危険な人物から、一国の姫君や騎士と多すぎる。危険、危険すぎる、もうやだこの人。これが新規の魔術師やらが辞める切っ掛けだ。

神霊もいるし、もうやだなのだ。私は楽しいが。

「そう言えば、キングハサンやマーリンもそうだよね」

「うむ」

「まあね」

グラランド・サーヴァント、彼らにその話をすると、隠す気も無く、龍崎アスカはいずれかの自分と話してくれたし、彼の周りの出来事、歌姫のことも話してくれた。

ちなみにキングハサンは近代家具はいらならしい。

マーリン？ 家具欲しいらしいけどアルトリア達が怖いから、協力できないんだよな。アルトリアリイは気にしてないんだけどね。

「アスカくんは無事だといいいけど……」

「マスターは少しばかり気にしすぎと言うか、君はいいのかい？ もしかすれば、どこかの『藤丸立香』の代役として、いまここにいるんだよ？」

「ん〜実感が無いし、それでももう『俺』は『俺』です。例え別の『藤丸立香』がいて、その変わりだとしても、いまここにいるみんなとの絆は『俺』へのものです。ならいいですよ。大変なので次はやめて欲しいですけど」

苦笑しながらそう言い、それにマーリン達は苦笑する。

「なるほど、だからとも言えるか……」

「そうみたいだね、だからこそか」

何かに納得しながら、二人は俺の言葉に満足したようだった。

ちなみにマーリンがテーブルいっぱい電子家具のチラシを広げていたけど、無視したよ。

「マスター♪♪」

「あれ？ アストルフオ？ どうしたんだい」

「うん……ボク、マスターにお願いがあるんだ」

なんだろうと思いつつ、頬を赤く染め、もじもじするアストルフオ。

覚悟を決めて、上目遣いで、

「今日、一緒に寝て良いかな……？」

「ん？ 別に良いよ。ナーサリー達もいるし」

「う、うん♪♪ ありがと、マスター♪♪」

それにえへへ♪と嬉しそうにはにかむ。

「もう知ってるみたいだけどね、ボク、アスカのことが好きなんだ」

「……………ん？」

そう真つ赤になりながら、ほっぺを両手で覆いながら、嬉しそうに

している。

「まさかここまで好きなんて……前の彼は、求められれば返すくらいだったけど、今度は違う。ボクは彼が好き、好きで好きでたまらないんだっ」

そんなのはつきり告白するが、彼と君は男だよ？

「好きに性別は関係ないって言ってたっ!!」

誰だ、いますぐ自害させてやる。

「マスターボク頑張るよっ♪ いいお嫁さんになる♪♪」

待つてアストルフオ、君は男性で彼も男性だ。そして俺の来世なんだ。

ここで止めないとダメだ、頑張つて説得するが、恋は盲目というかなかなか骨が折れる。

俺が俺として、もう一人のオレのためにできることは、親友の目を覚まさせることだと知り、俺は頑張る。

アスカ、ジャックとアタランテをお願いするよ。

「とりあえずメディアに次会ったときのために、ウエディングドレスを作つてもらうんだっ♪♪」

「呼ばれた気がして」

「どこから出てきたのメディアさん!」

「……………ん？ 寒気がした」

お風呂場でジャックの髪を洗う。馬鹿な、風呂場で何故に寒気が？

「おかあさん？ まっだっ」

「ごめんごめん、いま泡落とすから」

「んっ」

そう言い、お風呂を共にし、髪を洗うオレ。

いま平和で助かるな……………

「くっくっく……………」

喉を鳴らしながら笑う、その様子に親友は困った顔で見っていた。

「楽しいかい？ ギルガメツシュ」

「ああ、此度の戦乱が終わり、すぐに座に戻らなくて正解だ。あれが別世界に現れるとはな」

「あれ？」

エルキドゥ、唯一ギルガメッシュと対等に話せるサーヴァントは首を傾げる。

「……………さすがにそうそう簡単に言えぬが、一言で言えば、全ての英霊とは言えないが、神霊と関わり合いがある者だろう」

「そうだろうとも言いながら、暇を潰す。いまはそれだけでいいと思いなながら、

「我もまた分からないが、記録を僅かに覗いた。まさかあそこまで別可能性の者達と深い関わり合いがあるとはな」

様々な英霊と関わり、偉業を成す男。良いも悪いも無く、恐ろしい偉業の数々。

「……………」

黄金の鎧を着込む王は、目の前の光景を見据える。

いまはいまのマスターしか見えない者達が、アストルフオ説得に骨身を削っているが、果たしてどうなるか。

「貴様、何を企んでいる？」

「ふん、気にするで無い」

いつの間にか現れた赤い外套の者に、目を合わさず答える。

錬鉄の英雄もそう言われながら気にせず、ワインを己の蔵から出して飲む。

「……………」

そして、そして、そして大変珍しく、この王が他人を気遣った。

小さな小さな声で、かつ、結界の道具すら使って、念入りに、そう念入りに確認して、さらに確認して二人に言う。

「あれは英霊と縁深い、マスターと言う形では無い。セイバーと、若き日のお前のような、青臭い関係だよ」

「……………なに」

「けして、いいかけして悟られるで無いぞ。我とてこれで抑止力の大战が起きるのはいささか笑えん。いまは静かに酒を楽しみ、時代を楽

しみたい気分なのだ。まさか藤丸立香、龍崎アスカが自分の物語の相手と知れば、あの者らの暴走は面倒この上無い」

そう言われ、錬鉄の英雄のBGMはホラーが鳴り響く。

英雄王の目の前にいるのは、ifのサーヴァント達がいる。

ロンの槍を持つ女神や、女神のままの三姉妹の末娘。そしてリリイ達。

まだいる、正史の記録や流れからこぼれ落ちた英霊達。それを冷や汗を流すだけではなく、静かに食事をするブリュンヒルデもいるのだから……

「まま、まさか」

「まさかも何も無い。あれは、そう言う役目よ……」

少しうんざり気味に言い、はつきり言う。

「あれの表は英雄としての活動は、悲劇からあれらをすくい取る役目だ。そして悪もまたしかり、怪物として現れなければいけない、そういう役目だ」

「彼の役目はなんなんだ?! いくらなんでも」

「貴様が嫌いなものだろう」

「俺の嫌いなものだと?」

うんざり気味にそう告げて、静かに告げる。

「あれは普通なら感づかれることは無い。唯一の救いはそこだ、記録を覗ける我などぐらいだ。だが知られる恐れがある、別軸で自分を救う物語の相手。それを知ったら……さすがの我也、気がめいる」

そう言い結界を静かに解く。

錬鉄の英雄は心の中で推測する。

(龍崎アスカの偉業は、悲しみ、悲劇、絶望、破滅の回避だ。ああそうか)

ifの彼女達は孤独だ。それを救うと言うことはそういう意味なのだろう。いまのマスターもそのようなものを求められている。なら前世そういう関係だと知れば……

寒気がした。もし本当にそんな物語があり、それで彼女達の悲劇を回避する主人公と知れば、その記録を記憶にしたら……

慣れた。

それは悲しい人の習性だ。まさかこんな事態に、慣れてしまうなんて……

白い蛇、大蛇が自分に巻き付いてくる。だが上半身は、可愛らしい、一人の少女だった。

「ああ、ま・す・た・あ♪♪」

嬉しそうに陶醉し、その頬を撫でながら密着する彼女。吐息も何も感じるが、胸も当たっているが、なんだろう、もう疲れたんだよ清姫。

「清姫、オレは龍崎アスカであつて、君のマスターではないよ」

「いいえ、この清姫と婚禮し、未来永劫永遠を誓い合つたお方なのは間違ひありませんよ♪　もう旦那様はお茶目さんでしたね、清姫のうっかりでしたっ」

可愛らしい微笑むが、色々当たつたりするが、もう無視しよう。恐怖が勝つと恥じらいなどの感情は消し飛ばらしい。

ここ最近色々あつたから、慣れたよ。

「清姫、オレは藤丸立香の生まれ変わりかも知れない、けどね、オレはオレだ。オレの人生を歩みたいんだ。だからこういうのは藤丸立香にして」

他人と言うか、前の自分に全てを投げ渡すと言う暴挙をしながら、それに、うつふふと微笑む。

「もう旦那様だったら、この世界に清姫がないではないですか。旦那様一人になんか——絶対にさせませんよ——」

背筋が凍てつく一言。それとはしたないですがと一声かけて、上着を脱がそうとする、令呪に触れる気だろうか抵抗。

腕を挟まれながら、それでも抵抗する。

「旦那様？　なぜ嫌がるのですか？」

「清姫、オレがいる世界では英霊はいてはいけないんだよ。君が来られても困ってしまう」

「？ 私と旦那様は二人で一人です。なにを言っているのですか？

今後私清姫は未来永劫、あなた様のおそばに居続けるのです。冥府に行く際は共に向向き、永遠を共に。ああ安心してください、けしてお邪魔にならないよう、気配を消します」

そんな夢の中、前の時は子供は四人でしたね、次は何人生みますか？など、記憶ねつ造もしていて、オレは必死に抵抗する。

「落ち着こう清姫、オレは君のことは大切だけど、それはラブじゃなくライフ。友人として好きなんだよ」

「まあ愛してるだなんて……………」

頬を赤くするが、全身、身体に巻き付く蛇が、少しだけ悲しいなと思う。

「清姫……………」

本当は嫌がればいいんだろうが、ここまで来ると冷静に対処してしまう。取り乱せばもう少し抵抗するのだろうか、自分は彼女がここまでおかしくなったのは知っている。

だからこそ、本当に拒絶が出来ない。

バカで愚かな者。それが自分なのだろうが、

そんな気持ちで色々彼女に捧げる気はないため、抵抗する。

そんな日々が一週間続いた……………」

正月終わり、司令室でゆっくりするアスカ達。

ぶつちやけ、アスカが司令室で働く人達に、少し遅めの正月料理など作るために着たのだ。響を始め、未来や翼、クリスや奏。監獄から出て今度の新学期、リディアンに通う切歌や調、セレナもいる。

アタランテとジャック、女性メンバー+オレ全員が着物を着ていて、その中でお雑煮などを食べる。藤崇さん達は少しだけ疲れが取れて、少し休まる。

今後の方針で組織名が変わったり、手続きしたりと色々忙しいのだ。

「おいしいねお雑煮、異世界でも向こうでもだいたい同じだと思ったけど、味がこんなに違うのか……………」

「マーリン、テメエはアヴァロンに帰ってくれない?」

グランド・キヤスターがちゃっかりいて、アサシンのあの人、首取りに来るんじゃないかね?と言うくらいに、暇つぶしに来るんだ。

異世界の事柄に関わらないようにして欲しい。

「いいじゃないかッ、向こうの君がなかなかパソコンとブルーレイ買ってくれないんだよ!! スカサハも文句言うくらいにさ」

「知らないよ……………」

割烹着着て、火加減の調整しながら煮詰める。お雑煮うまそうに食べる切歌達は呆れながらその様子を見る。

「あの人本当に、伝説の魔術師デスか?」

「信じられないですけど、本物ですよ」

セレナはこれでも、王の娘として生まれていた子に、身体を奪われていて、色々知識はある。

パソコンくらいあるんじゃないか?と聞くと、

「古い方なんだよ、ノート、ほら、いま出すから……………」

「食卓に出さないでくれよ……………」

そしてついだから向こうにテレビ電話しようとか言って、セットし始める。

それ以外に聞きたいことがあるが、どうも答える気は無い。

雰囲気からしてこの調子だ、口に出してはいけないのだろうか?と
思いながら、

教会が映り出す。

「……………ん?」

マーリンですらよく分からず、首を傾げた。

「おかしいな? カルデアに繋がるようにしてあるのに、なぜ教会?」
そして流れるのはまさに祝福する音楽が流れ、そして花嫁が現れ、
着物を着ていたアタランテが吹いた。

吹くよな、オレも吹きかけた。

綺麗な美女が、花嫁姿で、まさに現れ、その傍らに、

『いやだああああ助けて、誰が助けてマスタああああ』
熊が泣きわめいていた。

「オリオー……ン……ン……ン」

『この声は誰だッ!? 誰でも言い助けてくれええええ結婚は嫌だよおおお』

「アルテミス様ああああああああああ、なにしてるんですかあああああ?!!」

『あら? アタランテの声? 結婚式よッ』

ドヤ顔で言われ、回りも吹き出した。

「あ、ああ、アルテミスって、神様じゃないですか!?!」

「響すら知ってるか!! そうだよアルテミスだ、アタランテが信仰する女神であり、逸話では誰とも結婚せずなんだが、オリオンのことを愛してるんだ」

「確か、それでも神話で色々あって、恋人と結ばれることが無かった女神様だよねアスカ?」

未来の言葉に頷きながら、

「だがこの世界のオリオンは英霊の座に登録され、アーチャーとして英霊召喚対象なんだが、その」

「…………アルテミス様は、その際浮気するオリオンを監視するため、限界まで神霊を下げに下げ、現界してるんだ……………」

「ちなみに、それでもサーヴァントとしての格はアルテミスに奪われて、オリオンはその、熊の方なんだ」

『うおおおおお、これどう考えても本体アルテミスだよね!? 異世界のお嬢ちゃん達から見ても本体俺じゃなくて、アルテミスだよね!?!』

響達はどう言えいいのか、アタランテは顔を隠しながら、カメラから外れていく。信仰しても恥ずかしいのだ。

「あーそれでアルテミス様、まさかと思いましたが、結婚式を?」

『イツエースっ♪♪ 思いついたのよっ。英霊の座に還れば全てリセットされるんだから、現界するたびに結婚すればいいじゃないかってっ。私は永遠にオリオンを愛し、永遠に結婚し続けるの♪♪』

『助けてええええええええええ』

「ああ、永遠に追う追われる立場からそう言う心境になったと……えっと、おめでどう?」

『ありがとうっ♪♪』

『助けてー……』

無理言わないで欲しいと、お雑煮を食い始めるマーリンとオレ。

異世界にいれば巻き込まれる心配はない。安心だ。

「つて、待ってくださいッ。純潔の女神が結婚していいのですか!？」

「アタランテ、無理言うな。無理だ諦めよう」

「で、ですがマス、そうマスターッ。そっちの、藤丸立香マスターはどこに!？」

「……もの凄く嫌な予感ッ!! もう一人のオレはどこにいるの!!？」

『………マスターああ………』

オリオンが悲しそうに声を出すと、バックから爆音と共に、サーヴァント（女子）が現れる。

『おのれええええええええええ、邪魔をしないでくださいッ。マスターとは私が結婚するのですッ』

『海賊なめるなあああああああああ』

『母は許しませんええええええええ虫めええええええええええ』

『あつははははは』

「絆値が高くなるとそう言う扱いになるかそう言った関係を望むかおもしろ半分のサーヴァント全員が宝具片手に現れたああああああ」

そしてその傍らにいる藤丸立香。もう一人の自分が簀巻きにされている。うわああ………

「………マーリン通話切ろうか」

『助けてよマスターッ、もう一人のマスターでしょッ。もう男性サーヴァントはやられてるんだッ、後は悪かもう世帯持ちとかしかいないんだよおおお』

お願いと泣きわめくが、無理なことを言う。

「オリオン、オレが言えるのは一つ。シェイクスピアッ、来世か前世のマスターとして命ずるッ、彼らに物語りを語ってあげてくれッ」

『あつはははは、そう言われれば仕方ないな——っ』

『ああああああああああ』

悲劇を書くことが好きな人にそう言うしかなく、紅い槍を二本構えている人とか見ながら、もう無理な案件だと理解する。

もうギルガメッシュレベル、トップサーヴァント、世界規模レベルの争いじゃねえか関わり合いたくない。

『いやだいやだいやだああああ結婚はいやだよおおおお』

『ダーリン、これからも次からもその次も次も次も次も次も次も次も次も次も——……………永遠に捕まえて、結婚しましょうね♪』

『おおおおおおおおお』

その様子を見ながら、やっと割烹着を外しながら、やれやれと思いい、「どんなに言ってもオレは異世界の龍崎アスカ。サーヴァントの物語に関われないしな……………」

『ノオオオオオオオオオオオ』

そう叫ぶとき、乱戦の中が静まり、扉が開く。

ん?と思いい、それを見て、顎が外れかけた。

そこに現れたのは……………」

『アスカ……………』

ウエディングドレスを着た、アストルフオだった。

全員が完全にあつけにとられ、アストルフオは静かにブーケを両手で持ち、頬を赤らめて、オレを見る。

『……………ボク、マスターのことは大好きだよ。だけど、ボクの気持ち
は、アスカ、君なんだって、分かったんだ』

「……………」

——立花響

いまアスカがフリーズしてる。もう男性に告白されたときよりも酷い。

『アスカ好き、大好きっ。アスカが望むのならボクは』

「待てアストルフオ、オレとお前は男性だっ男だ同姓だ英霊と抑止力

だお前は藤丸立香のサーヴァントだ結婚なんて無理だッ」

『アスカっ、ボクは本気だよ!!』

見た目美少女がウエディングドレスを着ての告白だけど、アスカは首を振る。

「アストルフオ、オレにとってお前は大親友で命の恩人だ!! やめてくれ」

『アス……カ……なんで、性別なの!? 性別なんて関係ないよっ、ボクは本気だよアスカっ』

「藤丸立香に向けてくれ」

『なにもう一人の自分になすりつけようとしてるの!?!』

『ボクはアスカじゃないと無理なんだっ!!』

見た目可愛いんだけどなど思いながらと思いつつ、お雑煮を食べると、白い着物の、きよひーさんが現れる。

『なにを言っているのですか!? その人もこの人も、魂の枠組みすら越えて愛を誓ったのはこの清姫です!! もうすぐです、もうすぐ彼の下にも出向きますし……』

「あの、夢に出てくるの辞めてくれないかな? 寝込みはほんと、そっ

ちのだけにして欲しいんだけど」

「えっ? そんなことしてるの彼女」

それに全女性サーヴァント（藤丸立香が好きな）者達が、

『ふ・ぎ・け・る・なッ!!』

魔力らしい何かが放射される中、もはや他人事のようにしている。

『必ずその世界に行きますええ行きます。もうすでにこの身に宿ったマスター達の愛の力で異世界の壁を越えて見せますっ♪♪』

『ならば母の愛を見せてあげましょうッ』

『させるかああああああああああああああああああああ』

『それなら』

『海賊らしく奪い取る!!』

『させませんッ』

『はああああああああああああああああああああ』

凄いな、画面越しが戦場レベルで宝具が飛び交う中、アストルフオ

さんがいまだ愛してると言う。無理だからねと言い続けるアスカ。

『アスカは誰か好きな人がいるの!?!』

『それは私のことですねっ』

「……………」

アスカが助けを求めるようにこつちを見る。えっ、どうするの？

「おい、誰か彼奴の恋人ですって言うのか?」

こそこそと私達が話し合うんだけど、少しびっくり。

「以外だな、雪音が先にそう言うとは」

「……………毎度悪夢や大蛇に巻き付かれた跡がある彼奴の身体見てれば、早くどーにかしねえといけないのが分かるからな……………」

え? そんな事態なの? もの凄く疲れ切ってるし、そう言えば最近ホントおかしいからなアスカ。ジャックちゃんを甘やかすのが羨ましいくらいだよ。私もそれくらい甘やかして欲しいよ。

だけどと調ちちゃんが、

「だけどあの人嘘は禁句なんじゃ……………」

「あつ、それもそうか」

すまなそうに私たち女性たちはアスカを見る。だよねくと顔をしてみニターを見る。ものすごい抗争の跡に、師匠達が青ざめている。

「いやだめだからねっ、もうこれ以上サーヴァントこの世界に来られても困るからね!! さすがに抑止案件だからやめて」

そんな会話でアスカに治癒の魔法をかけてくれた。衣類の下に大蛇がはった跡があり、よく耐えたねアスカ。

「藤丸立香もこの調子で助けてやれよ」

「無理言わないでくれよっ、あれなんか歓楽街のツケ支払を頼んだアルトリア達みたいな現状に関わりあいたくないよ!!」

「デメエいっぺん殺すぞ残機あるからしていいかマジでっ」

最後には来世であるアスカが、暴力じゃなく優しいお嫁さんがいいなくという発言を聞いて、宝具というものを下して、料理対決にかわった藤丸さんが、今度はアストルフオさんの説得を受け持ってくれて、今回の騒動は収まった。

Gの番外編2話・日常

トントントントン………静かに料理、今日は和食。

魚と自家製みそで、みそ汁など、調整しながら、漬け物を取り出すと、

「来たぞ〜」

「あつ、クリス。もう少し待って、いま作るから」

「ん〜」

そう言いながら、リビングに座るが、つまめるように、軽い浅漬けが用意されている。卵焼きもいい具合に焼け、お弁当も用意しておく。

朝は和食なら、昼は洋食と、自家製パンは無理なんだよなと残念がりながら、サンドイッチを用意して、お弁当を用意。クリスは女性だから、見た目もいいものにしなればいけないなど、最近は料理本を攻略本と共に買う。

そうしていると、クリスがこっち見ている。

「どうした?」

「……………」

静かに、

「お前、似合ってるぞ」

「? ありがとう」

そう、エプロン姿のオレを褒めた。

休みの日は切歌と調が家に来る。もう外で活動できるようになつてから、よく来るようになった。

「いらつしゃい、ゲームしか無いけど、いいのか?」

「別に良いデス、美味しい料理食べに來ただけデスから」

「アスカの料理食べたい」

そう言われ、なんか嬉しいなと思しながら、時間も時間だからとスパゲティを作り始める。そう言えば多めに作ったトマトソースがそろそろ危険だった。

家族が増えたため、まだこの辺りの消費のペースがまちまちだな。いずれ本当のマスターの下に帰るしなと思いつながら、考える。

「よし、これを早めに消費するか」

「アスカ、洗濯物平気デス〜？」

「今日、少し雨降るから、早く干さない」と

「あつ、そうなのか」

「私がしてあげるよ」

「ホント、ありがと調」

そう言つて、オレは自家製ベーコンを出そう。二課にいたから、そういう専門道具とか充実してるんだよね。

感想も聞こうと、切歌はこちらを見ながら、目を輝かせる。

「……………少しだけだぞ」

「ホントですか!?!」

調は現在洗濯物を片づけに向いてる。正直男物と女物が混合している我が家の洗濯事情。泣ける。まあいまはアタランテ達もいるんだけどね。

軽くベーコンを厚めに切り、焼く。いい感じだなと思いつながら、ハシで掴み、

「はい、あーん」

—— 暁切歌

いま目の前にいるのが男性じゃない気がするデス。

エプロン姿、あーんさせる仕草も含めて、女性デス、可愛いデス、卑怯デス。

けどどうしてだろう？ どうして少しだけ頬が赤くなる気がするデス。

(私はそうじゃないデス私はそうじゃないデス私はそうじゃないデス……………)

「? あーん」

そう言われるがまま、美味しそうデスし、静かに、

「あーん」

美味しい、脂と肉の甘さなど、お店に出そうな物デス。

「おいしいデス♪」

「そう……………よかった」

そうはにかむアスカ。

「……………」

私は正常デスカ？ 異常デスカ？ 分からなくなるデス……………

——月読調

アスカの洗濯物は、男性服と女性服があるが、下着は探してもトランクスしか無い。あつ、ちなみにこれはすでに洗濯済みの物。

さすがにアスカは私に、下着を洗わせる気はないらしい。アタラシテさん達のは見当たらない。本人達に任せて、自分は一切関与しないだろう。だけどこの前、翼先輩の下着類はしていたと聞いたような？

畳まれて仕舞われていた物を確認し終えて、私は洗濯物を洗濯する。

よく見れば、アスカがよく着る物もある。

……………

「……………」

私は静かに洗濯物を抱きしめ、顔を埋める。彼のおいを感じる、まるですぐそばにいてくれるようで安心する。

……………

よし洗濯機に入れよう。

時々フイーネこと、了子さんとは実は話したりする。本人曰く、もう悪人として色々やっておきながら、いい人やる気無い。と言うが、「これ以上話しかけるんなら、お姉さんの恋バナ百物語するわよ……………」

そう言うので、

「……………アスカの話が聞きたい」

そう言つて、色々聞いた。ためになつた。

正直、みんなには悪いけど、私はかなりリードできる。先輩中の先輩がいるのだから、勝てる。

「洗剤も気を付けてる、了子さんの言つてたとおりだな」

あの人、なにげにここを盗撮してたらしい。その際の話もよく聞いた。

「…………アスカは家事とかできるのに、家事できる人がいいんだよね…………」

そう呟いたらしい、そう独り言で言つていた。そして一人暮らしが長く、話を聞けば、前世も一人暮らしだからなのか、私達のご飯食べにくるのを受け入れてくれる。それが嬉しい。

「あつ、そうだ。部屋の物もかごに入れておこう。部屋に無いか聞いてから」

そう言つて、部屋では食器の並べている切ちゃん。料理しているアスカに、部屋に入る許可を取り、場所は前に聞いているし、了子さんにも聞いている。

部屋の中にはいると、ベットと、掛けられた男子制服がある。これもこれで格好いいし、可愛いことは見たことある。

洗濯物らしい物は、隅に纏められている。ちなみにしわにならないようにされていて、観察していた了子さんも、本当に男性か信じられないらしいほどめめらしい。

「…………そう言えば、年頃の男の人が持つてる物も買わずに、ゲームとかにお金使つたりしてるんだよね。二課のお給料は別にして」

その辺も彼は別にしていらしい。料理器具など、みんなのために使うのが二課でもらつたお金で、ゲームなどの趣味は親からの仕送りをやりくりしている。

本当に、女の子に興味ないのだろうかと本気で思われるほど、そう言ったことが無いらしい。少し心配だ、あのまま女の子になつてしまったら、困る。

ベットに少しだけ倒れる、しわにならないように後で、直さないといけない。

「…………アスカのにおい…………」

ほっとする、顔を埋めて、この幸せな時間を感じる。なんでだろう？ 彼がいると思うと、本当にほっとして安らぐ。

このことを言っても、苦笑されてしまうし、それは表の人たちに聞けと言う。そんなこと、恥ずかしくて聞けない。

「……………」

その時、顔に銀色の長い髪を見つけた。それを静かに持ち、考える。いや考える必要はない。あまりにも長すぎる。

「……………負けない」

そう言つて、髪の毛は捨てておいてしわも戻し、洗濯物はかごの中に入れておく。

アスカの作る手料理は美味しい、切ちゃんはソースが口元について、彼に拭かれて少し羨ましいけど、時々、違うデスって、何が違うんだろう？

——龍崎アスカ

夕暮れ時になり、クリスマスも来ない。暇だなと思っていると、誰かが入ってきた。

鍵があるのに入るなんて、一人しか思いつかない。

「アゝスカ♪」

「響」

そう言つて、抱きついてくる幼なじみ。ここ最近、こんな感じで懐いてくるが、正直平常心保てる自分が枯れていると思う。胸が当たつてるから、響のことを逆に心配する。

「今日はアスカのご飯食べたいんだ♪ いいかな？」

「はいはい……………残り物でいいか？」

「うん♪」

最近スキンシップが酷いのは、オレが真つ二つになって戻つて以来だ。

よく考えれば、オレはあのハサンに物の見事に殺された。そんな光

景を見た以上、響は表向きはこんな風にのんきだが、実際は酷かった未来に言われた。

「アスカ」

「おいおい……………」

魚を蒸し焼きにしつつ、美味しいの作ってる最中だから、背中から抱きつくのは止めて欲しいが、少し妙だ。

「響?」

「……………」

本当に密着過ぎて、少し驚く。またかと、心の傷は深い。

「アスカ……………」

泣きそうな声でそう言っ、ここにいることを確認する。本当に酷い時があるので、何も言えない。

「響、オレはここにいるよ」

「…………アスカ」

そのまま抱きつかれたまま料理をして、料理を出す。それも、

「はい、あーん」

「あーん♪」

そう言う扱いで、少し幼児退行してる気がするが、未来から言わせればまだマシだと言う。本当に申し訳ない。

「アスカ」

「ん?」

「今日泊まる♪」

…………我、一番の問題が起きたなり…………

「……………あああああ、説得に時間食った……………」

『響の送り迎えありがと、いま少し心配してるけど、シャワー浴びてるから』

未来に電話しながら、明日の下準備に味付けしている。明日は埋めた後、山菜なり採って帰るそうらしいので、楽しみにしよう。そうしながら、

「未来にも迷惑かけてるよ、今度何か作る」

『うん、アスカの料理美味しいからね』

少し嬉しそうな未来。そう言えばと、

『なーんか、昔はアスカの家に泊まっても何も無かったのにね』

「オレだけ男だし、いまの年頃の子が泊まるのはね。なにより、オレは前世があるから、爺臭いよ?」

『あー』

納得される辺り、あるらしい。そんな会話をしながら、

『けど関係ないよアスカ、いまはアスカだもん。前世の分まで、幸せに成らないとダメだよ』

「ああ、じつちゃんにも約束したから、そのつもりだよ。幸せか……ま、いまが幸せだから、高望みはしないけどね」

そう言ったとき、未来は何か息をのむように黙り込む。

「? 未来?」

『…………鈍感だよね、アスカって』

「はい?」

『…………知らない』

そう言われて切られた電話、なんだと思いつながら、聖遺物を見る。

「はあ…………こんな日々で、いい訳じゃないんだけど…………どうすればいいんだろうねアストルフオ」

知らないよと言われた気がしながら、一日は終わる。

翌日、帰ってきたみんなを加え、山菜のパーティーしたら、

「酷いよっ、私じゃなかったら死んでるよ!!」

「おかあさんごめんささい…………」

「申し訳ない、確実に射貫いたと思いましたが」

「チツ、令呪は一日回復システムか?! ジャック宝具ブーストして」

「もうやめようよ〜」

「私はただ、君たちの世界のだから、繁華街のツケを渡しただけじゃないかっ。気を使っていかがわしい店は行ってないよっ、キャバクラ程度」

「仕留めるみんな」

「異議なし」

「どのマーリンも屑です」

セレナの一言により、ほぼ全員が聖遺物を手に取り、ジャックとアタランテは宝具を手に取り、響と未来はあわわしている。

「なぜ!? お酒飲んだだけだよほんとッ。居酒屋巡りしただけだし、ほんと」

その後念入りに仕留めました。

はぎ取ったもので、携帯があつたのでメールで、回収するかトドメ刺しておきます?とおくると、アルトリアからゴーサインが送られ、マスターからは待つてくださいいと丁寧なメールが来た。

Gの番外編3話、響

目が覚める、カーテンから透き通る朝日の中、目を開くと、
「すうう……………」

静かに眠り、抱きついている幼なじみ、立花響がいる。

まずは落ち着こう、自分の名前は龍崎アスカ。転生者であり、その魂は特別品らしいためか、何度も死んだが、ギリギリで蘇り、いまは健康そのものである。

いまは同居人にサーヴァント二騎いて、アサシンであるジャックはいまはアタランテと寝るくと言つて、そっちに出向いた。正直、そう言われた際のアタランテのご機嫌度は限界突破してた。

話を戻そう。実はこの幼なじみの前で、肉体真つ二つになる瞬間があつたり、異世界関係でまた命狙われたり、とあるバーサーカーが夢に出て、蛇が巻き付いた痣を全身につけたりと、色々心配させることがあつた。

うん、色々心配させすぎた。帰ってからというものの、妙に依存性が高まったのは分かっていた。

だがこれはどういふことだろうか？

「……………鍵は掛けたよな……………」
「ん……………」

ぎゅと抱きつく幼なじみはもちろん女性、こっちはアストルフオによく似ているが男性である。寝間着はいつもシャツや短パンと薄着であり、響はどうだろう。外に出られる服装ではあるな。

だが色々まずいです。

「とりあえず、脱出するか……………」

そう思い、冷静？に対処する。もしこんな場面、隣のクリスに見られたりすれば終わる気がする。響とは幼なじみであり、家族ぐるみで仲が良いだけである。それだけだ。

と思いつながら、完全密着する響の手に触れると、

「あすか……………」
「……………」

起きたかと思うと、より一層強く抱きつく。

「……………響？」

「離れたくない……………」

「いや、これまずいから、離れて」

「やゝ」

そう言つて顔を胸に押しつけてぐりぐりとおいを付けてくる。どうしよう。

(幼なじみに与えた心の傷が、思ったより酷い……………)

幼児化に近いほど精神が安定せず、考え込んでいると離れないように、乗る形になる響。だから、

「響、オレの見た目は女性のように見えるけどな、そのな、オレは男だ」

「いいじゃん……………昔はこんな風だったもん……………」

完全に起きた響はぶくたれながら、顔を見せずに言うが、まずいんだよ。あのジャックに懷かれて破顔した、アタランテレベルを超えてまずいんだよ。

「いまと昔は違う、オレ達は高校生だし、オレの中身おじさんだからな」

「えゝ……………やだ、離れないもん」

それからご飯作るからとか、色々言つて、ようやく離れた。色々疲れる朝だった。

(そして学校だった……………危なかった……………)

なにげに着替えは持ってきてた響。未来に聞くと「だから朝いなかっただね……………」と少し怖かった。

クリスはもつと怖かった、襟を捕まれ、朝の出来事を説明するように怖かった。

アタランテ？ ジャックが起きるまでもものすごく幸せそうな顔してたよ。写メっておいたぜ。

しかし着替え中もまさかドアを開けようとしていたり、何度も自分の名前を連呼したり、さすがにまずい。

(奏さんに相談……………おもしろがりそうだから……………)

しかし、なぜこうなったかは自分の責任がある。そりゃ、目の前で両断されたんだから仕方ない。こっちは意識すら消し飛んだ一撃だったか……………

「はあ、だからって」

このままあも密着されるとまずい。響はもう女の子である、男であるオレにそんなに接していいはずない。

そう思う中、昼休みはぼくと過ごしていた。

そ・れ・が、いけなかった……………

放課後、さつきと帰ろうとして家に向かう中、一度足を止めて、携帯を確認すると、

「……………えっ……………」

もう一度確認する。響からの着信が画面いっぱいである。休み時間からずっとかけて、そしてギリギリまでかけ続けたらしい。

何かあったかと思うが、それじゃない。内容は何してる？ どうして返事してくれないの？ ねえどうして？

そんな内容が、延々とつづられていた……………

『家で待ってるからね』

急いで家に帰ることにした。

「おうお帰り」

「お帰りデス」

「お帰りなさい」

「お帰り、アスカ」

「おかあさん♪」

「お帰りなさいませ、マスター」

何故クリス、切歌、調、響がすでにいる。アタランテは麦茶を出していて、ジャックはクリスの膝の上。

そしてまだ学校に通っていない二人と、隣が家のクリスはともか

く、響は私服なんだろう。聞かないよオレ。

みんな自分家のように過ごす中、そこはいい、鍵もこの際聞かない。こうしてみんなと過ごす。

「でだ、響、気のせいかな泊まる気じゃないよな？」

「あつははは、やだなくアスカは」

そう言いながら、枕とか、寝間着とかがある中、

「そんなの当然だよ未来が来ないから、アスカと一緒に寝る」

オレはこのときばかり、戦慄した。

まずその場にいたクリスマス達に、説得するために二人つきりにさせて欲しいと言って、いまは自室で話し合う。

だが響のあの言葉を聞いた時の三人の目が怖かった。

「……………響」

「ん？ なくにアスカ？ もう寝るの？」

どうも頭のねじが飛んでいる。分かってます、自分の所為です。

「……………悪かったッ」

土下座した。もうこれしか手がない。

その時、世界が止まった気がした。なにも起きないため、なんだと顔を上げたら、

「……………やだよ」

そう呟き響がいて、少しだけ罪悪感がある。

「未来と一緒によく寝るんだ、だけど、思い出すの。アスカの血が私にかかった感触が、アスカが二つになったのが、だからやだよ。今日は泊まるうんずつと今度は未来も泊まるもうやだんだよ私もうアスカがアスカがッ」

泣きそうなほど大きな声で叫ぶ、それを静かに抱きしめる。

「響……………」

「行かないで……………どこにも行かないでアスカ……………」

「オレはどこにもいかない、けどな響」

「少しだけ……………少し、落ち着いたらいつも通り、へいきになるから……………」

この場合オレはどうすればいいんだろうアストルフオ。そう思う中、それでは、

「悪い、けど昔と違うんだ……オレは男で、響は女の子だから……そのな」

「大丈夫ッ、アスカも女の子になればいいんだよッ。ほら、パジャマ持ってきたよッ」

「……………そういう問題じゃない」

「……………アスカ……………」

これは平行線のような気もするが、その手を握る。

「なあ響、信じてくれ」

「アスカ……………」

その手を包み、泣きそうな幼なじみに向かって、

「オレは諦めない」

はつきり、オレとして、答える。

『『オレ』達は諦めない』

その時、なんで『達』と言う言葉を使ったか分からない。だがそう答えた。

「響が泣くなら、みんなが悲しむなら、必ず戻ってくる。いまのオレは、オレ達がいるんだから、絶対に帰ってくるよ」

そう言つて、すぐにまた抱きしめる。

「だから信じてくれ……………な」

その時響は少し驚いてはいたが、静かに考え込みながら、

「……………約束、だよ……………アスカ」

「ああ……………約束」

そう言い合いながら、静かに微笑み合う。

響は結局の所、しばらくは接触は強かったが、少しは緩和した。

だが、なんでオレは達と言つたのか、いまだ、分からなかった……………

Gの番外編4話、GからGXに入る前に

ある日、頼まれた。

だから決意して頼みを聞くことにした。

だがマーリン覚えてろよ。

人理継続保障機関カルデア。正直、魔術師と言う、人理を考慮して、神秘の深淵にたどり着けるか？と疑問に思う生き物達が、何を言っているか分からない。

そんな場所に、ただの数合わせで来たマスター候補、藤丸立香。

度重なる事件の結果、カルデアにて最後のマスターとなり、人理を修復し、偉業を成したマスターである。

標高6000メートルある雪山にて造られた施設にて隔離された施設にて、彼は多くの英霊と契約して、今もなお健在する。

そして、

「えー一時、自分のパスになったアタランテとジャックの契約状態を検査するために来ました、龍崎アスカです。アストルフオの姿で男性です、皆さんには詳しい話を知らされていると思いますが、よろしくお願いします」

三日間だけ、カルデア滞在。怖いとしか言えない中で、藤丸立香は休暇と言う名前で、家に帰るため、日本に帰国。

そしてとある盾の少女は、マーリンがアヴァロンに呼んでいる。となっていた。

まあいまはいい、いま問題なのは、

マスターの来世の魂。

令呪は無い。

美少年のマスターである。

が自分の前にある。

と言う顔のサーヴァント達であった。

(響、オレは無事に帰れるだろうか?)

少し涙が流れかけた。

ダ・ヴィンチちゃんへの検査は早く終わり、やはり調整すれば戻ら
しいし、魂が同じだからこんなことになっていると分かる中、上着を
脱いでコードをつけたりする。この辺はただの健康検査だのなんだ
のだ。

「しかしあれだね、本来転生しているのだから、僅かに同じはあつて
も、こんなに波長が合うなんて。時計塔には絶対に言えないよ」

「はあ。そんなにあり得ない事態なのかオレ……………」

魔術師の問題は気にしないと決めていたため、検査を受けている。
「しばらくすれば終わるけど、これはすぐにパスを戻すのは無理だ。
サーヴァント二騎はまだ君がマスターをしていてくれたまえ」

「はい」

せっかく向こうの休日も利用しての活動だ、ライムやジャンヌリ
イにも会おう。そして可愛がろう、甘やかせよう。

ロリコン？ 別に構わない。

「もう問題ないよ、部屋に帰っても」

「はい」

そう言つて上着を着て、いざあの子達のもとに行こうとしたとき、
扉を開けた。

白馬に乗った英霊がいた。

すぐに扉を閉めたがロンの槍を入れられ、無理矢理回収される。

「何故私を見て扉を閉めたんですか？」

「すいません怖かったです」

無理矢理馬に乗せられ、抱きしめられる。愛おしい者を抱くよう
に、胸に顔を埋める形だが、恐怖が勝つ。何故だろうね。

「まったく、お前は生まれ変わっても変わらないのだな。だが生まれ
変わった故に、このことは忘れているのだろうか？ 私が案内する、
案ずるな、お前は私が守る」

「……………はい」

しかし馬での移動でいいのだろうか、本当にいいのだろうかと思いつながら、

「すみません、少しここで過ごすための荷物を置きたいので、個室へ」
「ん、そうか。なら私の部屋に連れていく」

あれ？　すでにこの人、オレを自分の部屋に持って帰ろうとしている。
ははっ、まずい。

瞬間、ロンの槍を振り回し、薙刀を防いだ。

「貴方、我が息子をどこに連れていく気ですか……………」

はい安定のバーサーカーの源頼光さんです。その出現と共に、完全に顔が胸に押し付けられ、守られる？

「私達のマスターの生まれ変わりだ、丁重に扱うのが通りだろ？」

「あらあら、なにを言っているのですか貴方は……………」

「本当は独り占めしたいだけでしょうにね……………」

バーサーカー達が現れ、そして、

「殺す……………愛して殺す、愛殺す。愛殺」

ぶつぶつ言う声や、キャットとして見過ごせないですとバーサーカーのキヤス狐もいるようで、やはり魔境のようだ。見えない、見えるのはきれいな肌だ。

だが羞恥心より、恐怖を通り越した無の境地にいます。これでイヤッホーと言える人がいたらすごいと思う。ひとたび人気が無いところに連れ込まれたらどうなるか分からないのに……………

バトルが始まった。

——無銘

龍崎アスカ、私と同じ抑止であり、私と違う点は私は自ら抑止に死後を売り渡した事。彼は抑止により選ばれただけのもの。

その彼はいま上着をボロボロにされ、ズボンを奪われてパンツだけとなり、ゴムも伸びていて、ガタガタと怯えていた。

「大丈夫問題ない、ここは今日の日のために用意したルームだ。彼女

たちどころか、一部のスタッフすら知らない」

「初めては好きな子がいい……前世もそんなこと無かったんだ……だから」

私は思いつきり頬を殴り、目を覚まさせる。よほど怖かったらしい。

「目を覚ませッ、君はまだ引き戻れるッ」

「すまない無銘……やはりあれは怖い、匂いは平気か、俺の匂いできよひーは追ってくるぞ」

「問題ない、それも考慮している」

その時、何もなかったところから気配がするが、私は安心して武器を構え問う。

「見つかっていないだろうな」

「安心しな、そんなヘマはしませんよっつと」

そう言って顔ノーフェイス・メイキングのない王を解除して、食糧を持ってくる。こいつが裏切ることには無いが、念のために調べてから、彼に渡す。

いま彼には投影した礼装を纏ってもらおう。リングをかじりながら、戦局を聞く。

「現在バーサーカー組初めとしたもんはオタクを探して彷徨ってた
り、ライバルとバトルをおっぱじめたりしてるぜ」

「やはりそんなことに……これでまだ初日だぞ？」

「だからって自害させて、データ状態で保存も危険なんだろう？　くそ、
魔術師ども、手を出せばパンドラの箱並のもんに出そうとして」

いま現状、女性サーヴァント全員を戦闘不能状態で放っておくと
言う手があるが、それをすればこの守りが弱くなる。そうなればス
パイナリが来て別の意味で危険なため、倒されたサーヴァントはし
ばらくすればスタッフが復活させる。

逆に言えば、こちら側のサーヴァントも復活するのだが、やはり
タイムラグがあるため、その間に龍崎アスカと言う人物の人権を完
全無視し、滅茶苦茶にされるだろう。色々な意味でだ。

二度と魂が離れないように念入りに念入りに……まだ高校生で
ある彼にとって、それはさすがに酷過ぎる。なにより、本来のマス

ターのために、このような場所に来てくれたのだ。我々は死にもの狂いで守らなければいけない。

「いま封印みたいなことになってる英霊は」

「青髭、黒髭ぐらいだよ。彼らの暴走は酷いからね」

「納得」

そして自分を狙うサーヴァントはどうなんだと聞くと、ロビンフットは少し悩んでいる。

「どうした？」

「いやね、正直それが分かりずらいんだなこれは。青いセイバーさんやラーマさんみたく、嫁さん旦那さんがいる奴らは、動かないんだけどな」

「…………マリーみたいな人たちの動きが分からない？」

それにロビンフットが真剣な顔で頷く。

「なるほど、生前まともな恋をしなかった女性サーヴァントも、いまのマスターにそれらしいアプローチをしている。彼女たちの動きが？」

「不気味なくらいに落ち着いててね、クレオパトラさんみたいなお方は、やりすぎなきや目を瞑るってスタンスだから、情報戦みたくなってるな」

「アサシン組…………いや、此度アサシン組は」

少し難しい、彼らが動かすことは得策ではない。おそらく目を付けられているし、女性はむしろ危険すぎる。

「メディアはどうだ？」

「どっち」

「大人」

「あつちは駄目だ、別の意味でだ。パラケルススと手組んで、性別変換薬なんか作ったり、解毒薬作ったり、洋服作ったり、趣味一直線」

「ルーラーは」

「壊れてる」

「はあ？」

「参戦するべきか否か、ジャンヌルーラーがめっちゃおかしいのよ。マルタの方は目を瞑る派だし、オルタは捕まえて自分のもんにするっ

て息巻いてるし。滅茶苦茶よほんとに」

どうやらあまり味方に期待できない。マスターの令呪があつて、初めて暴走するサーヴァント達を止められたのだ、いまは無理だ。

「ところで龍崎アスカ、これは現カルデアにいるサーヴァントデータだ。これ見て聞きたいことはあるか」

「BBとかの桜似だれやねん」

「君はその記録は無いのか……書類見て対策を考えてくれ、ここではおそらく」

「ギアは使えない、オレはただのアストルフオ似のマスターの来世。分かつてる」

「……君もお人よしだ、異世界に居れば、このような茶番に付き合わずに済んだというのに」

そう皮肉を言うが、涙目でふんと鼻で笑う。

「オレはジャックが最近、ライム達に会えないのが寂しいかなと思っただけだ。前世のためじゃないし、それが恋仲のためだからじゃないわい」

そう強がりを言つて、我々は安心して動く。

——龍崎アスカ

何時間経ったか分からない、シャワー室、ベットとトイレは必要最低限ある部屋で、膝を抱え、荷物の手入れをしている。

下着と衣類がいくつか無くなってるとは、気にしない。

術的にこれまじくはないか聞いておいたし、問題ないと無銘談。持ち主を索敵する魔術目的で奪われたんだらうなと思いつながら、できれば穏便に会いたかった英霊達。

まさか廊下で無理矢理裸にされ、パンツ脱がされそう……もうやめよう。考えるのは怖い。

「……シャワー浴びよう」

そう呟き、シャワー室へ出向く。と言つてもお湯を風呂に満たして入るだけにする。流れる水から索敵される可能性があるからだ。

怖い、あの女神化しているはずのアルトリア、無銘の相手じゃない彼女も結局同じだったんだ。あのまま部屋に連れて困れていたらどうなっていたか。

そして、

「…………アストルフオ」

そうアストルフオ、アストルフオである。いたのだ彼が、

『アスカ、ボク、ボク我慢できない…………アスカっ』

『逃げないでっ、アスカ、アスカああああああああああ』

泣きたくなる。親友がおかしいんだもん。

湯船の中で丸くなりながら、目を閉じていると、ガラララと音が、

「えっ」

「はくい♪ アスカさんここにいたんですねっ」

「こんにちはアスカ」

アン&メアリーが入ってきた。

裸で…………

「うっ、うわああああああああああ」

すぐに目を閉じ、背を向ける。その様子に、

「やっぱり嫌ですわね、こんな無惨な傷だらけの身体では」

「やっぱり嫌だよね、こんな語るも陰惨な傷だらけの貧相な身体じゃ」

「そ、そうじゃないよっ。二人ともそれでも綺麗だけどっ、まずいだ

ろっ、問題だろっ、男で女じゃないか!!」

その言葉に、二人は微笑んだことに気づかず、ちやぷんと狭い風呂場に入る二人。

「ま、なっ」

「恥ずかしいのならそのまま背を向けて、目を瞑っててくださいね」

「恥ずかしいのなら、そのままがいいよ？ 服は僕らが隠しちゃった」

考えるな考えるな感触やらなんやら考えるな考えるな考えるなッ。

「可愛いですわね」

「いいにおいだったし、本人もいいにおい」

考えるなツ。

「私は藤丸マスターさん、メアリーはアスカさん」

「これで問題ないねアン」

「問題ありますよねえええええこの状況も問題あるよツ。二人とも自分のことは大事にしてツ。オレとは初対面だよ!!」

それに静かに、

「関係ないってことはよくわかったよ」

「うれしいよ、こんな身体でも、恥ずかしがって綺麗って言われて」

「私達は海賊ですよアスカさん」

「海賊は」

「狙った獲物は必ず手に入れる」

二人が左右から耳元で囁く瞬間、

「壊れた幻想ツ!!」
プロトクン・ファンタズム

破壊された風呂場の中で、すぐに二人は礼装を纏った。それを声で叫ばれて、目を開き、タオルを確保して走る。

「逃げろツ、ここは私が食い止めるツ」

「させないよ」

「海賊から財宝を取ろうだなんて、はしたない人ですねメアリー」

「だねアン……………」

そして静かに、

「海賊なめるなよ」

「ここは任せろツ」

「任せろツ、そして」

「ああ……………倒してしまっても構わないの难道?」

「生前思い出せ死亡フラグツ」

こうしてその後、タオルだけと言う言葉に湧き出る者達に、一日は整備室なりなんなりで怯えて過ごした。

響、未来、奏さん、翼、クリス、マリア、セレナ、切歌、調。みんなに会いたい、着替えた後。もう帰りたい。

こうしてタオル一枚でカルデアをウロウロするのであった……

Gの番外編5話、危険地区がいつぱい

ちかちか照らされる中で目が覚める。

「ん……………なん」

その時、自分の手足が鎖で繋がれていることに気づき、困惑して周りを見る。

通気口など、空気を入れ替える装置はあるが、それだけであり、ベツトと電灯の明かりがちかちかと自分を照らす。

自分の姿はリディアンの子供制服、なんでだろうと思う中、

「っ!？」

唯一ある扉が開く、鉄製の扉で、開けたのは、

「ま、マリアっ」

「……………」

なぜここにマリアがいるのか分からないが、どう考えても異常な事態に、助けが来たと思いつつ、その顔を見る。

その目は異常なまでに光は無く、こちらの状況を見ても何も言わず、淡々とビニール袋から食料などを取り出す。

「マリアさん?」

扉を閉める際、鍵をしつかりと閉めて、開かないように確認をし、静かに側に座る。

「マリ「あのね」」

言葉を遮り、静かに何か取り出す。別にただの菓子パンで、それを口に入れて、もぐもぐと食べ出していた。

「セレナがね、貴方に気があるようなの」

そう言った瞬間、その食べかけを無理矢理口の中に詰め込む。オレは抵抗するが、馬乗りになされて、そのまま無理矢理詰め込まれる。

「別にそれはいいの、貴方はいい人なのは分かってる。けどね、問題はそこじゃないのアスカ」

「んぐぐくんぐっ!？」

手まで口の中突っ込んだため、よだれが指につくが、あろうことか、なめた。

何かがおかしく、マリアの瞳に光は無いうえ、いまだ馬乗りのままである。

「私、まだ21よ。そりゃ、みんなより年齢は高いのは認める、私がしたことか考えれば、女の子らしい恋なんかできない。せめてセレナや切歌、調にはそういうのして欲しいし、幸せになつて欲しい。これも本音よ」

そう言つて小さな牛乳パックを少し飲み、そして、

「んぐツ?!」

また無理矢理口の中に入れられ、飲まされる。

無理矢理のために、口からこぼれ、せき込む。マリアは口の周りを指で拭き、それをなめながら、静かに飲ませるのをやめる。

「だめじゃない、もったいない」

「ま、マリアさん……………」

何か怖い、そう思うが鎖の所為で逃げられない。

その様子に、ゆっくり口元をつり上げながら、微笑んだ。

「駄目よ、ギアは取り上げてから、痕が付くだけだからやめて……………」

私は気にしないけど、やっぱり綺麗な方がいいから」

「マリアさん……………」

「私ね、気づいてるの。みんなして私のこと、オカンとか、裏で言つてるの……………それで気づいたの。あ、このままだと恋も何も無いって」

そう言いながら、静かに、

「歳が近い人も……………そもそも好意的な人なんて、一人しかいないことに気づいたの。私の周りには、利用しようとする人か、保護してくれる大人しかいない。私を対等に、女の子として見てくれるのって……………アスカ、あなたしかいない。だから」

そう言つて、近くのベットに乗せて、

「大丈夫、みんな分かってくれるから」

そう言つて、上着のボタンに触れ、外しだす。

「ま、まり、マリア、マリアさんツ!」

「マリアでいいわ、セレナもきつとわかってくれる。大丈夫、全部が終わるまでここにいればいい。ココハ誰も知ラナイモノ……………」

そう言つて、ちかちかと電灯の明かりが消えかける。

全部が終わるつて何が終わるまでなのか、怖くて聞けない。

「待つて、奏さん、かな」

「あの人のことはお姉さんで私はオカン……………それがあなたの答えね」

「そ、それは」

言葉が止まった瞬間、手が早まる。

「大丈夫、すぐに終わるから……………」

その様子にただ言えるのは……………

「目を瞑つてていいわよ、大丈夫……………誰モ、来ナイカラ……………」

人生が終わると言うことだけだった……………

「うあああああああああああ」

そう叫び、目を避けると、

「うわあああああああああ?!?! あ、アスカどうしたの!?!」

「いや少し、知り合いがこじられたがゆえにぼうそ」

その時、知り合いがまさに同じように馬乗りに乗つて、驚いていた。

すぐに突き飛ばして、説教する。

それと共に布団の中からバーサーカー組が現れ、外から流れ込む気配を感じた。

どうも龍崎アスカ、やつと一日を終えて、検査を受けてます。その際、衣類を着させてもらい助かりました。

清姫達に見つかり、各々の部屋に連れていかれそうになりました。ああネ口もいましたよ。終わったと思つたけど、ジークフリートが現れ、かばつてくれた。その際マントももらった。

隠し部屋で仮眠を取ると、あのような夢を見た。なんだあの夢、絶対に本人にも誰にも知られてはいけない。けど、見たおかげでアストルフオがキスしようとしたり、忍び込まれたり、近づく者達に気づいたのは助かった。

戻ったら何かしよう。まず深層意識辺りどうにかしてから、マリアには詫びになにかしないといけない。

ともかく、そんなこんなでまだ無事です。

無銘、奴は消し飛んだらしい。いま復活中、野郎……………

「はい終わったよ〜」

色々視野していると終わり、それと共にデス・レースが始まるため急いで出る。

分かったのは、せっかくだから魂に目印でもつけておくかレベルで、乙女の照れ隠し感覚で襲い掛かるスカサハさんなどもいるため、気を付けられないことが発覚しました。

アストルフオは諦めてませんが、諭させ、説得に時間をかけました。それでやめてくれればいいのだが。

おかげで寝てません、眠いです。

ただ現状寝ることはイコールで終わる気がします、いま色々枯れていてよかったと思います。何か辞世の句のような心境です。

てかマリアさんの、あの夢の続きを見そう。すいません。

「まあなんだ、マスターも苦労してるんだな」

「オリオン、いまのところどうだ」

段ボールに二人仲良く入り、某ゲーム風に進んでいます。何故かオリオンがいる。

「ダブルキヤス狐が怖かった、本気で危険だったよ」

「何を言うか、あの程度序の口よ。私以外には不要ねとはつきり言つて、手足を矢で撃ちくくり付けられるよりマシよ」

「もうオリオン座で空にはりつけじゃん」

「ははっ、うまいね」

変な絆値が上がっている。アルトリアリイすら恐怖を覚え、彼女が頬を赤らめ、きよろきよろしているため、全神経を使い気配を消す

二人。

立ち去ったのを見た後、ここから別れて隠密に移る。ともかく、ロビンフットか槍兄貴に会わないといけない。ここで味方なのは、円卓の騎士ですら敵らしい。

プロトはどこだ、彼奴もオレだろと言う心境の中で、こそこそ動く。その時、

「クンクンクン……アースカーキーン♪」

と前から、後ろから複数の気配を感じて、やばいと思う。終わるのかなと涙が流れかけたとき、

部屋に口を押えて、連れ込まれた。

終わった……

——
???

「ああ安心して、食べたりしないから」

「む、武蔵っ」

「ともかくここにいなさい、ここはあたしの部屋だからさ」

そう笑いながらウインクする彼女を見て、やっとホツとする。腰が抜けて倒れかけたとき支えられる。

「っと、大丈夫?」

「ごめん少し……よかった、やっとまともな人だ」

少し酷い言い方だが、やっと安心できると腰に張り付く。それに嫌がることは無く、よしよしと頭をなでる。

「ともかく扉のおかげでにおいも追えないから、ここにしばらくいれ
ばいいよ」

「うん……うんっ」

こうしてしばらく武蔵のルームにいることにする。

「あつ、饅頭あるよ、お食べお食べ」

「ありがとう武蔵」

そう言つて、ベッドに腰かけさせてもらい、饅頭を食べながら、お茶を飲む。

そして武蔵は嬉しそうに微笑む。

「そう言えば、アスカは私の前でも安心してゐるね」

「ああそうだね」

だつて、

「武蔵はいるのは分かつてただけで、どんな人か知らないから、会いたい英霊の一人だったんだ。お話ししたいって思つててね♪」

その時、ごくりと生唾を飲む音が聞こえた気がするが、まさかな。

「どうしたの武蔵」

「う、ううん。何でもないよっ」

そう微笑みながら、隣に座る。少し距離が近いが気にせず、武蔵とお話する。

龍崎アスカは知らない、自分の容姿は美少年と言つたぐいにも入ることを。

武蔵はそういうタイプが好きなことを、知らない。

「安心したら、少し仮眠取りたい」

「!!?」

分かつているが、チャンスとも同時に思う武蔵がいる。

「な、ならここで寝てるといいよ。私が君を守るから」

「けど、さすがに女性の部屋で仮眠するのも」

「だ、大丈夫っ。問題ない問題ない」

そう言われながら、

「……………じゃ」

いま、子羊は獅子の目の前で横になって眠り始める。

いま、私の枕を使って、幸せそうに寝ている。

いま、無防備に私の前で横になっている。薄着だ。

「い、いかん。私は彼に信用されてるんだっ。だからだ、だから、だか

武蔵へロケットパンチのように攻撃して、逃走が始まった。

——龍崎アスカ

「味方なんていない、敵しかいないんだッ」

部屋の隅でそう言いながら、二人を見るが、

「だけど二人は恩人、ありがとう」

「理由は分かる分だけにそうとう壊れてるわねあなた」

「だ、だいじょうぶ?」

「だいじょばないッ、カルデア怖いッ、女の子怖いッ。もうお嫁さんも何もいらないッ、恋人いない!! 一人山奥で隠居して暮らすッ!!」

「やばいわね」

手が巨大なパッションリップが心配そうに見てくるが、メルトリリスは、

「逃げないのね」

そう静かに、鋭い眼光で見つめながら言う。

「……………助けてくれたから、ありがとう。メルトリリス、パッションリップ」

そう言われ、メルトリリスはそっぽを向き、パッションリップは嬉しそうに微笑む。

「そろそろ別のが来るから逃げなさい」

「がんばり、ます」

そういう二人に驚く、その様子が分からないようなので、

「私達は別に、あなたや藤丸立香に興味ないわ、あるとすれば……………月の勝者であるあなたよ、岸波白野先輩」

「……………」

頬を赤くするパッションリップ。メルトリリスは皮肉げに笑いなから言う。

変わりすぎた者に、そう告げるが、

『『それでもありがとう二人とも』』

その言葉だけが、彼で聞こえ、はつとなり二人は見る。
そして走り出そうとする二人に、ぎゅと軽く抱きしめ、走り出すアスカ。

「……………変わらない、バカね」

「……………」

そして、

「なにッBBちゃんを差し置いてなににしてるん」

叫ぶ間もなく、宝具をためらいもなくぶつ放し、吹き飛ばした。

歩く中、廊下の中をこそこそ歩く。

カメラすら気を付けて歩く中、水を飲むために食堂に忍び込んだりはせず、前もってロビンフットや無銘から聞いた隠し場所から仕入れる。

なぜこうも命がけだろうか。いや死なないよ、死ぬことは無いだろうけど……………

ガシッ!!

「……………」

喉が乾く、瞳孔が開く、何かが足をつかんだ。

静かに、静かに……………それを、見た。

「シ・グ・ル・ド……………」

「アアアアあああああああああああああああああああああああ」

そしてそのまま床を這っていたブリュンヒルデが這い上がってくる。

「殺す愛すッ、シグルドッ、シグルドオオオオオオオオオオオオオ」

「違う、やめ、つてかおかしいッ。なんで服脱がすの?! パンツ、それ

パンツッ」

そう言つて捕まえてくる。おかしい、本当におかしいんだけど。だが、鎖がブリュンヒルデに巻き付き、引き離した。

「鎖っ、だれだ」

その時、這い出ると一人の少女にぶつかった。

座り込みながら上を見ると、フードをつけた鎖鎌を持つ、怪物になる前の女神。

「アナちゃん」

「……………」

そしてガンツと言う音と共に、意識が途絶えた。

そう言えば他人ですと言っていた。だからか……………

頭がくらくらする、変なおいがする。

そして左右からその魅力の元がいて、そして一人の少女がぎゅとしていた。

「……………三姉妹様？」

「あら起きたわ私」ステレン

「そうね私」エウリユアレ

「貴方が強く叩くからよメドゥーサ」

「ごめんなさい、上姉様、下姉様……………」

一つのベットで四人で仲良く寝ている。ふむ……………

そこそこ仮眠が取れたと思うが、首の辺りに違和感がある。噛み後が数か所あり、ランサーちゃんは恥ずかしそうしている。口元に血をぬぐった後がある。

二人の女神も左右から抱きしめつつ、クスクスと微笑む。パンツや下は無事なのを見ておいて、静かに、

「じゃ、帰して」

「駄目よ」

「なんで」

その様子を見ながら、ランサーちゃんかもじもじと顔を覗き込み、静かに吐息が届く距離で、可愛い。

「アスカさん……………」

「ランサーちゃん、顔近いよ?!」

その時、何かが発動したのか、妙に気がしたが、気にも留めない。それに黙り込み、静かに顔を胸に押し詰めて、耳元でも囁いたりとなにがしたいんだらうと思っっている。

「ランサーちゃん?」

「あらあら私、エウリュアレ やつぱり」

「あのマスター魅力にかかった、ふりをしてたみたいわね……………」

あつ、ごめんね藤丸立香。なんかやばい。

何かを察する。よく見れば、みんな女神の服装であり、魅惑的な姿である。だが何も思わない。やべ、藤丸立香ごめん。ランサーちゃんも少しだけかわいらしく、頬を膨らましていた。

「どうしまししょうか私」ステツノ

「来世に責任を取ってもらいまししょうか」

「それでいいわねメドゥーサ」

「は、はい……………」

少し頬を赤く染めて、嬉しそうにしている。

そして女神たちもにやにやしなから、俺を可愛がる気らしい。ランサーちゃんはすでにすりすりしたり、滅茶苦茶甘えてくる。問題ない。

「あら、なにか余裕な顔ね」

「気に入らないわね」

「だってほかのサーヴァントみたいに取って食われるわけじゃないし、撫でられたりする程度気にしない」

奏さんや響、酷い時には未来になにされてきたと思っている。いまさら女神に可愛がられる程度、全然痛くもかゆくもない。折れた心はこれ以上折れない。

それに、

「あら知らないの」

「私達は」

「吸血程度ならいいよ、好きにしな」

それにむっと不機嫌になる。怖くない、ランサーちゃんだけは少しだけおどおどするが、

「三女神の面倒くらい見てやる」

「……………言ったわね」

「なら、可愛がってあがる。喜びなさい」

「……………じゃ、じゃあ……………」

死の時間が来ると、上着が取られたが、気にしない。

ただ血を吸われるだけだ。そう、

(ん)

なにか前々、何か前にあったような気がする。

記憶が、何か引つかかった。

まさか、

(この三姉妹を面倒見てた記録か?)

そう思いながら、吸われている中で、

「来るぞ」

「!?」

そして部屋が吹っ飛んだ。

なぜこうなった? 俺に何かあれば、狙っている狩人が如何なることがあると現れると言う謎の確証があった。

なら、受け入れればどうだ? きつとぶっ飛んでくるだろうね。

つてかアステリオスの迷宮か。破壊されたようだ。その隙に逃げる逃げる。

上半身に色々痕があるが、気にしない。もっと大事なもん奪われてないもん。

なんだろう、この心境。つてか、

「魅力の女神なのに、響達の方が可愛いよな」

その時、ハートの矢じりの矢が放たれ避ける。やべっ、聞こえてた。

三女神の意地で捕まえて魅力漬けにしてやると思っただ。逃げよう。

っつか、バーサーカー怖い。バーサーカーのように猛る女子が怖い。

こうして、ズボンとキス痕のような吸血後のオレは、検査に移る。血が無いんですけど……

っつか一日過ぎてました……

Gの番外編6話、こんなんしてた理由

ダ・ヴィンチちゃん検査中は誰も襲いかからない。当たり前だ、それでなにかあれば大変なので一定の距離まで下がる。どんな暗黙のルールなんだろう。

ダ・ヴィンチちゃんはカメラモニターで色々様子を見ながら、ふむと検査を受けているアスカを見る。

先ほどまで女神の愛を受けていて、血がだいぶなく、キス痕もある死んだ目の少年であり、同じ容姿の英霊から「ボクもキスするッ」と叫ばれている彼だ。

「今回のことよく引き受けてくれたね」

「やめて、バレたら大変」

言葉がだいぶすり減り、精神が限界点な彼。それでも同時に献血しつつ、飯食い水飲み、体力回復しながら、上着を着る。

「これであとは明日の朝帰れるから」

「逃げ切る」

そして通気口から出ていく彼。さてさて、どうなるか。

「三女神達、影の国の女王、平行世界の騎士王。そして数多の女傑達……大丈夫かな?」

気にせず、データを整理する。

「セイツバアアアアアアアアアアアア」

「お前は敵かヒロインXッ」

ギリギリで避けながら、シャアアアアアアアと威嚇してくる。

「セイバー・オブ・セイバーは渡しませんッ」

「いらんオレ抑止ッ、まちまちだッ」

「セイバーはみんなそう言うんだあああああああ」

「セイバークラスなんていっばいだろッ、本家より人気ある癖になに言ってるんだッてかオレは本家よりそっちが好きなんだあああああああ」

そんなやり取りの中、なら持ち帰りますッと言い、嶺に変わった。

何故やツ。

だが味方もいた。

「沖田あああ、敵はここかツ!!」

誠を背負う侍が、仲間を連れて現れたのだ。

無数の鉄砲隊の攻撃に、ヒロインXは舌打ちしながら離れていく。

「助けに来ましたよアスカっ」

「今回の戦、新選組並び信長軍が手を貸そうぞ!!」

『ノツブノツブっ』

「茶々もいるぞツ」

「うわあああああ、仲間が増えたっ。沖田は敵になるかなって思ったけどやった」

そう思った瞬間、足元から何かが生えた。生えたと思った瞬間、土方はオレごと斬らんとばかりに一閃を放つが、それはほぼ同時に避ける。

まるで避けられることを分かっていたかのように、何事もなく、それを斬ろうとした土方とアスカの連携に、驚く沖田と信長。

だが、一番驚いたのは、その刃を通さない鱗を持つものだった
……

「ま・す・た・あ・♪」

もはや隠す気は無く、土方の刀を白い肌に纏う、己の鱗で弾き、大蛇、否、竜化した清姫だった。逸話超えてませんか彼女？

「邪魔しないでくださいな……何億回転生しても消えぬ絆をその魂に刻み付けるだけです……ああ……だいじょうぶです旦那様♪
頑張りましたッ」

「なに頑張ったのきよひーッ」

「………ぽっ」

そう言つて、ほんと何頑張ったんだろうこの子。なんでそこまで赤面するんだろう。知りたくないし、藤丸立香も知りたくないだろう。ただ本格的に喰われると感じる。

そして、

「ん、ここにいたか」

「いやああああ、スカ師匠が本気の槍やツ。兄貴いいいい兄貴
いいいいいい」

影の国、そこを収める女王が現れる。フル武装、やる気まんまんだ。
こちらを見て、うっすら微笑み、こちらを見る。その目は獲物を見
つけたと語る瞳であると共に、不愉快だと言う目である。

「ほう、私より奴を呼ぶか……よし」

鋭い眼光が光る中、紅い双槍が交差するが、凶人の刃が受け止めた。

「おもしれええええええ、新選組なめるなあああああああ」

『ノブブブブブブブ』

「そこをどけ東方の武士いいいいいいツ」

高速戦闘が始まる、バーサーカーである人斬りと、影の女王の深紅
の槍が交差する中、壁を破壊して、ある拘束具をつけた男が高笑いし
つつ、とある始祖と共に現れた。

「あつはははははは、圧制者はどこだああああ」

「ロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

そしてその場から飛びのくが、空中で軌道を変え、黄金の劇場に閉
じ込められるのを回避した。

そこには赤き薔薇の皇帝が、ウエディングドレスを持っている。

「余が参ったぞ奏者ああああああ」

その後ろには、バーサーカー以上にバーサーカー状態の、キヤス
ターが、もう一人の自分を睨んでいた。

「アレハ私ノダ私ツ」

「それをキャット奪うのだ♪」

「呪詛ハ完成、後ハ撃チ込ムツ。ツイテ喰ラウツ。子供、イツパイ、
はっぴーツ」

キヤスターの動きじゃない動きで、バーサーカーと殺り合うキヤス
狐。そしてベオウルフなどのバーサーカーもまた現れた。

「あつはははは、いいなこれっ。いつも殺ろうぜおいツ」

そしてけが人多発の為……

「けが人はここに……殺しても生かします……」

「藤丸立香ああああああああ、何人英霊と契約しやがったあの

野郎ッ」

硝子の馬車が搔つ攫おうとしたり、ジャンヌが静かに参戦してたり、全身鎧のよく知る騎士も参戦したり、もう女子英霊が（本気）（印付けの為）（面白半分）で参戦してたり、カオスを通り越した何かが始まる。

のちにこの映像が魔術協会関係者に出回り、手を出してはいけない魔境と認定されたとかされなかったとか……………

三姉妹の英霊も軽くスルーされた。彼女たちも本格的に骨抜きにすると言つて参戦してた。

「くっ、飯もロクに食べておらんはずなのに、なぜこうも逃げられる?!」

そんな中、アスカはただのマスターの来世では無い。抑止力、世界の代役者。

そしてマスターと違い、力を纏い、前線で戦う、転生の際に得た知識などを己の物にして戦い、死線を歩いていたので。

いまさら英霊、神霊、あまねく混乱の中でも、潜り抜けるように逃がっている。

だがそれを楽しむのも英霊だった。

「クツハハハ、それはそれで面白いぞっ。それぞれええええ、捕まえたらたつぷり鬼種として可愛がつてやろうっ」

「ルーンで回復はする、安心するといひぞ……………」

「ん？ ならもうみんなでいたたくと言うのもありか」

混乱に次ぐ混乱、様々な陰謀が瞬間瞬間で変わりながら、仲間、味方はノブ達しかないのか……………

とあるカルデア、地下施設ルームにて、やっと一息取る。

「……………ふう、途中でシェイクスピアを盾にしたおかげで、心臓奪われずに済んだが、ここはもうどこだ？」

カオス過ぎる環境の中、師匠の槍をかわした。その瞬間、完全に標的として見られた気がしたが無視する。

カルデアスタッフの神経の異常性を知りつつ、地図を取り出す。そ

して、

「もぐもぐもぐ………」

まめ大福を食べる英霊を従えていた。

「頼むよえっちゃん、和菓子分は味方でね」

「安心してください、貴方の手作りはオルトリアクター回復には適していますので」

「お姉さんにまかちえてね〜♪」

まさかのマタ・ハリも味方（彼女曰く、私の願いは分かるでしょ？

叶えてくれるなら動くけど、嫌ならいいわ〜♪）です。

えっちゃんこと、ヒロインX（オルタ）は餌付けに成功し、味方にした。

その時、僅かに気配がしたとマタ・ハリが言うが、それ以前に気づく。

「おかあさんっ♪」

「こんにちわ〜」

「トカナイさんですっ、別のトナカイさんですっ」

そう言って三人の少女が来て、静かに抱きしめる。

「娘たちが来た」

「お姉さん、胸貸してあげるわよ」

これは下心無く、本当に心配しての発言だが、娘達がいるから問題ないと伝える。余計に心配された。

恥ずかしいのか、それでも娘達は大人しく抱きしめられている。少し精神が安定して、完全に安定すればいいが……

無視して和菓子を食べているえっちゃん。同じものを三人にも食べさせつつ、少しだけ落ち着くオレ。安いな。

上から、色々なものを狙う狩人の叫び声を聞こえる。

「…………マタ・ハリさん、捕まったらどうなるんだろう?」

「ん〜お姉さんの経験上、きっと高校生の君には早いことになるでしょうね」

よしよしと抱きしめて、震える身体を落ち着かせてくれる。怖い。「もうだめだ、血が足りねえ……………サーヴァントの動きの対応でき

ねえ」

「むしろよく持った方です。ねもぐもぐ、黒セイバーの剣筋を白刃取りした時は驚きましたけどもぐもぐ」

けどそのあと、槍オルタの王様に捕まりかけたんですよ。

「……………もういつそ受け入れたら楽になるかな……………」

「お姉さん的にはやめて欲しいな、みんな引つ込みがつかないだけで、本気な子はいないわよ……………（たぶん）」

いま顔を背けた時に何かつぶやいた。気にしない。

「初めては好きな子がいい……………それは罪か？」

本格的にもう無理なのは分かりだしてきた、どうも本当に危ない、そして限界が来た。響達の顔がかすんできた。

「ん？ かすむ？」

それに、はむはむとおいしそうにおはぎを食べている娘たちの一人を見る。

「……………あつ、ライムちゃん」

「？ なんですの？」

「お茶会しない？」

安全地帯を手に入れた。

「「ただいま」」

藤丸立香とマシユが来ると共に、山の翁なども着た為、ついに乱世は終わりを告げた。

「……………少し惜しいな」

「……………」

「アスカ……………」

数名本当に何かしようとしていたの？ 鎖やら魔法の類の拘束具などを手に持ち、仕方ないと言っているけど、駄目だからねほんと。

師匠、その二つの槍に貫かれている、黄金の粒子になっている弟子はいいんですか？

「邪魔をするからだ馬鹿者」

こちらを見て、少しだけ舌打ちする。鬼系の子なども残念残念と酒

を飲み始め、初めからなにも無かったのにふるまう者もいれば、気にせず残念がる者。

「ごめん、ほんと大丈夫」

「あとで泣くから平気」

スタツフたちは空を割らんばかりの喝采を送り、サーヴァント達も、そう言った反応をし終えてから、やはり契約している彼がいらしいのでそっちに出向く。

アストルフオは説得した。

「アスカ……ボクは、ボクは」

「アストルフオ」

ぎゅと抱きしめたりはするけど、ウエディングドレス姿のアストルフオは、目を閉じ、唇を突き出すのが、無理だとはつきり言う。

恥ずかしそうに頬を染めている。これで女子なら男は堕ちるだろうが、無理だ。

ひよつとしたら友情も無くなるだろうが、それは流す。

「アストルフオ」

「……生まれ変わったら女の子になる」

そう言っつて、ふんと決意するアストルフオ。色々無理なのだが、気にせず放置することにして、藤丸立香は、オレを見た。

——藤丸立香

色々すごいことになっているカルデアを見ながら、もう一人の自分に苦行をさせたことに頭を下げる。だって上着無いんだもん。トラックスだけだよ。

話を聞くと、固有結界に閉じこもってたみたいだけど、最後には清姫が突き破って乱入して、みんなが流れ込んだらしい。清姫、君にそんな能力があるなんてびっくりしたよ俺。

そのあともその場で何か、具体的に何する気だったのか聞かないで、何かしようとしたサーヴァント達から逃げたりして、パンツ一枚だ。

ついに本格的に終わると思ったときに、俺達が帰ったってアナウンズが流れた瞬間に逃げたらしい。みんなが心配で早めになったけど、別の意味になったよ。

「もう抵抗することもできなかつたんだ……………」

本当に早めに帰ってきてよかつたよッ。お土産男性サーヴァント達だけにしようかなッほんと。

荷物はほとんど奪わ……………無くなつたらしい。衣類はもう彼に合う服が無いため、諦めるらしい。吸血痕あるけどいいんだろうか。俺が聞くことではないが……………

ともかく、寒そうな彼は精神的にもう話を切り上げておく。そして、

「ジャックとアタランテを頼む、二人とも、アスカをよろしく」

「はいっ」

「うんっ♪」

そして二人の契約も戻せないが、これで戻せる糸口は、こっちの担当だ。それまではマーリンが様子を見たりしてくれる。

武蔵は泣きながら「ベンがいぎぜで〜」と言い、三女神の姉達は鋭い眼光で俺達を見ていて、えっちゃんやんはパクパクとお菓子を食べていて、それでえっちゃん初め、やはり何名かアスカくんを異常な目で見ている……………やめよう。

俺は目頭を押さえている時、マーリンが入口を作ると、

「アスカっ」

立花響ちゃん？　と言う、彼の幼なじみを初め、みんな待つてくれたらしい。彼女達にも頭を下げなければいけないと思ったとき、

「あつ、マスター♪」

そう、クロエが言ったとき、初め俺かと思つたが、俺を通り過ぎた。

「魔力ちようだい♪」

そう言つて、アスカくんに抱き着く、キスする、押し倒すを最後にする。

その瞬間、時間が停止したが、軽く済ませたクロエは静かに、

「いぢそつちやまふ」

「……………」

ウインクして、小悪魔百パーセントなクロエ。だけど俺達はそんなの気にしてられないよ。

壊れたブリキのように響ちゃん達を見て、俺は同じように、サーヴァント達を見る。

「ふむ、繋がっている間は問題無し、そこに物陰ありか……………よし」

師匠がそう呟いた瞬間、今度は歌姫も交えて戦いが始まった……………

数時間後……………

「んんんんものすごくデリシヤス♪ また来てくれないかしら」

「クロエええええええええええええ、この現状でそれを言うのツ」

肌がつやつやのクロエはそう言いながら、唇をなめる。

向こうがどうなったか、とりあえずセレナ？ちゃん、調？ちゃん、切歌？ちゃんから、とてつもない殺意を感じ取ったんだけど、本当に平気かな……………

「とりあえず頑張って修理しないと……………」

やはり帰ってすぐの仕事は、カルデア修復であり、おとなしく頑張る中で、

「先輩、がんばりましょ」

「ああ」

そう、大切な後輩にそう言い、もう一人の自分に感謝しながら、いまを過ごす。

——立花響

ボロボロのアスカはもう精神的に崩壊していた。

体中キスされた痕があるし、色々あったらしい。

ズボンも取られて、パンツだけ守った幼なじみは、いまクリスマスちゃんに銃口を向けられていた。私達は必至に止めていた。

その中でこの三日間の全てのことを聞いて、やっと落ち着いた。

「みんな、オレ、きれいなからだかな……」

「いまは休むといい」

「がんばったな、アスカ……」

衣類を渡す翼さん、奏さんは弟分などところがある分、気にせず抱きしめる。恥ずかしいとか言っただけ嫌がりそうなアスカなのに、抱き着いて嗚咽をし出す。怖かったんだろうな、最後のあれ怖かったもんな。

無銘さんが、このままじゃ山脈が壊れるって言っただけ、手に持つ槍が巨大化していくブリュンヒルデさんを止めようとしたりした。

その隙に白竜へ昇華したとか、清姫さんに驚愕する人たちがいて、もう私達じゃ分からない話ばかりで大変だった。

友里さんがお茶を出す中、事情を知るアタランテさんは複雑そうにしている。

そうだよねくと、せっかくだからと、未来と共に料理している。いまほとんどの人は反省の意味を込めて、調理室だ。

特にセレナちゃんはランロットさんと、トリスタンさんを殴り倒したし、大変だった。っていうか早すぎたし、盾持った人も手を貸してたよなせか。

「藤丸立香さん？ とマシユさんだっけ？ の、デートのために、カルデアってどこにいたんだもんねアスカ」

「だね、結局もう一人の自分のためって、少し複雑だけど」

未来はそう言う。そう、これはデートのためのお願いを聞いたアスカのわがままで。

ホームクルス、来るべき人理修復のためだけに用意された道具であったマシユさんのために、普通の人として、デートさせたい。それが藤丸立香さんの頼みであった。

それを聞いたアスカは「いいよ。ただ健全なもんにしるよ」と簡単に言った。

アスカからすれば、マシユさんの事情はゲームと言う形で知っているし、幸せになってほしい。だから聞いたのだそう。

その間、契約しているトップレベルのサーヴァントや安心できるア

サシン、あの人で警護されつつ、情報の漏えいも気を付け、二人は三日間、デートしていたらしい。

普通の町、普通の女の子、ただ、好きな人と過ごす、普通の時間。それをあげたいと、アスカ本人も言った。アスカからすれば、

「ゲーム的にも助かったとかじゃなくってな……ここで逃せば、他のサーヴァントがついてきて、普通はもう無理だろうから」

魔術師って言う生き物は、人理完全無視する。マッシュさんのような対象は、研究材料としてかなりの値打ちだ。裏で狙っている者達が多い。

だから、普通な生活なんて、無理なんだと、だから、

「一回だけでいいから、好きな奴とただのデートっての、やらせてやりたい。これも手を貸すし」

「これなの？ 私？」

と、マーリンさんに言いながら、この機会に普通の女の子させたいと言って、送り出した。

だけど、

「まさか血を吸われるわ、衣類取られるわ、お風呂侵入されるなんて……」

「あーけど、目、死んでたね……」

一番はアストルフオさんが、本気で恋する乙女のようにアタックしてきたときだけど、最後のキスは……

「文句はあとだ、いまは焼肉なりなんなりで鉄分とらせるぞ」

「デス」

「……………」

クリスちゃん是不機嫌そうに、切歌ちゃん達も不機嫌だなく……私も、嫌だなって思ったから同じだけど……

(どうしてそう思ったんだろう?)

首をかしげつつ、とりあえずこうして、アスカ地獄の三日間は終わりを告げた。

魔法少女事変

28話・解放された日々から

新年を過ぎ、切歌達がリディアン音楽院に通うようになってから、二課は新たな組織として変わり、奏さん、セレナが新たな装者として活動。これにより、国連関係で仕事も出来て、現在は人の身では解決できない事件など解決する組織になった。

そしてなにより、

「……………アスカ」

「なんだ響？」

潜水艦が本部なのは変わらず、時たまにみんなと鍛錬したりと、そんな日々。

「……………なんで、制服着ないの？」

「もう着る理由が無いからだよ♪」

オレは女装と言う呪いから解放された。響と奏さんが不満の抗議をするが、無駄だ。もうリディアン生徒のフリする必要性もない。国連関係の組織になり、所属する装者のプロフィールはまともなもので登録されるので、性別でごまかす情報操作はもう意味がない。

おかげでオレはもう、リディアン製の制服を着ないで済んでいる。いまはすっかり仕舞っている。私服姿にみんな見つめる。

「……………悲しいデス」

「うん……………現実って残酷だね切ちゃん……………」

「お前らな……………」

クリスの家で勉強を見ている中で、オレの制服姿が見られないことにながっかりする二人。クリスは呆れる。少し泣くよホント。

「そう言えば、今日はマリアと翼のコンサートか。奏さんはセレナとナスタージャ教授と共にでしたっけ？」

「はい、そうですね」

奏さん達は外国で頑張る翼の元に飛んで、マリアに会いに行くセレナ。奏さんはナスタージャ教授達の警護と言う意味が強い。

(ノイズがいなくなっても、厄介な事件はあるからな)

この前は、シャトルがエンジントラブルで墜落しかけて、装者が動いたが、危なく、クリスが人命第一に山を壊しかけたり、翼が森の木々をなぎ払ったりしかけたのを、ヒポグリフで空間ごと飛ばして、全て回避。

その後の激突しそうな山や岩壁を環境破壊せずに回避した。セレナの盾はマシユ、シールドのようでありながら、持ちやすく、刃もあり、ブーメランのように投げられたりする。そして最後に町と言う事態で、奏さんと響のパワーコンビが無理矢理シャトルを持ち上げて……

(……………考えるのやめよう)

とはいえ、月の施設が動き出し、古代の文明、何かしらのトラブルはいまだにある始末なんだ。技や力を上げなければいけない。

時折自分の魂関係者、マーリンが暇つぶしに来る程度のそう言う日々だ。

コンサートはクリスの家で見ている。響達の友達もいる中だが、しばらくして火災が発生し、動くことになる。とは言え、切歌と調は薬が無いと長期間ギアを纏えないため、外される。

「いざとなればオレン家でもクリスの家でもいいから使って良いから。アタランテ達は未来達を送るなり待機してくれ」

「うん」

「分かりました」

そう言っつて鍵を渡しながら、別れる。

二人は不満そうだが、だからと言って薬で危険な状態になってほしくない。戦ってほしくないのが、いや、

(本当は全員戦ってほしくないんだよな……………)

余裕、そんなことが頭によぎるが、そう言う理由ではない。ただ自分が嫌なだけだ。

だが響達は、自分達がどんな立場であり、そしていまここにいると決めているんだ。それを否定できる者はいないのだろう。否定すれ

ば、オレは抑止達と変わりない。

だからできる限り、努力して前が出る。それしかできない。そんな事を考えていると、火災現場で響が進み、人々を助けている。

一応、俺達は国家機密なんだけどな……………

「あのバカ、なに勝手に……………」

「まあまあ、人命第一でいいだろ。オレらのことは秘密なのは分かるけど」

そんな話の中、気のせいかアストルフオが何かを感じ取った。

「……………マリア？」

——セレナ・カデンツァヴナ・イヴ

「マリア姉さん!!」

「無事かマリアっ」

「奏、翼、セレナっ」

謎の剣を持つ、それが、スカートの裾を掴み上げながら、ダンスを踊るように剣を持っているが、

「あの人なに!? 姉さん」

「分からないわ、気を付けて」

「貴様何者だ!?!」

「オートスコワラー……………貴方達装者の歌を聴きに来ました……………」

「オートスコワラー?」

そう言いながら、翼さんと戦い始める中、盾と槍を持つ私達二人が前に出るべきかと思っただが、奏さんが止める。

「ここは狭い、私らと下手な連携は彼奴の足引っ張るっ、頼んだぞ翼っ」

「承知ッ」

そう言われた以上、私は盾を前に構え、翼さんの様子を見ながら、その戦いを見守る。

奏さんはその間に連絡操作をしながら、すぐに動き出す。

——龍崎アスカ

へりにいるクリスや、活動中の響と別れ、火の周りなど、瓦礫でどうにかしている部分をどうにかしたりしている時だった。

すでに消防車だけでもう問題なくなり、ギアを解こうとしたとき、『敵だっ』

クリスからそんな声、へりの人はヒポグリフが助け出したなど、翼側でも襲撃者があったと言う説明の中、

『アスカッ、響くんの元に急げッ。彼女の元にも錬金術師なる者と対面しているッ』

「!」

それを聞き、急いで響の元に飛び上がる。

響がいる時点は妙な音が聞こえた、人気のない場所だろう。そこに出向くと、響の目の前に、謎の攻撃が放たれていた。それを二つの剣、クラレントとバルムンクの魔力放射でブーストし、響の元に飛び込む。

「響っ!!」

二つの銀と竜殺しの剣撃が、それを切り伏せ、地面が左右で砕け散るが、響を守り、後ろに控えさせる中、前を見る。

クレーターの中心にいるのは小さな少女。とんがり帽子で、ローブを着ている、金髪の子であり、オレを見て、苦々しく睨んできた。

「貴様か………異物」

「君は」

「俺は錬金術師、キャロル………お前が異物、情報力か？」

その言葉に響と共に首を傾げたが、ああそうかと納得する。

「それはこっちで勝手に名付けたことか………貴様がこの世界に、余計な情報を持ち込んだ異物かと言う意味だ」

それには思い当たる節がある。自分は抑止力、異世界の運命を最小限に抑える役割を与えられた魂。確かに当てはまるな。

その様子を見ながら、ふんと鼻で笑う。

「盗み見か、ガリイ？」

そう言われて、別の人、いや、人型の人形が下りてきて、なにか話

している中、後ろにいる響を見る。シンフォギアは纏っていない。
(響は守る力であるシンフォギアで、誰かと争うことを積極的に嫌う。
おそらくどうにかしたくても動けないんだろう………)
そう思案していると、人形の子は消え、キャロルはこちらを見つめる。

「貴様はそいつと違って、戦うか？」

「必要なら剣を取るけど、オレも響と変わらないけどね」

その問いかけに、ちつと舌打ちする。

「貴様もそう言って死ぬ口か？」

「死なないように努力するよ」

そのやりとりをしながら、静かに小瓶を取り出す。僅かな殺気を放ちながら、

「いずれ貴様を解体してやる、それまで待つてろ、龍崎アスカ」

「待つて、貴方は」

そう自分の名前を言った途端、魔力？らしき力が放たれ、二つの剣で防ぐ。

防いだ後には誰も居ない中、静寂が訪れた。

「あの子、キャロルちゃん？ いまのって」

「錬金術師？ 余計な情報ってなんなんだ？」

「分からないけど、奇跡を壊すつて………あれは一体」

そう話していると、響は僅かに身体がぐらつき、それを支える。見た目負傷してないが、打撲だろう。傷を負っている。

「平気じゃないな、少し休むように」

「………ごめん、アスカ………」

「………気持ち分からもないからね」

そしてすぐにインカムを耳に付けければ、

『アスカくんは急ぎクリスくんのもとに。響くんは車を回す、急いでくれッ』

司令官からの指示の下、オレは響を置いて、剣のブースターだけで跳び上がり、急いで向かう。

——天羽奏

少し強引だが、翼や私らを狙っているらしい発言をしたオートスコワラーって言う人形から逃げている。いまは人混みを避けて、戦える場所に行かないといけない。

「セレナ、あんたはマリアと一緒に居ろ。最悪なことを考えれば、翼の足引っ張る」

「奏……………」

「仕方ないだろ、まだロンゴミアドの力が把握してないんだ」

そう、聖遺物ロンゴミアドは、私と適合率が高いが、戦闘経験が無い。セレナの方は、あの女性との長い間共にいた所為か、経験や知識が多くある。実は大学問題も解けたりと、身体を乗っ取られた代金はそれなりにもらっていた。

だが彼女は槍と盾と剣術で戦うスタイルであり、盾だけではどうだろうと、実戦経験点が問題な私達。

と、橋の辺りに来ると、

「！ 来ますっ」

セレナの一言で全員が車を捨てると共に、車が切られ、あの人形が現れる。

「翼っ」

「ああっ」

「行きますっ」

私達は聖詠を歌いシンフォギアを纏う。セレナのギアはアスカ曰く、白セイバーみたいだなと言っていたり、私のは昔のが白基調にしたマント付きになっていたりする。

翼が歌いながら戦う中で、私は中衛で動きを見て、セレナは背後でマリアのそばにいる。

「貴方の仲間は臆病者ですね？」

「私の仲間を愚弄するなっ」

剣が弾かれている。翼の剣術が通じないのは、アスカ以外じゃ初めてか。翼は少しずつ焦りを見せる中、それが現れた。

「なっ」

「!?」

「ノイズ!!?」

そう、人形のそばからノイズが現れ、私達は混乱する。あれはネフィルムと共に無くなったはずなのに……………

「来るぞッ」

「!?」

翼はそれに意識に隙ができ、剣が向けられたが、ギリギリで避ける。だが、

「なっ……………」

言葉を無くす、翼の聖遺物、シンフォギアが、少しずつ消えていく。

「なっ、シンフォギアが……………」

「ちっ」

その時、ノイズが弾丸のように向かってくる。急いでロンゴミニアドを構えながら、それを突き放す。

光の奔流がノイズを飲み込み、よしと思ったとき、

「げっ!?」

私の聖遺物も光のように消えかけた。

「!」

だが、槍が輝くと共に、元の状態へ戻り、元に戻った。

「……………やはり言われたとおり、情報力関係は無意味……………ならもういいでしょう」

そう言いながら、その場から消えて去っていく。

「っ、翼さんこれっ」

「すまない」

急いでセレナが布きれを持ってきてくれたが、これは、

「翼、シンフォギアは?」

「……………無理だ、ペンダントはあるが、機能していない……………」

マリアの言葉を聞きながら、ともかく、

「まずいつ、情報を纏めないと、他の奴がっ」

その言葉に全員がはっとなり、私は急いで通信機に連絡した。

——雪音クリス

ギアが消え始めたとき、ディーラーのような人形が、コインを構えたが、

「真名解放ッ」

二つの光を放つ剣を振るい、ヒポグリフが槍を構え、ノイズを吹き飛ばす。

「よし、クリスぶ」

「!? 見るなッ」

急いで隠したが、あの顔は見たなッ。だがんなことは後だッ。くそッ。

「アスカっ、そいつらは普通じゃねえッ。シンフォギアが消えたッ」

「!?」

その時、ヒポグリフが悲鳴を上げると共に、消えた。

「ヒポグリフッ!?!」

ヒポグリフはダメのようであり、だが剣は一度消えかけたりしたが、すぐに戻ったりしている。スーツも無事のようにあり、アスカは後ろに下がり、私は関係して居るであろう奴を抱える。この際隠すのはやめだッくそッ。

「派手な登場だ情報力、なら派手にやろう?」

「!」

アスカは歌いながら、無数の放たれるコインを全て切り落とし、接近するノイズを切り伏せたり、蹴り飛ばすがまずい。

(私が足引っ張ってる……………)

そう思っ……………いた。

「! くっ」

その時、初めて人形野郎が顔を歪め、身体を反らした。

「……………コインを返すとは、派手なものだ」

そう言われたとき、足下を踏み、コンクリートの瓦礫を浮かせ、それを剣で無理矢理吹き飛ばし、彼奴に投石している。

それだけでなく、弾丸のような速さで放たれるコインもまだ。向こうもそれを知り、スピードと貫通力をあげたりするが、それも見抜い

てコインをまた返す。

(すげえ……………)

私らの中で、アスカは前々からスペックが高かった。たぶん、抑止云々関係無い、色々ありすぎたせいで、全てがこいつの能力に変わったんだ。

それが剣を持ってから、どんどん先に行っている気がする。

まるでそれが、全てを置いて一人で何もかも置いて行くように

……………

(!? いま考えてることじゃねえ)

その時、別の歌、聖詠が聞こえた。

「これは」

「!?」

「デースっ!!」

そう叫び、放たれた鎌が、人形やノイズを消し、私の元に布きれ持つて、現れた。

「お前ら」

「切歌、調っ!?」

「マスター」

矢も放たれたりすると、サーヴァントも現れる。シンフォギアを纏った後輩二人が現れた。それを見ながら、すぐに、

「ジャックッ!!」

その瞬間、彼奴らは霧に包まれた。ロンドン当時の霧を、英霊として強化された毒の霧、暗黒霧都だ。それに包まれた瞬間、雷撃を放つて竜の翼を広げた。

「戦線を離脱する、アタランテ、ジャック」

アスカは私と切歌、調はアタランテが、ジャックは倒れている奴を担いだ瞬間、爆走する。ほぼ光の速さ、ギアを纏っていない私を考慮しても早い。

そのまま逃亡。いまは仕方ない、仕方ない……………

(んな訳あるかッ)

全部アスカに任せたり、後輩に助けられたり……………

何も出来ないのかよ、くっそツ。

こうして待避した後は、私は静かに安全を確保した位置で、ギアを解除したアスカから上着を奪い取りながら、静かに気絶している奴を見る。

「おかあさん?」

「ああいや、アタランテ。未来達は?」

「そちらは無事にです」

「そうか………クリス、この子は」

「分かんねえよ………こつちのことは知ってるみてえだが、彼奴らの味方じゃねえのは確かだ」

「………」

「………どうした?」

そしてアスカはいまは話さなかったが、その人物、エルフナインは、錬金術師、キャロルとうり二つと言うことを知るのは早かった。

29話・錬金術師と龍崎アスカ

エルフナインは、錬金術師キャロルの元にいたホムンクルス。だが彼女に捨てられ、そして彼女のやろうとすること、世界を分解すると言ふ行動を止めるため、装者達と接触。

そして彼女が持つ聖遺物、ドヴェルグⅡダインの遺産で、プロジェクト・イグナイトと言ふ聖遺物シンフォギアのパワーアップ。

色々な話を聞きながら、エルフナイン、男でも女でも無いホムンクルスの子が頑張つて作業室で籠もっている。

「……………しかし」

ドヴェルグⅡダインの遺産と聞いたとき、魂と言ふべきか、別の異名がよぎった。ダーインスレイヴ、一度鞘から解放されれば、生き血を完全に浴びて吸うまで収まらない魔剣。それを思い出した。

高校の教室で窓を見ながら、外に出て動く。

エルフナインちゃんと言うには、シンフォギアの暴走状態を理性がある状態で制御下に置く機能だと、それがイグナイト・モジュールらしい。

そんな話をする中で、世界を分解すると言ふことを企むキャロルが応用して使用して生み出したアルカノイズ。

それはシンフォギアも分解した所為で、現在天羽々斬、イチイバル使用不可。ヒポグリフ使用不可に陥ってはいるが、円卓の盾、ロンゴミニアド、二振りの魔剣は使用可能らしい。むしろ、

「凄いです、軽く、みなさんの聖遺物を見ました。そしたらアルカノイズの分解に対して、すでにアンチプログラムができあがっています」「つまり、私らの聖遺物は分解されないか?」

それにエルフナインは領きながら、その聖遺物の共通点は、
「異世界の聖遺物、しかも高レベルなんて生やさしいレベルではなく、まさに神世の物だからか?」

「可能性は高いと。こちらの神秘と吾々の神秘は、言ってしまうと質が限りなく違います。なにより」

「本当の本物、アーサー王の騎士が囲った円卓から創り出された盾と、

アーサー王が所持して、娘と言う立場にいた彼女に与えた、本物の槍ですし……」

「あーそれなんだが、盾も槍も、歴史を揺るがすレベルのもんだからな」

いまは欠片になり、シンフォギアとして加工されていても、その神祕は神世の物であり、そう簡単に人類に知る物では無い。

ジャック達にも興味津々のエルフナイン。アタランテは宝具持ちであるし、相手側なら、酸の霧も何でも使える。

「オレのはアストルフォが聖杯と繋げてるって話ですし、奏さんのロンゴミニアド、セレナのは円卓の騎士達の円卓。欠片とは言えな」

オレの一言に、エルフナインは目を丸くする。本人からしたら驚くべき話だ。

「円卓？ 聖杯、異世界って……」

「エルフナインちゃん知らないんだよね、アスカのこと」

そしてエルフナインに、オレのことを説明すると共に、聖杯についても説明する。

少なくとも、自分は運命の流れ、その一部であり、今は放置されている身らしいが、その力は聖杯と言うものに繋がっている。

「聖杯、オレの知るもんなら、願望機なんだが……」

「元の話がゲームなんじゃ、どこまでホントか分からないって話だったな」

クリスの言葉に頷き、マリアが腕を組みながら、静かに、

「そのゲーム、貴方の知る聖杯は？」

「あ、うん……確か大聖杯ってもんが地脈に根付いて、長い年月かけて儀式の術式？ になってて、小聖杯ってもん作り出す。本来はそれを取るために、聖杯戦争が行われる話」

七人、七の位で七騎による、大規模バトル。六騎の敗者の魔力を使い、だいたいの願いを叶える物語。

「それでも、物語だから、そう簡単じゃねえし、人の命どころか、町がゴミ以上に軽く消し飛ぶ感じだろうな。最後にやってたゲームは人類史が消し飛んでたし」

「……………はい?」

魔術師達は、倫理、人理など、普通の人にとって当たり前の感覚はなく、知識の探求や真理、根元に至るためなら、どんな手も使う。それが魔術師と言う生き物。

だが、魔術師は根元、世界の真理にたどり着くことはない。

「その前に抑止力が消す。生物は探求し続ける生き物である、だからこそ至ってはいけないって言う考えで」

「それじゃ、魔術師って」

「まず始めに、意味のないことに他人の命や家族の命含め、使つてでも無駄なことに人生を費やす生き物。それ知つても、町一つや、魔術師のマスター殺したりするのに、躊躇いはない」

マスターである人間を殺せば、一騎である英雄と退治するより早いと言う合理的な判断の元で行われる。

元より、最初にこれを知った主人公は、その聖杯戦争の被害者であり、さらにその後行われた聖杯戦争でも、真つ先に死んでは生き返つてる。

「いや、生き返るって」

「その人は死にかけだったとき、アーサー王の鞘を使われてそんなまだったからとか、そう言う理由。それが無ければ何度死んでたか分からない。確か知識じゃ、胴体斬れたはずだし」

そう言いながら、全員が頭を痛める。まあ、よく考えればこれが現実な世界なら、一般人や魔術師に生まれたくないよ。死んだり、生け贄とかの候補とか成りたくない。アストルフオなんか、マスター酷かったよ。あれ、あの人の場合、オレもまずいな。

「アタランテ殿、これは……………」

「事実です、私達サーヴァントも、外道ではありませんが、一般人の心臓を食らい、僅かに霊体を強化する術があるほどですから」

それに全員が青ざめ、誰かがひいと声にするが、

「? おかしなこと?」

ジャックはそう言う。彼女からすれば理解できない。

「おかあさんを守るためだもん、わたしたちはするよ。いまはしなく

ていいからしないけど。するんなら気づかれず、確実にやるよっ♪」

屈託のない笑顔で、殺人鬼としての一面を見せるジャック。もう真名は全員知っているため何も言えなくなり、かつ、

「それでも優しい方つてのが、聖杯がある世界だと、オレは思う」

「……………否定は出来ません」

アタランテはそう言い、オレはそう断言する。藤丸立香、彼を始めとした、オレ達はどれくらい大変な人生なんだろうか。

「ちなみにその主人公と呼ばれたのは、前回の一騎、アーチャー英雄王ギルガメツシユを除き、セイバーアーサー王、ライダーメドゥーサ、ランサークーフーリン、キャスターメディア、アサシン佐々木小次郎、バーサーカーヘラクレス。最後にアーチャー無銘だ」

「……………えっ……………」

全員が息をのみ、黙り込む。それと、

「記憶正しければ、多くの無関係な人が死んだはずだ。魔力補給、相手よりも少しでも上の立場にいるために、周りの人を生け贄にしてだ」

「それがまかり通るのか!?!」

「秘匿されてるから、バレなきや」

「……………」

黙るアタランテ。それが本当にある世界。その神秘でできた聖遺物が三つ。それに少し驚くが、セレナもまた黙っていた。

「私は実際、アーサー王の鞘で延命と、不老で、マリア姉さん達、ルナアタック事変やフロンティア事変を見てたから」

「そうなのですか?」

と、ナスタージヤ教授も尋ね、うんと頷く。

「私の話は詳しくは後で。それで、少しだけ、英霊の人達、彼らの力を見ただけ……………酷い」

「宝具、英霊が英霊たるシンボルと言っても良い、必殺技や特徴、能力を必ず持つて居るんだ。ヘラクレスは12回の試練と言う神話の二元、12回の命を与えられてる」

「つまり、12回以上」

「倒さないといけないデスか!?!」

よく考えるとノイズも酷いが、投擲すれば必ず心臓を穿つ槍なども酷い。

そのような話の中で、抑止力の話もしておく。

「それじゃ、アスカさんは抑止力の一つなんですね」

「ああ、オレの抑止力の役割はとも、都合のいい人物でいいんだろうな」

都合のいい英雄や悪役など、そう言う立場の人物になること。それを聞きながら、他に居る抑止力について聞かれたが、

「後は無銘とグラランド・サーヴァントしか知らないよ」

「無銘って言うのは、あの肌が黒い男か？」

「抑止力と契約して、世界を揺るがす者達を一切合切殺し尽くす役割を与えられた無銘かな？　グラランドはそれよりもやばいときに表に出る英霊、で、いいはず……………」

所々穴あきだが、正直ジャック、モードレッド、メドゥーサ（ランサー）を育てる際どうすればいいか調べているときに知ったことなので、あまり知らない前世の記憶。

クロエもイリヤも引き当てた、ロリコンやシスコン認定されたのはそれが切っ掛けだ。おかしい、兄貴狂王モードもいたのにだ。

「やはりあの時給料全部課金して、もう少しサーヴァント引き当てるべきだったか……………」

「なんの話だよ」

「課金ゲーだったんだよ」

奏さんがそう言い、最後のゲームが課金ゲームだったと言い、あわつと言う顔になる。響と未来は驚いている。

「あ、アスカって、まめにお金とか、そういうの真面目なのに、前世荒かったんだね……………」

「多くの人達がジャックを求め血肉を捧げたはずだ、オレもその一人だっただけだ……………リイは電気代がまずかったから、やらなかったが、最後に来てくれた」

「アスカ……………」

じつちゃんに内緒で持ち金使って引き当てたことがあって、それが

バレて二度としないと誓ったからな。それでできなかったのは内緒にしよう。仲間もロリコンと言うが、オレはその時ばかりロリコンやシスコンでいいと思っただけ。

しかもパーティー用でも何でもなかったし。

「ジャックは来てくれてありがとう。水道代がやばくなっただけだね」「くすぐったいよ」

抱きしめてすりすりしてやる。目一杯かわいがり、甘やかしてやる。

「いまではイリヤとクロエがあれだけの金使っただけで来たのは運がよかった、前世の良い思い出だよ」

「イリヤとかクロエってどんな英雄さんですか？」

「響、オリジナルってもんもある。無銘さんもそうだ」

「ほんと、司令官が大きく咳をする。ああ、もう止めておこう。」

「まあ、そんな話はさておいて、オレの知る世界観がほぼ同じ世界なら、とんでもない神秘でできたものに、オレと奏さんのロンゴミニアド、セレナの円卓の盾は繋がってるってことだ。円卓の盾はマシユを思い出す……あの子クリアー後は主人公と幸せに成ってればいいな」

「……………それは……………」

アタランテが頬を赤く染めてもじもじしてる。やべつ、絆値高いな。藤丸立香、サーヴァントで修羅場はきついぞ。ランスロットとも同じ目に遭わないまでも酷い目には遭いそうだな。

そんなこと思いつつ、エルフナインはへえ……………と驚いている。

「つ、つまり、アスカさんの力は、不老不死が可能な世界であるか?」「少し違うが、相手の肉体乗っ取ったり、魂だけの存在であり続けたりはできたはずだよ」

「少しなんデスか……………」

「しかもそんな方法……………」

「外道の外道ではありませんね……………その辺りはメディアアなどのキャスターが知ってそうですよ」

二人も驚くが、だいたいそうなんだよあの世界。ほぼなんでもあ

り、ほぼな。

「ま、至れないが正解で、実際至りかけたら世界から消される世界だな。こーゆーとき、あの花の魔術師マーリンとか来て欲しい」

「この前マスターが不在の際来て、お茶菓子食べて帰りました」

「野郎今度宝具ぶっ放して」

もうここで平行世界の月の聖杯戦争など、プリズムな方とかも話せば脱線の勢いが加速する。大戦の話もそうだし、っていうより、大戦は赤のアーチャーと黒のアサシンがいるし、知ってるが、他の知識が無い。後付知識ばかりなんだ。

「あの、できれば後で詳しく見せてください。まずはイグナイト・モジュール並び、聖遺物使用可能状態にしてから」

「あいよ」

「うん、分かったよ」

「……………」

その時、セレナと奏さんだけはすぐに返答したが、何故か、

「ああ……………」

時間がかかった。

(なんで時間かかった？ 別に構わないはずだ)

急いで帰路か響達と合流するかと、チャリを走らせる。ちなみにいまの生活じゃ課金ゲームはしてない。手を出してない、出しても装者としての給金は使いません。さすがに躊躇う。まあ、移動用のチャリと、料理器具には使った。エミヤ、オレの圧力鍋は凄いだ。

(マスター)

(アタランテか)

アタランテとジャックは霊体で、本部と装者の警護に就いてもらう。アタランテ達は学生である響だ。

(なんかあったか?)

(いえ、ですが彼女の顔色が……………)

(……………響は守るべき力である、シンフォギアで争うのに、抵抗があるからな。戦士としてどう思う?)

少しの沈黙があるが、

(正直、この世界を見る限り、彼女には戦って欲しくないのが本音です。ですが、戦士として戦えるのなら、それが責務かと)

(……………厳しい現実だ)

(ですが、彼女の思いは間違えていない。それを非難するのは、できる者は居ないでしょうね)

(そうであって欲しいよ)

そう言い合いながら、自転車をこぐと、

(!? マスター敵襲来ですッ)

(!!)

急いでオレは纏って駆けだした。

いまは考えている時間すら無い、それがいまだった……………

30話・血の歌姫と共に歩くために

無数のノイズ、アルカノイズはその矢にて穿たれ、ジャックは解体する。

「響さん達は後ろに下がっててください」

青い人形、ガリイは盛大に舌打ちする。

「私達の目的は装者だ、そこをどけっ」

「悪いが、マスター命令で彼女達を守るのが任なんぞな」

彼女はわざと、先手を許し、この攻撃へ矢を撃つ。

それにイライラしている向こうだが、その中に、またキョロキョロと辺りを見る。

「？」

守られている響達は分からない顔をするが、いま彼女の認識から、ジャックが消えたのだ。

サーヴァントの戦いの中、アスカが彼女達に頼むのは、特性、スキルを戦いの始まりから切り捨てること。

歌姫とサーヴァントの戦い方は違い過ぎて、お互いの能力を下げる恐れがある。これは司令官である弦十郎も知る行為であり、本人らも納得している。

元々アスカは本格的なマスターとして、彼女達を使えないし、歌姫達の戦い方と組み合わせるより、もともとないものとして動いた方がいい。そうしていたがいまは違う。

アタランテの、追い込みの美学と言うスキルで、相手の行動を読み対処し、ジャックのスキル、気配遮断にて追い込む。

「ちっ、まだまだいるんだよっ!!」

そう言つてアルカノイズがまだ出てくる。

それに響が迷うが、

「迷うなら出るな」

「!？」

アタランテはそう言い、矢を構えながら、それを見据える。一閃で何体も貫き、水の攻撃を避けながら、彼女達、未来達も守る。

「これは自分の願いでもある……子供が戦場を駆けるのは、自分と
してもイヤだからな」

「アタランテさん……」

ジャックが静かに構えながら、メスとナイフを構える。

「吾々は戻れない」

ジャックは戦うことに躊躇いはなく、自分は戦う、この矢はすでに
血で濡れている。

だが、彼女達は違う。

「自分が聖杯に願うのは一つ、例え叶わなくても永劫に願う……『こ
の世全ての子供が愛される世界』……」

「アタランテさん……」

「迷う子供を守るのは、自分のつとめだッ」

それに激流が放たれるが、

「それは違うよアタランテ……」

水を、切れぬはずの水を切り、吹き飛ばす剣撃あり、
半竜人と化した、英霊に近いマスターが現れた。

その手には、燦然と輝く銀の王剣と、邪竜の血で濡れた魔剣が握ら
れ、人工の雷鳴を纏う、偉大な英霊と同じ姿のマスターが言う。

自分が心奪われたマスターと同じ言葉で……

『できればそれは、契約している俺達の勤めって言うて欲しいな、俺
もそんな世界がいいからね』

その言葉にジャックも止まり、アタランテは驚き、すぐに納得する。
輪廻の輪にいくら戻ろうと変わらない、根本の魂に誓いを立てて、
矢を構え直す。

「分かりましたマスター」

「頑張るよっ、おかあさん」

「うしつ、行くか」

「次から次へとツ、ガリイちゃんはあんたじゃない装者に用があるのにい〜」

「知るかボケツ、話があるのなら親玉のキャロルをゴスロリファツションに可愛くしてから武装解除して来てもらおうか!!」

「それもそれでいかがでしょうかマスター……………」

呆れながら矢を放つ、雷鳴が放たれると共に滑空して滑る。向こうも水の上で滑るように動き回りながら、対処する。

「こつち来るな女装癖変質者兼ロリコン装者ツ」

「ロリコンだけは受け入れてやるツ」

その時、身体を思いつき後ろに倒し、ガリイは冷や汗を流した。明らかにバチバチと、何かが進められた矢を持ち、弦を引くアタラシテの姿を見たのだから、

『『宝具解放』』

『タウロポロス
天穹の弓ツ』

弦を限界ギリギリまで引き延ばし、放たれた矢に驚き、避けようとするが、その余波だけで吹き飛ぶ。

華麗に滑りながら、体制を戻して、三人と合流する。

「アスカ」

「響達は下がってる」

直撃はと目線で聞くが、アタラシテは首を振る。

瓦礫の中に埋まっただけはいるが、すぐに出てきた。

「うう〜もう酷い〜ガリイちゃんの相手違うって言ってるのにツ。キャラかぶりだし、変質者だしっ」

そんなこと言いながら、薬瓶を出して逃げ出す。

引き上げていく様子に、いまは捨て置くとジャック達に言う。

しばらくして MARIA が来るが、ガングニールを持つというのに戦わなかった響に文句を言うが、それにはアタラシテが止めたりと、話し合う。

マリアもこの前のことで、こちら側で活動していた方がいいとなり、日本にいる中、やはりと言うか……………」

「オレやアタランテ達しか対応できないか……………」

少し悩みものだが、少し引つかかる。

確かに正式な組織として活動するに辺り、装者情報はある程度表側（と言っても国家機関など）に出回っているが、それでも情報は目を光らせている。

なのに、響を狙った行動に、その友達と共にいる時を狙ったことだ。いざとなればすぐに動けるアタランテ達を護衛に回して良かったが、

「マスター」

「分かってるよ」

もしもこれが、現在シンフォギア使用不可の翼、クリス。その他の施設や機関などに回れば手が足りない。

いまだって、セレナと奏さんをどこに置くかで、裏で司令が頭痛めているらしい。

「だがそこは任せるしかないか」

「分かりました……………そろそろ人が増えているので霊体になります」

「ああ、あつ、ジャック。今日はアップルパイな」

「うんっ♪」

嬉しそうにして消えるジャックに、少し耳と尻尾を動かすアタランテも続く。

色々ある中で、少しだけ時間が過ぎる。

響の言いたいことが分かっている。守る為に使う力を、争う為に使う。矛盾している話だが、仕方ないと思う。

それでいいのか？

「……………」

抑止力と言う立場、そう言うものが本当であり、それであると知る自分からすれば、回避できるなら回避して欲しいと思う。

自分は、いやと首を振ると、

「アスカさん？」

そこに、少しだけ休憩のためか、研究室から出てきたエルフナインと出会う。

考え込むオレを見て、首を傾げながらととと近づいてくる。その姿は、あの子、錬金術師、キャロルと全然違う。

だが正直に言えば、何か引つかかる。

「……………なあエルフナイン」

「？ はい」

「キャロル・マールス・デインハイム。彼女のことを話してくれないかな？」

そう尋ねた。

エルフナインはそれを聞き、少しふさぎ込むが、静かに語る。

彼女は元々、イザークと言う父親と共に旅をしていたらしい。

彼は錬金術を用いて、世界の全てを知り、人々が分かり合える世界を目指していた。自分の持つ錬金術に誇りを持ち、多くの人々を救った。

だがその全てを奇跡の一言で片づけられ、あまつ、その力を恐れられ、異端者と言う言葉で火あぶりにされた。

「キャロルは僕を始めとしたホームンクルスを作り、記憶の転写をし続けた存在で、彼女の目的は」

「万象黙示録の完遂か……………」

それを止めるため、キャロルから廃棄処分された自分がここに来た。その鍵と成るドヴェルグIIダインの遺産である、ダインスレイフの欠片を持つて逃亡した。

聞いたとおりの話を聞きながら、考え込む。

「？ アスカさん？」

「……………いや、少し、魂が思い出しただけだよ」

そう、引つかかる何か、それにエルフナインが首を傾げた。

「魂、ですか？」

「……………オレは」

その瞬間、フラッシュバックする。

おかしな話だ、そのようなシーンはテレビで見たかと言われれば、見てないかもと言えるはずなのに、あつたかすら分からないそれを思い出す。

錬鉄の英雄と、青臭い若造の会話。

殺し尽くした。必要と言われ、必要だから、だから殺した。

善悪問わず、ただ『掃除』した。霊長が人類存続のために必要と、万人を救うため、数百の個を犠牲にした。

そんな『自分』に、こう答えた。

例え偽善に満ちあふれた人生でも……………

『俺は、正義の味方を張り続けるツ!!』

ただ正しいだけのもの、それだけのバカげた理想論。

結果、何を見た？

「その人はなにを見たんですか……………」

どこかの誰か、偽善を歩く誰かの話に、尋ねられた。

物語は、彼らの聖杯戦争はそこで終わりを告げて、その後なんて知らない。

「……………偽善に満ちあふれた人生だよ」

だが、答えられる。

「抑止力と守護者になる契約はせず、錬鉄の、もう一人の英雄である自分に成らず、かと言って、結局偽善に満ちあふれた、自己満足の人生を歩んだよ」

愚かな人生を歩んだと答えられる。

「……………その人は」

「幸せかどうかなんて、その時の『俺』じゃなきゃ分からない。決めるのは『オレ』じゃないからね」

ただ言えるのは、ただ正しいだけ、偽善に満ちあふれた、正義の味方を目指して生き抜いたことだけだろう。

それだけは、はつきり言える。

「……………嫌になる」

「アスカさん」

「いや、本当にオレは龍崎アスカかと言われれば、どうなんだろうと

思って」

「えっ……………」

あまりに多くの記録と記憶を持つため、前もだが、龍崎アスカとはなんと言う人間を言うか分からなくなる。

姿はアストルフオ、性格は前世の大学生。力は数多くの自分と縁がある、英霊の力である。

そこにオレはいる？

「……………いや、あるか」

立花響、小日向未来、風鳴翼、雪音クリス、天羽奏、暁切歌、月読調、マリアとセレナと言う、血の歌姫。

彼女達と同じ、シンフォギア、まあ形を変えた異物として使う。彼女達の仲間の一人と言う自分は、龍崎アスカと言うのは自分だけじゃないか。

「馬鹿馬鹿しいこと考えた、初代様に首切り落とされるところだった」

セーフであることを祈ろう。少しばかりバカになればいいんだ。

「響に言わないといけないことができた」

本来、考えすぎているときは未来が支えてくれていたが、これにはオレも関わって良いだろうと、そう思いながらアラム音が鳴り響く。

——
???

廃屋の中、迷いを振り切り、拳を放つ響。

アタランテとジャックは未来をノイズから守っていたとき、

「!?」

アタランテは気づいた、赤い自動人形、新たな敵の出現に驚き、反応が後れた。

「それは幻影だ!!」

そう言われたとき、水が舞い上がり、それに驚き、赤い人形は満面の笑みを見せた。

(まづいッ)

アタランテはすでに矢を構えるが、大きな一撃が、響へと放たれる様子しか分からない。

ジャックは律儀に未来を守ることだけ考えていたため、反応が後れていた。アタランテは自分の失敗を悔やんでいたが、

ヒポグリフが空間を跳んで、響をくわえて防いだ。

「なっ、あれは使えなくなってるんじゃないのかよ!？」

ガリイは爪をかじりながら睨み、それに赤い人形、ミカが距離を取る。

「ギリギリか」

「アスカっ」

「ん？ お前ミカ知ってる、邪魔な奴」

ギアを纏う響を見ながら、それに笑う。

「決意はついたか、未来は凄いな……………」

「えへへ……………ごめん、遅くなっちゃった」

ヒポグリフは姿を消していく。その姿はやはり無理したせいか、響は消えるまでその身体を撫でてあげ、ゆっくりと休ませるように、ギアの中に眠らせる。

「響が答えを出したんなら、オレの答えもいいか」

「アスカの答え？」

アルカノイズの群れが現れ、構えるアスカ。それに距離などを見る。響のギアは、少しでも触れればいけないのだ。

「こたえ？」

「戦う力、守るための力で誰かを傷付ける、答えを言いたかったようだけど。その様子じゃ杞憂だった。ま、未来が側にいてくれればそうなるもんな」

元々この物語、自分はいない。

だがいまはいるんだ。

「バカな男を思いだした、もう一人の俺。ただ正しいだけの自分を」「正しいだけの自分？」

「ミカを無視するなだゾツ!!」

無数の六角水晶のようなものが放たれるが、二振りの剣が吹き飛ばす。

余波だけでアルカノイズも吹き飛ばすが、

「えっ……………」

その手にあるのは王剣と魔剣ではなく、黒と白の巨大な刀だった。

比翼のような黒白の剣を構えながら、アタランテとジャックも驚く。

「アームドギアではない!？」

「おかささんのほうぐ?」

いままでの剣はアームドギアの形を借りた宝具に近い何かだが、これは事実上、宝具と言っている。まさしく、神秘の塊だ。

「あるバカな男の宝具。正義の味方に成るために、ただ正しいだけのバカな男。理想だけを進み、馬鹿正直に誰かを救うことしか考えなかった、身勝手で、子供のようなことしか言わなかった。誰かを救うために誰かと戦い続けた矛盾だらけの人生を歩いた、もう一人の俺の力」

自身の力なんてもん持ち合わせられないのなら、貸してもらおうぞ。

「響、お前もそんな人生になるかもな。まあそれでもいいさ、悩め、苦しめ、そして答えを出せ。未来がお前を支えてくれてる間、オレは無様でも身勝手でも、時間を稼ぐぐらいはしてやるさ」

構える剣から微かにある男が笑った。

皮肉か何かは知らない、だが、

「オレも、キャロルを止める。争うだけの力で、守るために」

「……………うんっ」

拳を握りしめ、背を合わせる響。なんとなく、自分の答えと同じ答え。そう感じて、背中を合わせた。

アタランテとジャックは絶句する。

「魔力、凄い……………」

「そ、そうなのジャックちゃん……………」

「人間じゃない」

ジャックの言葉に、アタランテは首を振る。

「いや違う、これが彼だ」

アルカノイズは自分達も取り囲むが、二人は隙を見せず、それを見る。

あれこそが、龍崎アスカ。数多くの自分と縁から力を借り、守る少年の力。

その中に、自分達のマスターがいると感じながら、

(まだいる……………何か、いや違うなんだ)

彼女は気づき始める。変わり始める少年を見ながら、悪寒が走る。

そのままでもいいのか？と考えてしまう。その先は、人か分からな
い。

「大丈夫です」

そう後ろから、未来が話しかけた。

「私も響も、みんないます」

「……………貴方は強いですね」

そう微笑み、そして、

剣を構え、一歩踏み込んだ。

「!? 不味いミカ引くぞッ」

瞬間、投げられた剣は無数に現れ、三千世界のように、無数の剣が
全てを切り裂く。それと共に爆発する。

こうして彼女たちを退けたが、また少し、ナニかに近づいた。

パンツと本を閉じる。

頭を痛める。ああ痛いさ。

「……………どんだん近づいてる」

そう思いながら、静かに、

「知らないぞ、ああ知らないぞ」

だが、

「覚悟があるなら来ればいい、覚悟がなければ殺してやる」
そう思うしかない。

「さあ、お前の物語を始めよう。血の歌姫達と共に」

自分へ向かって、そう宣言するしかなく、本をまた開いた……

31話・錬金術師対奇跡

エルフナインの面倒を見ながら、研究を持つしかない日々。

オレは王剣と魔剣の他に、黒白の剣を出せるようになったが、異質らしい。

「確かに、干将・莫耶と似て非だな」

しかも壊れた幻想のように爆発させられる贗作剣。

しかも無限のように作り出せられ、四方八方から斬りつけられるという宝具のような技まで使用した。

「宝具とは、それほどまでに強力なのか？」

翼が腕を組みながら、それにはセレナが答え出す。

「実はルナアタック時の、アスカさんの暴走時。翼さん達は多くの宝具と対峙してたんですよ」

「……………まさか」

ケイローンが持つ逸話、彼は射手座に成った逸話から、射手座からの射撃が可能だったし、魔剣はジークフリートの邪竜を殺した魔剣。

叛逆の騎士が持つ王剣並び、多くの逸話からの宝具がある。

「ジャックも宝具もあったな」

「うんっ、マリア・ザ・リッパ聖母解体♪♪」

「霧の中、女性、夜の条件下であるなら、相手を斬り殺すことのできる宝具だ」

補助で酸の霧を生み出すこともできると、ジャックは胸を張るが、皆冷や汗を流す。

マリアはその中で奏とセレナを見る。

「貴方達、セレナのギアはその宝具から」

「うん姉さん。私の宝具は円卓の盾、騎士ギヤラハッドさんの力にて形になった宝具を使えるの。たぶん、私の絶唱は、王城を創り出して仲間達を守るものだと思う」

ちゃんと説明すればその円卓の騎士から力を借りた子が、そういう使い方しているのだが、そこまで細かく言う必要はないだろう。

まだ完全に出番が無い彼女だが、盾との模擬戦で自分よりも巨大な

盾を振り回して戦う。正直その借りた人、マシユさんのような戦い方だ。

そして、

「私のはアーサー王さんが使う、神の槍か」

「回転しながら敵を蹴散らすから、だいぶ戦いやすいんですけど」

「ああ、これでみんなのギアが完成するまでは、ここを守るよ」

ちなみにその槍も槍以外の使い方があったえらいことになるのだが、自分の関わりでバグのように力が目覚めている感があるが、気にしないことにする。確かにグランド達が出てくるわけだ。

「セレナ、戦い方とかは平気なのか？」

「はい、ギアラハッドさんの記憶も曖昧で。穀潰しを殺したいとしか、よく分かりませんが、マシユさんの記憶はあるので問題ないです」

マリアを始め何人かずつこけた。セレナはとても良い笑顔で、ランスロットを穀潰しと言い、嫌悪している。

いや、彼女の場合、彼女を器にしていた王女様の所為だと思おう。よく考えれば、兄の力を借りた妹さんのようなものか。ややこしい。ともかく、時間だけが過ぎていく。

そして一気に攻め込まれる。

動力施設やら、もうなんやら、ここにまで攻撃、アルカノイズが押し寄せて、ともかく他の施設は諦め、イグナイトモジュールを作ることを守ることにした。

「はああああああああああ」

セレナは盾を振り回し、奏さんは槍で吹き飛ばす。

無論、贗作剣を何本も作り、起爆させながら、アーチャーであるアタランテの猛威もあり、死者は食い止められている。

「やっぱり私たちのギアは」

「分解できないらしいな」

「！ 来ますっ」

赤い水晶の弾丸に炎に、そして、

「キャロルちゃん……………」

錬金術師キャロルが、オレの前に立ち尽くす。

その顔は不愉快なものを見るように、こちらを見ていた。

「……………異世界の奇跡、抑止力か」

「!? なんでもそれを知ってる」

「……………貴様に答える義理はないッ 貴様という奇跡は俺が壊す!!」

豎琴のようなものを空中から取り出し、それを奏でる。それは、

「聖遺物ツ!?!」

突如ギアを纏い、成長するキャロル。さすがにびっくりしながら、その様子を見る。

自分の成長した胸を触り、ふんつと鼻で笑う。

「まあこの程度か」

「おいおい……………」

ともかく、やるべきことは、彼女の進行を食い止め、できればここで止める。

やるべきことを考え、慣れ親しんだ魔剣と王剣を取り出し、構えた。

いつの間にか離されたいま、糸を初め、魔法陣から火などの、二元素を繰り出す。

それをよけながらだが、ヒポグリフはまだ出せない。出せたとしても、やはり調整してからの方がいいと、エルフナインが言っていた。

「なぜだ」

「？」

コンテナの上から見下ろすキャロルに、こちらを見ながら、静かに構える。

「貴様のことは調べた、悪でも善でもない抑止力というわけのわからないものだ」と

「……………」

なぜ知ってる？ それは司令達にとって日本政府すら知らない情報なのに。

だが、それでも糸を操り、ひどくにらむ。

「奇跡そのもの、奇跡にされて奇跡に殺され続けられる人生。なぜお

前はそれでも奇跡で、奇跡にすぎない者たちを守るんだ……」

その時、エルフナインから聞いた言葉などを思い出しながら、彼女にとって自分は、けして許せないものの被害者であり加害者であるだろう。

奇跡を憎む少女。そう考えながら、

「オレはオレだ」

「……………そうか」

そして静かに、

「ならば貴様を解体してくれる!!」

——
???

ミカは無数の弾丸を放つ、水晶は地面に突き刺さる中、それは動き回る。

「うううよけるんじゃないゾ」

アタランテはその俊敏さを利用し、隙間を縫うように矢を放つが、それに舌打ちする。なぜか射貫けない。

（錬金術か、なるほど。多少なり神秘を帯びていると解釈するしかないか）

それでも多少怪訝な顔になる。自分は英霊、サーヴァントだ。その矢はいまは現地であるこの世界から用意した、現地物の矢。それに神秘の欠片なぞない。

実はしゃべり方なども多少影響を受けたり、知識の影響も受けている。それは仕方ない、ここは別世界過ぎるのだから。

だが放つための弓は違う、これはアルテミスより授かった弓だ。これにより放たれた矢に込められる神秘は、そうそう貫けられない物があるとは思えない。

そう、前もって対処されていなかったら……………

（なにより、この状況もまずい）

自分のスキルの中に、先手を譲ることで発揮される、追い込みのス

キルがあるが、現状意味は無いのだ。

ほかのスキルもあるが、これも現状意味がない。

そしてもう一人のアサシンも、いまはアルカノイズを考え、ギア未装備者の安全などの確保に動いている。

(時間を稼ぐしかないか)

敵はどうもおバカであり、こちらが律儀に姿を見せているからか、そればかり狙う。その間に、

「くっそくっそッ!!」

無数に無茶苦茶に放つ攻撃や炎に、内心舌打ちするが、

「はっ!!」

それを一閃で斬り、アルカノイズを断ち切る。

弾幕も張られ、それに、

「風鳴か」

「アタランテすまぬ遅れた」

ギアが完成したのか、少なくともアタランテは分からないが、前線に出てきた彼女達を見て、すぐに矢を見る。

「奏とセレナはこのまま人員の安全を、アスカの方には私たちが」

「すまない、矢が少ないため、そうさせてもらう」

「ああ、任せておいてくれっ」

そう言つて、敵を切り伏せる翼を背にして、アタランテは去る。

離れた先ではアルカノイズの襲撃で、即死はしなくとも、怪我を負った者たちが集まっていた。

それを守るジャックだけでなく、奏達二人もいて、余計な二人も不完全にギアを纏いいて、頭を痛める。

「なぜ切歌や調がここに」

「私達だって戦えるデスっ」

「リンカーがないお前たちじゃ、長く戦えないだろバカっ」

「私達より先にリンカーで戦ってた人に言われたくない……………」

調がそうだったので、奏はほっぺを引っ張る。その様子に頭を痛めながら、インカムを借り、アタランテは司令官から指示を聞く。

『アタランテ殿、すまないが、このまま装者以外の戦闘員、非戦闘員の安全確保を頼みます』

「風鳴司令、わかりました」

「アタランテ、わたしたちがんばったよ」

ジャックが胸を張り、それをほほえましく見て頭をなでる。

その間に、

『セレナ?』

インカムから怪訝な声を出すマリアがいたので、セレナの顔を見る。なにか考え込んでいた。

「どうしたセレナ」

「アタランテさん、この状況どう見ますか?」

セレナにそう言われ、アタランテはミカと戦っていた際の違和感を素直に報告、それと共に安全を確保しながら、ノイズを討つ。

「? ジャック、アルカノイズは霧で倒せてたか?」

「? ううん。溶けてなかったよ」

奏の疑問に、アタランテだけでなく、セレナも疑問に思う。

「ジャックちゃんの霧は、ロンドンがまだ有害な霧に包まれていた逸話からの能力ですよツ!? どうして」

「ああ、上位の魔術師ならともかく、そのような概念が存在すらない世界で、吾々サーヴァントの対策がされている……………」

その時、黒い光が空の昇る。それに驚くが、イグナイトモジュールと言う、暴走を装置にて維持する装置を使い出したようだが、

「……………なんだ」

なにか見落としている違和感があると、アタランテの狩人の勘が告げている。

見落としている、はつきりと、

『……………!? まさか』

司令が叫び、念のために様子を見てから、

『奏ツ、セレナくんかアタランテ殿つ、誰でもいい、念のために現場に出向いてくれ!!』

『司令? 現場にはいま響ちゃんが向かって』

『違うッ、なんで彼が、アスカくんがいなければいけない者たちが揃って現場にいない!?!』

それに全員がハツとなる。

奏、セレナ、そしてサーヴァント。ここにいるのは、龍崎アスカがいなければいけない者たちであり、それが現場にいないことにもいささか疑問に思う。

すぐにアタランテが動こうとした、だが同時に、気づく。

「誰だッ」

その瞬間、空間から手を出す者がいた。

四人は武器を構え、後ろの二人や他の者たちも銃器を構える。

割れた空間から、コートやマフラーなど、布と言う布で素肌や顔を隠す何者かが現れた。

「サーヴァント」

「……………」

瞳すら見えず、こちらが見えているかと疑問に思うそれは、グランド達と共にいたサーヴァントであり、それは無数の刀剣を空間から創り出す。

「何を考えている」

「答えず」

刀剣は放たれ、アルカノイズを貫いた。だがまるで向かわせる気もないと、その場にいる。

「なぜだ、マスターたちの話では許可は下りたはずだッ」

「そこをどけサーヴァントッ」

「いいのか？ そのザババの力は、限界が近いぞ」

その言葉と共に、僅かな火花が散り、切歌と調はその場に座り込む。

「二人ともッ」

「私たちは」

「まだやれるデスッ」

「……………アタランテ、ジャック・ザ・リッパー」

「!?!」

その時、二降りの鎌が置かれる。それと共に銀色の剣も地面に刺さ

る。

それにアタランテは絶句する。

「宝具ッ!？」

「ザババの模造品と、アガートラムの模造品だ。欠片を使えばその子達もまともに戦えるだろう。二人の装者、お前たちはここにいてもらおうか」

そう謎の言葉を告げる中、それに困惑する。

「お前……………」

「あなたは何者ですか」

空を割る三本の黒の光、それと共に自分のマスターが戦っていると、二騎は感じ取る中で、疑問しか残らない。

「いまは理想的な状況か否か、全く、世の中は理想通りに事が進まない。そうだからこそ、いるのだろうか」

そう言いつつ、呆れながら少しだけと言って、空間が割れる。

「ただ理想通りの物語、平均を保ちつつ、世界が平和であり、理想が現実へ変わるよう願うとするよ」

「何者だ貴様」

「ただのセイバーとだけ、名乗っておこう。ともかくいまは、ここにいろ……………」

そして空間を壊し、姿をくらました。

イグナイトモジュールを纏い、その猛攻でキャロルは倒れ、その力に、さすがに驚きながら、アスカが出てくる。

「響、大丈夫か?」

「うん……………へいき、へっちゃらかな?」

少し力弱く笑う。さすがに疲れた様子であり、捕縛は自分がするべきかと、キャロルに剣を向けながら近づく。

「キャロル、悪いがここまでだ」

「……………」

こちらの様子を見るが、まだイグナイトモジュールを解いていない

装者が三人に、その勢いに押され、控えていたアスカと、分が悪いが、
「……………くはっ」

わずかに笑みを見せる。

「キャロル？」

「まだまだ奇跡……………俺は必ず、お前を解体するッ」

そう叫び、突然抱き着き、キスした。

「……………えっ」

全員がとも驚いて、キャロルは深くキスして、すぐさま彼女はアスカを突き飛ばすと同時に、小瓶を取り出す。

「!? 待てキャロ」

近距離で大爆発が起き、三人は爆風で吹き飛び、響達は我に返り、二人を探す。

「だっ、危ねえ……………」

「アスカ!」

「おい平気かアスカっ」

「ん、あっ、ああ……………」

口元を拭きながら、少し考える。

「アスカ？」

翼が怪訝な顔で問いかけ、小さな声で、

「後でエルフナインに診てもらおう」

「……………ただの接吻では無かったのか？」

翼のみ聞こえる小声で頷き、まだ戦わなければいけないと顔を防ぎこむ響を見ながら、少しだけ心配する。

「正直、何か飲まされた気がするから……………」

「分かった、立花達には私からうまくごまかす」

「ありがと翼」

その後インカムから、キャロルがイグナイトモジュールにて撃墜、だが隙を見て離脱。その際強力な爆風を起こしたため、キャロルの容体不明。そのまま戦場を離脱したということになる。

サーヴァントのこともあり、わけがわからない顔をして、全員が顔を見合した。

ちなみにキスの瞬間は全装者が見たため、セレナと調と切歌の瞳から光が消えるなどの現象が起きたこと以外、何事もなく進み、アスカの怪訝はエルフナインや医学関係で診てみたが、杞憂として終わる。

「……………」

一人の英霊を見るのは、花の魔術師。千里眼を持つ彼は、静かに出現地に先回りしていたらしい。微笑みながら、こちらを見る。

「なんで君がこう活動するんだい？ 君が何なのか知っている身としては、理解できない。そもそも君は、本来の世界でも活動したことも無い存在だ。異世界で動くのも一番分らないよ」

「当たり前だキヤスター……………俺は動くことは世界が終わっている証であるとも言えるし、そうでないと言える」

そう言いながら、無数の刀剣を出現させる。それにおいおいと呆れながら、杖を構えるとともに、現状の全力の準備をする。

「残機が減るだけだろ？ 人理には問題無し」

「それだけで戦うのかい君はッ!? 痛いものは痛いよッ」

「貴様は二度くらい死ねばいい」

その言葉に呆れながら、なぜ動くかと、そのグランド・サーヴァントを見る。

「君はなぜこの世界で活動するんだい？ グランド・セイバーッ!!」

花の魔術師は宝具を使い、固有の結界に閉じ込める。

彼が住まう世界、一つの塔を囲むように、数多の花畑が広がる楽園。アヴァロンの疑似空間に閉じ込めた。だが彼は気にせず言う。

「……………悪いがそれは一面だ、グランド・キヤスターマーリン」

その瞬間、素顔を隠す衣類がほどけ、その顔や姿、素顔を見せたとき、彼は酷く驚き、へっ?と間の抜けた声を出す。

その素顔があまりに意外だった。

「ただのグランドなら、少し足止めされていたけど、僕はただのグランドじゃないんだよね」

それは少年の声だった。

「君は!?!」

その後、轟音がすべてを飲み込み、マーリンがしばらくこの世界に
来られないようにダメージを与える。

「死ねマーリン」

横腹をではなく、今の肉体を維持する格が大幅に食われて、砕かれ
た。

それだけでは死なないが、これではしばらく彼は活動することはでき
ない。ガリガリとかみ砕きながら、まずつと噴出して、踏み砕く。用
事を終えて消える彼に、

「ちなみに次は水着でバカンスらしい」

なぜかグラウンド・セイバーが目の前にいて、剣を手に持って振り上
げていた。

「なん、だと……………」

驚愕を受けながら、両断される。黄金とともに消えるマーリンの顔
を満足そうに見て、静かに見る。

本来の正史を見ながら、ため息をつく。

「……………ここまで外れてしまつてはもう正すのは無理だからな。だか
らと言つて、逆にここまでぐらつき、力を乱されても困るんだよ」

世の中は、何が何でもこの魂に枷を、試練を、宿命を与える。

逃がさないと言わんばかりに、運命を架す。

「定まらぬ力、ならば次は得る力を定めてもらうぞ龍崎アスカ」

そう言い、手を広げて告げる。

「始めよう、君の、君だけのグラウンド・オーダーを」

亜種特異点・宿命歌姫戦争 『フェイト・ブラッドディーヴァ』

「さあいま刻まれた、異物である君のためだけのこの世界の物語だ。
刻め己を。消される前に、そして正解を手に入れる。宿命から逃れる
ことは貴様には許されない」

苦しめ、

足掻け、

絶望に堕ちよ。

骸の丘で磔にされよ。

「星と霊長の意味すら超えた意思の下、二人目に至るか否か………始まった」

そして観測される前に、その場から消えていった。

不吉な言葉を彼に捧げて………

32話・夏はサービス？

目の前に広がる広い砂浜、政府が借りたプライベートビーチ。

「未来〜こつちだよ〜」

「待ってよ響〜」

「調〜白い貝殻デスっ」

「綺麗だね切ちゃん」

「セレナ、麦わら帽子をかぶりなさい」

「あつ、はい姉さん」

水着姿の美女美少女達に囲まれた龍崎アスカは幸せか？ 一つ言う。
う。

オレは海が嫌いだ。

——天羽奏

約一名が全ての悪を睨むように海を睨んでいた。

けて水着を着ず、一人ビニールシートの上で体軀座りで睨んでいた。
た。

「アスカは泳がないんデスか？」

「そう言えば、どうしてなんですか？」

エルフナインもまた疑問に思う。今回は襲撃や神経を使う事態が続き、装者全員は一時的に休息をとるのが目的だ。アスカ一人だけなぜか黒いオーラを放ちながら海を睨んでいた。

正直、エルフナインには悪いことをしているのは分かる。謎のサーヴァントが残した武器を使い、適合率が上がった聖遺物の調整やらなんやらが終わってのバカンスなのだ。

ジャックやアタランテも水着が着れるほど、ここは貸し切りなのだから、問題ない。

「……………みんなには分からないんだ……………」

響はなんなんだろう？と言うが、小日向だけは分かるのか、言いくそくに語る。

それはとあるプールの日、海パンで出て行ったら係員に止められて、女物を着せられそうになったりとか。

海では女物の水着を着てくださいと怒られたりとか。

ナンパは響や小日向ではなく、自分に向けられたものばかりとか。

響や母親の手により、スクール水着を着たとか。

その写真をいまだに幼なじみたちが持っているとか。

「海が嫌いだ、夏が嫌いだ、浴衣？ 水着？ 嫌いだ、憎い……………これがあるからオレは、オレはああああああああああ」

「とりあえずその写真は無いか小日向」

「やめてやれよッ」

クリスがそう叫び、どうも被害妄想が酷くなっている。

「お前たちだっつてそうだろうっ!? 俺が海パンで泳げば半裸の女性として見るんだろ!! もうやだよっ、オレは男なのにいいいいいいいい」

「落ち着けアスカ、我々はそのようなことはしない」

「マスター落ち着いてくださいっ」

「おかあさんと泳ぎたいな」

「……………半裸の女性って思わない?」

震えるアスカに、全員が頷き、エルフナインはどつちでもあるのでもいいが、アスカは生物上男性だ。そう男の子だ。

そしてジャックのお願いで簡単に方針を変え、着替えて泳ぐアスカ。

その後我々の思いは一つになる。

娘とエルフナインの面倒を見るアスカを遠目で見ながら、静かに私は、

「……………クリス」

「いやだ」

「お願いクリスちゃん」

「いやだ」

「? みなどうしたんだ」

「翼、わたしやお前がうらやましいよ……………」

「姉さん……………」

「せ、セレナ?!」

「マリアお願い……………」

「限界デス……………」

結果マリアはセレナの頼みを聞き、シャツを持ってアスカに話しかける。

アスカはシャツを着て、先ほどと変わらない状態になり、私達を見る形になった。てか翼、あれを直視してなんとも思わないのか、少し心配だよ……………」

——龍崎アスカ

ふて寝する。やはり夏は嫌いだ。

「おかあさん」

「ジャック」

起き上がり、ビーチを見ると数名いないのに気づく。どうやら買い出しに出たらしい。少しふて寝しすぎたかと思いながら、アタランテが来る。

「マスターは夏は嫌いですか」

「……………この姿だからね。精神は元大学生で、転生したときはかなり疲れたし、戸惑ったよ」

そう言いながら空を見る。一番困ったのは、いまの家族との関係だ。

「響や未来には助けられてたよ……………」

正直、父さんや母さんと言いくかつた。なぜならば、すでに死んでいたし、じっちゃんがいたのだから、突然だったようなものだ。

しかも癖が強い。まあだから不自然ではなかったが……………」

「……………そいや、いま何してるんだろう?」

「親御さんのお仕事を把握してないのでですか?」

「いや、子供のデザイナーの母と、会社運営の父だ。実は響の父親

も、動き回る父さんらの運転手として雇ってるんだ」

実は響の家は、一時期コンサート事件の生還者として、世間からバッシングを受けていた。生還者の中には我先に逃げようと、足の引つ張り合いがあったからだ。

だがそれは一部の者たちであり、生還者全員では無い。生還者全員なら自分たちにも非があるなど、翼達側も手を打ったりしたし、覚醒したオレの知り合いということもあり、政府がすぐに鎮圧にかかったのだ。

すべての始まりはコンサート会場の事件、あの日響達二人がコンサートに向くのを知っていて、遅くなるといけないからと、近場で待機して、帰るときは一緒に帰ろうと話になっていた。

まさか全てこうなるとは思わず、そして目覚めた魂に、驚きを通り越すしかない。

「響の親父さんは当時の仕事場で居場所がなくなったり、色々あったな、ウチに一時避難したり、仕事も無くなって、アシスタントとして働くことにしたんだよ。いろんな会社や素材見に行ったりするから、時には海外行ったりする」

「そうなのですか」

「そういえば、母さんはアストルフオと同じ国の出身者なんだよ。正直に言えば、女性で大人になったアストルフオかな？ いまなにしているんだろ」

「ここ最近連絡は響がしていると聞き、なにげにしていけない。特にイベントごとなどはしない。すれば見に来る。」

親に対して壁があるが、転生云々は関係ない壁だ。あの人のせいで我が人生は黒歴史に彩られ、響や未来が汚染されたと言っても不思議ではない。

未来が時折狂気じみた瞳でこちらを見て、女の子の服を生き生きと選ぶのはあの人の影響であり、響がまったく気にしないのもあの人の影響だ。

それがもしみんなに伝染したら？ やべっ、震えてきた。

「調とセレナ、切歌はあのままできて欲しい」

「……………」

なぜかアタランテは遠い目をするが気にせず、とりあえず立ち上がり、軽い菓子だけでなく、食い物も用意するかと思ったとき、

「!?」

水柱が立ち上る。

同時に瞬間的に戦闘衣服に変わるサーヴァント。と共に剣とギアを纏うオレは駆けだす。

すぐに水の上に立つそれに、滑りながら近づく。

「ガリイイイイイイイイイイイイ」

「ちっ、お前か変質者」

アルカノイズと共に、襲撃者が現れた。

「半裸の変質者が出てこないでほしいんですけど、私の狙いは装者なんだよッ」

「見てたのか貴様ああああああああああ」

冷静さを無くすような言い方をされているが、けして冷静のまま、あたりを見渡す。

アルカノイズから、未来やエルフナインを引き上げると共に、マリアとセレナがついていつているらしい。

切歌、調、奏と翼は買い出しに出ってしまった、いまはいない。

「チイイイイイイイイ」

無数の黒白の剣を取り出し、投げるとともに爆撃するが、そんな中でもガリイはニヤリと笑みを見せる。

小瓶が僅かに見え、爆発の際に転送した。

「アスカ!」

「逃げたっ、どうなってやがる」

「ともかくここのを片付けて逃げた方に出向くぞッ。アスカ、爆撃準備しろ!!」

「おう、響とジャックは取り逃したのを頼むっ。アタランテ、手を貸せ」

「分かったよッ」

「うんっ」

「分かりました」

そして後始末の戦い、その最中に森で黒い柱が立ち上がった。

——
???

「姉さんっ!?!」

黒いモヤに覆われ、獣になったマリア。

盾に食らいつき、セレナが弾く。

「あーあ、なんだこれ」

オートスコアラーであるガリイは呆れながらその様子を見ていて、盾で防いでいた。

「ね、姉さんっ、目を覚ましてッ。姉さんっ」

アルカノイズも他にいて、ごめんつと叫んでから吹き飛ばし、エルフナイン達に迫るノイズを蹴散らすと共に、マリアを見る。

「くっ……………」

「あらっらくどうするんだろうこれ?」

完全に見物モードでガリイは呟くと、

何かが閃光のように駆け抜け、ノイズを切り伏せた。

「!? 誰だっ」

「ただのセイバー……………とでも言っておこう」

三本、両手計六本の剣を指の間に持つと言う、滅茶苦茶な構えをする剣士が現れ、静かにそう呟き、ガリイを見る。

舌打ちし、小瓶を取り出し避難するが、暴走状態のマリアだけが残っていて、向かってきた。

「されど、ビーストと違って可愛いものだ」

そして剣を捨て、空間から取り出す大剣にて切り伏せ、その場に気絶させた。その速さに驚き、それと共に別のことに驚くが、いまは姉のもとに駆け寄る。

「マリアさんっ!?!」

未来が側で様子を見て、目線が確認して、セイバーと名乗ったそれを見る。

それは空間から取り出したそれすらも捨てた。

「小日向っ、マリアッ!?!」

翼達も来ると共に、アスカ達も来る。セレナは盾を構えながら、それを睨む。

「あなた、いまの宝具。どこで手に入れたんですか?」

「手に入れた? まるで略奪でもした言い方だな」

「当たり前です、あれはギリシャ神話、大英雄ヘラクレスの武器ナインライプス射殺す百頭。あなたの宝具では無いッ」

それにアタランテやアスカは驚き、すぐに武器を構える。

セレナの気迫に、周りの者たちも武器を構えるが、

「まだノイズがいるのに暢気なものだ」

そう呟いた瞬間、剣閃が降り注ぎ、ノイズを穿つセイバーに、全員が警戒する。

「お前、セイバーだと? 複製の宝具なら、無銘だけにして欲しいが」

「勘違いするな龍崎アスカ、あれは俺自身を象徴する、まさしく俺自身の宝具だ」

「なにを言っているッ、あれはヘラクレスの宝具。如何なる理由があるろうと、偽物以外が誰が持つッ」

激昂するはアタランテだが、気にも留めず、それは首を振る。

「まったく、俺ばかりに気を取られすぎだな」

「なに……………」

その時、未来があつと呟き、響が軽い悲鳴をあげた。

そこに、

「……………響?」

「……………」

「アスカ? 未来ちゃんに響ちゃん?」

三人の民間人がそこにいた。

しかも、

「父さん、母さん!？」

「とりあえずカメラを」

「なんで一丸レフを懐から取り出すんだこの母親はツ?!」

そう叫ぶのは、アスカを女性にして、ウエーブのかかった腰まで伸びた髪、胸がある女性と、優しそうな眼鏡をかけた男性。

そして立花洗がそこにいて、一眼レフカメラで息子達を撮り出す母親。

「待って、いろいろ待って母さんっ」

「やだ」

アスカの悲鳴響く中、そのサーヴアントは姿を消し、イヤツホオオオオと叫ぶ女性と、男性の悲鳴がとどろいた。

「それで、彼らはたまたまここで仕事があり、打ち合わせ後に、子供のお土産を買いに町を探索。その時に」

『例のセイバーなる者が現れたと?』

アタランテにテレビ通話されながら、アタランテは少しおどおどするものの、通話しながら、静かにうなづく。

指令室に沈黙が訪れる。装者のことは家族にも内密にしている国家機密だが、こうなれば出向き説明しなければいけない。

だがそれでも問題点が山積みだ。司令官である自分はすぐに動けない。

『彼らへの説明は緒川に頼むしかないか……俺は国のお偉いさんにこのことを言っておく』

「分かりました、マスターたちにはそう言っておきます。いまはお借りしている施設で詳しい説明を響さんたちとともにしています」

『すまない、手が空き次第緒川を向かわせる。それと、セイバーのことだが』

それに静かに頷く、なぜならば、

「セレナは平行世界のアーサー王の娘と言う立場の子、彼女の知識を見せられたので英霊の戦いなどを知っている人間です」

『その彼女がはつきりと』

そして知識の照らし合わせて分かったが、他人の宝具を使えるとしたら、それは、

「贗作、投影魔術なる力を持つ無銘の英霊、そして全て、世界と言う世界の財の所有権を持つ、ウルクの王ギルガメツシユ。敵兵に囲まれた際、木の枝で撃墜した逸話から、手に持ったものを宝具へと変えるランスロットだけです」

だが後者は元々それがなければいけない。ギルガメツシユなら、素顔を隠すなど絶対にありえないし、他人の宝具など使わない。使っても使い捨て程度しかない。

無銘の可能性がある。一番の戦い方が彼に近いのだが、

『彼はそのヘラクレスを象徴する武器を自分を象徴する武器と言ったことか』

腕を組み考え込む。アタランテもすまなそうにしている、だが言うるのは、

「あれは間違いなくサーヴァントであり、セイバーと言うのならセイバーの可能性が高い。こういうとき花の魔術師がいれば」

『そう言えば、彼はここ最近姿を現すことはないな』

自分たちのところでテレビ買ってほしいと言いに來るのに來なくなった魔術師。色々と考えながら動くしかない。

「ともかく通話はこれで、自分はマスターの方へ」

『ああすまない。藤堯、閉じ方を教えるように』

『はい』

「す、すまぬ。こういうものは知識として知ってても苦手なのだ………」

色々話すしか無かった。

装者としての活動はもちろんだが、一番の問題は、とびっきりの爆弾である自分のことだろう。

正直楽になった。

「これがオレだよ、父さん、母さん」

テーブル越しに伝え終える話に、三人は黙りながら、考え込む。

母親はボケられず、真面目に聞く。それくらい分かる。父親は黙り、静かに息子を見ながら、だがこの親子は、

「響ちゃんを巻き込まずに済ませられなかったのアスカ」

「おばさんっ!?!」

自分の子供より、いや、息子より、他人の娘の身を心配した。

「ちよ、アインハルトさんっ!?!」

洗は焦り、止めるが気にせず、アインハルト・龍崎は息子を見る。

「響ちゃんを危険な目に遭わせるのは、あなたは嫌なはずなのに」

「おばさんっ、それはアスカは関係ないですっ」

「関係あります、この子は貴方、貴方達の側に最も近いんだから」

それは先ほど、バカみたいに騒いでいた女性ではなく、息子のことをよく知るが故に、一番聞かなければいけないことを聞く。

「……………それには洗さん達には悪いと思ってる」

「い、いや、アスカくんは聞く限り、悪く」

「悪い悪くないじゃないです、この子は事情をよく知り、響ちゃんを守ることも、止めることもできた。私が聞きたいのは、どうして響ちゃんを止めなかったか」

酷いかもしれないが、一番の理解者だなど、アスカは思いながら、

「止められなかった、本当は止めたたくても、響は誰かを守る力を手に入れて、自覚し、そして願われたから」

「……………分かった、私からは以上。念のためいうけど、前世とかあろうがなんだろうが、貴方は息子よ。それだけは譲らない」

「それには僕も賛成だからな」

いままで茶を飲んでいた父親、龍崎冬馬はそう穏やかに言う。

「まあ、親失格かね？ 息子より響ちゃんの方心配しちゃったよ」

「冬馬さん」

「おじさん」

親子揃って呆れながら、この家族を見て、アインハルトはほほを膨らます。

「仕方ないでしょ、アスカは響ちゃんや未来ちゃんが大事なんだもの。自分の息子のことくらい分かってます。自分より二人のことばっか

り、自分のことも勘定に入れろって言っても聞かないのなら、響ちゃん達に見てもらおうしかないんですもの」

「……………悪かったな」

息子もふてくされ、冬馬はもう気にせず、二十歳になったら飲みたい酒言えよと言う程度で、赤ワインで肉食いたいと呟く。

未来も響も呆れ、はあとため息をつく洸。

「お、お父さん?」

「……………隠していたことはどうあっても怒る。けどな、俺に親だからどうかと言う資格はない。けど心配はする、信じる。いまの答えはそれしか出せないよ」

苦笑しながら言うが、響はそれを聞いただけでうれしそうに、

「ありがと、お父さん……………」

しばらく会話など、色々してから、すでに元の調子に戻ったアインハルトは、ジャックとエルフナインを捕まえてスリスリしている。切り裂き魔? それが怖くて息子にスク水着せるかと言う。

「んじや、関係ある話。あの全身姿隠した奴になんて言われたの?」

「ん、ああ。単純に光線? みたいなもので逃げ道壊されたんだよ。それで」

『貴方たちの子供がこの先にいる』

「って言われてね、変な黒い光もあって、アインハルトさんが大急ぎで向かったから追いかけたんだよ」

洸さんがそう言いながら、冬馬も静かに頷き、しばらくして別施設の方に移動して、詳しい話をするようなので、装者も何名か動くことになる。

「エルフナインちゃん、ジャックちゃん、またね」

「はひっ」

「うんっ♪」

そんな中、あれは何を考えているかわからないまま、時間は進む

⋮

333話・歯車は狂いだす

とある場所で、銀の腕、アガートラムから歌を回収したのを確認する錬金術師。

キャロル・マールス・ディーンハイム。彼女は傷ついた身体を直しつつ、計画を遂行させるように動いている。

「ちっ、この身体……なかなか直らない」

本来ならあの場でこの身体は破棄し、用意されている身体に記憶をダウンロードして使いつぶすのが最初の計画だった。

だがこの身体は維持しなければいけなくなったため、それができず、負った傷を直すしかなかった。

「身体なんて時間があればいくらでも替えが利くと思ってたが、生身の身体がこうも使わずらいとはな」

少しばかりイライラしながらも、ガリイの仕事は終わった。後はこの肉体を活動可能なほどに直して、動くようにすればいい。残りの仕事も残った物を使えば問題ない。

もう一つの『あれ』も利用できる。

手に入れた情報、世界の根源、星と霊長の意思、抑止力。

知らない世界の仕組み。もしかすれば、あるいはと思う。この世界にも意思があり、それがあつたのなら、

「必ずだ……」

エルフナインを抱きしめながら眠るそれを見ながら、静かに告げる。

奇跡の塊、神秘の象徴。

「必ず貴様を、解体する」

——龍崎アスカ

「本部でしばらくウチの家族を？」

「保護、ですか？」

響とオレの疑問に、司令は静かに頷く。

「まず第一に説明もある、それと例のサーヴァントも気になる」

「セイバー……アタランテ、申し訳ないけど、英霊として何者かわからないのかしら？」

マリアの言葉に、アタランテは首を振り、むしろ不可能に近い。

ナスタージヤ教授もこの場にいる中で、セレナが代表して説明する。

「サーヴァントの戦いはまず、真名、本当の名前を暴くのが普通なの姉さん」

「真名？」

「私の場合、真名アタランテ、クラスとしての位、弓兵アーチャーで、英霊召還の場合、クラス名で通す」

「なぜデスか？」

「そうしなければ敗北する可能性が高いからだ」

そこに、アタランテはあまり言いたくないがと前置きをして、指令室に自分の逸話をモニターに出してほしいと、藤堯さんと友里さんに頼む。

「正直黒歴史公開なんだけどな、サーヴァントにとって」

後でうまいリングゴを食べさせようと思いながら、逸話を見せる。

そして何名か、おっかなびつくりする。

「きよ、競争で男の人殺してたんですか」

「そうしなければ絶えなかったんだ」

「それで、黄金のリングゴに目がくらんで負けてしまった」

「神秘を帯びた果実なんだっ、しっ、仕方ないだろうっ」

その結果ライオンに替えられた逸話から、耳としっぽがあると説明して見せる。

「ともかく、サーヴァントはこのように、逸話から相手のことがわかるんだ。ここから私の宝具も推測できるし、弱点もバレてしまう」

この場合、アタランテへの対策は、太陽も月の加護が無い状態を作り出し、神秘を帯びた果実で集中力を無くさせれば、勝率が上がる。「とまこんな感じかな。サーヴァントはこう言った意味があるから、真名を隠すのが当たり前なんだ。中には意味ねえくらいぶっ飛んだ

スペック持ちがいるがな」

「英雄王ギルガメッシュ。古代の王として、世界の財と言う財の所有者か」

彼の王は宝具として、王の財宝ゲート・オブ・バビロンと言うものがあり、本人ですら分からなくなるほど、世界の財宝と言う財宝を内包した無限の蔵を持つ。

その蔵の中には、世界に飛び散る前の聖剣を初めとした全てがある。

「だから対策なんて立てられない、立てられたとしても、無限の蔵にある名刀、聖剣の主と言う訳ではない彼の王に対して、その聖剣の主となった騎士がその剣に見合う技を叩き付けるなどの方法以外無い」

無限の一には、究極の一で叩き落す。それが英霊の戦いだろうと思いなから、それを認めたいまの英雄王ならどうか知らないが、そういうものだ。

そして話を戻すと、

「サーヴァントの真名を看破するのは、容姿や手に持つ武器、宝具から推測して看破するしかないんだ」

「宝具はその英霊が持つ力の表徴だ、それを偽れることは、できない」
まず持っている英雄王が偽るはずは無い。絶対に無い、ありえない、子ギルだろうが無い。絶対に無い。

なら無銘である投影魔術使いはと言えば、それもない。

「あの自称セイバーは、ヘラクレスの武器を、己を武器と言ったんだよな」

「ああ、ありえない」

ヘラクレスの名を語る？ それもあり得ないどころか、よく考えれば、

「ザババの鎌や、銀の腕の所持もだ」

どうも、調整に使いやすい素材ではあったらしい。三つのギア調整に大きく関わったが、それでもおかしい話だ。

つい英霊だからと納得してしまったが、そうほいほいあるもんじやない。

「セイバーなら、剣士だということなんだろう？」

「ああ、剣の逸話を持つ伝説を持つものだ。含まれてる存在だ」

「? それって」

「小日向殿、吾々として七の位の一つに縛られるわけではない。槍の逸話や騎乗して戦う逸話からライダーやランサーのクラスに成れる可能性もあります」

「ヘラクレスもしかりか」

それに近いと、とある英霊から言われた人は腕を組みながら考え込む。まあそれは忘れよう。この人は死後英霊の座に登録されないんだから、されたらバーサーカーかルーラーか？

「となると、マジで何者だあのサーヴァント。聞けばグラウンド達とも顔見知り……………神霊クラスかな？」

「神霊はさすがに言いすぎですし、なにより当てはまる逸話を持つ者がいません」

どこの贋作師だよ。持ち物から真名を考えれば考えるほど分からなくなるなんて。

一番の問題点は、何者とかじゃなく、なぜ自分の周りに現れ、しかも家族に暴露したんだよと言うことだ。いまの状態で突然敵になられても困る。

「なにがしたい、それだけ分かればいいのに」

「私は、あまり敵になって欲しくないな……………」

響はそう呟く中、静かに辺りが黙り込む。

「ともかくいまは警戒するしかない、いまはキャロル率いる錬金術師もあるんだからな……………」

ということ、話はここまでとなった。

「複数の伝承所持者……………剣士で、あり得る可能性」

ずっと考え込みながら調べているが、なにもなく、本部の施設、ホテル並みの設備でくつろいでいる。

エルフナインとジャックを膝にのせている母親は、ぎゅーとしながら、

「腹搔つ捌いて、ジャックちゃん入れても死なない身体にできないかしら?。」

「冗談だろうがなんだろうがやめて」

父子揃つてのツツコミ、洗は苦笑しながら、響や未来もいる。

「アスカ、そんなにサーヴァントの人のこと、知らなきやいけないことなのかな?。」

「もうすでに父さん達を巻き込んだんだ、何者か調べたい。それに」

なぜまだ関わっている? その疑問に未来もそう言えばと思いな
がら、

「アスカはもうこの世界にいてもいいって、偉い人たちが決めたんだよね?。」

「正確に言えば、オレがこの世界にてなにか起きても知らないぞと決めた、だな。すでにアタランテとジャックが、藤丸立香と言うマスターのパスと混線して、オレと契約しているし」

そのまま床、カーペットに倒れている。頭が痛い。

「英霊が流れ込むのはオレの所為なら、止めなきやいけないし、率先してやらなきやいけないんだオレが」

それが英霊と言う力との関わりを作った自分だと思い、それだけは譲らない。譲れない。

「アスカらしいね」

「そうだね」

「うるさい」

そんな子供達の様子を見る大人たちは苦笑して、母親はエルフナインを離さない。正直エルフナインも仕事したいのだが、司令が休ませるつもりで渡している。

「可愛いなく全部終わったら、エルフナインちゃんウチの子にしたい」

「ふへっ!。」

「いいんじゃない? 国籍とかいる際に言えば?。」

そんな感じの中、冬馬もまた静かにいいよと言うので、後は事件を終わらせるだけになった問題だった。

そんな話の中、連絡が入る。

「響」

「うんっ」

「ジャックは母さんたちと家に居ろ、アタランテも本部待機を命じる」
ジャック達は静かに頷き、二人して出て行くこうとしたとき、

「響ッ」

洗だけは静かに、

「俺は信じるだけかもしれないが……………」

「お父さんっ」

それには満面の笑みで、

「へいき、へっちゃらだよっ♪」

「……………分かった、気を付ける。アスカくん、すまないが、頼むッ」

「はいッ」

そして二人は駆けだした。

——
???

『相手は地下施設で何かしている模様、申し訳ないですが場所が場所だけに、ヒポグリフ使用不可。響さんの他には切歌ちゃんと調ちゃん
と合流できそうです』

「分かりました。とはいえああ言った後で響前倒し作戦かッ」

「しようがないよっ、大丈夫っ♪ へいきへっちゃらで頑張るよッ」

インカムからの連絡を聞きながら、二人は地下の施設へと入ると共に、ギアを纏う。切歌と調もまた合流し、施設を進む。

「！ いたぞ」

すぐに身を隠し、様子を見ると、何かしている。

「壊してる……………じゃなく、マジでなにしてるんだ？」

「ノイズもいる、相手はミカ？つて子だね」

「火のパワータイプ……………響頼りだ、いくぞ二人とも」

「はいデス」

「分かったよ」

こうして四人はすぐに飛び出て、行動を開始する。

「ん、なんだゾ?」

作業の中、すぐにミカへと向かっていく響。ノイズが壁になるが、それを断ち切る三人。そのまま突き進む。

ミカは何していたか分からないが、平然と攻撃を初める辺り、なにしかかったか分からない。

響が何をしていたか問いただが、教える気は無いゾの言葉だけで、攻撃をしまくる。

(すぐに逃げない? ここでもまだやることあるのか?)

とはいえ、響以外、場所が悪い。残りはスピードタイプであり、その機動力はここでは狭すぎ、正確には精密機器が多すぎて守りながらの為、生かせない。

そこに、

「切ちゃんツ」

切歌に向かって水晶の弾丸が放たれるが、

「斬」

魔剣の一撃にて斬り、それに驚きながら乱射してくるが、必要なもののみ斬り続け、接近する。

「この距離ならツ」

「お前邪魔だゾっ、おとなしく解剖されるっ」

両手の大きな手を広げ、火が燃え上がる。一步踏み込みかけたが、避けるしかなく飛ぶ。

「逃がさないゾツ!!」

爆炎をよける中、それに、

「!? まずいッ」

機器が爆発し、まずいまずいと思いつつ、剣を無限に取り出して壁に突き刺す。

「アスカッ」

「まずいっ、崩落し出したッ!!」

どうも大黒柱らしく、辺りの重みで崩れかけている。ともかくそんなに知識が無い以上分からないが、剣を支え棒にするしかできないため、作っては支えるように補強する。

「？　まずいのかだゾ。まあいいやっ」

本人は気にせず、攻撃を続ける中、剣で補強するアスカへと迫る。

「させるかデスっ」

「まずはお前からだゾ装者ッ」

水晶体が放たれ、イガリマを振るったが切れず、弾かれ、その場に吹き飛ぶ。

「ぐっ」

「切ちゃんッ」

すぐに立ち上がろうとすると、炎が放たれるが、調が防ぐ。

その様子を見ながら、剣を無限に突き刺しつつ、響が迫るノイズを倒す。

「ごめんアスカ、ここは」

「仕方ない、大剣作るッ、ぶん投げろッ」

「了解ッ」

そして大剣をすぐに作り出し、少し驚きつつもすぐに、ぶん投げた。それに驚き、爆発して吹き飛ばした。

「あーもう、ひどいんだゾっ。もういいっ、帰るッ」

そう言っつて、そのままノイズとも一緒にすぐに姿を消す。

「もう、女の子にあんなもの投げさせないでよ」

「悪かった……………」

その時、世界が揺れ、その場にひざを折る。

「アスカ」

「!?!」

その場でアスカは倒れ、響に支えられている。

二人の装者は喧嘩していた。

曰く、自分は守られている子供ではないと。

だが、それを深く思わせる人は倒れた。

夕暮れの中で強さとは何かと口論しつつ、している場合ではないと知りながらも、どうしてもそうなって街を歩いていると、

「デス？」

「あれって」

「あつ」

立花洸と龍崎冬馬、二人してお酒を買って出てくるのを見つけてしまった。

「いくら狙われてないからって」

「何も言わないで出るのは不謹慎デスっ」

「あつはは、ごめんごめん」

「響達が忙しそうだし、アスカくんは魔力不足？　で少し休めばいいって話だから、冬馬さんが」

「それもごめんな洸さん、ついつい」

たつははと力無く笑う男。あのアスカの父親らしくなく、弱々しい雰囲気なのだが、不謹慎な感じではなかった。

過去形なのは、いまこんなときに、お酒を買っていることに怒る二人。

「いやね、いい赤ワインあったな〜って」

「アスカが二十歳になるのはまだまだ先デスっ」

「早すぎ」

「ははっ、アスカはね」

「……………はい？」

洸を初め、全員が首をかしげる中、

「いやね、もう一人はどうかなって」

そう言って、こちらを見た。

「君はどうだい？」

そう言われ、洸々空間から姿を現す。まさか顔ノフェイス・メイキングのない王が見抜かれるとは思ってもいなかつた。

「……………」

ともかく、姿を現し、三人が啞然となる様を見ていた。

「やっぱりアスカの家族デス」

「うん……………」

「あの家、気づかい、人の気配、動きとか察するの尋常じゃないんだよ

……」

洗はそう言いながら、安物のコップにワインを注ぎ、それを飲むサーヴァントと冬馬。洗は二人に缶ジュースを渡しながら、さすがに自分も缶ジュースだった。

どこかの神社で、ワインを飲む。

「いつから見られてると思った」

一口飲み終え、聞くと、

「え〜きつと初めからとかじゃないかなって。だって君、僕らにアスカのこと知らせて、何か企んでるんだろ？ なら初めからさ」

それにそうかと答え、二人は驚きながら目の前の男を見る。洗は頬をかく。

「相変わらずですね……………」

自分が世間の重みに潰れかけたときも助けた家族である。

「せっかくだ、三回だけ質問に答えてやろう」

「三回で君の真名看破？ 専門や知識知ってる息子ですらサジ投げるのにな〜」

そう言いながら、眼鏡を拭きながら、二人は目の前のサーヴァントをよく見る。

（男か女でだって、判断材料デス）

（ならきつと役に）

「ああきつと性別は意味ないだろ、あまりに意味ないから聞かないからね」

「懸命だ、俺の真名に性別は意味は無い」

二人はずっこけ、その様子をつまみにワインを飲むサーヴァント。洗は呆れている。

そしてん〜と言いながら、

「…………君はアスカ、正確には前世来世含めてのアスカだろ？」

「それには領こう、前世であり来世であり現在であると」

それに三人は困惑する。前世も来世もわかる。いることは分かっている。だが、

（現在って）

(それじゃまるで目の前にいるのは)

そのままワインを飲みながら、

「それじゃ、君はルーラーとかいうのと、セイヴァーに成れないだろ。絶対」

「……………ああ」

さすがに驚いたように、そう頷く。

「意味を知っての質問か」

「ああ。裁定者ルーラーは、聖杯戦争だっけ？ その審判者だろ。君は審判には成らない、救世主にもだ」

「なぜだ？」

「君は君を救わない、君は君を裁かないからだよ」

それに舌打ちする。そしてワインを飲む。

「ど、どう言うことデス？」

「ん、そのままの意味だよ。ルーラーは中立でなければいけないけど、アスカって与えられた役目って、中立は無理だなって思ったんだ。むしろ逆、片方に絶対によるんだ。だからルーラーには絶対なれない。はっきり言えばただのセイバーとか言うけど、ぐらんど？ だっけ。彼、そのセイバーだよ。ああカウントしないでくれよ」

それを聞き、黙り込む一同。セミの鳴き声を聞きながら、セイバーは、

「まさか俺の正体を、息子の一面だからで、ここまで看破するのは、人類史始まって以来だ……………」

「子供のことになるとね、親つてのはばかばかしいくらいに思いつめるんだよ。これでも僕、なにかできないかなって思って、せめて君の正体なんだろう？ で考えた、君は息子じゃね？ って」

「……………英雄王どころか、ガイヤとアラヤですら見抜かれてなかったのに」

そう言っつてワインを飲む。

「特別だ、ああそうだ。俺はグラウンド・セイバーであり、その二つのクラスに成れないからって、このクラスに当てはめられたんだ。冠位なんて飾りだからって、俺を冠位に当てはめやがって」

投げやりに答えるが、装者である二人は驚く。

「いやいや、ビーストつてももの倒す役目じゃないんデスか!？」

ビースト、人類悪と言うのを倒す、世界の安全装置？　そう言う存在らしいと思っていたが、それは、

「あそれたぶん、もういるから無理じゃんってことだろ」

「ああそうだよ、ビーストがいるときなんか、人として生きてる俺がいるから、召喚に応じられないからな」

事実上、自分と言うグラウンド・セイバーは、ビースト対策に使えない。だってもう人としてそこにいる。ならば喚ばれない。

「ここまでわかるなんてな、んで最後の質問は」

「ん、ああいや、次で君のことわかるはずないから、もういいやってところかな。そもそも三回でほんと、分からないだろ。だって君は」

そしてはつきりと、

「もうすでにビーストなり、なんなりとで対峙している人間としているんだろ？　わかるはずないじゃないか」

それに静かに、

「……………ほんとあんた……………魔術師のマスターじゃなくなつてよかったよ……………」

すでにその場にいる、すでにあるもの。もしかしたら、

「アスカはすでに君のことを誰よりも知っている。だって君を引き出したから、アスカは滅茶苦茶特別なんだろ？　ならもう正体は分かった、君はアスカ、龍崎アスカだ」

「正解だよ、そして不正解。当たり前だね」

「ああ、龍崎アスカ。僕の息子の一面、二面性なんだから、絶対に当たらない」

洗達は困惑している中で、彼だけ、父親としてそれを看破した。そ

れにああと、冬馬は説明し出した。

「つまり彼は、英霊、グラント・セイバーとして召喚された、アスカであり、アスカじゃないアスカなんだよ。ややこしいけどね」

「ま、マジデス?!」

「それって……………」

「当たり前だろ、格となる魂、そして無かった扱いだが、あったことにもしておかなければいけない記録と実績が龍崎アスカと言う魂の行いだ」

だからこそと、間を置き、

「それを保存する場所が無ければいけない。俺は保存場所で生まれた意識体だ。だからこそ、俺は龍崎アスカが辿った異業と改善した記録の全てだ」

肩で笑いながら、ワインを飲み干して立ち上がる。

「そろそろ本気で、あんたと話していると俺がなんなのは至られそう。それは困る、俺に至った俺は、まだ一人でいい」

「おいおい、あと一つ質問させてくれ。これ父親として知っておきたいんだ」

それに舌打ちししながら、その場に立ち尽くす。仕方ないなと呟きながら、

「最後の問いかけだよ、グラント・セイバーこと、俺の息子アスカでもある君に」

「ああなんだ」

「……………」

いままで悠長に看破し続けた男は、悲しそうな顔をしながら、

「悪人とか、加害者とか言うけど、獣としては物語で言う悪党だけど、人間で言う悪党は…………善の一面と変わらないかい」

外れて欲しそうに尋ねてきた。

だが、

「……………あんたの危惧した通りだ、俺は悪党で罪人で殺戮者なのは確かだ。だが、あんたの思う意味での『悪』だ」

「……………あのバカ息子、死んでも死にまくっても、誰かのために死に、手を汚す道しか選ばないってことか」

知ったこの男を殺すべきかと思うが、それはできない。この男は俺の父親でもあるのだから。できないと思いつながら笑う。

「バカだろ？ だから俺は俺なんかしてるんだ」

そうバカバカしいと思いつながら、周りは理解できていない。当たり前だ、理解される方がおかしいんだ。

「？」

「と、冬馬さんっ」

「ああ洗さん、簡単ですよ……………彼奴は自分より他人を優先して、加害者などになる人間。誰かを守るために自分を犠牲にする人間だったってことですよ」

輪廻転生、何度生き、何度人生を歩こうと、結局進むのは同じ。

「魔竜であろうと、怪物、化け物であろうと、それは人から見れば悪だが、怪物側からすれば悪で無い。ただそこで生きるために人を喰らったりしたただけだ。価値観が違うだけの俺だ」

「だけど人のアスカ達は違う。悪であり、罪であり、害と知りつつも、他人のために血で手を濡らした存在。それが人としてのアスカの悪か」

「そうだ、ここまで知られるのも本当に想定外だ。何のために、あの屑をアヴァロンから出られないように怪我を負わせたか分からないッ」

実際は悪の面である自分がしたのだが。

「子への親の愛は偉大だっ、シェイクスピア辺りは喜びそうだ」

大切な、愛する者の為、世界を犠牲にする殺戮者。悪の一面こそ、それが該当する。

「そもそも悪と正なぞ誰が決められる？ もはや単純にその行いが関係ない者を巻き込むことが悪ならば、俺達は悪人だろうよ」

それは投げ槍に答えつつ、呆れながら芝居かかったようにあざ笑う。

「平凡な人間が生んだ、偉大な子は、如何なる時代、如何なる人物であろうと他者のために生きて、他者のために」

「死に続けるか……」

それに三人は驚く。その瞬間だけ、うつすら笑う。

「それが『俺』だ。救えるのなら血の海をいくらでも作り、骸の丘で磔にされ、罪過の中で正義をやらされる道化。それが俺の罪であり、象徴でもある。ここまでバレて、本当に俺が何なのかバレそうで怖い」

意味が分からないという顔をする者達に、冬馬は静かに、

「俺の息子も同じだというのかい？」

「当たり前だろ、中身は自分の命優先にすればよけられた衝突事故を、他人を救うという一点で全て、そう人生全てを捨てた男だ。それは永劫に変わらない、断言していい、この俺もまた、誰かを救うために、早々に自分の全てを捨てて死ぬ」

それにやっと切歌達は血の気が引いた。

そうだ、この世界、前の人生は最後、他人をかばって彼は死んだ。

そうなるように仕掛けられていたが、そうしなければ死なないからそうされたんだ。

「認められた？ 違う、結局変わらない、星と霊長は変わらないから放置しているだけだ。すぐに、いずれ、死んで戻ってくる。だから監視する程度に変えただけ」

自己犠牲、それが第一の行動理由。それが自分達の絶対共通点と言いつつ、放ちながら、告げておく。

「諦めろ、お前の息子は早く死ぬ」

誰かを救うことを引き換えにと告げる。

「ふざけるな!!」

「アスカは私達が死なせないッ」

それには二人の少女が吠えたが、気にも留めない。

「愛されてるな」

「あーうん、後ろから刺されて死ななきやいいけど……」

それには変にごまかさないで欲しいと怒鳴られ、洗はまあまあと落ち着かせる。そして俺の父親はそれを受け止めながら、

「お前はそう思うのか、アスカ」

「ああ。俺たちはいつだって、骸の丘で一人勝手に死ぬ」

どういう意味か、二人が無理矢理でも聞き出そうと、ペンダントに手を掛けたとき、

「チツ、俺がいる時に動くか、世界ッ!!」

爆炎が起き、赤い自動人形が町を襲った。

34話・彼とオレ

数日前、とある雪山、標高6000メートルの場所にて、彼は待つていた。

「我をこのような場所に呼び込むとは、やはり貴様は不敬だ。冠位英霊よ」

「抜かせ、英雄の王。俺とてこのような仕込み、本来したくは無い」

素肌素顔を衣類を初めとしたコートで覆い隠す、謎のサーヴァントと、雪の山だと言うのに寒さを弾く、魔力を持つ英霊が対峙する。

「して、汝は我を呼び出した理由を述べよ。余が許す、いまは寛大である故にな」

「カルデアが龍崎アスカが滞在する世界で、如何なる神秘を感知しても関わるな。あれはもはや抑止力があるこの世の物語に非ず、魔術師どもの一切合切の手助けも何もいらぬ」

「ほう、確かにそれは理解しよう。よし許す、カルデアには我が言っておく」

だがと、空中に無数の黄金の波紋が広がる。

「そのような雑務がために、この我を呼び出した不敬は万死に値するぞ、冠位剣士」

「くだらないな英雄王。我が正体を知りつつ、勝てると思うか？」

無限の財宝を取り出す王相手に、それを超える神秘を纏う数の武器が現れる。

「死ねいッ」

「終われ、最古の王よ」

瞬間、轟音を感知したと共に、英雄王がやられ、カルデアに帰還すると言う事件が起きたことを、アスカ達は知らない。

——
???

「戦えゝ装者」

無数の乱射する攻撃の中、舌打ちと共に戦えない二人を担ぎ、その

場から飛び離れる。

同時にギアを纏う切歌と調は、ミカと対峙して戦い始めた。

「お嬢ちゃんたちっ」

「!? 待て」

アルカノイズも町に放ち、それにも舌打ちしながら、

「仕方ないか」

名刀、名剣、無名の業物が大量に呼び出されると共に、空に舞い上がり、ノイズを討つ弾丸に変わる。

炎は完全に無視する訳にはいかず、剣を取り、燃えている個所のみ斬り、鎮火させながら、戦いを見た。

「連携がなっていないな」

呆れながらその様子を見た。お互いがお互いを引っ張る、その光景に落胆し、呆れていたら、

「おっと」

「ッ!？」

二人に守られていた男が駆けだした。

「……………」

—— 暁切歌

炎と水晶みたいな弾丸、私のイガリマジヤアスカみたいに切れないです。

イグナイトモジュールを使うしかないですが、これをちゃんと使えるか分からない。

使うべきなのはわかっているです。私達は、自分の罪を償わないといけないんですから……………

「切ちゃんッ」

「しまっ」

「もらったゾッ!!」

炎を纏った水晶が迫る中、私は防衛の体制を取った。ただ、

「どっせいッ!!」

二人の、洗さんと冬馬さんが同時に飛び出して、私を担いで直撃を避けてくれたデス。

「デ、デス!？」

そして炎が放たれたが、調が守ってくれている。そんな…………

「どうして、どうして前に出るんデスカッ」

「い、いや、冬馬さんが出るのみたら、つい一緒に……………」

「やっぱ僕、アスカの父親だね……………彼奴に自分の身大事にしろって言えないや」

そんな暢気なことを言う二人に、

「どうしてデスカッ」

私は助けてもらったのに叫んでいた。

「私は、私達は守りたいんデスっ。もう守られてばかりは嫌なんデスっ」

「切ちゃん……………」

「私は、私は」

それに静かに聞き、洗さんが頭を軽く叩いた。

「デス……………」

「僕はね、一度響達を見捨てようとしたんだ」

それに驚き、調と共にその顔を見る。とても弱々しく、そしてそう思っていたことを後悔している顔で、

「響はね、ノイズの被害があった事件からの生還者で、僕は仕事場の中じゃ、助からなかった子供の大人もいたんだ。そして」

助かりたいがために、足の引つ張り合いによる二次災害が酷く、生還者達は一度、家族も含めて白い目で見られていた。

その所為で仕事先に居場所がなくなり、何より日々の悪意の中、娘よりも、妻よりも、真っ先に音を上げた。

だけど、

それを全力でぶん殴ったのは、アインハルトであり、そして完全にボコボコにして、簀巻きにして船に乗せて、旦那を監視役にして、マ

グロ釣りさせられた。

「いいかッ、これで本当に嫌なら文句は言わないッ。だけど少しでも響ちゃんの父親なら愚痴ぐらいは許す、音をあげるのも許す、だが逃げるのだけは許さんッ」

「ま、しばらく頭冷やそうよ。付き合うから」

そう言って一年マグロ漁船で働いた。

その間娘たちは電話なりで会話して、会話して、

「ああ……………」

本当は逃げたくないんじゃないか。

「そう気づいた、俺は響の父親とか関係なく、響達を守りたいくせに、辛くて一瞬逃げ出そうとしたけど、響達を守りたいのは変わらないかった」

逃げ出そうとしたこと、それはいまでも後悔している。だから、

「だからもう逃げたくないんだ、家族のことからね。響の大事なことから、俺もできることしたいんだ。君らもそうじゃないのかい？」

「……………おなじ……………」

「わたし、たちは……………」

「君たちが誰かを守りたいのは、守りたいからだろ？ 守られながらだって、誰かを守るよ。君がこの子を、この子が君を。いま僕らを守ってるように、君らは誰かに守られながら、守ってる。それだけは本当だよ」

「!?!」

それに二人は驚き、そして静かに胸のブローチに触れる。

「守りながら、守る……………」

「わたし、たちは……………」

そして冬馬も静かに、

「これくらいしかできないし、あれと戦えるのは君たちだ。けどそれでも君たちや子供たちを守りたいのは変わらないよ僕ら。君らもそうだろ？」

そして、

「私は」

「私達は」

お互いの顔を見て、決意するように頷きあう。

炎を吹き飛ばし、二人の前に立ち、はつきりと、

「私達は罪を償いたい、もう誰かに守られ続けるのは嫌だ」

「だけどそれだけで、それだけで守りたいんじゃないッ」

お互い手を結びながら、

「守りたいから守るッ、イグナイトモジュール!! 抜剣っ」デスっ」

——龍崎アスカ

「忘れてた……この人はあの人の旦那だった」

「お父さん……」

念のために傷を見てもらいながら、子供たちに避難の目を向けられている父親達。洗さんも父さんもそっぽ向く。

切歌達のこともあるから、これ以上追及するのはやめよう。アッパを始めた母親もいるし。

ともかく、切歌達はミカを撃退した。司令やクリスからの注意も終わり、例のサーヴァントを聞くしかない。

「オレがもう知っているんだあ?」

「そうデス、あとはびーすと? ってのがいるときに、すでに人としているから召還されることがないとかなんとか」

「ゲートティアとティアマトしか知らないぞオレッ。後は一人」

「三体もいるじゃないデスカっ」

切歌にそう言われながら、彼らの記憶を、

「あつ、対峙したマスターのサーヴァントというじゃん」

「デデスっ!?!」

というわけで、詳しい話はアタランテから聞こう。

指令室で、ナスタージヤ教授やセレナ達、全員がいる中で、詳しく謎のサーヴァントの真名看破の話をするが、アタランテが果たして戦

いに参加していたかなんだけど……

「ビーストに関してですが、参加は陰ながらですので知ってます」
「ですよ〜」

ビースト、人類悪。人間の獣性によって生まれた七つの罪。人類の自業自得の死の要員である。

アタランテとジャックが本来契約している、天文台のマスターこと、カルデアマスター藤丸立香は、その人類悪を、三度退けた。

「人類悪とは、いい言葉ではないな」

翼がそう言い、奏さんも頷く中、まあ頭数で未来もいる。その中の話だ。

「まずオレがはっきり覚えているのは、魔術王ソロモンの亡骸を使つたビースト、ソロモンの魔神、ゲートティア」

「彼のビーストは、ナンバー1、原罪は憐憫」

「れんびん？」

「相手のことをあわれに思ったり、ふびんに思うという意味ですね」

ナターシャ教授の言葉に頷き、少し間違いがあるので補足する。

「人類悪と呼ばれてるが、ビーストは『人類を滅ぼす悪』ではなく『人類が滅ぼす悪』で、自分達の罪なんだ」

「それがビーストか」

そして彼の獣は、ソロモン王の下にいて、自我を持ち、そして、

「ソロモン王の下、多くの悲劇を見続けさせられ続けた」

人類の悲しみ、悲劇、絶望、あまりに哀れな生き物たちの末路。

それを見て王に懇願したが、王は別に気に留めず、人々の過ちを正そうとせず見ていた。

己に実害が無いからね。

そんなことが正しくあつてたまるかと吠えた。

それがまかり通つてしまつてなるものかと吠えた。

そして王の死後、彼らは獣になった。

いまある人類史全てを燃料にし、全てが始まる前にやり直す。

死による悲しみを消すため、死そのものが無かった時代まで遡り、死を消す。

それが彼の、死の悲しみを見続けた獣が選んだ道。

「万能の王の下にいたが故に、人の死が、悲しみの連鎖が許せられなかった獣の物語だ。それでも『いま』を生きている者たちの否定にながるから、阻まれたけどね」

その話を聞き、全員が黙り込む。

生命の死に嘆き、悲しんだ獣は最後に取った行動は、全ての命を犠牲に、死が無い世界の創造だった。

「吾らがマスターはゲーティアに勝利し、世界を、人類史を守り通した」

「それがまずオレが知る獣の知識。これだとまずオレは」

「吾々のマスターである、藤丸立香ですね」

「次なんだけど、ティアマトだよな」

ビーストⅡ、原罪は『回帰』ティアマト。

全ての生命の母親、命を生み出した獣。

そして生命体、生物の形が定まったとき、子である神々に追放された母親。

あらゆる命を形作り、無限に生み出し続ける母親。

生み出し続けるが故、当時の神々は消し去るしか術は無かった。これ以上の生命体の誕生を許すことはできなかった。

彼女は再度世界に現れ、子供を産み続ける。

たとえそれで、いまある世界が塗りつぶされても…………

「もう一度母として、母性愛とも言うべき感情を取り戻そうとする獣。それがティアマトだよな」

アタランテは頷き、全員が頭を痛くなりそうそうで、このティアマトの話は、女の子にしたくないなと思いつつながら、続けるしかない。

「あと、カルデアは第四の獣を打倒した」

「えっ、いつですか?!」

「……………第四の獣は名前も何も伏せて説明するぞ」

災厄の獣として活動するはずだった。

人の競争と成長、妬みと悔しさを喰らい、相手より強くなる特性の獣。

だがそれではないもの、美しいものに触れ続けた第四の獣は、活動することなく、打ち取られたのだ。

天文台の魔術師、その最初のサーヴァントのおかげで。

「Ⅲではないのですか!？」

「Ⅲつてだれっ!!」

「……………あ、愛欲のけもの、です」

真つ赤になりながら、なんか察して、

「ああうん、それ詳しく聞きたくないっていうか。おい藤丸立香ッ、お前なに人類悪四度出会うのッ!? 魔術師上最も現実じゃ出合いなく無い世界レベル限界突破の事件じゃねえかおい!!」

初代様と花の魔術師じゃ対応できないだろそれと叫ぶ。聞こえてこない。何のビーストだったのか聞かないでおく。アタランテの顔も真つ赤で恥ずかしそうだし。

「えっ、待って、それでセイバー知ってるとかわかるかッ。たった一人で達成してるじゃねえかッ」

その通りである。ある意味だから逃げたかと思う。

「他にあるとしたら誰だオレの前世ッ、つてかマジで働きすぎるだろオレッ。もつとちゃんとしたグラランド・サーヴァントを求めるッ。座に戻ったら一斉デモしてくれよアタランテッ」

「そ、そういわれても……………」

「まともなのがアサシンしかない件が問題なんだ」

なぜ天に帰ったソロモンことロマン。お前がいなくなつてグラランド・キャスターがちゃらんぽらん陣営しか残っていない。まともな魔術師を、復活イベを求める。

「お、落ち着いてアスカッ」

「響、お前はマーリンの屑っぷり知らないから言えるんだっ。もう人類は終わっているって言っていいいんだぞッ」

「くっ」

何も言えずアタランテは目を背ける。冠位の魔術師は滅んだんだ。もうビーストに対抗する手段が無いんだ。

とりあえず落ち着いて……………

「えっ、もうセイバーが誰か分からない。藤丸立香なのはわかったけど、抑止力なんだからオレら」

「ですね、そうらしいとしか」

前世の自分など、ただのジャックロリコン学生と、藤丸立香、平行世界の白銀の騎士モードレッド、プロトアーサー？ 後分からない。

詳しくはアストルフオしか分からない可能性があるが、彼奴も知らない気もする。理性が蒸発してるんだもの。

なら自分と言う抑止力はなんだ？

もうわけがわからないし、何が起きてるか分からない。

冠位からも、前世来世からも正体を暴き出そうとしてもわけがわからない。

もうそうなると他から自分の前世で導き出せられない。

「彼奴なんなんだよ、ってか俺の前世って言っても、もしも藤丸立香がいなかったらの場合で、本人じゃ無いし」

「……………えっ」

その時マリアが、

「アスカ、あなたいまなんて言ったの？」

「ん、だから、藤丸立香がいなかった時の補助でオレがいるんだろって」

「……………」

青ざめた顔で考え込むマリア。それにセレナも驚く。

「ね、姉さん？」

「マリアどうした、顔色が悪いぞ」

みんなが心配する中で、

「まず、ひよっとしたら前提が間違ってるのかもしれない」

そう呟く。

「藤丸立香がないからアスカが藤丸立香としてるんじゃないから、藤丸立香がいるから、そういう事実が生まれてるとしたら、どうなの」

主人公がいなければ滅びる時代世界に、主人公を配置しておく。
だから問題ない。

それが龍崎アスカ、藤丸立香と言う、魂の役目。

「つまりあなたがいま話してるのは、別の藤丸立香がいたから、貴方が代役をしたんじゃないかと、貴方で結果を得てから、平行で藤丸立香を作り出していると言うことなら……」

「……………へい？」

まるで卵が先かヒヨコが先かの話である。

主人公がいなければいけない物語に、自分をぶち込み対応させ、平行世界を作る。

そうだいつからだ。

いつから自分が、誰かが作った物語をなぞっていると錯覚した？

その始まりが、最初から自分が担っていない。誰もそうはつきり言っていない。

「……………マリアの仮設が正しいのなら、まず全てのビーストに主人公のオレをぶつけているのが正規の記録で、後が違う？ 滅茶苦茶だッ、平行世界とか、ならオレが始まりのアーサー王とかじゃねえかッ」

プロトアーサーがオレとして出てきた、モードレッドは違う。いや、

「この場合プロトアーサーが先なら、モードレッドの順番が違っても正しいのか」

「そもそも誰があなたの転生の順番を決めてるの？ それをはつきりわかる存在なんていないんだもの。ビーストと言う存在に初めて対峙した平行世界全ての藤丸立香は貴方じゃないという証拠も何もないのよ」

「だが、セイバーは冠位であり、ビーストと最初に対峙する存在」

「ですがそれは、もう人の姿で対峙するから召還には応じられない。本来の役目でビーストと対峙するんなら、貴方がすでに人として対峙する場所に生まれるようにされていても、おかしくない」

もう本当にここからは卵かヒヨコかの次元だ。

つまり、ビースト全てと対峙したことがある魂。間違いなく自分はそれである可能性が高くなってくる。

「あの世界の魔術師にこのこと知られば、藤丸立香、解体レベルじゃすまされないんでね？」

つい異世界にいる自分を心配する。魂の履歴がおかしい、リセットされているとはいえ、もしかすれば神話を生き、神話を変える。世界そのものの改善も改悪も何もかも分からない。ただ一つ、普通の輪廻転生ではないのは確かだ。

「その際は全ての魔術師を射殺すので問題ないですッ」

反射的にアタランテが答えた。頭痛い……………

こうしてグラランド・セイバーの真名看破は、諦めるしかない。そうとしか分からないが……………

「もしもそうなら、そうか知ってる？ いや」

血の気が一気に無くなる。当たり前だ、怖いと言うか嫌だ。

頭が痛くなる。気持ち悪い。

「逸話や伝承はともかく、その後に行われる、物語の主人公と言える人物がオレと仮設すれば、オレが知ってるって言葉は全部当てはまる……………」

吐きたくなり、口元を抑える。

知っている物語の主人公は、実は自分でした。嫌だろう、いやっほーなんて思えない。どんな人生だったか、客観的に知っているんだ。どんな、どんな人生を歩いたかを知っている。

「……………もう考えたくない……………」

「その方がいいです……………すでに、あのサーヴァントの存在は、人では理解できない。そして、本人は理解するべきではないです」

アタランテはそう言い、それに頷く。ふらつく体で出ていく。その様子に何も言わず、みんな黙って送り出す。

この時、誰もわからない。

「結局、これって」

「……………色々な本で出てくる主人公、それを全部やらさせたり、代役さ

せられたりされる人生。アスカはそういう役目、それが彼と言う抑止の仕事の「一つよ」

難しい顔をして告げるマリア。何か考えが止められる。いまはここまででいいと、話を終える。

たった一人、世界、平行世界と言うありとあらゆる可能性を解体できると、

うつすらと笑う少女がいたことを……………

35話・もしも、かもしれない、都合のいい物語

その日、クリス、切歌、調、セレナが海底にある施設へ出向くことになった。どうも敵さんは竜脈を利用した大規模な何かをする。

そこまで分かり、色々調べたりするために、竜脈を守る翼、奏、マリア。何かあったときに動く、響とオレ達とで分け分けされた。

事実上、暇なのだが、その間考えることがあるからか、気を使わせたようだ。

自分の過去なんて知るかと思えば思え程、無視できない事態へと引きずり込まれる。許されたんじゃないのかグラランド達。

それに父さんが、

「それはもう許されてるんじゃないか」

「どういうことですかおじさん？」

未来が不安そうに麦茶を出しつつ、施設の部屋で集まりながら、

「…………可能性だけど、僕は彼に聞いた問いかけに『悪人とか、加害者とか言うけど、獣としては物語で言う悪党だけど、人間で言う悪党は善の一面と変わらないかい』と聞いた。お前と言う抑止力の悪つてのは、他人のために大量虐殺した人間性のことを言ってるんじゃないか？」

「…………あり得る」

そう言いながら麦茶を飲む。ジャックを父さんは見ながら言い、アタランテは黙り込む。そういう英霊はいる。

怪物などなら、人側から見れば悪だが、それは生物としての活動で、ある意味外れるが、人は知性を持つ。そして人を守るためにある魂の悪と言うのならば、

「オレは大量に他者を滅ぼすことで、誰かを守る悪？　それがオレが加害者と言う一面なら、オレって言う抑止力はなんだ？」

「抑止力ってなにか分からないのアスカ？」

そう響に尋ねられた瞬間、無限の荒野、刀剣が突き刺さる大地に立つ男が浮かぶ。

「悪い、人類の掃除屋。すでに起きた事態を終わらせる殺人者としか

意味はかみ砕いて覚えていない。それで無銘は一度、狂うくらいに、自分の人生を呪ったからな」

それ以外は、魔術師が根源に近づけば消すなどと言う意味しか分ならず、アタランテは分ならず、ジャックも分らない。

オレが知っていて、ピーストと対峙する人間で、主人公で、もうなんだこの都合のいい人間。オレか。

そういうもんと納得するしかないが気持ち悪い。

「なに考えてるんだよサーヴァントのオレ」

そう悩んでいると、

「おかあさん♪」

そう言っただけ抱き着くジャック。母親の所為でどんどん可愛くなるジャック。母親が満足と言う顔で着せていた。

「にあってる？」

「ああ、かわいいよジャック」

「うん♪」

「エルフナインちゃんの分もあるのよ……全部終わって、気楽に話せられればいいんだけど」

「その時はキャラルの分もよろしく」

そう言っただけ寝っ転がる。疲れる。ほんと疲れる。

響は難しい顔をするが、

「難しくてもやるぞ響」

「アスカ……」

色々難しいことがぶつかると、それはそれ。

キャラルのこととは関係も何もないんだ。

「守りたいんだろ、キャラルを傷つけず、守る力としてギアを使いたい。やりたきややれ、オレは初めからそれで動く」

「……………」

「響」

そう言っただけ響を抱きしめる未来を見ながら、響は微笑む。冴さんも苦笑する。

「そうだ、偽善で正しいだけだろうが、それ以外選べない」

まるでそれは、彼、衛宮士郎の考え方だ。
そう思いながら、

「…………正しいだけの偽善か」

「アスカ？」

立ち上がって、寝つ転がるオレを見る響。すぐに体を動かす。時折響は、オレのことを、本当に…………

「響、スカートの中見えたらどうする気だよ……………」

「あつ、ごめんごめんっ。アスカだからつい」

「あーそうだよ響。少しは慎みを持ちなさい」

怒られる中、母親たちから視線を外す。

「なんかあれば連絡が入るし、一番の問題は、キャロルが全部終えて動いた際だ。その時はアタランテ達は全力で宝具でノイズを。オレ達は」

「キャロルちゃんを止める」

「そういうこと、ま、クリスや翼んどこでなにも無ければいいが」

そう呟き、静かに、だが、

だが……………

——
???

真夜中、隣の部屋を借りていた立花洸と共に、なぜか龍崎家と未来を混ぜて男女分け分けしてしている。ここは女子部屋。

そしてベランダに誰かいるのを感じたため、立花響は起きてリビングへ出向いた。

正直、声をあげたりしなければいけないんだろうけど、

だけど……………

「アスカ？」

「……………」

ベランダにいた、夜の中、月を背にしているサーヴァントと言うものである、もう一人の幼馴染の男の子。

その姿をよく見る。素肌も顔も隠しに隠し、だけど私より背は高く、彼はベランダの手すりに立っていた。

「……………ねえ、アスカは何を伝えたいの」

「……………」

「言えないの？ 私達に気づいてほしいの？」

「……………立花響」

初めて声を出した、やっとのような気がする。

彼の声が、アスカと重なった。

「オレは一面だ、龍崎アスカだったものだ」

「なら私の幼なじみのアスカだよ」

「……………」

ベランダに静かにおり、僅かな目でこつちを見る。

服はボロボロだった。なんでだろう？

それに凄く疲れている、いつもそうだ。いつも何かに疲れて、それ

でも前に出てきては守る。大切な幼なじみ。

「……………疲れた？ 麦茶飲む？」

「俺に疲れは無い」

「……………そうなの」

同じことをやはり言う。

「何億人殺した」

夜風が入るベランダで、彼の声が響く。

「それを超えるほど人を救ったし、殺したし、意味もあり、無かった」

そしてと、

「俺の存在は意味が無いである。ずっと矛盾を繰り返して、ずっと同じことをしている。それが俺の存在、俺と言う、魂の記録と情報と偉業。ただ俺はその保存庫」

「難しいことは分らないんだけど……………」

困ったように苦笑しながら、だけど、伝えたいことがあるから近づく。

「だけど近づけられない。何がそれもヒントのように思える。」

「同じことばかりだ、悪でも善でも、人でも獣でも。俺の人生は、誰か

を救うために己を捨てた」

「えっ……………」

正しいだけ、偽善すら無い。ただの自己満足な選択肢。そう言った。

「俺の選ぶのはそれであり、未来永劫変わらない」

「……………アスカ？」

「俺が唯一、俺と言う人生だったと言える人生。記録……………この世界の記録だけは、俺達にとって特別な記録……………」

そう静かに呟きながら、

「……………君にヒントを与える」

「ヒント？」

それには一つ、

「俺は諦めない」

「例え俺の人生が偽物で、誰かの物であろうと諦めない」

「愚かでも、紛い物だろうと諦めない」

「何が何だろうと諦めない」

「なぜならば、その時の俺は間違いなくオレであり俺なんだ」

「全ての俺の選択肢はどうなるかが誰にも決められないが、俺は後悔だけはしない」

「信じる、俺を。別の俺を信じる」

「そして何度も同じ選択をする」

「諦めない。同じ選択を進む」

「過ちも、正しいも間違いも何かかもその時の俺が選ぶ、俺だけの選択だ。諦めない、そして信じる。救えることを永劫に」

「そして……………そんな俺を信じる人たちを信じる」

そうはつきり告げていく。

「……………アスカ」

「お前なら、アスカを二人目にして、手を結び付けてくれると信じる」
「……………なんか難しいこと言われてるけど」

少し微笑みながら、

「私は私らしく、アスカを、みんなを信じて、みんなのために歌えたいんだよね」

ただいまは目の前の彼のために、笑って手を握る。

……………その手は酷く痛々しいほど、傷だらけな気がした。手袋の上なのに、ボロボロで、それでもきつと、いま言ったことを貫いたんだろう優しい手だ。

「……………ああ」

「ならへいき、へっちゃらだよっ♪♪」

その笑顔を見て、そして、

「なら龍崎アスカが至れると信じよう、俺は……………いつももう一人を信じて、歩き続ける」

そう言つて、彼は消えた。

「……………最後のヒントかな?」

もう頭パンクしてるんだけどな〜と思いつつ、結局やることは歌うだけと知る。

そして水飲んで寝よと、部屋に戻った。

翌朝、連絡は無く、少し心配する中で、本当に連絡ができない。

「これは、響」

「えっと、この場合、中心部で待機だよね」

何かあれば、計画が進んでいると言うことであり、その計画の中心部に待機する。それがいまの自分達。アタラシテとジャックが領きながら、だごと、

「これは許可があるから言うけど、ジャックはこのまま父さん達の警護に当たってくれ」

「うんっ、おばさんたちはわたしたちがまもる」

「孫ができた」

「アインハルト、いまボケてる場合じゃないからね」

そんな感じだが、アスカと響の顔つきは迷いを捨てて、駆けだす。
「響、アスカ」

未来は静かに、

「待つてるからねっ」

その言葉に頷き、彼らは駆けだした。

都市部は何事もなく、アタランテは建物の上から周りを見るが、なにも起きない。

このままなにも起きないままがいいのだが、

「アスカ、連絡は」

「まだ付かない。翼達のところもだ」

やはりなにか起きてる。そう思ったとき、悲鳴が起きる。

空が割れて、中から巨大な施設が下りてくる。さすがになにかあるとは思っていたが、すぐにアタランテは矢を使い、障害物の破壊などをして、姿を見せず、避難者の安全を確保する。

少し無茶なことだが、アタランテは姿を現すことはできないし、こっちはそれどころではない。

「キャロルちゃん……………」

響の言葉に、空間から現れる一人の少女。父親の偉業を奇跡の一言で握りつぶされ、火あぶりにされてから狂った一人の錬金術師。

それに対してすぐに構える二人。

「もう術式は完成してるのか」

「ああ、ガリイ、ミカ、レイア、ファアラは歌の回収を終えたッ」

そう言った途端、施設はビルの上を下り、活動を始める。

もう周りに人はいないのを確認、アタランテには避難活動が終わり次第に来るように言う。令呪は戦いを取って置き、ジャックはそのまま悪いが殺傷力が高いから、守りに待機させる。

「歌の回収……………」

「イグナイトモジュール、これは初めから貴様らに滅びの歌を歌わせるための装置だ。アルカノイズ対策は二の次。自動人形オートスコアラーである彼奴らも、その歌でお前達に倒されることを前提に作った」

「ッ!?!」

驚く二人に、施設が脈動するように機動し出しながら、空中に浮き、こちらを見下ろす。

「俺とエルフナインは視覚が繋がっている、おかげで、お前達の行動は筒抜けだった」

「なっ、だから」

「ああそうだよ抑止力っ、俺にとってお前の存在は目障りで仕方なかった」

ニヤリと笑い、四つの陣から錬金術の、第四元素を操る。

すぐにギアを纏い、構えながら、それにふんと響を睨む。

「やはり戦うか立花響」

「……………少し違うかな」

そう言いながら、拳を握り締める。

「前にお父さんが私の前からいなくなるとき、おばさんが拳で止めてくれた。おかげでお父さんは、心の整理できたって言ってくれた」

それを思い出し、龍崎家の頭のネジの外れ具合に苦笑しつつ、前を向く。

「当たれば痛いこの拳、それでも、私はキャロルちゃん、キャロルちゃんを救いたいッ。矛盾していることなのは分かってるけど、私は」

その時、もう一人の幼なじみが脳裏をかすめる。

ボロボロの姿の、それでも諦めないヒントを託した、彼を思い出す。

「諦めないッ、何度間違いだって言われたって、諦めてなるものかッ!!」

「……………母親の悪いところが似たッ」

だが悪くないと笑い、ギアの剣、王と魔の剣を構える。

「とりあえずあの建物はぶっ壊すッ」

単純な二人はそう決意して駆けだす。

「させると思うか単細胞どもッ!!」

そして吠えるキャロルは無数のノイズと共に迫った。

アタランテは周りの者たちを見渡し、随時インカムで連絡している

と、

『こちら本部、こちら本部ッ。応答を』

「藤堯かっ!？」

『司令っ、アタランテと連絡が付きましたっ』

『応っ、アタランテ殿、そちらの状況はっ』

「こちらは民間人は最低限避難路の確保をしたッ。マスターと響殿は空間から現れた施設の破壊を基準に、錬金術師と交戦している」

『いま翼達、クリス達は全速力で向かわせているッ』

『司令、いまジャックちゃん達、洸さん達が本部近くで確認しましたッ』

『だそうだ、彼らのことも任せろっ。君は打ち合わせ通り、アルカノイズが大量に放たれた際、その矢で討って欲しい』

「了解した」

激突する響の拳を、錬金術の陣で防ぐキャロル。それに、

「キャロルちゃんっ、キャロルちゃんはなにがしたいのッ。どうしてアスカをそんなに」

「俺は認めないッ、彼奴のような奇跡をッ。パパの命題のために、俺は世界を解体するッ」

吹き飛ばし、着地する響は迫るノイズも吹き飛ばし、キャロルを見る。

「世界の解体……お父さんの命題？」

「そうだ、パパは火の中で焼かれる中で俺に言った、『世界を知れ』と……だからッ」

その目に正気は無く、ただ一つのことしか見えていない少女は叫ぶ。

「俺は世界を解体するッ、世界を知る、パパが私に残した最後の命題ッ、そのために」

その言葉に響は、

「違うッ」

その言葉に、睨むように響を見るが、響は引かない。

「キャロルちゃんのお父さんはこんな方法を望んでなんかいないッ、私もエルフナインちゃんからキャロルちゃんのお父さんのことは聞いた、だから」

「黙れッ、お前程度の、奇跡を歌うお前がパパを語るな!!」

無数のノイズが槍のように向かってくるが、

「遅い」

静かに切り伏せる二つの影に、響は微笑むと、無数の弾丸が一斉に放たれた。

「遅くなった、アスカ、立花」

「翼さんっ」

「アスカ、ヒポグリフは返しておくぜ」

「おう」

その時、戦いの中にいなかったギアを睨むキャロル。

「ヒポグリフはこいつらの回収に向かわせていたのか、抑止力」

「まあね」

その時、光の嵐が放たれ、ノイズが吹き飛び、盾と共に、銀の腕、女神の二つの鎌が現れ、全員がキャロルを見る。

「戦況逆転デスっ」

「後はその施設、シャトーを壊すだけっ」

「もうやめろ」

その様子を見ても、キャロルは気にも留めず、

「まだシャトーは動いている」

「まだパパの命題に手が届く」

「なら俺がするべきはただ一つ」

錬金術師、キャロルは叫ぶ。

「邪魔をするな、シンフォギアああああああああああああああああ」

こうして最後が動く。

36話・選択肢

二手に分かれる中で、キャロルは絶唱を歌いだした。

「なっ、錬金術ってなんでもありかよっ」

「言っている場合かよっ」

シャトーにはマリア三人に、セレナと奏が入り込み、ヒポグリフと共に駆ける。

大人へと成長し、絶唱を軽く使う相手に戦う。

シャトーの内部は大丈夫かと……………

「内部にノイズがないデスっ」

「こういうときって、変な罫がありそうですけど」

「……………!?!」

その時、目の前にナスターシャ教授が現れ、足を止める。

無数のミサイルやらの攻撃が放たれるが、セレナが前に出て防ぐ。

そこに黒い槍が突き立てられた。

「!? 姉さんっ」

黒いガングニールを纏うマリアが現れる。まるで過去の幻影のように現れるが、

「せいッ」

セレナはためらいもなく腹を蹴り飛ばし、盾を構えながら睨む。

「悪いけど、一面だろうが偽物だろうが、私はマリア姉さんを間違えないっ」

「せめて葛藤してからにしてやれセレナ」

「問題ないわ奏、こんなことで泣かないわ」

少し震えている気がするが、切歌も調も、武器を構える。

「けど、やる。だよね姉さん」

「……………ええッ」

はつきりと、そして目の前の敵を見る。

「私達の過去は重い罪でできている、けど、いまそれで足を止めるつもりは無いわ!!」

「いまだけ救うかッ、身勝手なッ」

「オレはそういうものだッ」

そして嵐のように放たれる術の中、避け、躲し、そして仲間の援護を受ける。

「だからと言って、もう助けない言い訳にはならない。もうしなくていいことにはならない。諦めるかッ、誰かを助けられる力があるのなら、オレは、諦めないッ」
「くっ」

その時、シャトーの方にも異変が起きる。

「司令殿ッ」

『いまエルフナインと中の者たちが動いているッ、だがこのままでは、膨大なエネルギー波が起きる。衝撃に備えろッ』

「待ってください、それなら中のマリア達は」

『ごめんなさい、悪いけどここまでよ』

『あの時、偽善者って言ってごめんなさい』

『あとは』

『いえ姉さんたちっ』

『あたしのロンの槍とセレナのギアがあれば内部爆発でも耐えられるから、辞世の句みたいなこと言わなくていいからッ』

『デデスッ』

そんなことが聞こえ、ギリギリまでシャトー崩壊をすると通話を切る。

だがそれに目を見開き、叫ぶ少女はいた。

「やめ、やめてッ。あたしと。パパの邪魔をしないでッ」

シャトーの崩壊らしき影と響が見えだし、それに剣を構える。

「アスカッ」

「悪いッ」

そう言ってアスカはキャロルの方に、宝具を構える。

「真名解放ッ」

広大な範囲でエネルギーを放つ。それは一人の少女を守る剣撃。

「つつ、いてて……………」

「だ、大丈夫ですか」

友里さんをかばうエルフナインをかばった洗、仮本部も大きく揺れた結果だ。正直頭を切ったが、平気で笑いながら、

「大丈夫、へいきへつちやらだよ。それより」

「問題ありません、シャトーの世界解体の術式は止まりました」

「よしつ、藤堯ツ、友里ツ」

「装者並び、サーヴァント兩名も無傷。アタランテさんの働きの被害者はいません」

「並びシャトー内部はロンの槍にて中が、映像……………なぜかウエル博士がいます」

「あの時、海底施設でキャロル派と手を組んだが、また主義の違いで立ち位置を変えたかあの男」

ウエル博士は海底施設内で幽閉に近い形で封印されていたが、キャロルにより連れ出されたが、どうもそちらで色々あったらしい。

「途中でシャトー内で協力者らしいものが現れたので、よもやと思いましたが」

ナスターシャ教授はそう言いながら、アインハルトに支えられていた。

一般人もいる中で、彼らはその様子を見る。

エルフナインから視覚、情報を得ていても、動かすことはできないいま、もう、

「万策は尽きたはずだ、彼女は……………」

「キャロル……………」

「どーだつ、これで僕は英雄の仲間だツ!!」

「少し黙ってください、ランスロットみたいで醜いですよ」

「ああそれは嫌だな、ならおとなしくさせてもらうよ」

ウエル博士にそういわれながら、土煙が晴れて、全員がキャロルを見る。

呆然とシャトーを見て、首を振る彼女を見ながら、響は、

「キャロルちゃんもうやめよ、こんなの、キャロルちゃんのお父さんは望んでないよっ!!」

その言葉にびくりと体を震わせる。

「……………ふざけるな」

そう叫び声を挙げ、無数の陣を乱射させる。

「まずいッ、全員ッ」

クリスが叫び、攻撃を避けながら、キャロルは叫ぶ。

「誰が諦めるかッ、誰が終わらせるかッ。奇跡なんか、奇跡なんか、奇跡なんかッ」

その時、

「!？」

片腕が糸に巻き付き、巻き上げられた。

「この俺が解体するッ!!」

「アスカッ」

糸に巻き上げられ、引つ張られる。あまりに強く、斬られるように血をにじむ、そのままアスカを引き上げた。

それに、

(まずい、さっきの防ぐのに力がッ)

そのまま元素のエネルギーがぶつかりながら、ただでさえ防御力は無いギア。少し出血しながら、キャロルの顔が眼前に来た。

「この世界の解体ができないのなら」

そして静かに、

「異世界の、神秘を解体するだけだッ」

そう言つて、口を、口で押えられた。

「えっ……………」

響はあまりのことに驚き、切歌と調、セレナがシャトーから飛ぶ。クリスはすぐに照準を合わせる。

『離れろッ』

数名が同時にそう叫んだが、陣が二人を囲み、目の前で唇を奪われる幼なじみを見て、響も拳を向けて放つが、止められる。

「!?」
「!!」
「?!」
一番分らないのはアスカであり、離れようとするが身体を密着させられ、糸や聖遺物、ギアもいまの体制のままにさせるために、巻き付けてくる。そして、

「?!」
身体に異変が起きる。

『!?』アスカくんのバイタルの変化がツ、彼女、何かしてますッ』
その言葉に、次に動いていた翼が気づき、すぐに巨大な剣と共に飛来し、剣を振り下ろし、奏は光の渦を纏い突進したが防がれた。

そして空気を吸う時間すらしないまま、何かをし、ぷはっと離れる。口元を唇で拭きながら周りの反応を見下すように、

「なんだ？ うらやましいか小娘ども」
そうニヤリと笑い、アスカを離す。地面に落ちると共に、ギアが解かれた。

アタランテが回収し、ジャックが睨む。

周りの数名が本格的な殺意を放つ中、よだれを拭くため腕で拭き、そして、

「万象黙示録、神秘の界……………解体させてもらうぞッ奇跡ッ」

そして彼女は、歌いだす。糸を弾き、音色を奏でながら、
「ああああああああああA a a a a aアアアアあああ」
その歌声と共にアスカが苦しみ、もがきます。

『シンフォギア、ファグニツクゲインが暴走してますッ』
『これはアスカさんと共に絶唱ッ!? まさか』
『だめ、キャロルやめてッ』

「これはどうなってるのエルフナインちゃんっ」
指令室から叫ぶエルフナインの声が、いち早くキャロルのやりたい

目が覚めた、響が、翼が、クリスが、奏が、マリアが、切歌が、調が、セレナが見た世界は……………
「なに、これ……………」

地獄だった。

無数の剣が地面に刺され、見渡す限り、骸が雑に寝かされていた荒野。

それは夕暮れの世界、そして礫にされたような骸から、僅かに血が流れ続けている世界。

「心象世界……………ここが、マスターアスカの？」

アタランテは気づき、世界を見渡すが、あるのは生き物がいない世界、冥府よりも酷く、何も無い訳ではない。あるからこそできた世界。
「……………これは」

その世界の扉を開けたキャロルですら困惑した。これが異世界の心理だとも言うのかと思いつながら、

『至ったか』

声が響く。

『だがお前たちがいるのは入口だ』

「誰だッ」

キャロルの問いかけに、それは言う。

『お前たちは、神秘、いや、世界の根源への入り口を開けた。繋げる歌を歌える者たちよ、いまお前達に、世界、神も星も超えた根源の英知に触れる許可が与えられた』

それに全員が驚くが、だが、

「アスカッ」

その時、アスカは、

「……………脈が、無い」

「おかあさんッ」

「!? 契約が切れてるだと……………」

『対価はもらった、この入口の鍵取る者の命。すでにもらい受けた』
それに響は、響達は凍り付いた。

「……………うそだ……………」

『ここはそういう場所だ』

至れば死ぬ、それが根源。その言葉が響達の中でこだまする。

「いやだ」

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
ヤダヤダヤダヤダッ

響はそう叫びながら、だが、

『ならこの荒野にある魂を見つけろ』

そう言った途端、全員が周りを見た。

誰かを貫く剣、朽ちた剣、いまだ朽ちぬ剣。剣剣剣剣剣と、

「この無限にある剣は」

「彼奴の魂？」

『そこから鍵足る魂の剣を見つけ出せ、さすれば根源への扉が開かれ、
至る』

「そんなのいいッ、アスカを返し」

その瞬間、糸が辺り一面を薙ぎ払った。

「キャロルッ」

「貴様ッ」

クリスと翼が睨む中で、ふんと鼻で笑う。

「鍵と言う大層なものなら、壊れまい。壊して壊して壊しつくすッ。
見つけ出すのはそのあとだッ」

「ぎっけんなッ」

「そのようなことは」

『させない』

三人の娘がほぼ同時に現れ、瞬間的に動き出す。

その様子を見て、翼達も動く。

「ともかく、魂の剣？ それを探すしかないのか」

「ええ……少し姉としていろいろ思うんだけど」

「後にしろっ、愚痴は聞くからッ」

外との連絡を取りながら、それを探す中で、奏は、

「響っ」

「奏さんっ、あす、アスカ、アスカが」

何も言わず、本当に死んだような姿のアスカを抱える響。

「落ち着けッ、彼奴がこんな簡単に死ぬかッ」

「けど、ですけどッ」

「落ち着けッ」

怒鳴り、響を見る奏。

「私は諦めないぞ」

「えっ……」

静かに微笑みながら、ロンの槍を構えながら、静かに、

「あの時、生きること諦めなかったお前たちのために、諦めないお前達からもらった、この暖かい命と力……」

静かにアスカの手を取り、胸に当てながら、

「絶対に諦めないさ。なくに、あたしの弟分がこんなことで死ぬかよ。

一度身体真っ二つになっても生き返ったんだぞ」

そう微笑み、響に言い聞かせる。

そして、

「諦めない」

その時、二人を抱えて飛ぶ奏。糸の攻撃、ノイズまで現れ、剣を壊し始める。

その時、あたり一帯を見る響。

酷い、そうとしか言えない。

骸ばかりがあり、剣で殺されたかのような、そんな悲惨な世界だった。

そんな世界が広がっていて……

「諦めない」

その時、骸の丘ともいえる場所で、血が流れているを見た。

その人は、正しいだけの物語を歩いた。
見せられた、自分の理想の先が地獄だと見せられた。

「お前は偽物だ、俺はお前の理想だ」

「そう、絶対にならなければいけない。自身の身から出た感情で無かろうと」

「正義の味方だと？ 笑わせるなッ」

「そうだ、誰かを助けたいと思った感情がきれいだったから憧れたッ。故に、自身からこぼれた気持ちなど無い!! これを偽善と呼ばず、なんと呼ぶ?!」

だが、歩くことをやめられなかった。

未来の自分の激昂と憎しみを、正しさを見せつけられながらも、選んだのは理想だった。

この体は剣でできている。

俺は、正義の味方を張り続ける。

いつしか分からない場所を歩いていた。

「どこどこだ？ 俺は……………」

そして丘のような場所を歩く、歩きながら、ああと、

「俺は、抑止力と契約しなくても、ここに来たんだな……………」

その時、見知らぬ少女が倒れていた。コスプレ？ のような、少し魔力を感じる衣服の子が気を失っていた。

すぐに駆け寄り、声をかける。

「おい君っ」

「あ……………すか……………」

その子の手にある剣を見る。それは、
「?!」

目の前の丘にある剣と同じ柄であり、ああそうかと納得する。

「俺が最初、この子は……………二番目の知り合い」

そう流れ込んできた情報に、それなら、助けるのは俺じゃないと知

る。

「……………俺は」

理想に足搔き、理想に溺れ、理想に突き進み、理想をかざし、理想を振るう。

人に否定される幻想、綺麗事だけ、正しいだけ、救えるものやことなど数が知れるただの子供のわがまま。

だが、だからこそ、

「……………この身は」

「この身は無限と夢幻の担い手なり……………」

オレとは『理想』であり、理想像。押し付けられ、英雄や怪物へと理想像を押し付けられた魂。

理想に届くことは無い、行きついても先がまた生まれる。終わり無き探求、根源にたどり着くのが人類の成長の終わりだが、理想と言う根源だけは違う。

絶対に終わらない終着点^{ゴール}なのだから、終わることは無い。

人間^俺と言う意味も、怪物^俺と言う意味も、全部が全部、誰かが考えた、理想的な悪役で主人公をする存在。

求められた立ち位置に生まれる、理想的な人物や怪物。

それは夢で、幻想で、本当も真実も何もない。夢物語の主人公が自分の正体。

現実に立ち向かう幻実。

むなしいか？ 悲しいか？

うれしいか？ 楽しいか？

分からない、少なくともその場にいる自分は、そんなことは知らないのだから。

だからこそ言おう。

「まあいいや、いいから帰せ」

そう言つて、ペンダントを掴む。

「オレにはオレの力、龍崎アスカが得た力と思いががある」

一人の青年もまた、剣を引き抜き、そして静かに少女に渡す。

「俺はいらぬ、君の大切な人に届けるんだ。俺は、もうもらっている、アルトリアから、彼女やみんなから……」

はつきり言う。そして、いつの間にか目の前に誰かいる。

「……………」

「……………」

オレが握るのは、響の手。

俺が握るのは、みんなからもらった剣。

「俺は衛宮士郎、ただの魔術使いで、正義の味方を目指してる」

「オレはシンフォギア装者龍崎アスカだ、それがいまのオレだ」

そして、

「それでいい、それこそ自分だ」

その世界は、蒼穹の空が広がる世界。無限の剣と武器が螺旋を作り、塔のように空へと延びる。

そして祭壇がある。とあるものから透き通った水をあふれ出している。

「な、なんだ……………」

キャロル達はそれを見て、息を飲む。

モニター越しの人々も、その神秘に呼吸が止まる。

そして、それを知る者たちは絶句する。

「聖杯……………」

その前に一人の男性が座る。

「ああそうだ、ここは無限の夢幻が作り出す、世界の根源だ」

赤い髪の男は、正義の味方を目指し、ここに至った。
だから、

「彼らに至った」

聖杯からあふれる水からできた泉から出てくるアスカと響。

「ぶっはっ」

「な、なに。あ、アス力平気？」

「い、いや……………キャロルがキスしたあと記憶が吹き飛んで……………なにがなんやら。っってお前、衛宮士郎っ」

「姿を借りてるだけだ、一面だから違うとも言い切れないがな」

そう言われた男は、やっと素顔と素肌をさらして、キャロルを見る。

「ここはあまねく生命が持つ、無限の夢幻を収める空間。君の言うところの、奇跡でできた世界だよ」

「奇跡でできた世界だと」

顔をゆがめ、世界を見る。ああと言いながら、

「誰かが聖剣と言う幻想を抱いた瞬間、その聖剣はこの世界に生まれ、いずれ朽ちて壊れても、永劫に生まれ、永劫に終わり続ける世界。幻想を抱いた者の数だけ、ここに力は生まれ、そして諦めた瞬間朽ちる世界。人が希望を抱き続ける限り、理想を持つ限り、この世界は無限の力を得る」

誰かが思い描いた偽物、本物すら超える幻想。

夢幻と言う名の無限が生まれる世界、それこそが、

「これこそが龍崎アスカと言う人間を初めとした無限の可能性世界で、悪であろうと善であろうと、人であろうと獣であろうと。誰かを救う、何かを救う。他人の為、誰かの為、永劫を生贖にし至った愚か者の世界だ」

それこそが、

「それこそがグラウンド・セイバーの正体、なんてことは無い。彼の冠位剣士の正体は、ただの子供ですら考える、幻想の主人公が形になっただけの、押し付けられた理想像だ」

都合のいい主人公。命を捨て、誰かを救うヒーローこそが、龍崎アスカ。

だが、そこで違うは、

「そして諦めなかった魂だよ」

それはアストルフオが白い髪と尻尾を持ち、耳を持つ男性だった。アストルフオ、それはアストルフオウくんだった。

「何度もバカのように大切な誰かのために、悪でも善にも成り、バカのように人類悪や神々に挑み続ける馬鹿者だよ」

「お前は」

「僕はきれいなものを見た、天文の魔術師と最初のサーヴァントの生き方を見て、僕は討たれた。そして選んだ、僕のもしもは、彼らと同じようなもしもがいいと」

それはビーストⅣ。

「僕はビーストⅣだ。比較の原罪を持つ獣、そしていまここに宣言する」

「おめでどう、神の槍と言う拳持つ歌姫よ。君は原罪の比較、ビーストⅣを討ち、理想像を押し付けることも無く、君は君の幼なじみを掴み取った」

それに、ペンダント。ギアが輝く。

「やつとだ、やつと君は君だけのギア、シンフォギアを手に入れた」
「理想と言う理想像で生まれた冠位の剣士でも、原罪の獣でも無い。龍崎アスカが得た、龍崎アスカが仲間たちと共に得た、龍崎アスカだけの、誰かを救う力だ」

響き渡る歌声が響く、キャロルはこちらを見て、顔をゆがめ、睨む。

「場所は貸す、ここで決着を付けろ」

「ここが奇跡の塊なら、破壊する、解体する、殺して殺して殺しつくすッ!!」

『やめてキャロルッ、パパは、パパはそんなこと望んでいないッ』

「うるさいッ、それなら、パパは、パパはなんで死んだッ。認めない、認めてなるものか!! お前達がいまを守るために戦うなら、俺はいまを蹂躪してくれるッ」

無数のノイズが現れる中、それでも、

「……………止めるぞ響ッ」

「うん……………」

ペンダントから力があふれてくる。歌が胸の内から、溢れてくる。

「私達も諦めない」

「オレは諦めない」

「絶対に救い出すッ」

そして歌姫達の歌が響く、歌が理想郷へと流れる。
これが終わりと始まりの、瞬間だった。

37話・龍崎アスカ

エクストライブが全員に発動した瞬間、龍崎アスカ達、異物のギアもまた、目を覚ます。

女神のような姿でロンの槍を構え、光の翼を広げる奏。

白亜のドレスを着て、鎧纏い、無数の光の盾を空に配置する騎士姫セレナ。

そしてアストルフオの容姿でありながらかけ離れた男性としての目つき、竜の瞳と翼を持ち、スカートでは無くズボン。もこもこの尻尾を持ち、機械のリスのような耳のヘッドホンを持つ、剣士アスカが現れた。

「行くぞみんなッ」

そして全員が空を駆ける。

キャロルの前に現れるのは、奇跡と言うもの、理想と言うものを押し付けられた意識の集合体である、剣士だった。

「エクスカリバー」

そう呟くと、大地に刺さる聖剣が二本選ばれ、彼の者の手のひらに現れる。

「輝け、約束されし勝利の剣よ」

その一撃一撃は究極の一であり、それにキャロルは舌打ちして避ける。

「貴様、なんだその剣は」

「アーサー王伝説を知った者達が幻想して生み出した、聖剣エクスカリバーで、最も良質のいい物を使っている」

「なにッ?！」

そう言い、それすらもその辺に捨てた。

「驚くことは無い、俺と言う存在は、理想像の押し付けられた英雄だ。アーサーとはどのようなヒーローだったかと、第三者により妄想され、幻想を押し付けられた理想像こそが俺であり、俺達だ。この地にある全ての武器や防具は全て、この世に生きる理想に思いを抱いた生

きとし生きる者達が抱く幻想と理想と希望が集う、絶望の地、聖剣も腐るほどある」

瞬間、黄金の流星が、無限にノイズへと降り注ぐ。

本当にアーサー王が手に持つ聖剣では無いが、人が、アーサー王伝説を知り、どのような形をしているか？ どのような強さか？ そう幻想した瞬間、この空間に収納され、彼が使う宝具へと変わる。

理想と言う根源の者が使う、象徴に相応しい、紛い物であり、本物を完全に凌駕する本物の聖剣、魔剣、武器防具達。

「無論、こいつもある、ダインスレイフ」

魔剣すらこの空間に収められた幻想の産物。それを振るいながらも簡単に捨てる。

「聖遺物の使い捨て」

「宝具の使い捨てと言ってもらおう？ 無限のように強大な力を使う。理想的な英雄だろ？」

そう言いながら、キャロルはノイズを槍のように放つが、それも片手を構え、防いだ。防いだ盾は七つの花卉による盾。

「ローアイアス」

「ギリシャ神話の盾ッ!？」

「悪いが貴様はいま、無限の夢幻と相手してるんだ」

「出鱈目デス……………」

「ほんと……………」

それはまだ現れるノイズを、喰らった。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

それは、宝具の解放。己と言う獣の解放。

咆哮と共に、アストルフオウがノイズを喰らい切った。

比較されないため、全て無い場所。無へと帰したのだ。

「ん？」

その獣へ無数のノイズが突撃するが、腕一本で弾かれる。

「無駄だよ、君達は僕を傷つける条件はあるが、威力が足りない」

ピーストIVである自分は、感情も無い、ただ淡々と倒す者以外では

守護者とは名ばかりであり、やることはただ善悪問わず、霊長が決めた存在してはいけない者達を殺すことのみ。

「そして男は過去も未来も現在からも英霊を呼び戦わせる聖杯戦争なる儀式に目をつけ、過去の自分を殺すことにした。ただの自己満足、いや、第二の自分など存在するだけで愚かすぎて笑えないと捨てきり、殺すことにした」

だが過去に出会った男は、もはや過去の自分では無かった。

自分と言う地獄を歩いた自分を見ながらも理想を捨てられなかった馬鹿である。

それでも、

誰かを救いたいと思うことがきれいだからと、言いのけたバカだった。

自分の気持ち誰かからもらった偽物であろうと、

「理想を求め、理想を夢見て、理想のまま、正しいだけの偽善みれの人助けをした愚か者。それが龍崎アスカより先に、この理想が集う場に来て、その理想をいらないと言つて至った正解者だ」

ある多くはここに来て、多くがこの理想を超えた、人知を超えた奇跡に手を上し、失格者になった者達だった。

だが彼らは違う、いらないと言い、手にする権利を手に入れた。

「理想を求め、この理想をいらないが正解だど？」

「分からないと言う顔をするな錬金術師。だが当たり前だろ？」

理想とは自分で手に入れるからこそ意味がある。そう告げる。

「故に与えられる者にすぎた者達は手にする価値すらない。自分で歩み、諦めなかつた者達こそ、理想と言う、神や世界すら超えた力を得るに相応しい、偉大なる愚か者ツ。ここに集う力は、人を守ると、偽善みれの大ばか者達のために存在する、愚者の園。そう、理想とは現実にあっけなく消し飛ぶ弱者の力でありながら、神や世界すら殺す、絶対者の力を言う」

全ては理想、夢、願いや希望。なんて弱々しい、現実に碎かれる思

いだ。

だがそれらは、時に怪物を、悪人を、神すら打ち倒す。歴史と言う記録に、人々の魂に刻み付けるほど、強大な力と成り、世界に刻まれる力にもなる。

「理想なぞ儂い、人によれば理想に溺れ溺死する。だが溺死しながらも叫び続けたバカがいる、そんな生き物を、人は英雄と言う言葉で片付ける。だが本人らには無関係、俺達はただ、現実に立ち向かって吠えただけだ」

そう言い、キャロルを見る。

「お前も諦めないのなら、戦え、この圧倒的な戦局を変えてみせろ」
それに目を見開き、

「ふぎけるなアアアアアアアアアアアア」

怒りの慟哭とともに現れるそれを見ながら、静かに下がる。

「緑の獅子、カオスの段階の段階の原物質の意味。火を吐き、万物の究極的感性をもたらす気か……」

その左右を飛び出す二人の装者の後ろ姿を見ながら、それを見送る。ここからは、

「主役の出番か」

「キャロルッ」

「キャロルちゃんッ」

「認めてなるかッ」

その力を引き出し、喉が潰れるほど叫び歌う。

だが、突如頭を押さえる。

「やめて、パパっ。邪魔しないでっ」

燃やす記憶、そして燃やして燃やして、目の前の存在を燃やす。

「記憶も何もかも要らないッ、もういらないッ。お前を殺す、殺してみせるぞ!! シンフォギアああああああああああ」

二つの腕が迫り、獅子が火を吐こうとする。巨大なエネルギーが集

まりつつあるが、

「響」

「!?」

ただ穏やかに、

「頼むぞ」

その微笑みに、

「うんッ」

その瞬間、二つの剣から輝きが吐き出された。

歌う、歌う。血まみれの奇跡を歌う、運命を架せら、骸の丘で磔にされるように、無数の刃が身体を、魂を突き刺される魂の剣士が歌う。そんな末路を永劫に繰り返そうと、穢れきった奇跡を背に、

「諦める? いいや……………オレがオレである限り、歌い切ってみせるッ」

それは、怪物を討ち、英雄になった剣士の一振りを模した剣撃。

それは、自分の終わりにて、英雄が生まれる一振りを受ける剣撃。

それは、始まりの終わりであり、終わりの始まりである。

「刻めッ、物語の剣ッ」

その二降りの剣から放たれた輝きが、両腕を斬り落とし、そして、
「任せるデスッ」

仲間達のアームドギアが放たれるが、あと一步キャロルに届かない。
い。

「ふん、アームドギアが一つ足りなかった……………?!」

だがその目の前に、

「当たれば痛いこの拳……………それでも」

「来るな」

「それでも私は」

「来るなああああああああああああ」

「守ることを、諦めないイイイイイイイイ」

その一撃が獅子を壊し、キャロルの一撃を破壊した。

「……………パパ」

気が付いたら白い空間にいた。

「キャロル、世界を知りなさい」

涙があふれる。だって……………

「分からない、分からないよ。パパ」

その言葉の意味が分からない、分かりたく、無い。

「私は、私の願いは」

その時、エルフナインが静かに、

「エルフ、ナイン……………」

「キャロル、私達のパパは、パパが残したのはきつと」

「許しだよ……………」

「……………お前は許せと言うのか、パパを焼いた世界を」

そう静かに問い返す。

「パパはそう願ってる……………世界の周知を許せ」

「それが……………」

「キャロルちゃんツ」

気が付けば落下しながら、響は手を伸ばしていた。その時、

『キャロルツ』

その時、パパが手を伸ばしていた。

気が付けば私は、その手を握っていた……………

『いまここに、我が存在として全てを始まりと終わりを宣言する』

一人の幻が歩く、それは始まりであり終わりの宣言。

『これが逸話の終わり、そして始まりと知れ』

黒と白の剣を持ち、それが一つになり、ただ一振り、剣を振るう。

『我、無限なる夢幻の担い手なり』

その一撃が、キャロルが歌い集めたエネルギーへと放たれた。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

比較する獣はただ全てを飲み込む。欲望も希望も全て全てです

べてすべて、

『アアアアアアアアアアアアアアアア』

獣の咆哮、それでエネルギーが飲み込まれ、全てが終わりを告げた
……

記憶はボロボロであったはずだった。

だが、その元データがある、別の体にインストールすれば延命できる。

故にいまのこの身体はいらないので、

「お前が使いエルフナイン。それと、俺のサブの肉体はここにある。服を持って待ってる。かなり長いが、記憶のインストールが終わって出てくる」

「ああ分かった」

別空間にての戦いであったため、都市圏は大した被害は出ず、キャロルは忌々しくそう言って、戦える道具などは一切切渡したあと、エルフナインに肉体を渡した。

エルフナインの方は、寿命的な問題は少しあったのだが、これで人並みに生きられるらしいし、女の子になるらしい。方法がキスだが。

「彼奴のあとだからいいだろ」

「ふへっ」

真っ赤になり、アスカを見るエルフナイン。その瞬間、黒い何かを吹き出す三人がいたが気にせず、そちらは終了した。

こうして魔法少女事件が終わりを告げた。

「おい、ビーストⅣと冠位剣士」

「なに？」

「なんだ？」

「なんでまだ現界してるの？」

そう言って、まだボロボロで忙しい本部で茶を飲む二人。うち一人は実の母親がワンピース着せたりしている。切るなビースト。

「ああそれか、いや、俺の場合普段からあの聖杯がある園で待機だから

暇なんだ。時々あの荒野だし」

「んなマーリンみたいない理由でいいで欲しい」

「悪いな、それとジャックとアタランテを元のマスターの下に返す。それは俺がしておく」

悲鳴を上げる母親に、響達も包帯を巻きながら、少し残念がる。

だが本来は別の世界、もう会えなくても仕方ない。

「それで、結局アスカは」

「もう英霊の座の力を借りず、聖遺物を利用した剣士だ。まあそれでも規則外だろうがな。やつと落ち着いたとも言える」

「そうそう。もともと全部の流れを求めると」

アスカもとい、白銀のモードレッドに会いたい、平行世界の王の娘が、不老になり、あらゆる平行世界や時代から、聖杯を集め、一気に使った。

結果、前世の記憶を持ち、ここは偶然だがその時に、聖杯から保管庫から記録と、英霊である正規アストルフオと白銀のモードレッドと契約。

何度も魂から保管庫にログインを試みたせいで魂はボロボロで危険状態。

「ま、それも問題ない。君は二人目として、正規に保管庫の力を得た」

「そうかい」

「ビーストⅣの力も、理想像で生まれた自分の力を得ずに、よくここまです昇華するよね」

お菓子を食べているⅣくんが不安なことを言うが、気にしないことにした。

「もう疲れたよ」

「言うな、こっちも運命力なり、調整に追われる日々だ」

「抑止は大変だね」ビーストⅤでよかった。討たれたあとの」

そう言ってお菓子を喰らうビーストⅣ。なんでも冠位剣士のふりして、花の魔術師を致命傷負わせてもう満足らしい。

「Ⅳも仕事との日々に追われますよう」

「汚いものを見たよ」

そう言いながら、あまり気にせず、お菓子のストックを確保して出ていくらしい。

「それじゃ、アタランテ達にも詳しく顔合わせできないから、僕はもう行くよ」

「……………いいのか」

「……………向こうには知性がなくなった僕がいるし、ビーストⅣは次元の間できれいなもの見たり、その為に戦ったり、勝手気ままにやるよ。それじゃ、お菓子ありがとね」

そう言つて、黄金の粒子になり消えるビーストⅣ。できればなぜアストルフオウくんなのか聞きたいがいいだろう。

そしてジャックをさんざん甘やかし、彼女たちともお別れをする。

どんだんこの世界から異物とも言える違う存在が消える中、残ったものがある。

こうして、

「アスカ、アスカああああああああああああああああああああ」

「えっ、な、なんで響が暴走してるの?! 待て、短パンに手を、やめろおおおお」

「後ろは任せろ奏」

「翼ああああああああああああああああああああ」

また背中から抑え込む。その所為で胸が、奏もまたゆつくりとスカート持つて近づく。まずい、助けてくれるのは、

「アスカ……………かわいく、なろうか?」

ハイライトが無い未来さんがいました。

アストルフオウくんは、スイッチになつたのは後から知りました。「いや、いやああああああああああああああああああああああ」

最後の最後で、少年の絶叫が指令室に響いた……………

38話・無限なる夢幻の担い手

怪物を討つのは英雄のみ、故に我は滅びない。

英雄の振るう始まりは、怪物を倒してこそ始まる。故に絶対なる怪物殺しである。

始まりと終わりは、英雄と怪物、善と悪は必ず共にある。

だからこそ、自分はその両者。それが龍崎アスカの根源『理想』だ。

他人が考えた理想像、怪物の力も、英雄の力も、聞き、知り、語る者達が考えた思想から生まれたのが自分だと知った。

ナーサリー・ライム。アリスのように幾万の童話から生まれた英霊のように。

ジャック・ザ・リッパーのように、集まった怨霊のように。

オレ達は世界の伝承、逸話、神秘の幻想から生まれた力を使う、英霊として組み込まれた存在だと嫌々ながら、知った。

だからこそ、この世にある宝具は己の宝具と言えた。おそらく使ったのは、誰かが聞き、夢描いた物を使ったのだろう。

贋作でありながら本物の宝具なんて、恐ろしい。

しかも、はつきり分かった。あの中には本物から思い描かれた宝具でありながら、本物を超えた神秘でできた物もある。

当たり前だ、なまじ本物を知らないが故に、本物を軽く超える聖剣を幻想する一般人。それを使う、理想像を押し付けられた担い手。

無限なる夢幻の担い手とはよく言う。偽物でありながら偽物で無い矛盾。知らないとは恐ろしいことだ。

理想的な存在とは、これほど理不尽なものかと思いつながら、一人寂しく飯を食う。

「……………はずだった」

「えっ、いやなの？ 妹二人になっていやなの？」

「一人無理矢理引きずり込んでこの母親はもう」

「離せッ、飯くらい一人で食える!!」

膝の上に乗せて、キャロルにご飯を食べさせる。その前にエルフナインと、我が道を進む母親。この人も理性が蒸発しているのだろう

な。

あの後、戸籍云々の件でこの母親は司令に、

「二人ともウチで引き取れませんか？」

通った。以後エルフナインとキャロルはオレの正式な義妹である。双子で姉はキャロルで通っている。

「別に素材は同じだからね、僕はとりあえず、アインハルトがいない間の仕事頑張るよ。洗くんも頑張るようだし」

「待て、これを連れて行けっ。おいこらこつち向けッ」

「えへへへへ……毎晩一緒に寝ましようね二人とも」

「い、いやだっ。アスカっ」

妹が助けを求めてきて、オレはため息をつく。これが母親のやり方だと言うのに……

あえて悪者なりなんなりになり、うまく誘導する。洗さんもこれで誘導されたようなものだ。本音を言えるようにだが……

かくして、一人暮らしから三人暮らしは変わらないらしい。

指令室で、コーヒーを友里さんから受け取り、司令と飲みながら、雑談する。

「理想像を押し付けられた存在、それが君と言う抑止力の本性か……」

「自分も至って、ああそういうもんかって程度ですよ。ただ理想だけに酷いスペックですけどね」

怪物、神性、英霊、神秘。そういう、逸話ある存在を終わらす剣があるらしい。

「それって」

「どんな条件下であろうと、逸話を読み終えるようにその存在を終わらせるらしいです。怪物が英雄の一撃で終わりを告げた逸話から来た宝具ですよ」

ティアマトなど、条件下で無ければ倒せない存在を無視して、一撃で倒せるらしいのだが、なら待機しろよと思う。

まあ、簡単じゃないんだろうけど。

「もう一つは怪物を討つことで、英雄の誕生するという逸話から、超常的なものに対して攻撃力のある宝具とか。いま思えばもったいないな」

「気にするな、お前はお前だアスカ」

「はい、人の身にはでかすぎますからね」

苦笑して、コーヒーのお代わりをもらう。

「まったく、私としてもびっくりだよ。彼が出てきたときは」

「マーリン、テメエいい加減にしろ」

そう言いながら、冠位剣士と同じ存在の魔術師は、文句を言いながらお茶を飲む。

「彼は本来、表には絶対に出ない。主に平行世界で、もはやあり得ないとされた世界の破壊が役割だとばかり思ってた」

「平行世界の完全消滅か」

「なんだと？」

それには少し驚くが、涼し気に、

「驚くことではないよ、どんなに抗っても変わらない『結果』つてものはある。だからこそ、もはや変えようがない結果以外を斬り落とす。それが彼の役目と、私達の間ではそう思っていたんだ」

そう言いながらも、遠くを見る。

確かに、彼ほど終わり始まりを担う存在に適した者はいない。

倒すことで物語を初め、それまでの物語を終わらす力を持つ存在。平行世界を終わらし、新たに始める役目。始まりと終わりの担い手としてこれ以上の役目はいない。

「数多の理想を押し付けられ、幻想の力を振るう、夢幻の英雄であり怪物。それが彼さ。その宝具もしくり、英雄の誕生とも言える、怪物を倒した瞬間の逸話。怪物が、英雄に討たれた瞬間の逸話。両者から生まれた最強の幻想だ」

言うなれば、対幻想宝具と対現実宝具持ちらしい。

「だってそうだろう？ 彼は怪物でもある。幻想の怪物は英雄にしか討たれない、それ以外には討たれないんモノだからね」

怪物は英雄に殺され、英雄は怪物を殺して英雄へと成る。

故に最強、故に最弱。

弱点ははつきりとあるのに、誰もつけない弱点。自害以外、彼を討てるモノはいない最強と最弱の、現実と幻実、無限と夢幻の英霊。

グランド・セイバーとはそういう存在だ。

「それで得たのが、神秘殺しか」

「大切にするといいよ、君の力をね」

「当たり前だ」

そう言ってお茶を飲み終えて、歩いて帰る。

絶唱として得たのは、機械の幻獣、最強の二降りの剣。そして神秘を殺す歌。色々自分用に変化した。

それがシンフォギアとしての、自分が、龍崎アスカが得た力。まだあるかもしれないけど………

そして、

「ビーストⅣのこと言うの忘れてた」

——???

「マーリン死すべしフォウツ!!」

割と本気、次元を壊し、触れた全てを破壊する、絶対の一撃を必死に避けたマーリンに舌打ちする。アストルフオウくんこと、ビーストⅣ。

「危ないっ、危ないツ!!」

本気の一撃なので、本当に危機感持って叫ぶマーリンに、棒のアメを加えながら、見下す。

「キヤスパリーグっ、君本気だなっ?! 本気で私を殺しにかかったな!?!」

「当たり前だろ、お前の所為でビーストⅣとして人類悪として現界してもおかしくなかったからな。そもそももう平行世界で幼体はいるし」

本格的に目覚めていたらどうする気だったんだと文句を言いながら、次元の間で話し合うのもなんだから、グランド・セイバーの保管

庫に移動する。

「来るなよッ」

「全身布存在は黙れ」

「仕方ないだろッ、俺は理想像通りの英霊で、姿形なんて無いんだっ。性別とかも召喚者相手に変わるんだ」

いまのうちにマーキングするマーリン。アヴァロンと違って、ここはここで全ての理想が集まる世界だ。薬草とか薬とかあるし、聖杯も純度の高いものがある。

「使うなよっ!! これだから他の奴とは関わりたくなかったんだッ」

「聖杯の一つや二つケケチすんなよ」

「拾った恩を全力で変な方向で返すなッ」

「えっ、キャスパリーグを救ったのって」

怪物としての自分としての一面として、ちよūdどよかつたからと言う理由と、生まれたもしもと言う思いの結果らしいが、そうらしい。

それを聞き、へえと嬉しそうに微笑むと同時に、

「じゃ、殺ろうか」

「…………おう」

「なん、だと」

無数の聖剣、伝説、逸話、神秘の武器達が刃を向け、ビーストⅣが目覚めます。

「ま、待って、私になにをッ」

「ネットデなにしてるんだ引きこもり」

——龍崎アスカ

「ん、駄目なグラウンドが散った気がする」

「なにを言ってるんだお前は」

キャロルとエルフナインとで、必要な生活用品の買い物、響達もいて、楽しそうにしているし、なにより、色々と仕事があるから帰りたいキャロル。

「仕事人間は感心しないぞ」

「るっさい」

「まあまあ」

そんな感じで何事もない。キャロルの監視役として自分が選ばれた程度だが、いまではそんなん意味は無い。

いまは家族だし、キャロルも色々思うことがあるが、もう行動はしない。聖遺物である道具一式は無論無いのだから。

「……………」

だからと言ってあまりに無警戒過ぎることに逆に呆れている娘に、何を言えと言うのだろうか？

そんな感じだった。

そして寝る時間、妹達の部屋に乱入すると言う幼なじみ、俺と言う男性の存在を忘れている。結果クリスを初め、多くの女子が隣部屋に、

「おい、俺もこっちがいい」

「布団は一つしか無い」

「それでいいつ、俺を彼奴、立花響に」

だが捕まった。そのままキャロルが嫌がれば嫌がるほど、部屋に連れ込まれる。もういやだこいつと言う叫びと共に、部屋の扉が閉められた。

夢を見た。

怪物の呪いをかけられる前に、海神を討ち滅ぼし、全ての神々を討ち滅ぼし、世界を混乱にしても、三人の女神の為に、全てを捧げたバカな男。

人を信じたいと裏返しに思う魔術師のお姫様が、神の所為で恋心をいじられる前にどうかし、彼女の騎士として、彼女は守り通した。

白い百合の姫騎士とたまたま出会い、彼女と結ばれ、国は滅びたが、その大地は鮮血にまみれず、たった一人の騎士が全てを支え、彼女と共に守り通した。

例えそれが姿を変えて、正史の騎士王だろうと、女神と化した彼女

だろうと、側にいて、救う。

結果この手が血にまみれても、全身に刃が突き刺さろうと、止まらなかった。

愛した、助けたかった、救いたかった。

その瞬間、けして偽善も何もかも理想であろうと、磔にされたように、戦い続ける道を歩く。

理想に何度溺死しても、理想に何度裏切られても、幻想に酔いしれ続ける。

正しいだけの人生、他人の為に捧げ続ける人生。

竜へ変わり果てようと、守った少年は聖女と共に過ごすように。

赤い髪 of 魔術使いは、黒い髪 of 魔術師と共に、義理の家族や友人達に囲まれる幸せな日々。

救いたいと思う人の為に戦った結果、多くの無関係な人々を死なせた時もあった。

まだまだ多くある己の記録。そんな記録を見ている。

繰り返す、世界の敵になっても、理想を捨てず、剣を取る愚か者な時。

繰り返す、世界を救う為、理想と共に、剣を取り、邪悪に挑む愚か者の時。

最後の夢だ、なぜならば、

「ここからは俺だけの物語だ」

いままで借りた、過去の自分に向かって、

「ありがとう、また」

いずれ至る己に向かって告げた。

「……………だけど女に手、出し過ぎでねえ？」

気のせいかな、全ての記録の自分全てが、顔を背けた気がした。

「あー疲れた……………」

朝日と共に起こされた、太陽を睨む。高校生や学生、否、働く人間全ての敵と言ってもいい太陽の時間が憎い。

そう思いながら朝食を作る、母親は義理の妹達を捕獲していて、そ

んなのは作っている暇は無いだろう。

そう思ったが、

「あら、おはよう」

「……………母さん？」

そこには朝食を作る母親がいて、少し驚くが、それにむつと、

「あんたたちの母親よ、朝食くらい、いる時作るわよ」

そう優しく微笑む。それに、僅かに苦笑する。

この人は、こういう人だった。

「うん、ありがとう」

特別で、理想的な物語のキャラクターを押し付けられる魂。

だが関係ないのだろう。

龍崎アスカを初め、俺達はここにいる。

そして選ぶ、その時願った理想へ手を伸ばし、剣を握り締める。

何度でも戦おう、何度でも出会い、守ろう。

姿、魂、性格全てが変わろうとも、守ることだけは変えることはない。

この『理想』は捨てる気は無い。

——
???

「……………」

ただ一人、ここにいる。ここは保管庫、様々な『俺』の記録を収める場所、俺は誰かなんてわからない。

それでもいいと思う、こんな重々しいものを、他人に管理させる気は無い。

例え、見ず知らずの少女に恋した記憶があらうと、大切なかけがえのないものを得ても、それは他人の俺だけの、大切なものだ。

それでいい。俺はそういうものを求めない。

「……………」

だがもし、姿も形も召喚者に求められた、能力も何もかも幻想の中でできたものでいいからと呼ばれたら……………

(俺も『俺』のように、守りたいと願えるだろうか?)

そう疑問に思いながら、純粹な空間の中、姿形を持たない幻想の存在は、静かにただ、待ち続けている。

いつか、そうなる召喚者が現れるのを、静かに待ち続ける……………

39話・魔法少女事変後・・・

妹が二人、双子の金髪。一人はマスコットのよう可愛らしく、思いつきり甘やかすと決めて、可愛い服が親から送られる。

もう一人の姉はツンデレであり、デレ期に入るまで絆値を上げなければいけない。

んなあほなことを考える今日この頃、龍崎アスカは前を見てる歩く。

——
???

その日、キャロルはため息交じりに義理の兄になった男の部屋に入る。

「まったく……………さっさと終わらせるぞエルフナイン」

「はひっ」

そう言つて、いそいそと兄の部屋からわんさか出て来る盗聴器、発信機などの機器を見つけて破壊しておく。

全部が全部、専門と言う訳ではない、その辺の店で買える品物ばかりであり、誰が仕掛けたはいまはいい。してそうな者が多い。

「あの男……………敵意や悪意には敏感な癖に、善意や好意には疎すぎる。そう言うものなら、俺からのキスも避けられなかったんだ」

そう言つて破壊した後、エルフナインが少しちらちら見ている。それにニヤリと笑い、

「彼奴に甘えたいのなら寝てる時にしろ、あれなら多少のことならなにしても起きないぞ」

「あつ、えつ、ぼ、僕はそういう……………待ってください!! なんでキャロルはそんなことを言えるんですか!!」

「……………ふっ」

微笑するキャロルに、ずるいと震えるエルフナインに、そう思うならお前もすればいいと言いながら、キャロルは、

(別にそういうのではないが、ま、悪くないからいいか)

そう思いながら、ともかく盗聴器を設置したのは別口で二人かと思
いながら、舌打ちする。

ともかくあれは俺達のものだ。渡す気は無い。
ハンマーでそれを粉々に壊しておいた。

「司令室仮も、そろそろ離れるか」

「ああ、まあ仮住まいだからな、ここ」

そう言いながら、翼の部屋の掃除をするアスカと奏。奏は呆れなが
らその光景を見る。どうあっても変わらない、大切な友人の短所。そ
して、

「ん、どしたの?」

そして隣の弟分、アスカがその友人の下着も何も気にせずに持ち、
洗濯するためにまとめたりする光景。慣れてしまったが、よく考える
とおかしいな。

本人がいても申し訳ないと言う意味で赤面するだけであり、いま直
接手に触れられても気にも留めない。こちらも慣れたと言うかなん
というか……

そもそも今日、彼が洗濯し、畳んでまとめた衣類（全部）渡された
ものを受け取っている。正直、アスカは今日の下着は何着ているか分
かると言う、どうなのよと言う現実を考えながら、重い口を開くこと
にした。

「なあアスカ」

「? なに奏さん?」

そう言いながら、雑誌もまとめたりと、段ボールに入れつつ、
「翼と結婚してくれ」

「はい?」

「奏っ!?!」

本当によく分からない顔をして聞き返すが、

「いや、わたしやく真剣だ」

「な悪い」

そう言つて、逃がす訳にはいかないと、近づきながら、逃げようと

したら羽交い絞めしてでも止めて、了承させる気だった。

アスカはいつもの悪乗りと思いながら半眼で見て、翼はなんと赤面しつつ混乱している。

「なお悪い、なにをいきなり」

「翼の剣に生きる性格、防人道や歌い手としてやら、これを含めて考えて、同世代近くだと、どう考えてもお前しかいない。つまり何が言いたいかと言えば」

「なに前の相棒の将来考えて、現相棒を出すの？」

「奏少し話そうか？ 私、そんなにダメに見えるの？ なんて目をそらすの!!」

呆れながら段ボールにガムテしながら、運びやすくしておく。

「翼には家庭的な相棒も必要なんだよつ、お前なら翼を安心して任せられるし、なにより、もう翼のスリーサイズだって分かってるんだつ、責任持ってもらってくれよ!!」

「それに関しては俺も疑問に思うけど……………」

「アスカっ?!」

「むしろ驚かないでほしい……………」

それはアスカも疑問に思う。先ほども下着を直接触っていたし、翼自身も気にはしていないし、本当に知っている。好みの味なども熟知している身として、反応に困る。

「緒川さんはほら、年齢差がね」

「けど……………」

「翼のどこがいけない!? 言っちゃ悪いがいい女だろつ。家事はできないけど!!」

「で、できるぞつ。これでも少し、できる、はず、たぶん、そう。じ、時間、時間があれば私とて料理の一つや二つ、レシピ通りやればできるぞつ」

もうなに言っても困る状態で、翼は赤面しつつ、よく見ればいまま男の前でもラフな格好だ。

アスカは少しばかり、アイドルとはなにか考え出した。

「で、(こ)は」

「デス……………」

あの後、結局翼の赤っ恥暴露会であり、もう「翼の裸見てもなにも思わないほど身近になったんだからもらえッ」と叫ぶ相棒に、正直反論できるかと翼自身が疑問に思うくらいに任せつきりに、何も言わず部屋から去った。

その後は勉強会、龍崎家、下の装者とクリスで勉強する。妹達は仕事でいない。

切歌と調はクリス共々に教えられる。アスカはすでに大学生だった記憶がはつきりあり、ほとんどが繰り返しのため、憶えることが少ないらしい。

セレナはアーサー王の娘の下、器時代滅茶苦茶覚えに覚えた。正直大学問題も分かるらしく、勉強する必要性が無い。

少し羨ましいそうな二人の様子を見ながら、セレナは教えているとき、

「少し席をはずしますね」

「あ、ああ」

セレナはそう言い、何かしばらくして、何事も無く戻って来る。

調も同じようにして、その時に、

「そう言えば、最近お掃除とかしてるデスね」

「ん、ああ。いつも調やセレナにしてもらったりして悪いからね。妹二人にもなったし、なるべく自分でしてるんだよ。切歌にもしてもらってたし」

「私は別にかまわないデスよ」

「ま、飯食わせてもらってるからな」

「私もです、お料理も教えてもらってますし」

調も戻り、同じことを言う。その時にああと、

「セレナ、キャロル達も覚えたいって言うから、料理彼奴らも同席になるから。先輩として頼むよ」

そう気楽に言っつて、ノートに目線を移すアスカ。

「……………そうなんですか」

なぜか間があつた気がしたが、アスカは切歌の日本史を教えて気付かない。

「私も覚えようかデス、その時は食べてくれますか?」

「お〜」

そんな会話の中で、何事も無く、ことは……………

「ちつ、新しいのがあつた。やっぱりか」

兄の部屋からまた見つけて破壊するキャロル。この男はと思いな
がら、クリスもいる中で晩飯の時間、クリスもいる。

リビングに戻り、キャロルが不機嫌であり、アスカは帰ってくるな
り部屋に引きこもったりする妹一人に、首をひねりながら、

「クリス、今日はいつものでいいかな?」

「ん、ああ頼む」

それにジト目で見つめながら、少し考えなおす。エルフナインは疑
問に思い、

「クリスさんはよくアスカさんとご一緒なんですね」

「部屋が隣だからって、こいつが飯作るからだよ。わたしはいらな
いって言ってるんだがな」

そう言うクリスに、キッチンをはさみながら、

「その割によく食うだろ」

「べ、別にいいだろ」

その様子に、キャロルは内心舌打ちし、これは、

(この男、手が早い……………)

そう睨みながら、料理していた兄を見る。

それは死の宣告だった。

翌日の休み、急いできてと呼ばれたので、急いできた。

「そろそろ私、怒っていいと思うの」

リディアン女子寮、響と未来の部屋。女性服着て来てほしいと言わ
れたので、なんかあつたかと思ひ来た愚か者が一名いる部屋です。

女子寮でも、自分の女装は見抜かれず、女子友達として簡単に入れ

ました。

結果、助けは呼べません。

「未来様、どうか目にハイライトを」

未来に呼ばれ、最近何か疲れた未来。どうも響のことらしい。

相談事と思いきや、全部オレの所為でした。

「あのね、怒っているのって、響がアスカの所為で傷付いたことだけじゃないよ」

「えっ……………」

それにビキツ…………と、空間にヒビが走るような音が聞こえた（幻聴）

そして静かに口元を釣り上げて、ニヤリて笑う未来。

「いい加減にして欲しいな、後から秘密組織で二年間活動してノイズ倒してたりとか、身体が真つ二つになって死んだとか、もう……………」

「あ、あの……………」

「まさか、私が怒って無いって……………本気で思った？」

ピークに来たようです。

静かにコスプレに近い衣類とカメラを持って、近づいてくる。

「アスカ、また死んだみたいなんだよね？ 響、またすつごく気にしてんだ」

「死んだんじゃないんだ、魂が抜き取られてたとかそういう感じなんだ」

「同じだよ、アスカもボケなくていいのに」

そして静かに、壁際に追い詰められた。

「み、みくさん、ゆるじで……………」

そして、彼女は、

「おめかしの時間だよアスカ……………」

黒歴史が生まれていく時間です。

深夜の夜、妹達は仕事で家に居ない中、一人泣きそうなのをこらえて部屋で寝る。

もう精神的にまた追い込まれた。そんな中だった……………

「ん……………」

何か覆いかぶさり、眼を開けると、幼なじみがいた。なんでだ。
「響……………スペアキーあるからって、女の子が男の子の部屋に入るのはどうかと思うぞ」

「ん〜い〜や〜」

また幼児化しているようであり、どうも未来と仲良くしたことを知り、自分もと思い、来たと言う。なんでやねん。

着せ替え人形が仲のいい証なら、泣いていいと思うのはオレが正常だからだろうか？ それとも異常か？

ともかく、また密着する響。頼む、寝る時薄着の自分で、響もパジャマで色々問題なのだ。

「響離れる、いるのは許すから、頼む」

「や〜」

響の髪からシャンプーやリンスの香りがするし、意外と育っている胸の感触がある。

なんで男のオレにこんなに無防備なんだよと少しイラつとする。あれか、男に見えないからか？

そう思うと、ムカムカする。これはオレの所為だろうと、ムカムカする。

「響、離れる」

「……………またしんだもん……………」

そう言い、本当にやめて欲しいほど、抱きついてくる。

「死んだのはその、予想外って言うか、魂が抜けただけだったみたいなの？ そんな感じだから、許してくれよ」

「や〜」

それはオレが悪いな。だけど、

「だけどいい加減にしろ響、男にこんなに無防備になるな。変なことされるかもしれないんだぞっ」

言ってやった。だが、

「へんなことって、アスカしないもん。そんなことなかったし」
そう平然と答えながら、離れない。

「……………」

よし、

そう思い、上に覆いかぶさる響をすぐさま逆転させ、両手を片手で押え、もう片手は腹に置き、真剣な顔で響を見る。

響はえつとなにが起きたか分からない顔で、抑え込められた。

「いい加減にしないと、へんなことするぞ」

「……………」

そう言い、押さえつけられた響だが、

(……………ココカラドウスレバイイデスカ?)

内心こうです。そして、響は、何もしない。抵抗も何もしない。

えつ、えつ!? なんでもないのこの子。

すいません、この先の展開はどうすればいいですか？ オレはどうすればいいですか。過去のオレ、記録を見る。この先の展開どうすればいいか、過去のオレに聞こう。あつ、分からない。つかえねええええ。

「……………」

「……………」

しばらく硬直していると、

「あす」

何かを言う時、

「やあやあ花の魔術師マーリンさんだよつ、こんな時間にごめんよつ」

そしてオレを踏んで現れた。

「いつやくアルトリア達はほんと冗談が通じないよつ、過去のアルトリアの少女時代の写真アップしただけで全員斬りかかるんだよ？」

最近は大変なんだよ向こう。彼らと同列ってね。ん？ なにか足元の感触が……………って、なんで下にいるの?!」

色々言おう。この男が踏んだ瞬間、身体がずれて、腹に置いていた手が胸へずれて触れていて、唇は、奪ってしまった。

平行運命編 40話・病み

あの後から、響とは普通に接しています。本当です。

「アスカくおはよ〜」

「おはよう響、クリスも朝飯食うな」

「ああ」

少しムカムカしながら、席に座る。響に真夜中いきなりお泊りなんかするなと怒鳴り散らし、にこにこ微笑みながらごめん〜とほんわかかな響。

響があれを無かったことにするのなら、こちらもそうしよう。あれは事故、そう事故なんだ。以外と柔らかかったなとか、クリスとかも触ったりしたような気がする人生だなとか、色々思うことがあるが、考えない。いまは朝食に全力を出す。

にこにこしている響、食事の準備も手伝い。何事も無く、一人先に家を出て、学校へ向こう。

「その前に、お前ん家、一部消し炭があるんだが」

「花の魔術師」

「そか」

クリスは納得して、気にせずトーストを齧った。

学校で黄昏る、一人の時間。考えるのは、

(……………やっちゃまったよねオレ)

どうすればいいんですか、誰か教えてください。だめだ、聞ける人はいないし、情報が漏えいすれば死ぬ。

未来に知られればどうなるんだろう？ 責任取らないならなにされるんだろう？

考えるだけで震えが止まらない、汗が止まらない。響はにこにこしてたからどうすればいいのですか？ 教えてください。

何事も無く、時間だけは過ぎる。どうも向こうは、

『アスカへ なぜか響が終始笑顔のまま、ほっぺが固定されてるの。なにか元気付けた?』

「身に覚えありません」

逆ならあります。

『んくまあ、元気ならいいんだけどね。時々妙に挙動不審になるけど、それじゃ切るね』

電話が切られ、やはり向こうは何事も無かったことにするらしい。なら忘れよう、なにも無かった、花の魔術師は、

「アヴアロンにはどうすればいいける……」

本体を殺りに行くしか無い。静かに精神に研ぎ澄まし、奴のいる理想郷あるいは夢の中で殺る。これしかない。

そう思いながら、夢で奴と出会うことを考えながら、

「お休みキャロル、エルフナイン」

「ん」

「はひっ」

「ほどほどにするんだぞ〜」

パソコン作業する二人にそう言いながら、静かに部屋で横に乗り、数秒で夢の世界へ出向く。

「……………ん」

身体を半身起こし、周囲を確認。リディアン女子制服で、地下施設らしい部屋の中、首輪、リード付きで目が覚める?。

「……………違う、夢? にしてはリアル過ぎる」

精神感覚は無駄に鍛えられている身として、ここが夢なのは理解する。早すぎるが、これは、

「……………マーリン? 彼奴の仕業……………にしては趣味が悪い」

魂が鍛えられ、根源へと至った者。故にこのような事態に入っても冷静であり、精神汚染などの攻撃も無効化される。

はずです。

「……………起きた?」

そこには眼に光宿らぬオカンこと、マリアさんがいたので、悪夢確定し、身体が震えだす。

「楽しもうとしたんだけど、気を失うんだもの……仕方ないから、そのままにしたのよ………」

「ッ!!?」

声が出ない悲鳴の中、エプロン姿のマリアが包丁を持って歩き、近づいてくるため、急いで鎖の様子を探る。

気合いで外せる。よし逃げられると理解し、次はルート検索を開始した。

「ま、マリア」

「? なあに」

「オレ、そと、出たいな」

そう言うのと、静かに考えるそぶりをして、

「その前に、ご飯食べましょう。いっぱい作ったの」

「ご飯? どんなの?」

「スッポン料理、食べたあと少ししてから、出られる気があるなら出ましょうか」

そう言っつて、持ってくるわねと言っつて、部屋から出て行った。

部屋の隅になぜか、大量の薬瓶がある。

よし、

「……………この程度の悪夢、慣れたよ」

オレは正常に鎖を音なく破壊、その後扉付近へ聞き耳立てて、静かに外に出る。

そして二つに分かれ、薬瓶が散乱する道と、別の道があるため、すぐに勘に頼り、外へと出て来る。慣れた。

「……………悪夢の中とは言え酷い」

黒と赤い絵具をぶちまけたような空模様の中、森の中を走り抜ける。まさかの廃屋で、バイクがあるが、動かないように軽く壊してから、脱出する。

バイクで出ると言う選択肢があるが、なぜかしてはいけない気がし

た。

一気に森から離れたら、川が見えたので川の中に入ると共に、服のいたるところを触る。発信機は無い。慣れた。

「マリアオカン心理が、こんな形で具現化するとは………精神科行くの忘れてたぜ」

いや冷静になれ、これは悪夢でも、普通の悪夢ではない。

「聖遺物関係、あるいは魔術。一度死んでみるか？ いや感覚がある以上、それは最悪の手段だ」

ここでの死が現実にも繋がる場合がある。そうになると行動できないが、この空間はなんなんだ？

ともかく、さっさと走りながら、濡れた身体で走る。これにおいて問題ない。

町は不気味なほど静かであり、悪夢の度合いが酷い。

誰かの仕業としか思えないが、マーリン以外に思いつかないが、

（あれにしては趣味が悪いし、真つ向から文句言うだろうから除外。なんなんだ？）

それだとマーリン以外、自分の世界、自分の魂の世界のどちらかの仕業であるが、何が目的か分からない。

ともかく、目を覚ます方法を考えなければいけない。

その時、足音が聞こえ、すぐに近くに家に隠れる。

「……………」

気配からしてマリアだが、鍋を持つ。妙な色のスープであり、静かに食わせるためのようなものらしい。

無言のまま歩いていて、探している。

（……………やり過ぎすことは不可能だ、なら、気配を消して移動し続ける）

この手は、一か所の滞在は危険だ。空間そのもの、世界が敵として認識しなければいけない。

向こうははつきりとこちらの位置が分からないようになっているのは、わざとか術式な理由だろう。だが随時監視カメラに見られてい

ると認識して移動する。

そして廃屋のような大きな建物へ逃げ込む、なんの建物だ？

(……………ん)

血のおいがしたため、確認しに出向く。

静かに、物音も何も、気配を消して近づくと……………見知った声が聞こえる。

「調っ!？」

「あす、か……………」

リディアン夏制服の調、道路に倒れているのを見つけた。

足だけが酷くずたずたな調がいて、急いで近づく。

「ごめん、気が付いたら変な空間で……………変なものに足をやられたの」
「なっ」

敵がいるのか？ マリアの様子もおかしいが、いまは調に近づく。

「少し悪い」

そう言っつて足を触る見ると、太ももまでズタズタであり、歩けることはできなさそなので、このままにしてはおけない。

「仕方ない、調の治療を優先に動こう。ギアはあるか」

「ごめん、無いんだ」

「そうか」

そうして、お姫様だつこと言う状態で、移動を開始する。

しばらくして小さな診察所があり、そこに入る。

(鍵がかけられていない……………)

引つかかる点が多くある中で、ともかく調を運び入れ、テーブルなりに座らせて、物色する。

包帯は無い、殺菌やらなんならしないといけないし、

……………」

嫌な汗を見ながら、調の汗を拭く。

「平気じゃないな、少し足見るぞ」

「うん……………」

素足を覗き込み、傷を診ようとするとき、顔を近づけた。

瞬間、直観がすぐに後退しろと告げる。

それに従うと、調が足を思いつき蹴り上げていたのだ。

「……………調？」

その瞳から光は無くなっていくのに気づく。

そしたら胸のボタンを外して、ギアのペンダントが見えた。

下着も見えているが、いまは無視する。様子がおかしすぎる。

「やっぱりか」

「やっぱり？ アスカ、私のこと、疑ってたの？」

そう人形のように首を思いつきりかしげる。その様子に怯えることは無い、それより恐ろしい目に遭ったこともあり、耐性ができた。

「太ももから、スカートの下着にまで届く傷だぞ？ おかしすぎる、まるで自分で歩けないと言わんばかりに足だけを無防備に傷付けられていた。調、その傷は自分でしただろ？」

そう聞くと、

「エッチだなアスカ、私の下着見たんだ両方……………」

微笑みながら、ギアを纏う。すぐにギアのサポートで動き回れる状態になり、こちらもギアが無いか確認するが、無い。

「責任、取ってほしいな」

「どうすればいいの」

いまだに逃げないのは、マリアより情報を引き出せられるからだ。テーブル一つほどの距離、むしろ遠くの方が調のギアに分がある。

調は静かに、

「足にキスしてほしいな、そうすれば、アスカは私のものになるから」
そう言い放つ、それに魔術と言葉が当てはまり、一気に歯車が回転するように記録から情報を引き出す。

足へのキスは魔術的な呪いに発展、隷属術の一つとかすめる。

ここは固有結界、魔術、向こう側の領分だと知った。

(いまはこれだけでいい)

その瞬間、近くの窓から飛び出た瞬間、建物を切り刻み、死の歌を

歌いながら、接近してくるが、逃げ足に関しては前世から受け継いでいる。

多くのサーヴァントから逃げている人生だなど、己の記録に思う。

多くの建物が切り刻まれる中、瓦礫の中に身を隠し、出て来る。

どうやらあの調からは逃げられたようだ。

「……………記憶からして、この手の術は」

夢と現実とはリンクしている。夢の中でのことは現実に反映される。調の足は酷い傷だ。それに心が揺れた。

建物は別に違う、これは術者によって設置されるから、建物への被害は無い。

もう一つルールがあるらしい、隷属する魔術を調が使用とした。なら隷属させるのが目的かと思うと、動き回る。

(このまま何も無い空間じゃ、外の援護しかない。クツソ、変な時に死んでるんじゃないマーリンツ)

今日マーリンを倒したのがまずい方向に傾いている。この手の術式解説は自分の記録には無い(ほぼ力技か他人が起こしてくれた)以上、どうにか考え込むしかない。

(ゲームなら核みたいなきーがあるはず、それを探すか) そうして動き回ることにした。

図書館らしい場所で、何か手がかりを探すが、

「くそ、どの本もなんだこれ」

愛してると言う文しか書かれていない奴とか、人の観察日記とか、年齢制限に引っかかるようなグロいものやピンクなもの。

役に立ちそうなものが無い。

ほぼ全部血文字ってなんだよ。

「……………人の気配」

すぐに気配を隠し、かつんかつんと近づく足音に気配を感じ取る。

すぐに窓から脱出するルートを確保していると、

(……………音がしなくなつた)

気が付かれた、行動と共に窓から逃走するかと思案すると、

ズボツと地面が急に変化した。

「なっ」

「あはっ♪♪ みくつけた♪」

そう言つて、覆いかぶさるセレナ。

大きな盾を背に持ち、そのの所為で、地面の泥に沈んでいく。

「ま、待てセレナっ。このままじゃ泥の中につ」

「いいじゃないですかっ、一緒に泥の中で一つになりましょ♪」

黒い泥？ それに身体から危険と感じ取り、泥から出ようとする

が、手足を抑え込まれ、泥の中に共に沈もうとするセレナ。

時々顔を胸に押し付け、臭いを嗅いだり、頬や首筋をなめたり、嬉しそうにいつもよりテンションが高い。

「セレナっ、オレはいつものセレナの方が好きだッ」

「いつもじゃだめですっ、このままじゃマリア姉さん達にとられま

すっ。たまにはこれくらい押しなないとだめです!!」

そう言いながら、キスまでしようとするので片手で制するが、やめない。

「大丈夫っ、この泥の中で一つになるだけですよアスカさんっ。ずっとです、永遠永劫永久にずっと一緒に、一つになるんですっ。がんばりますっ」

「な、にをッ」

泥の中に沈む、このままではまずい。

セレナだけでもと思い、思いつき蹴とばした。

セレナを外に出した瞬間、泥の中に沈む。

片腕しかない状態、もう泥からは、

まずいと思つた瞬間だった。

「まったく、他人より自分のことも勘定に入れなさい。転生しても変わらないのですね、困った子です」

その時、何かが腕に絡みつくと共に、引き寄せられた。

黒い泥は冷たく、全ての考えを止められた。だが助けられたことにより、すぐに我に返り、セレナを見て、無事なことにホッとす。

「全く、貴方は……………」

『母様』っ!?!?!」

「私は『いま』の母ではありませんよ」

だが微笑ましく微笑み、弓を持つ赤い髪の女性。

それは英霊、アーチャーの適正があるとされていて、能力が分からないが、知っているよりも大人になっている。

彼女は、

「シータ?!」

「ええ龍崎アスカ、いずれかの貴方の母親、英雄ラーマ様に愛された娘。シータです」

その時、無数の矢を放つと、盾でふさがれる。

光を宿さない目で、邪魔をするなど眩き続けるセレナ。

「よく聞きなさいアスカ、ここは貴方の『平行世界を安静させる』力と、『平行世界に関わる』完全聖遺物が合わさり起きた現象です。どうか平行世界、貴方の母の座にいる私が駆けつけることには成功しました」

「シータがオレの」

「いいですか、私と違う、キャスター適正の誰かを探しなさい。平行世界関係者なら関われる空間、固有結界に近い現象です。彼女たちを傷つけずに、この事態を解決しなければいけませんっ」

「っ!?! ならやっぱり傷は」

「いまは気にしてられないッ、泥に気を付けなさい。ここは平行世界の私が引き受けます、早くっ」

「ジャマスルナアアアアアアアアアアアアアアアア」

盾を振り回すセレナに、少し悪いと思いつながら走り出す。

「邪魔をします、あの子……………一年だけの間であの方との愛し合った証であり、呪いを消し去った、愛する子です。記録として正史で無く

とも、いまは違う母の子供でも……私はあの子を守る義務があるの
ですから」

そして赤い髪をなびかせ、彼女はセレナを足止めする。

ともかくアスカはこの世界のヒントをもらい、走り出した……

41話・限界

それは唐突であり、みんな集められた。

一人は布団の中で眠ったまま、寝息だけはするが、何をしても起きない。

「ふんふんがふんががふん」

『と言う訳でいま君達の世界にある、平行世界に干渉する道具と彼の魂が反応して、大変な呪いと言う術が発動してるんだよ』

ダ・ヴィンチちゃんが、包帯男となったマーリンの言葉を代弁しながら、弦十郎司令は何も言えず、黙りながら見る。

調は痛々しい足の傷を見せながら、マリア達も静かにそれを見て、「つまり、彼が見ている夢の世界での傷は、私達にも反映されるのね」「ふん」

マーリンは頷き、未来も呼ばれ驚いていた。

いま原因調査中であり、あちらも大急ぎで調べて、彼が出てきたらしい。

その隣に、青い姿の騎士王がイライラしながら聖剣を持つ。

「貴方と言う人はッ、いったいなにをしたんですか!?! こんな一大事にそんな大けがを受けてッ、おかげで術式は完成し終えて、彼は夢の世界に閉じ込められて、被害が出てますよッ」

「……………」

「なぜそこで黙る!?! そう言うことですねッ、貴方という人はどうして人に迷惑をかけることしかないんですか!?!」

ちなみに響は無表情でマーリンを見ていて、響に何かしたんだなど全員が理解し、ともかくと、

「ともかく急いで夢の世界に我々を送りなさいっ」

「ふんふんッ」

首を振り、それはできないいう中、包帯の口元だけ開ける。

「無理言わないでくれっ、夢の世界だと私の正体が知られればこの程度の傷じゃなく、本格的に殺されるんだ。さすがにそれはまずいからそこまで力を貸せないッ」

「なら私や他のカルデアのサーヴァントを送りなさいっ」

「それも無理だ少し待ってくれっ。下手に強いサーヴァントを送ったりすれば、敵として現れる彼女達を傷つけるんだよ。誰を送るか気を付けなさい、意味が無い!!」

先ほどセレナが腹を蹴られたような気がしたが、何か体温が異常に低くなったりした。夢の中の自分に何かあったらしい。

「ともかく、どうにかしたくても、誰が引き起こしているか分かるまではどうにもできない。せいぜい、悪夢の世界をモニターに映すくらいだよ」

それにアルトリアは周りを見て、確認し、

「それでもいいので早くしなさいっ」

「ごめん、少し待ってっ。優しくして!! かなりの重傷者なんだいまホントっ、洒落でもなんでもなくねっ。ダメージが酷いんだホント」
そんなことを言いながら、悪夢の中をのぞき込む。

——
???

「ああああああああああああああああああああああああああああ」

「……………」

無表情でマリアが追ってくる。何気にスナイパーライフルを持って、確実に狙ってくる。

「なんでなにげにマリアさんのスペックが高いんだ深層意識イイイイイ」

いまだけは己の深層意識が憎い。キョロキョロと辺りを見たり、すぐにいるポジションについて、ためらいもなくスコープ見ず足を撃つたりする。

側にはもう薬品が入ったビニール袋がある。中身の確認はしたくない。

「……………この近くならホテルがあるわね、まずは仕留めたらそこまで連れて行かないと……………」

「捕まったらなにされるんだああああああああああ」

刃物を腰に下げ、静かにこちら、ん？ スカートのの中を見る。

「私ね、前々からいらな思ってたの」

「……………短パンを見ている未来さんは何を考えているか理解したくない。」

「未来さん、待てオレの深層意識っ。敵がそう言う風にしていて欲しいっ、この世界のみんなの性格が敵が定めた性格でありますようにっ」

祈りですが、敵っているのか分からない。

ただ一点、静かに、

「アスカが女の子になればいいって、だから……………取ろう、アスカ？」

「嫌だッ、幼なじみの性格を捏造されてる!!」

「痛くないよ……………すぐに終わる。女の子になれば、私が響とまとめて面倒見るから、取ろうね？」

女神のような微笑みで肉体のスピードは死神のように早く、普段の未来の動きではなかった。鋭い素早い動きで刃物を扱う未来から全力で逃げる。

捕まれば死ぬよりもひどい目に遭う。

逃げた。

「……………」

屋根上へと高く飛び、それに少し安堵する。いくら身体能力が上げられていても未来は未来だ。だから

ニ・ガ・サ・ナ・イ・ヨ・？

シヨキンと言う刃が開く音と共に抱き着き、腕を絡みつかせる。スカートを持ち上げ耳元で優しくささやき、刃先がある場所を狙っている。

変わり身のように抜け出して避けた。

スカートが奪われたが、カルデアサーヴァント達から捕縛されても抜け出して逃げる術が役に立ち、ただ走る。

それでもにこつと微笑みながら、刃物と言う刃物を装備した未来が

追いかけてきた。

増えていく敵の中に、まともに判断はできない。

セレナはいまシータが相手してくれているのだろう。だがどうなるか分からないと、

【プルルルルル……】

突然、なぜかある電話機があり、懐かしいなと思い、すぐに出た。

「敵か味方か、答えろ」

【……もしもし、私、暁切】

ガシャンと切った。

「違った、今度は切歌か……敵ももう少し正体を」

突然足元から気配がして、横へ飛ぶ。瞬間、地面が切れ、緑の鎌を持ち、大きな金属の筒を持った切歌が現れた。

「……アスカ、どうして切った、デスカ？」

首をかしげながら、大鎌を構える少女。今度はなんだと思っていると、

「私、アスカにお願いがあるデス」

「お願い？」

「この中に入ってほしいデス」

金属上の筒を見せた、うん入れない。

「入れないよ」

「大丈夫デス、中に入れるように切って、ちゃんと保存するデス

……」

その時の感想は、あつ、そつちですか。

「いや、死ぬんだけどそれ」

「？ アスカは、私の物に、なつてくれないんデスカ？」

そう言いながら金属の筒を引きずり近づくと、しかし、

「なるならないじゃなく死にたくないよ」

なんだろう、他の人と違って恐怖度が低い。こっちは別にバラバラにされて保存されるだけだもんな。うん、怖くないな。

「アスカのこと大事にするデス、血も、内臓も、全部ぜん」

セリフが終わる前にけして後ろを見せずに全速力で後ろに向かって走る。

「……………なんデスかその走り方ツ?!」

この時だけ本物みたいだな。

「おじさん、もう慣れ過ぎてね。好きな人だから殺して保存しよう的なもの見ても、逆に安心するんだ……………」

末期だな。

町の中で何かが斬られる音や、狙撃、何でもありだ。

だが、

「この調子だと装者全員か、依存する傾向で、俺のことを求める？ マリアは正直そうであって欲しいな……………確かに奏さんは姉でマリアはオカンだなと思うけど」

その時、まただ。ただの斬撃なので、白刃取りで防いだ。

そして見たものは、

「さすがだ」

防人が、上半身をさらしだけ巻き、真剣を持ちポニーテイルで、侍の袴で現れていた。ギリギリと力が入る。

「……………深層意識が改ざんされてますように」

なにげに胸が強調されているように見えて、真っ直ぐ見られない。だが力を抜けば両断される。

「アスカ、悪いが私の嫁に来てもらおうぞ」

「本当に改ざんされてますようにツ」

知り合いに知られたくない、なんだろう。オレの中の翼やマリア達がおかしいんですけど、ホントまずい。別に意味で終わるが続いているんだが……………」

「翼、まず普通はお前が嫁だつ、オレが嫁っておかしいからつ」

「どちらでもいい、そのな……………相手と言うのが、その、お前しか思いつかない……………だからもらってもらうぞツ。大人しくもらわれろ!!」

その瞬間の隙、蹴りを放ち、距離を取るが、刀の柄で腹蹴りを防がれた。手の内がバレている、セレナの時と違う。

精神世界の干渉で、追ってくるものも速いから危惧したが、どうやらこちらの心は読まれていないのだろう、安心だ。

だが翼とはよく模擬戦をする。だから対応された。イメージによる強化でもされているのか分からない。未来の動きも早いし、こちらのイメージによる強化があるとすれば、気を失えばいいのだが、それは悪手だ。

「なんでオレなんだよっ、そんな仲じゃないだろうっ」

それに、いままで勇ましかった翼がもじもじと頬を赤くして、涙目になり、そして静かに、下向きながら、

「わ、私の下着の種類、全部知ってるくせに……」

「……………」

それにはこう答えよう、うん知ってる。

「サイズも、こ、この二年、本当に全部知ってるし、裸も、見られた時もある」

うんあるね。オレがいるの知らずに医務室に入ってきて、ちようど全身検査だから、裸だったなうん。

「私の、は、はず、恥ずかしいこと、全部知ってるくせにッ」

うん、恥ずかしいこと。家事全般がダメで、実は泣き虫で世間知らずで、奏さんに嘘の情報を教えられて、オレの指摘でいつも色々な一面を見せるね。

「もう、もうアスカ以外っ、アスカに責任取ってもらうしかないじゃないッ?!?!」

やめて、やめてください。よくよく考えたら翼との関係性考えればそうじゃないかと気づくオレがいる。

やめてッ、こんなの他の人に知られたらホントまずい。緒川さんも含まれそうだが、実際オレの方がダメが多い。奏さん関係でホント、翼の色々を知っている。

「あの時なんかッ、私の裸をはつきり見たじゃないッ」

あの黒い虫事件か、確かに見たし、抱き着いてきたしね防人。あれ、オレ男として責任取らなきゃいけないんじゃないか？

「ぜっ、絶対に逃がさないぞッ。お前にもらってもらう!! 異論は認

めないッ。も、もうアスカしかいないんだああああああ
そう言つて斬りかかってくる。斬る行為に関しては何んぞと思
う。

色々なことが走馬灯のように蘇り、どうすればいいか思っている
と、太ももが狙撃された。

「!？」

マリアには警戒していたのに、誰だ?!

「雪音」

そう翼が言うと、静かに拳銃を持つ、

リリカルでマジカルな魔法少女風の雪音クリスがいた。ともかく
瞬間距離を取る。

(…………オレ、殺される…………)

なぜか本能がそう訴えた。何故だ!?!

「…………なあ」

光の無い虚ろな瞳、拳銃を持つクリスは静かに銃口を向けながら、

「いまの話……………本当なのか」

嘘であつて欲しいけど本当ですね。

「…………あたしとの関係は遊びか」

「は?」

「は?…は?…つてなんでは?…つて……………そうか、お前はそんなことか。

私がどんな気持ちか知らずに、そうか……………そうか」

拳銃をリロードする。何故か狂い笑いそうなのを抑えながら、ずっと
とこつちを見る。

「……………お前があたしの物にならないのなら……………殺す……………ずっと
いないのなら、側にいないのなら、家に居ないのなら、殺す殺す殺す
殺す殺す殺す」

どうしよう、無表情で口元を釣り上げ、カタカタと首を震わしながら、
そんなことを呟き、銃を構えて近づいてくる。

血が止まらない、なんでだ?

「いつも他の女ばかり……あたしがいるのにッ、あたしが側にいるのにッ」

「クリス、どうした？　ほんとなに？」

「ぎっけんなよッ、お前が好きって言うから色々料理覚えたり、作って出したりしたのにッ、全ッ然気づかねえでッ。バカといちゃついたり、先輩の裸見たり、私のことは全然見ないで」

「ま、待て。な、なにが」

「なら殺す、殺せばずっと一緒だッ。お前を殺すッ、殺す殺す殺す殺す殺すッ」

「アスカは渡さない……アスカに責任取ってもらうのは私だッ!!」

そう言って、二人が近づく。色々まずい。

その時、銃口の気配がした。マリアと未来がいる、にまくと微笑みながら、静かに来る。

調も切歌も斬り壊して現れる。もうやばいな。

『アスカは渡さない』

全員がその一言に、向かってくる。

このまま逃げればいいのだが、逃げればこの場で戦い始めそうだし、それは避けた方がいい、手数が少なすぎる。

「まずこのよく眠る薬を使いませよ……そうすればなにをしても起きないわよ」

「いいですね、それなら取れますし、色々できます」

「アスカ……アスカ……可愛い首輪があるの、付けてほしいな♪」

「アスカが痛がるのは嫌デスから、マリアの薬を使うデス……そのあと」

「……よし、後か先かの違いか」

「……最初は渡さないぞ」

マリアは謎の薬を注射器に入れて、確認した。

未来は刃物を医療用の物にしたが、後の方がいいかな？と首を傾けた。

調はギアを纏い、鎖のついた首輪を持って微笑んだ。

切歌は綺麗に斬れるようにギアを纏っていた。

翼は腹をさすっていた。

クリスはそんな翼を見て眩いた。

カルデアサーヴァント達で感じた恐怖が、悪寒が、絶望が、全てが
終わりを告げたと知り、その場に座り込む。

もうだめだ。

『じゃ、ハジメヨウ、あすか……………』

そう言っつて終わりが近づいてくる……………

その瞬間、金属がぶつかると音や叩き落す音と共に、相手する者が周りに降り立った。

「な……………」

それは誠の羽織を羽織った、

『ノツブ』

「新選組ノブ達ツ?!」

その瞬間、現れるのは、新選組ノブや、そして、

「沖田さん見参ッ、土方さんは殺しそうなので待機ですッ」

「ワシが来たぞアスカッ」

「ちやちやっつと、茶々も来たよ〜」

「よし手数が増えたっ」

そう言いながら、新選組沖田はすぐに翼と刃を交えて防ぎ、新選組ノブが以外と速い動きで相手をけん制する。

「鍛えました、土方さんが」

「ちびノブが進化し出した」

そして戦いだしたノブや仲間たち、ともかくノツブの元に出向く。

「平気かアスカよっ」

「ノブっ、助かったよ。この現状は」

「分かっておるっ、ここで傷を負えば現実の者達の反映される。だから土方は下げている」

「だから新選ノブをちやちやっつと連れてきたんだよ」

光速に動き回るちびノブ。なんだあの動き、いいのだろうかと思う。

「オカンで影で言われるんならもう結婚したいだけなのにッ、私はまだ二十歳過ぎなだけなのに……歳の近い奏は姉で、どうして私はオカンのッ!? だったら相手の一人ぐらいいいでしょ!!」

「アスカは私が入れる、ずっと一緒だよアスカ……逃がさない」

「殺してちゃんとお世話するデスッ」

「……………」

「嫁は誰にも渡さないッ」

「殺す」

囲まれているが、力は拮抗している。刀と種子島を持つノブ達がうまく攻撃を防ぐが、正直、

「ノツブ、このみんなって、敵が性格を改造したもんだよね？ セレナにもあったけど、かなり依存性の高い女の子だね。正直これが深層意識のみんなのイメージなら、少し精神科に行きたいんだけど」

「平気だアスカっ、むしろこの状況下で平然としているから、終わったら精神科に通うんだぞお主っ」

そう告げる中、やっと一息つく。そしてとノツブが静かに種子島を放ちながら、

「いいかアスカ、この世界の核は動いている。確実に誰か生き物らし

アスカの人生が欲しいアスカの今後が欲しいアスカの全部が欲しい。アスカ、アスカが側にいないのはもうやだ、ずっといてずっと永遠永劫一緒ずっと一緒死んでも生きても何でも一緒なんだもう決定ねそれならもう子供作らないと何人欲しい？私頑張るよ一生懸命頑張るからずっと私の側に居よう」

「ひ、ひびき……………」

「あれ？だけど違うそれだけじゃずっと一緒じゃない？ ならどうすればいいの？どうすればアスカとずっとなの？ あっはっ♪そうだっ♪♪ アスカの臓器と私の臓器交換しよ♪ 血液型も一緒だし、もうなんなら私の中にアスカを植え付ければいいんだよねっ。そうだっそうしよう、そうだよねアスカっ、ねえなんで返事してくれないの？ なんでクリスちゃんだけなの？ 私も未来と一緒にアスカのご飯が食べないうん」

アスカがたべないな……………

もうなに言ってるか分からない幼なじみが、ギアを、真っ黒なギアを纏い、突如目を見開いたまま狂ったように笑い出しながら、こちらを見た。その手には杭がある。

うん怖い。

だが、狂気の宿り具合、やっどだ。

やっど糸口が見えた。

「ノツブ、これ終わったらオレ一回精神科に入院するよ」

だがその前に後のことを真剣に決意する。

「入院する前に、周りの女子の気持ちをも、少し誰かに相談したほうがええぞ」

「茶々もバーサーカーの自信が無くなるよ」

明らかにこの中で一番高いスペックした闇響が現れ、オレは終わったかもしれないと思い、それが外の世界で見られていないことを心底祈るのだった……………

42話・恐怖を超えろ

光を宿さない、よんだ瞳。

これはある意味自分の所為だろう。いつも心配させ、いつも泣かせた罰だ。

おかげで核はなんなのかは分かった。だがいまは、
「アスカ……………ずつつつと……………一緒だよ……………」

杭を持つ少女が獣のように駆け抜けて来る。これをどうするか。それが問題だ。

銃器を使い、可愛い系の衣類を纏う少女クリス。

「あつははははははは、後悔させてやるッ。あたしを選らば無いのなら、無理矢理手に入れるだけだッ!!」

上はさらしを巻き、男子力の高そうなのに、半泣きで嫁にするとか言う翼。

「せ、責任ッ。責任を取れ、アスカアアアアアアア」

自分を傷つけてでも自分を手に入れようとする調。

「……………あつは♪」

自分を殺してでも手に入れようとする切歌。

「優しく切らないと……………アスカ、優しくするデスよ♪」

メンバーで一番歳高いからオカン扱いなんだから、相手を欲するマリア。

「一回でいい……………それで、全て終わるッ!!」

女の子にして響共々手に入れようとする未来。

「取ったら響と一緒に、ずっと一緒だよ、アスカ？」

セレナもまた無表情で狂ったように笑いながら？ 刃物を振り回してくる中で、

「……………」

一番怖いのは、杭でその場に括り付けて、何かしようとする響。何するか分からないため一番怖いんだ。

仲間はシータことアーチャーと、ちびノブの新選組。沖田と茶々と

指揮する信長。

「あの響が切っ掛けとは、皮肉もいいところだぜ」

「お主、顔は余裕だけど足腰ガクガクしておるぞ」

「だって怖いもん」

なにがキーかは理解したが、だからどうするかだ。オレに魔術的な知識は無い以上、そこから出口に出られない。

だが違和感を響から感じ取った。むしろじやなきや怖いもん。

なら核なりコアは響に宿ってるのだろう。だよね？

その先はどうすればいいですか？

「終わったのかな？」

「諦めないでほしいのう」

響は笑いながらちびノブをかなりグロく殺る、他の奴らもだ。それでも平然って凄いなオレと思いつながら、どうすればいいか考える。

「……………」

下手な行動をすれば響達を傷つける、それが反映される。なら調の足もだ。それを考えると嫌な気持ちになる。今度買ひ物でも誘おう。

瞬間、ギロツと全員が一斉にオレを見た。えっ、なに？

「わたしのことを想ってくれた……………うれしい……………」

調べはそう頬を赤らめ微笑みながら見ている。甘い息を吐き、ナイフを取り出す。あれ？

「まづいつ、止めてくれちびノブううううううううううううううううううう」

「もつと傷付けば、想ってくれるよね？ アスカ♪」

そして刃物を顔を突き付けたが、

「ノブ」

それを止める侍がいた。

それはいけねえぜ、お嬢ちゃん
「ノブ、ノブ、ノブ……………」

「じゃま、しないで……………もつと想ってもらおう、愛してもらおう、大事に想ってもらいたいのだツ!! ジャマースル

地面が揺れ、泥のようなものをまき散らしながら、装者達が苦しみます。

「やっぱりか」

「これはなんじやアスカ？」

「あーオレらの責任」

言いにくそうに呟きながら、泥から人の手や顔が生まれる。

【行かないで】【死んじや、やだよおお……………】【置いてかないで……………】

【私を一人にしないで……………】【側にいてくれる、約束してくれたのに……………】

……………【どうし、て……………】

みな泣きそうなほど悲しく、アスカへと手を伸ばす。

それを見て、シータも気づく。

「これはまさか」

「……………過去の俺達が置いていった、大切な人たちの叫び声だ」

そして響だけは泥に溶けず、むしろ泥を集めてまた形になる。

だが影だけがこちらを無言で見る。

【？ なんで気づいたの】

「……………」

【けどいいや、だって終わってない。まだこの本当はまだ終わってない……………】

影だけが消えるが、泥を流す響だけがその場に残り、涙を流すように、こちらを見る。

【やだよあすか……………行かせない、もういやだ】

それを静かに見る。

【死ぬところなんて見たくない、傷付くところ、一人で傷付くところ、一人だけなんてさせたくない……………行かせない、死なせない。ならここで、この世界に縛る。アスカ……………あすかあああああ】

それに拳から血が出るほど、歯を食いしばりながら、シータは少し小突く。

「かなりあの子を追い詰めたようですね」

「お恥ずかしながら、響だけ偽物と本物が混ざったような違和感を感じて、これがなんの力でできたものか理解しました、平行世界の母上」

そう静かに呟く、切歌達も動きが鈍くなるが、まだいる。

そんな中、戦力はこつちに回すかと、沖田達が構えた。

「ワシもあまり言えた方じゃないんじゃが……子供育てるのと言うのは」

「大変です、平行世界ですら、変わらないのですから」

そして構えた瞬間、

油断していた。

突然泥が噴き出し、アスカは捕まり、飲まれていった。

「なんじゃっ!? しまったこの世界そのものはッ、貴様か」

それを言われたとき、にんまああああと笑い、泥の波に飲まれる響。

アスカの流れに空で合流し、攻撃しようとするが、

「くっ、狙撃すれば本人に反映するんじやっつ、どうすればいいんじや!!」

無数の手に捕まるように、無数の悲しみに捕まり、響が顔を、吐息が当たるほど近くに、響が側に来て、腕をつかむ。

ギアを纏っている響の力。骨と肉が軋み、腕がおかしく砕けかけている。

もう片腕で衣類をまさぐる。片手は破壊、片手と言うか、全身は少し密着させすぎてくる。色々な思いが壊されている、何がしたいか、彼女も分からのだろう。

唯一分かるのは、怖い、悲しい、もう傷付きたくない。そのために求めているとしか分からない。ここまで追い詰めていたと頭に、その夜が過る。

「アスカ、アスカアスカあすかアスカアスカあすかアスカアスカアスカアスカ」

そう言いながら、足も絡ませ、嬉しそうにしていた。

「いま殺すね、いま終わらすね、いまずつと一緒になろうね♪ ずつと、ずつと一緒に……これで……」

その時だけ、立花響で、

「これでもう、アスカは戦わなくていいんだね……………」

その言葉に、

「……………この」

「？ アスカ」

「この身体はッ、剣でできているッ!!」

その瞬間、はつとなり、拳が溝に放たれ、肉と骨が砕ける音が響くが、

だがオレは歌う、この身はシンフォギアの力宿る、龍崎アスカ。この歌を力にし、道を作る装者なんだ。

何度も片腕で叩く、ついに口から血が出るし、冷たい手が口を広げ、詠唱を止めようとするが、止める気は無い。

「ギアも無いのに詠唱しても」

下の信長達が、彼女達が向かわないように足止めしていた時に気づく。

「いえッ、ここは私達の世界側です!! なら」

「魂の力、本来の力を引きずり出す気ですかッ!？」

手ごたえはあった。あの空間、理想集う世界へアクセスできる。ならば迷わない。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

何度叩かれ、肉がえぐられようと、歌わせられないように口を抑えられても、魂の歌は止められない。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

腹から臓物が出た気がするが、だからなんだッ!?

「やだやだやだやだやだやああああだああああああああ」

いま目の前の響は、オレが全てを背負い、勝手気ままに死んだ所為

で悲しませた、大切な人達代表だ。

なら、受け止めるのが『俺達』の役目だろ?!!

【イツキに決めるツ!!】

竜翼を広げ、雷雲纏い、飛翔する。

泥から這い出て、全てを吹き飛ばす。この身は響と同じ、アームドギアのようなものだ。できないことはないツ。

黒竜になり、放たれる矢のように見つけ出し、それへと向かう。

泥の核らしき、黒い杯を見つけた瞬間、それを口にくわえ、かみ砕いた。

「ぶっはっ?!?!」

それと同時にいつもの司令室、血を吐きまき散らし、周りのみんなが駆け寄る。

「アスカッ」

「落ち着きなさいツ、殺しますよっ」

いやッ、婦長がおるでツ!! この人以外の治療系の人じゃないのはなぜだツ。

麻酔無しでいま腹の傷を縫われている。麻酔はいい、痛みはいまはいい。

「マーリン、悪夢の核は」

「黙れツ」

殴られたと同時に床にヒビが入る。

「しまったツ?! やはり厳選を間違えたツ」

マーリンの叫び声が響き渡った。

——マーリン

「ふう、ともかくアスカくんは問題ないよ」

「では引き続き、下半身にある余計なものを取り除きます」

「やめてあげてっ、それは彼にとって大事だから!!」

「傷だけでいいですっ、それはいいですっ」

アルトリアも混ざって止めに入り、弦十郎、ここの司令官はホントなんだろうね。彼女をなんとか黙らせたよ。

少しばかり戦闘になったが、どうにか鎮圧できた後で、調ちゃんの傷癒しだ。

「一応霊薬あるから、傷口程度ならこれを塗ればあら不思議、染みることなくお肌すすべで元通りさ♪」

「私か女性に塗ってもらいなさい。貴様は少しでも触れればエクスカリバーの錆にしますからねマーリンっ」

おかしい？ 今回功労者は私のはずだ？ この異常事態にいち早く気づいた私が頑張ったはずだが？

「ふう、まあいいや。問題は『魔神柱』を逃がしたことが大きいね」
「……………」

沈痛な顔をするアルトリア。悪いがそんな顔をしないで欲しい、私だって分からない。自分の住む世界じゃない世界の未来なんて見通していなかっただ。

——
???

「では、今回の事件について、説明をお願いします」

『ああ、分かったよ』

モニターに映るのは綺麗な女性だが、女性の姿をした男性サーヴァントでもいうべきか、姿をいじったキャスターである。

『まずは初めまして、私はキャスターのクラス、カルデアのサーヴァント、ダ・ヴィンチ。ここまで言えば君らの世界でも分かるかな？』

「はいっ、絵描きさんですねっ」

『ああいい返事だ立花響くん、そして僕はホームズ、シャーロック・ホームズ。カルデアでいまは協力者のようなことをしている』

そう言われ、全員が驚き、二人は満足そうにしているが、すぐにマシユが割り込み、そんなことをしている場合ではないと告げる。

『ミス・キリエライトの言い分ももつともだ、彼の本質、正確には彼らと言えいいのか、やはりと言うべきほど運命は重いもので捉える性

質のようだ。運命は彼に恨みでもある、と言ってもいいほど、彼らの運命を弄ぶ』

「できれば遠回りではなく、はっきり言ってほしいのだが」

『これはすまない、だがまだ確証も何もない。話しか聞かされていない身でね。その情報源が信用できないのならなおのことだ』

「信じてよつ、さすがの私も焦ったつてっ」

そうマーリンが叫ぶが仕方ないと、婦長を下げさせたアルトリアが、シータと共に戻る。シータはともかく横になるアスカを膝枕して、説明を始める。

「ともかく、魔神柱の意識がこの世界から感知したんだ。君らも見たらろ？」

それに全員が黙り、響達が聞く。

「あの、魔神柱つて」

『私達の世界、魔術師が存在する世界で、人類史を燃やし、星を一から創り直そうとした、ソロモン王に従う、72柱です』

『その残骸が、いまだ我々の世界でも活動している記録があると同時に、その残滓に近い反応を、彼が君らの世界で探知したんだ』

彼らは最も強いもの、ビーストと化した者が倒されても、いまだ活動している者がいるらしい。

『我々は現在も特異点を感じし、魔神柱、歴史を守るために活動しているのですが、魔術師マーリンから予想外な話が舞い込みました』

「君らの世界、君らの平行世界に、確かに反応を確認した」

それに全員が驚き、一人だけ吐き気をしそうなるほど嫌な顔をする。

「俺の行動の所為、の可能性があるな」

『? 小さなレディ、それはどういうことだい?』

ホームズの言葉に、彼女、キャロルは彼を通して、一度この世界と向こうの世界、しかも根源にアクセスしたと聞かされ、向こうがざわめいた。

『せん、ぱいが、グラント・セイバーツ!? けしてたどり着けない根源?!』

『こ、れは、さすがに………』

モニター向こうのざわめきが終わらない、一人冷静に情報を知りながら、

『なるほど、納得のいく話だ。シュレーディングアの猫、確認するまでどうか分からない。実にいいたとえだ。この話ばかりは、私ですら真実にたどり着けない事件だろう』

『感心している場合ではありませんっ、こんなの外部に知られればっ』
『そうだね、彼の捕獲どころか、何人自殺し出すか』
『なぜそうなるのっ?!』

『魔術師にとって根源に至るとはそういうことだ、いままで蔑ろにしていたものを目指した者だけが至る、至高の根源なんて知れば、もうなにをするか想像できない』

魔術師は人理、倫理、そういうものを無視し、過去へと探求する。
だが『理想』は違う。まさに未来へと目指し、他者と共に目指す光。違い過ぎる。

いままで目指しても届かないのは知っていたが、真逆に走っていたと知ればどうなるか、分からないほど混乱するだろう。

『なにしろそんな話を切り出す者と付き合うだけ無駄と考えるのが多いんだ、理想の根源。それがまさに、神祕の神髄と知れば発狂ものだ。これはカルデアのトップシークレットだね』

『ああ、それと共に一つの推測もできた。悪夢の世界で戦った彼女たちと、魔神柱のことだが』
「それって」

『大切な人達を思いを捨て、前へと進んだ結果、生まれた思い。自己犠牲の塊である彼が生んだ、黒い感情だ』

それに響が暗い顔をする。思い当たると言う顔だが、それはマシユもまた同じ顔をしていた。

『それが『元』だろうね。少なくとも、この世界と君らの世界が繋がった瞬間、いまだ解明できない点が多くあるが、元の一つにあるのは、『理想の抑止』が作り出した、悲劇の残滓が一つだ』

これを聞き、ダ・ヴィンチちゃんはふむと話をまとめ、要約すると、
『魔神柱の残滓と言う者達、名前すら失っただけでもおかしくないそれ

らが、錬金術師キャロルが繋げたパスを利用しただけですまないだろう。反応が平行世界なら、その世界に平行世界に関わるなにかがあるはずだ』

「それは……ある、一つだけある」

弦十郎が重々しく、記憶から思い出し、そして、

「司令、やはり思った通りです。反応あり、完全聖遺物『ギャラルホルン』起動中です」

藤堯がそう言うと、全員が驚きながら、それを見る。

『ギャラルホルン、北歐でラグナロクを告げる角笛だね。そつちじや、平行世界を繋げる品物かい？』

「はいダ・ヴィンチさん、こちらの世界では、櫻井女史という者が見つけて管理してました」

「まさか今頃になって暴走するとは……こちらの管理ミスだ」

弦十郎がそう言うが、それには首を振るダ・ヴィンチちゃん。

『それを言えばこちらもだよ、魔神柱、こちらの世界の問題を、君達の世界にも招いた責任がある。いまそれはどういう状態だい？』

それにはエルフナインが操作、解析をしている中で、

「どうやら一つの世界、平行世界とリンクしています。そこからエネルギーが来たり送られたりして、その繰り返しですが、徐々に大きくなっています」

「そのまま放置すれば？」

「こちらの世界と向こうの世界が激突、あるいはエネルギーが爆発し合いながらも拡大し続けると思えます」

それに頭の痛い話の中で、どうしてそうなっているか調べると、

『どうやらそれをしているのが魔神柱であり、彼と言う抑止が貯めた、元を利用した存在らしいね』

「はひっ、発動のほとんどが向こう、平行世界の方からの操作です」

そして全ての世界、問題解決をするためには……

「レイシフトの応用で、向こうの世界に跳んで、向こうで魔神柱の撃退か」

「だね、しかもかなり複雑と言うかなんというか」

富士山の山脈付近、ギャラルホルンが移動、管理されている地区へ移動し終え、平行世界突入組が準備する。

突入する際、向こうにいない人物がいいと判断されたため、サポート組としてカルデアがやることになる。ほとんどがカルデアが担当する。

なにより、彼らもそれしかいまの事態を解決できない。そう、

「まさか向こうの世界の俺がぶっ倒れているなんてな」

藤丸立香、彼はいま魂があるのに無いと言う、不可思議な状態で寝かされていて、これはおそらく、この世界の魔神柱の仕業だと、マーリンなどが調べた結果、つまりは、龍崎アスカとリンクして起きたことらしい。

だからこそ、マスター立香を起こす為、魔神柱を倒す為にも、今回のミッションは全力サポートらしい。

『ナビゲートは私、マシユ・キリエライトが主にします。よろしくお願ひします』

「よろしく」

そしてこちら側の戦力は、

「ふん、またこいつを使うとは……よく許可が下りたな」

「現状、検査、解析以外すらまともにできないからな。早期解決のために、どうにかした」

そう弦十郎に言いながら、紫の豎琴、ダウルダブラを手につくキヤロル。念のために聞いたが、戦闘力は下がったが、記憶の焼却も無い。そして盾のペンダント、槍のペンダントを持つ、龍崎アスカがいなければ死んでいる装者が選ばれた。

「まあ私とセレナだね」

「私なんか特にですね、あの時の絶唱のダメージは、アーサー王の鞘が無ければ癒えることはありませんですから……」

そう言いながら、龍崎アスカは霊薬を無理矢理飲み、腹の傷を無理矢理治した。

「アスカ」

こうして響達、待つしかない装者は心配そうに近づく。

「悪い、けど、これはオレをはじめとした俺達がしなきゃいけない問題だから」

勝手に守り死んで、悲しませ、ずっと繰り返す。

その悲しみが利用されている。ふざけるな。

「だから、必ず帰る」

「……………うん」

そしてリーダーとしてキャロルが前に出て、静かに告げる。

「向こうは必ず、龍崎アスカはいない世界で、俺達は死んでる人物の世界だ。俺は最初、替えの肉体を用意して、計画の遂行をしていたからな。エルフナインに肉体を渡すか、記憶を無くした子供になってる。ま、エルフナインに身体を渡してそうだな」

皮肉にそう言いながら、静かに、

「明らかに俺達は死人の世界だ、あつちの立花響達と交戦する可能性があるし、話をするには、まあできそうにない」

「まあ、な……………」

「……………」

奏は翼、セレナはマリア達を見る。明らかに違った世界へ出向く。色々問題があると理解して、そして、

「ちゃんと把握しなければいけないことは把握した。それじゃ、いくぞ、アスカ」

「おう」

そして四人の装者は、天文台の魔術師達の力を借り、平行世界へと出向いていく。

その先に待つのはなにか、まだ誰も知らない。

43話・平行世界

平行世界、なのだろうか？と思うと思っていたが、そう思わなかった。

都市部に巨大なクレーターがあつたりする辺り、少し考えることにする。

まずはこそそ姿を隠し、食材などを確保して、廃屋のビルに集まり、話し合った。

「まずここは龍崎アスカと言う人間は絶対にいない世界だ、間違いは無いな」

龍崎アスカは平行世界ではなく、異世界の魂が元だ。この世界、分かりやすく『シンフォギア』と言おう。シンフォギアに龍崎アスカは絶対に存在しない、本来の世界でもいるかどうかすら分からないのだから当たり前だ。

ラジオなどを使い、情報を集めながら、キャロルは静かに考える。

「まずは一、コンサート事件にてネフシユタンの鎧だな」

「確かあたしと翼、ツヴァイウィングで歌った時に起動したんだっとな。それをまあ盗られたんだが、いまはもういい。その時のことをアスカがいなかったらで考えると」

奏さんは静かに、

「あたしは絶唱を歌って死んでる。いや、あれは装者の誰かが死んでもおかしくないからな。一番はあたしさね」

薬により後天的に装者になり動き、ガングニール装者だった自分だから分かる。あの場はアスカが絶唱を抑えるエネルギーとされることをしたおかげで、薬の後遺症も無い。まあガングニールも無くなっていたが。

「その現象は俺も知っている。仮説を立てるなら、アスカがあの場合にあった聖遺物関係のエネルギー全てを、融合型聖遺物アストルフオへ変化させ、自分の物に変化される際、絶唱でエネルギーを外へ放出していたお前の力を奪い取ったに近い意味で燃料に変えたんだろうな」

あれ全てってことはノイズもか？ そうキャロルと聞くとそうだ

よと答える。

「天羽々斬がこれにくみ取られたりしなかつたのは、風鳴翼が纏っていたからだし、他の聖遺物は距離的な問題があったからだろうな」

だが所有者も無く、そんなにプロテクトされていない研究品や未覚醒の品は取り込まれたりしたらしい。現状はそうとしか言えないと答えるキャロル。

「むしろそれが後遺症も治す切っ掛けになったんですね」

「それももう過去話だからもういいさ、だが、この世界ではそれはないなら」

「天羽奏はあの日に死んでいるか」

みんな難しい顔をしながら、次にとセレナを見る。セレナもまたはつきりと、

「私はネフィリムの実験中、炎が舞い上がってる中での絶唱でした。瓦礫も上から降ってきましたから、十中八九死んでます。助けてくれる人も、ママ以外、いるとは考えにくいですし、実際動く人はいなかったらしいですから」

「まあ、マリアやナスターシャ教授もそれが切っ掛けでテロ組織みたいなことしたからな……………」

「はい」

そして次にキャロルを見る。キャロルはふんと鼻で笑い、

「正直、計画の際、俺は初め、イグナイトモジュールの最初の起動時に、その身に滅びの歌を受けて、それを持って自害する予定だった。アスカのパスを維持したまま、あの身体で逃走したが、本来はあの身体も使い捨てだ。ちなみにまた身体の予備なんて無いからな、よくて廃人、まあエルフナインに身体でもくれてやったかもな」

答えを知ったキャロルはそう告げ、つまりキャロルも消えているか、記憶が完全に消える前に、エルフナインに身体を渡していると言う結論に達する。

「ここにいる人間はこの世界の人からすれば死人が存在すら知らない人間か」

「そうなります」

そしてクレーターを見るが、ここはキャロルとの戦いの場所。おそらくその跡地だろうなと思いつながら、だいたい経っている。一週間程度か。

結論から言つて、この世界の組織、タスクフォースのみんなと接触するべきかと考える。やはりバックアップがカルデアだけは心もとないと言うより、この世界で起きる問題である以上、必ず関わるからだ。

「だけど翼とマリアがな〜」

「すまん」

「すいません……………」

翼はいる状態ですらかなり精神状態が不安定になり、二年間無理していた。奏さんの言葉があるのにも関わらず、いつの間にか変な口調にもなった。

「二年か……………確実にこじられてるぞ。自分は防人、皆を守る剣つて言い聞かせてる頻度も高そうだし……………」

「マリア姉さんも、あれで思い込むと……………原因である私達が言うのもどうかですが」

そこに平行世界で生きてる自分らが現ればどうなるか、確実にこじれる。分かる。確実に。

「……………逆でも、あたしもこじれるだろうからな。そういう関係じゃないのが分かる」

「……………ですね」

そう言う中で、キャロルはふんと不機嫌そうに食事を終え、作戦会議を終わらす。

「俺はどっちでもいい、こっちじゃお前達と違って世界を解体しようとした重罪犯だ。それを後悔もしていない。どういう風に取りられても文句は言わない」

「はあ、妹がそう言うのなら、それでいいだろう。正直、響には会いつらい」

オレもまたそうだ。逃げているだけだろう、それぐらい分かるが、できればだ。

「ギリギリまで接触は避け、最悪司令達だけにしよう。ともかく町で変装して情報を集めよう、キャロル達みんな変装してくれ」

そう言って部屋から出ようとするが、奏さんが腕をつかむ。

「まあ待て、安心しろ、お前の分もある」

そう言って、セレナが嬉しそうに、あるものを取り出す。

「待て、なぜ存在すらしなないオレが変装しなければいけないの？」

「あたしらだけってのもな」

「大丈夫です、化粧は得意ですし、アスカさんは薄めでも問題ないです」

「覚悟はいいか、お・に・い・ちゃ・ん？」

こうして女装する羽目になりました……………

「チツ、短パンは確保してたか」

「もうしなないと思って油断してると思ってたんだがな」

「泣くぞ」

(写真は戻ったら現像しなきゃ)

ともかく、いまはこここそ移動しつつ、この世界にあるはずの『ギヤラルホルン』を確保、様子見するために施設へと向かう。

一応、司令から普段の警戒網など聞かすが、ただ嚴重に封印に近い形で保管しているだけだ。人はいない。

だから時間帯は気にせず、夏休みのことも考えると装者は翼とマリアは確実に動くことから気を付ける方面で動く。

施設は人が近づけばアラームが鳴るらしいが、そこは、

『もしもし、皆さん、保管庫近くですか？』

『はいマッシュさん、それでは』

『はい、キャロルさん、サポートは任せてください』

「ふん、この程度の施設、問題なく入れるさ」

なによりと、平行世界のキーもある。よほどの違いが無い限り、問題なく中に入れると考えるが、油断はしない。

すでになにがあってもおかしくないのだからと、

「……………」

ピピツと音が鳴ると共に、嚴重な扉がいくつも開く。それに仮面を付けたら、覆面したりと、みんなするのだが、

「……………順調過ぎない?」

『ですがこの世界のギャラルホルンがどうなっているかの確認は、最優先事項なのは確かです』

「確かにな、元々俺がしたこと、異世界のこと、そしてギャラルホルンが合わさって起きた異変だ。こちらでのギャラルホルンはどうなのかは見ておきたい」

「んじゃ、行きますか」

「異変が起きてなきや、ギアを纏うなよ。纏えば最後、必ずこっちの装者が飛んでくる」

そう言われながら、さっさと最深部へと出向く。

そして……………

「……………」

全員が絶句する。

「お、おい、異変はこっちの奴らも探知してないのか?」

「してるかどうかいま調べるっ、何もするな、警戒をおこたるなよッ」

そう言いながら、元の世界で見たギャラルホルンと違い、黒い泥を纏い、心臓のように脈動するギャラルホルンに、全員が絶句していた。『こちらカルデア、完全聖遺物ギャラルホルンのスキャン完了しました』

『どうやら何かしら起動していてもおかしくないところ、その泥に力を奪われてるようだね。おそらくだが、こちらの住人は気づいてもらえないんじゃないかい』

そうダ・ヴィンチちゃんが言うと、キャロルも頷き、そして、

「これを破壊すればいいのか」

『いいや、破壊すれば大規模爆発を起こすよ。ギャラルホルンに張り付いてるのは吸収しているだけだし、魔神柱の残骸は逃がす可能性はある』

『我々が把握しているのは、生き残りのようなものですが、この世界で

活動している魔神柱は、我々が把握する方法で活動していない可能性が高いと思われます』

「なら、魔神柱つてのを倒す。それが一番だね」
「ですね、ですけど」

セレナが疑問に思う、力を吸収している。つまりこの世界で力を蓄えていると言う意味だ。何をやる気か分からず、理解できない。

「よくて元の世界に戻って人類史の破壊だよな」

元々彼らは人類があまりにも哀れで、傲慢な生き物として嘆き、終わらせようとしたのだ。だがこの世界は無関係だ。

「まさかこの世界で人類史の終わりと再生をするのは、完全なお門違いだ」

「だね、けどこのギャラルホルンを無視するのよね」

そう言っていると、ブーとサイレンが鳴り響き、赤いランプが点滅する。

「キャロルっ!？」

「俺じゃないッ、外から攻撃を受けて……………はっ?! 装者ですら破壊できない外壁を壊しながら、一直線にこっちに向かってきてるだっ

!!」

「……………なんか嫌な予感がするよ、マシユさん」

『アスカさんの言う通り、これは……………』

外壁を壊し、ついに最深部であるここまでやってきたそれは、

『敵サーヴァント反応ッ、この世界にもサーヴァントが現れましたッ。並びにノイズと言う、シンフォギア世界の特殊兵器反応もあります!!』

——
???

そこはまたとある施設であった。

「おいオッサンっ、ノイズの反応ってマジかっ」

「ああ、しかも完全聖遺物を保管していた場所だっ。朔也」

「現在モニター確認中!!　すでに外部に侵入者ありッ」

「並び、完全聖遺物ギャラルホルンに異変あり!!　これは外部にエネルギーを吸われているの?」

「ここまで侵入されていて気づかなかったのかっ、奴さんの様子は」
「モニターに出します、装者は向かいながら見てくださいつ」

あわただしく動く中、車の中でそれを見る。

女性らしい四人組が、最深部の完全聖遺物付近にいる中、ノイズと対峙する。ノイズは大柄の男が従えているように見えた。

『こいつはッ、バーサーカーか!!　マジイイイ、確実にここ壊れるッ、税金施設破壊するなよッ』

『そう言うみみっちいことは後で言えっ、っっていうかすでに手遅れだ!!』

『アスカさんっ、あの英霊は』

『間違いなく、三国志の将軍が一人、呂布奉先だ!!　ノイズ従えて出て来る武将って最悪なんですけど!!?』

そして中国の武将のような男は雄たけびを上げて彼女たちに襲い掛かる。

だが、彼女たちは、

「!?　聖詠だと?!」

「装者っ」

回転するような槍を持つ、白と蒼の姿の赤い髪の装者。白い服、姫のように見える大きな盾を持つ少女。

そして一番、いや、この中で一番強いのは、

「これは」

短パンのような衣類になり、軽装の鎧を纏う。竜を思わせる瞳と、ヘットホンが耳のように動き、尾を持つ剣士が現れた。

『バーサーカーはオレがやるッ、たぶん装者は気づいて向かってるッ。こうなればあれだ、ギャラルホルンは装者に任せて、オレらはこいつらの撃退後様子見だ』

『その方がいいだろうなッ、モニターはすでに俺達のことを捉えているッ』

金髪を三つ編みにしている少女が叫び、それに、

「向こうは我々に気づいている？ 目的は」

「分からないねえなら、直接言っただけだろっ」

「デスッ」

「うん、急ぎましようっ」

そして武将のような人は竜の瞳をした装者が激突するようにぶつかる。

『テメエの相手はオレだバーサーカーッ』

雄たけびを上げ、そして、

『身体は剣でできているッ』

その叫びと共に、白銀と真つ黒な剣を構えながら、飛翔した。

全員が鉄の幻獣ヒポグリフに乗り、できる限り上空へ逃げている。
「でこの後どうするんだッ、明らかに雪音辺りが狙撃するし、レーダーで完全に補足もされてるだろうよ!!」

「それなら手があるが、問題は」

「!? 来ましたッ」

「そもそも一番厄介な方法で来たぞ!!」

「シヤトル編かッ」

巨大なミサイルに乗り、こちらへと向かってくる装者達がいる。

それを見ながらアスカは叫び、一番まずいのは、

「飛び乗られたら終わるッ、来てるのは!？」

「切歌、調、響さん、翼さん、それにクリスさんにねえ、マリアさんで

すッ!!」

「くそつたれッ、全員いるってどんな状態だ!? 翼やマリアは海外に

戻って無いのか!!？」

そんな事を向こうがわめきながら、こちらを見る。

「なぜかこつちのこと知ってるようデスよッ」

「ああ、何者かは知らないがッ、ともかく」

「あの機械、アームドギアの破壊よッ」

全員が遠距離攻撃やミサイルでの接近を試みるが、

「なめるなッ」

アスカがヒポグリフを操り回避したり、盾を展開して防いだり、

こつちの攻撃を全て知っているように動く。

「デデデスッ!？」

「よしッ、どつちかと言えばこつちより弱いッ。あれならば逃げられ

るぞ!!」

「ばっ、んなこと言うとおおおおおおおおお」

その時、翼の乗っていたミサイルが爆発し、爆風を利用して、アスカへと斬りかかる。

「誰が弱いと? 私の仲間の愚弄は許さんぞッ」

「ほらなッ、来ると思っただよ!!」

「やっちまった……………」

翼や足に捕まっているため、奏はまず槍で他の者達のけん制。セレナは何も装備してないキャロルも抱えているため、ヒポグリフの足に捕まったままだ。

背中で防人の歌を紡ぎ、剣を抜く。それに手綱を握りしめ、静かに剣を取り出す。

歌いながら斬りかかる翼に、片手で対峙するアスカ。同時に周りを把握しながらだった。

「これ以上乗せられるなツ、セレ、ああんツ、盾は展開できる準備しろツ。城壁で防ぐ」

キャロルがそう叫びながら、翼は舌打ちを打ちそうにこちらを見ながら対抗する。

「何者だ貴様たちは、それほどの剣の腕前といい、あの場にいたことといい、なにがしたい？」

「言える事情が無いんだ、色々問題があるからね」

「！ 銀の腕が来ますツ。城壁展開ツ」

銀の剣が伸びて来た為、城壁で防ぎ、その重みでバランスを崩した際、

「イガリマ装者ツ、キャッチしろツ」

「んっ、きやつ」

そう言つて、アスカが装者化するとついてくるモフモフの尻尾が翼の顔をぶつかり、僅かな隙をつき、そのまま足で思いつき蹴った。

そのまま空に身を乗り出すが、言われた通り、切歌が確保し、そのまま、

「かな、姉さんツ」

「イヨッシイヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ、装者全員離れろツ」

刃先の回転が鳴り響き、歌と共に光の渦を作り出す。ありとあらゆるものを巻き込む嵐、それを放ち、そのまま空を飛ぶ。

ミサイルの撃墜をしつつ、そのまま大気圏まで空へと逃げる。

「人のことを考えろ、せれ、盾は俺の守りをしてくれ」

「分かりました」

そのまま大気圏から宇宙ギリギリまで飛び上がり、レーダーなどを振り切った。

「くそ、逃がしたか」

「デス……………」

「けどあの人達、なんだったんだらう？」

「そうね、目的が分からないし……………敵意は無かったわ」

そうマリアの言葉に、翼も静かに頷く。

地上に降り立ち、一番の違和感は、

「あの女剣士、片腕でありながら、私と互角に渡り合えるとは……………聖遺物、ギアもなんだ」

『ギアの反応出ました、ですが』

『なんだこれッ?! 一人は滅茶苦茶反応が複数つ、まるで欠片が寄せ集まったようなもので、残り二つは完全聖遺物クラスの数値ですっ』

そう聞かされ、マリアは翼に、

「どうも、コンサート後、まだ日本に滞在しないとイケないようね翼」

「ああ、剣への遅れ、剣で返してもらうぞ、アスカと言う女剣士よ」

真剣な顔でそう告げる装者達。

その後、ギャラルホルンの様子から完全管理のもと、様子見になり、三人の装者と一人の少女についての情報を集め出す。

四人組の女性、そう情報網を貼る。

「気のせいかまた心の傷が広がる事変の気が」

「気にするな」

——数日後

ネットカフェで全員集まり、キャロルがサーバーを色々探知も気にして、情報を集める。この世界の資金は、宝石を売った。

「それを元手にして……………よし、ともかく一週間はまともに生活はできさぞ。後はこの世界の風鳴翼達の活動内容か」

「妹が株で一山どころの話じゃない、お金を稼ぐ件」

「気にするな」

そう言いながら、パソコン画面を見ながら、全員がこの世界を調べる。

「まあ考えれば、マリアと共にコンサートで滞在するなり、なんなりだろうな」

それでやはりと言うか、奏は死んでいることも分かりながら、龍崎アスカがいなかったシンフォギアと言うことがはつきり分かり、ため息をつく。

「やっぱり司令達と協力できればいいが」

「組織的に協力はしてくれるが、装者がな……………」

「マリア姉さん達ですからね……………」

余計な溝を作ることを前提に、接触するか、それとも何も知らせずにことを終わらせるか。

できれば知られずに終わらせないが、

『難しいと思いますアスカさん』

「マッシュさん、カルデアサーヴァント関係はどうなの？」

話によると、何名か姿を消したり、契約が消えていたりしている。元々いること自体おかしいサーヴァントがいるのだから、気にも留めないが、魔神柱の件で、色々問題になり、調べているようだ。

それを聞き、ガタガタと震え、血の気が引き、奏にしがみつく。奏は可愛い弟分を抱きしめながら、あまり気にしていない。正直、異性とは見ないのだが、どういう関係と聞かれれば弟分だとはつきり言う。そんな関係である。

「あく弟分の代わりに聞くけど、アスカの魂自体に惚れた女は？」

『……………』

目をそらしたため、静かに抱きしめ、全員目をそらす。

現実から目をそらしてしばらくし、

「まず、考えられるのはサーヴァントが現れると言う最悪な事態だな」
サーヴァント、英霊として英霊の座に登録されて、儀式により召喚され、使い魔として扱われたりされる。

基本は七つの位に収まるが、基本生前の性格や、英霊になり、信仰の力で能力が昇華して、生きていたころより強い。

そしてその逸話の象徴とも言える、宝具と言うものがあり、英霊が英霊である証が厄介な力の持ち主だ。

「反英霊、悪名故に有名になり、英霊として登録された存在もいるしね」

『反英雄で有名な人は、鬼として語られる方が二名ほど、カルデアでも目撃されています……正直、あの人たちが自由に動くとなると』

「人が死んでもおかしくない、そんな事件無い」

「いま調べてる……別段変死なりなんなりは無いな」

「行方不明事件は」

「……いまのところ、噂話レベルだと分からないな」

やはり協力した方がこの世界にとつてはいい気がするが、それで動きが遅くなる可能性がある。少しタイミングが難しい。

「最悪装者が相手してまずいのは、麗しの騎士さんくらいかな？」

『デイルムツドさんですね、あの人は女性を魅力する逸話持ちで、本人の意思関係なく魅了しますから』

「……彼奴らが男の奴好きになるか？」

少しアスカを見るが、いまのアスカはミニスカの夏服。用意しておいてと思うが、奏は少し抵抗しなくなり、何か寂しくなった。

そんな奏のことを気にせず、アスカは英霊の逸話から来る、宝具以外の能力の危険性を告げる。

竜の血を浴び、不死性の肉体になるが、背中に一枚の葉っぱがあったため、背中だけ恩恵が無い。そこから背中が弱点と言う意味を持つ英霊。

二人一組での活躍が多く、ついには二人で一人としてカウントされる英霊。

兄貴なんか、ゲツシユと言う縛りがある。兄貴はそれもいまも持っているため、英霊は弱点もそのままに、この世に現れる。

「兄貴は確か？」

「クー・フーリンは犬の肉を食べない、自分より身分の低いものからの

食事を断れない、詩人の言葉には逆らわない、だな」

「兄貴……………」

「なぜお前はクー・フリーンを兄貴と慕う?」

妹達が疑問に思うが、俺からすれば兄貴なんだから仕方ないんだ。

パソコンを操作しながら、んとキャロルは嫌な顔をする。

「だから日本にいたのかあの二人……………」

そしてその画面を見て、全員が同じ顔をする。

風鳴翼とマリア・カデンツァヴナ・イヴ、海上コラボコンサート。そう大きく豪華客船でやるコンサートを見る。

姉と翼のライブに少しばかり絶望する。つまり全戦力が集まっているのだ、こうなると次に何かあれば、覚悟を決めなければいけない。「奏さん、セレナ」

ホテルの一室を借りて、まあ全員一つ部屋で泊まる。少しでもお金の節約であり、周りから見れば女四人。問題ない。

「ああ分かっているよアスカ……………翼のことはあたしが受け止めるさ。この世界の天羽奏のことも考えて」

「あ、うんそれもあるんだけ」

「大丈夫です、マリア姉さん達と、ちゃんと向かい合いますから」

「セレナ、うんそれはいいんだけどね」

「お前達は男一人いる中で平気で薄着ってなんだッ」

キャロルが言う通りで薄着であり、少しばかりアスカは目のやり場に困っている。

アスカも女の物（本人気づかず）の薄着なのだが、キャロルはそれは無視した。

「なんだアスカ? いまさら私の肌見て、一緒に寝たり、翼の裸や下着だっけ見たりしてるだろ?」

「見たくて見てないッ、翼がそそかっというえに、うっかりで家事全般がダメっ子過ぎるんだッ」

「私は……………アスカさんなら、問題ないです」

「セレナだめっ、男をそう簡単に信じちゃダメッ。オレはもう爺さん

レベルだからいいけど、普通の年齢の男がいまのセレナ見たら、絶対だめだからね!!」

セレナは少し頬を赤くしたが、アスカは気にしない。そもそもアスカは二十歳ぐらいの大学生が転生した、転生者なのだ。中身はオッサンだ。

「みんななんでそんなに無防備なんだよ……将来不安になる」

「お前が翼をもらってくれればあたしはそれでいいツ!!」

「やめて、いまはそれを繰り返さないでツ」

翼の父親に知られればどうなるんだろう？ 初めて会った時は翼と距離取ってたが、いまでは改善されたらしいし、親ばかだし、緒川は兄とか感覚だが、自分は全然違う。

セレナは静かに、

「まあいまはいいじゃないですか、そろそろ寝ないと、せつかくの綺麗な肌が荒れちゃいますよ?」

「それはセレナ達だろ……せつかく可愛いんだから、気を付けてほしいって言ってるのに」

そう言われ、少し頬を赤くするセレナ。こいつはと言う顔をする二人で、

「で、ベットは?」

「二でかいのでシングル」

三人がそう言った。アスカはその場で膝をついた。

「……………はあ」

ため息をつく。あの上は床に寝ようとしたが、それで肌が荒れたら責任を取って、翼と結婚してもらおうぞと謎の脅しをする奏に負けて、ベットで寝る。

妹と姉貴分である奏に挟まれ、セレナが少しばかり目からハイライトが消えた気がするが、まだあの世界の恐怖が残っているようだ。

現実でセレナが自分に対して、あんなに好きだのなんだの言わないし、自分に対してそんな気持ち、持ってないだろう。

(……………好きとか嫌いか、もう十分すぎるから、考えつかないんだが)

前世は爺さんと共に過ごし、親のこともあり、空虚に過ごしていた。美人美少女と過ごすことなんてない。剣道部だからと言って、関わりは無かったわけではないが、告白も何も無い。

前世の前世は関係ない。それを言えばもう関係なくなるだろう。記憶無いし、記録として経験や知識はあるが、全部戦闘面などだ。女性問題は分からない。

いまはどうだろう？ 響には……………キスしたうえ、胸に触れた。どうすればいいか、お互いの答えは無かったことにするだ。

未来は違う、クリスは仲良いが違うだろ。

調は大事だ、自分を初めからとは言えないが、男性と見てくれた大事な子。そう言う意味で特別だが違う。切歌も大切、可愛い後輩だし、作った料理を食べる様子が可愛いから好きだが違う。

セレナは正直少し起き上がり、見てみると、生足と下着が見えそうだった。ワンピースみたいなもんだなと思ったが、少しおかしいが違う違う。布団かけておく。

翼？ なんかもう娘だ。違う。クリス？ まあ、一緒にいてほっとするのはクリスだが、そんな子じゃないから違うだろ。部屋を少し掃除しようかと言ったら、全力で拒絶されたし。

未来と響は幼なじみだ、違う。

マリアは、高嶺の花だ。自分とつり合いが取れない。無い無い。

結局オレはあれだ、ジャックみたいな子をひ孫にして老後を過ごしたい。

「答えは得たよ……………」

そう静かに決めるときに、

「なのはどうして……………」

僅かな悲しみの中で、静かに動く。

「ん、アスカ？ どうした」

「……………ごめん奏さん、少しトイレ」

「アスカ、そういう時はお花を摘みに行くって言うんだぞ」

「オレ男なのにな……………」

そんな会話の中、みんなに迷惑が掛からないように離れていく。

離れて、離れて、彼女と向かい合う。

「……………やっぱりか」

暗闇の中、金色の瞳で、ただ静かに、

「ア・ス・カ・さ・ま・あ……………」

暗闇の中、彼女は現れた……………

特別番外編、マリア・カデンツァ・イヴの誕生日

それは、マリアの誕生日であった。

「おはよう、マリア」

「おはよう、アスカ」

そう言い、晴れやかな朝日が差し込むロンドン。アスカはこの日の為だけに送り出されていた。

そう、

「メイドね」

優しく微笑むマリア。

ガーターベルト、目から光を消し、優しく微笑むミニスカメイド。だけど、

「マリアが喜ぶのなら、一肌でもいくらでも脱ぐよ。マリアには色々迷惑かけたしね」

「そう……………」

紅茶を淹れ、優雅な朝食を食べ終えたマリアは一言、

「私、そんなこと頼んでないわよ」

「騙されたああああああああ」

すぐに着替えに戻ろうとするが、マリアはまあいいわと言いなながら、それを持ち帰る。

「とりあえずもう諦めるとして」

(ミニスカートでももう順応すると気にしないのね)

メイド服のまま、何か色々取り出す。それは、

「まずは俺からのプレゼントだよ」

「その恰好で出向いたことじゃないのね……………」

そして取り出したのは、切歌、調、セレナの人形であった。

「寂しい時は枕元に」

「待ちなさいアスカっ」

なにげにクオリティーが高いそれらに、さすがにびつくりする。

「ど、どうしたの？ 三人に頼んでお気に入りの衣類着てもらったん

だ。せつかくだから三人に買い物で買った新品だよ」

気のせいか、アスカからのプレゼントににこにこしている三人が想像できるため、マリアは微妙になる。そしてなにげにクオリティーは高い、よく作る。

本人協力の元、洗濯機で洗い可能のぬいぐるみ。

「これで寂しい夜も問題ないね」

「貴方、まず貴方は私のことをどう思っているか聞きたいわね……………」
「けどうれしいためそれをもらいながら、次の物を取り出す。」

「次は切歌と調からプレゼントだよ」

「切歌と調からね、なにかしら」

「中身はオレも知らないんだ、はい」

渡されたそれは、携帯のデータチップであり、なんだろうと思い携帯で再生すると、

「……………」

アスカがメイド服に着替える最中のものであり、パンツと壁に頭をぶつける。

本人は見えていないので驚きながら、マリアは少し赤面しつつ、

「ま、まあ、あの二人にはありがとうって伝えておいて」

「う、うん……………後は、クリスマスからは、ぬいぐるみなんだ」

「やつとまともなものが……………」

「なんか言った？」

「なんでもないわ」

そう言つて可愛いぬいぐるみをもらいながら、次はセレナから、

「写真ね」

「うん、これもなんなのか知らないんだ」

それはまさに目の前の彼が無防備な姿をさらした寝姿に、マリアは少し遠くを見る。

「それで次は響と未来だ」

「これは、映像データ？」

「携帯で見るタイプで、イヤホン付きで見つて未来が」

「……………」

たアスカ。しかも下がタオル巻いただけで、まさかなにもつけてなく、それで外れて、あーだこーだと……………

「……………これは後で見ることにするわ」

「？ うん」

次はエルフナインとキャロルから、

「はいこれ、これがあれば盗聴器も発信機も一発だつて」

「ある意味必要な物がっ」

アイドル兼色々な黒い思惑の渦中にいるため、便利だと思いがながら、発信機用のリーダーをもらう。内心複雑だ。

「それとこれはナスターシャ教授から」

「ママね」

それは手紙であり、自分のここ最近のこと、様々なことが書かれていて、自分の心配する手紙。

それには心が温かくなりながら、静かに見る。

「ママ……………」

『私の方は心配しないでください、毎日三食お肉を食べて、栄養を』
「色野菜を出すようにしておいてちょうだい」

「ん、分かった」

そう言えば防人もこの後、自分と同じ休日を過ごすと言っていた。
前の時には考えられないことに、少し微笑む。

「どうしたマリア」

「ん、いいえ……………アスカはこの後は」

「飛行機の時間まで暇だよ、着替えて寝るとかする気」

「あら、せっかくの外国よ。翼と回る予定だから、一緒にどう？」

「いいのか？」

「ええ」

そう言いあいながら、ちゃんとした服に着替え、翼と共に町を回る。その際、警護と称する監視役も、アスカが睨みを利かせて黙らして、久しぶりに休めた気がする。

そんな休日を過ごし、優しく微笑む。

「マリア、お金はオレが出すよ」

「えっ、けど」

「たまにはいいだろう？　ね」

「そう………ね。お言葉に甘えさせてもらうわ」

自分のことを女の子として見る、可愛らしい騎士に、マリアはまんざらでは無かった。

「……………」

後日、百合姫マリアとゴシップ記事で、可愛らしい女の子（目を隠されたアスカ）をお持ち帰りなりなんなり、変な噂が立つが、マリアは一瞬、

「……………責任取ってもらおうかしら」

少し一瞬、とある悪夢の自分と同じ目になった。それは誰も知らないことである。

45話・海上コンサート

巨大客船の巨大コンサート、翼とマリアのライブ会場。

「みんな、こっちこっちっ♪」

「響、はしゃがないの」

未来に怒られながら、すでに船は出港していて、お客の人達と混じり、甲板で風を受けながら楽しんでる。

「確か腕を広げて、後ろから抱き着くのが流行りらしいデスっ、調調、やってみるデス」

「切ちゃん、それはカップルでやるからこそ意味があるんだよ。私達じゃ悲しいことだってネットに書いてあったよ」

それを言われ、響を初め、その友達三人も苦笑する。

「そーいう話題って、私達には関係ないね」

「そくだね響」

苦笑する一団の中、響はん？と振り返る。

「どしたデス？」

「うん、いま、アスカって人がいたような」

「なに？」

ここには翼やマリアはいない中で、クリスが目を鋭くして、あたりを見るが。

「ピンク野郎はいねえぞ、気の所為じゃないのか？」

「んゝ気の所為かな？」

「少し気にしすぎだよ、その、あすかって人のこと。そう言えばエルフナインちゃん遅いね？」

「迷ってるかもデス、少し探すデ」

「いたよ切ちゃん」

「デスっ!？」

そして響はここそそとしながら、

「エルフナインちゃんっ♪」

「!!」

ものすごくびっくりして、麦わら帽子をよくかぶり、なにか冷や汗

を出しながら、

「み、皆さんここにいたんですかっ」

「あれ？ エルフナインちゃん、帽子してたっけ？」

「さ、さつき買ったんですよっ」

そして抱き着いてくる響にアイアンクローを放つエルフナインに、
響が、

「痛い痛いよ〜どうしたの?! いつもなら嫌がらないのにどうしてっ
!?!」

「いつも抱き着いてればそうなるだろっ、少しはやめてやれ」
「え〜」

「おれ、じゃなく、僕少し喉乾いたのでこれでっ、それじゃッ!!」

走り逃げるように、響の腕から出て人込みに隠れていく。

「お、おいっ。エルフナインっ!!」

「は、はひっ?! あっ、皆さん」

『えっ?』

全員が後ろにいたエルフナインに驚き振り返る、麦わら帽子もして
いないエルフナイン。全員に見られ、首をかしげる。

「あの、どうしました?」

「エルフナインちゃん? えっ、けどさつき……………」

コンサートの時間までその疑問は解けないまま、歌が始まる時間
なる。

全員が特別室に入り、観客の人達の熱気を感じながら、応援準備は
万全である。

「いよいよ歌が始まるねクリスマスちゃんっ」

「ああそうだな……………」

難しい顔で腕を組み、ずっと考え込む。

「先輩先輩、少しは落ち着くデス」

「いまは MARIA 達のことを応援しよう」

「それは分かってるんだけどよ……………」

先ほどのことが気になりつつ、そうこうしているとき、歌が始まっ

た。

「ということがあったから、少し調べに来たんだが」

風鳴弦十郎がモニター室で現場にいる二人、藤堯と友里に、今回の主催者が経営する会社へと出向いてもらっている。

「どうだ、なにかあるか？」

そう聞くと、応答が返ってこない。

「……………朔也、あおいツ、誰でもいい、返事をしろ!!」

そして異常事態へと、気づく。

「みんなっ、今回は集まってもらい、ありがとうっ」

そうマイクで話しながら、手を振る。会場のライトに照らされながら微笑む二人。ここの司会者兼、主催者もまた挨拶をしながら、微笑んでいる。

「いっやくさすが風鳴翼さん、そしてマリア・カデンツァ・アヴナ・イヴさんっ。おかげで会場満員っ。このまま船が沈んでしまいそうなほど、歌を聞きに来てもらい、とてもとてもうれしく思います!!」

そんなジョークの中、主催者はピエロのように奇怪な姿で、司会者として場を盛り上げていた。

「実はここでドッキリ的なイベントがあり、お二人や皆様様を受け取って欲しいのですっ、どうか受け取ってくださいっ」

それにどよめく会場に、マリアと翼は視線が重なる。お互いそんな話は聞いていない。スタッフもまたそんなことを聞いていないと言う動きが見える。

「ミスターそれはいったい？」

「ええそれは」

その瞬間、

「この身体は剣でできているッ!!」

一刀の剣が放たれ、主催者はそれを避けた。

「なっ!?」

二人は驚いた。この場に剣士、アスカが現れたこと。

そして、

「おっとつとつ!!」

歌姫二人に放たれたのは、ムカデのように動く爆弾であったが、それより先に細長い剣が無数突き刺さり、爆発した。

そんな中、巻き込まれないように離れていた司会者は、驚くほど高く跳び、天井のケーブルに捕まり、辺りを見渡す。

「おやおやおやおやくやく客席も爆発する予定でしたのに、爆発しませんね〜」

全員がどよめき、立ち上がろうとするが、

「おいなんだ?!」「せ、席から離れられない!?!」

そんな騒動の中、一つの剣を持ち、バイザーをつけた剣士がため息をつく。

「めんどくさいことさせやがって……まさかここで発信機解体技術が役に立つとは誰も思わなかった」

「よつと、貴方様が全部解体したんですかア〜?」

降りてきた男から二人を守るように構え、新たな剣を取り出しながら、

「妹が工作得意だし、気づいたときには色々焦ったよ。まあカルデアの地獄を生き抜いたオレや妹がいれば問題なく解体できた。ああ、人質になってる本当のオーナーさんたちはもう助けたからな、キャスター?」

それを言われ、高笑いするキャスターはピエロのような姿に変わり、大きなハサミを構えながら、構えていた。

その瞬間、映像ではあるがマッシュが現れて叫ぶ。

『サーヴァント特定、クラスキャスターサーヴァントつ、メフィストフェレス!!』

「魔術師らしい魔術師、快楽主義の爆発魔。なるほど、内側が破裂していたのはそう言う訳か。よくもまあ会社の人全員殺してくれてたなおいッ」

忌々しく言い放ち、それに二人のアイドルが何が分からないが、男がそれに否定もせず、ただニタニタ笑う。

「イツヒヒヒヒ、仕方ないのですよーいやね、オーナーさんに楽しいイベント提供しようとしたのに、嫌がりました。どのようなものか見せてあげたら、泣いて喜び、その場で崩れ落ちましたよーイツヒヒヒヒ」

「なっ」

「……」

竜の瞳でギロツと睨み、全身から魔力を吐き出す。シンフォギアに近いが、根本は宝具のようなものであり、歌無しでもそれなりに戦える。

それに笑いながら、ピエロの悪魔は懐から小瓶を取り出し、叩き割る。

そこから大量のノイズが現れ、それに観客がざわめくが、

「安心してくださいなっ、観客の皆様には別のイベントがお待ちかね♪」

そう笑いながら、目の前にいる三人を見る。

「というわけで申し訳ないのですが、わたくし、ただのキャスターですので、白兵戦はできないので、その剣しまつてくれませんか」

「ああ？ テメエはオレが人質にされる可能性無視して出てきたと思ってるの？ てか」

足場を思いつき踏みしめ、ステージを壊す。ステージの下に無数の爆弾虫が動いていて、それに睨む。

「テメエみたいな基本的な魔術師に、正々堂々なんて言葉は使うか。如何なる手をおおうと、徹底、圧倒、絶対的にここで仕留める」

「おおっ、怖い怖い。イツヒヒヒ」

その瞬間、白い城壁のようなもの客を守る。ほうと感心はするが慌てない。

「観客の皆様を守ってもらいありがとうございますっ、お礼にこれを」

一斉に爆弾虫が巻き上がり、向かってくるが、恐れず、睨む。

「この身体は無限なる夢幻の担い手」

『微睡む爆弾ツ』

『ロイ・アイアス・ガーデン
熾天覆う七つの花園』

爆発は無数の花卉が防ぎ、爆発による火力の道は操られ、爆炎はキヤスターへと向かっていく。

それに驚きながら、楽し気に笑いながら避ける。

無数の花卉、最強の盾を生み出す。無限なる夢幻に登録されたロー・アイアスと言う幻想を一斉に呼び出しただけのこと。

「だから、そんなことさせないの？ 分かる？ この二人に傷一つどころか、衣装にすら触れさせねえって話だよ。他にもサーヴァントいんのは分かっているから出てこいよ、異世界の英雄ツ。それとも臆したかつ」

そして船が大きく揺れた、なにとするが、何が起きてもびつくりしない。

わざわざ壁が崩れ、外の様子が分かる。海の真ん中に真っ黒な穴が開き、無数のイカの足が、船に絡まる。

「クラーケンか」

さすがに幻獣まで呼んでいるのに驚きながら、それにイツヒヒと笑っていた。

「そうですねですが、博識のマスター様で羨ましい限りッ。所詮、わたくしはただ呼ばれただけの使い魔。観客の皆さまを綺麗な花火にすることはできず、海に開く泥の中に入れる役目なのですよ、オヨヨヨ……………」

そう泣き笑いながら、巨大なイカの化け物が現れるが、それだけだ。そう思ったが、

「あらキヤスター？ あなた、おしゃべりが過ぎるのではなくて？」

「先の発言、見過ごすわけにはいかぬな」

『敵サーヴァント反応増援ツ、反応からして泥により狂化された』

「ヴラド三世とカーミラか……………まあいいさ」

そう言いながら、槍を構える吸血鬼と、拷問道具を持つ女性相手に、歌と剣の構えを取る。

「たかが英霊風情が、怒らせた状態のオレと戦う。その意味を教えるやる」

「サーヴァント三人相手に、後ろの歌姫様をお守しながらですか」

「あらあら、処女の血は私の物よ」

「ふん、串刺しにさせてもらおうぞ小娘」

その言葉に、少しばかり黙り込む。

二人も、

「待て、君のような少女が戦うのなら」

「私た」

「男だ」

こういうのは早い段階で言おうと、強く言う。その時、全員が、空間が、世界が停止した。

「オレは男だツ、身体は剣でできているツ!! 欠片も残さず異世界の座に還ってもらうぞサーヴァントどもツ」

「ば、バカなつ、あの肌のうるおいで男だと言うのっ!？」

「このヴラド三世の目を欺くとは……………」

「アツヒヤハハハハハハハハハ」

「殺すツ」

特別室でそのおん、ゴホンゴホンツ。男性剣士アスカが歌を歌いながら、雷鳴轟かせ、斬り合うのだが、全員の動きが早すぎる。

「装者の動きじゃねえツ、部屋も開かない。二人の元に向けない」

「で、ですが皆さんをこのまま出すわけには行けませんっ。装者のことは機密事項ですし、なにより彼らの会話が気になります」

「だけどあのイカを放っておくわけにも、あの海の泥みたいな落とし穴もやばいぞっ」

特別室にいた、風鳴翼達の友人扱いだったためか、席に固定されず、部屋からは出られないが動ける者達。

窓の外、海のと真ん中、まるで落とし穴のように黒い穴が開いて、海

水を飲み込んでいるのを見てしまう。だが、どうすればいいか分からず、行動に移れない中であつた。

だがそう話していると、扉が槍で貫かれ、破壊された。

「ガングニールや他の装者はいるか？」

赤い髪の槍の装者が現れ、扉を壊して入ってくる。

「あ、あなたは?!」

「ロンの槍の装者ってことでよろしくつ、でだ。いまは非常時だ、あたしらの正体より、目の前の観客を助ける方向で手を貸して欲しい」

「いきなり出て来てはいそうですかって言われると思ってるのか？」

クリスが睨みながら言うが、バイザーの女性はははっと笑い、

「このままじゃたくさんの人が死ぬ、そう分かっていながら何もしない。そんな奴じゃないのは分かり切ってるんでね。んなこと言われても困らないんだよこつち」

「!」

驚く中、真剣な顔つきに代わり、静かにこちら側の目的を話すことにした。

「いいからこつちの話を聞いてくれ、あたしたちはできる限り、正体を隠したまま、この事件を解決したい装者なんだ。訳は後、ともかく弟分が久しぶりに女扱いでぶっ飛んだスペックフル活用しているいまのうち、船を陸地に上げる」

実は城壁内部は幻影を作り、客はその場にいるように見えて、いま静かに避難が始まつてる。船内の掃除も終わらし、後は船を陸地なりなんなりに上げるだけだと説明しながら、

「キャロルもとりあえず、陸地に糸くくり付けてるし、後はクラーケンと三体のサーヴァント退治なんだ、頼むから力を貸してくれ」

「えっ」

その時、全員が驚いた。それに首をかしげるロンの装者。

「ん、どうした？」

それに答える前に、部屋に盾の子が入ってきて、

「奏さん、観客の人はとりあえずクラーケンから守りながら外に出しました、後は陸地に逃がすだけです」

「分かったセレナ、んじゃ、響、クリス、それと切歌も調も力貸してくれよなッ」

そう言っつてイカ退治だと言っつて走り出し、盾の子も一礼して走り出す。

「……………はい？」

「くっ、己ッ」

無数の杭が地面から生える。だが同時に剣が地面に突き刺さる。

「何をしてるのッ?!」

拷問具を使うが、それは拳で握りしめる。

「なっ!?!」

クラーケンも様子がおかしい、何かに怯えて、制御しづらい。

「あらつまア？ 全然お話が違うではございませんか。イツヒビヒ」

「どーせ下見だろ？ オレのスペック考えれば、狂化されててもスペック不足だし、クラーケン程度じゃもう驚かないし、手の打ち探りじゃね？」

「……………そのようございますね〜」

そう察しながら、相手を吹き飛ばし、さてとと首を振る。

「でだ取引だ、テメエらの召喚者が嫌がるように行動してやるから、命令されたことを言っつてくれないか？」

「えエエ、わたくし裏切るなんてそんなことできませんッ。しいて言うなら、ただ適性に合ったサーヴァントが呼べるため、言うことを聞かない者がいたりいなくなったりしたり、力が足りないから、まずは泥に力を集めたりとかするかとか、力貯めしようとして、貴方達が来たり、余計な英霊が出て焦っているとか、口が裂けても言えませんよオオオ」

そんなことを言う。なるほど、召喚できても、主導権は握れないのか。だから彼女達はこっち側で、あれはこんな感じなのか。

便乗して味方していた二人は、キャスターを睨むが、笑うだけの男。それはそう言うものなのだ。信じてはいけない。そう言う扱いの方

が、向こうも楽しめるからそう言う扱いがいいのだ。

「んううウ、これは」

怪訝な顔から、一転して笑い声を上げる。

「イツヒヒヒ、やりすぎたようですね〜我々もエサですかア」

「ああ?」

突然、大きな雄たけびが響く。それに首をひねったとき、マシユがまた現れた。

『アスカさん気を付けてくださいッ、この反応はッ』

その瞬間、船に降り立ったのは、巨大な山のような姿の、

「ヘラクレス? いや、でかいッ」

『!!?』^{メガロス} 巨英雄、超狂化されたギリシャの大英雄ッ、ヘラクレスさんですッ』

「射殺す百頭かあれ!!? いや、あれが近距離戦形態の真の姿か? 形態を変えて使う武器とは思ってたが、あんな巨大な姿になってもう」

雄たけびは世界を揺るがし、アスカへと向かってくる。

彼の知識に収まらない巨体と武器、そこに理性などは無く、ただの災いと言っていい存在と成り果てた存在が現れた。

逃げればマリアと翼に、その巨腕から振るわれる武器が薙ぎ払われる。

つまるところ、これで終わる。男の血とはいえ、綺麗な花が開くと、二騎が思ったが、

「……………防げる」

「はい♪ お任せてくださいアスカ様♪♪」

そう言つて、その巨腕の一撃を、地面にめり込みながらも、片腕で防ぐ、少女がいた。

少し遠い目をするアスカ。後ろの二人は驚き、カメラ中継はもちろん、ほぼ全員が驚き、何名かついにかと言う、少し呆れながらそれを見た。

「!!? き、貴様っ、どこから現れたっ!?!」

突如現れたサーヴァントに対して叫び、彼女は巨腕の一撃を防ぎ、バーサーカー同士にらみ合いながら、片方は怪物の咆哮を上げ、一人は優雅な美少女として煤しげににらみ合う。

「妻と言う者は、誰にも悟られず、殿方の三步後ろに控えている者………ずつと後ろにいました」

「いたんだ」

『いたのですか………貴方には人質の方や生き残った会社の方、オーナーさんのことを頼んだはずですけど』

「藤堯さんと言いう殿方さん達に、『お願い』、をしておきましたので、ご安心してください」

「生きてるかな………」

遠い目をしている。

そして再度その巨体に似合わないスピードで接近するメガロスだが、そのスピードを凌駕するよう、速く動き、長刀で防ぎ、赤いリボンで、相手を縛り、動きを封じる。

所々から竜の鱗を纏い、赤いリボンを纏う白い着物を着こみ、夜の中で微笑む。

妖艶な色香を持つ少女は、

『そちらが海の悪魔クラーケン、超狂化した大英雄ヘラクレスでしたら、こちらは』

「愛に生き、愛の炎を得て、愛の為、竜と成り、神の片鱗を纏う。純白竜清姫、さあ、嘘偽りで、歌い手の舞台を穢した者達を、煉獄よりも熱き焔にて、焼き尽くしてごらんに見せましょう」

なんかもうこつちの勝ちでいいと聞きたくなるような最凶のサーヴァントきよひーと共に、アスカは武器を握りしめた。

46話・愛ってなんだろう？

藤堯達は驚いていた。多くの人が殺されて、様々な方法で殺されていて、だいぶ経つ死体の中、彼女に捕まり、色々と話を聞かされていた。

銃弾は全て着物や鱗に弾かれ、うつすら微笑む表情が怖かった。

「わたくし、嘘偽りが嫌いですので、言った瞬間、旦那様との愛の糸の色になってもらいいますから、そのつもりで答えてください。こちらも嘘偽りなく、お答えします」

そうしれつと言いなながら、血のおいがするリボンに捕まりながら、彼女は、

「貴方達は魔神柱のことを知っていますか？」

「し、知りませんっ」

「そうですか、敵……あ、アスカ様が言うには、内密に動いているから敵となるお方ですね。安心してください、我々は貴方達を傷つける気はありません。個人的には嘘を言えば愛の糸の色になってもらいますが」

そう少女が言う中、友里が聞く。

「これは貴方がしたの？」

他の人はびくつと怯えるが、気にせず首を振る。

「いいえ、先ほど言った魔神柱、それに召喚されたサーヴァント、使い魔になった英霊の手で殺されたようです。奥の部屋で人質になっている方がいるので、お助けをお願いしますか？ きつとわたくしでは怖がらせてしまうので」

藤堯はなんで冷静に聞けるのと言う顔をするが、少女はすぐに拘束を解除して、本当のオーナー達や、その家族がまだ生かされている方を助けに行くので、同行するかなどを聞き、外で待つことにする。

人の姿をしていない少女、竜の角を持ち、鱗を持つ少女は司令官である弦十郎にも嘘偽り無く、話をした。

「我々の方では、貴方達に知られると、余計な問題が起きるから、内密に動きたい、この事件を犠牲無く解決したい者達です」

『……詳しく話はできないのか』

「わたくしは嘘偽りは嫌いですので、分からないと答えさせてもらいます。ですが、魔神柱なる敵について、少しばかり情報を」

曰く英雄と呼ばれる、または呼べる存在を呼び出し、使役する術がある。出所は言っていないかわからないため言わない。

自分はそれで道ができた為、無理矢理この世界に迷い込んで来た、悪行で有名な人物、清姫伝説の清姫。それがより強化された存在と説明する。

悪名で世界的に有名な存在も召喚対象なので、気を付けてほしいと伝え終える中、

『君の言った通り、本物のオーナーはこちらで保護した。薬漬けと拷問の後があるが、命に別状はない』

「そうですか、ならわたくしは船の方へ。何をたくらんでいるかはわたくしどもも把握していないですから、戦力は多い方がよろしいですから」

『なら途中まで車で送らせる』

「よろしいのですか？」

『嘘偽りが嫌いなんだろう？ それを信じる』

「ありがとうございます」

こうして彼女は、

「待っててくださいね、アスカ様」

そう告げて、後で船まで飛んで行った……………

——
???

「愛の為なら、この程度のこととは片手間でもやらなければッ」

そう言い、メガロスをあしらいつつ、サーヴァントとクラーケンも同時に対峙する。

「ば、バケモノがッ」

「はい、わたくしは化け物でございます。愛の為、初恋の人を溶ける鉄と共に焼き殺した化け物。わたくしと契約したマスター様方全てを、

その方の生まれ変わりとして見、愛そうとした化け物でございます」
そう言いながら、メガロスの大剣を角で押え、微笑む。

「ですが、怖いと思われても、化け物と見ても、恐怖でふるえ、恐ろしいと思いながらも、真つ正直に想いにお応えするお方の為、いまのわたくしはここにいるのです」

メガロスの一撃を炎で吹き飛ばした瞬間、一つの閃光がそれを穿つ。

「この身は無限なる夢幻の担い手」

その眩きの瞬間、無限に生まれた夢幻の刃で吹き飛ばし、壁に括り付けた。

それと共に清姫の目が光り、二騎のサーヴァントを睨む。

「これより見せたるは、愛に溺れた愚かな娘が得た、捨てきれぬ想いへの結晶」

無数の炎が竜と成り、燃え上がる中で二騎を捉えた。

「百花繚乱・竜炎」

瞬間、全てが灰塵に燃え上がるほど燃え上がり、それに二騎どころか、サーヴァント戦を知る者達も驚愕する。

全て、核すら燃やし、いや消し去るほどの熱量を持って、瞬間的に消された。

悲鳴も何も、魂すら刻むほどの熱量に、微笑する。

「よし、気にしないッ」

アスカはそう叫び、キヤスターはイツヒヒヒヒ、と少し乾いた笑いをする。

「まさかまさかの瞬ッ殺ッ!? いくらなんでも規則外すぎますねッ」

「愛です」

「愛怖いなッ」

にこやかに微笑む清姫に、アスカは叫ぶ。

その時、回転音が響くと同時に、

「清姫」

その腕をつかみ、同時にマリアと翼を背負い飛び上がる。

そのタイミングは、かみ合う。

力技で船体を吹き飛ばし、渦を飛び越えさせた。

渦を飛び越え、橋へと飛び乗る大型客船。盾の為に着地の勢いで揺れたが、船体は無事であり、橋にはなにも無いのは確認済みであり、橋もまあ平気だ。

同時に、無限の剣を爆撃機として放ちに放ち、泥を破壊しておく。

「これでいいか」

「ですね、それじゃ」

「逃げるぞッ」

大型客船が橋に乗り上げた。後始末を任せて大急ぎでその場から逃げていく。

後始末大変だろうなと思いつながら、元リディアン学園、了子さんの計画場所は、やはり荒地のままであり、そこで、

「おっ、おっかえり〜♪♪」

アストルフオがリディアン制服を着て現れる。女子の。

「アストルフオさんっ、それはアスカ様の着ていた物ではないですかッ」

「うんっ♪ これ着てると、アスカが抱きしめてくれてるみたいで……」

頬を赤くして、息が少し荒いアストルフオ。無視する。

少し遠い目になるアスカ。あの後だ、イベント前、こうして動く前に清姫に会い、そして彼らも発見した。

やはりはぐれサーヴァントが多数いたため、時間があつたため接触して今に至っていた。アストルフオは布団の中や風呂場に入ろうとしたりするのだが、その際様子がおかしすぎた為、必死に逃げた。

現実逃避後、すぐにもう一人の彼？のことを聞く。

「ともかく、デオンもいるだろ？ 清姫と良い、はぐれサーヴァントと出会うなんて」

「うん、デオンならともかく、藤堯って人達の様子見て、問題ないから帰って、水浴びしてるよ。少し汗臭いからって」

「……………」

「アスカさん、いまなにを考えました」

「アスカ様？」

セレナと清姫が二人そろって微笑むが、眼が笑っていないためすぐに考えるのをやめる。その様子を見ながら、奏は微笑む。

「ともかく飯にしようぜ、マシユにも報告しなきゃな」

「ですね」

『お食事の中で作戦会議ですが、船上による、メフィストフェレスの暗躍阻止、ご苦労様です』

『正直、我々のように秘匿前提で動かなくていいっていうのは、色々便利でいいね』

「こつちの旦那の胃が心配だけどね」

そう奏が言う中、アスカがしつかりおいしい料理を作る。よくこれだけの材料でいい匂いを出せるなど、奏は翼の為に、確保すると心に誓う。

「とりあえず、清姫、アストルフォ、デオン。この三名は」

『カルデアから姿を消したサーヴァントであり、まさかヘラクレスさんが、また超狂化されていたなんて……………』

「えっ、またってなにまたって……………」

マシユは難しい顔をするがそれに関して、困惑するアスカ。とある二人も頷く。

女でもあり、男でもある、フランスの密偵にして騎士、百合の騎士デオン。

アストルフォ共々、ここで見つけたので仲間になるように頼んだ。二つ返事だった。

「さすが数少ないまともサーヴァントだよホント……………マリーと共にオレを連れ去ろうとしたことはオレである限り忘れないからな」

「やめてやれ」

デオンも何か妙に顔を赤くしていたので怖かったのを覚えている。ともかく、カップ麺で作った軽い麺料理を配りながら、話し合う。

「それでどうしますか？…この霊脈では、さほど機能できません」

「それには同感だ、ここじやまともに活動できないぞ」

キャロルからもそう言われながら、果物を齧り、食いながら考える。

「ちなみにメガロス相手にできるの、オレと清姫以外外せばどうなる？」

「悪い無理」

「無理です」

『無茶を言わないでくださいッ、相手は彼の有名なギリシヤの大英雄を、理性を全て外した怪物を超えた怪物です!!? むしろ相手にできるのがおかしいんですよっ』

根源に至った者と、なんか別の何かに至ったサーヴァント以外相手にできない。

それを知り、少し考え込む。

「……………向こうも分かればいいが」

「それは分かるだろう？ マリアと翼が側で見てたんだ、普通の装者じゃ、かなわないって分かるよ」

奏はそう言いながら、アスカは果物を割り、口に入れる。

ゆっくりしている中であつたが、ふとっ、そうふとっ、何か引つかかった。

「……………ごめんきよひー少し外れてくれる？ ああいや、少しデザー

ト作つてくれないかな？」

「はい♪ 任せてください」

そう言つて清姫を外してから、アスカは、

「みんな、正体隠してるよね？ まさか誰かの前で本名言つて無い？」

その瞬間、ライトが一斉に照らされた。

しばらく黙り込む中、しばらく考え込む。

「……………悪い、セレナって言ったな確か」

「私も奏さんって」

「……………そもそも、俺は豎琴での疑似シンフォギア装者になったんだ。エルフナインならすぐに俺だと分かるだろう」

「……………無理か」

色々諦める事にした。

私は夢を見ているようだった。

「あーこんにちは、異世界のみんな」

「……………」

奏さんが気まずい顔で頬をかき、セレナちゃんは、気まずそうに顔をそらしていた。

「かな、で……………」

「セレナ……………」

お二人は放心状態であり、師匠も驚いている。そんな中、私はキャロルちゃんへと腕を広げたが、冷静に木の棒を向けられる。少し尖つてゐる。

「抱き着くな頬すりするな俺に関わるな立花響」

「ひ、酷いっ。どうしてそんなに嫌がるの?!」

「お前の行動は筒抜けだ、もう嫌だ。少しはその頭の中解体して常識を入れてやろうか?」

そんな中、ともかくと、アスカと言う人が説明し出した。

自分達は完全聖遺物ギャラルホルンを介して、異世界の力、人類史を滅ぼして、人類そのものを消そうとする魔神柱。その残骸がこの世界に来た為、倒しに来た。

平行世界、異世界と関わり、奏、セレナ、キャロルが生きている世界から来た、平行世界の装者であり、異世界の技術者と協力している装者だと。

「にわかには信じられないが、分かる点は多くある」

この世界のギャラルホルンの保管場所に簡単に入られたことなど、色々証明できることを言いながら、異世界の力も説明する。

そんな中で、師匠はため息交じりに睨む。

「どうしてもっと早く、俺達に協力を要請しなかった?」

「この世界じゃ、確実に死んでるからだよ旦那。それでその、翼達に嫌な思い、させたくなかった……………」

奏さんはそう言いにくそうに言う。それに翼さんは、

「……………確かにな」

「平行世界のセレナと言われても、正直……………」

「うん、マリア姉さんのことだから、この世界で死んだ私のことを大切にしてくれてる。そう思うから、踏みにじりたくなかったんだ」

セレナちゃんが言いにくそうに言いながら、マリアさんは顔をそらす。

「すぐに順応もできないだろ？ そう割り切る性格じゃないのは知ってるし、割り切ってるって言って、無理もさせたくもない。それはこっちも、そっちの天羽奏達は、望んでいないのは確かだよ」

それを言われ、難しい顔で頭をかく師匠。

アスカと言う人も難しい顔をしていた。

「やっぱり無理するべきだったかな」

「だからって戦う訳にはいかないだろ、ともかくもう諦めるぞ」

奏さんはそう言って、一区切りする。

——龍崎アスカ

「できれば翼さんとマリアさんを外すか、時間を置きたいです」

そうこちらの司令にそう言う。向こうもうむと頷きながら、お互いの考えと方針を伝え合う。

「こっちは泥と魔神柱の破壊です。泥は、平行世界と言う平行世界、とあるバカが自己犠牲の所為で悲しんだ人々が生んだ心。悲しみの結晶です」

泥のように黒く染まり、狂気へと変貌した心。自分が、俺達が背負うべき負の遺産とも言えるものだ。

魔神柱はそれを知り、得て、利用してここで行動している。

「行動理由は明らかに人類の焼却、いや消却か？ 人と言う歴史そのものを星や世界から消し去ること」

「可能なのか、そのようなことが」

「少なくとも、彼らはそれを悲願に動いています」

かつて万能の王へ仕え、見たくもない人の歴史を見て、あまりの悲しみ、哀れみの中で獣と成り、その歴史を否定する。存在自体無へと無くすことが救いだと言じた獣。

「協力をお願いできますか」

「愚問だな、問題ないっ。平行世界だろうが、異世界だろうが、君たちも俺達の仲間だろ？ 答えなんてわかっているはずだ」

そう答え、それに静かに頭を下げる。

「これより、平行世界より来た装者、龍崎アスカ、天羽奏、セレナ・カデンツァ・ヴナ・イヴ、龍崎キャロル。四名と共に、異世界の魔術師機関カルデアと協力し、この事変解決に全力を尽くす、以上!!」

そして、

「まずはパーティーだッ、心の溝を埋めるためにもなっ!!」

「……………ま、仕方ないか」

少し呆れながら、こうしてここでの活動の土台はちゃんとできた。

47話・動き

ともかく、オレは静かに、

「ハウスツ!!」

二人のサーヴァントにそう叫ぶ。

「僕はアスカと寝たいッ」

「アスカ様と寝床を共にするのはわたくしですッ」

二人の暴走者に対して、セレナがよいしょつとと、

「阻めッ、ブリテンの歴史イイイイイイイイ」

「ああッ!?!」

セレナが作った城壁の中で、静かに寝るが、

「セレナも中だけどいいの?」

「力を維持するためにも中にいないといけませんから、気にしないでください」

そう言つて、奏さんも隣にいる中、城壁を削り出す二騎を無視して、ゆっくり寝る。

ただ一人、平行世界の銀の腕さん。何か複雑そうなしている人があるから、奏さんはどうすんだこれと呟いた。悪いが無視する。

「……………」

やべっ、こつちじゃ防人も加わってる。一人増えてる。

そしてキャロルは翌朝、目が覚めたら隣に立花響がいたので、布団で縛り付けて海に投げ捨てました。

朝食を作る中、奏さんを初め、こちら側も向こう側もいる中で、少し情報があるらしい。朝食を食いながら、夏休みの響、いや立花達も含めての話し合いだ。

「ここ最近、低学年の少年少女が行方不明と言う謎の誘拐、失踪事件が多発している。この件を今回の、英霊事件が関わっているか、君たちから意見を聞きたい」

『いま送られたデータから、微弱ですが、サーヴァントの反応がありま

す。関係はどういったものかはわかりませんが、ほぼ無関係と言うわけではないでしょう』

『と言っても、まるでその場から消えたように、そこだけにしか反応が無いのがおかしいけどね。少しばかり解析度を上げてみるよ』

マシユさんやダ・ヴィンチちゃんの話を聞き、全員が黙る中で、これで問題点が二つある。それはデオンが、

「今回のその事件を起こしているのが、私達のような、偶然呼ばれたはぐれサーヴァントか、あるいは」

「魔神柱が故意に呼んだ英霊かだよな……………少年少女を攫う英霊なら、反英霊。悪名が有名な人物か？」

そう言うが、書類を読む中で、少し引っ掛かりがある。

「共通する点があるな」

「ん、ガキつてこと以外にあるのか？」

雪音さんがそう尋ねると、いやと答えながら、

「全員が全員、塾帰りであり、発覚も塾終わりからだいぶ経ってる。一時間くらいってレベルじゃない」

それに全員が首をかしげる中、それに嫌な顔をする弦十郎司令官。

「……………被害者の子供の保護者は、後日、気付いたそう。子供が家に帰って無いことにな……………」

「デスっ!？」

「後日って」

「まさかつ、テメエのガキなのに、ちゃんと面倒見てねえのかッ!!？」

それに憤る装者達、捜査するために派遣した者達も呆れるほどで、中には調べている時の訪問で気づいたと言う、バカな親がいたほどだ。

「ご両親がいるのに、なんでそんなこと……………」

立花さんが悲しそうにする中、アストルフオ達も嫌な顔をするが、

「……………」

一人だけ、鋭い顔をする。

「……………まだ安心はできないが、まだはぐれサーヴァントで、命の安全は保障する」

「本当かつ!？」

驚く中だが、こんなことをするサーヴァントに心当たりがある。

だが予想だ。外れていたら大問題だ。

「ともかく、オレの予想通りのサーヴァントか確認すれば、問題は……子供達の説得だな。誘拐されたんじゃない、サーヴァントに言われて、家出したであってほしいが」

「? そんなサーヴァントいるっけ?」

「全てのマスターを我が子とのたうち回るサーヴァントなら知っておりますが?」

「それもそれで怖い、生贄みたいな扱いじゃ無い事を祈るしかない」

難しい顔のまま、それにはマシユが、

『その心配なら、まだ大丈夫と言えます。それらしい術や儀式の痕跡はありません。ただサーヴァントの気配だけはあると』

「それは行方不明現場付近で?」

『はい』

それなら予想通りのサーヴァントの可能性が高い。なら子供の安全は問題ない。むしろこっちが心配だ。

「あの子、敵に回るとまずいか? ともなく、マシユさんはこの人達と協力して、魔術的反応の索敵で、オレらは現場で」

そう言いながら、料理を置く。おいしそうな洋食だ。

「絵本を探そうか」

——
???

サーヴァント、クラスキヤスターのナーサリータイム。童話と言う童話から生まれた英霊であり、姿形が無いので、絵本の姿と、昔のマスターであり、大切な友達の『ありす』の姿をした少女。であり、娘のような子だ。

だが姿形は無いので、空間が本体のような、実体のない英霊の一人。

「それがアスカさんが子供たちを攫ってるサーヴァントだと?」

「まず予想としてだけど、痕跡も僅かで、子供オンリーってのがね。ア

サシンって可能性があるから、まだはつきりできないけど」

「そのナーサリーライムと言う英霊は、絵本の姿をしていると？」

風鳴さんがそう聞き返す中、静かに頷く。

「本来は姿が無い、ここ、イメージで生まれた英霊なんだ。姿形は当てにならないし、考え方は本当に子どもだから厄介なんだよ」

頭を指さしながら、装者に説明して、奏さんは、

「だけど、まだアサシンの可能性があるんだろ？」

「少しね、子供の顔がな……………」

そう言われ、響は書類で渡された、子供達の写真を見る。みんながみんな笑っていない、覇気も何もない。

そのうえ、履歴を見ると、遊んでいる時間はどこだろうと思うけど、習い事が多い。学校もエリート校と、そうなっている。だけど息が詰まるなど思いながら、

「ナーサリーライムはね、子供の遊び心が生んだ英霊なんだ。だから……………確かに、マスターがいない彼女なら、遊び相手として自分の空間に閉じ込めそうですね」

デオンがそう言い、それに頷く。

「だけど問題がある、ナーサリーライム、アリスの空間に閉じ込められたら、時間の感覚が消えるし、自我が消える。取り込まれる可能性もあるんだ」

「なら問題じゃないのか!？」

「あつ、それは問題ないと思います。それならもう少し、反応が強くなるので」

セレナの言葉にそれには安心する。安心するが……………

「まず、子供を取り戻しに来たオレ達を、敵として認識するのは確かだ」

「そうなんですか？」

「可能性が高すぎる、遊んでるときに邪魔されたらキレる子供だぞつ。正直手が付けられないし、たぶん空間にいる子供達も、貯めに貯めた不満が後押しするから」

「うへえ……………だいたい苦労しそудだよそれ」

らの交渉難易度が上がったぞっ」

「濡れ衣は解けましたけど……子供たちの説得ですよね？」

それを考えると億劫になるが、いまは言っていられない。

とりあえずサーチとクツキーをエサにして、本体か入口を探し出す。いまはそのために動き出すしかない。

お菓子をエサにして、静かに痕跡を探る。

「結果ここが堺か」

そう言つて、ここまで来れば分かる。僅かな空間のズレ、それに清姫が手を上げる。

「ではアスカ様、この清姫が」

「えっ」

「えい♪」

そう微笑みながら、バキツと目に見えない隙間に指を入れて、バキバキと砕きながら、固有結界をこじ開ける。

ただ静かに、身体が震えた。

「いまは冬か……もう少し暖かい格好すればよかったよ」

「アスカ落ち着け、この世界の四季は夏だ」

「もう清姫伝説の清姫ではありません、きよひーです。もうただのバーサーカーじゃないですよ」

冷や汗すら引く寒さが身体を冷やす。セレナが自分の知識にある、サーヴァント清姫を遥かに超えた存在に戦慄する。

清姫は気にせず、ふふつて微笑み、袖で口元を隠す。

「これくらい、淑女のたしなみの一つです。旦那様を支えるのなら、異世界の壁の一枚や五千枚、軽くひっぺはがせなければ、良妻にはなれないですから♪」

「怖いよ清姫」

頼もしいけどね。そう言いながら、入口に剣を刺して、中の様子を見ると、

「ガキがいたぞっ」

雪音さんの叫びに、みんなびつくりして、クツキー食べている。こ

ここまで来るのにもクッキーがいつの間にか無くなっていった。

「さてと、交渉はオレに任せて、子供のことはオレ得意だから」

そう言われ、雪音達は後ろに下がる。黒服の大人も、視界に入られると面倒なので絶対に口出ししないように言っておきながら、中に入ると、

「アスカ様っ」

清姫の叫びと共に、瞬間的に現れた瓦礫が、アスカに落ちた。

「アスカさんっ」

そんな中、一人の少女が大きな絵本を広げて、現れた。

「貴方達、私の友達を攫おうとする悪い人？」

「ちやうわい」

そう言つて、瓦礫から平然と粉々に切り刻み出て来るアスカ。

「平気なのアスカっ」

「アストルフオ、オレはこれでも日々ヤンデレやらなんやらで精神が鍛えられた男だ。この程度はむしろ物足りない程度だ」

「日々のような日常……いえ、時折濃いだけです」

デオンが申し訳なきような顔をするが、アスカは平気な顔でアリスを見る。

「アリス、悪いけどお茶会は終わりだよ。そろそろ帰る時間だ」

それに子供達が酷く嫌な、怒られるとかじゃなく、本当に泣きそうになるほど嫌な顔をした。

「いや、まだみんなでお茶会を楽しむのっ」

瞬間、悪魔のようなものが現れ、その腕がアスカへと振り下ろされるが、瞬間斬られる。それに風鳴達は驚く。

見えない速さの居合切り、構えすら無く早いスペックに驚くこちらの装者達。

「無駄なのっ、ヤギさん!! お茶会邪魔する悪い人を追い出してっ」

それで現れたのは、ジャバウオツク。それをスキャンしたマシユ側が叫ぶ。

『そんなッ、いくら自分の固有結界内だからってッ。逃げてくださいアスカさんッ!! いま現れた敵エネミーは、全スペックが計測不

能っ、下手をすればメガロス以上のばけ』

「えい♪」

そう言つて、清姫が小突いた。

結果爆砕したようにぶっ飛んでいった。

『ええええええええええええええええええええええええ』

もう何も言わないと言う顔のアスカ、こほんと着地した清姫は静かに三步後ろに控えてる。

「清姫、悪いけど子供が怯えるからやめて」

「ですけどアスカ様、アスカ様の場合では、剣で切り刻むので、こちらの方がよろしいかと思ひまして」

「うううう………」

泣きそうな顔のアリスに、あれ、どっちが悪者だろうと言う顔の装者達。

「ともかく帰ろうか」

「い、いやだっ」

そう叫ぶのは、攫われたはずの子供達だった。

「帰つたつて誰もいないもん」「そうだそうだ」「帰りたくないっ」「ここですつといるんだっ」

それに少し悲しい顔をする立花達だが、

「えっ、いまビーフシチューの準備してるんだけど、食べたくない?」

全員がは?と言う顔をする。アスカは静かに、

「ビーフシチューだ、食べたきゃ一度帰れ」

それにきゅくと可愛い音が鳴る。それはアリスからだつた。

アリスは顔を真っ赤になりながらも、

「そ、そんなこと言つたつて、これを見るのっ」

突然窓ができ、そこには自分達が帰っていないことに気づかなかつた親。そして気づいてから醜く争う親。それを見せられる。

「こんなところに戻るより、ここでお茶会する方が楽しいものっ。だから帰る」

「帰る帰らないはそれじゃ置いて」

「置いてくのっ!?!」

アストルフオはそう叫ぶが、だって面倒だもんじゃない。

こればかりは大人な人に任せる。あの人なら安心できる、まずは子供達を落とす。

「その親や大人のことは知らん、ともかくうまいビーフシチューを作ったから食うか？　いまならお肉多めだぞ」

「嘘だもんつ、そんな、そんな……」

だがアリスは嘘らしい気配が無いのか、すぐに黙り込む。

そして、

「いまならアイスも食えるぞ」

子供達を取り戻した。

「なんて言うか、分かっていたとはいえ、こども簡単に事が運ぶとは」

「だな、配るのは私も手伝うよ」

「うんお願いします、風鳴さん」

「言いにくいならさんはい、皆もそう言うだろう」

名前呼びは向こうの自分達のことを考えて、そう分かったとそう言う風鳴。いま焼きたてのパンやビーフシチューを食べながら、わいわいきやあきゆあと楽しそうに食事する子供達。

ここにいる全員が驚きながら、おいしそうに食べているし、その映像を、

「後で見せるのか？」

「この笑顔を見て、何も思わなきや、終わりだがな。その辺は司令官を信じるさ」

「旦那なら平気だろ？　こつちもかなりイライラしてたからな」

こつちの大人である風鳴弦十郎を信じ、このただの子供の笑顔を見ても、自分の子供に対して何も思わなきや、彼が怒鳴りつけるだろう。

ともかくいまは、野菜だろうがなんだろうが、おいしく食事して、嬉しそうに食べている子供達。アリスも混じって、嬉しそうに食べていた。

キャンプ地のように車で囲んでいるんだが、なるべく物騒な武器を持った人は下げて、いまのところこの通りだ。

「アイス、アイスはまだデスかつ」

「このお肉柔らかいなく」

「お前ら……………」

雪音がもう呆れを通り越して、月読もジッと見ている。

セレナはセレナで、

「こういうことを想定してたんですか?」

「んくなんかさ、アリスはこういうことする子って思って、こういう風にすれば解決するって、なんとなく思ったんだ」

悪意も何も無く、ただ友達と楽しく過ごしたい英霊の為に動けばいい。そう思ったら、すらすらとこういうことを思いついた。

だから、

「たぶん、前の俺だろうな。アリスは物理的な戦いより、我が儘な子供相手の説得でどうにかできるって」

そう言いながら、アイスも出す。プリン付き、子供達は一気に笑顔になり、なぜか嬉しそうに泣く子もいる。

「こんなおいしい食事、久しぶりなんだもん……………」

そんな言葉を聞きながら、車を背にして子供達の声を聴く大人の顔を見る。

「あの子たちのことは」

「任せていいだろうよ。あの光景を見ても目を覚まさないのなら、旦那が覚まさせてやるよ」

そう言ったので、安心する。

ともかく、はぐれの出現を確認する中。そう思った時、

「あの変な人達のお願い聞かないままでよかったの♪」

そうアリスが言ったので、すぐに切り替わる。

「お願いって?」

アストルフオも食事に参加しているとき、アリスは笑顔で、

「うん、この子達をお茶会に誘うように言われたの。それで後で渡せて、アリスはお茶会がしたかっただけだから、渡すこともしなかったのっ♪」

そう言った時、僅かな気配を感じ、それは幽鬼のように、現れる前

だ
っ
た。
。

の騎士の間にできた子供、王女に身体を奪われていた時期が長すぎた。

結果、ランスロットに対しては生理的に嫌悪するレベルを遥かに超えて、もはや視界にも入れたくないほど嫌っている。何してるんだ彼奴。

「えっと、誰に何をお願いされたのアリス」

「んっと、お友達とお茶会をした後、紹介してほしいって言われてたの。けどお茶会はしてたかったから紹介しなかったわ♪」

色々怯え、あつた後で、お菓子などで調子を取り戻したアリスから色々と聞く。

マリアはまだ復活できていない。こちらは切歌と調、暁ちゃんと月読ちゃんに任せるしかない。

先ほど見たが視界の焦点が合わず、セレナがセレナがとぶつぶつ言っていた。

「ええっと、それは」

「黒くて、ドロドロしてたのっ。泥人形だったわっ。けど人の形はしてた、黒い黒い人間だけど人間じゃないお人形、黒くて冷たい、泥なの」

それを聞きながら、ありがとうと言い、頭をなでなでしてから、紅茶とお菓子を与え、セレナの方を見る。

セレナは、

「……………」

こっちの姉を傷つけたことに傷付いて、ぼーとしてた。正直、バーサーカーランスロットを倒したことは清々しいが、それはそれこれはこれだからだ。

「アスカさん……………私」

「まあ仕方ないさ、ランスロットだもん」

「……………ですけど、こっちのマリア姉さんを傷つけました」

そう言い、これもあのごく潰しが現界していた所為だと呟く辺り、根が深い。

とりあえず、

「まあなんだ、オレができることはやるから、そう気を落とすな」

「……………それじゃ、今度の食事時、料理をしたいので、手伝ってください。皆さんに食べてもらいたいので」

「ん、分かったよ」

そう言つて微笑む。それにセレナも嬉しそうに微笑む。

セレナの方はこれでいいが、あつちは大丈夫だろうか？ 仕方ない。

『ともかく、魔神柱らしい存在はなぜ子供達を集めようとしたか、少し分かりました』

そう司令室でカルデアが報告をしていた。そこにちょうど来て、話し合いに参加する。

『向こうはやはりと言うか、こちらで力を手に入れようとしています。』

力の元はやはり』

「オレ達が貯めに貯めた、悲しみか」

『そうなる私も入ってそうですね』

それに困惑する者もいるが、説明する。

簡単に言えば、

『大切な人が戦いに出向く、自分は何もせず見るだけ。大切な人は何を言つても無理をし続け、そして死ぬ』

「繰り返し繰り返し、そんなことを繰り返す。生きて帰ろうが関係なく、そんなことを永劫繰り返す。そしてできたのがあの泥か」

「つまりお前や前世含め、無茶して響達を心配させすぎた所為で生まれた力を使われてるってことか……………」

奏さんの言葉に、何も言えない。実際そうだ。

この身が剣でできてようと、愛してくれた者達はいたのだ。

両親だった。

恋人だった。

友人だった。

それらを裏切り、己と言う魂を振るい、理想に溺れていった者達。

「……………」

記録の中にはおそらくあるだろう。愛する者を守り、死んでいった。

理想、理想理想理想理想

夢の為だけに生き、全てを救いたい、守りたい助けたいと叫び続け、苦しみ続けた人生しか選ばない。

愚か過ぎて笑いしか出ない。道化も通り越したなにかだ。

(きつとオレも下手をすれば同じだろうが)

そんな気は無いが、結末があるとすればそうだろうと内心思う。

誰かのために、全てを捧げ、無様に死ぬ。

願望でも何でもない。

それが、オレなんだから……………

——
???

「アスカ様？」

「……………」

「仮眠中でしたか」

子供の親は、このの世界、彼らに任せて、静かに休む。

清姫は少しだけ微笑みながら、少しだけおかしいと、自分がおかしいことに気づく。

「……………ん……………清姫」

「あつ、申し訳ございません。起こしてしまいましたね」

いまはカルデアのバックアップで、令呪もある身。清姫はカルデアからのバックアップを受けながら顕現し、アスカは少しだけ身体を起こす。

「いやいいよ、なにか変わりは？」

「セレナさんと奏さんが、この世界の人達とお話して、少し向き合うそうです。他の方はサーヴァント探索や待機しています」

「そう」

そう言つて、リングゴを手に取り齧る。こちらにも渡しながら、清姫は素直に受け取る。

それに少し微笑む。

「どしたの？」

「アスカ様、アスカ様はわたくしは怖いですか？」

「うん」

そう言いながら、隣に座らしている。おかしな人だと思いながら、

「……………恐ろしいですか」

「うん」

「怖くて恐ろしいのに、どうして隣に置いているのですか？ すでにバーサーカー清姫として、一線を越えるほど、恐ろしいはずですが？」
「？ 気にしても仕方ないだろ。清姫は清姫だし、そりゃ、好きとか旦那様とか言われて、怖いし恐ろしいけど」

「……………やはり嘘つきです」

そう微笑みながら、林檎を両手で持ちながら齧る。

「恐ろしいと言うのに、怖いと言うのに、なぜ平気なんですか？ 私は怪物、もはや物の怪と化し、蛇を超え竜。貴方の命すら狙う可能性のある、バケモノですよ？」

「ん、それは別に怖くないよ。怖いけど」

そう言いながら、どうしたの？と心配するアスカ。それに清姫は少しだけ酔いしれる。

「貴方の言う怖いと、わたくしが言わせたい怖いが違うのですよアスカ様……………」

「？」

本当に分からない顔をする。それにゆっくりりんごを齧りながら、「もはやこの身はか弱い少女でも、何も知らない無垢な少女でも無い。初恋に妄信するあまり人を殺した罪深き狂った獣です。一つでも貴方が嘘を、偽りを、いいえ、欲しいと言う想いのために、貴方の命を狙うのですよ？ なのに、どうして信じて、そばに置くのですか？」
「……………いまさらなにを言ってるんだ清姫」

そう呆れながら言いながら、姿を見せる。女性服を着て、呆れながら一回ターンする。

どこかの相棒が用意したのがこれらしか無かった。

「こんなバカな姿で、んな真面目なこと考えるか」
そう言いながら、

「オレは君の好きには応えないよ、何度言われても拒むし、その為に努力するのが度が超えれば怖いし、恐ろしいとはつきり言うけどね」
静かに微笑みながら、

「女の子相手に、刃を向けるほど拒絶する気は無いよ」

それに、静かにとろけそうになる。

(ああ………そうです、こう答えると言うのを知っていて、わたくしは)

この人は自分を化け物と、清姫伝説の清姫と、バーサーカーと、愛するが故に、人をたやすく殺しと、嘘偽りは善悪問わず許さないと知りながらも、

(受け入れ、そしてわたくしを見る………)

変えられた、私は変えられた。

ただの化け物から、狂信する化け物から変えられた。

理想の抑止力に触れて、変えられてしまった。

結局この人も自分を選ばないと言うのに………

(ほんと、ずるい人達………)

そう微笑みながら、静かに立ち上がり、それではと言って出ていく。

その手に、彼から渡された果実を持ちながら………

「わたくしを招き入れたのは失敗ですよ、泥の方」

そう静かに、

「だってこの物語は、終わりは目に見えてる物語ではないですか」

そう静かに呟き、静かにかりつと、ゆっくり、愛する方がくれた林檎を味わう。

——カルデア

「おかしい」

ダ・ヴィンチちゃんは少しばかり首をかしげる。

「おかしい、なにがでしょうか?」

マシユもそう聞く中で、シャーロックもまた、静かに瞑想する。

「今回の事件、関係性が無さすぎる。と言うところ」

最初の事件、これはまずアスカと言う、当本人へ放たれた刺客である。藤丸立香は防衛手段のように眠っている。害は無いのは、

「グラランド・セイバーたる、彼がなにかした……………」

そう考え込んでいる中で、扉が開く。

「考え込んでいるな」

そう言い、現れたのは英雄王。

今回ばかりイライラしながら、静かにどかつと椅子に座り、全員が驚く。

「やはりあれは不敬に値する存在だ。理想なんて言う、他人の力を初めから当てにし、己の力を磨かず、他人に縋る雑種どもの妄言の塊。誠に遺憾だ、反吐が出るッ」

そう言いながら、蔵からワインを取り出しながら、忌々しく飲む。

「なにか分かるんですか?」

「無論だ、この我を誰だ^{われ}と心得るつ。英雄王ギルガメツシュ!! カルデアのマスターである奴は、防衛手段として一時的に魂を閉じているだけだ」

「魂……………」

静かに周りの視線を感じながら、このような役回りをさせている存在にイライラしながらも、渋々語りだす。

「奴ら理想は一つの魂で繋がっている。平行、異世界、別次元、別時間、全てが全て、無限なる夢幻の保存庫、雑種どもが勝手に語り、勝手に作り、勝手に押し付ける英雄像で作り出された幻想の空間にな」

「理想の抑止……………」

「ああそうだ。理想だ、身勝手な人の業が創り出したものだ」

シャーロックは静かに考える。なぜ彼はここまでそれを嫌うのか。

そして……………」

「そうか、彼の力はそう言う物か」

「気付いたか」

「どういうことだい?」

それについて簡単なことだと告げながら、静かに目を閉じる。

「彼らの使う力は、人が伝承、伝説、神話。ホラ話ですら含め、他人が歩んだ人生を語るんだ。その中に、物語の人物が抱く感情を考え、語る者は何人いる？」

「それは……」

「おそらく少ないだろうし、一番多いのは」

「身勝手な伝説か」

この世には狂信者と言う者がいる。

神の名を告げ、多くの虐殺をした者もいれば、思い込みでその者を悪と決めつけた者もいる。

中には助けてもらいながら、自分が助かりたいから、口を紡ぐ者もいる。それに、

「まさに下等な雑種どもだツ。身の丈を考えず語り、いざ責務を負わされかければ他人に擦り付けるツ。目に余るツ、万死、いや、もはや死も生ぬるい!! 奴はそう言う者達が創り出した幻霊とも言えるツ」
だから英雄王は理想の抑止を嫌う。なぜならば、それすら是とする、愚かなモノ。

この王がイライラする、気分を害するに値する存在だ。

「唯一あれの利点は、抗う者を創り出すことだ。この我われですら倒す逸材、腹立たしいことだが、あれは強い。飽きは無い、このマスターもしかり」

そして新たに酒を金の杯に注ぎ、静かに飲む。

「魂は分裂することは無い。保存庫にある、死者であるサーヴァントならともかく、ここにいる奴と、異世界にいる奴は生者だ。あれらは最初の干渉で繋がってしまったが故に、どちらかが閉じなければいけない状態なのだろうな」

「それって」

「保存庫が攻撃されていると言うことだ、それは異世界の錬金術師がパスを繋げた所為だがな」

錬金術師キャロルが、アスカと言う保存庫と繋がったパスを使い、干渉した結果、同じく繋がっている藤丸立香。さらにそこから気づい

理想の抑止を殺す。

あの卑怯者を、偽物を。

許されてはいけないあれを、断罪する。

そのために、いま動き出す。

49話・暴走による終焉

分かるはずがない、それは理解することをしなかった残滓である。だから、故に、これは必然であり、当たり前であった。

それは唐突だった。

影のようなそれらが突如現れ、都市部は大混乱の中、装者達が動き回る。

「これ速いですねっ」

立花はそう言いながら、ヒポグリフを飛翔させる。どうも、無差別と言う訳ではないが、地脈を利用した場所に、シャドーサーヴァントや、魔神柱らしい物を創り出した。

まさかここで最終決戦？ とことん壊れているなど思いながら、アスカとアストルフオは操る。

「これってどゆことなの？ 計画性とか、そゆの」

「いや、そもそも計画性があるような存在なのかも疑問だからな」

デオンの言葉に、シャーロックが連絡を入れて、それを肯定する。

『呼び出した英霊も素直に制御もできていない、これはただの残滓だ。知能も計画性も何もない、ただの悪あがきだよ』

「だがどうしていまここまで力を引きずり出せた？ いくらなんでもおかしいだろ？」

『それについては少しばかり推測できる。だが憶測で話す気は無い』

『いま一番反応が大きいところを確認しましたっ、アスカさんはそこに出向いてください。他の方は、別の場所の魔神柱を撃破をお願いします』

「となるとそろそろ分かれるか」

「デスっ」

「任せてっ」

そう言っつて、バイクで出た風鳴や奏と違うルートで、雪音、暁、月読も外れ、アストルフオから、立花達も外れる様子を見る。

「令呪を通してサーヴァントに命ずるッ、被害を抑え、魔神柱を討

てッ」

それに全サーヴァントは領いた。

「こちら藤堯、アリスちゃん聞こえますか？」

『聞こえるわ聞こえるわ』

「それじゃ、指示したように固有結界を作って、一般人の誘導、保護を頼むよ」

『任せてだわっ♪』

「こちら友里、デオンくんとアストルフオくん。もうすぐシャドーサーヴァントと接触します。クリスちゃん、切歌ちゃん、調ちゃんが来るまで足止めを」

『分かりました』

「キャロル、地脈の力は僕達で。バックアップは任せてくださいっ」

『分かっている、とはいえ平行世界だ。違いがある場合は的確に指示しろっ。奴らのエネルギー源を絶つぞエルフナイン!!』

「はひっ!!」

一番巨大なエネルギーが集まる場所、泥が流れる柱、それは魔神柱なのか分からないほど、自分からすれば形状が変わりすぎていた。

だがそこから人のような何か生まれ、町へと放たれたりする。

「これが？」

『どの魔神柱にも属さない、魔神柱………これは』

『やはり、か………この魔神柱は逆だ』

『逆って?』

別の場所にいる立花が首をかしげると、シャーロックは静かに、

『利用された。我々は魔神柱が利用していると推測をしていたが、真実はその逆、利用されていたんだ』

その時、悲鳴のような泣き声が響き渡る。愛する者、大切な人、仲間、家族。

失った叫び声を響かせ、アスカを、見た。

【何故お前は救わない?】

そう呟き、そして叫ぶ。

【お前は全てを救う存在だ】

【なのになんで助けてくれなかったツ!?】

【自分のことだけを救いやがってツ】

【自分だけ助かってツ】

【許さない許さない許さない許さないツ!!】

そう、全てを救うアスカにそう叫び、それに全員が啞然に、

「んなこと言われても、万能じゃねえしな」

ならなかった。

別に彼は全てを救う気や正義の味方になぞ興味は一切ない。

ただ、そうだと言うだけなのだ。文句を言われてもだから? としか疑問に思わない。

【貴様……………】

「お前は勘違いしている、オレは怪物でもあるんだ。正義? まさかだと思うが、オレがこの世界を救いに来たと思っっているのか?」

そう言いながら、白と黒の剣を持ち、静かに睨む。

「オレはただ、俺達が背負う悲しみを利用されたことに腹立てて来てるだけだツ。大事な、オレと言う存在が、オレらと言う存在が背負うべき罪を利用した。それがテメエらと戦う理由だツ」

【身勝手なツ】

「自分達が救われなかったからって、平行の、しかも無関係な世界を巻き込む貴様らよりかはマシだツ」

【うるさいツ】

【私達は何もしてなかったツ、殺される理由なんてないツ】

【なのに救わなかった、助けなかった、守られなかったツ】

【許さないツ、お前を、奇跡を許さないツ】

「……………お前は魔神柱達が救いたかった人類ですら無い。ここで必

ず、斬るッ」

『結局、魔神柱は利用された』

シャーロックは静かに語る。

『確かに元として選ばれたのは、彼と言う抑止が貯めた悲しみだろう。だが、それだけではない。彼らが救えなかったものも混じっていた』
船の事件、ここで違和感を感じた。それは元の存在は、彼を大切に思う存在なのだ。他人を犠牲を望むような存在ではない。

なのに、犠牲にして養分にしようとした。それは魔神柱がさせていたと思われると言えばそこまでだが、そこまで知識があるか？

『それはアリスと言う、親の愛情に飢えていた子供達の件で消えた。知識はある、だが詰めが甘い。清姫と言う彼女や、アストルフオ。またはデオンなど、関係性も無ければ、なにも無い。知性なんて無い、だが行動には目的はあるように動く。そう、子供は何者かに攫われていればよかつたんだ。大人達が『自分の所為では無い』と思うと言う、自分がどうして責められなければいけないと言う思考に陥ればよかつた』

だがそれはアスカの行動で薄くなる。

船は観客はそう思えばよかつたが防がれた。

そしていまは無差別行動もまた、もう目的は達している。

ただ、なぜ悪くない自分達が酷い目に遭わなければいけないと言う思考にたどり着けばいい。

「それだけのために、このようなことをするのか」

「!? 司令ツ、何が」

『! 司令室へサーヴァント反応ツ、この反応は』

その時、陸地の司令室へ雄たけびが響き渡り、それが現れた。

圧倒的理不尽、メガロスが現れる。

『彼らは理不尽な出来事への悪意を求めている。やはり襲い掛かったか』

「そのようだ」

司令室は無事だが、目の前に現れたそれに、

「ここまでは計画通りか」

Yシャツを脱ぎ、静かに構える男。風鳴弦十郎。

「し、司令っ!？」

「お、おいまさかッ」

キャロルが驚くが、構えながら、静かに睨む。

「おうともッ、こいつの相手は俺だッ!!!」

そう言い放ち、暴風のような大剣が振り下ろされたが、一撃の拳で吹き飛ばす。

「お前達が理不尽な暴力で、未来ある若者を傷つけようとするのならいいだろう」

そう言つて、静かに、

「その前に、この俺を倒してみろッ。理性を失ったギリシヤの大英雄ッ」

雄たけびと共に、それを消し去るような雄たけびが、風鳴弦十郎から放たれた。

【なんで思い通りにいかないッ】

【酷いッ、なんでこんなッ】

【死んだはずの妹や友、友人に成れなかった娘に会えば、もっと集まると思つたのに】

【俺達は何も悪く】

最初の事件はもう一つの元力である、彼を心配する嘆きの声。それがあの悪夢の正体であるが、その後の事件はこの意思が起こした。

ギャラルホルンでのサーヴァントは、単純に奏達と会わせるだけだった。

船は同じ境遇の人間を作り、力を得る気つもり。

アリスは子供たちを取り込み、親の身勝手な思いを取り込むつもり。

だがそう言つた事件は全て空振り、もしくは少量だ。

だから、

「異世界の人間を巻き込みツ、祝福の歌を聞きに来た者達を欺きツ、そのために多くの人を殺した貴様らはもう加害者だツ!!」

【成りたくてなったんじゃないツ】

【お前が救わなかったからだツ】

【お前が俺達を救わないから、この世界はいまこうなったツ!!】

その言葉をインカム越しに聞く者達は思う。ふざけるなど。

その泥の一撃は、あらゆるものを終わらす剣撃。その攻撃を防ぐために、ビルを倒して、潰そうとするが、

「させません」

そう言って、赤いリボンが締め壊し、清姫が静かに舞い降りた。

【何故お前は平然なんだ!?!】

【目の前にいるのにッ、なんで……………】

【それはいずれアスカ様の心も魂も手に入れるためです】

迷いなく言う。

「どうやら貴方達は、やりすぎたのです。この清姫、清姫伝説の清姫として見逃し、呼んだ気でいたようですが、アスカ様のことを知っているわたくしを呼んだのが、誤算の始まりです」

「わたくしはもう迷いません」

「化け物であろうと、妄信する女であろうと」

「怖いと言われようと、怯えられようと」

「それでも、この清姫と言う全てを受け入れる彼の人。そしてわたくしの愛を、たった一人の女性として見て、答える彼のお方。この思いやり……………わたくしは狂わされたのです、もうだめです」

「恐れられていても、怖がられていても」

「それでも正直に言い、嘘も偽りもなく、受け止める」

「もうだめです、わたくしはもうだめです……………」

「この輝きに、化け物だろうと……………」

一つの攻撃が清姫に迫る。だがアスカが剣で防ぎ、片腕を腰に回し、場所を移動する。

「平気か清姫」

「はい、ありがとうございます………」

そう言いながら、清姫の頬は赤く、喜びに満ちる。

「このお方は、私を見捨てることだけはしない………化け物として、切り捨てればいいものを、利用するだけにとどめればいいものを、優しくすればどうなるか分かっているながらも、お優しくして頂けるこの人を愛しているのですッ!!」

「清姫、オレは」

「分かっていますッ、この清姫!! 何度でも叫びます、魂の器? 超えて見せますッ、そして貴方様と永遠の愛を誓い奉りますッ!!」

その時、セレナ、キャロルが不愉快な顔をした。なにげに胸元に顔を押し付ける清姫に、イラツとしている。アストルフオは大きな声で不満を叫ぶ。

「必ずアスカ様、いいえ、来世も何もかも超えてみせますッ」

「怖いよ」

「大丈夫ですッ、貴方様は静かに空を見ていればよいのですよ………」
「怖いよッ」
いま全力でこの世界の姉を無視して、一人の少女は敵を蹴散らして、向かってくる。

それを感じ取り、清姫は炎を纏い、竜へと変わった。

「貴方様方の言葉はもう紙のように薄いもの………無関係な人々を利用した時点で、もう刃を向ける躊躇いはありません」

「それに関してはそうだ」

彼らはなんなのかわかった。それは理不尽に殺された人々だ。自分と言う、理想がいる時だったのに、助けられることが無かった人達。

その不満をぶつけるために、こんな事件を引き起こす。それは人を憐れみ、救おうとした魔神柱ですら利用されている。

自分と言う愚か者を大切に思う者達の思いすら利用して…………

「悪いが、だからなんだ」

だが彼は、彼らは正義の味方でも、万能なる存在でもない。
ただそう言うモノとして役目を押し付けられた存在だ。

龍崎アスカは、そこまで善人でも、正義の味方でもない。

「オレは、龍崎アスカってのは偽善者でね……………」

彼の中にあるのは、怒り。

そのような言い分で、無関係な世界や、魔神柱、そして過去の自分
に向けられた思いを利用されて、彼らに抱くのは、怒りしかない。

【くっ】

その時、一番強いサーヴァントのように、ある少女が現れた。それ
がより、彼の逆鱗に振れると考えずに…………

【あ・す・かあああ】

「……………」

泥にまみれ、赤い眼光の、痛々しく、それでも人々を助けたいと歌
う歌姫だった。

それに、静かに、

「お前達は救われたかっただけだろう、助けられたかっただ、生きたかっ
ただけだろう……………」

その時、剣が爆発するように輝く。

「だが」

始まりの白、終わりの黒。神秘殺しが輝き、清姫は後ろに下がる。

「そいつの思いを弄ぶのなら、お前らは」

オレの、敵だッ!!!

奏でられるは偽善に満ちた己の道。

歌われるは自分のことしか考えない、剣士の歌。

綺麗ではない奇跡が調べる歌は、翼を持ち飛翔し、乱舞する。

「真名解放」

【や、やめ】

【私達はただッ】

【すく】

月と太陽、狭間の世界が生み出され、竜と化す剣士は剣を振るう。自分が救われたいが故に、自分以外を犠牲にしようとした者達を断罪する。

「悪いが、テメエらを俺は許せない」

悲鳴すら消す輝きの中、大切な者達を利用したそれらを消す。

例え悪と言われようと、

「俺達の背負う罪を利用した罪、俺達はけして許せない」

竜の瞳と共に、剣を鞘に入れて、全てを終わらせた。

「アスカ様」

「清姫、だいじょうぶ?」

「はい♪ この清姫、傷一つありません♪♪」

そして静かに近づき、優しく微笑む。

「ありがとう、清姫」

ああホント、ずるい人…………

「いいえ、大丈夫ですアスカ様…………」

恐れ、怖がっているというのに、そのように微笑まれては…………
(いずれ貴方様の御許へ参り、永劫御傍に…………覚悟してもらいます、わたくしに、本当に誰かを好きになる、それを教えた代価を)
そう言いながら、静かにまた抱き着く。この程度ならと、少し頭をなでる。

こうして、魔神柱の残骸は消え去った。

「……………いい汗をかいた」

「倒したのか……………」

『あの人は英霊ですか!?!』

「違います」

そんなことが裏であった。

50話・平行の終わり、帰る世界

カルデアと言う機関で、静かにため息をつき、全員が一息をつき、休憩していた。

「結局今回は」

藤丸立香、彼は静かに起き上がり、今回の事件を知り、シャーロットは何事も無くまとめる。

「何かの魔神柱は、まず理想の抑止力が置いていった、彼を大切に想う思いを利用した。自己犠牲によって自分の前から消えた、それに悲しむ者達の思いを取り込んだ」

だがそれだけで止まらないほどの業を、抑止力は背負っていた。それは理不尽な救いの声。

自分をなぜ救わなかったと言う、無理難題な声だ。

「理想の抑止力は万能では無い、だからこそ取りこぼすことだってある。いや、それは如何なる存在もそうだ。理想とはいえ、君は人だ。取りこぼす命もある。だがそれでもできた理不尽な負が、全ての元凶になった。規則性も計画性も無い、ただ、理想の抑止への不満を叫ぶ事件。そう言う事件だ」

「……………そうですか」

話を全て聞き、理想の抑止であろう自分として黙り込むが、それに一人の守護者は鼻で笑い、紅茶を淹れている。

「愚かなことを考えるなマスター」

「無銘」

「君は所詮は人だ、理想の抑止？ 悪いが私も抑止力として働いたよ。100を救うため、10を犠牲にし続けた。今回はその10が不満を叫んだだけだ」

「……………なにか思うかい？」

「なにも。そのようなことはとうに消え去っている、いまさらだ。万能者など存在しない、理想の抑止と聞こえはいいが、結局君はなんだ？」

たまたま一人しかいないがため、世界、人類史を背負わされた人間。

一般人。

いまでは魔術師達が一目を置くマスターだが、彼は一般枠の青年だった。

「君は運が悪い、理想なんてものを押し付けられた被害者であり、加害者だ」

「……………」

押し付けられた使命を受け入れ、仲間と共に人類史の修復に挑んだ。

その結果、失ったものもあれば、守れたものもある。

そして……………

「全てを救える可能性を持たされたが故に、全てを救いたいと叫び続けるしか無い者。私からすれば、君ら理想の抑止力が狂っている」

化け物として英雄に殺される宿命を押し付けられた。

英雄として、多くの罪と嘆きを背負うと押し付けられた。

全てを忘れ、リセットされながら繰り返し返す。安息の無い魂の輪。

そしていま、自分は、もつとなにかできたんじゃないかと、後悔しているかと言われれば、黙り込む。

なぜならば、自分は彼らも守り、救い、助けたかった。犠牲という言葉で片付けられない、大切な出来事が、心にある。けして否定できない。

「骸の丘で磔か、まさに似合いものだ。君たちは骸の丘で、無限に思える夢幻の墓標で、血を流しながら立ち続けられているんだ」

「……………」

「……………それでも構わないと言う顔をしているぞ」

無銘の言葉に、静かに目を閉じ、胸を押さえる。

微かに責められ続けているのだろう。自分勝手、自己犠牲、それでも救えるものが少なく、それでもここにいなきやいけないと言う、絶対の何かを感じた。

だが、

「……………たぶん、俺は藤丸立香として生きるか？と言われてたら、頷いている」

そう、眼を開き答えると、二人の男は静かに見る。

マシユの先輩、多くのレイシフト先での戦い。またやることになる
うと、選ぶ。

また失う悲しき、虚しき、そして苦しみを背負おうと、

「俺は、俺。藤丸立香だから」

やはり理想の抑止なのだろうと本人は思う。

そんな幻想を抱き、同じ苦しみを味わいながら生きる。

また0からであろうと、藤丸立香の生き方を、他人に渡す気は無い。

「愚かだな」

「ああ、そうだね」

無銘はそう呟き、仕込みがあると言い、調理室へと出向く。

シャーロックは何も言わず、眼を閉じた。

「それでは、この世界はまだギャラルホルンが？」

「ああ、まだ機能している。君らの世界のは止まったようだが、この世界は平行世界での問題はまだ起きるかもしれない」

そう弦十郎司令が言いながら、帰る支度をしていた。

この話を聞くが、これ以上はできることは少ない。自分らの世界は
終わり、帰って自分らの世界で防衛に戻らなければいけない。

「気にするな、この世界の装者もまた、君の知る装者達だ。なにがある
うと」

「へいき、へっちゃらですね」

そう苦笑する。

そうだなと思いつつ、静かに荷物をまとめる。いつの間にか清姫
達がいなくなっていた。

女性服も無くなっていた。

お菓子はいいが、それは誰が持って行ったかによって恐怖を感じ
る。

「それでは」

「ああ」

結局エルフナインの為か、少し作業を手伝った妹の様子、セレナと

奏がこの世界で起きたことを知り、必ず思うと言い、言葉を二人に送り、静かに去る。

「それでは」

こうして平行戦慄世界【パラレル・フェイト】は終わりを告げた。

……………だけどね。

「ですけど平行世界の繋がりはこちらの方が安定していて、しかもデータを取ると言う点では安心できるんですようなので」

「しばらく夏休みの宿題をしようっ、こっちの私っ」

「ダブル私とダブル調なら、二倍で宿題が終わるデスッ」

「デスッ!!」

「アスカが物凄く頭いいんだよッ私ッ。やったねッ、これなら夏休みの宿題が早く終わる!!!」

舞い上がる向こうの装者達に呆れる中で、クリスは頭を痛める。

「おいアスカ、どっか、増えたバカと関わらずに済む場所は無いか?」

「俺に近づくなッ、解体するからなッ」

すでにダブル響がキャロルを囲もうとしていて、クリスは頭が爆発しそうなくらいに、キャロルの次は自分かと思うようで、嫌な顔をする。

「まず全員で来るな、何名か帰れ」

「デデスっ!?!」

夏休みはどうやら、ゆっくりできないことがはっきり分かり、データ取りの為に時折平行世界から、彼女らが遊びに来るらしい。

ママに驚いていたり、色々なことに驚く少女達を背に、ふうとコーヒーを飲む。

「もう疲れたよフォウ……………いなかった」

「私はいるよッ!!」

いい笑顔のなんちゃって冠位魔術師をぶん殴って、妹のエルフナインを抱きしめる。

夏はまだ終わらない。

一人、我が家で休むかと思つたが、なんとなく町を見渡せる場所へと足を運ぶ。平行世界組は一度帰る中、やはりと言うかなんと……

「……………俺は異物だったな……………」

彼らの世界に自分は存在しない。はつきり見ながら、それで助かった人もいれば、助けられなかった人もいる。

理想像を押し付けられた、幻の希望。

この奇跡は、人が身勝手に、都合よく考え作られた幻想の一部。無限なる夢幻である自分は、いましか自分の選択肢を選ばないと言うか……………

(嘘だな)

そう思い、眼を閉じる。

知性無い生き物は、ただそこに生きていただけだ。

人として生きる時、必ず選ぶ、理想的な生き方。そう……………

自己犠牲、何かを犠牲にしてまで、救おうとする身勝手な存在。

自分は主人公ではない。

主人公の為に犠牲になる必要なモノであり、そして、物語の為にいるパーツだ。

だけども……………

「別に……………構わないさ」

この世界の龍崎アスカは決まっている。

平気と笑い、誰かを救う力を拳にする世界に苦しむ歌姫。

防人として、その身を剣へと研ぎ澄ましながら、歌う歌姫。

悲しい現実立ち向かう、本当は心優しい歌姫。

死んでいるはずが、歯車が変わり生き、片翼を支える歌姫。

誰よりも優しく、母親のように厳しく、優しく微笑む歌姫。

姉妹のように手を取り合い、世界を見る歌姫達。

歯車が狂い、姉を支え、変わり果てた生を生きる歌姫。

「……………やるべきことは変わらない」

彼らを支える者達。

そして自分は、自己犠牲、自己満足、自己で決め、自己で覚悟し、自

己で終わる愚かな物語を担う担い手。

その時、少しだけ気づく。

「背、伸びたかな？」

そう言えば少し世界が広く感じる。

「……………目睫はまあ、ひ孫に見守られながら終わりたいな」

そう笑いながら、決めた。

歌姫を守る龍の崎にいる明日の可能性は、偽善者である。

「今日はパーティーか、うまいもん作りますか」

そう笑い、歩き出す。

分岐する絶望は破壊し、希望を作る。

それ以外の生き方を選ばない、偽善なる理想の自分として……………

一人の青年は、骸の丘で血を流し続けていた。

「どうしてそこに立っているのですか？」

一人の少女はそう呟く。

身体中を貫く刃、けして手放すことも無い武器を持ちながら、丘に
礫にされたように、そこに立ち続けている。

見守るものなんてない。意味もあるか分からない長い時間、ずつ
と、ここにいます。

「俺は、ここにいたいんだ」

他人が傷付く光景を否定し、誰よりも先を歩む。

結果がこれだ。痛みなぞ分からないほど、傷を負った。

「悲しいですね……………」

そう呟く。彼から嘘偽りは無い。

誰にも理解されない生き方か、あるいは作られる生き方。

勝手にそう思っていると思われ、語られる。

だが、

「それでも……………譲れないからね」

少女は手を伸ばす。だが届かない、彼は届かない丘にいる、場所に
いる。

彼は一人で、戦い続けている。

「諦めません」

少女は呟く。

「必ず隣へ……………貴方の側に、貴方と共に、貴方と時間を共にする……………」

教えてもらった、見せられた。

本当に誰かを好きになるこの想い。この想いだけは叶えて見せる。

必ず、必ず彼の傍に……………

「私は諦めませんよ……………」

彼の者は理想を押し付けられた守り手。

彼の者を支えるは、理想を信じる者達。

無限の夢幻と共に、戦場を駆け抜ける。

そして……………

「んでだ。夢ん中でのあたし達や、先輩の様子とか、テメエに色々聞きたいことがあるんだが」

装者達に捕まり、血を吐きそうなほどストレスで胃が痛い。

真っ赤になり、手で顔を覆い隠す翼。光が宿らない切歌、調、セレナ。

マリアも、

「ねえ、貴方にとって、私、そんなに飢えてるように見えるのかしら？」

そんなことを聞かれながら、未来は何も言わず見ている、響もどうすることもせず見ている。

奏は仕方ないなと頭をかく。

「みんな、ともかく落ち着いてくれ。アスカを拘束すんなよ」

「二奏」さん」

二人は希望を見る目で見る。その話題をそらしてくれる、そう信じて……………

「アスカは翼の下着をここ最近買ったたり、シャワー室でドア一枚でアスカは平気で脱衣所に入って脱ぎたて洗濯したり、何度も裸を見たこ

とがあつたり、部屋掃除したりする情報。まずは私が教えるから
……………」

「「奏」さんツ!？」

龍崎アスカは今日も叫ぶ。今度の女性服を着て過ごすというお仕
置きの元……………」

防人は真っ赤になってしばらく部屋から出なかつたが、三日くらい
して泣く泣く出てアスカに掃除を頼む。

「結局かああああああ」

生き方はすぐには変えられない……………」

番外編

番外編・もしもの英霊達

人理継続保障機関フィニス・カルデア。そこであるサーヴァントが召喚される。

「自分の名前は『イグニス』と言う、存在無き英霊です。クラスは『キャスター』を与えられています」

そう言つて、赤髪の少年が現れ、カルデアを震撼させた。

彼の能力と、本人の懇願により、それは行われ、絆召喚にて、彼女は現れた。

「シータっ!!」

「ラーマ様……………」

一人は悲願を超えた奇跡故に、一人はけして会えないはずの愛した人が目の前にいることに、涙し、静かに抱き合う。

お互いの名前を呼び合いながら、彼らからあるスキルが消え、いや、消し炭に燃えている。

「どうし、どうして……………スキルが、呪いが焼かれている?」

「ああ、これも、余達の息子っ、火の神アグニの加護を持つ長男である、イグニスのおかげなんだっ」

「!?!」

そう言われ、現れたのは小さな少年。少しばかり驚いているが、それでも、

「平行世界、貴方達の双子の子供。自分にとっては弟達より先に生まれた者です」

「そう、なんですね……………ああ……………」

その頬を愛おしく撫で、優しく抱きしめる。

少しばかり歳が近い為、姉弟に見えるが、それでも愛おしい、平行世界の子供を抱きしめる。

彼から聞いた『もしもの世界』では、自分を宿したシータを、手を

出そうとする魔王から、まだ生まれる前から炎の化身として、母を守り続けた逸話を持つ。

火の子として守り、御子となつたらしい。

そして神々に課せられた苦行を超えて、二人の呪いを燃やす力を火の神より授かり、こうして自分がいれば、呪いを消す。もとい、焼くことができるらしい。

「言わば呪い焼きの宝具か……………」

ダ・ヴィンチちゃんは驚きながらメモリ、少年は少しぼりぼりと頬をかく。

「はい、霊核の調整や、本来、英霊の座に登録されていない身ですので、このように、試練を受ける前の少年の姿です。父上達のように、武芸の長けているわけではないので、クラスはキャスター程度……………馬術なども無いもので、ライダーにもなれません」

「そうなのかつ、なら余やシータと今度馬に乗ろうぞつ。時間はあるのだ!!」

「父上、その前に母上と時間を作ってください。本来の呼びかけでは、自分は召喚されない身なんですから」

そう懇願する息子。できれば愛する父と母、長く共にいて欲しいと願うのだが、それに母親は、

「それならば貴方もです……………共に居られる可能性が無いと言うのなら、どうか母と共に、ラーマ様と過ごしましょう」

「母上……………」

「ああ、ああッ。そうだともそうだとも!!」

そう言つて大切な者達を抱きしめるラーマ。シータも愛おしく、ただその時間に微笑む。

何名かの人員は鼻水をすすりながら、その様子を見ながら仕事をしている。藤丸立香も嬉しそうに微笑み。マシユも静かに微笑む。

「イフの英霊か……………アスカくんのおかげ、かな?」

「かもしれません、ならイグニスくんは先輩と言えますね」

「!」

その後、あの二人はマスターのことも息子扱いし出そうとして、少

し困ることになる。

そして、

「これからよろしくお願いします」

そう言って一人一人に丁寧に挨拶するイグニス。

「■■■■」

ある、バーサーカーは少年に紳士的に挨拶し、その後ろ姿を見つめ、

「よ、よろしくね……………」

とある二刀流の剣士は、抑えきれない何かを胸に秘めて迎えた。

ちなみに、

「ねえねえ、スカートはいてみる?」

「なんでですか?!」

アストルフオにそう誘われ、理性ある少年であったが、数名、周りの目が怪しく光る。

ささやかれるように、カルデアに美少年が来たと広まった……………

「……………なんでしょう、この胸に引つかかるものは」

マシユはそう呟いた……………

「!? な、なんか寒気が……………」

平行世界でかなり近い距離、魂が近いアスカだけが、その悪寒に気づいた。

そしてとある時代に、幼なじみが王になる聖剣を抜くと言う事件があった。

彼女は数多の道を進む。それがどれほどの苦行か分からない。

運命は彼に告げるように、お前には関係ないと言わんばかりに、遠く遠く、彼女を運命、歴史の中へと連れ去る。

だが彼はそれを一つの剣で斬り開いた。

ただ一つの剣は誓いだけの剣。

纏う鎧はただの鉄くず。

されどこの思いは神秘を跳ね除ける、誓いの歩み。

歴史に攫われた一人の少女に近づくと進む。

血潮は流れ、されど心は砕けぬ。

流れ来る戦場の中、一つの誓いと共に剣を振るう。

彼女の顔に微笑みあれば、我が人生、悔いは無い。

この身体は、運命に抗う為にある。

「……………ただの『セイバー』だ、それだけ。ただそれだけだ」

「……………何か不快か弓兵？」

「別に……………君こそ不満でもあるのか、剣士？」

何故か無銘の弓兵の顔が気に入らず、睨むように男を見る。

何故か、とある青年に似ている無銘の傭兵じみた騎士を睨む、料理番。

「飯は俺が作る、他人が作ったもんなんか、食えるかよ」

「ここは君が好きな戦場じゃない、おとなしくしてもらおうか剣士」

「……………」

「……………」

お互いがなぜか気に入らないままであるが、その様子を、白い百合の王見習いが、

「ケンカは駄目ですよっ」

力強く言い、彼に優しく微笑む。その様子に顔を背け、おとなしくなる。詳しくは言わないが、彼女は彼を知っているようだが、彼は、「知り合いの一面だ。正直、俺は分岐しないが、彼奴が分岐しまくるから、おかしくなってる。俺は多くの俺の集まりになってる。故にただの剣士でいい」

そう言っている。だがセイバーリイは気にせず、腕を組んだり、時たまに共に剣の腕を磨いたりしている。

「今日も剣の稽古だが……………」

「剣士っ、たまには私と勝負だっ」

そう言って、ヒロインXが現れる。それに関してはなんとも言えない顔をする剣士。だが気にせず斬りかかるが……………」

「おかしいな」

周りからすれば、殺す気は無いように見える。

いつもセイバー絶対殺すマンのヒロインXからの殺意が無く、無駄に長く彼を独占しようとしている。そのようなおままごごのような剣劇である。

だから、

「ふんッ」

黒い斬撃が二人を裂き、剣士は背後に迫った黒い剣撃を受けていた。

「おまつ…………お前も召喚されていたのか」

「ふん…………行くぞ、不屈き者。いつも王に齒向かいよつて「るっせ」

こつちはかなりシリアス、光速の剣撃合戦だが…………

「オルタさん、楽しそうです…………」

だがその時、馬が二つ同時に駆けて来る。

それに剣士は、

「待て…………」

黒い甲冑を纏う者と、白い甲冑…………

「露出度が高いっ、てかどっちも!? どっちもいるのこごッ」

その瞬間、獲物を見つけたロンの槍使いは向かってくる。

「ふざけるなッ、まともなのが正史の彼奴だけかッ!? 腹立つなくそッ」

「逃げるなッ」

のちにえつちゃんと言う子にお菓子をたかられ、上げていたため一大戦争が起きたのだが、

「!!?」

金縛りにでもあったように、妙に疲れた顔で起きるアスカ。なぜかあちこち疲れた。

「…………牛乳飲も」

「マスター…………少しお話しが」

「あれ? アーサー?」

アーサーが少し疲れた顔で、少々言いにくそうにマイルームへとやってきた。

「実は、イフによる、絆召喚は、もうやめていただきたいと思っています」
「？ ダ・ヴィンチちゃんも、下手に平行世界、しかも記録されていない英雄を呼ぶのはこれ以上やめておこうって話だからいいけど」

それを聞き、少しほつとする。それは、

「いえ少し。やはりイフ、保管庫から記録として呼ばれますので、魂と言うものが少し気がかりでしたので。こちらのマーリンに聞きましたが、いまは平気と」

「それは……………」

それを聞き、これ以上は本当にやめておこう。アスカと言う、もう一人の自分に迷惑をかけてしまう可能性がある。

そう思いながら頷いていると、

「ん、誰か尋ねて来たようです」

それは、

「……………マスター」

可愛らしいパジャマを着せられた、火の神の御子であった。

「母上がこの世界の、いんたーねつとなるものなどを使い、断れず着ています……………」

「……………そうか」

「……………大変だな」

「御子として、幼い頃から働き、正直に言えば、若いうちに死にましたから、抵抗は少しなんですけど」

それにびくつと驚く。そしてマスターにだけは本当のことを伝える。

それは彼は年齢が若返ったと言う嘘。彼は、この年齢で死んだ。

「どうして、君の時代はそんなに危険だったのかい？」

「いえ、そうではなく」

そして少し言いにくそうに、

「自分の存在は、守ると同時に不信感も民に抱かせました。母上の貞操を疑う者がいたのです」

本来は生まれる前、母の身に宿った自分。その輝きが守り続けている。正史では母親であるシータが、純潔を証明する為、火の中に入り、火の神から無傷で返された。

「正史の代わり、我が身をもって神々、自分は世界に証明しました」
火の神より与えられたこの身、これにて自分はシータとラーマの子であると証明した。

「私自身、母上の子として、胸を張りたかった。ということもありません。ですがしばらくし、また国に疑いが上がり、それを収める為、我が身を大地の女神へ捧げました」

彼は知らない。彼の者は短命を宿命とされていることを。

それはもしかすれば、短命と言う宿命故に起きた事のように思えてならない。

玉座に座る大地の女神と共に、人の世から姿を消した。この行いにより、母と父の子を証明し、両親と弟達の幸せを抱きながら終わりを告げた。そんな子なのだ。

「それで君は」

「……………待ってくれ、いくらなんでもそれだけかい？ あそこの者にしては、呪いを焼く以外にも、力がありそうだが」

そうアーサーが言い、それには少しもじもじしながら、

「……………カルナさんとアルジュナさんの色々と……………」

曰く、自分と同じ、火の神から力を得ているのだなとアルジュナは言う。その通りであり、カルナからは、

「実は、この身はカルナさんと同じ、光の鎧を纏う身なんです」

「ッ!?!」

カヴァーチャ&クンダーラ
日輪よ、具足となれはとんでもない宝具である。それは英雄王の蔵にもない、神々ですら破壊は困難の、光でできた鎧である。

そして実は、火の神アグニからも宝具を授かっている。完璧に使えないが、それがアルジュナと関わり深いと言うか、全く同じである。いや、加護のおかげで腕前関係なく当たるので、少し違々と首をかしげながら話す。

「紹介の時に言った通り、私は捕まっているときの母に宿っており、そ

の後生まれ、育てられました。母は私を宿すが故に、不貞を民に疑われ、父はそのために母を遠ざけるしかなかった。呪いもありましたしね」

だが、その母を守りしは絶対なる光の鎧。射殺すは炎の矢なり。

そう言うこともあり、自分は生まれ、すぐに知性を得て、己の家族がどのようなことになっているかを知り、神々の試練を受け、呪いを焼く炎を手に入れた。

それでも長くは幸せは続かず、最後には大地の女神に身を捧げる。

「それが自分の記録です、その後母と父は幸せならいいのですが」

「話を聞く限りは、君はカルナ、アルジュナ、そしてラーマとシータ。四人の英霊と繋がりが深いんだね」

「神々の加護繋がりで、その、カルナさんがそのことに気づき、アルジュナさんもそれに気づいたり、弓は自分が教えようと言えば父が激怒したりと弓勝負しそうになったり、カルナさんと同じ鎧のなら強いかと？ その、勝負好きな英霊が言いだしたり」

だが実は戦う力は無い。自分は偽りと呪い、邪悪を滅する光と炎の御子。

確かに母親を守るだけなら絶対の鎧で守れたり、腕前関係なく火と光の矢を放つ。それは必ず彼が審判を下す咎人なら、必ず命中する。

「アーチャーじゃない？」

「？ いえ、自分ののは加護ですから」

首をかしげながら、そう告げる。本人は加護による命中なので、弓の腕前は無いとばかり言う少年。

ともかく、守りと戦いは相手によって無双するらしい。母親に大半の力を割いているが、鎧の加護もあるのでかなり頑丈らしい。

だから強いと言えば強い、弱いと言えば弱い。それが自分と知られつつあり、鍛えようとしたり、勝負しようとしたりする人に困っている。特に宝具と関わり深い者達で。

そして、

「その、女の方々が少し……」

赤面しつつ、恥ずかしそうに、

「母上は生む前の若い姿ですが、母なので恥ずかしいだけです、いいのですが……他のお方は違います。その、急に抱き着かれたり、母と共に沐浴、いえこちらではお風呂場に連れていかれるのは困りますっ」

後半は無視できない気がする。少し危険な思考の鯖いるな。

「そう言えばメイヴさんがずっと見てましたね」

「？メイヴさんですか？まだ来たばかりですが、色々英雄のお話を聞かせてもらいました。好きな時に部屋に来て良いとのことだ」「やめなさいっ」

すでに勇士として見られている。本人は力を借りているだけだが、それでも呪いを焼くことに関しては、右に出る者がトップサーヴァントと同列かそれ以上と特化している。

なにより偉大な宝具持ちと、彼女の琴線に触れたらしい。

「後は武蔵さんがよくお話しかけてきますね、それとネロ様も。部屋にいつでも来るといいぞとおやさ」

「やめなさいっ」

二人は真剣に言った。なぜかよくわかっていない。

御子として働いたと言っても彼はまだ年若く、そちらはよくわかっていないようであり、知識がある。いやあるかどうかとも怪しいぐらいだ。

能力は高くても、筋力は最大まででないに近い。ただ魔力だけは恐ろしくあると偏っていた。

その後は母親が向かいに来て、家族は彼の言葉や正史ではまだいるが、彼らは呼べない状態。それでもいまは三人仲良く過ごす、仲のよさそうな家族がいた。

背後に何名か怪しげな鯖がいたり、自分の後ろでゴールデンが捕まえた状態にいる鯖がいるので、頭が痛くなる。

藤丸立香は夢を見た。

それは一人の女神を守る為、その姉達を守るため、破滅へと歩く。姉達はバカな男と呆れながら、憐れむことも無く、その姿を見続け

た。

そして一人の女神は、全ての神々を滅ぼし、神の時代を終わらした男へと駆け寄る。

『■■■■』

名前が分からない。だが、その涙を拭きながら、男は微笑む。

姉達はその魂に触れながら首を振る。この魂はここに留まらない、この魂は何者でもない。世界、全てにおいて、一か所にいる事は無い。ただ終わる時が来るまで側にいることにした三姉妹。

美しく、何者にも触れることは無い、偶像の女神と共に、彼は終わりを迎える。

「ん……………ん？」

腹の上が重く、布団の中を見るとランサーこと、メドゥーサが猫のように丸まって眠っている。

幸せそうに、その顔を見ながら、

「……………ああ」

そのまま彼は彼女の頭を撫で、静かに目を閉じた。

「で、なんだこれ」

目の前にアストルフォの姿をした、男性がいた。彼は龍崎アスカ、一番多くの自分に関わった自分だ。

「知るか」

白銀の鎧を着こみ、燦然と輝く銀の王剣を腰に下げた騎士が不機嫌そうにしていた。

「……………」

それ以上に何を考えているか分からない、赤い髪、ただの剣を二本持ち、使える武器は使う器用貧乏な騎士の紛い物と言う剣士がいる。真名どころか名前すら教えてもらっていない。

「??？」

唯一分からない顔をするのは、イグニス。召喚された時の衣類。赤い髪でまだ若々しく、女子から可愛いと言われてしまうことを少し気

にする男の子。

そして、おそらく英雄なり、戦士なりで三姉妹の側に最もいた男が、困った顔をしてため息をついていた。

「えっと……とりあえず、申し訳ない」

俺こと藤丸立香が、絆や縁召喚にて、召喚したことを話す。魂の記録からこのような現象が引き起きた、そう神々殺しの戦士は告げる。「まあ気にしないで欲しい、おそらく一時的なことだろう。一番の切っ掛けは君ではないだろうからね」

「すまない」

アスカくんが少しばつが悪そうに呟くが、それには首を振る。

「面白がつて実験したカルデア、俺が悪いから気にしないで欲しいよ」
「……その、自分は嬉しいです。若々しい頃ですが、父と母、共に過ごせていますから……」

本音を言えば、弟達もいて欲しい。そう歳相当、それでいてしつかりしたことを言う彼に、アスカくんは、

「武蔵、メイヴ、ネロ、ギリシヤ系統の英雄に触れるな。男性でも風呂を共にするなイグニス」

「はい？　ネロさんとは後日、部屋で英雄伝を聞かせてくれると、お約束してますが？」

令呪使わなきや。

「おいテメエ、召喚されてるんだから守れ。さすがに守れ」

「分かっている、俺とて前世か来世か知らないが、食われる気は無い」
「あつはは……」

美少年として登録されてるイグニスを危惧するのは、俺だけじゃなかった。そう言えばアスカくんのこと、アストルフオはかなり忘れられてないようだったな。

ジャンヌもおかしいし……

それを聞き、アスカくんはなんとも言えない顔をする。

「ここにいない『俺』のことだろな？　考えるな、少なくとも生きてる自覚ある奴以外、気にしてもしようがない」

「ですね……メドウ……アナとステンノとエウリュアレ……す

まんツ」

「なぜッ」

頼むと言われそうだったけど、なぜか全力で誤られた。

「いや、だってね……………俺のことをたぶん、記録で知ると思うと、君、酷いことになるよ。俺なんか勢いで神々と戦争したし。ポセイドンだけだったのに、なぜに全面戦争？ エウリユアレもステンノも面白がってただろうね。あの二人性格悪いし」

たっはははと笑う様子に、だからこそと真顔で、

「俺との関係を思い出して、君がどうなるか分からないんだよね……………」

「……………そう言えば、オレ、吸血されたな……………」

あれ？ 俺も少し起きたくないな。あの二人のことだからやばい気がする。

剣士はため息をつき……………

「もう一人俺召喚しねえ？」

白銀の騎士は全力で逃げ出した。

アスカくんはすでに気配遮断した。凄すぎないかな彼、素のスペックでやるの!?

少し分かったことがある。

過去は過去、現在は現在、未来は未来なんだ。気にしなくていい。だから……………

「あうあうあうあう……………」

両側で密着せれ、肌の感触やらにおいやらで真っ赤になるイグニス。その様子が満足そうに微笑む。より抱き着き、ほほをぷにぷにしたり、耳元で囁いたりして、魅力が効かない少年の反応を楽しむ二人の女神たち。

「あら？ 赤くなって可愛いわねこの子」

「そうね、このまま連れていきましよう」

イグニスくんに魔の手が伸びて、

「……………その衣類を渡してください」

「渡さないよッ、これはボクとアスカとの絆、強いて言えば彼とボクとの絆だよジャンヌ!!」

何故か女子服姿のアストルフオに武器を構えるジャンヌ。

アルトリア達に追い詰められかけている剣士。

「……………うん、やっぱりいまが一番かな」

そう呟く……………

マリーまでイグニスくんに構いだしてきて、ヘラクレスが壁から静かに見続けているのが怖い。白銀の自分だけでも呼ぼうかな……………

カルデアは、今日も平和です。

「……………可愛いですね、イグニスくん……………」

マシユ?

番外編・やつちやつた♪

マリア・カデンツァヴァナ・イヴ

「……………」

「マリア？」

「？ アスカ……………」

目が覚めると、アスカが顔を覗く。頭の中にもやががかかるようであり、なにかおかしい。

「昨日の疲れ、残ってるのか？ 朝ごはんは軽めにするか」

「ええ、お願い……………」

そう言つて寝間着……………なにも着ていない。

アスカがいるのに？

「？」

何を疑問に思う。アスカは私と恋人なのに。

彼と付き合い、いまの関係になって数年が経つ。

セレナがママに泣き付いたようだけど、この子が生まれてからは、落ち着いている。

「はあ、私も本当にオカンね」

「あー」

そう言つて、隣にある小さな小さな、可愛い娘を見ながら微笑む。

アスカは料理ができるため、私のマネージャーとして働いているよ
うなものだ。正直助かる。

そんな中、可愛い娘をあやししながら、静かに結婚式の写真を眺めた。

「そう言えば、ママは喜んでくれてたわね」

「ん、ああ。ナスターシャ教授。この子を抱いて、喜んでたからね」

「問題はあの後ね、セレナ達」

「言わないでくれ……………」

アスカは顔を赤くし、少し言いくそうにする。彼は結局、モテモテだったことに気が付かず、色々問題が起きた。

セレナもセレナで、泣きながら可愛いよくと、初恋が壊れたことを受け入れていた。少し悪い気がするが、こればかりは譲れない。

「どうしたマリア？」

「ん、ううん。なんでもないわ」

いまは幸せだ。彼がいて、この子がいて、そしてあの子達も時々遊びに来る。

時々これが壊れてしまうと思ってしまう。やはり弱いと思う。

「マリア」

その時、顔が近く、静かに抱きしめられた。

「あ、アスカ!？」

「まあたこの幸せが壊れるとか思ってたでしょ」

そう言い、意地悪な顔をした後、キスされた。

しばらくして離れた後、顔が赤くなる。

「あ、あなたっ」

「オレを守る、そう約束しただろ」

「それはっ」

顔を赤くしながら、ニヤリと笑う彼。

「悪いが、オレはお前を手放す気は無い。誰にも渡さないし、お前の大切なもの全てを守る」

「あす、か……………」

「マリア、オレはお前を守る」

真剣な眼差しで言われ、静かに頷く。

おかしい。彼の方が年下……………いや、精神的では彼が大人か。

昨日もまあ……………お休みだし……………今日もだから、続きも平気ね

……………

「じゃ、じゃあ、あとでその、離さないでね……………」

「ああ、分かったよ。お姫様」

そして幸せな日々の中、静かに朝食の良い匂いが鼻をくすぐった

……………

雪音クリス

「……………なんでだよッ」

「文句言うなよ」

今日はクリスマスマス、厚着の所為だろう。こいつと一緒に歩けば歩くほど、男が寄ってくる。

毎度のことながら嫌になる。

まだ恋人だから、後輩を初め、諦めていない奴がいるんだ。

せっかくのデートなのに、こども邪魔されていたら、嫌になる。

「なんでせっかくのデートなのに、家でも過ごせねえんだよ」

「仕方ないだろ。響を初め、キャロル達もいるんだ。二人っきりの時間はその作れない」

「それはお前が、ああもうッ」

「悪い……………」

こいつが全部大切と言うあほの所為で、家族優先、幼なじみ優先と
言う風なことばかりする。

おかげで恋人なのに、私は二の次ばかり。

イライラしながら、街を歩く。

「……………クリス」

「んだよ……………」

少しぶっきら棒に答えると、静かに手を握られて、どこかに連れていかれる。

なんだ？

町を歩いていくと、人気の無い場所へ連れていかれている。

……………

(い、いや、まさかその。そういうのは、そのっ)

そう考えるが、少しばかり期待する自分がいる。

「ち、ちがつ、違うぞっ。わたしはそんなんじゃない」

「クリス？ どうしたんだよ」

「そ、それは」

顔を赤くし、静かに手を引かれ、森の中に連れていかれる。
心臓の音が早くなり、顔が赤くなる。

だが、

「ほら、こい」

「へっ」

町の景色が丸々見える場所、森が開けた場所に出て、静かな場所に出た。

「ここなら二人つきりだ」

「……………ああそうだな」

バカバカしいことを考えた為、少し顔が見られたくないため、顔を見せない。

「クリス」

「んだよ」

「クリス」

「だからッ、な」

その時、声が出せない。

口をふさがれた。

目の前には彼奴の顔が見え、びつくりしたから、抵抗するが、こいつがそれを許さない。

しばらくされたら、なにか悪戯に成功したようににやとしながら、「女の子なんだから、こんな場所に連れてこられるな。なにされるか分からないぜ」

「!!」

顔が真っ赤になり、静かにどつく。

だが、悪い気がしない。

そして、静かに笑い出したため、蹴り続けると、

「ん」

何かがポケットから落ちた。

それを見て彼奴はやばいと言う顔をしたのを見逃さず、すぐに彼奴より先に取り上げた。

「なんだこれ？ 箱？」

「……………開けてみる」

なにか急にこちらを見なくなり、なんだよと思いつながら箱を開けたら……………

「……………ブレスレット?」

「その、安物だけど……………あれだ、その」

そう歯切れが悪く、だが、こちらの腕をつかみ、そして、

「お前が好きだクリスつ、ずっと側にいてくれ」

「……………え……………」

その時、何か怖いと思つた。

だって、そうだ。

私の大切なもんは、全部私を置いていなくなる。

そう思つたが、すぐに身体を引つ張られ、抱きしめられた。

「オレは離れない」

「……………あ、すか」

「お前を一人にしない」

そう言つて強く、少し痛いと思うが、それでも強く抱きしめられる。

「悪いがお前が嫌がつても、誰かがオレからお前を奪い取ろうとして

も、オレはお前の側にいる。居続けてやる、奪い取つてやる!!」

「! け、けど」

「嘘だと思ふか? オレは本気だ」

そう言つて、怖くなり、後ろに下がるが、木にぶつかる。そして彼

奴が、私を逃がさないように、前に出る。

「逃がさない」

真つ直ぐに見つめて来る。

「だ、だけど、わたし、私は……………」

「お前が恐れていても、オレはお前から離れない」

「……………本当か」

「ああ」

「本当に本当に本当か」

「ああ」

「ならッ」

静かに、ただ彼奴を見ながら目を閉じた。
そしてしばらくしたら、口に何かが触れた。
あの後には……………

月読調、暁切歌

「デス」

「……………」

「……………二人とも、少し落ち着いてくれ」

そんなこと言われても困る。

「アスカと切ちゃんはお似合い、だから、付き合うなら切ちゃんがいいに決まってる」

そんなこと思っただけ。本当は、本当は……………

「それは違うデスっ、アスカは調と付き合うべきデスっ」

本当は違うデス。この人だけは、この人だけは譲りたくないデス!!

「けど」

「だけど」

「あああああ、もう、落ち着け二人ともッ」

「だってッ」

仕方ないのでご飯を食べることにする。

私達の好きなものの匂いにするデス。やっぱり、アスカはよく知っているデス。

「……………ほら、できたぞ」

そう言っただけで出したもらったものを食べながら、静かに考える。

どうすればいいか、考えるデス。

「まず二人とも、オレの意思を忘れてないか？」

「!」

「そ、それは……………」

聞きたくない。切ちゃんって言ってほしいのに、なんで自分のことを想って欲しいって思うの。

聞きたくないデスッ。私は、私は調に幸せになって欲しいデス!!!

「…………オレは」

そして、

あの人は、

「オレは二人が大切だ」

そう静かに、

答えたデス。

「悪い、優柔不断は分かっている。二人に好きって言われてるくせに、ちゃんと応えられない」

「アスカ……………」

「デス、けど……………」

「それにな」

そう、私達を見ながら、

静かに、

「二人とも、本当の言葉を言っていないだろ？」

「!?!」

やめてッ。

それはッ。

「本当の言葉じゃなきや、オレだって……………」

「…………じゃあ、言うよ」

私は覚悟を決めて、静かに彼の手を取って、胸に当てながら、

「私は貴方が好き。分かるでしょ？ 私は貴方が好きッ」

「しら」

「切ちゃん、私は本当を言ったよ」

胸に手が当たっているからか、少し赤くなってるデスけど、ちゃんと言葉を受け止めようとしている。

……………私は、

「私も、私も一番好きデスッ。誰にも渡したくないくらいに好きデス!!」

そう言って、同じように、彼の手を取って、胸に当てる。

心音が、静かにしてれば聞こえるくらい、ドキドキ言ってるデス。

「…………切ちゃんはその手使わないでほしい」

そのまま私達はアピール合戦することにした。
逃がさないデス、考えさせないデス。
「ちやんと答えるまで付き合ってもらうツ」デス!!」
二人一緒なら怖いものなんてないツ。
もうできることまだやってやるデスツ。

風鳴翼

「……………ううっ……………」

ふ、不覚にも、酒に飲まれた。
やはりこういうのは苦手だ。

調理場から、頭痛する頭を癒す匂いがして、私は、

「お、おはよう」

「おはよう、翼」

彼の前では、私は防人でも、剣でもない。

ただの翼、彼に愛された翼だ。

「奏に付き合って、変に慣れないお酒飲んで、ほら、お味噌汁」

「うん、ありがとう」

少し不思議だ。いまじゃ、こうして優しく微笑むことができる。彼が私を、戦いの場、歌を歌う場でも無い。

ただ何気ない、ただの場所を守ってくれている。

少しでもこの建物の外を出れば、私は歌い手風鳴翼であり、風鳴の防人だ。

だけど、彼が、彼の隣だけは違う。

「? どうした? まだ辛いかな?」

気が付くと、彼に寄りかかっていた。それに、

「ずるい」

「はあ?」

「なんで数年経ったら、私より背が高くなって、なんでもできるの」
そう意地悪に言ってしまう。

そうだ、なんでもかんでも彼に任せてしまっている。

「いいだろ、オレはお前を支えたい。なんだ、いやか？」

「……………いやじゃないもん」

そう言つて、静かに抱きしめられる。

前は恥ずかしかつた、いまも恥ずかしい。だけど……………

「お前が剣だろうが、翼でどこまで羽ばたこうが、オレが離さない」

「うん」

「オレはお前を支える。歌姫翼、防人翼、ただの翼でも」

「うん」

「翼」

「アスカ」

今日はお休み、久しぶりに彼に甘えよう。

そう思いながら、彼の傍に寄り添う……………

龍崎アスカ

「……………」

縁側で静かに、お茶を飲み、太陽にぽかぽか照らされる老人がいる。

「「おじいちゃんっ」」

可愛らしい孫娘達がやってきた。お菓子はあつたかな……………

「いや違うだろッ」

その時、空間を破壊してツツコム魔術師を見て、

「……………」

目が覚めたッ。

「デメエはなに考えてる」

「待つてッ、今回はこちらの不手際だから、気合い入れて少しでも心のケアとかそういうのを目指したんだッ。君の夢だけはどんなにか気になって覗き見たのは誤るから」

花の魔術師マリーンは夢魔とのハーフであり、どうも夢を見せたらしい。司令官、風鳴弦十郎を初め、スタッフが呆れていた。

「あー……………つまりなんだ。装者達全員に、夢を見せたど？」

エルフナインとキャロルも、なにか幸せそうだったので、スルーして高速で来た。

「うん、まあ幸せな夢だよつ。この私、花の魔術師マーリンが自信をもって言えるツ。彼女達が望む、幸せを具現化してる。内容はなにかは知らないけどね」

ものすごくどや顔で言われて、イラツとしてもいいだろう。

「妙にリアリティだけははつきりしやがって………変な夢見せられてないか確認しないと」

そう言いながら、一斉送信でメールを放った後を思い出す。道の途中で送っておいた。妹達は手紙だが………

その時、誰かが司令室へやってくる。

「ん、奏か」

「ウツラアアアアアアアアアアア、マーリンはここかッ」

激昂して、ロンの槍を纏う奏さんが現れ、おいと言う顔でマーリンを見る。

「なぜ奏さんがキレている案件を聞こうか」

「………なぜ？」

「なぜじゃねえええよおおおツ、翼とアスカができちゃった婚したのはいいがツ、なんで響達まで結婚してるんだ!! さすがに重婚を強いる気は無いし、なにより私が独り身で終わるってどういうことだああああああ」

「知らないよツ!!」

「できちゃった婚ってなんだよつ、それこそなんでだよツ」

どんな夢を見てるんだよ。奏さんは静かに、

「別に、もう独り身でもいいよ。翼とアスカの子におばちゃんって言われながら、遊びに行くよもう。けどな、けどなあああ。全員の子供からおばちゃん発言はさすがの私もグサツときたよツ」

「もういるのかよ全員ツ!?!」

スタッフ達の何名はぶっ飛んだ内容過ぎて、お茶を拭いたり、せき込んだりしていると、どす黒い闇を纏う何かが扉を開けて現れた。

現れたのは、ギアを纏ったセレナだった。

「死ね」

短く、マーリンの頭部を破壊しにかかる。

それを飛び避けると、床が粉々に砕けた。

「セレナっ、セレナどう」

「……………」

オレを見る時、少しばかり止まり、そして爆発した。

身体全体が真っ赤になり、口を金魚のようにパクパク……………

「……………なに見せた？」

「なにつて、本人が望むツ、幸せな夢さ」

爽やかに言ったら、2つの聖遺物がマーリンを捕らえた。

壁がマーリンと共に吹き飛んだ。

「待って、ちよ、待って!!」

「ユルサナイ、オトメノココロモテアソンダ……………まーりんシスベシ、
ジヒハナシ」

「テメエはとりあえず、ここで散れ……………」

後ずさりながら、後ろに下がると、

「あっ、マーリン」

「はッ」

乙女の鈍器、消火器が振り下ろされる。

振り下ろしたのは、

「……………少し、死んでくれませんか、マーリンさん」

女神の微笑み393が現れた。

そして、くるつとこちらを見て、

「アスカも後で覚えておいて」

「なぜオレも!？」

その時、隣に消火器が床に突き刺さる。

「口答えは許さない」

「夢で何が」

「それを聞いたらもつとも許さない!!!」

訓練室でリンチにしているらしい。

誰も何も言わないし、向こうもマーリンだからと、鎧着た人達が一斉に納得し、カルデアは何も言わなくなった………

「もちろん隙を見て逃げたけどねっ♪♪」

「初代様呼んで誰かッ!!」

マスターからのお達しで、グランドとトップサーヴァント達による、戦が始まった。

番外編・立花響の誕生日

「本編じゃやれない響の誕生日」

「わっ！っ♪」

「……………いつそ殺せ……………」

アスカだけ響のオーダーで女装させられて、マリア達もいる。

アスカの部屋にみんな集まり、料理を作る為、エプロン姿でもあった。

「久しぶりだなアスカの女装は」

「とても似合うデースっ」

「女の人みたい」

「そりや、母さん似だからな……………昔、すっげえモテたらしいし」

遠い目しながら、料理も作る。女物の服を着てエプロン姿は、女子力の高さが高まっている気がする。

響の好きな料理を初めとした、大盛り料理。響以外に切歌や調も嬉しそうに頬張りながら、クリスがしみじみ思いだす。

「そーいや、私も最初、アスカのこと女と思ってたな……………」

「確かに。二課に話をするために来てもらった時も、変装用に女性服用意した所為で色々大変でな……………てか、女子力がな」

料理、洗濯、裁縫など全てにおいて装者達を超える能力持ち。

その話の中、未来が、

「それはアインハルトさんが忙しいことがあって、進んでやってましたね」

「ああいや、前世前世。全部やれないと一人暮らしなんてできないから」

「それでいまの女子力……………」

セレナが戦慄する中で、響はもぐもぐと食べ、口元を拭くように、ウェットティッシュで拭いたりする。

「いつもありがとうアスカ」

「気にするな」

「にしても、こいつの世話も手慣れてるな」

「未来と一緒に、小さい頃からだからな」

「いつも助かってるよ。未来が私の日だまりなら、アスカはいつも一緒にいてくれる人だから」

それにセレナ、切歌、調が反応する。

「響、たとえ響でもアスカは渡さないぞっ。翼のこと、責任取ってもらうからなッ」

奏がそう告げ、おいと言う顔になる。

だが、

「で、実際どうなんだ。お兄ちゃん?」

キャロルが背後から話しかけて来て、アスカは気にせず、

「おじさんはもう疲れたよ………高校が終わったら、料理屋開けるよ
う免許なり取って、山奥で静かに暮らすよ」

「なんでですかッ」

セレナが叫び、アスカはそう言われてもと、

「別に響も翼も可愛いけど、恋人とかぶっ飛んでる関係なのに、いまさら分からない」

それに全員が黙り込み、料理を楽しむ。

もうこれ以上は話してはいけないと思っただらしい。

「あーお腹いっぱい♪ 幸せ〜♪♪」

「お粗末様」

料理が終わわり、プレゼントももらい、響は嬉しそうにしている、未来も微笑む。

装者達も平和な時間の中、久しぶりにゆっくりしている。

「あつ、アスカからプレゼントもらうの忘れてた」

「アア? この格好じゃないと言うのか」

「まあまあ」

未来がアスカが怒るのを止め、渋々、

「はい」

「ん?」

キャロルをお姫様抱っこし、そのまま響に、

「ま、待」

「わーいーいーいーいーいーいー」

そのまま抱っこして騒がしい時間に戻る。

クリスの家に泊まる形に成り、全員がクリス家に寝泊まり、静かに夜になるが、

「ん」

一人だけ男性の為、自分の家（元々クリスの家と隣同士）で寝てたアスカは、重みに気づく。

「えっへへ」

「響……………」

「アスカ」

響が馬乗りになり、抱き着いている。それに苛立ちながら、アスカが響を見る。

（こいつ、前に依存症になったときのこと忘れてるのかッ）

そう思った時、色々思い出す。響の胸の柔らかさや、あの時の唇。

何故あの時、抵抗しなかったのか、分からない。

「アスカ」

「はいはい」

これでも色々当たっている。だが無の心で対応する。

だが、

「ん」

急に真剣な顔になり、響が、

「この前の続き、して……………」

アスカの頭が真っ白になると同時に、響が静かに見つめる。

「ひ、ひびきっ？」

「して」

そう静かに言う中、手足が動かない。気が付けば響に押さえつけられている。

「な、なに言ってるんだ響ッ」

「私、気付いたんだ。アスカのこと好き」

そう呟くと、顔を、唇を押し付けた。

抵抗するアスカだが、響も抵抗し、長く、長くキスした。

「ぷはっ」

「ば、何考えて」

「アスカ、大好き。好きなんだよ私」

「響？」

「翼さんやクリスちゃん、切歌ちゃんや調ちゃん。セレナちゃんやマリアさん。みんな綺麗で可愛い子だし、未来だって分からないから……だから」

そして、静かに衣類のボタンを外し初め、

「もらってください、私を……」

「ひび」

そして、静かに……

ぴゅぴゅ……

「響、朝だよ。早く起きて」

「……」

あれと言う顔で起き上がると、キャロルがぐったりとしていて、不機嫌に起きる。

「寝苦しかった」

「まあまあ」

エルフナインがキャロルのご機嫌を取りながら、響はみんなが起きる様子を見ながら、そして、

「……………」

声にならない悲鳴を出し、すぐさま朝のシャワーをクリスから許可をもらい浴びる。

これが何か分からない。マーリンがまたしたのかと思うが、前の時と違い、アスカは本人のようだった。

自分はアスカに対してどう思う？

だってアスカは幼なじみで、で……

(男の子だから、その、あ、ああああああああああああああ)

そして朝食作りにクリスの家にいたアスカを見つけて、顔を背けながら、

「ひ、響があまり食べないっ」

「昨日食べ過ぎたのか？」

「分からない、どう思うかな……奏？」

「響、まさか、自覚したのか？」

「ま、まさか。自覚してしまうなんて……」

「まずいデス……」

「じー……」

その様子を見て、戦慄する様子。

真意分からないまま、こうして誕生日は終わりを告げた。

番外編・二年そこそこの関係

「ん……………」

龍崎アスカは布団から起き上がり、背筋を伸ばす。寝ぼけている頭を起こし、朝食作る為にカレンダーを見る。

妹達が仕事だったり、休日の時は睡眠に時間を使うか、日向でのんびり茶を飲むと決めていた。

昆布茶もあるし、のんびり過ごそう。今日は休日だった。

「……………メールだ」

翼からのメールで、話があるので家に行きますとある。構わないのでいいよと返事をして、お茶菓子でも用意しておこう。

しばらくのんびりして、着替えておく。やはり男性は男性服だ、おかしな話だよ、見た目女の子だからって女装しなければいけないなんて。

そうのんびりしてたら、翼は神妙な顔で来たが、いつものことなので気にせず上げて、お茶とお茶菓子を出す。

「すまないな休日だ」

「いや、暇だからいいよ」

飲み物の好みは分かり切っていたため、すぐに出す。お茶菓子も翼の好む組み合わせで出しながら、静かに前に座る。

「それでどうしたんだ、こんな時間に」

「ん、ああ」

一息つき、静かに荷物から紙を取り出し、テーブルに置く。

「籍を入れてもらおうか」

真顔でそう切り出された。

「……………いまなんて」

「責任を取って籍を入れてもらおうか」

なぜか吹っ切れた顔で微笑み、静かに紙を見せる。翼の名前もハン

こも押されている。

それに困惑していると、

「二年間の付き合いだが、色々あったな」

そう黄昏ながら、

「まず奏の不注意でシャワーからあがったばかりの私の裸を見たのが一回目か」

奏が自分と翼の関係を良くするために動いたが、どちらのうっかりでそのようなことがあった。

そして部屋の様子も見られ、いつからか緒川さんと共に掃除することもしばしばあり、いつしかズレ始めた。

「お前に下着を買いに行ってもらったり、タオル一枚で、部屋の掃除を手伝ってもらったり……ああ、虫が出たときは完全に見たはずだな」

「つ、翼？」

思い出すのは自分の女子力の低さであり、それを語る翼。

「私の家、風鳴の闇も知ってるだろ？ 私の父親、あの人との関係を」

翼の家のことは知っている。表向き父親となっている弦十郎の兄、八紘だが、実際は風鳴の血筋を濃くするため、二人の父親が息子の嫁に手を出したのだ。

それが原因で、不器用な男八紘さんは翼を引き離すことで、風鳴家から遠ざけようとしていた。

いまは関係は少しだが良い方向になり、本家の方の防波堤のように、翼を守る。

「本家がお前と私を婚姻させようとしていると知っているか？」

考えそうなことだろう。一部とはいえ、知られている自分のこと。

自分は世界の理、神々すら凌駕するルール、異世界の抑止力。

だがその意味は理想、理想の英雄と理想の化け物が両立する。血筋では無く、魂が深く関係する。意味は無いのだが、きつと理解しないだろう。

だがその辺りはさすがに隠され、よくて融合型や、装者として活躍した程度だろう。

「それで父がどうも、守る為に私達の間係を調べたらしい」

「……………え……………」

「私とお前との関係だ。アスカ、男として責任を取って、私と結婚してくれ」

そう微笑む。理解が追い付かない。

セミの鳴き声が響く中、翼は静かに、

「私もお前との関係やしてること思ひ出すと何も言えないと言うか、恥ずかしくて死にたくなる。大人しくもらってもらうぞ」

真つ赤になり、眼に涙をためながら震える防人。いや翼だった。

「待ってくれつば」

「どこの世界に家族でも恋人でもないのに脱ぎたての衣類を洗濯してくれる男子がいるッ。も、もうもらってもらうしかないじゃないか!!」

うん、ガラス越しだけど、オレは翼がシャワー浴びてる時に脱衣所に入り、色落ちとか気を付けて、脱いだ衣類触ってる。

おかしいな。

「知られたんだっ、本家じゃないが知られたんだっ。そして自覚した!! もらってもらう!! 元気な子を産むっ、私は、私は」

泣かれてしまう。やべっ、こういう時は奏さんに救援を頼むしかない。

実際いまメールを送信してる。奏さんや、助けて。

「……………奏はもう知ってるからな」

涙目でそう言い、静かに固まる。

「……………紙は置いていく。明日返事を聞くから……………」

そう言って立ち上がり、玄関へ。

そして振り返り、

「アスカ、逃げたら私はもう、なにするか分からないから……………」

そう言い残して、翼は去っていった。

とりあえず、魂が出ていく。

時間だ。時間が空けばいいんだと納得して、とある山奥の廃屋に逃

げ込む。家に帰れないし、探さないでくださいと手紙も置いたし、問題ないよね？

ガクガクと震える。なぜこうなってしまうのだろうオレの人生、前世なにをした？ 世界を救ったりした程度だろう。あつ、サーヴァント達の思い関係か。藤丸立香ツ。

そんなことを考えていると……………

「……………殺気ッ」

瞬時に切り替わる。戦意、敵意と言うのを感じ、静かに走る。

それと共に、爆撃が開始された。

「なんでさッ!？」

それに驚くと、深夜の夜、満月に人影が映り、降り立つは、

「クリスさん……………」

目から光が無く、静かに無表情で銃口を向ける。

「一つ聞く」

「はいッ」

手を上げながら、様子を見る。少しおかしい気がする。

クリスは静かに、

「お前は私のことをどう思ってる？」

「はい？」

頬をかすめる弾丸。血が一滴流れた。

「オマエはワタシのコトをドウオモツテル？」

「友人ですッ」

叫んだ。叫びました。

「……………分かった」

「……………クリス？」

月明かりの所為でよく目が見えないが、なにか直感的な何かが危険と、アラームが頭の中で鳴り響く。

「お前が分からないってことが、よおおおく分かった」

瞬間、オレはその場から飛んで逃げ出した。

その後、重火器のデスレースが始まる。無慈悲に放たれる弾丸、流れる歌を聴きながら、ただ走るしかできなかった。

「お前がそういう態度で、それで勢いで翼先輩選ぶのならもういい……手段は択ばないッ」

爆撃の中、訳が分からず、ただ走る。

その後の記憶は無く、クリスは黒焦げの何かを持って帰還したらしい。

——超無関係な魔術師がナレーションします

「はあ……少しは俺に相談すると言う選択肢は無かったのか？」

姪っ子となっっている子は顔を両手で覆い隠している、赤面しているのだろう。

マリアと言う人は髪をいじりながら呆れ、奏は紙を睨みながらどうするか苦虫を噛む。紙は無論、入籍届けだ。

なぜか目から光が無い後輩ズとセレナ。無表情で立っていて、その中で響と言う子もまた無表情であり、未来と言う子は困惑していた。

クリスと言う子は銃口をずっとアスカに向けている。あれは本物の鉛玉放つ銃だ。

「つていうより、なぜあなたがここにいますか？」

「向こうでお店の代金を払ってもらおうと、領収書を渡しに行ったらアルトリア達に殺されかけたから、ここかアヴァロンしか行く場所が無いんだよ」

暇なんだ。サービス券も貯まっていたし、使わないともったいない。そう聞くと全員が白目を向ける。黒焦げのアスカくんまでだ。ナレーションを続けよう。

「正直に聞く。アスカ、お前、翼と結婚すると言うか、将来どうしたい」
奏がそう呟き尋ねた瞬間、やばい雰囲気放つ子達がいる中で、彼は、

「山奥で一人で静かに終わりを迎えたい」

暴力シーンが入ります、しばらくお待ちください。

「正直に言う。アスカ、お前、翼と結婚すると言うか、将来どうしたい」
テイク2と言う奴だ。後ろで銃だけで無く刃物まで向けられた故
か、ガクガク震えるアスカは正直に、

「そんなこと言われてもツ、オレは見た目は女の子のようなアストル
フオの三つ編み切り落とした男だけど、中身は淡々と人生を過ごし
た、酒飲める大学生だったんだツ。いまさら恋人とかどうとか言われ
ても分からないツ」

それについて奏は私を見る。いまはナレーションなのにな。私は
静かに、

「うん確かにそうだね。まあぼつさり言えば、普通だね。感情らしい
ものが欠落した子って印象かな？」

「よくわかりますね」

「一応、殺す切っ掛け作りに、調べたから」

藤堯朔也の何気ない一言に、正直に答える。それに全員から殺気を
感じたが、

「私に睨まれてもね、私はグランド・オーダーで、彼を殺すよう星と靈
長に頼まれたんだ。無駄に生きていられても困るからってね」

それに本人は気にはしていないが、明らかに周りが理解できない顔
か、怒りのどちらかになりながら、こちらを見る。それを涼し気に流
しながら、

「ところで君はどうするの？ 結局翼って子と結婚するのかい？」

それに全員が二人を見るが、翼は、

「わた、私は……………」

「あー防人語が完全に無くなって……………」

奏が頭を撫でるが、千里眼を持つ私には分かる。大多数の彼女がし
たうっかりの出来事と関わったのは、彼女の仕業だ。

いま言うなよと目線で睨まれた。

「そもそもアスカ、その、男なら責任を取るか、ちゃんとした理由を言
いなさい。その、翼がそんなに嫌なの？」

マリアが言いにくそうに呟く。すると、

「無理矢理結婚とかありえないと言うか、結婚とか恋愛とか、分からな

いことするより、縁側で茶すすりたい」
「なぜだッ!!?」

いくらなんでも叫ぶ。

「君ね、こんな可愛い子達に囲まれて、出る感想がそれって本気かい!? もしかして同性じゃないとだめなのかッ」

「マーリン黙れよッ。言っちゃ悪いがほぼ全員娘か妹並みに歳離れてるし、人生のほとんどが生活する為に使ってた前世、こっちじゃ母さん達の無茶ぶりに付き合いつつ面倒見てたり、ノイズ倒す為に鍛えたりしたんだぞ。いまさら結婚、恋愛、恋人とか考えられない。そもそも翼はどう思ってる!？」

逃げた彼の言葉に、翼は小さくなりながら、

「……………知られたことを知って、倒れた話を聞いてから考えたら……………この結論に達した……………」

「元凶はこれかッ」

弦十郎は兄が倒れた理由を知り驚き、翼はいまにも泣きそうな顔をしている。

緒川は、

「申し訳ございませぬ、自分が翼さんをサポートをしていれば……………」
「話が緒川さんになるだけかもしれないですよ」

それもそうなのだ。クリスは不機嫌そうに、

「結局先輩がちゃんとしてないのがいけないじゃないかッ、部屋ぐらいちゃんとか片付けろ」

「そ、そんなことは分かっているッ。せめて着替えぐらいはと思うが、ジュースなどの飲料水がひっくり返って大変なことになって、緒川さんにランジェリーショップに行ってもらうのには抵抗があったんだ!! 奏は派手な物を買ってくるし、アスカのがその、そのまま使える物だから、つい……………」

「……………どれくらい頼まれたんデエスカア?」

後輩ズは静かに睨まれるが、目をそらすアスカと翼。マリアは呆れながら、

「確かに、この子と外国で仕事すると、飲み物のふたは閉めないまま放

置いて、私のもダメにされたわね……その時は私が買ったりするけど、日本にいる時はアスカなのね」

「うう………」

こうして話をしながら、キャロルが前に出る。

「でだ、結局こいつの女子力が高すぎるから、頼む回数が多いんだろ？」

片付けやら、洗濯、料理に買い出し。早い話、性別間違えてるこいつが悪い」

「なんでさ!!？」

まさかの裏切りに、涙目のアスカ。

「確かに、お嫁さんとして考えれば、アスカはこの中で一番モテるよね」

「中学の頃から、分かっても告白する男子いたから」

「オレは男だッ、同性の告白なんて受けるかよ!!」

そして、

「じゃ、このまま翼ちゃんと結婚するの？」

花の魔術師の一言で、眼から光が消える者と、血管が切れかかり、ロードする子が現れ、少し黙り込む子。

当本人は半泣きでいて、アスカは、

「嫌だ、結婚なんて人生の墓場なんかに入りたくないッ」

「あーそもそも恋人同士でもないものを、すぐに結婚なぞ俺が許さないぞ」

弦十郎がそう言う中、少しばかり方向が違うことで頭を痛める。別の意味も、この場合含まれるからだ。

「風鳴家は面倒な家だ、事の発端はアスカと翼の無自覚さもある。それもちゃんと話し合って解決する。だがいまこんなことになっていると知られれば、本家がどう動くか分からないからやめてほしい」

「そう言えばそうだった。旦那、本家の方はアスカを翼の夫にしようとしてるって本当なのか？」

それに翼はすぐにキリつとなり、それと共に顔が曇る。

「政界の裏で、二課当時から動いている家だからな。向こうからすれば、融合型として通っているアスカのイレギュラー性に目を付けて、

私の婚約者にしようとするのは理解できる」

「アスカについては機密レベルの話ではないこともあるが、さすがに融合型のようなイレギュラーな装者や、どの事件でも活躍したのは知られているだろう」

司令として報告できることと、弦十郎としてできないことを判断しているようだ。それを聞いて、響は立ち上がり叫ぶ。

「そんな、翼さんの意思とか、考えないんですかっ」

「どこの世界でも政治つてのは個人の意思なんて考えないよな」

「だね、その結果壊れた国もあるんだけど」

アスカと共に遠い目をする。まあ、私はそそのかしたからね。

そしてうまく逃げられそうになっているが、翼の暴走は叔父である自分の責任と言って、アスカも彼の問題でもあるため、共々奥へ連れていく。あれはこっぴどく説教だろう。

と、

「でだ、おい花の魔術師」

「銃口向け無いでほしいな、なに?」

「なんでアスカはああも恋仲とか、んなこと考えねえ。少しばかり異常な気がするんだが……」

どうも私になにかしたと思われるらしいが、それは心外だ。

「保存庫とアクセスした所為や、前世、そう言うのと無縁だったことがあるからじゃない? さすがにそこまでしか分からないよ」

正直に言うと、未来が鉄スパナをどこからか取り出しながら側に来る。

「どういうことですか?」

「なんで君らまで私に対して攻撃的なもの?! 保存庫にアクセスしたってことは、過去の自分を知ったようなもんだよ。つまり」

過去、女神に手を出したり、幼なじみに手を出したり、ハーレムのような事態に成ったり、もう色々だ。

感覚的に感情がごちゃまぎにされたと説明する。

「それでも彼が彼として感情があるのは、元が空っぽだったからだ。

無自覚でも、もし感情があれば壊れてるはずだ。だけど」

壊れた器に水を入れても、壊れたところから流れ出た。だからどうにかしたと説明する。そもそも彼のアクセスは異例中の異例だ。

「彼は前世は多くの大事な者達のために戦った、藤丸立香も一人の女性と仲良いけど、狙ってる英霊は多くいるし、彼女達の思いも無下にするタイプじゃないからね。まあ、早い話、感情が枯れてるんだ。喜びも悲しみも、善悪の判断も。なにげに彼、シビアなものも前世の影響だけじゃないよ」

どこの世界に、前世機械的な人生を生きただけからと言って、不思議な力を持つて命がけの戦いをこなせる？

覚悟なりなんなりは、より前の記録から影響を受けた結果だ。

「まあ、それもこれも、龍崎アスカと言う受け皿があつた結果だけだね」

それだけは確かだろう。

龍崎アスカははつきりここにいる。多くの記録に影響を受けていても、自分は確立しているのは事実だ。

説教を受けている者を外してそれを聞き、黙り込む中で、

「まあ、記録の中で絶世の美少女とあれこれした記憶とかもあるんだろうから、そんな感情が無いんだろうね」

ここで、その人を一番愛したとかの記憶とかにしていればいいところを、まるでハーレムが当たり前の発言の所為で、とある少年はこの後、猛アタックを意識した者達に狙われる羽目になる。

ちなみにアスカと翼は……………

「はい替えの下着、渡されたのは洗ってるから」

「すまない」

(結局日本にいる間は世話されるんだな、翼……………)

自分が買った少し大人な下着を大人しく着て、赤面するさまを見せてくれればいいものを、結局変わらない関係。

マリアはそれを聞いて、全ての元凶は貴方じゃないと、奏に文句を

言うのであった。

ちなみに私は後でつるし上げられそうだから逃げました。
めでたしめでたし………

番外編・平行世界の装者達

ギャラルホルン。平行世界と平行世界を行き来する聖遺物。

これにより、向こう側からのお願いで、

「というわけで、二日三日よろしくお願いしますっ」

データ取りの為、比較的安全な平行世界として、自分達の世界に六人の装者が訪れた。

本来なら全員はよほどのことが無い限り、元の世界が危険なこともあるのだが、多くのデータが至急必要と、向こうのエルフナインが判断したため、六人全員が来た。

「ようこそ異世界の装者たちっ」

対するこつちも歓迎ムードで出迎える中、料理を作るオレ、龍崎アスカ。

「……………クリスちゃん、龍崎さんってほんと」

「わざわざ服装で分かりやすくしてるのに間違えるな異世界のバカ。そして言うなよ、言うときれるぞ彼奴」

立花がクリスと雪音を間違えて話しかけ、未来がため息をつく。響はどこの世界でも手のかかる子らしい。

料理をしながら、月詠は静かにその様子を見たりして、関心している。

「凄い上手だね」

「うん、アスカは料理上手。アスカが作る物なら、切ちゃん好き嫌いないんだ」

「帰る前にレシピ教えてもらおう」

「うん、おすすめ」

そんな話をする家庭的な装者。

そして、

「デザートできましたっ向こうの姉さんも食べてください」

「ええ、いただきますわ」

そう言い、平行世界で生きていた妹から料理をもらう姉がいたり、「こつちの翼も細っぱいな、ちゃんと飯食わなきや、死んでも死にきれ

ないからな」

「そ、そんな意地悪言わないで」

「いや構わないよ。私からすれば、このやり取りはな……………元の世界で心配せないうよう、ちゃんと食事をとるよ」

「そんなやり取り、

「キヤロルちゃくんく」

「来るな」

「そんなこと言わないでよくこのお肉おいしいよ」

「こらっ、無理矢理食べさせ、ムグっ」

平和だなく……………

と思っていた時期がオレにありました。

基地内でのお泊りの際、平行装者達は戦慄していた。

「せ、先輩の部屋が、綺麗だ?!」

「そんなことってあり得るのッ」

「これが平行世界デスか!!」

「びっくり……………」

「皆が私のことをどう思っているかよくわかった」

全員が装者用の部屋、彼女達からしてもよく使う部屋が、綺麗なことに、驚愕していたが、少しだけ言いにくそうに隅にいる翼。そして装者達。

「いや、こっちの翼も片付けできないぞ」

「えっ、だけど、翼がいれば一部が分かりやすく、翼のスペースになる場所が見当たらないわよっ」

「マリア……………」

風鳴が遠い目をする中、翼は静かに、

「その……………」

その時、部屋をノックするアスカが現れ、紙袋を持って入る。

「ん、アスカか」

「翼、明日は一日日本回るんだろ。ほら」

「ああいつもすまない……………ああ、そう言えば頼んでいた下着は」

「ん、ああほれ。買って洗ったのがこれだ」

「ああすま」

「待て平行世界の私ッ」

「ハッ、しまっ」

　　ついついものやり取りをして、紙袋を取る翼。アスカも？マークだが、しばらくしてハッとなり、逃げようとするが、奏が首根っこ掴み、切歌、響が取り押さえる。一人だけ逃げ出すことは、許さない。

　　そして真っ赤になりながら、わなわなと震える風鳴。

　　彼女側の装者が中身を確認し出す。

「下着デス」

「まあ他に衣類あるけど……マジか平行」

「男の人、緒川さんだけじゃなく、龍崎さんまで……」

「デース……」

「うっ、うわああああああ。へ、平行の世界の私っ、それでも剣、防人かッ!？」

　　男性、しかも歳の近い男に下着を用意してもらったり、洗濯させたりして、風鳴は涙目で顔を真っ赤にしているが、すぐに顔を背けた翼。「仕方ない。緒川さんは忙しい、奏は派手な下着しか用意してくれない。気が付けばアスカに頼らなければいけなかった時期が長く、定着したんだ」

「先輩開き直ったぞ」

「ですけど少し心ここにあらずですね」

　　クリスとセレナが後ろで話す中、奏は照れながら、

「だって翼の奴、大人しいのばっかだから、冒険させてやろうと思っ
〜」

「奏の所為かッ」

「大本はだッ、平行世界の私とて、奏が悪くてもそれ以上言うなッ」

「照れる」

「照れるな」

　　そんな会話をするが、反撃に転じるのがこの世界の防人。

「そう言うが、そちらはどうなんだッ。替えの下着を探していたら飲

料水をこぼして、全てダメにして緒川さんに音速で頼まなければいけない事態ツ、一度や二度では無かったはずだ!!」

「!、それは」

「あつたんだな、そんなこと」

「主の切っ掛けだよ。アスカが買って用意する原因と云っていい。アスカはこの容姿だから、買ってても平気だからな。リディアン女子学院時は、変装で着てたからなおの事」

「…………その写真ある」

「後でね」

「携帯へし折るぞ幼なじみと平行世界の」

裏でそう言う中、まさかと思うが、

「まさかだが、飲料水の色が染みついた下着で、テレビに出たことはないだろうなツ」

「……………」

「おい、震えだしたぞそっちの先輩」

「ま、まさか、マジか、マジなのか……………」

「時にはマリアの替えの下着ですらこぼしてダメにして、マリアに迷惑をかけるんだ。やはり平行世界でも同じ過ちを犯していたか」

「ええ、あの時ばかり本気で困ったわよ……………たまたまアスカがそんなことがありそうだからって、念のために別に用意したり、すぐに替えを買えるよう、店を知っておいたりして事なきを得たわ……………」

「こっちは大急ぎで調べて、危なかったわ……………」

「なにより、夏場の日に出る、奴を倒してもらった際、すでに裸を見られたうえに、そのまま抱き着いたんだツ。いまさらだあああああ」

「…………え……………」

「おいテメどういことだおい」

「オレ悪くないオレ悪くないオレ悪くない」

赤面する風鳴の後ろで、クリスに襟を掴まれ、アスカは何度も主張する。

「…………あ、あなたの、彼の関係は、なんなの」

「防人語やめたぞ……………」

「わ、わた、私より……………ある」

「デデスッ!?!」

それに平行後輩組は驚き、調は少しうれしそうに胸を隠す。

「……………えへ」

「な、なにが違うが……………はっ」

すぐに切歌の方と暁を見比べると、

「やっぱり、少しだけこっちの切ちゃんより、あるッ」

「デデスッ」

「そ、それは……………」

照れながら二人して、セレナも見るが、幼くなっている年上のはずのセレナも、ある。

後輩達はその場に崩れ落ち、雪音が呆れていた。

「お前ら、別に気にすることじゃないだろ」

「先輩は持つてる側……………いや、まさかデスッ」

すぐにクリスと雪音を比べる為、メジャーを取り出し、叫び声と共に図った結果、

「へ、平行世界組が私達より育ってるッ」

「お腹周りも細いデス!!」

それに女子として驚くことだが、だが、

「違いがクリス先輩の方が大きいと思う、肌のつやもいい……………」

「これに龍崎さんが関わってるとしたら、聞きださないといけないデス」

「やめてやれ」

唯一の男性として、一人だけ帰ってる。それを聞き、どこにと聞くと、

「先輩のお隣さんデス!! きつと毎日ご飯作ってもらって今に至るデスッ」

「だからなの、龍崎さんなの!!? あの人の方なの」

「だから落ち着けて」

「……………まさか男の部屋に毎日通ってないよな?」

「そ、そんなわけあるか平行世界の私ッ」

そんなやり取りをしていた。

それからも、

「わ、私より、点数が高い……………」

「アスカと未来が、私の面倒見てくれてるから〜」

「彼奴頭いいからな」

切歌達も高いことに、暁達は驚く。正直に言う。

「龍崎さんだけ持って帰りたい」

「せめてレシピなど教えてもらいたい」

「とりあえず立花響は後でお仕置きさせろ平行世界」

「もう言っただけから、帰る時レシピノートくれるよ」

月詠に調がそう告げて、キャロルは少しお怒り気味。色々違いはあるけど、

「けど逆に言えば迷惑かけてるんだよ？ 勉強会の時、いつもご飯食べさせてもらってるんだ」

「……………確かに、彼奴に借りは、結構あるんだよな、わたし達は」

クリスの一言に、全員が考え込む。

「そんなに？」

「うん……………いつも他人より前に出て、傷付いて、それでも前にいるんだ」

「文句を言いたくとも、私達装者より、アスカの方が強い」

「そう、ね……………色々なものを、彼はいつも背負おうとして、甘えている自分があるんじゃないかって、時々思うわね」

平行世界の自分達を見ながら、もう一つの自分は、

「なら、明日は特訓するってのはどうだ」

「デースっ」

「ああ、別世界の自分が相手なら、何かより強くなる切っ掛けが掴めるかも知れん」

「それなら、いくらでも手を貸すよ♪」

そう言われ、それに全員が楽しく話し合う。

一人いるだけで、だいぶ違う世界でありながら、装者達の思いは変

わらず、明日は、空いた時間、模擬戦をする話になる。

最終日、交流会のようなものをしながら、お互いの平行世界同士仲はよく、奏とセレナも仲が良く、何事も無くことが進んでいる。

そうした様子を見ながら、未来も加わる中で、

「そう言えば響、夏休みの課題、いましてる?」

「……………課題?」

それは立花の方の響であり、ああああと叫び声を上げ、何か嫌な予感がする。

そしていま、

「お願いしますどうか龍崎さんを貸してくださいっ、このままじゃ向こうの未来に怒られるううううう」

「ダメダメダメダメ、アスカがいないと私の課題がッ」

両腕がメキメキ言う中、この幼なじみはと思う。

胸が当たってるのだが、もう感覚が無い為、このまま腕が取れるのを待つようだ。

「うおおおおおおお」

片方幼なじみではないはずだが、股にまで腕をはさみ、幼なじみと共に引きちぎるほど引つ張る。そろそろやばい。

「……………あと頼む」

クリス達にそう告げると、ゴギツと言う音と共に崩れ落ちる。

誰でもいいが、骨が外れるほど美少女に取り合いされたい奴がいれば変わってもらいたかった……………

こうして平行世界の装者との交流は終わりを告げた。

番外編・乙女な心

それはある夏の日に起きた出来事。

龍崎アスカは目を開けると、目の前にランジェリー姿の英霊がいた。

ブラとパンツは黒であり、透明なシャツを着ている。

アストルフオが幸せな顔して、自分に抱き着きながらそこにいた。

「ん…………アスカ……………」

龍崎アスカは悲鳴を上げた。

「アスカ、布団で縛らないで。ボクにそんな趣味は無いよっ。けど、アスカがそう言うのが好みなら……………」

「オレは何も聞こえない、親友がおかしいのは理性が無いから。オレは何も聞こえない」

なにげに上着が外されていて、もじもじするアストルフオ。

「チツ、人の兄になにしてる」

「一緒に寝ただけだよ、ボクはアスカの物だから。なにされてもいいからねっ」

「誤解を生むような言い方するなアストルフオっ」

というかなぜいるのだろう。そう思いながら朝食を作る中、自分の布団でなにかしようとして、キャロルに止められている。

クリスマスも現れ、なぜか調とセレナが朝っぱらから訪ねてきた。キャロルは嫌な顔をしていて、誰もいない時、自分の部屋でエルフナインと共に、ハンマーを持って、飯ができるのを持つ。

朝食を全員に振る舞いながら、食べ終え、すぐにアストルフオを見る。

「それで何しに来た」

「アスカとデートしたくって、マーリンにお願いしてきたんだ♪」
「「あの野郎……………」」

マリアがいたらショックを受けそうなくらい、セレナ、調までもが、クリスとキャロルと共に悪態をつく。

自分は吐血しそうなほど、アストルフオを見る。

「デートはできないが、遊びに行くことはできるぞ。みんなで行こうか」

「ふざけないでっ、ボクは君と二人っきりでデートしたいんだ!! 君と映画を見たり、君と遊園地行ったりしたいんだよアスカっ!!」

「ふざけないでください、そんな羨ましいことを許すと思いませんか？

シャルルマーニュ十二勇士。自分の世界に戻りなさい」

「そんなアーサー王の娘さんみたいな言い方しても、聞かないからねっ」

羨ましいのか、今度連れて行ってやろう。

そしてオレの腕に張り付き、嬉しそうに顔を埋める。

「アスカ行こう♪ ボクとデートだよデート♪」

「……………よく考えたら、ここにお前がいると、オレの力は制限かかるんだっただな」

「……………そだよ、だからデートしないとだめなのさ」

気のせいかな少し間があつたが、結局アストルフオとデートすることになり、調は手に持つコップを握りしめた。

セレナの瞳から完全に光は失われる。

思う事はある。だがアストルフオは親友で借りがあるので、多少は我慢できる。向こうもオレにその気はないのは百も承知だろう。

こうして着替えて出かけることになった。

人生とは小説より奇なり。人生でデートと言う名目の下、男と映画館に来たという悲しい真実に、オレは心が砕け散りそうになる。

なぜならばオレもアストルフオも女の子の衣装と言う、なんでさっ!?!と叫びたくなる事態であった。

しかも双子ファッシュョンと言うものであり、アストルフオは頬を赤

く染め、嬉しそうにポップコーンを持って席に座る。

オレらははたから見ればどうなんだろう？ はつきり言う。なぜこうなったツ。

あちなみに初めてのデートはジャック、次はアタランテです。それが唯一無二の救いだ。

「はあ」

そして見るのは、

(特撮映画)

アストルフオが楽しそうだからいいかと思いついて、後ろについてきているみんなも楽しそうだからいいだろう。

マリアと翼以外、未来を含めた装者が後を付けている。キャロルとエルフナインはいない。仕事だ。アストルフオは気づいていないのか、デートを楽しむ。

映画を見終えた後は、腕組みをして来るアストルフオ。遠くから舌打ちの音が聞こえた。気の所為であってほしいが、セレナじゃないよね？

その後は喫茶店で軽く飲み物を頼む。店員に何かお願いするアストルフオ。オレはアイスコーヒーかココアがいいのだが……………

「楽しみだねアスカ♪」

「？」

そしてしばらくして大きめの器に入った、トロピカルジュースのようなものがある。

ストローが二つ、ハートマークのストローでだ。俗に言えば、恋人、カップル用のストローで……………

「チツ、英霊風情が……………」

いま遠くから聞こえた声が、マリアの耳に入らないことを願いながら、それを静かに見る。

キラキラした目でオレを見るアストルフオ。ああこれはあれか、一

緒に飲もうと言うことか。

「断る権利は」

「いやだよアスカ」

そう上目遣いで呟くアストルフオ。女の子ならよかったアストルフオ。親友のはずのアストルフオ。どうしてこうなったアストルフオ。

渋々、片方のストローでジュースを飲みつくそうとするが、アストルフオも負けずと飲む。

飲み終えた後は、頬を赤くしながら、えへへ♪と微笑む。

「あの野郎……………」

「み、未来、セレナちゃんが怖いんだけど」

「わ、私達のタイミングが……………」

「デエスウ……………」

「……………」

「こつちもな、クリス、ギアは使うなよ」

「……………」

何か聴こえた。気のせいだ。

頼んだケーキが来た為、さっさと食べよう。

「アスカ」

「なんだアストルフオ」

「あーん♪」

そう言つて、フォークにケーキの欠片を突き出す。

瞬間、何かをフォークで刺す音と、視線が何重にも向けられている。

あーん、あーんか。別にいい、ジャックとアタランテで経験済みだし、これは響と未来とでもやったことがあるので、アストルフオのケーキを食べた。

「響さん、未来さん。いまお二人の休日関係で少し聞きたいことがあるんですが？」

「セレナちゃんなんか怖いよ、どうしたの？ 私にかした？」

「デスデスデスデス……」

「……………」

何も聞こえない。アストルフオにも自分のケーキを食わせたりした。その時、英霊がとまた聞こえたし、デスがDEATHと聞こえた気がした。

これもジャックやアタランテ、それに響や未来にもしたので抵抗は少ない。

背後から妙に話し声が聞こえる中、アストルフオはフォークを口にくわえて、うっとりしていた。きつと目の錯覚だ。

次は遊園地だ。ジャックとアタランテ、響と未来。だけじゃなく、セレナとも来たことがある。急に背後から声が聞こえなくなったが、相変わらず腕を組んでいるアストルフオ。

「次はね♪次はね♪」

まあ、楽しそうならそれでいい。アストルフオは大切な『友人』である。

そもそも、響達を守れているのも彼のおかげだ。少しくらいは我慢できる。なによりアストルフオも知っているはずだ。俺達は男同士なのだ。

なにより本当に楽しそうだ。

(なら、いいか)

そう思いながら、夕暮れ時までアストルフオの自由にさせていた。

遊園地の最後に、観覧車に乗る。

夕焼けを見ながら観覧車に乗る時、ついてくるみんながだいたい離れて乗っていたのを見ていた。

そんなことを考えながら、

「アスカ、楽しい？」

「ん、それは普通だな」

「むくどうしてそゆこと言うかな〜」

頬を膨らまして、前のめりでこちらを見るアストルフオ。少しお怒り気味だが、すぐに、

「ま、君は嘘つかない奴だから、仕方ないか」

「そう言うことだ」

そんな会話をしながら、アストルフオは夕焼けを見る。

「君と契約したのは偶然だけど、君は彼だったんだね」

「？ 前世か」

「ああそうだよ、けど、君は君。どっちも大切、ボクにとって、大切な人さ」

そう言って、静かに、

「アスカ」

「なんだアストルフオ」

「好きです」

……………

いまアストルフオは何を言った。

そう思った瞬間、アストルフオは頬を赤くして、恥ずかしそうに、
「君のことが好きです……………前の君も、いまの君も。ボクにとって大切で、大好きな人なんだ……………アスカ」

「……………アスト」

そして抱き着き、押し倒された。

すぐに何かを感じ取り、服に手を伸ばすアストルフオの手を掴む。
意外と強い。

「アストルフオっ!?!」

「もう……………もう我慢できないんだ。君が好き、好き好き大好きっ!!
この気持ちを抑えきれないんだアスカッ!!!」

そう言って、自分の服を脱ごうとするアストルフオ。それに首を振る。

「アストルフオッ、俺はお前のことを親友として見てるんだ!!」

「ボクは君のことを、恋愛対象として見てるんだッ!!!」

やめてくれアストルフオ。

「分かってるッ、君がボクのことをそういう目で見ていないことは分かっているッ。けど我慢できない、もうジャンヌに渡す気は無いっ。アスカ好きなんだ、ボクは君のことが好きで我慢できない!! 君無しじゃ生きてられないッ」

「アストルフオッ!?!」

そして静かに微笑む。

「大丈夫、痛いのはボクだけだから……アスカは天井のなにかを数えてれば終わるよ♪」

「ふぎけるなアストルフオッ」

「そう言うボクを、結局親友のままにしてくれる君のことが好き♪」

そう言いながら、何かしようとするが、そこに槍が舞い込んだ。

「なっ!?!」

それは旗を巻いた槍であり、それと共にアストルフオは避け、離れた瞬間、回収された。

そのまま高く飛び上がり、離れていく。

「アスカっ、アスカああああああああ」

んな恋人を連れ去られたように叫ぶな。

あと、クリス、切歌、調、セレナがその光景を目撃して、目から光が無くなったのは、気のせいだッ。

どこか、人気の無い公園に降り立つ。

静かに先ほどの光景を記憶から消しつつ、助けくれた人を見る。

「ありがとう、ジャンヌ」

「いえ、当然のことをしたまでです」

そう微笑むのは、聖女として、ルーラーとして存在する彼女だった。

「アストルフオも悪気が無いから困りものだ……オレは男なのに」

「……そうですね、貴方は男性です」

そう言いながら、静かに後ろから抱き着いてくる。その、背中に大きなものが触れているが、力が強い。

「…………ジャンヌ?」

「私はこの世界では聖女ではありませんし、私は私です」

「分かってるよね」

その言葉に黙り込み、静かに離れる。

「分かっています、貴方は彼であって彼でない。貴方は貴方です、アスカさん」

そう寂しそうに、それでもどこか、思い出を思い出すように呟く。

大切な、大事な思い。

「…………アスカさん」

「ジャンヌ?」

「やはりだめです、私だって」

そう言って、顔がすぐ側にあつた。

気付いた時には遅く、そして離れた。

「女の子です……………何度生まれ変わろうと、私はあなたを愛しています」
「!!」

時、
赤面するオレを見た瞬間、ジャンヌはそのまま続きをしようとした

「ぎっけんなっ」

そして槍と槍が激突する。

「どーして君がここにいるんだよっ、今回はボーイズラブが無いこの作品で、ボクとアスカのラブラブデートのはずなのになっ」

「そのようなメタ発言はやめなさいアストルフオっ」

「メタはどっちだッ、聖女の癖に、まだ彼とべったりで、別の彼ともべったりしようとしてたくせになっ」

「私だって女です!! これだけは、これだけは譲れませんっ!!」

「それはボクだって同じさっ、もう君に渡す気は無いッ」

「ふざけているのは貴方達ですっ」

その時、盾を持ったセレナがブーメランのように放ち、光速回転する刃を避ける二人。

「貴方達はこの世界の偉人ですらないのですから諦めて座かカルデアに帰りなさいッ、ここは異世界です、アスカさんは異世界の人ですッ。

貴方達には参加権すらないんです!!」

「イガリマの刃は魂や神様だってぶった斬るデスッ」

「行くよ」

「ともかく、アスカアアアアアアアアアアアアアアアアア」

クリスも現れ、もうだめだなと思いい、オレは静かに、眼を閉じた。瞬間、物凄い衝撃が放たれ、気を失った。

後日オレを含め、装者全員がお説教を受ける。

「……ちなみに、アタランテともあつたつて本当か」

「助けて」

キャロルとエルフナインも含め、全員から尋問を受ける我が身であつた。

番外編・ハロウィン。パニックシンフォギア

それはある日のことでした。

「ん……………」

母親になつた人から送られた、エルフナインとお揃いのパジャマを着ているキャロル。

けして響には見せないと心に決め、隣のベットで寝るエルフナインを見る。

そして異変に気づく。いまなら包丁の音、朝食のいい香りがするはずだが、それが無い。

「アスカ？」

そう首をかしげ、すぐに兄の部屋に入ると、

知らない男性が上着がずたずたで震えながら体軀座りしていた。

とりあえず錬金術をぶつ放したのは悪くないはずだ。

彼の名前は藤丸立香。カルデアと言う平行異世界、魔術師と言う組織に関わり、天文台の魔術師として、英霊達を纏め、人類史を守った者。

多くの英霊と契約し、ホムンクルスの少女と恋仲である彼は、龍崎アスカの前世とされる。

彼がいる限り、アスカは眠ったままであるらしい。

「それで、君はなぜここに？」

風鳴弦十郎がそう聞くと、彼は静かに、

「俺の世界では、いま十月で、ハロウィンが行われています」

急な話に、集められた全員が首をかしげた。小日向未来もいる。

だがセレナだけが、

「ハロウィンッ?!? いまそんなことになってるんですかッ」

というリアクションに、全員が驚く。

「お、落ち着きなさいセレナっ。なにをそんなに驚くの?」

「落ち着けません姉さんっ、ハロウィンですよハロウィンッ。英霊達が悪戯と称し、マスターを食らうと言うイベントデーですよっ!?!」

「そんなイベントじゃねえぞハロウインはッ!!」

クリスはそう叫ぶが、藤丸は震えている。

それに、

「そう言えば令呪はどうしたんですかッ、まさか全て使い切ったんですか」

「そうしなきゃ、キャス弧にね……今頃令呪が切れて、活動を再開してると思う」

それに青ざめるセレナ。響達はハロウインが違うイベントになっているため、理解が追いつかない一同。

「ハロウイン、お菓子をくれなきゃ、パパになってもらうぞと言いつ、マスターに襲い掛かれる日……全ての女性サーヴァントがみな、マスターの寝室へと向かってくる、イベントです」

「違う違う絶対違うッ」

「せ、セレナ？ 真面目な話をしてるのよ」

「私は至って真面目ですマリア姉さんッ」

そんな中、藤丸立香は語る。

ただの剣士、現在青のセイバー以外のアルトリア達に攫われ、行方不明。

プロトアーサーは、その聖剣で必死に逃げ、現在行方不明。

イグニスくん、カルデア絶対会議の中、彼は手を出さないことになるが、武蔵が血走った目でコスプレした彼を見ていたらしい。

自分、もはやその他大勢。

「ですからここに匿っていただきたいんです……オルタまで動き出して、もう安全な場所が無いんです」

「それは……しかし、君がいると、アスカくんは眠ったままなのが」

「それは困るデスッ」

「そうですよッ」

「だが、彼を帰せば」

「喰われます」

セレナのその言葉に全員が黙り込む。

「子供はサーヴァントの身体ではできませんが、彼はおそらくぼろぞうきんになります。確証を得て言います。彼は味の無くなったガムになっても食べられ続けて朝日を拝めず、食べられ続けられ、飽きることなく食われます」

「そんなにかッ」

「ケルトとギリシヤ、ローマをなめないでくださいッ、彼らは両方いけるんです」

「…………ヘラクレスはずつとイグニスくんのコスを静かに見てるから、警護隊はそつちを守るためにね。俺がフリーになったから、全員動いて」

そう力無く笑う。

だがその時、

「マスターあああッ」

「その声は」

「マス」

瞬間セレナは聖詠を口にし、即座に撃退する為、光速回転する盾が撃退した。

ランスロットは吹き飛び、壁にめり込み、蹴り踏みながら、その首筋に刃を向ける。セレナの盾は彼女と違い、刃物も付いた便利品なのだ。

「死になさい穀潰し」

「ま、待ちなさいっ。いや、この親を親とも思わない視線と、この肉より骨に響く重撃は……………」

「待つてくれ、ランスロットセイバーは味方だよっ」

藤丸と共に、セレナは奏とマリア、翼が羽交い絞めにして止めに入る。

トドメを刺そうと、セレナは抗う。

「放して姉さんっ、あんな奴が父親だなんて、あの人可哀想ですっ。ギャラハッド卿と共に、あれに引導を渡しますッ」

「セレナ落ち着いてっ」

「あれは女の敵ですっ!! もう二度と女性に手を出さないように、奴

の剣を叩き折りますッ!!」

「それだけは勘弁してくれッ」

セレナの憤慨にマリアは気を失いかけたが、すぐに気合いで持ち直し、ランスロットはマスターである藤丸立香の前にひぎをつく。

「マスター現状カルデアは、お菓子をくれてもマスターに悪戯するぞと言う状態で、マイルームはすでにそのようなことができるようにBなどが改造し、黒髭を初めとした男性サーヴァントは霊基を破壊しています」

「…………マジか」

「令呪がすでに使われていると知られてますから、ジャンヌオルタなどが動いています。イグニス君へ戦力として、我が青の王が。他の王は、剣士殿を連れています。羨ましい」

「おい最後ッ」

セレナがドスが聞いた声に、マリアが一瞬ブラックアウトしたが、すぐに切歌と調の声から生還する。

「ちなみにイグニスクンの方は平和そのもので、マシユと仲良くハロウィンパーティーしてます…………なぜか、バーサーカーの私もいて、イグニスクンヘクロエやイリヤがいるため、アサシンの彼がそっちの支持に出向き、司令塔が無く、現状マスターを守る人はおりません」
「ヘラクレスがそっちにいるから、戦力を割くしかないから…………」
「ガウエインは野菜を全てすり潰し、料理の準備などしてます」
「なにしてるんだよッ」

頭を抱える中、現在動けるサーヴァントで戦力を整えるしかない
と、書類を見始める中、

「あの〜」

「ん、なにかなお嬢さん」

「この糸、なんですか?」

響がランスロットに付いている糸を見ながら、それに全員が固まる。

「や・ら・れ・たッ!!」

瞬間、炎が空間を壊し、ランスロットは、

「マスター私の後ぐふっ」

マスターの盾になろうとしたランスロットだが、背後を見せた瞬間、セレナが背中を貫いた。

そのまま黄金の粒子になる様子に、満足そうな顔をする。

「ふう」

「すいません、あれは俺の戦力なんですけど」

「すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんっ」

マリアが謝りながら、ピンクの、アスカによく似た彼が現れた。

「アスカああああああああああああお菓子をくれても、いただくよおおおおおお」

「テメエかアストルフオオオオオオオオ」

今度はクリスが聖詠を歌い、ギアを纏い、銃を乱射する。屋内です。

「あつははははははは、アスカも連れていくぞおおおおお」

「アスカは渡さないデスローマの赤い人っ」

「大人しく来なさいッ、そしてパパになるのよ貴方はッ」

「オルタツ、自重して!!」

こうして藤丸立香は攫われかけた。だがステラと叫ぶ人の決死の一撃で、大半がダメージを負い、その隙に戻り、向こうで整えますと言って帰る。

ステラと叫んだ人は黄金の粒子になったが、どうにかなるらしい。

そしてアスカは、

「彼は明日まで眠ったままだから、それは許してくれ」

アーサー・ペンドラゴンが、騒ぎが終わり、ゆっくり現れた。彼は初めからここへ逃げ込んでいたらしい。

それを聞いてから、

「それじゃ、不肖ながら私がアスカの面倒見るデス」

「切ちゃん、私が面倒見るから、切ちゃんは休んでて」

「いえ、ランスロットさんを殺した私が反省の意味を込めて、アスカさんの面倒を」

「君たちも自重しなさい」

番外編・アスカの休日

朝日と共に、目が覚める。

背骨を伸ばし、肩を鳴らして起き上がる。隣の部屋で寝ている妹達を起こさず、朝食を作る、それが龍崎アスカの始まり。

「朝飯は、洋風でいいか」

ホットサンドでも作るかと、チーズや手作りベーコンを取り出しながら、卵など、マヨネーズを確認しながら、コーヒーの豆を挽く。

しばらくすると、キャロルが起きて、コーヒーを勝手に淹れて、ミルクと砂糖と共に飲む。

「おはよう」

「キャロル、歯を磨いて、顔洗ってからにしてくれよ」

「これ飲んだらな」

朝食を作るとエルフナインが起きて、そして、

「おはようさん」

「クリス」

隣の家からクリスが、長ズボンと少し大きめで肌が見えているシャツ姿で家に入ってくる。

いつも思うが、少しだけとはいえ外に出るうえ男の部屋だから気を付けてほしいのだが、男から言うのは駄目だろうと思いい何も言わず、普通に朝食を出す。

朝食を食べ終え後は、二人を仕事場へと連れていく。恥ずかしがるが気にも留めず、送り出すのが日課だ。

家に帰ると、クリスの姿は無く、少し探すと、

「ぶっ」

自分の部屋を開けたらクリスが寝ていて、寝相の悪いクリスがいた。先ほど言った通り、サイズが合っていない服装なため、見えかけた。

「く、クリスの奴。つけてないのか!」

もし年頃の男なら、もう襲いそうなほど無防備なクリス。男の部屋で無防備過ぎる。

(けどそう言うのをオレから言うのもな………マーリンの奴が、クリスに対してそう言う経験無い子なんだからリードしないとダメとか言ったら、本当のことだが言うなとか言って消し炭にしてたし………)

とりあえず放置していた食器を洗いながら、次に昼食の準備する。薫製などの物を作り、準備しなければいけない。

響や切歌が休日は来る為、準備しないと大変なのだ。マリアも来る際は、家庭的な一品を頼むため、その準備も考える。

そして、

「こんにちは」

「調、いらっしやい」

調がやってきて、一緒に料理の準備する。

調は休日、なにも無い日は絶対に来る。料理の為だ。

その際、髪留めなど使い、ミニポニーテールになる調。可愛らしいエプロンは、家に置いているのを使う。

時々洗濯もしてくれたり、少し助かる。キャロルやエルフナインのを自分がする時があるが、いつ嫌がれるか分からない。

ただオレの物もやるため、年頃の女の子が男物に触れる抵抗ないか、嫌悪してないか不安だ。

そう言えばセレナもミニポニーにするな。オレが一人でいる時、可愛かったなと言った日から、絶対にやるようになったが、気のせいだろうか。

「ふあああ………おはよう」

「クリス、二度寝するなよ」

「悪い悪い」

そう言い、オレの部屋から出て来るクリス。その姿はちゃんとしている。

クローゼットの一角やダンスは、クリスに占領されて、けして中を見るなど言われている。まさか下着までないよな？

そして、

「デスデス〜」

「アスカ」

「こんにちは」

よく食べる子達が保護者と共にやって来て、未来が来たおかげで、ご飯の準備が楽になる。未来は食器に料理をよそって出したりしていると、調がくんくんとおいを嗅ぐ。

「ん、いいにおい」

そう調が言う。もう薫製のにおいがしてるのかと思ったが、乾燥機をかけている。少しばかりにおいのもとを知るため、調へと顔を近づけた。

「！」

調の側でにおいを嗅ぐと、少し香りがする。

「うん、薫製の香りが移ったか」

そう呟くと、調も自分もと言わんばかりに、少し自分よりも近づいて、オレのにおいをくんかくんかとする。

「うん………いいにおい」

「そうか」

「うん………すごくいい………」

少し頬を赤くして、においをかぐ。気のせいか頬が赤い気がする。そして最後に、

「こんにちは」

「いらっしやい」

オシヤレフアツシヨンのセレナが、カバンを持ち込みながら、家を訪ねる。

主にマリアの方を優先するため、調ほど来ないが、セレナもよく、家に来るのだ。

「アスカさん、これを味見してください。どうぞ」

「ああ」

そう言い、オレはもぐもぐと渡されたタッパーの物をつまむ。なかなかおいしい。

そして別のタッパーから同じ料理を出して、みんなの分を用意し出す。

オレに渡すのは味見用なのだろうか、オレ以外が食べようとしたとき、必死に止めた。恥ずかしいのだろう。

食べる時、口に運ぶまで頬を赤くしているしね。

こうして朝食を食べながら、クリスの食い方を気にしつつ、食べ終えるのを待つ。

「アゝスカ♪」

いつものように響が抱き着いてくる。小さい頃から抱き着き癖でもあるのかと思うように、響のスキンシップなのだが、いまの年齢はまずい。

響はその、育ちがいい。柔らかいそれが身体に触れている。

「響離れろ」

「いゝやく勉強手伝って」

「またか……」

それよりも常識を覚えてほしい。オレが女の子みたいだからなのは知らないが、本当にくつついてくる。

少し心配だ。これは男に変に間違えられるのではないか？ 自分に気があると思われる、変なことになるのではないか？

てかかったな。オレが眠気とキレで脅した時、この子どうする気だった。本当にあのまま進んでいたら、きつと後悔しているだろう。

実際キスしたうえ、触れた。

お互い無かったことにしているが、別の形でオレは償わなければいけない。

まさかオレとそう言う関係になってもいいと、思っただろ。

「私も手伝ってほしいデスっ♪」

そう言っ、また同じように育っている子が、自分の物を考えず抱き着いてくる。

感触がはつきり分かる中で、気付かれないようにはがす。何度かしている調とセレナが見つめて来る。気のせいか、ヤンデレ空間の二人が重なるのは、気のせいだろう。

未来から、なぜか393と呼びたくなるオーラも感じ取る。あれは怖いんだ、本気でオレに女物着せたりする時、自分の下着なり見られ

たりしても動じない。てか、自分まで目の前で着替えだすと言う暴挙をした。

その時、オレのことをどう思ってるんだろう。本気で最近の女子が分からない。こんなに男に無防備で……今度司令や緒川さんに相談しよう。

オレならともかく、ほんと俺以外の男ならもうだめだろうな。みんな可愛いのに無防備過ぎるんだよ。

そんなことを思いながら、全員で勉強会。そしてオレはこの後は仕事がある。

仕事内容は、翼の部屋掃除だ。

脱ぎたての下着や、しわを作っではいけない衣類。読みかけの雑誌、飲みかけている飲み物。蓋を開けたままのものまである。

それを掃除して、洗濯したりと、仕方なくしている。と、

「ただいま」

「お帰り」

「アスカ、今日の分の洗濯物だが、いま平気か」

「ああ」

「なら少しシャワーを浴びるよ」

「軽めに食事もあるが」

「食べる」

そう話しながら、その場で上着を脱ぎながら、シャワー室へ向かう。買ったばかりのブラを付けていた翼。重宝しているようだ。男のオレはよく分からないから、使いやすくてよかった。

そして着替えを出すと共に、今さっき出た洗濯物を洗い干す。

さっぱりした翼は、軽めの食事をして、ほっとしている。読みかけの雑誌は分かりやすくしてあるため、文句を言わず、読みたいものを読んだりしている。

そして、

「ん？」

オレは先ほどの光景、シャワー室へ服を脱ぎながら向かう翼を思い

出す。

……

気づかれる前に仕事を終えて、いそいそと逃げていく。

こんな日々の中、勉強を見たり、未来も加わり料理を教えたり、調には裁縫も教えたりする。

平和な日々の中、

「やあ」

まずはこれをどうするか。

「時々思うけど君、女の子を部屋に入れておきながらなにもしないのは失礼だよ？ あの子、捕虜時代有るけど、なにも経験してない。そんな過去があるのにまだ守られたそれを、君が受け入れてあげなきゃいけない」

瞬間、すぐに横に跳ぶと、クリスが唐突に現れ、テーブル持参でマールリンを駆除する。

その後オレに掴みかかり、忘れるまでビンタ。殴られるよりマシか。

その後はクリスの部屋に行くと、響達がまだいて、勉強を教えあげることになる。軽めのおやつを作りながら、みんなでわいわいと楽しむ。

「今日は帰らないか」

「今日の飯は〜？」

家がある者は帰り、夕焼けの時刻。

クリスがソファアーでだらしなくだらけている。正直、大きめのシャツに着替えているため、見ようとすると見えるんじゃないかと思う。無防備過ぎるが、もう気にしない。

「ジャガイモ麺があったな、ジャガイモで麺ができるって話を聞いたことがあるからチャレンジしたんだ。それにしようか」

「ん〜」

あんかけのジャガイモ麺をすぐに作り、二人で食べる。

向かい合う為、その見え隠れするその様子に、まあ気にしない。
その後うまかったと言い、いまだ残るのだが、やはりラフでだらけ
ている。

(オジサン将来不安だよ)

オレが枯れてなかったら我慢の限界だよクリス。そう思いながら、
夜までお菓子を食わせたりして、帰るまで面倒を見る。

しばらくして帰り、静かにしていると、

「いらっしや〜」

「こんばんは……………」

ここそこそと、家庭料理を食べに、マリアが家を訪ねてきた。

マリアのご飯は、ほぼ朝食ですらホテルなどで済ますことになる。
忙しい為、切歌や調、セレナがいる家に帰れないのが日常なのだ。

毎日毎日お弁当などで、人が作った料理が食べたいが、夜遅く帰れ
ないし、開いてる店は無い。

だからオレの家に来ては、ご飯を食べる。

「ごめんなさい、実はお風呂も入りたいの。朝から暇が無くて」

「いいけど、いいの?」

「貴方だから」

そう聞きながら、お風呂は沸いているよと言い、せつかくだからフ
ルーツのミックスジュースを良く冷えた物を用意したりする。

さすがにバスローブなどではなく、普通の衣類で出て来るマリア
は、それを飲んだ後は、出された軽い食事を楽しむ。

「……………貴方って、家に居てくれると、安心するわね」

「褒め言葉として受け取るよ」

そう言いながら、明日の朝用に、料理の下準備をしている。

「……………本当にフリーなら、もらいたいわね」

なにかマリアが呟いた気がしたが、いまは肉の臭みを取る配分に神
経を使っていたため、聞こえなかった。

マリアが帰り、明日は生姜焼きでも朝作るかと思いながら、風呂に

入り、さっぱりしてミルクを飲む。本当なら酒を飲みたいが、まだ歳では無い。

少し静かだが、人の気配がするだけ、前の生活、前世よりマシだろう。

「……………なにげに楽しんでるんだろうなオレ」

そう思いながら、今度マリアに生姜焼きやしぐれ煮などの家庭料理を食べさせてやろう。なにげにいっぱい食べる響や切歌の様子も好きだが、マリアのような人に作るのも好きだ。

調、セレナ、未来も、そう言った料理を教えよう。調は様になっていて、その様子に、このままお嫁さんとかになれそうだと思う。きっとあの子の彼氏は幸せだろう。

「彼氏が……………」

そうベットに横になりながら、静かに、

「装者の彼氏って、どんな奴になるんだろうな……………」

いい奴以外認めない。司令と共に撃退しよう。

そう思いながら目を閉じる。

「その前に奏さんのウエディング姿が見たいな……………」

そんなことを呟いて、眠りにつく。

その時、メールが来たが、嫌な予感があったので無視しよう。きっと奏さんの気がするが無視しよう。明日が怖いけど……………

そんなそんな、休日であった。

番外編・リリイ

【諸君、私は、来た】

そう言いながら、何名かに囲まれたそれは天に吠えた。

【そして宣言した。ならば後は、実行あるのみ】

そう静かに叫び、蠢く業。

カルマがいま、動き出す。

【ふっはははははははッ!!】

——龍崎アスカ

「なんでいるんだよ……………」

そこにマーリンにより、都合よくされたらしく、同時に存在する、同じ魂を持つ者。

天文台の魔術師、藤丸立香と、ラーマとシータが合わさったような少年？だった。

もう魔の手が伸びてる。

「おお、可愛いなお前〜」

「あ、あのっ、む、胸が」

「小さいんだから気にすんなって♪ 男か？ このこの〜」
「うう……………」

現代服着ているが、少年らしく、奏さんに可愛がられている。カルデアでもあらしく、少し、家出に近い形で避難したらしい。

「最近女性サーヴァントがね……………怖くて、長く寝ていられないよ」

「マジか、何人？」

「旦那さんがいる人と子供以外、恋人とかの視線でね、マイルームっていったい……………そう言えば君の所為で、魅了効いてないのがバレて、一度本気で食われかけたよっ」

「悪い」

「一言っ!?!」

どうもカルデアではシグルドと呼ばれる時もあるれば、ジャンヌオル

タが独占しようとしたり、子供認定されたり、スカサハなどの大人な人には色々狙われたりする。

男もまあ、新選組にいつの間にか入っていたから、ノツブが色々騒ぎを起こしたり、気のせいかな物理的にも強くなるなど思いながら、

「ジークフリートでブリュンヒルデは回避しろ、バレたら死ぬぞ」

「真顔で言うのかツ、ということとは」

「マジだから言う、アルトリアズは」

「それは無銘の俺が生贄になるから、ライダーでも現れてね」

「ついにライダーで出て来たか、オルタ？」

「オルタオルタ」

「無事」

「……………」

顔を伏せたので伏せたおく。下手をすれば明日は我が身だから、アルトリアーフに交換性で突き合わされているらしい。

アーサーは無事で、イグニスくんは、いまのように奏系に可愛がられる。

「マリーとかにも可愛がられて、まあ心配なんだけど」

「マリーか……………」

「最近は何天とか、小さな子と一緒に多いけど、なにか未来は妾のものじゃとか言うし……………」

「知らない子だ」

「最近だとパールヴァアティーさんが来たら、エミヤが泡吹いて倒れて、いまここにいるんだ。あの人もイグニスを可愛がるから」

「……………」ああうん、そうか。イシユタルとパッションリップ達、せめてこの中に似てるか」

後者に似てると聞き、エミヤに胃薬か休薬を上げてやれと言っておく。ただ奏系はベットに連れて抱き枕にしようとするので、どうにか止めている。やめてやれよ。

「あー気持ちわかるわくなんか寒い日は持って行っていいだろ？」

「は、恥ずかしいです……………」

「お姉ちゃんと呼ぶデス」

「お姉ちゃんだよイグニスくん」

そんなことを言いながら、ここは夏場でも寒い山奥では無い為、かき氷を作るアスカ。

ぶつちやけ、その為に集まってたところにこれなのだ。

「……………かき氷はやっぱり湧き水からの自然氷が一番だな」

そう言い、わざわざ高いお金を使い、贅沢している。無論、司令室にいる人達分用意してるし、みんなシロップかけたりして食べている。

「おいしいデス〜」

「うんめえなかき氷」

「風情があるね〜」

「けど、湧き水はどうやって凍らしたの？」

「キャロルに頼んだ」

「キャロルちゃんが私達の為に」

「るっさいッ、暑いから俺だって氷菓子食いたくなるんだよっ」

そんな話をしながら、シロップを確認しながら食べている。オレはブルーハワイ味、なかなか果物味がしていいなこれ。

まあやりたかったのは、

「ほらエルフナイン」

「あ、アスカさんの舌が青いですっ」

したかっただけなんだけどね。

しかし市販のもんでも意外とうまいな。

「……………ん？」

なにげに有ったからこれにしたが、確かにシロップの入れ物だが、こんなん買ったか？

そう思った時、遅かった。

——
???

「えっ」

響を始め未来、装者と、藤丸立香は驚いた。司令室は震撼する。

「今日からお姉ちゃんデスっ」

「戻す気が無いと言う事実には絶望したッ」

そんな光景に、奏は、

「今日からあたし、アスカの姉になってこいつを育てる」

「奏ッ!？」

「元に戻す方法を見つけなさいッ」

とりあえず存分にもみくちやにしてから、いろんな仕事を終えて、司令として戻った弦十郎によって冷静になる装者達。

ちなみにその時のアスカ達は、もふもふしたペットをもふもふする園児レベルでもふもふされ、真っ赤になったり、青ざめたり、色々ありました。

「ここはもうお嫁にいけないと言えはいいのかな……………」

「翼がもらってくれるから安心しろ」

「少しは俺達の気持ちがあつたか」

奏とキャロルがそう言いながら、マリアは大きく咳をする。

「ともかく、これはいったい……………」

そう疑問に思いながら、ブルーハワイ味のかき氷を見るマリア。

そこに、

「無事ぐふっ」

突如現れた英霊を右フックで吹き飛ばすセレナ。だが心なしか幸せそうな英霊、ランスロットセイバーが現れた。

「無事か、マスターと龍崎アスカ殿……………」

「まずテメエが無事じゃねえよな」

「またですか穀潰し、今後こそ英霊の座から消し去ってあげます」

「落ち着くデスセレナっ」

「まだ罪状聞いてないっ」

「私は何もしてませんよっ」

そんな中、ランスロットの話では、謎の特異点が現れ、数名のサーヴァントが行方不明。

もしかすればアスカに変化があるかもしれないからと、動かせる者

を動かしたらしい。

「なぜ貴様だ」

「娘からもそう言われたが、私がメンバーの中で一番戦えるし、世に言う二軍と言うものだからとしか……………」

「マシユさんのことを娘と言うなツ!! 私達の中にあなたの血なんて流れていません穀潰し!!!」

「落ち着いてセレナ、セレナにもマシユにも流れてないよ。流れてるのはアーサー王の娘として育った王妃の娘と、ギャラハツドさんだけだよ」

なにげに奏に膝に乗せられているアスカ達であり、とりあえず、インカムがあるらしいので受け取ると、映像が現れる。

眼鏡を付け、少しだけ前髪で素顔を隠す少女。マシユだ。

『私達は貴方だけは親と認めません』

「マシユ落ち着いて」

藤丸立香も、ともかく話を聞きながら、アスカは少し前のめりになるが、すぐに奏が抱きしめる。後頭部に柔らかいものが当たるのだが、恥ずかしいのに、わざとだ。何も言わないぞ。

そうしていると、響が、

「ランスロットさん」

「なにかな可愛らしいお嬢さん」

「その糸はなんですか?」

「……………や・ら・れ」

「テメエはまたかッ」

言わせる前にそう叫ぶと、空間が割れ、無数の黒い何かが現れた為、すぐにセレナと協力して、ランスロットを叩き込む。

『ナイスですっ』

マシユから褒められたが、

「!? まだだっ」

瞬時に足元が黒く染まり、浮遊感が、

「アスカっ」

響が手を伸ばすが届かず、オレの視界が黒く染まった。

目が覚めると、ベッドの左右の柱に、手足がロープで繋がれている。

「な、なに」

「目が覚めたか」

そう言うクリスは、目の奥に光は無く、裸だった。

すぐに目を閉じようとするが、無理矢理目を開かせ、布団をかぶる。

「お前、私のこと、どう思う」

「なに言ってるのクリスっ、いまはそんなこと言ってる場合じゃないよ!!」

そう言った途端、

「そんなこと？ アハ」

そして狂うように笑いだし、静かに馬乗りになる。

「そんなこと、私が今までどんな気持ちだったか知らずにそんなこと？ ふざけるなッ」

そう言っつて、静かに女物になった服を引き裂く。

「く、くり」

「もういいッ、いままでそんなことされたりしたこともなかったし、できればちゃんとした手順でされたかったがもういいッ」

「や、やめ、やめてっ」

「るっせえ!! いまからお前はパパになるんだよッ」

そしてスカートの中に手を入れられる感覚と共に、視界が塞がれた
.....

「はっ、夢.....どんな悪夢だ」

そう思った、変な夢だ。手足を動かそうとしたが、

「あれ?」

夢の中と同じ状態であり、そして、

「! す、スカートの中」

少しスースーする。短パンが、無い!?

そうして少し足をそろえ、なんとかしようとするが、

【いいね、その顔、その反応。視聴率がうなぎ上りだよ】

その声が見ると、短パンを掲げ、玉座に座る。一つの存在。
「お、お前は」

「そう、君は知っている。FGOをしていた君ならば、私を知っている」

「リヨぐだ子っ!?!」

スポットライトが当たると共に、ワイン片手に現れた人類悪（笑）は、

「そんな可愛らしい格好をしておきながら、中身は短パンなど私は許さん。これは素材として活用させてもらい、脱がせている時の叫び声は私のアラームに使わせてもらおう」

「なに叫んだ自分っ」

そんなことを言いながら、リヨぐだ子は、令呪を構え、静かに呼び出す。

セイバー武蔵、ライダーメイヴ、キャスターメディアが現れた。

「我が鯖は、本来別平行世界のカルデアにいるものだが、此度の聖戦に参加するため、こちらの軍勢に回った」

「な、なんだと」

「無論、この後滅茶苦茶にしていると、私は認めている。その時は18になるが」

「やめろよッ!!」

「やめないよッ!!」

そして青い色の薬瓶を見ながら、その色に覚えがあり、金色の杯がある。それは、

「まさか」

「君の考える通り、私は聖杯のバックアップを使い、若返りの霊薬を、ブルーハワイと交換して用意したのさ」

「なんでブルーハワイっ!?!」

「もっと特別な品もあるよおお、君用に魂の耐性をぶっばする為に、この私が聖杯を使い作った、ストロベリー味のかき氷を用意しておくよ」

「なにか仕込まれてそう」

「食べればもう頭の中が真っ白、なにされても大人しいよ武蔵」
「……………」

静かに口元を釣り上げる武蔵。つていうか全員がぐだ子と同じ位置に来て、パンツを隠す。

その様子を愉悅に見るぐだ子。

だが、

『残念ながらそこまです、平行世界の先輩』

そう告げると共に、光の槍が全てを壊す。

「ぬっ、槍トリアか」

『違います』

「アスカ、無事かつ」

「奏っ」

「お姉ちゃんと呼べッ」

「真顔でボケンなッ」

だが衝撃で拘束が外れ、急いで走る。

「はあ……………はあ……………男の娘、走る姿」

その時、炎の矢が無数放たれる。それと共に、左右対称の黒白、中華の比翼が放たれた。

それは、

「すまない、戦えるサーヴァントに来てもらうのに時間がかかった」

「クロエちゃん登場」

「メルシイ、頑張って開拓するよ」

「ぐだ子のサーヴァントっ!?!」

「いや、FGOを一部知らないことになっていたな。あれは私が生み出し、失敗した幻霊、ポール・バニヤン……………私のロリっ子だ」

「まだ言うかつ、この子は俺の、俺達の仲間だッ!!」

「解体するねおかあさんっ」

「ジャック、オレのジャック!!」

「君も落ち着けっ」

アリスもいて、クロエは唇を舐める。

「援護よろしくね♪ イグニス」

「はい、任せてくださいクロエさん」

「……………そのあと、ぐふふ」

「敵は身内にいるって辛い」

「頑張りなさい」

マリアが藤丸を励ます中、幼いプラス少女服のイグニスを見た瞬間、全てを斬り払うのは、二刀流最強の剣士、武蔵だった。

「武蔵よ、手に入れたくば、戦うのだ」

「はいマスター……………」

「せっかくの可愛い勇士ちゃん♪ たっぷり可愛がってあげなきや♪」

「ジャック、バニヤン、ライム、イリヤ、クロエ、イグニス。装者達の援護だ」

「来るわよマスター」

「巨大な剣、天ノ逆燐が放たれるが、ぐだ子は、

「無駄無駄無駄無駄アアアアアアアアアアアア」

その時、巨大な盾が剣を防ぎ、それにモニターのマシユは驚く。

「短パンこそ、至高の一品」

「彼女が、我らの最強サーヴァント……………中の人マシユだ」

「なかなかいいチョイスです、ですが絶対領域の無いのがマイナス点です。イグニスくんは絶対に持ち帰ります」

そう言いながら、盾を構え現れたマシユ。モニターのマシユは何も言わないが、同じマシユだ。いや違う。

「君達か、異世界の歌姫、装者達よ」

「三等身の人っ!?!」

「貴様が全ての元凶かつ」

翼の問いかけに、静かに笑う。

「私はね、全てのユーザーの代わりに運営と戦う者。リヨぐだ子」
「運営?」

響が首をかしげるが、それに笑いながら、

「知っているぞシンフォギア装者。小日向未来やグレビツキーなどで、ユーザーから金をむしり取り、そのメモリアルで多くのガチャ勢

を生み出す所業を」

「???

「新参者がっ、真なるガチャ勢たる我に戦いを挑むとは、いまこそ我が力を持って、レアリティ5を超えた、6を我が手で生み出してくれようっ」

そう言い、武蔵とメデイア、メイヴが構え、マシユが静かに構える。

「そしてその後、アストルフオきゅんを呼び出して、ロリアストルフオきゅんやイグニスきゅん、ロリイグニスきゅんとのからみ。このまま18へと進化させる」

「なんだか分からないけど、そんなことはさせませんッ」

「アスカは下がってるっ、ここは私達らがやるッ」

というわけで下がる。だって後衛の方がいい。

弓矢を取り出し、剣を矢に変える。クロエも側に来て、イグニスも矢を構える。

結果、まあ簡単だった。

武蔵もメイヴも、遠距離攻撃に耐えられなかったが、武蔵は満足そうに倒される。

だが中の人マシユの鉄壁の防衛が、リヨぐだ子を守っていた。

しかし、響の一撃が放たれる。

「くっ、シヨタ鯖の為に、ここは耐えきるッ」

「アスカ達は渡さない」

「アスカをより幼くして、可愛がろうよ。いまならベビー服もあるよ」

「……………そんなことはさせないッ」

間がある気がしたが気にしない。

結局全ての攻撃は受け止められなかった。

「これがビツキーかああああああああああ」

引き飛ばされる元凶は、悲しみの中に消し飛んだ。

こうして全てが、

「えっ」

「いや、君の耐性の所為で、解毒薬が役に立たない。一日はそのままだ

ね」

「母上っ、解毒薬を返してください!!」

「……………」

マーリンからそう言われ、イグニスは可愛がりたい母心故に、解毒薬を飲ませてもらえない。その時背後から、未来がそつと抱きしめて来る。

耳元で静かに、

「おめかしの時間だよ……………」

「……………」

その後の記憶は無く、みんなが何か頬を赤くしている。

記憶を閉じ込めて、こうして事件は、

【……………私は要望有る限り、アスカ・リリイ達の為に、また舞い戻る】

そう言い、瓦礫から這い出るリヨぐだ子だが、その背後に、

「くすっ」

「えっ?」

紅蓮の炎が集まりながら、リヨぐだ子の背後に、

「あなたはきよ」

言い終える前に、全てが炎に飲まれる中、静かに微笑む。

白い着物姿の少女は、静かに映像データだけを懐にしまい。

「ああ可愛い……………私の、私だけの魂、旦那様♪」

そう静かに告げながら、炎と共に消えていく……………

番外編・しないシンフオギア

『ある日のカルデア』

赤い髪をなびかせる、小さな少年イグニスは、少しだけサーヴァントとして鍛えようとレイシフトさせてもらい、狩りをしていた。

火を宿す矢は、見た相手へ、的確な意思の下、けして外れない矢として放たれる。

これでもキャスターであり、矢を放つやり方は、どちらかと言うと、魔力使用する方法である。弓矢を本業に使う弓兵の方々からすれば邪道だろうと思っていたが、カルデアでまともに弓矢を使う者は少ない。

「……………」

その時、サーヴァントの気配に気づく。この気配に覚えがあるので、森を駆ける。

駆け抜けたら、同じようにマスターに呼ばれたサーヴァント。

キャスター玉藻の前さんがそこにいた。

「ミコ？ イグニスくんではございませんか？」

「こんにちは、キャス弧さん」

ぺこつと頭を下げた少年に、日向で休む、狐の尾を持つ、綺麗な青い着物を着たキャス弧。

すぐそばに川もあり、狩った獲物の処置をした後、隣に座つていいか聞き、座る。

そして、少しちらちら見てしまう。

「おやおや、このモフモフ尻尾を触りたいんですか？」

「！ そ、それは……………はい」

もじもじしながら、素直に頷くその姿に、内心可愛いと思いつながら、モフっていいと許可を出してあげた。

少し恥ずかしそうにする仕草をしながらも、大きな尻尾に顔を埋める。

そして、

「おいしいデーリースーリーっ」

口から光でも放つように叫ぶ切歌。クリスや響、セレナもまたもぐもぐ食べて、調はひそかにVサイン。

「アスカ、今日の料理、どうだったかな？」

「ん、よく使ってるんだろう。毎日上達してるよ調」

「アスカのおかげ、ありがとう」

「いや、調がよく聞いて、学ぶからだよ。はい」

そう言っ、お味噌などを入れるパックなど、それは、

「これって、アスカお手製のぬか漬け？」

「調なら毎日面倒見て、おいしいごはん作るからな。前々からこれ使った料理、気に入ってるみたいだし」

「ありがとうアスカっ」

そう言い、アスカが長年愛用する物を分けてもらいながら、調は嬉しそうに微笑む。まるで一人前と認められたようで嬉しいのだ。

「裁縫も簡単な物ならできるし、調はいいお嫁さんになるよ」

「！」

それに驚きながら、少しだけ嬉しそうに、頬を赤くする。

（できれば、アスカの……って、このぬかってアスカが長年使ってたぬか。アスカでできた……）

何者かの手により、純粹と屈折した光を宿しながら、アスカを見る調であった。

『おさんどん・2』

「アスカ……遅くにごめんなさい」

「マリア」

「貴方に会いたかったの……アスカ」

そして部屋に入っ……

「はああ……おいしい……」

しみじみ、オニオンスープなど、軽めの料理を食べて落ち着くマリア。

いつも楽屋のお弁当やケータリングばかり、料理番組の料理ばかりで、

(アスカの作る、こういう素朴な手料理はなかなか食べれないのよね) とはいえ、アスカは男性で、隣にクリスマスがいる。このことがバレるわけにはいかないので真夜中に忍び込むように訪れる。

「調もこういった手料理覚えて来てるのに」

「あの子が起きてる時間は仕事なの……………ごめんなさい」

「ま、いいさ。ゆつくりしていいから」

「ありがとう」

そう言ってこちらを微笑ましく見るアスカに、お皿を空にしたマリアは、

「? なにか顔についてるかしら?」

「いや、幸せそうに食べてるマリアが可愛いなくって」

「!!」 あ、あなたっ、そういうことは他の人に言いなさいっ」

そう言うものの、悪い気はせず、結局おかわりするマリアであった。

『おさんどん・3』

調が軽く漬けたぬか漬けを持ってきたので、試食する。

簡単な野菜など、軽く切ったり焼いたりして、おいしくいただく。

「うんうまい」

「よかった。アスカに食べてほしくって、頑張った」

「料理は食べてくれる人のことを思うからな。切歌達にも食べさせな
きや」

「うん、愛情や色々入れたから、これはアスカのことを思って作った」

「そうか、嬉しいよ調」

「うん」

一口一口、しっかり味わって食べるアスカを、静かに見つめる調。
それに静かに……………

「ん」

「どうしたのクリスマスちゃん?」

「いや、いまフィーネが笑った気がした」
「なんで？」

『カルデア警護隊』

今日は玉藻の前であり、親御さんによる嚴重注意を任せる。

あと少しで危険だったが、ヘラクレスが現れ、人類悪と戦っていたため、事なきを得た。

被害者になりかけていたが、なにがあつたか分からず、いまも子供達と遊んでいる。

「はあ、いつからこんなになったんだかね」

緑茶さんがそう愚痴りながら、紅茶はそう言うなと言う目で睨む。

一応彼が狩った獲物を調理している。

紅い槍の兄貴は仕方ないだろと言う話をしながら、ただの剣士やアーサーである彼もこの部隊にいた。

最近の仕事は、イグニスを狙う者、マスターを狙う者と戦う日々。

少年イグニスは近い年に近いサーヴァントと遊んでいる。

「ランサー」

「あ……………」

そうしているとイグニスは、一人でいた。メドゥーサランサーを見つけて、話している。

その後、頬を赤くするメドゥーサランサーの手を握り、一緒に本を読んだりと、

「おいお宅らの魂は、女に手出さなきや気が済まないのか？」

「私は関係ないッ」

「俺は彼奴だけだ」

「私は関係ないはず」

よく見ると遊んでいる女の子サーヴァント達も、イグニスに対して、頬を赤くしている。

兄貴はおいッと思いつながら、そこにマッシュがやってきて、少し話した後で、その頭を撫でている。イグニスは少し恥ずかしそうにしていた。

そしてマシユの顔に、少し妙な気配を感じたが、その前に物陰から
見ている武蔵がいたので、嚴重注意することにして捕縛。

「見るのもだめなのツ!」

「そもそもどういいう目線で見てた」

「……………えへっ」

『兄妹仲良く』

「眠い……………」

「ほら、まだ洗い終えてないぞ」

風呂場の中、妹達は疲れ切り、風呂に入れたのだが、眠そうな顔で、
二人の面倒を見る。

「あつ、こらキャロル湯船で寝るな。エルフナイン、ああつたく」

身体や頭を洗い、湯船で身体を温め、身体を拭いて服を着せ、寝か
せた。

「だけだつ、なんつのやましい感情は無いつ」

「ワタシはオマエをコロス」

エルフナインは翌朝、兄に面倒を見られたことに、顔を真っ赤に染
めた。キャロルは何も言わないが、頬は赤かった。

仕事終わりで寝不足のため、色々アスカにやってもらい、クリスは
それを知り、お仕置きをしているのである。

だが、

「俺は責任取ってもらおう気だからいいけどな」

「!?!」

ちなみにアスカはボコボコにされ、気を失っていて聞いてない。

『カルデアでのアストルフオ』

「……………アストルフオ?」

「ねえマスター……………ボクね、我慢できないんだ」

お風呂場（色々あって個室）でシャワーを浴びて、湯船につかって
いたら、アストルフオがタオルを巻いて入ってきた。（ちなみに女の
子巻き）

「恥ずかしいけどね、もう我慢できない。この小説のタグにボーイズがあるから、いいよね？ マスター……………」

頬を赤くして、静かにタオルを外すが、それでマスター藤丸立香が感じるのは、恐怖だ。

「ボクの初めてを、受けと」

「令呪をもって命ずるッ」

瞬間、何名かの女性サーヴァントが令呪使用を察して、全員動き出し、カルデア警護隊が動く事になる。

この話は花の魔術師経由でアスカが知り、ガクガク震えながらなんぞでこうなるのと叫んだ。

『風鳴家』

それはある日のことであり、翼に拉致られ、家に呼ばれた。

目の前にいるのは、八紘。翼の父親である。

「……………あの、どうしてオレは呼ばれたんですか」

「……………」

テーブル一つ空いた空間から放たれる威圧の中、静かに、

「……………君は、責任と言う言葉を知っているかい？」

(アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア)

セミの鳴き声が、恐怖の音色に聞こえる今日この頃です。

『カルデアの聖女』

「……………」

アストルフオの部屋から、アスカの衣類を持って出ていく様子を、オルタが目撃して固まった。

『トナカイさん』

「あれは、ジークフリートさん」

彼の竜殺しは、大きな荷物をそりに乗せ、静かにランニングしている。

大きな荷物を難なく、いや、サーヴァントの限界を超えて運べるほ

ど鍛えている様子に、自分も頑張ろうとイグニスは決意する。
そして、

「次のクリスマスに間に合わせねばならない……………」
そうジークフリートは呟き、荷物をソリに乗せ、走り出す。

『快傑☆うたずきん!』

司令官弦十郎のおかげでうやむやにすることができたアスカは、学校で静かにぼーとしていた。

「ん」

と、女子生徒がわいわいきやあきやあと楽しそうに会話している。その手には少女漫画。

「なんだあれ?」

「ん、龍崎。快傑☆うたずきん知らないのか?」

男子生徒の知り合いがそう呟き、それにああと、

(確か装者のこと隠すため、都市伝説化を図った政府の物語だっけ)

事件ある場所で歌が聴こえ、人を助ける女の子。装者のこれらの情報を元に少女漫画にして、都市伝説のように隠すのが狙いだが、どうも売れているらしい。

そんな話を聞いたため、どんな内容か確認するため、帰り道書店で少し様子を見る。

「予約制? 新刊購入まで在庫なしって」

そんなに売れてるのかと思いつながら、家に帰り、パソコンを立ち上げ、内容をざっと確認する。

「……………」

その中で、アニメ化第三期決定であり、玩具も売れているが、

「いや剣から双剣になったりするのって少女対象の作品のおもちやじゃないよな? 特撮系と間違えたかオレ?」

三期もやるの?と思いつながら、主人公と同じ人気があるキャラのスピンオフも決定すると言う事態であり、内容も、アルケミー少女と……………

「エルフナイン? これってエルフナインがモチーフだよなつ。双子

の姉が道を踏み外しているってエルフナインだなこの子」

ボクっ子と言うカテゴリーで人気があり、兄からしたらとても複雑な状態になっていて、内容平気だよなと思ったら、

「……………うたずきん達を初めとした少女たちを守る、謎の剣士ってオレだよな」

吐血しそうなほど内容が恋愛面であり、表は優しく、人当たりの良い男性だが、うたずきん達の事件には、冷酷なほど冷たい剣士になり、何度も少女達とぶつかり合う。

少女達はそんな剣士の心に触れ、大なり小なり恋愛面になりかけたリ、表の方で意識したりしてたりと、まあいい。恋愛漫画だから仕方ない。

「これって誰が考えてるんだよ……………」

そう思いながら、パソコンを閉じた。

「ん〜ここは少し悲劇的に書こうじゃないかつ」

「ふんツ、読みたいか、ならば書こうじゃないかつ。我らが作品をな!!」

「最近の流行りはっと」

裏で英霊が二人と花の奴が好き勝手に手を貸していることを、彼とカルデアは知らない。

『アタランテのその後』

「アタランテっ♪」

「ジャックか」

「お茶会するのだわ♪」

「アタランテさんもどうですか」

「ああ、参加させてもらおう」

アスカの下でジャックと仲良くなり、彼女はこうして子供達と触れ合うのだが、

「そろそろ一言、警告するか」

カルデア警護隊は常に戦力を募集している。

『歌姫の家族』

「辛いデス」

「……………」

「アスカさん……………」

そう三人が相談しに来た。けして本人には知られてはいけない相談。それはテーブルの上に置かれている雑誌。

できる女性マリアとしてメディアに取り上げられている。

だが我々は知っている。

「マリア姉さん恋どころか、初恋だってしていません。なのに恋の駆け引きなどの歌を聴くと」

「切なくなる……………」

「悲しいデス……………」

（ごめん、それをオレに相談されること自体悲しいことと思うんだけど）

実の妹から全否定され、義理の妹みたいな二人から悲しいと言われるマリア。

「あーマリアの周りには、そのね、いい男いないからね」

「アスカさんくらいですね……………渡しません」

「うん……………」

「デス……………」

最後のセレナが言った言葉にはん？と聞こえていない。いまはヘッドホンを付けながらマリアの歌を聴いているのだから、もう少し声を高くしてほしい。

「そのね、曲の歌詞にとにかく言うのはね、オレじゃなくって制作会社もとい、ダミーカンパニーだから司令か緒川さんに言うしかないね」
「ですけど悲しいことはそれだけに終わらないんです」

セレナがそう言い、とあるスレを見せる。それにオレは目頭が……………

「内容が全部マリア姉さんの熱狂的なファンであり、姉さんと結婚したいと言う女性ファンが多いんですアスカさん。実の妹としてどう

すればいいでしょうか」

「……………」

「姉さんが頑張って働いているのは好きです、テレビで歌い、色々な人に歌を送るマリア姉さんは好きです。ですけどこれは少し」

「歌の内容も、恋の話が多いデス。マリアは恋してないデス」

「悲しい」

「緒川さーんさーんさーん」

マリアの方向性について少し話し合う必要が出たので連絡する。

セレナ達は静かに、どうすればいいんだろうと真剣に考えだす。マリアがこれを知ったら少しへこむ……………少しに収まらないか。

「第一、この夜遅く自分の為に料理を作ってくれるって」

「現実味だそうとしてる感が半端ないデス」

「うん……………」

（あれ、オレのエピソード取り出す辺り、マリアだいぶ追い詰められてない？）

色々愚痴を聞きながら、妹分や妹の心配は続く。

セレナ・誕生日

昔々、ある塔に閉じ込められた姫様がいました。

「番外編でお姫様役ですか……………」

姫役と言うことで、相手役がいることに、少しそわそわしながら、頬を赤くして唯一ある窓から外を眺めています。

綺麗な白いドレスを着込み、いつ相手役が来てもいいように、はしご用のロープなど、ワイヤーや、ともかく色々準備しながら、少し楽しみに待つ。

このまま塔から攫ってくれる相手役。王子様を楽しみに待っていると、

「姫えええ、姫はここかつ!!?」

そう男の声が聴こえ、大地を見た。

「この父、ランスロットが」

バーン……………」

セレナ姫はスナイパーライフルでヘッドショットで湖の騎士を撃ち、躊躇いも迷いも無く、窓から撃った。

「私は貴方を待っているわけではない、消えてください永久に……………」
そう言っ、リロードして窓際に置いておく。余計なものが来た場合、撃たなければいけない為の処置として、リロード済みのライフルを置いてある。

「王子様が来てもいいように、火薬のにおいは嫌なのに……………」

そう呟きながら、とりあえず起き上がらない様子を確認して、奥に戻ると、

馬の足音が聞こえる。

セレナ姫の胸が高鳴る。彼は騎乗スキルA+がもとになっている。ならばと、

「王子様……………」

そう思い、ぱつと窓の外を見る。

そこに、

「セレナっ」

白馬に乗ったマリア姫がそこにいて、

「あつ、うん。マリア姉さん」

「明らかに残念がられてるっ!?!」

男装の麗人、マリア・カデンツァ・イヴの名は伊達で無いほどに似合った、王子様が現れ、白馬で殻潰しを踏みつぶして、地面に下りる。

「セレナ、貴方を助けに来たわっ。さあ、いまからロープなりなんなり下してっ」

「ごめんなさいマリア姉さん、そう言った物はここにはないの」「なんですってっ」

ロープなどを奥に隠しながら、セレナ姫はそう言い、マリア姫はぐぬぬとうなる。

だがそこに、

「デース、ここは」

「私達にお任せ」

二人の妖精役として、シンフォギアを纏う二人が現れ、マリアはよしと言う顔、セレナは余計な状態でと言う顔になる。

「待って、いくらなんでもおかしいっ。妖精役なんて出てこないはずですっ」

「ここから塔までは百階ほど離れています。なにげに会話が成立していること自体がおかしいため、ここからは会話は成立しません」

「ご都合主義デース」

「いまさらッ」

拡声器を探し出す姫であるが、その前に窓際からワイヤーが張られた為、すぐに砕いて外す。

「いま引っかかったのに外れたデースっ」

「セレナ、いま助けに行くわよっ」

「絶対に邪魔してやる」

妖精二人は黒いオーラを纏い、イグナイト化する中で、どうするかアイテムを探す。

手りゆう弾、閃光弾、煙幕などがあるが、姉に対して使うのはいささか抵抗がある。

仕方ない、スイッチを押すと、

「なっ、なにっ!? ドラゴン!?!」

「ワイバーンデスっ」

「ワイバーンが放たれた!!」

「ごめんなさいと塔の内部で誤る姫。

外では炎が舞い上がり、銀の腕を振るうマリア姫は、必ず妹を助けようとするが、また塔からミサイルが発射されたりと、少し黒焦げになるマリア。

「く、なんなのよこの城塞のような塔はっ」

「! あ、あれは」

その時ランスロットが復活して起き上がると、空を見る。

空に何かが飛翔していた。

あれは、

【ガルルルル】

「あれはランスロット（狂）っ。奴め、まさか戦闘機を使うかつ」

「なんで円卓の騎士が近代の兵器を使うのよっ」

「私の宝具は、手に持ったり、所持したりした物を自分の武器に変える宝具なのだ!! 奴は過去の聖杯戦争で手に入れた戦闘機をつか」

窓からバズーカが放たれ、撃墜され、それがこっちに落ちて来る。

「「「なっ」」」

爆発音を聞きながら、姫はため息をつく。

ともかく障害はこれではどうにかなったはず。そう思っていると、また馬の足音が鳴り響く。

乾燥機をかけ、火薬のニオイを外に追い出しながら、窓から顔を出す、

「私だよセレナちゃんっ」

「ひーびーきーきーきーんー」

違う、そうじゃないと言わんばかりに窓際の淵を握りしめる姫。

だが、王子ファッシュョンの響王子は、馬から降りると、

「待ってました響王子」

「お前のヒロインはこっちだ」

エルフナインとキャロル。二人が妖精の格好で現れ、えつと驚く響。

「あれ、セレナちゃんの王子役じゃないの？」

「いや、お前のヒロインは」

「クリスマス姫です」

そして花の棺桶に眠らされたクリスマス姫がそこにいて、望遠鏡で様子を見るセレナ姫。

「クリスマスちゃんっ、いったいどうしたの!？」

「悪い魔女の所為で永い眠りについてるから、急いでキスして目を覚まさせろ」

そう言うキャロルの後ろで、薬品の空を捨てる。

それを聞き、響はえええええと悲鳴を上げるが、

「クリスマスちゃん………わかったよ、私はやるっ。へいき、へっちらだああああ」

そう言つて、眠るクリスマスへ顔を近づけ、目を瞑る。

翼黒子が録画スイッチが分からず、奏黒子が代わりに押す中、セレナ姫達もその様子を見守っている。

すると、

「待って響っ」

「えっ、未来!？」

王子ファッシュョンの未来が現れ、静かに、

「クリスマスにキスしないで響っ、響は私と結婚する役なんだよ!!」
「ええ〜」

「それにクリスマスがいないとだめなら………頑張るっ」

「なにを!!？」

「ともかく、響がキスするくらいなら、私がするっ」

アクシズ事変 変わった世界はいまの世界

立花響、聖遺物ガングニール。

へいきへつちやらシンフォギアヒロイン。抑止力とは幼なじみであり、その所為で女装写真など幼い頃の物も持ち、女子力を失う代わりに、そこそこの点は取れるほど、勉強を見てもらった。

オリ主の家族ぐるみで仲が良く、父親事件の際は話を聞きつけたオリ主母がぶん殴り、実の夫を監視役に、マグロ船に乗せて頭を冷やさせる。

家に立花家を避難させたり、オリ主による介入により、事件の犠牲者。少なくともバツシングは早い段階で抑え込まれたため、いじめはない。

つい言ってしまった先輩との事件も、その先輩は後々で助かった人は悪くないと気づくが、なかなか言い出せないところ、オリ主が空気をぶち壊すと言う身を削る行為のおかげで勢いで誤ることができ、悲しい記憶だけでない学生生活を送る。

作るよりも食べる派であり、オリ主の所為で余計にその傾向が高くなる。

代わりにガングニール装者として鍛錬し合う中なので、素の状態でも大人とも戦えるほど武術を会得。

彼のことは男性と言うより、すでにいて当たり前と言う考え方の為、恋仲など深く考えたことは無かった。ある一件を除いて。

それ以降、まるで忘れたように接するが、抱き着くなどの行為はしなくなり、それでも彼は側にいるものと思っっている。

風鳴翼、聖遺物天羽々斬。

防人語を使う、世界的アイドルであり、ポンコツヒロインでもある。

コンサート事件、友人並び、聖遺物関係品のエネルギーを自分の物にし、ノイズを殲滅した彼に対して、当初は複雑な心境であった。

友人を助け、だが友人から翼を奪った彼に対して、どうしても苛立ちのように関わろうとしなかった。

その後はもう二度と同じ過ちを繰り返さないため、自分を剣として、防人として己を鍛えだす。

その光景を見た奏は、なるべくフオローしようとするが、妙な方向にズレ始めていく。

私生活のダメなところを知られ、面倒を見てもらい、以後完全に依存するレベルまで彼に頼り切っている。

食の好みや、着ている衣類全部、もはや家族ですら知らない情報も彼は知っていることに気づき赤面して、鍛えていた剣ではなく、風鳴翼と言う女の子に戻された。

時折責任を取って籍を入れてもらうしかないんじゃないか？ と追い詰められるくらいに、昔のことを引きずっている。

もはや家事類は完全にダメだが、彼が側にいる際は全部してくれるので死角なく綺麗な部屋で快適に過ごしたりしている。それがダメだと後で苦悶する。

剣の腕前でも彼に負けていて、女子力でも負けて、日々奏になぐさめられたり、マリアに相談したりしている。

雪音クリス、聖遺物イチイバル。

ルナアタック後、彼のお隣となり、飯を作ってもらったりと、よく飯を共に食べたり、作ってやったりする。

日本のことを教えてもらったり、お互い気兼ねなく話せられる仲間になった。

時より、彼の家で過ごしたり、家に彼を呼んだり、そんな仲である。時折食事用の買い物も共にしたりする。

だが後輩ズや、錬金妹ズが加わるようになってから、不機嫌な様子を時折見せたりと、様子がおかしいさまを見せたりする。指摘すると殴られる。

マリア・カデンツァヴナ・イヴ、聖遺物アガートラム。

色々あるが、トップアーティストとして活動する装者。

彼のおかげでナスターシャ教授は生存、並び妹も年齢が止まった状態で生存という状態であり、罪の償いも考え、いまを生きる世界のため、戦う意思を持つ。

だが妹が彼のことを好きな節を見せたりと、姉として内心複雑であり、翼の面倒まで見て、自分はどうかだろうと考える。

彼に対しては感謝と、周りの反応に対してあまりに気づかない、または自分より老け込んでいる様子に、少しばかり文句がある。

だが自分も彼に依存し出していると自覚し出し、少し危機感を持つ。

暁切歌、聖遺物イガリマ。

デスデスの、手紙装者。ちなみに手紙は彼が処分してくれたおかげで、彼以外その存在は知られていない。

彼を好きかと聞かれれば、かなり焦りながら赤面して、言葉を濁して逃げ出す。

調と共によく彼の家に行ったりする。勉強を強制的にさせられたり、苦手な食べ物を食べることになるが、うまいので問題なし。その際、彼が作るのなら毎日食べるデスと言ったことから、一混乱あったとかなかったとか。

響と同じで食べる派なので、調やセレナの料理を教えてもらっている時、嬉しそうに待つ。

実は彼の女装写真などにも、ドキドキするため、自分が正常かどうか悩みだが、もう気にしないことにした。

月読調、聖遺物シユルシヤガナ。

小さなツインテール娘、装者内で女子力高め。裁縫なども教えてもらい初めているため、冗談抜きで女子力は装者一。

精神世界にとある人が眠っている状態だが、基本起きないので問題なく、時折会話するようなことになっても、色々助言をもらうだけである。

彼の外堀を埋めようとするなど、他の装者達と違い、静かに彼の好感度を上げようとしている。

大事な切歌のことも大切で、彼女も連れて来たりと、時折どうするか考える。現在は先輩や錬金妹ズの存在が障害であると理解する。

ライバルが多い為、先人者に助言を求めることにしたため、寝る前にお祈りしてから寝るようにしている。

最近は彼も警戒無く接してくれて、買物も多く、静かに波風立えず、数や好感度上げを重ねているのであった。

なお、アガートラム、イガリマ、シユルシャガナは理想の抑止より、聖遺物の欠片を渡され、彼女達、適合率を薬により調整する組の負担を大幅に軽くしている。

これにより長い間の悪影響も無くなりつつあると、ナスターシャ教授は嬉しそうに語った。

「おかげでだいぶ成長してるデスっ、また服がきつくなったデス!!!」
「うん………そうだね」

「調、嬉しそうに胸を押さえて………どうしたの?」
「少しだけ、きつくなったから変えないとね」

天羽奏、聖遺物ロンの槍。

薬を使い、装者として活動していたツヴァイウイングの片翼。コンサート事件の際、己の命を使い、ノイズ殲滅をしようとしたが、その歌の力を、ガングニールの適合者としての資質を、薬の後遺症などと共に、彼に奪われ、前線からサポートに回ることになった。

姉御肌で、相棒が変わったが、翼も大切であるため、色々彼との仲を取り持ったために動いた結果、取り返しのつかないことになってしまふ。

彼のことを恨んではおらず、弟分として大切に思いながら、前線に復帰する聖遺物を手に入れた。その後はどちらかと言うとセレナと組む時が多い。

ロンゴミニアドと言う、IFのアーサー王の娘よりもらった槍。回

転し、星の光と風を集め、自在に操ることで初めて槍として機能する。光の塔を作り出したり、嵐のように光を放つ技を使う為、屋内など制限がかなりかかる広範囲殲滅型になってしまい、セレナと相性がいい。

後輩達と弟分の関係を傍目で見ながら、これどうすんの？と思っっている。

セレナ・カデンツアヴナ・イヴ、聖遺物円卓の盾。

マリアの実妹であり、燃え上がり、崩落する瓦礫の下敷きになり、死亡したと思われていた。

その際、I Fのアーサー王の娘に攫われ、己の器にされた。その際、聖剣の鞘により、絶唱の傷も癒えたりしているが、その時から年齢が止まっていた。

彼女を通し、自分の世界を見ていたため、姉達がしたことや、ルナアタック事件など詳しく知っていたり、世界のこともよく知っている。学園は次期を見て通うが、頭の中に大量の知識が収められているため、大学レベルの問題を理解できている。

彼のこともその際に見ていて、I Fのアーサー王の娘同様、恋をしてみましたと自覚しているため、それらしく行動している。

使用するのは円卓の盾、彼の栄光の騎士を囲ったものより作られた、ブリテンの歴史そのもの。

防御力特化であると思いきや、とある果物ライダーのように盾には刃がついており、投げて自在に操り、切り刻んだり、鎖もついているため、色々鈍器として使用方法が多数ある。殲滅戦に適していないため、奏と組む時が多い。

綺麗だの可愛いだけのだけで口説こうとする男は生理的レベルで無理で、話しかけられただけで鳥肌が立つ、視界に入るだけで吐き気がする。とある騎士にだけ、異常なほど反応する。

最近は料理など、レシピを知っておきながら、教えてもらおうと彼の家に向く。

この子もなにげに回数を静かに重ねている。

龍崎アスカ、聖遺物完全融合型。現在宝具へと変化、抑止力として装者と言うより、魔術使いのような力である。

前世、機械的に淡々と生きた男性の記憶を持つ、とある英雄アストルフオの瓜二つの男性装者。

当初、奏より装者の資格を取り込んだため、男性装者として活動できると思われていたが、単純に本来の力より格下の聖遺物を、軍門に下していただけである。

理想像を押し付けられ続けられる存在と言う、星と霊長の抑止力。本人が望む望まないと関係なく、たまたまそう選ばれた魂が始まり。

悪役、英雄、なんであろうと、物語に必要な立場にさせられたり、枝分かれした平行の時代。それも別の平行世界にまだ悪影響を与える可能性のある世界で、それを無くすために使用される。

転生と言うリセットがあるため、記録は理想の保存庫と呼ばれる、神ですら手出しできない領域に保管され、グラント・セイバーにより管理されている。

時には物語のカウンターとして用意されたりと、彼の偉業はまさに、良くも悪くも都合よく、理想的な扱いである。

IFのアーサー王の娘により、この世界に転生した為、抑止力に試されたり、殺されたりされかけたりするが、結局最後に行きつくのは自己満足による自己犠牲であると決められているため、放置された。

本人はそのことを隠し、だが抗う気である。過去の自分が使用、または持っていた宝具や神秘を使ったり、その仲間やもらった力、理想の抑止力が使う力を使う。

そのため、彼の戦闘力は未知数だが、やり過ぎれば倒れたりするため、基本は銀の王剣と竜殺しの魔剣、爆発する双剣。そして何か色々混ざりすぎたヒポグリフを使う。

無論それだけでは足りないため、理想の抑止力としての力を引き出し始める。

剣の腕前は高く、シンフォギアの力を使うと竜のような姿になり、戦場を駆ける。

実は装者達に秘密がある。それは装者達がシンフォギアを纏う際、服が弾けてスーツに変わる瞬間、見えてしまっている。

この秘密は誰にも相談できず、静かに終わりまで隠し通すと決めている。

夢は給金と年金で買った山奥の湧水で、うどんかラーメンなどの飲食店を細々とやりながら、ひ孫にお小遣い求められて、一人静かに眠るように終わりたい。

冠位剣士ブランド・セイバー 理想の抑止力。

無限なる夢幻の担い手。理想像を他者から押し付けられ、その力を振るう絶対なる勝者と敗者の二面性を同時に持つ。

善悪両者、その宝具は多く持ち、その最たるものは以下の通り。

固有結界・理想の最果て。理想の抑止力の心象世界、如何なることがあるかと立ち止まれない如何なる彼の生き様を現した世界。

どの時代、世界、次元であろうと、己の身を捨て、他者の為に前に出て戦う自己犠牲による自己満足。それにより、無数の剣と骸が無造作にあり、荒野とけして沈まない夕焼けの世界。

骸の丘に、無数の武器により磔にされ、血を流す骸が剣を持って、沈む光へと目指す風景世界。

固有結界・無限なる夢幻。真なる彼がいる世界、生きとし生きる生命体が考え描く夢幻を収めた無限の世界。

創造された幻想の宝具が円を描きながら空に安置され、無限のような蒼穹が広がる。

草原が広がり、空間の中心に神秘中の神秘でできた聖杯があり、そこから聖水が流れ出て泉を作り出すほど、神秘と奇跡により作られた。

創造された宝具が内包されていて、その使用者である彼は、如何なる英雄の頂点に立つ偽物として存在する。

そして彼だけが唯一持つ宝具が二つある。

英雄が怪物を倒し、英雄として始まりを告げる一撃。如何なる怪物

を終わらせることができる力。英雄面の彼が持つ力。

怪物が英雄に討たれることで、怪物の物語を終えると言う意味を持つ力。それはまるで本を途中で読み終えるように、神秘を終わらせる一撃である。全ての悪面の意味を持つ力。

龍崎アスカはそこから取り出す宝具。ヒポグリフ以外。

ロー・アイアス・ガーデン
熾天覆う七つの花園。

ロー・アイアス
熾天覆う七つの円環を花園のように生み出す広範囲防御宝具。

数多あるアイアスを取り出し、砕けてもなお咲き誇る使い捨て防御扱い。理想の抑止力である彼だからできる荒業の一つ。自在に咲く場所選べるため、攻撃を好きなどころへ流すことも可能。

三千世界。

鶴翼三連と言う技が、三千世界より取り出されたかのように投げられた、爆発する魔力の塊の双剣が、同時に一点に向かって来る剣撃。これも同じ荒業、彼は別段偽物だろうと気にはしない。一対一の広い空間において、絶技として活躍する。

絶技飛竜剣。

燦然と輝く王剣と竜殺しの魔剣の魔力を纏いながら、竜のように飛翔し、竜化したように敵を食らったり、竜の形のエネルギーをぶつけたりと応用可能。よく使う技。

他にも宝具の偽物荒業を開発中。

なお、彼の無限なる夢幻の空間に存在しないものは、そもそもないものだけで、世界に誰かが知っているものなら、英雄王のエアですら偽物として大量に存在する。

ただアスカはそこまで手を伸ばせられないだけで、理想の抑止力は無限に使用可能。

元より彼の聖杯は、存在する聖杯の中で最高峰であるため、魔力の貯蔵は無尽蔵。枯渇は無い。

ナスターシャ教授。治療を受けながら、S・O・N・G.の技術スタッフとして静かに活動。

ウエル博士。片腕をネフィリムの一部と融合したため、一時物として扱われていたが、魔法少女事変の際、キャロルと協力し裏切り、装者と協力と裏で騒いでいた。

その後、無限なる夢幻の空間に取り込まれたのが運の尽きか、運がいいのか、ネフィリムの腕が消え去っていた。発見時、絶叫した姿勢で白目をむいて気絶しているところを発見。のちに協力者として捕まり、リンカー作りに協力するように国と交渉した。

龍崎キャロル。龍崎家に取り込まれた。

竪琴は弦十郎がペンダント化したものを管理すると言うことになる。同じように取り込まれたエルフナインと技術者として協力することになる。

最近は響並び奏、さらに龍崎アインハルトの魔の手に怯えながら暮らしているため、兄の布団にもぐったり、色々吹っ切れたり、狙ったりしている。

龍崎エルフナイン。いつも姉であるキャロルと共に研究しながら、兄であるアスカになついている。この子も、なにげに兄として見えない様子である。

そして……………

「なるほどな、まさかあの組織が君にまで関わってるとは」

弦十郎は目の前にいるキャロルの話に腕を組み、ナスターシャ教授とウエル博士はモニター越しにその話を聞く。

『あの結社は僕のところからもリンカーについて色々聞き出したからね、おかしなことじゃないよ。もしかしたら本人が知らないだけで、ルナアタックの時も関わってるんじゃないかい？』

『確かに、その可能性は高いです』

その話を聞き、そろそろその組織が動き出すと、静かに考え込む。「組織が動き出すか」

「だろうな。少なくとも、俺は技術提供でアルカノイズを渡してしまっている。どう扱われるか分からないぞ」

「装者のリンカーの確保が最優先、か……………」

横目でリンカーを作れる男は、にんやりと笑い、静かに腕を広げる。
『やはり世界は英雄を求めているッ、いいだろう。リンカーの作り方はッ、教えるよ』

「作り方は、か……………」

『仕方ないだろう？ 本人用に調整はシビアで、愛が無ければ作れないんだ!! さすがの僕もこの腕じゃそんなことはできる訳がないッ。なんで僕から腕を、ネフィリムが無くなったんだッ』

おそらく無限の夢幻により消されたのだろうか、取り込まれたか。花の魔術師マーリンからの言葉からそう推測できる。あれは物のこともあるが、この男が聖杯の泉に触れた所為もある。

「ちっ」

キャロルもリンカーを作るのに、かなり手間取っていて、レシピから改良するしかない判断しているため、不機嫌そうに腕を組む。

エルフナインも頑張りますと言うだろう。ともかく、ロンの槍になった奏はともかく、三人はいまだリンカーを使わなければいけない。

「まあいい、早急に使えるよう、エルフナインと調整する。抑止力のおかげで、悪影響は格段に抑え込まれているとはいえ、調整は必要だ」
「ああ頼む」

「言われるまでもない」

そんな話をしながら、彼らの、この世界の物語はまた動き出そうとしている。

「……………投影魔術の応用だろうと思って、実験したが」

手あたり次第、頭の中にある刀剣を生み出す感覚より、頭の中にある刀剣を取り出す感覚で、出せる物を把握しているアスカ。

次は槍、盾、斧だが、次に理想。

「……………浮かんだ物は可能だろう。すでにマーリンから使えない力は使えない、使える力は使えることは確認済みだ。ならいま思い浮かんだ武器類は使えるか、使う機会無ければいいが」

命を代価にしないように、自分の中にある取り出す代価を把握した

りと、確認している。

「……………まったく、疲れる」

そう言い、妹やクリスがないことを確認して、料理用のワインに手を伸ばす。中身はオッサンなのだが、どうするか悩む。まだ高校生だからな〜と……………

「やめておくか、調も最近台所のもん把握してるし」

そして理想の抑止力は静かに、練習に入る。

取り出すのは、自分に許された、偽物の宝具を取り出すこと。

「こんな身だ、いつまた世界レベルの事件に遭うか分からない。神だろーうが、それ以上だろうが殺せる準備しないと」

そう思いながら、神殺し、神秘殺し、ともかく取り出せる力を取り出そうと練習に入る。

武器の貯蔵を十分にするために……………

透明な水を流す聖杯がある。理想の聖杯、存在する中で最高峰の神秘を内包するそれ。

その前にいるグラウンド・セイバーは、静かに顔を上げた。

「……………また動くか……………」

願わくば、彼がここに来ないことを願う。

押し付けられた理想の物語は、いまだ押し付けられた力で人生を狂わせられる。

彼はいつだってそう知りながらも、ここでただ見るしか無かった……………

51話・終わらない

二学期前である。

夏が終わりかけ、二学期前である。

「響、オレは手を貸さないぞ」

夕暮れの中、幼なじみが家に自分しかいない時、土下座し、手つかずの夏休みの宿題を置く。

一人の友人に力を借りようとした立花響は土下座し、大学生＋αな幼なじみの力を借りようとしたが、冷たく突き放した。

なぜならば、

「オレは前々から宿題は？ そう聞いたな。力は貸していたさ、夏休み、僅かな時間ならば力を貸したさ。ちなみにオレはすぐに終わるのは終わらせたからな、切歌と調にも力を貸した。だが」

「すいませんお願いします、つい眠ったり、お菓子食べたり、遊んだりして時間を過ごしたのに凶々しいのは承知してます。ですからっ」

「悪いが今回のお前の宿題は」

「キスと胸」

夕暮れの中、静かに聞こえる町の音が、恐怖ミュージックに聞こえる。

この言葉が何を意味するか、すぐに理解した。

「もうダメになるんなら、とことんダメになる覚悟はできたよ」

「さあなにからやる？」

終わるのならとことん終わろうかと立花響の身を削った切り札を切る。

「ちなみに泊まらないと終わらないし、未来も手貸してくれないから泊まるから」

「マジか響」

付きっ切りで教えながら、二人は真面目に、

「もうなりふり構っていられないんだよ」

「……………マジか」

妹達やお隣から白い目で見られながら、未来達からなぜ力を貸すか

問われたが、二人して答えてる暇は無いと言って回避する。
そんな日々と思っていたが……

とある南米、そこで駆ける獣。

『敵は人と俺の技術と思われるアルカノイズを使用した軍隊だが、行けるか?』

「問題ない、そもそもオレの場合、響達と違う。一気に叩くのみツ」

戦場に流れる三人の歌姫の中で、一人異彩を放つ剣士あり、

トレース・オン
「投影開始」

無数の剣が空へ現れ、一斉に降り注ぐ。黒と白の両刃両手の剣を握りしめ、雷鳴纏い、大地に降り立つ。

「さあ、駆けるぜ」

歌姫の歌をバックにし、雷鳴の如く駆け抜け、飛び交う弾丸切り伏せ、重火器を持つ軍兵に対して、雷が叩き、気絶させる。

戦車もいるが、弾丸が歌姫に放たれた瞬間、無数の剣が壁のように出現して、防ぐと共に砕け散ったが、歌姫達はその隙に、回避していた。

そして砕けた剣が新たな剣の材料になり、空中で軌道を変え空を駆ける。

モニターでナビゲートするキャロルはハッと鼻で笑う。

「砕けた剣が瞬時に爆発、もしくは別の剣へと変わる核になる。そして」

青い歌姫と共に駆ける幻獣は吠えた瞬間、弾丸全てが破裂し、戦車に突き刺さるのは、振れた相手を転倒させる槍。

四足歩行の幻獣の前足の肩に付けられた武装の一つ、そしてもう一つは絶対無慈悲の防壁を作り出す盾。歌姫を守りながら、飛翔する。

「さてと、そろそろか」

三人の歌の中、また歌が流れる。

光が吹き荒れ、朱色の髪をなびかせ、槍のように光を束ねる歌姫がヒポグリフに乗り、突撃して吹き飛ばし、巨大な城壁が生まれ、あら

ゆる角度から大砲が放たれた。

「一人でもイレギュラーだと言うのに、これはこれで」

「凄まじいです……………」

同じ顔のナビ担当者は冷や汗を流し、戦場を駆ける暴力を見る。

赤の歌姫に強力な弾丸が迫る瞬間、拳の歌姫が受け止め、助けると共に、

「秘剣ッ」

瞬時、戦車は人を斬らず、バラバラに斬られ、自身よりも長い刀を肩で背負う。逃げ出す軍兵を見逃しながら、後ろを見る。

「無茶するな、弾丸系はオレとヒポグリフが防ぐ。翼もあまり前に出るなって言うか、バイクはどうしたッ」

「翼にそのこと聞くのはかわいそうだからやめてやれ」

「問題ない、まだ貯蔵は十分だッ」

どや顔で言う歌姫に、盾の歌姫は苦笑する。

その時、空に光が立ち上り、全員が武器を構えると、巨大な飛行船が現れた。

「錬金術は何でもありか」

「本丸のご登場か……………」

『貴方達っ』

「姉さんっ」

声がすると共にヘリが三機現れるが、その前に翼を広げ、飛び上がる竜と、幻獣に乗り、盾と共に飛ぶ槍の歌姫。姉は少し寂し気に妹を見ていた。

他の歌姫はヘリに乗り、空へと舞い上がる。

その時、地上へ巨大なミサイルが落ちて来るが、

「任せろッ、この身は無限なる夢幻の担い手ええええええッ」

空に咲く、七枚の花弁が咲き乱れる。

『ロー・アイアス・ガーデン熾天覆う七つの花園』ッ!!!」

その時、無数の扉が開き、無数のミサイルが放たれる。

「ちっ、邪魔だあああああああああッ」

光の渦をミサイルに巻き込みながら、無数の剣を投げながらミサイルと盾を足場に飛び交い、接近する。

途中で拳の歌姫を捕まえる竜。

「アスカッ」

「響」

静かに微笑みながら、

「足場になってくれ?」

「うええええええええええ!!」

「初手にて奥義にて仕るッ」

「トリス・オン投影開始ッ!!」

投影候補、ザババの鎌イガリマ。その名は虚・千山斬り拓く翠の地平。

二つの巨大な剣が振り下ろされ、切り伏せた後は竜はももこの尾を拳の歌姫に巻き付け、斬り口へと投げ飛ばす。悲鳴が聞こえるが気にしない。

「アスカッ、一気に」

「ぶっ潰すぞッ」

「オオオオオオオオオオオオオオオオ」

三千世界の角度から投げ放たれる爆発する刀剣と、無限の弾丸、さらに光の槍が暴風となり、戦艦を飲み込む。

一条の光が川に落ちたのを確認し、剣の歌姫はそちらへ向かい。竜はそのまま降りて、全ての武器を把握し、全て投影した刀剣で、斬り壊す。

「疲れた」

全員同じユニフォームで、市街地を見る。テロリスト化した政府軍がアルカノイズを使う為、国連が自分達の出動を要請。

こうしてすぐに動いたが、けが人は多い。

「それでもお前がいてくれて助かったよ」

「おかしいな、私はこの世界のサービス券がもうすぐ切れかかったから来ただけなのに……」

治療に役に立つこの男は、白い髪魔法使いのような青年。お花などを渡したりして子供達に微笑む。犯罪臭がするのは気のせいかな。

「別に勝手に咲くからいいんだけど………」

「オレ的には無理矢理でも連れてきただけで、手を貸すのに疑問だが」
「領収書分ぐらいいは手を貸さないとね」

「お前ホント台無しだなッ」

経費で落ちなきや自分が肩代わりに出さないよ………

そう思いながら、本当に真剣な顔で聞く。

「この世界のことだぞ、関わって平気か」

「あついや、だいぶ貯まってるから。その分は働けてアルトリアに」
「オレのシリアス返せッ。ってかマジで平気なのか!!」

「平気平気。別にいまの私はそんなに力使えないしね。普通に呼ばれるよりも使えないから」

そして車に乗り、本部へ帰ることになるが、

『「苦労さん、しかしパヴァリア光明結社。まさか軍事兵器として頭がガキのような奴に売り飛ばしてたとは。嫌になる』

キャロルは忌々しく吐き捨てる中、キャロルはパヴァリア光明結社について全部話したが、表舞台から隠れて暗躍する錬金術師の集まりとしか覚えていない。

「キャロル、それ以外は」

『俺は記憶の消費も使いながら錬金術を使っていたし、あの結社はなぜ俺に力を貸したか分からなかったが、利用してやるとしか、当時は考えていなかった』

そう言いながら、最低限の記憶はあるが、ほぼ記憶の消費で使ったキャロル。そう言いながら分かるのは錬金術師の集まりぐらいいしか思い出せないし、そこまでの関係だった。

『念のため、マリアにも俺の調査をしてもらったが、やはりその程度だ。アルカノイズの製造で、まだ動きがあるだろうから、いまは休め。リンカーが少ないいま、動ける奴は限られてる』

「じゃ、私はかえ」

「アヴァロンに帰るのなら送りましょうかマーリン?」

鈍器を構えるセレナの問いかけに、なぜかアルトリアを思い出すよと叫ぶマーリン。ずるずる引つ張って、手ごまとして用意しておく。

本部でシャワーを浴びて、すでに出て待っているアスカ。女子組はまだであり、緒川がお疲れ様ですと、マーリンの監視をしていた。

「錬金術師の集まり……あまりいい記憶も記録もないな」

「まあ、魔術師もあまり変わらないからね。こっちもあっちも真理の探究かな？」

「パラケルスス、アヴィケブロン、魔術師だが、例を挙げれば切りが無い」

「あっははは、私も含めてろくでなしだからね」

そんな会話の中、少しばかり睨む。

「それで、投影魔術のように、抑止力使う俺はどういう扱いだ？」

女性陣がシャワー室にいる間、それを聞いた。あまりに無差別に使う力、それは投影魔術の掛け声で使うが違う。

投影魔術はよほどの使い手以外、ランクを下がってしまう、贋作を作る魔術だ。だが自分はほぼ違うのだ。

贋作であることは大前提であり、そして本物にはない機能が付いた状態の物を取り出す。

それにこやかに微笑みながら、

「問題ないよ、君が限界を超えて死のうと関係は無いからね。結局、君はそういうもの、ってことなんだよ」

そう聞きながら、静かに考え込む。

本当のことを言っていないながら、言わないような性格の男だから、全てを信じない。

なにより、投影魔術のような掛け声をすると、取り出しやすいと思う。思い込みの所為かもしれないが、やはり自分の力が分からない。基本は理想の抑止力だろうか……

(それを考え無しに使い続けて問題ないか、あいにくと無駄死にだけは回避しないとな)

さらにそれで問題が持ち込まれても困る。それには警告をこいつ

はするだろうが……

「飲み物取りに行きます、マーリンさんは」

「いいね、できれば香りのいいワインを」

「それはだめです」

にっこり微笑みながら、緒川さんと共に去る二人。

ほぼ行き違いの中で、響達も来る。

「疲れは残ってないな」

「問題ないですっ」

「リンカーが無くつたって、最低限フォローするからねアスカ」

「ああ。響、クリス、翼、奏さんもセレナも。無理するなよ」

「それは貴方でしょ、あんなに武器作り出して」

そうマリアが呆れる中、問題ないと告げる翼。

「用意してもらったブラも、前より動きやすい。問題ないぞアスカ」

「動きやすさと簡単な洗いでいいように買ったもんだからな」

その時、防人の一言で数名から瞳から光が消えて、少しひと悶着があつた……

新たな軍事拠点、化学兵器を作る拠点へ、周辺の被害拡大を抑えて制圧。セレナと奏は待機命令。四人での行動。

『響達が動いたら動けよ』

「えっ」

すでに暗殺者のように周辺の軍兵は装者にならずに制圧、その時、響の歌が響き渡る。

少しキャロルから呆れ声が聞こえたが、すぐに動く。

投影し、引き出すは無銘の守護者。弓矢を引きずり出し、弾丸のように乱射する。

「投影する矢はフルンディング、ゲイ・ボルグ、カラドボルグツ」

弾丸の乱射をし、紅い矢は軌道を変えノイズを穿ち、赤い猟犬は銃器を食らい、カラドボルグは如何なる防壁を穿つ。

化学プラントだが、途中から敵味方問わずノイズが動き出す、そ

れでも、

「借ります影の女王ツ」

禍々しいほどの紅が身体から放たれ、槍を形成する。

それをただ投げ打つ。

『映し身・貫き穿つ死翔の槍』ツ!!」

何度自分へ放たれた槍の魔力を使い、制圧し出す。

まだ取り出し、紅の槍を構えながら、静かに疾駆する。

「軍人は重火器破壊して捕まえた」と

『ともかくそっちはそっちに集中しろ。こっちはこっちで任せろ』

そう妹が静かに告げた。

こっちもそうだが、まだ暗躍する者がいるため、ナビゲーターの友里さんや藤堯さんも動く中、そっちにマリア達が動いている。

あれも……………

——どうもあれです

「それで気づかかれて動くか、やれやれだね」

「いいからちゃんとして働いてくださいよっ、司令さんがあなたの領収書片付けるんですから!!」

「セレナそろそろよ、準備なさい」

その時巨大な蛇？らしきものが見知った二人に襲い掛かろうと
していた。

しかもあれは……………

(やれやれ、まったく)

それでは、王の話をしようか。

車をそのまま激突させ、月下の下に、五人の歌姫と、一人のろくでなしが現れた。

三人の錬金術師達の前へと……………

52話・錬金術師、シンフォギア、そして宿命

月下の下、錬金術師を睨むマリア。

「ようやく現れたわね、パヴァリア光明結社。今度は何をたくらんでるの!!?」

「革命よ、紡ぐべき人の歴史の奪回。積年の本会」

そう静かに、そして熱を込めて告げ、蛇が向かってくる。

銀の剣を振るうマリア。だが、

「攻撃が効いてないデスっ」

二人以外は助からなかったようであり、切歌と調は友里達を抱えて逃げ、マリアは蛇を対処。

その時、多くのアルカノイズが現れる中、仕方なく二人を守る魔術師。

攻撃をする中、蛇に致命傷に成りえる攻撃を放つ奏だが、

「やったか?」

だが、

「などと思っているワケダ」

だが爆炎が晴れる中、蛇は無傷であり、それに驚く。

「なっ、効いてないッ!?!」

「ノイズと同じ………だけどそれならシンフォギアなら調律で効いてないのはおかしいッ」

「ねえねえ、前から思ったけど、調律とかそう言うのってどういうことなんだい?」

「あんなこんな時に聞くことかッ!?!」

花の魔術師の素朴な疑問に対して叫ぶ藤堯。それに友里は、

「本来ノイズに化学兵器が効かないのは、位相差障壁にて無力化してるのよっ」

「ああ、世界と空間をずらして、いるのにいない、いないのにいるって言う防壁か。なるほど………卑怯じゃないかッ」

「いまさらだよこの人ッ!!」

「ダメージを減衰させているのなら、それを上回る一撃でッ」

銀の刃が嵐のように纏い斬るマリア。弾丸のように星の光を集め、ぶっ放す奏。

その一撃を受けて、蛇の様子を見ると、無数に空間がずれた。

「なっ」

「再生？」

「いや、これは」

錬金術師の一人は微笑み、

「なかったことになるダメーヅ♪」

「実験は成功したワケダ」

「不可逆であるはずの節理を覆す、埒外の現象。ついに錬金術は人智の到達点、神の力を完成させたっ」

だがそれを聞き、やれやれとため息をつきながら、

『王の話をしようか？』

瞬間、無数の花が咲き乱れ、無数の蔦が蛇に絡みつく。

錬金術師たちが驚くが、すでにナイフのように銀の刃を放つマリア。

「いまは」

「ええ、撤退よっ」

攻撃は防がれるが、蛇の拘束は解けない。

逃げ出すマーリン達。それに全員はナビゲートに従い、逃走する。

「まあいい」

すぐに振りほどけない蔦を見ながら、蛇を下げ逃げ出す彼らを見逃す。

だが、一人の錬金術師は、白い男に眉を顰める。

——龍崎アスカ

「さて……………もう少し殴るか」

工場長はすでにボコボコにし、アスカはアルカノイズを切り伏せた。

工場長は無関係の村人を、アルカノイズで囲んでいたが、それだけだ。すぐに無限に剣を作り出し壁とし、すぐに人質を確保した結果だ。

後は気が済むまでボコボコにした。

「アスカ、そろそろやめておけ。もうアルカノイズを消したのだから」
「そうだが翼、気に入らないから」

「それに……………」
「ん？」

クリスが助け出した村人の一人と、何か妙な雰囲気の流れていた。
「彼女は……………」

「分からない、いずれ話してくれることを待つしかないだろう」

「そう話、後始末をしながら、
「ん」

「どうした？」

「いや……………」

世界がズレた気がしたが、まあいいかとすぐに切り替える。

——天羽奏

「旦那、帰還したぜ」

「ご苦労」

「ああ、疲れたよ。この歳で高い崖からダイブなんて、やはり運動は私には似合わない」

「ああ、やっぱり本部が一番だ」

「藤堯くん、彼と同じになるわよそれ」

「マーリンはあれだからな。友里さんにそう言われて、どう反応すればいいか困っている。」

そして持ち帰ったデータを、すぐさま解析に入ることになるが、
「マーリン、あれはなんだ？」

「ん？ 単純に平行の個体を犠牲に、いまの個体を回復させたんだよ。
平行は無限にあるからね」

そうあつげらんと言うが、それじゃ事実上、無敵じゃないか。

「あたしのロンの槍でどうにかできないのかッ」

「できないよくさすがにね。その槍の本質はだいぶ変えられてるし、元々神代と現実を繋ぎ止める塔のようなものだったのが、封印された状態で改造されたものだ。だいぶ性質は変わってるよ」

「……………どういふことだ」

「その槍は本来特別過ぎて、人の身じゃ使えないのが、使えるレベルまで下がっているから、ただの光を集めて槍として機能するくらいしか使えないってことです」

セレナの言葉に、少し納得する。本来の槍なら、どうも持ち主を神にするって、アスカから前に聞いたことがある。となると使えない方がいい。あたしが女神なんて柄じゃないしな。

全員が苦虫を噛むような顔に成る中、一人だけ変わらないベース。キャロルも何か考え込む。

「！ アルカノイズ反応確認っ、現在空港にてアルカノイズ発生!!」

全員が顔を上げて、司令室に取り付けられた画面を見ると、モニターに映る空港が、いまアルカノイズ達に襲撃されていた。

「まさかと思うけど私も行くのかな？」

「時限式はっ」

マーリンの言葉を無視し、マリアが叫ぶ。エルフナインとキャロルは共に顔を見合わせ、

「まだ持つだろうが、洗浄せずに出るとなるとリミットが来る可能性があるがあるッ。まだお前達に使った専用リンカーは不完全だ。出るなら早めだ!!」

場所が場所なため、私は本部待機と言うマーリン。だがマーリンは、マリアに首根っこを掴まれ、すぐに全員が動き出した。

——龍崎アスカ

ヒポグリフでの移動中、ずっと隣でクリスは防ぎ込み、手を握っている。全員が黙り、静かにしている。

その時、連絡が入る。空港が襲撃されて、マリア達が万全じゃない状態で向かった。

「アスカ、ヒポグリフで行けるかッ」

「問題ない、ただ一人だ」

「なら」

「響」

「へいきへっちやらッ」

パイルバンカーのように、速効で相手に叩き込む瞬間火力の響を指名し、クリスもすぐに翼と顔を合わせ頷き合い、シンフオギアを纏い飛び降り、響も纏ったのを確認し、

「んじゃ、舌かむなよッ」

「えっ、うわっ?!」

響を自分のもとへ抱き寄せ、ヒポグリフを全速で爆走させる。

「求めるは速さッ、一点集中ツ!!!」

「えっ、にやああああああああああああああああああああ——
——」

響の悲鳴を聞きながら、目的の空港へ一直線で飛ぶ。

「……………見えたあああああああああ」

「!」

オレに抱き着いていた響もそれに気づき、すぐに目の前の蛇へ見る。

「響イイイイイイイイ」

「応ッ」

すぐに足のバンカーが引き上がり、魔竜の力が雷鳴と共に駆け巡る。

二人してヒポグリフを急ブレーキで止め、その反動を全て攻撃へ変える勢いで、蛇へと拳、そして魔剣と王剣を叩き込む。

「だが無駄なワケダ」

その時、錬金術師の一人が笑うように告げかけた時……………

無数の平行世界に、斬撃を飛ばすように、

「斬り、裂くッ」

拳と剣の一撃に、蛇は叫び声を挙げ消え、二人の錬金術師が驚愕する。

「な、なんでえ〜無敵のはずのヨナルデパズトリーがああああ」

「無敵なら、無敵をぶった斬ればいいだけだッ」

「だから私達は、ここにいますッ」

驚愕する錬金術師二人の前に、二人は叫び。魔剣と王剣が鼓動するように猛る。

「さすがデスッ」

「あの二人に常識は通じない」

「姉さん達の守りは任せてください、姉さん」
「ええ」

限界により、ギアが解けている三人。セレナが盾を構え、二人の錬金術師。

褐色の青い髪をした……………

(……………男?)

死ぬ、本気で死ぬと思うほどに、自分は女性に恐怖を植え付けられた。だから分かる、あの人は元男性だ。

隣にいる小柄の女の子、カエルのぬいぐるみを持つ、

(オ・ト・コっ!?)

なんか知らないが、錬金術師達がキャロル以外女になった男と知って、別の意味でパヴァリア光明結社に戦慄する。マジでなに考えているんだろう。

そして後からミサイルから降りて、クリスと翼が来た瞬間、テレポートの錬金術で男装をした女性が現れ、背筋が凍り付く。

オレ、女性恐怖症になってない?

「フイーネの残滓、シンフォギア。だけどその力では、人類を未来に解き放てない」

「フィーネ？ 未来ってことは」

「フィーネと同じ、バルルの呪詛か」

クリスの言葉に無言のまま、静かにこちら、オレを見た気がする。

「カリオストロ、プレラーティ。ここは引くわよ」

「ヨナルデパズトリーをやられたものね」

「態勢を整えるワケダ」

「未来を、人の手に取り戻す為、私達は時間も命を費やしてきた。誰にも止めさせやしない」

未来と言う言葉が強く聞こえ、そして人の手だのなんだのよく分からないことを言うと思った瞬間、レポートの小瓶を投げた。

瞬間、刀剣を作り出すが、それよりも速い。

「逃がしたか」

こうして三人の錬金術師と対面は、終わりを告げた。

そして危機は訪れる。

「アスカ、明日二学期なんだ」

「無理だ、響の実力で解かなきや意味がない」

「アスカ、アスカなら簡単なのは分かっている。分かっているんだよ私」

「響」

「アスカ、終わるなら一緒に終わろう」

「巻き込まないでくれよッ、夏休みの宿題。なんとか司令に言っただけじゃあダメだ!!」

響の夏は終わらなかった……

夏が終わり、自爆覚悟で巻き込もうとした響の暴走はどうにかなるが、マーリンと茶を飲みながら、キャロルの作業室にいる。

「キャロルちゃん、私は次はどんな花を咲かせればいいんだい？」

「……………次はこの種類の薬草、これでリンカーの生成に入る」

そんな会話の中、ナスターシャ教授も色々データを引っ張り出したりにして、リンカーについて研究している。

「あのウイス博士、よくシンフォギアなんて言う異端技術の調整を感

覚でできるな。その点に関しては奴は評価するしかないか、くそっ」
名前の違いを指摘せず、茶を飲む。

ほぼ交代制でエルフナインと共に個人専用リンカー生成と、いまだ無理をしている。

「アスカ、そっちはどうだ」

「進展なし」

「私達の聖遺物のデータは、利用できないんですか?」

セレナがそう聞く。実は現在、彼女達パウアリア光明結社は日本に潜伏している可能性がある。

マリア、奏、翼が調べて持ってきた、テロリストもどき? いやいか。の奴らから情報を得たりと、暗号化されたものなど、難しい話になってきた。

聖遺物に関する研究、かなり前から研究で、友里さん達が調べたものに、オートスコアラらしきものもあり、それを回収した様子もある。

色々目的が分からない中で、セレナと奏は心配する。

「無茶言うな、お前らのはイレギュラー中のイレギュラーだ。そんなん役に「立つよ」立つ……………おい花の魔術師?」

いま全員が鈍器を構える。

マーリンがなぜ扱いが酷いと思いつつながら、涼し気に、

「いや、正確にはアスカくんがリンカーって言うものの代わりに成るよ」

「? どういう意味ですか?」

セレナが首をかしげると、マーリンは紅茶を飲みながら、

「だって彼女達の聖遺物、しんぷおぎあ? あれに付属として使ったのは、無限の夢幻から取り出した、三種の宝具が組み込まれてる」

「! そうかッ、アスカが起動に補助できる!! だが方法はッ!? まさかアスカと同時に起動なんてことできないぞッ」

「いや、彼の血飲めばいいだけだよ?」

『はっ?』

全員がなにを言っているか分からないと……………

オレは気づいた、オレだけはハッ!?だ。

(ま・りよ・く・きよ・う・きゆ・うツ!?)

嫌な予感がした時、マーリンは爽やかに、

「彼と——」

その後爆音じみた悲鳴と何かを殴る音が響いたのは言うまでもない。

魔力供給、キスしたりして他者から魔力を提供してもらおうようなもの。

ともかく、リンカー無しでギアを纏うのなら、キスや生き血を飲むくらいすれば、一時的に動けるらしいが、やはり直接がいいらしい。

騒ぎを聞きつけ、三人の話の歌姫が赤いぞうきん化したマーリンから聞いて、ぞうきんの色が濃くなった。

ちなみにオレは巻き添えで倒れている。

それとまたアルカノイズの襲撃があり、復活して向かおうとしたが、途中で倒したらしく、イグナイトモジュール姿の三人に心配され……

されて……

理由を聞かれて、マーリンの野郎がマイクでこのことを言った結果、オレはイグナイトモジュールの断罪を受ける。

無駄に血が流れる。夕暮れ時であった……

——三人の装者

「……………」

考え込む三人。アスカの生き血を吸うか、キスするかでリンカーの代わりに成る。

ちなみに血の方がいいらしい。そうマーリンから聞き出した。

「アスカの血が、リンカーの代わり……………」

頭の中で、その言葉が片隅に残り続ける。

戦う力が欲しいいま、それがトゲのように残り続けた。

53話・禁断の力

司令に頼み、音も光も感じない場所、そこで静かに時間すら分らないよう感覚を狂わせ、無理矢理取り出せる刀剣を知ろうとする。

深く深く魂に触れて、保存された。いや、理想として押し付けられた武器に、何があるか、どんな力か、どのようなものかを知ろうとする。

「誰も入れないように密閉されているはずだが」

「私にそれを言うかい？」

アスカに呆れながら、弓矢と矢が握られていた。

「花園と同じもんか……………」

「理想の抑止力、彼がよく使う宝具だねそれ」

「矢じゃないかッ、アーチャーだろそれ!!」

そう思うが、座禅していたら、気が付けば部屋中に見知らぬ刀剣を初めとした武具がある。いつ取り出したんだろう？

花の魔術師はにこやかに微笑む。それが不気味で仕方ない。

「そろそろ警戒するレベルか、テメエ」

「ま、私を知る君からすれば、不気味で仕方ないか」

そんな会話の中、静かに立ちくらみはするが、おかしい。

おかしすぎる。

「緩すぎる、お前が、星と霊長がオレを見逃すのに疑問がある」

「星と霊長、ね……………ほかに疑問に思うことはないところが問題なんだけどなく」

そんなことを言いながらも、それかと思いながら、

「現れれば斬る」

「！」

その時、オレはどんな顔をしたか分からない。だが、

「やはり君は君か。問題ないよ、ああ問題ない。それだけは絶対だ、龍崎アスカが手を伸ばせる範囲、そして範囲を上げる行為。問題ない、あるとすればそれを超えて、魂と器が壊れるくらいだね。私達は困らないけど」

「そうか」

そしていつの間にか消えた。それを見届け、また静かに武具の閲覧を始める。

「全てを守るためにも、押し付けられた如何なる理想を、この手に収める」

ギアも纏わず、感覚が竜の瞳だと告げている。

だがそのまま、閲覧を始める。

とある風鳴が所有する機関にて、暗号の解読をすることになり、住人の一時避難など、少し思うことがある中で、静かに考え込む。

装者は襲撃を考え、各自配置される中、通信機から奏さんが話しかけて来る。

『アスカくそっちはどうだ』

「別に問題無し」

『だあああくそつ、私のロンの槍は威力がありすぎて基地待機ッ。カチャカチャ音するだけだなにもできないのかよッ』

『文句言わないでください、ロンの槍は強大過ぎます』

『奏、文句を言うくらいなら、エルフナイン達にお茶なり出したらどうだ？』

『それはもうしたよッ』

マリア達も、リンカーが無くても動き、住人が避難しているか確認しに出てる。そのためか基地の中にいる奏さんは苛立ちは隠せない。

「響、そっちは平気か」

『へいきへつちやら、問題ないよ』

『そうか、熊が出たから今日は熊鍋な』

『へッ、冗談言ってる場合かよ』

クリスがそう言うが、オレはとりあえず後ろに回り、腰を掴みそのまま高く飛び上がり、後頭部を地面へと叩き付けて仕留める。

全員が吹きだす音などで混線した。

「よし、兄貴から教えてもらった熊のうまい料理を食わせてやる」

『いや待て、マジカッ。マジでそっちに熊が普通に出たのかッ、そして

仕留めたのか!？」

『マジデスカッ』

「ふう………ん、頬を切った」

少しだけ頬に傷ができ、血が流れる。どうも草木の枝で切ったように、枝に血がついている。

『!? アスカの顔に傷がっ』

『それは一大事デスっ、嫁入り前の顔に傷がッ』

『急いで痕に残らないようにしなければっ』

「響、切歌、セレナ。泣くよ?。」

そんな感じで、お肉の処理したりと色々しておく。

しばらくは平和な時間が流れる中でその後、錬金術師の襲撃があった。マリア達が狙われたが、クリス達が駆けつける。

オレもヒポグリフで駆けつけたがすでに終わっており、少しばかり気になる点があった。

「響、向こうさんはなんだって」

「分からない、けどまた来る、みたいなことは言ってた」

やはり目的があり、だが一人だったためか、また来ると言って去る。

「ちっ、配置変え考えて欲しいが、文句言ってる場合じゃねえか」

ヒポグリフの加速は威力が高すぎて、遠くに配置される。そう言うが、クリスが、

「心配するなよ、こっちにはイグナイトモジュールもあるんだ。テメエだけに背負わせることはねえっての」

「ああ、アスカはアスカの配置で敵が来た時、対処を頼む」

「分かってる」

その時、マリア達がこちらを見る。目が合うとすぐに反らされたが、やはり気になるのだろう。

(そう言えば、血がいろいろのも気になるな。なんでんなことを? 魔力供給の順位ってなんだ? クロエはキス魔だから分からない)

知識から分からないし、記録から引っ張り出せない。

そう考えながら、熊持って帰って、飯に出した。みんな気づいていないのか、今回のカレーはうまいと喜んでくれてよかった。兄貴あり

がとう。

深夜の夜、暗号の解読は終わらず、配置として少し離れた位置にいる。

森の中で、静かに夜風が身に染みていた。

「やべっ、ばんそうこう外れたか。ま、ナイチンゲールさんもないからいいか」

傷になっても気にせず、左頬にできた傷をそのままにしている。考えることは他にあるからだ。

（配置はエルフナイン達の側に奏さん。民間人の側にセレナ……この距離だと加速して飛ぶと通り過ぎるから、通常飛行か）

静かに考え込む。マーリンも暇なのか人のいる民間人側で、マジシャンとして手品風に、魔術を行使しているらしい。あれはなにしているんだ。

「このままなにも」

そう呟きかけたとき、警報が鳴り響き、急いで向かおうと立ち上がると、木の葉をかき分け、何か機械的なものが、

「アルカノイズっ!？」

瞬間、大量のアルカノイズが現れたが、ほぼ同時にギアを纏う。

「仕込まれていたか、無限なる夢幻の担い手ッ」

無数のノイズを切り伏せ、すぐに高く跳び、ヒポグリフを空へと呼び出した瞬間、空間が変わった。

「なっ」

——
???

ナビゲートで、二つのアルカノイズ反応を確認する。

「反応の一つはアスカくと完全同一ッ、映像出ますッ」

だが出た映像はヒポグリフが待機状態で浮遊し、アスカやアルカノイズがいない。

「これは、先日のアルカノイズかッ」

「チツ、どうやらそのようだ。アスカがヒポグリフを取り出した瞬間、空間のオりにアスカを捕らえたいらしい。音声を取り出す」

『邪魔だッ』

音声からして余裕で戦っているらしいが、ここから出るには隠れている空間を作るアルカノイズを倒すしかない。

「アスカ聞こえるかッ」

『キャロルッ、ああ』

「ならお前なら多重広範囲に攻撃可能だッ、それで一気に」

『それなら三千世界であらゆる場所を爆破済みッ、空間のオリを作ってるのは』

「反応ありっ!!? アスカくんを捕らえているアルカノイズはッ、外にいます!!!」

それに司令室に戦慄が走る。中ではなく外にいては、アスカに攻撃方法は無い。

「まずい、響、翼、クリスは他のポイントっ、奏を向かわせても時間がかかるぞ」

「ぐっ」

苦虫を噛む顔になる司令だが、

『問題ない』

変に作り物のような宇宙をモチーフにした空間、その中で静かに、藤堯さん、響達のポイントを軸に、オリを作るアルカノイズがいるポイントを指定してくれ」

『えっ!? それって』

「速くッ」

弓を取り出し、すぐに藤堯さんから教えられた方角とポイントを告げられた。

それを知り、頭の中で行動した動きを思い出し、そして静かに構える。

黒紅い矢を取り出し、夜空を思わせる弓を取り出し、真っ白な弦を引く。

「この身は、無限なる、夢幻の担い手。放つは死、獲物は森羅万象穿つ身、狙うは汝なりッ!!」

空間を超え、それを見た。

『戦紅纏め穿つ死翔の槍』

矢として放つは心の臓を穿つ槍、並び、貫く系統の名前を持つ道具の理想を纏った槍。

カラドボルグなど、剣なども突くと言う概念が押し付けられた物を、放った。

「ッ?!?!?」

藤堯が驚く中、巨大な音が鳴り響き、キャロルも耳元に響いたそれに驚きながら、モニターを見つめる。

唾然の一言であり、空間の壁を貫き、余波でアルカノイズも吹き飛ばした。

一撃で空間のオリを破壊し終え、涼し気な顔で笑う。

「絶唱が無い、そしてイレギュラーで生まれたんだ。まだまだ駄賃はもらうぜ抑止力ッ」

このポイントでの戦闘を終え、通信機に話しかける。

「こちらアスカ、敵殲滅完了ッ」

『よくやったッ、こっちはイグナイトモジュールで一気に』

奏が喜んで言う中で、すぐに途切れ、悲鳴に似た声が響く。

「? 奏さ」

『急いで響達のもとへ迎えアスカッ』

「!」

それだけで十分だった。

ヒポグリフに乗り、ただひたすら向かう。

「……………この歌は」

下を見ると、マリア達がリンカー無しで無理矢理歌い、イグナイトモジュールでアルカノイズを倒し、眼前で何か巨大な魔法陣、いや錬金術師なら錬成陣かをバツクに、空に浮かぶ。

「ローランかッ」

真っ裸の男がいて、なにかエネルギーだけが無駄に集まりつつある。

ここまでくるとヒポグリフより走った方が早い、マリア達と合流した。

トレース・オン
「投影開始ッ」

剣を取り出し切り伏せながら、歌っている三人の元に降り立つ。

「アスカッ」

「マリア、急いでなんとかするぞッ」

状況を見ると、イグナイトモジュールが解除され、響、翼、クリスが倒れている。爆撃地のど真ん中にいる。

そう気づき、剣を握りしめ、前へ踏み込もうとしたときだ。

マリアがこちらを掴んだ。

「ごめんなさいッ」

「えっ」

そう言っ引つ張られ、首筋に噛みつく。かみ砕かんと言わんばかりに、噛みつかれた。

「イツ、まさ」

しばらくして肉まで持つてかれそうだが、血がにじみ出るほどの噛み痕が残ったとき、感電するように装甲からエネルギーが漏れ出たアガートラームが、安定した。

「ごめんデスッ」

「ごめんッ」

そう言っ切歌と調も近づき、切歌は空いてる首元、調はほっぺの傷口へ。

切歌とマリアは噛み切らんと、調は舌を使い、傷口を舐める。

瞬間、電気が漏電しているような音を出すギアが、唐突に安定した。

「安定ッ」

「したデスッ」

「一気に畳みかけるわよッ」

「チッ、マジで血でかよ」

それにより、対処が急激に早まり、三人が響達を背負い、アスカは真つ裸男を睨む。

「マジで…………マジであの野郎……………」

エネルギー量が高い、このままでは逃れられるか分からない。
なにより、

(殺したい、あのローランリスペクト野郎……………)

彼の中にある何か憎しみを抱いた。

心臓が高鳴り、なにかが吠える。

「マリア達は先に行けッ!!」

「アスカッ!!」

だが、その時、流れ出る血がおかしな光を見せた。

僅かに頬の血が、両首筋から流れた血は、赤く赤く……………

三人はおいしそうと思ってしまった。

「二…二」

そうおかしな思考をしたと同時に、三人も妙に力が流れ込む感覚があり、アスカの歌が、叫び声が聞こえる。

この身は無限なる夢幻の担い手。その力が逆流するように、身体に悪い気分ではなく、いい気持ちよさで流れ込む。

「くっ、これって」

「ちから、なにゆかしゅごいデス……………」

「なに……………」

切歌はろれつががおかしくなり、マリアもアスカが欲しくなり、調はなにか色々我慢してたができなくなりそうな気分になる。

その時三人は何か景色の奥底、あの透明なほど透き通った水を流す、聖杯が見えた。

そして、

「いまこの場で終わりと始まりを告げるッ!!」

そんな三人や、気を失う三人を見失ったアスカはそこにいた。
バチバチと黒白の光が輝く、雷鳴し、光を剣にする。

その力は静かに、

「吹き飛べッ」

混じり合う斬撃が、錬金術と空で激突する。

「アアアアアアアアアアアアアアアア」

その叫びは、

「あ、あしゅ」

「……………」

「あ、アスカ……………」

流れ込む力に倒れかけるが走る三人。

だが分かった。

「あの花の魔術師……………アスカの血を飲むと、こうなるって、分かったのね」

それが人の身に過ぎることも知っていながら、言わなかった。

頭をガンガン殴られるように、アスカの全てを欲する欲求を振りほどきながら、いまは遠くへ避難する。

調が歯を食いしばり、切歌はオヨヨく状態で、マリアも気合いで耐える。

三人は戻ったら殺すと心で決めた。

——花の魔術師

「ああ、やっぱり離れててよかった」

屋外で閃光が爆発するように激突するが、錬金術。無駄に黄金を錬成するだけの術。

だが、そんなもの、

「聖杯の力の前では意味は無いよ。それも、押し付けられた神秘の塊ならなおのこと」

そしてただ一つ残念なのは、

「……………裸の男しか見えないッ」

そう叫ぶ中、予想通り、彼は聖遺物との連動でより力を引き出して、その輝きが黄金錬成を押し返していた……………

「aaaaaaaaa……………いまの、感覚……………やろう、聖杯

への直接アクセスだと……オレになにさせたいんだ？」

やっと正気に戻り、というより、力を放っている間に戻ったが、後に引けなくなりそのまま維持していた。

間違いなく、自分は血を通して、聖杯の神秘にアクセスして行使した。少なくともそんな自覚がある。

剣の輝きはまさに聖杯のバックアップを受けた剣撃。

「アスカあああああああ」

奏がロンの槍を纏い、辺りの様子を見て絶句する。

辺りから金色の塊が降り注ぐ。それは自分の顔を映すほどの、

「高純度の金？　マリア、おい」

「へい、きよ……」

肩で呼吸しながら、安全と分かったらその場に倒れている切歌と調。マリアは気合いで立っていた。

「どうした？」

「き、気にしないで……聞かないで」

そう頬を赤くしながら、その場に座り込む。

そしていつの間にか男はいなくなり、その一撃が、多くを震撼させるものと知りながら、担い手は静かに、

「やはり引き出せたか、神殺し……」

そう呟きながら、自分から流れる血を見る。

それから魔力が火花散る様子が見えた気がした……

54話・人の身超えし、その傲慢

その後、高エネルギー同士のぶつかり合いにより、空気中の全てを巻き込んで黄金化させる錬金術を弾くのではなく、己の斬撃を黄金化へと吸収して無力化。

空から大量の高純度の金があり、回収中。

だがそのエネルギーのぶつかり合いの為、施設機材、全部大破してしまう。

——
???

「装者達が無事なのはいいが、まさか激突の所為で保管していた機密データが全てご破算するとは……………」

「結局のところ、あれがあのまま放たれていたら、より被害が甚大だったんだ。まだマシだろ？ なにより高純度の金が、くそ」

キャロルはそう舌打ちしながら、回収した金の塊をハンマーで割って解析した。

「錬金術で金なんてもん作れたとしても、コストが高いだけの意味なんてないもんが、アスカが放った魔力に利用された結果、地球上最も高純度の金へと姿を変えた」

「そんなこと、あり得ないです……………金を錬成できる錬金術師もそうですが、それを利用して本人よりも高密度なものを作るなんて」

エルフナインも驚愕しながら、静かにそれを眺めている。

「で、なんでオレは手錠されて正座なんですかキャロル、エルフナイン」

その瞬間、セレナの瞳からハイライトが消えた。それを見て黙ることにする。

現在アスカは、左頬に大きなぼんそうこうをつけ、首に包帯を広く巻いている。噛み痕のために、この処置を取っている。

まあ見た目、その、変な誤解を受けられそうなおとであった。

「俺の世界解体技術を横から搔っ攫っただけじゃなく、ファウスト

ロープ。賢者の石でイグナイトモジュールの核たる、ダインスレイフの力をはぎ取るか」

忌々しく言いながら、正座するアスカの足先を踏む。我慢するアスカ。なにか別のベクトルでもイライラしている気がするが、それを言わない。

敵がどうも、イグナイトをはぎ取り、その反動でダメージを与えるシステムを用意したようだ。

「ともかく、一番はお前だツ。いきなりアガートラム、イガリマ、シウルシャガナが安定したと思ったら、激流の如く適合率が融合レベルまで跳ね上がったことだツ」

今度は殴る。襟をつかみながら揺さぶる。

「お前はなにをしたツ、あの局面でなにをした!!」

「オレはなにもしないよツ」

セレナはずっと深淵から覗くように姉の顔を見る。マリアがガクガク震えているが、

『そこまでにしなさいキャロル』

モニターの先、ナスターシャ教授が通話状態でいま研究の為、連絡を取り合っている。

それに歯ぎしりしながら、大人しくなるキャロル。ともかく分かっているのは、

「私達は、あれの言った通り、アスカを基準に、ギアを起動させようと、血を取り込んだ……少し皮もやったかもしれないけど」

「デス……無我夢中で噛みつきました」

「うん、私はすすすつた」

調の言葉に、何名かアスカを眺め、クリスの目から光が無くなる。そしてアスカは、

「ローランリスペクト野郎にイラってして、後は爆撃回避のため、全力で自分の中にある抑止力を放ちました」

「それだ。聖遺物がいきなり高エネルギーになり、ハイな状態まで装者を持って行った力」

それに恥ずかしそうにする三人に、翼が静かに首をかしげる。

「なぜそのようなことが起きたんだ」

「予想しかできない。少なくとも異世界の魔術だ。アスカから色々聞き出したが、それでも情報が欠落してるんだ」

「私もアーサー王の娘さんとリンクしてましたが、彼女は生粋の魔術師では無かったですから……」

そして一番知ってそうな男もとい、この事態を引き起こした男はいない。いつの間にかいなくなっていた。

「ともかく、俺は風鳴の本家に呼ばれている。すまないが翼」

「承知、分かっています叔父様」

風鳴家、国家の施設を一部ダメにした。アスカの所為では無いが、その説明の為に動かなければいけない。

「後は、奴か」

忌々しく言うが、全員が黙り込む。

「仕方ない、リンカーも元々了子くんを除けば、彼しか作れないものだ」

そしてある牢屋へ通信が繋がる。

『世界が僕を求めているッ!!』

そう叫ぶのは、ドクターウエル博士。現在はネフイリムの因子を取り込み、人では無くなっていたが、魔法少女事変の際、聖杯から流れ出る水に触れて気絶。その後、人の身に戻り、牢屋生活していた。

「チッ」

「キャロルちゃん」

『話ほだいたい聞かせてもらったッ、リンカーの製造が難航していることと、謎のエネルギー逆流!! この僕なら全ての問題を解決するこ
とができるッ』

『なんですって?』

ナスターシャ教授を初め、全員が驚き、疑惑の視線で見ると、彼は気にせず、ふふんと笑う。

『花の魔術師と言うあの男がだいたいのヒントを出してるじゃないかッ。そう!! 魔力供給!! 愛が全ての大本だッ!!』

『『なんでそこで愛ッ?!』』』

全員が叫ぶ中、ウエル博士は全く気にせず、オーバーアクションで叫ぶ。

『その男、龍崎アスカの力の源は、全ての世界の夢と希望と『愛』でできた力がカギになってるッ』

「人の源を歪曲するなッ。理想だコツラアッ」

『愛こそがギアと装者を繋げるっ!! そう、彼の世界はどんな世界だ立花響くんッ』

「えっ!? えっと………荒野が広がって、夕焼けで」

「骸が広がり、丘で血を流す存在が」

『そうッ!! そしてその大本の力を生み出すのは、聖杯と言うミラクルアイテムっ!! 愛が詰まった愛の結晶っ』

「先ほどから癪に障ります。まるでマリア姉さん達とアスカさんが愛し合ってるみたいじゃ——」

「まあまあ」

無駄な叫び声の所為で、ある人物に聞こえない。セレナと奏のやり取り、その人物は唯一あるホワイトボードに喜々として何かを書く。

『元々あの世界は、聖杯と言うものや記録の保管ッ。聖杯とは特殊な儀式で生まれる願望機っ。あっているかい?』

「まあ合ってるな、お前に聖杯やらなんやら伝えるのは嫌だったが、背に腹は代えられない」

『そして、その理想の世界で満たされていたものはなんだ?!』

「それは」

「綺麗な杯から流れ出る水?」

『そうッ、その『流れ出ている』ものが重要さっ、最初の世界と照らし合わせればそろそろ分かる頃だろッ』

「……………は……………?」

全員が分からない顔の中、アスカだけはあり得ない、あつてはいけない顔になるが、

「いや待て……………だが、けど……………マジかッ!!?」

それに、答えを見つげ出す。

「俺の血が、聖杯。願望機から流れ出る魔力そのもの？　ならマリア達は、聖杯の中身を口にした？」

いま、全てがかみ合った。

とあるホテルで三人の錬金術師が怖い顔でそれを見ていた。

純度の高い、本物の金。

あり得ない、金である。

「まさか無能な僕が金を錬成するなんてね、テイキ」

「アダムすごいっ♪　アタシは信じてたもん、アダムは凄いつて♪♪」

そんな風に欠片の黄金で笑いあう男、アダム。膨大な魔力を持つ、パヴァリア光明結社の局長だが、無能の男。唯一は魔力の高さだけ。

そんな男が完璧な金の錬成？　あり得ない。

「あんなことを言っているがぁあり得ないワケダ」

「ということば、あのローズちゃんのし・わ・ざってことね♪」

「……………」

サンジェルマン。パヴァリア光明結社に属する錬金術師であるが故に、その異常に目を見張る。

あり得ない、ただのシンフォギアがそのようなことが起こせるはずがない。

(龍崎アスカ……………)

第一装者の次に装者として活動する、使用するギアはアストルフオ。

融合型と言う、貴重な例に挙げられ、その後は数々の進化を装者達と共に言う。

なぜかイグナイトモジュールを使用しない三人組の一人であり、一番なその人物。

「彼女になにか、裏がある……………」

「そう至るワケダ」

「そうね♪　あの子だけ妙に聖遺物を持つは、歌っていないわで怪しいものねえ」

そう妖艶にカリオストロは告げる。

空間でのオリを貫く矢を持ち、無数の爆発する剣を創造。そして銀と黒の剣を振るう。まさに何でもありの装者。

その写真をテーブルに置きながら、サンジェルマンは穴が開くように見る。

「彼女はいったい……………」

「男だよッ」

「急にどうした？」

「いや、なにか言わないといけない気がして……………」

現在寝っ転がり、医療用ベットの上で、エルフナイン、三人の装者、アスカがいる。

理由は一つ、アスカの心、精神世界へとダイブする。

『この僕が用意技術と錬金術のコラボによる、精神世界のダイブかつ。彼の精神世界とはあの英雄の墓標をまた見るのか!!』

そんなことをウエル博士が叫んでいるが、下手をすれば廃人化する恐れのある行為。

だがやらなければいけない。

「聖杯、願望機を巡る戦い。聖杯戦争」

英霊七騎、七人のマスターを基本に、七の位を当てられた英霊達による、命を賭けた文字通りの戦争。

六騎のサーヴァントと化した英霊の魔力を元に、聖杯に魔力を貯め、願いを叶える願望機創造儀式。

だが、龍崎アスカが知るのは全てが全て、失敗、壊れた欠陥品と言う物ばかり。

この世全ての悪と言う英霊、アンリマユを聖杯が取り込んだことにより、何かを壊すことにより願いを叶える欠陥品になったりした。

聖杯大戦と言う、より大規模儀式では大地の地脈から大量の魔力も吸い、とんでもない事態を引きずり出そうとした。これは願いの内容の所為だが……………

ともかく、アスカ個人の意見は、

「イベントアイテムッ」

はつきり言ったらクリスに殴られた。クリスだけ意味が分かったからである。

「違うんだああああ、FGOのユーザーにとって聖杯は、好きな鯖のレベル上限突破する、貴重品なんだああああ」

「ゲームの話をしろと誰が言った誰がッ!?」

「オレはそれでジャックとクロエを最大まで上げた後はあの子達で前線を維持できるように工面し——」

「るっせえ黙れバカッ!!」

クリスにプレイへの情熱を語ろうとしたらまた殴られ、大人しく横になる。

ともかくとキヤロルが、

「話の流れから、聖杯には英霊の犠牲が必要不可欠。そして血が聖杯へのアクセスに繋がり、かつお前達の聖遺物は、例のサーヴァントが渡した物を使っている。十中八九聖杯が鍵になる。もしかすればガングニール達にも応用できる、リンカーにもな」

だからこそエルフラインも参加し、彼の精神世界へと出向く。いまアクセスできそうなのを、アスカが漠然とした感想で、三人が指名された。

「覚悟はいいか、どんな内容か、正直分からないし、援護できるか分からないからな」

「大丈夫デース」

「問題ないよアスカ」

「むしろあなたはいいの？ 精神世界、心を覗かれるのよ？」

その言葉に、

「オレの人生に女装写真以上の恥なぞ存在しない」

それに全員が何も言わず、スルーすることにして精神世界へと、リンクを始めた。

「デース？」

いつしか知らないリビングに四人はいた。

普通の家、というよりか、無機質で静かすぎる印象。テーブルも必

要最低限のものしかなく、静かすぎる。

「ここは……………」

と、マリアはすぐに振り返ると、足音ですら静かに、一人の大学生が現れた。

「デス……………」

「わあ……………」

二人は少しだけ頬を赤くする。物静かな、かっこいい男性だった。私服だが、カバンを背負い、スマホをいじりながら、淡々と自分が食べる朝食を静かに作り出す。

その光景に、

「……………この手の動き、アスカと同じ」

「デス？ そうデスカ調？」

「うん、アスカの料理」

「それじゃ、この男性が」

少しモデル映えしそうな、かっこいいに部類する男性が、

「アスカなのツ、あのアスカなのツ!?!」

マリアはびっくりしながらマジマジと顔を見る。

つい四人して見ていて、ここに来た目的を忘れていたが、すぐに我に返った。

それから大学生活だが、少し珍しく見る切歌と調。だが淡々と無関心に物事を過ごしているだけで、普通の大学生ぐらい。そうマリアからの印象だ。

何かしら話を終え、帰り道。

「! なんデスカあの綺麗な蝶々っ」

それに子供が追いかけてたりして、信号を渡る親からはぐれた。

「あっ、こら、なにしてるの」

「……………これって」

マリアは話を聞いている。アスカの前世は……………

その後、彼は、

よそ見運転する車に引かれた……………

舞台が暗転し、夕焼けの荒野に立っていた。

「ここは……………」

転がるは無造作に寝かされた骸や武器や防具。

雲の流れだけが早く、けして沈まない夕焼けの中、骸の丘で、無理矢理、磔にされたように立っている骸が血を流しながら立っている。

その時、三人の心臓が跳ね上がった。まるで何かに共感するよう

に。
「で、デス……………」

「この、感じ」

「アスカが、抑止力の力を、引き出した時のような」

「皆さんっ」

駆け寄るエルフナインだが、異変に気づき、骸から剣を取るため、丘へと走る。

骸の丘、たった一人だけ立ち続けるその人は、傷口から血を流し続けながらも立ち続けていた。

なぜか悲しく、そして静かに、剣に触れる。

「デスっ!？」

景色が二転三転する中、今度は、

「無限に広がる蒼穹……………ここは」

エルフナインは静かに彼を見る。彼は、

「やれやれ、こちらが招かなきゃ廃人と化していたところだぞ。エルフナイン」

そう言い、呆れた顔の兄がそこにいる。いや、その素顔をした、理想の抑止力、グラランド・セイバーが、自分を抱き上げていた。

「グラランド・セイバー……………」

「マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴ、君らにとっては長い。理想、もしくはただのセイバーと呼びたまえ」

そう言いながら、エルフナインを抱き上げて、静かに歩む。本人は少し赤面する。

その背後には、聖杯から無限に水があふれていて、その水を見てみると、

「聖杯からの神秘を見るな」

それに三人がハツとなる。

「君らは神秘に触れてしまい、魂が欲している状態だ。下手をすると清姫達みたいに、アスカを狙う獣になるぞ」

エルフナインを抱き上げているのも、彼自身で聖杯の水を隠している。それに、三人は真っ赤になり、やれやれと肩をすくめる。

少し離れた位置、理想的に椅子とテーブルがあり、各々がまるで座るべくあるように、高さなど調整された。理想的な配置に家具だ。

食べ物を出さないが、全員から見て、アスカを少し成長させたような姿の彼に、切歌と調は、内心見惚れていた。

「さて、一つ聞くが、なぜ君達は聖杯の中身を口にした？ まあ理由は分かるが」

「やはり、アスカさんの血は、そう言う意味になるんですか？」

エルフナインの言葉に、静かに頷く。

「骸の丘を見ただろ？ あれは全て俺だ」

持っている武器防具、全てが全て、そう言う結果だと伝える。

「しかしまあ、外と中の時間は僅かに違うが、同時に動く。外と繋がっているせいであいまいだ、できれば手短かに話したいが……」

困った顔で言う中、ボロボロの衣類。顔を隠すフードなど外して、静かに長くため息を吐き、そう呟く。

「なにか困ったことなの？」

マリアの言葉に、困った顔になりながら、

「君達は、理想の抑止力、異世界の仕組みに奪われ過ぎている」

「それって」

「どゆことデス？」

それは、

「君達の世界は、神により統一言語なんていうものを奪う、呪詛がかけられるほど、眼を付けられているんだよ」

それに全員が、僅かに思う。

統一言語を奪われた人類は、相手を殺す方法をしだした。

そんな事態を引き起こした神が、アスカを見逃している。

「さて、彼はどういう人間かな？」

問いかけるように話しかけて、彼の、特異な点を考え出す。

全ての聖遺物を扱える、異世界の特殊な役割を持つ魂を持つ人間。

その力を利用する人間。色々ある。

「少し、おかしいデスっ。なんでアスカは平気なんデスカ」

「なにより聖遺物、全てと同調できる。それは何か意味があるの？」

それにエルフナインも考え込む。

「全ての聖遺物と同調を、僕達は過去や平行世界で所有者としての適性があるものと考えていました……ですけど結局違う、異世界の物。僕達の世界、歌で起動する聖遺物、シンフォギアと全て同調する歌を知ることができる。まさかッ」

エルフナインの言葉に、抑止力は微笑む。

「統一言語など、聖杯の前では意味は無い。俺は全ての理想を押し付けられた存在、統一言語ごとき、俺にとって得意分野ですら無い。当たり前なことだよ」

それに全員が絶句する。

それではつまり、

「アスカさんは、統一言語を知る者」

「なら呪詛は？ バラルの呪詛はこの世界の人間であるのなら、彼も持っているはず」

そんな問いは、

「あの程度の呪詛、理想の前では無駄だ」

とてもあつさりど、神の呪いをあの程度と言う。

全員の喉が乾く中、静かに、

「さて、ここに来た褒美だ。マーリン……………いや、星と霊長の悪だくみを、少し教えてあげよう」
そう不敵に微笑んだ……………

55話・理想の聖杯

蒼穹の世界で、セイバーは静かに語りだす。それはまずは、

「俺が所持する聖杯。聖杯の特長は知っているね？」

「ええ」

マリア、切歌、調、エルフナインが静かに頷く。

「七人のマスターに、七の位、七の英霊が現れ、六の英霊の魔力でいたい願いを叶える願望機。彼の話だと、結局のところ、魔術師達の触媒程度だの、争いの切っ掛けだのと教えられたわ」

「違わないね」

そして椅子に座りながら、指を鳴らし、モニターのように画像が生まれる。

「保存庫の中に保管された記録。聖杯の一例、冬木の聖杯と言うものだよ」

「これが？」

「これは大と小に分けられて、儀式による聖杯戦争で勝利者に渡されるのは小の方。大の方は土地に根付き、長い年月をかけて、地脈の魔力を枯渇させずに、小聖杯を生み出す。言わば魔力炉心。これにより器さえあれば、だいたいの願いを叶える小聖杯を、定期的に生み出す。が、人の業は深すぎた」

「確か、汚染されたって言ってた」

「デスデス」

それに静かに頷き、ある青年を映し出す。

「彼の者は反英雄アンリマユ、とあるマスターが違反行為をして召喚し、聖杯へと捧げられた」

「違反？ それが許されたの？」

「違反と言っても、魔術師達が決めたルール。違反なんか簡単にできる。何とも人らしいことだ」

そしてその特性を説明する。

「彼の伝承はゾロアスター教にあり、我らが世界では生贄にされた青年を指す」

「生贄？」

「ある村で何も悪いことをしていない、かつ功績も持たない平凡な青年が、生贄として選ばれた。内容は悪行全てを彼の中に閉じ込め、彼の所為にすること」

「デス？」

それに切歌は意味が分からないと言う顔をするが、そう言う儀式と断言する。

青年がいるからこの世から悪は消えず、争いは絶えず、疫病が流行り、無条件で怨む相手として選ばれ、死んだ。

「酷い……………」

「そして彼の特性は、英霊の座に登録された。彼の怨念が、その伝承が、反英霊として彼を英雄と言う枠組みに収まった。それを取り込んだ聖杯は欠陥化し、全てを壊すことで願いを叶えると言うものに変わる。当たり前だ」

そして、別の聖杯もあると、色々見せる。

ある聖杯は人類外によりもたらされた太陽系最古の聖杯。

そんな聖杯を巡る記録も見せられた。

そして多くの無関係な人々の死。

「酷過ぎる……………」

「魔術の秘匿、そのためだけに、こんな所業……………」

「この程度で青ざめるのなら、血を濃くする行為なんて馬鹿げた行為も平気です。言葉だけでいいね」

それにマリアは目を見開く。同じ話を少し知っているからだ。

そんな世界で生まれた聖杯。そして、

「そしてここは理想の集まる場所。我が理想は血まみれの理想もある」

一人の男の子は、母と父の幸せを願い、地の女神にその身を捧げ、純なる想いなど無いと、国民に告げる儀式。母と父は涙し、弟達も泣いていた。

白銀の騎士は、最後まで自分を貫き、死する。それに一人の少女は涙を流す。

三姉妹の女神の為、全ての敵となり、世界を壊した男が死ぬ。末の女神は涙を流す。

流れる涙と、理想に死んだ魂を受け止めるは、

「この聖杯………」

今度は欲する心など無い、静かな悲しみしかない。

ここにあるのは悲しい力。

「誰かの為に戦ったのに報われなかった、救えなかった、助けられなかった」

「なのに、無かったことにもされる、記録と記憶………」

「そんな人達の思いも無視した、身勝手な言い分の力デス」

全員がそう呟く中、当たり前のように平然と、

「そうだ、押し付けられると言うことはそう言うことだ」

望んだ者もいれば、望んで得た力で無い者もいる。それにより、背負いたくもない重いモノを背負い、彼らは散り、愛する者達に涙を流され、そして血を流す。

それらの話を語るのは、果たして彼らの物語や想いを知っているか。答えは両者、極端と言える。深く考える者もいれば、いない者もいる。

それら全てを受け止めるのは、理想の聖杯。

そして、

「そしてここにある力は全て偽物だ」

そう本人が言った。

「ふざけないでッ!!」

テーブルを叩き、叫ぶマリア。

ここにある全てが偽物なら、彼らはなんなんだ。

愛する全ての為に戦い、時には悪、報われず、それでもただ愛した者達の為だけに生きた。

それが偽物？

「いまなら彼女の怒りも分かるわ!!」

「この人達、たとえ全く違う自分でも、心はここにある」

「大切な人への想いは本物デスッ」

「その人達を、貴方は偽物と、自分を偽物と言うんですか!？」
「ああ」

その時、反射的に三人の装者がギアを纏う。

「その顔で」

「あの人の顔で」

「そんなことを」

「「言うんじゃないッ」「デス!!」

反射的に攻撃をするが、無数の剣が降り立ち、その攻撃を阻む。

そしていつしか、骸がそこにある。

血を流し、傷だらけの理想がそこにいた。

「それでも構わない、愛する者に、輝く明日を渡せるのなら」

世界は荒野に代わり、夕焼けを背に、彼は立ち続ける。

三人や、エルフナインの前に立つは、理想。

足に刃を差し込み、無理矢理立ち、身体に如何なる攻撃を受け止める。

それでも武器を手放さず、けして後ろを見せず、ただ張り付けられたように、そこに在り。

「この身は押し付けられた理想。されど、俺達は望む、それ以上を」

ある者は竜になる。

ある者はもう一面の英霊としている。

ある者は理想を引き抜き、正義の味方をはり続ける。

ある者は大切な人達の為に、人類史を修復する。

ある者は月の王者になる。

そして……………

「神々だろうが世界だろうが、如何なるモノも、俺は倒すッ。大切な、愛したものを救う為なら、俺の命など不要いらんッ」

それがこの世界に生まれた、もう一人の抑止力と重なった。

瞬間、ギアは解け、世界は元に戻る。

「……………貴方達は」

「俺は涙を流させると知りながら、理想しか見えない愚か者。いずれ理想に溺死して、同じ末路に至り、あの溢れる聖杯の一部になる」

その事実には首を振りたくなくなるが、思ってしまった。

彼は、彼ならばきつと……………

「星と霊長は、この世界でも作りたくないんだよ」

「どういうこと」

「理想の聖杯、森羅万象、神々ですら手を伸ばすことができない、絶大なる絶対な神秘の塊。たった一人の男が血の歌歌う歌姫達に捧げるだろう、それを」

それに全員が戦慄し、拳を強く握る。

ここにあるのは、誰の物でもない。きつと、あの場面や、彼らのものだ。

それを手に入れようとしている。それを聞き、彼は静かに頷く。

「そんなこと可能なの……………」

怒りを飲み込み、静かに聞くマリアに、静かに頷く。

「この世界はアスカが異常の存在だが、俺なんだ。聖杯の中身には成れる。生きた英霊とでも言えはいいのか？ 君達は聖杯の中身を、聖杯に取り込まれる前に口にしたようなものだよ」

「アスカさんと言う中身を、聖杯にする気なんですかっ」

エルフナインの言葉に頷きながら、だからこそ、

「三人に血を接続させた、聖杯へのアクセスを強めさせた。聖遺物シンフォギアと合わせた」

「それは」

「理想の聖杯は無限に有りながら、唯一無二の物と言う、矛盾する概念だ。一つの聖杯から、夢幻と言う名で無限にある中身と繋がっている。いずれかの世で、俺と聖杯を繋げれば、全ての理想の聖杯を運用可能だ。そして」

「いまのアスカは最も深く、聖杯と繋がっている。聖杯の中身として一番っ。」

マリアの問いかけに頷きながら、

「あの魔術師は、君らギアを使い、龍崎アスカと言う、本来なら英霊の座に登録されないように、細工されている存在ではない彼を使おうとしている。中身と聖杯の繋がりを強化してね。理想の聖杯とギアが

かみ合っているからできる芸当だ」

「理想の聖杯と……」

その時、エルフナイン達が静かに考え込む。すると静かに水があふれだして、驚くことよりも早く、透き通った水の中にいる。

そして、

「シンフォギアと装者、二つを結び付ける想いは」

それに気づいた様子に微笑み、フードをかぶると血を流し続ける彼は、荒野へと還る。

「待ちなさいッ」

「貴方はずっとそこにいる気なの!!？」

「デスっ」

そこにいるのは永遠に一人にいるようなもの、そして永遠に血を流すこと。

誰かに愛されながらも、きつとずっと辛く、酷い人生だ。

「マーリン辺り、基本的に乗る気が無いから、君ら三人に同時接続して異常を知らせたんだ、うまくヒントには気づくんだ。まだまだ彼は危ない、いつ聖杯の中身に、英霊化するかわからないほど、人間性が壊れかかっているからね」

「そう言うことを聞きたいんじゃないわよっ!!」

血まみれのまま一人でいる男を心配する、心優しき者達に微笑む。

「俺も好きでここにいるんだ、あと」

静かに、

「俺の姿形、容姿は君らが好む、理想の英雄だ。俺がアスカなら、君らが理想的に想う人は誰か。そういうことだよ」

それを聞き、少しの間を置き四人が真っ赤になった。

「よく寝た」

最初に起きたのはアスカであり、すぐにエルフナインが飛び出して行った。

そして、

「ん、どうした」

「なんでもないわ」

「デス」

「うん」

そう言っているが、なぜか顔は赤く、見ていると頬と首筋の噛み痕がかゆくなる。

『アスカっ、悪いがいま戦闘中だッ。頼む、急いで出てくれ!!』

そして彼は駆ける。

その様子を微笑むのは、シエルターにいて未来に睨まれている花の魔術師。彼は現在いる、万象全てを知る千里眼を持っている。

新しい母親から送られたきぐるみパジャマを、実は裏で着たりしている義理の妹を、静かに微笑ましく、気配遮断で見ている兄がいるのも知っている。

「どうしたんですか?」

「いやね、乗る気じやないお仕事がダメになりかけてる、嬉しいんだよ。やっぱり同時同調はやりすぎだもん、気づくよね」

「なにをたくらんでるんですか」

「悪い事だよ、あーやだよ。私はハッピーエンド、人が幸せな結末が好きなのに、なんでこんなことしなきゃいけないんだか」

だが彼はそれすらも、

「他人事のようにしか思えません」

「……………そうか、それは少し……………いや、言う資格なんて、私にはない、か」

それにだけは、未来は少しだけ、彼は悲しいと思っている。それすら思うことしかできない自分に嫌気をさしている。それだけは分かった。

「……………」

何も言わない心優しい少女に、にこやかに微笑みながら、杖を持って外への道を歩く。

「どこに行く気ですか!?!」

「いや、アルカノイズが外で向かってくるから、少しお掃除にね」

音速、否、超えるのではなく、事実だけを取り出し、敵を穿つ絶対の貫く意味を放つ。

それにより飛行船を破壊、そのまま響達錬金術師の元へ降り立つ。銃弾をサンジェルマンが放つと共に、それが無数に増えて切歌と調、響に放たれたが、

無数の七枚の花弁が咲き乱れる。

「ッ!!」

『熾天覆う七つの花園』

二人は少しだけ頬を染めたが、すぐに我に返り、

「アスカっ」

「来てくれたデス」

「アスカっ」

「これで三対四ねえ♪」

「だが、まだありえないワケダ」

追撃するように弾丸も放たれた、その場に、

「いんや」

「三対九ですッ」

全てのノイズを倒し切り、装者全員が現れ、二人の錬金術師は少しばかり警戒度を上げたとき、

「ちよ、サンジェルマンっ」

「さすがに考え事はまずいワケダ」

サンジェルマンだけは上の空であり、静かにしていた。

「……………龍崎アスカ」

そう静かに呟く中、

「パヴァリア光明結社。目的はなんだ、命を犠牲に、何を成すッ」

「人の解放、神の力を用いて、バラルの呪詛を、月の遺跡の掌握!!」

そうサンジェルマンが叫び、全員が揃い、驚愕する。

「神の力で、月の遺跡を掌握? それで統一言語を、人の解放をする気か」

「そんなこと、できるんですか」

「いや、そもそも」

神の力で人が、世界が平和になるのか？

アスカの中にある疑問はそこに尽きる、なにより統一言語程度で平和になるのかと言う疑問だ。

そんな中、まだ咲き乱れる花卉を見つめるサンジェルマン。静かに、

「貴様こそ何者だ、龍崎アスカッ」

「なに？」

「その花卉、黄金鍊成を超える魔力を感じる、先ほど船を破壊した矢の一撃も。貴方の使うシンフォギアのみ、神の力へとたやすく近づくツ。その身に纏うは、本当にフィーネの遺産かッ!」

それに分かりやすい子は分かりやすく動揺し、全員が構える。

「そうね♪ 他の三食だんごちゃんや信号機ちゃん達、そして盾と槍ちゃんみたいな感じじゃないわねえ」

「三食だんごじゃないデスっ」

「信号機ってあたいらのことかッ」

「奏さん、私達だけ外されました」

「ああそうだな」

それでも冷静のまま、サンジェルマンは龍崎アスカを見る。

「オレはただの融合型」

「融合型程度でも説明はできない。鍊金術や神の力、全てを超えるその神秘」

「悪いが、犠牲をもって何かを成そうとする輩に、詳しい説明はしたくない」

「魂にまで刻まれたバラルの呪詛、それにより生まれた不平から人々を開放する為」

「……………バカバカしい」

それは静かに、刀剣が乱舞する。

「犠牲を持てば、何かを手放せば、自分が苦しい選択を選べば、必ず世界が救われる保証なんて無いツ。悪いが止める、例えそれが、悲しい現実を撃ち砕くためであろうと」

サンジェルマン達を見ながら、その時、三人の装者は、その背中が、

夕焼けの中で立ちながら血を流す背と重なった。

「この身は無限なる夢幻の担い手ツ!!」

その叫び声と共に、理想と理想、そして理想がいま駆けだす。

56話・愚者の石と愚者の意思

戦いが始まるが、九対三と言う事態だが、

「トレス・オン投影開始ウウウウウウウウ」

たった一人が八人守りながら、戦っていた。

「アスカッ」

「チツ、どうなってやがる」

『向こうは賢者の石を使ったファウストローブだッ、俺が使っていた物よりも強力なのは予測できていたはずだが』

「ロンの槍と円卓の盾も押されるのかよッ!!?」

盾でみんなを守るセレナ、槍は強力無比な一撃を放つが、空振りなどを繰り返す。

他の装者は錬金術師達に押されているが、一人がそれを支えていた。

水色の光を貫く槍を投影したり、けん玉のような武器に対して、矢で僅かに軌道を反らしつつ、銃による攻撃は剣で弾く。

「いっやくんっ、たった一人であーし達の攻撃をく」

「全て背負って、無茶苦茶なワケダア」

「やはり貴方は、シンフォギアではないか」

集中が一人へと向けられだす。彼女達からすれば、アスカを倒せば一気に傾く。当たり前前の戦法だ。

そんな中、切歌と調が、

「！ 待てっ」

「アスカばかりに」

「背負ってもらえばかりいられない、デスッ」

抜剣をし、イグナイトモジュールになるが、

「浅はかなワケダッ」

その時、簡単な魔力を波動だけで、イグナイトモジュールが弾け、切歌と調に無理矢理はがされた影響でダメージを負う。

「切歌、調っ。貴様らああああああああああああああああ」

「もく女の子がそんな声出したら、メくよんっ♪」

ゆるものを薙ぎ払う武器、全く誤差無く同時死角攻撃の双剣。それらがまさか」

「全部理想の抑止力にとって、三分の一にすら届かない。通常攻撃だ。当たり前だろ」

そんな物が人の手で扱えるのかと思う中、通信が入る。

「どうした」

『司令、小日向さんが、マーリンを捕まえました』

「なんだとツ!? どこにいたんだっ」

『はい、スーパールの若奥様とたわいない話をしていたところ、ご友人達と共に捕獲したと』

「あれは本当に歴史に名を遺す魔術師かアアアアアアアアアア」

キャロルの叫び声の中、装者達も交えて、マーリンから問いただすが、

「そう言われても、それでも三分の一すら届かないよ。だいたい、理想の聖杯へアクセスを無理にさせた君らなら分かるだろうけど、龍崎アスカと言う器だけでも満たないって」

その言葉に、マリア、切歌、調は静かに考え込む。

「それじゃ、星と霊長は」

「リスク無しに、それに属する物が生まれ出る可能性があるからさ。どうにかできるか確かめろが私にされたオーダーで、面倒だからさ。私はハッピーエンドが好きだし。もう構わないって言ったんだから、できたらできたでいいと思っただけ」

それでも知ってないと危険と思い、三人に少し触れてもらい、少しだけ分かるようにした。

「あまりの力に悶絶する女の子も見たかったけど、見えたのは裸のローランリスペクト錬金術師だったけどね……ん、アスカくんどうして後ろにまわ」

そのまま腰を取り、熊を仕留めた後頭部強打。その後、腕を曲がらないところに曲げながら、技をかけている。

装者達はその後、エルフナインが何か手立てを見つけて去った後

で、キャロルと共にマーリンを監視する。

「念のために聞くけど、オレで聖杯を作る気は前のり？」

「いいや、そんなに期待してないよ。できたとしても三分の一すら届かないし、英霊の座に登録して、まあまあ使えるようにする気だよ」
「まあまあ使えるってだけで、どーしてこう、回りくどいことばかりするのかね」

データをまとめている藤堯の愚痴に、

「そりや、不老不死どころか、世界創造するエネルギーがノーリスクで手に入るからじゃないかな？」

全員の時間が止まった。

だがいち早く動き出すのは、やはり彼だ。

「いや、平行世界での『俺』の功績考えれば、オレを中身にし、英霊の座に登録して使えるようにすれば、世界の一つ二つの命まかなえてもおかしくないか」

「神すら倒し切った者もいるんだ、それでもまだまだ足りない。グランド・セイバーはまさに無限の魔力と接続された、けてして人の世に現れない幻霊最強の英雄だよ？ 何か神の力でなにか大変な話してるけど、それら全部、やり方次第じゃ君で終わるからね」

いまとてつもない情報だけ入った気がする。キャロルと共にアスカはげんなりし、友里達は驚愕していた。

「そしてやっぱりどっか行ったマーリンであった」

そう言いながら、海の施設。深海にて『深淵の竜宮』と言う施設跡地から、『愚者の石』を探す作業が始まる。

愚者の石とは、響がその身にガングニールを宿していたころ、身体から生まれた石であり、何も力は無いが、物が物だけにここに保管されていた。

「だが俺がここを襲撃した際、壊してしまったから、ここから取り出すとは……………」

海上で地平線を見ながら、響のかさぶたみたいな石を探すのだが、「オレ、その時死んでたから……………」

石ができて始めていた時、身体と魂をグラウンド・アサシンに真つ二つに斬られていた。それを思い出したのか、切歌と調、そして響が血の気が引いて、青ざめていた。

「そう言えば、聞きたいことがある」

「なんだキャロル？」

海上基地で作業するキャロル。その手伝いをする中で、キャロルは、

「簡単だ、異世界の知識と価値観を持つお前だから聞きたい」

そう言いながら静かに、

「人類は統一言語を取り戻して、平和になるか？」

「無い」

即答だった。それには少し驚いた。

「なぜそう思う」

「ん、別にいいか。せつかくだから通信機で」

昔々、ある所に全知の過去も未来も見通す目を持つ、王がいた。

王は生まれた瞬間から王であり、神からそう定められ、王として生涯生きた。

王には七十二の柱とも言える配下がいて、王と共に世界を、人類、星を見る。

親に殺され、親を殺したり。恋を知らない者や、恋を捨てる者。

裏切りに嘆き、裏切りに生きる。家族を知らず、家族を捨てる。

成功を求め、成功を憎む。信仰を守り、信仰を嫌う。

同胞を愛し、異人を軽蔑し、叡智を学び、無知を広げ、怨恨を育て、誤解に踊り、差別を好み、迫害に浮かれ、憐れみを憐れんだ。

「それが人間と言う生き物だと、七十二の柱達は思った」

「七十二の柱……まさか」

キャロルは七十二の柱と言う言葉、通信機で装者や司令達も聞く。

醜い生き物、それが人。ただそれでいい。人間は万能では無い。みな苦しみに飲み込み、矛盾を犯しながら生きるしかない。

「だが万能の王は違う。過去も未来も見通し、解決する術を持つ。万能の王に、彼らは聞く。笑いながら、この世全ての悲劇を知り、知らないならいい。知りながら、笑う万能なる王に問うた。『それを知つてなにも感じないのかッ、この悲劇を正そうと思わないのか!』と」
そして王は、

何を感じるか、彼は全く理解することは無かった。

そう、王は人を整理するだけだと、彼はそう割り切っていた。
聞く者達の反応を無視しながら、続ける。

「王からすれば、自分には関係ない話だからね。なにより理解もできない」

彼はそもそも王であるため、人としての感性を持ち合わせていない。

何故自分が彼らを救わなければいけないか、理解できなかった。
自分には関係ないことだから、という次元での話では無い。本当に
なぜしないといけないのか、理解することすらできなかった。

「なんだって……俺でもどうかとおも」

「イザークさんの悲劇も、その王はへえ〜と思いつつ見たと知った
ら?」

「!」

「そう言うもんだったんだ、魔術王は」

ゲームでしか知らない、悲しき王を思い出す。

だが、魂が泣いている気がする。

「彼は王なんだ、人じゃない。神とは人を戒めるものであり、王は人を
整理するもの。統治は完璧さ、王としてだけに生まれた王だから。た
だそれだけだ。それ以外の生き方なんて無かった」

「……………」

「人は知ったところで実害が無ければ動かない、だからなぜ自分が動
かなければいけない。彼は本当にそう思った。故に」

七十二の柱は知った。

世界は神が生まれた時点よりも前から間違っている。間違えたのだ。

だから、

「人類史を総てをエネルギーに換えて、神も世界も生まれる前にさかのぼり、その間違った事実を変える。最も正しく、最も間違いな答えにたどり着いた」

「…………お前は」

「俺はどちらでもあり、どちらでもないと思うね、俺は正義の味方じゃなく偽善者だ。手の届くものしか救えない。俺は押し付けられた理想だ、身勝手な願いから無理矢理作られた」

その言い方は押し付けられた者としての、問いかけであり、一人の俺は関わっている話だ。オレがどうこう言う話ではない。だからこそ分かる。

「人が統一言語があり続けていれば、それでなにも無い世界ができていたと理解できる」

誰もが理解し、お互いが分かる世界。

だがそれは、分からないと言うことが分からないと言うことだ。

「全てが全て分かると言うことは、一体なんで平和に繋がるか、それこそ分からない。何がいい？」

全ての種族が理解し合うと言うことは、分からなくていいことも分かる。

それはきつと、おかしな世界だ。

オレは分からない。空が飛べないと言う悲しみが、水中に居続けられる悲しみが。

逆もそうである。

「きつとオレが知る、とある王様なら」

『この我こそが王なり、その我の心を知るだと？ 不敬だ死ねい』

「ってね。そもそも悪と言う感情ですら分かるんだ。全てが分かるなんて、ふざけるな」

分かるはずがない。

「あの、愛する人に裏切られ、竜、蛇へと変わった娘の想いが、100を救う為、10を犠牲にし続けた男、奇跡にすぎるか世界を救えないと思ひ裏切られた男、国を救いたいと願った少女……分かるか？分かるはずがない。ただの言葉程度で分かってたまるかッ」

聖女の思い、英雄達が信じて駆けた思い全て、言葉程度で理解されるはずが、無い。

いつの間にか顔が怒りに歪んでいる。そう分かりながらも止まらない。

「統一言語程度で世界が平和になるのなら、オレからすれば分からないことを分からないだけの世界だ」

生まれる前に死んだ、生まれた後の幸福を知らない少女達も頭をよぎった。

多くの英霊達が、いや、

目の前にいる、父親を火あぶりにされた妹を見る。

「人の心が言葉程度で全てが分かる？ そんな世界なんて無い、あつていいはずない」

この世界の神は、人の進化に脅威や不遜とした。だがそれは違う。

「分からないことから、知り、理解し合うことを知った世界こそ、脅威だとオレは思うがね。故に理想が生まれたんだから……」

そうだ。理想とは分かり合えない中から生まれた思いでもある。

そして、根源に近づいた『俺』は、神すら滅ぼす愚者になった。

「理想を語り、理想の為、努力する者が愚者なら、オレは愚者を愛するよ」

「……………」

言葉だけの理解を否定する様子を見ながら、キャロルは内心、心が荒れていた。

（こいつは、確実にこの世界の神を否定する思考の持ち主だ。パラルの呪詛なんてものを用意する奴が、こいつを放置するのか）

否。

手出しできない。

そう答えが出ている。

世界の一つや二つが、本当に世界そのものの創造に繋がるとしたら、すでに神すら超えている。

(こいつのことは絶対に各国政府機関に知られるわけにはいかないッ。馬鹿な奴が戦争を引き起こすだろうが、そんな次元じゃないッ。世界そのものが神ごと消される可能性もある)

急に、あの優男ですら恐怖に思える。あれもその中に入る、グラウンドなのだから。

(ともかくいまは患者の石だ、パヴァリア光明結社を潰してしまわな
いと)

すでに何かしら疑問を龍崎アスカに抱く者達。早く片付けて対策を考えないといけないと、そう思う。

そして突如、ノイズが現れた。

「!」

キャロルがすぐに道具を取り出そうとしたが、いまの自分はそう言った物の所持は簡単に許されない身。いまは探索で人が多くいる為、関係ないことも踏まえ、置いて来た。

自分の失策に気づくが、

「妹に手を出すな」

そう、ギアを纏う前に、ノイズを切り刻んだ。

目の前にいるのは、ただの人で無くなっていく兄だった。

「キャロルは避難誘導」

「……………ああ」

こうして錬金術師の襲撃があったが、二人だけであり、アスカが狙いで無く、ギア破壊の為だったが切歌と調の合わせ技のおかげで一人撃退。その後引いた。

そして愚者の石を探す中、ずっと頬をかくアスカ。

「おい、血がにじんてるぞ」

「ん、ああ悪い」

「ごめんなさい、頬のは私が……………」

「気にしない気にしない」

(私、アスカの頬にキスしたんだ。キス……………えへ……………)

キャロルがなぜか兄を殴る。

調は心配する中、外すと調の痕があるため外せないが、血がにじんで、指に触れた。

「ん？」

別に血は、ついてない。

「見つけたデースッ」

そう泥の中から見つけ出した切歌が、泥をはね飛ばした時、調の顔に当たりそうなので前に、

「やあやあ、みんなご苦労様」

いいところで盾が現れたので、そのローブを掴むが必死に抵抗したため、自分を盾にする。

「君ねっ、男なら自分を盾にしなよっ」

「貴様を見たら貴様で泥を阻めと天啓を得た」

「神なんて信じてないくせにッ」

エルフナインも大急ぎで動き、泥にこけ、あーあと言う顔になりながら、

愚者の石を、

手に取ってみるアスカ。

「確かに結晶だな」

「……………だね」

そう微笑む花の魔術師。ついでに捕獲して、エルフナインとキャロルは加工に入る。

こうして海上の作業は終わった……………

57話・特訓と過去

マーリンを捕獲し、緒川さんに渡して汗をすぐに流す。
包帯を替える為、鏡を見ながらだが、

「……………まだ痕あるってすげえな」

しっかりと噛み痕はまだあり、怪我なのでしっかりとしておく。

着替え終えて、みんなを持っていたら、司令、風鳴弦十郎と共に、全員が現れた。

「司令？ どうしたんだ」

「決まっているだろツ、特訓だ!!」

まず目の前の理不尽に驚こう。

「気を付けろツ、敵は人じゃねえからな!! 平行世界ではギリシヤの大英雄の超狂化を跳ね除けたし、こつちじゃ死そのものの暗殺者教団の初代様と渡り合ったモノホンの化け物だツ」

そんな忠告も意味なく、マリアは何かギャグのように吹き飛び、響も飛び、翼は指で白刃取りで飛び、クリスは弾幕をすべて回収されぶっ飛び、切歌と調はコンクリ破壊の余波で吹っ飛び。

「人間じゃねえ……………」

「英霊ですね？ 司令さん英霊ですね？」

「いや、旦那は人間だ」

そう言いながらも本気じゃないのを見ながら、

「後は奏、セレナくん、アスカツ。全員の中でイグナイトも愚者の石の加工もできない特殊な品。君ら事態が強くならなければいけない!!」
「分かっているが、本気出し過ぎると殺すんだよツ。こつちはさすがに宝具、人の身超えた神秘だぞ!!」

だが、

「ならば、我が相手を進ぜよう」

全員の背筋が凍り付き、アスカが困惑する。

暗闇がいつの間にか現れ、そして、

「久しいな……………」

「な

ん

で

さああああああああああああああああああああああああああああああ

「私と呼んだよ」

「俺が頼んだッ」

「旦那っ、なにマーリンに頼みごとをつ」

吹っ飛んでいた装者もびっくりする中、その中で、背後からの気配に気づく。

「清姫？」

「はい、不肖清姫。貴方様の後ろに」

すぐに飛び出し、トレーニング室の扉へ斬りかかり、逃走を試みるが、

「大変だみんなッ、開かないってレベルじゃねえッ!？」

「はっはっは、色々強化済みだっ。英霊の皆さんに感謝しなければな」

「アスカ様、逃がしません。さあ、さあ♪ 少し物陰に来てくださいな……………」

そう腕を組み、豪快に笑う司令に、耳を疑った。

瞬間、現れる影達により顔が引きつる。

「私の力が必要らしいので来ました。思いつきり来てください」

そう言い、血管浮き出て握りこぶしを作る聖女マルタ。

「ふむ、槍は一人か。まあ適材適所か」

紅い槍を二つ持つ、影の女王。

「任せてください」

星より生まれ出た聖剣を所持する、騎士王。

「ローマである」

ローマ。

そしてクロエが、

「で、特訓ってこゝとゝは……………」

唇をなめる少女。

「王の名の下、いざい」

そう微笑みながら、まだ理想の聖杯でも望んでいるのだろうか？
そこにオジマンディアス様が隣に座る。

「なかなか豪快な男よ、気に入ったっ」

「オジマンディアス」

「ほう、我が名を呼び捨てか。いや、汝なら良いか、理想の抑止、我がマスターよ」

そう言いながら、不敵に笑う。本当に何が目的か分からない。おそらく自分らの存在で察することが、自分に課せられた難題だろう。

理想の聖杯が、星と霊長、ガイアとアラヤの狙いだが、確保して何を成す。

（無い物を取り出すのが理想の聖杯と言っているいいからな、幻想の中で作られた聖杯だ。都合の悪いことがあれば、都合に合う力でも引きずり出す気かもしれない）

使い道はたくさんある。そう思いながら、彼らを含む特訓をする。プラスになればいいんだが、なるのだろうか？

とりあえず、響が素の状態で林檎を握りつぶした。

——
???

クリスとマリアが、とある事情から席を外す中、俺だけがトップサーヴァント達による、特訓を受けている。

何とか全部防いだり、クロエよりもスピーディーに投影もとい、武器を取り出すことができるようになりつつある。

「約束された……………」

「取り出すは無限の星ッ」

「勝利の剣アアアアアアアアアアアア」

「永遠に広がる輝きの星剣ッ!!」

取り出したのは、聖剣全てを纏めて振り下ろす一撃。

全ての聖剣の意味が刻まれた剣の顕現に驚きながら、アルトリアは引く。

「見事です……………まさかここまでとは」

「はあ……はあ……オレはこれでも、男ですからね」

取り出した聖剣は保存庫に返還された感覚がある中で、少しずつ保存庫と言う、危険過ぎる力に驚き、狂気に落ちかける。頭を少し叩き、今度は精神を安定させる修行でもするかと考える。

彼らと戦って分かった。個人が、国が持つには大きすぎる力だと理解した。

「ん〜」

クロエが少しだけ首をかしげながら、響がマルタとの特訓でタラスクをぶっ飛ばした後に話しかける。

「どうしたのクロエちゃん？」

「そう言えば、お兄さんって、どの抑止力？」

「？ 理想の抑止力ではないのか」

翼がそう聞くが、セレナもあつと呟き、静かに会話に参加する。

「私達の世界での抑止力って、アラヤ、霊長の抑止力と、ガイヤ、星の抑止力って分けられてるのよね」

アラヤは無意識下の集合体、霊長の抑止力で、その役割は人類の存続。

守護者と言う、カウンターガーディアンを使い、人類の自滅を回避する。

ガイヤは星の抑止力。星が思う生命延長の祈り、星を守る抑止力。

だが、その話を聞き、翼が首をかしげた。

「なぜだ？ いまままでの話では、アスカの理想は、その二つの意思から外れていると思うのだが……」

「うん、それよそれ。私もそれが分からないわよ。抑止力として理想の聖杯や、保存庫って言う、遥かに考えつかない力を所持してるんだもの」

「？ どういうこと」

調が聞くと、セレナも首をかしげた。

「抑止力として、星と霊長に使われている身ですけど、その二つすら凌駕する力を持つてる……」

「そう、言ってしまうえば、主人公でもないのに勇者って言う感じなのよ

ね」

それに納得できず、もやもやしている。いまだって、星が創り出した聖剣と、その幻想から創り出された形無い聖剣に形を待たせ、それを振るった。

「理想の抑止力だからって、何でもありすぎだから」

「それは当たり前だ」

そう言うは、影の国を治める女王。

「理想の抑止力は、アラヤやガイアの下にいなながら、お互いの抑止として存在する」

「デース？」

首をかしげたが、それを無理に治され、スカサハは続けた。

「霊長は人類の破滅の回避、星は星の生命破滅の回避に抑止力が働く。もしもその二つがぶつかるような案件だった場合、どうする？」

「そうか……アスカはその二つが都合悪くぶつかったとき、何が何でも都合よくするため、二つに仕える抑止力ってどこか」

奏がへとへとになりながら呟くと、そうだと紅い槍を回しながら告げた。

「どんな現実も都合よく、理想的に解決させるのが理想の抑止力だ。理想像を押し付けられたとはよく言う。故に奴は最強であり最弱。どうあっても二面性を必ず二つ持つ存在」

「悪役も正義の味方もやらされるか」

「ああ、そして……ここはそこから外れて、最も自由にできる時期だ」

それに少しだけ睨むような顔をする者もいれば、驚く者もいる。

「それって」

「おしやべりが過ぎたか、まあそう言うことだ。深く考え、そしてあまりあれには頼るな。異世界ですら厄介ごとを押し付けられ続けるのは、もはや笑えんぞ」

そう言う。それは、

(抑止はアスカの理想の聖杯を手に入れる気まんまんってことか)

奏はそう思いながら、考える。セレナも、

(アスカさんと言う器から、理想の聖杯を手に入れ、何かあったとき、自分らの世界で使うように用意する……その方法はなに?)

まさかシンフォギアを使い、取り出すなど無い。となると、(本人が望んで、聖杯に成るしかない。けど………ううん)

もしかしたら、自分の命を聖杯に変換し、聖杯を顕現してどうにかする。などと言うバカなことをする可能性がある。あの人はそういう人だ。

だからこそ、セレナは盾を構え、ロムルスローマの前に立つ。

「覚悟ローマの顔だ………行くぞ、愛を持つ戦士ローマよ」

時折ペアを替え、装者のデュエットによるユニゾン攻撃を増やす為、連携を合わせたりする中、いつの間にかアスカは外れ、装者と向かい合う。

そんな中、使うのは宝具の数々、山のように取り出した幻想に、響を初め、全員吹き飛ばす。

こうして時間は過ぎていく。

——
???

それはとある外交、建物の外で帽子をかぶり、スポーツドリンクを飲みながら用事が終わるのを待つ。ローズピンクの男。

呆れながら建物を見ながら、静かにしていた。
なぜ彼はここにいるかと言うと、

『頼む、側にいて欲しい。外まででいいから………』

雪音クリス、音楽家夫妻の娘で、歌で世界を平和にするため、ボランティア活動している時に、紛争に巻き込まれた。

その際に両親は死亡。その原因を作ってしまったのが、

(あの時、オレらを案内した少年のお姉さん。でいま会話中か)

あの時、オレが剣を使い助けた村人の中にいて、彼女と再会。

現在は一時的に亡命し、国元に戻る前にクリスに会いたいと連絡が入る。いま翼と中で対面している。

その時、クリスに近くまでいて欲しいと言われたので、こうして時

間を潰す。

「……………助けられなかった命か」

傷の治りもなかなか治らず、少し頬を絆創膏の上からかく。
そんな時、

「……………」

金属音が響き合い、そのエネルギー波を弾いた。

「へえ、ギアを纏わないで剣を使えるのね、あーた」

「男女錬金術師ッ」

一番年上のパヴァリア光明結社。錬金術師が現れ、睨む。

「……………そう言うことまで分かるのね」

「テメエ、こんな町中で狙って来るか……………」

「あーし達も少し余裕が無いのよ、命は助けてあげるから、大人しく壊れてくれないかしら？」

「悪いが、テメエらのやり方を」

パチと言う音と共に、ギアが身体に張り付く。

その様子に眉を動かすカリオストロ。

「……………貴方、ホントシンフォギア装者？ 何か様子が」

「……………この身は」

無数のアルカノイズを取り出すカリオストロに対して、無数の幻想を取り出すアスカ。

その瞳は竜であり、駆け巡るは歌では無く、魔力であった。

「無限なる夢幻なりッ」

戦いが始まり、クリスと翼と共に駆け巡る中、建物を背にしたりするカリオストロだが、響達が駆けつける。

「このまま逆転劇デスッ」

そう叫ぶが、カリオストロはすぐにアルカノイズのコアを投げる。

それと共に翼とセレナ、調と奏、響と切歌。アスカが、

「また異次元空間ッ、しゃらくさいッ」

無数の槍のような矢を取り出し、またバチバチと身体から魔力が音を立てる。

(なんだ？ だがいまは気にしてはいられないッ)

そう思い、全てを貫通する意味を持つ矢を放ち、すぐに出て来るが、
「マリアっ」

ボクサースタイルでマリアと戦うカリオストロの間に、瞬間的に割り込み、拳を短刀で防ぐ。

「まさかの格闘スタイルか、元男っ」

「アスカッ、って、元男なのっ!？」

「錬金術における完璧な身体に変わったの。あーたもそういう意味じゃ、私より可愛い娘になると思うわよ♪」

「オレは男だッ」

短刀と共に、脇差も取り出す。それと共に、身体から電流が漏れ出ているように魔力が出る。

その様子にマリアは、

「アスカ、その状態は」

「分からない、だが、問題ないッ」

頭の中に必要な武器のリストが浮かび上がる。すぐに取り出せる武器と、取り出せない武器や、特徴、能力。そしてその武器を使用した戦闘経験。

それら全てが湯水のようにあふれ出始めている。

マリアはすぐに自分のギアを見た。まるで鼓動するように、アスカの力に共鳴していた。

「アスカだめっ、貴方の力とギアが共鳴しているッ。このままあの魔術師の裏にいる存在に、いいように使われる気!？」

「それでマリア達が救えるのなら、問題ない」

「アスカ」

瞬間、それを持ったまま加速する。斬り合いと殴り合いを繰り返しながら、カリオストロは笑みを浮かべる。

「女の子っぽいと思ったけど、いい男ねっ!!」

「戯言を言う暇はあるのか？ このままではオレ達はあんたを殺す」

「あらなくに？ 殺したくないって言うの？」

「ああ」

高速戦闘の為、マリアは立ち上がり様子を見る中、拳を避けながら、短刀で防ぐ。

指輪に激突し、ギリギリと音を立てながら、

「殺したくないなんて、夢物語よ」

「オレは理想、理想を叶え、理想に順じ、理想に溺れ溺死する。問題ない、その為ならオレは」

その時、世界が凍えた。

「神も世界も殺し続ける無限の可能性だ」

カリオストロは背筋に冷たいものを感じながら、僅かに笑みを作る。

「ならアダムやサンジェルマンのことは問題なさそうね」

「!？」

その瞬間、格闘戦に入る中、弾幕が張られ、マリア達の元に下がる。

「クリス」

「遅いつ、けどいい顔してるから許してあげる」

そう言うクリスはいい顔になり、クリスが出てきた道を見ると建物で、逃げ遅れた人がいて、見覚えがあった。

それに微笑みながら、

「クリス、マリア、盾は任せろ。行けるか？」

「へっ、問題ねえよ。特大サービスタймだっ」

「いいわよ、そういうの嫌いじゃないっ」

「なにをござやござやとッ」

ハートの形をした光弾を放つが、アイアスで防ぎ、イグナイトモジュールを纏う二人。

「嘘っ、ラピス・フィロソフィカスの輝きを受けて、どうしてッ!？」

「昨日までのシンフォギアと思うなよッ」

「アスカっ、建物と一般人はお願い!!」

「応ッ」

ユニゾンによる、魔弓イチイバルと銀腕アガート・ラームの共鳴を

見ながら、盾と剣を壁のように配置する。

そしてカリオスト口の相打ち覚悟による、攻撃と激突し合う二人の技。

だが、姉弟の声援を聞いた瞬間、それを貫き、こうしてカリオスト口との闘いは終わった。

「だがイチイバルにも共鳴が起き始めている事、誰も気づかないのは、悲しいね〜」

そう私は言いながら、建物の中から姉弟を助け出す雪音クリスちゃん。おや、なぜか背筋が寒気が走ったようなりアクション。若い子は冷やすとまずいのにな。

「……………あーた何者、あーしを拘束して、なにが目的？」

草に捕まり、魔術の鎖が拘束した彼女？は睨みながら私を見るが、私は微笑む。

「目的？ 私の目的は理想の聖杯を、この世界に顕現させることかな？」

「理想の聖杯？」

「うん」

何気ない会話のように、静かに、

「神も世界の意思すら欲する、顕現するものとして、最新にして最古の聖杯。そして」

歌姫の涙と一人の少年の命で生まれるものだよと付け加える。

彼女？は青ざめる。私は至って普通に微笑んだだけなんだけどな

「ま、とりあえずできなければいいけど。できそうなんだよな〜」

「あーたは」

「はい」

それ以上は言わせないように眠らせ、アヴァロンへの入り口を作り、彼女？を入れておく。

来るべき時が来る。

歌姫の涙でできた、絶対無慈悲の聖杯。

「あーあ、嫌な仕事だよ」

そう愚痴りながら、今日は新宿の居酒屋にでも出向くことにしたよ。せっかくハッピーに物事が進んでるのに、あーやだやだ。

そう言っつて、花の魔術師は夜闇に消えるのでした……………

58話・歌姫の聖杯

前の戦い。結果的に対処は成功するが、ギアが対消滅の反動でクリスとマリアのは調整に入り、キャロルとエルフナインは仕事部屋で付きつ切りなつた。栄養価の高いスープなどを用意しておくことにした。

装者組も英霊連合はいないため、仮想ノイズでのトレーニングに入る。

軽い食べ物を用意しながら、モニターでトレーニングの様子を見る。いまは翼と調がユニゾン特訓をしているが、

「緒川さんか」

一般人の動きでは無く、アサシン系統の忍者が画面で調と戦っていた。

「……………一般人ってなんだろう」

調が無数の丸鋸を放つが、空蟬の術で躲された。だが命中したことを考えて、やりすぎの為に、トレーニングが止まった。

その時、調の顔が悪い。

(調のユニゾンだけ、切歌以外まともに機能してない、か)

そう思いながら、別の場所に装者が移動することになった。

レイライン関係、敵の思惑を調べるために移動する。

「兎が多いな」

「デスデースっ♪」

神社は狛犬の代わりに、兎が多い。神社に来て、周りを見て回る。ここに来る前の道中のことを思い出す。

「神、いずる門の伝承ね」

バイクに乗りながら、装者全員で移動する。パヴァリア光明結社は大掛かりな錬金術を使用する可能性があり、それは神関係。

キャロルもレイライン、竜脈を使った錬金術の可能性から、無関係と切り捨てられないと、こうして出向く。

そうしているところの神主さんか、老人が現れ、中へと案内される。

「いやいや、皆さんを見てみると、事故で死んでしまった娘夫婦の孫を
思い出しますな」

「いや、うちら上から下までバラけてるぞっ」

クリスはそう言いながら、とりあえず中に入り、話を聞く。

ここを初め、他の神社。関係する場所を繋げると、オリオン座のよ
うに星座がレイラインでできあがり、それが神出門というものらし
い。

敵の目的は神の力を得ることであり、あまり無視できない。キャロ
ルもレイラインを用いて錬金術を行おうとしていた。

門よりいずる、神の力と伝承、古文書なり、色々見せてもらう。

「でだ、神社に泊まることになりました」

女の子八人十男一人で泊まるのだが、

「それでは、ここを好きに使ってくださいね」

そう笑顔で言う神主さんに何も言えず、大部屋に布団が九人分引か
れていて、全員が顔を背け、どうするか悩む。

「どうする」

「いまさらアスカだけ男だつて言えないわよっ」

「ならアスカもここで寝るしかないな」

「お、男の子と一緒に寝るの奏っ!?!」

マリアが真っ赤になりながらそう言いながら、とりあえず本人は静
かに心を無にしている。

「とりあえず、アスカの隣は私で」

「響、そこは翼にしたいんだがあたしは」

「なんでなの奏ツ!?!」

「仕方ないですね、私が隣に」

「セレナっ、そんなの私が許さないわよ!!」

「なら私が隣に寝るデス」

「切ちゃんの隣は私だよ」

「…………オレは男のはずだ」

結局端っこになり、奏が隣に寝ることになる。

(アアアアアアアアアアアアアアアアアア)

「すー……………」

なぜか切歌が隣にいて、抱き着いている。色々見えて、そして抱き着いているため、触れているし感触がある。

(この子はッ、いやこの装者どもおおおおおお)

調と翼はいないが、響もはだけているが、クリスが……………

(殺されるッ、見たぞ物凄くッ。なに!? もしかして全員付けてないッ!!? 着物の寝間着だからっておいしい。助けて、とりあえず抜け出て、外に出る)

その時、クリスや響を思いっきり見た。

奏も爆睡していて、マリアは古文書の和紙を鷲掴みにしている。

(うまいことやれと誰が言ったこの子はッ)

このままとはいかず、外すと今度は自分を捕獲して技をかけて来る。

「んんっ」

(マリアああああああああ、色々、色々触れてっ。だめだつてえええええ)

抜け出した時、着物がはだけて見てしまう。静かに出て、戸を閉じ、その場に縮こまる。

「……………俺殺されるかもしれない」

翼と調がいらないが、報告か何かだろう。自分はとりあえず、

「着替えてコンビニで時間潰そう」

そして近くのコンビニを検索して、夜の街に出る。

それがこんな事態になった。

「ヒポグリフッ」

ギアを纏い、高速道路を利用する錬金術師、プレラーティと呼ばれるていた者と対峙する。

けん玉のようなもので走行する様子に、何でもありすぎると思いながら、ヒポグリフで低く飛行しながら、迫る。

「シンフォギアっ、お早い登場なワケダっ」

忌々しくそう言いながら、紅い槍を取り出し、静かに手綱を伸ばし、取り出す。

それは戦車、チャリオット。

「それは」

「英雄の中にはチャリオットに乗り、戦場を駆ける者がいる。オレの愛馬はヒポグリフっ、久しぶりだ、暴れるぞ!!」

ぶつかり合いながら、炎を避けつつ、車に迫る攻撃は弓で消し飛ばす。

「貴様は何者だっ、そんなの錬金術ですら無いワケダ!!」

「ただの戦士、守る力があれば、オレは、オレは」

拳銃を取り出し、乱射する中、バイク音とローラーの音が鳴り響く。

「援軍なワケダっ、消えろオオオオオオ」

攻撃を避けながら、二人も何か話しながら、錬金術師の様子に、何か引つかる。

「テメエら、神の力つてもんで月の遺跡を掌握する気みたいだが、これはいったい。いまは静かに行動するのが定石だろ!!」

「それを貴様に説明するいわれはないワケダっ」

「このまま放って住宅地に入れるわけにはいかないッ、討たせてもらう」

「やってみるワケダ!!」

トンネルに入った瞬間、炎が巻き起こし、それをアイアスでガードする。後ろを見ると、イグナイトモジュールが発動して、二人が加速する。

バイクとローラーで二人が隣にきた。

「アスカ、援護を頼むッ」

「任せてアスカッ」

「応ッ」

その時、二人のギアが僅かに光が強くなる。

手に持つ弓矢や装備が共鳴したように見えたが、その前に、

「よそ見は禁止なワケダッ」

水が洪水のように押し寄せるが、無数の剣を取り出して、

「頼むぜ」

「ああ」

「任せて」

剣を駆け、二人を前に出す。

僅かに身体が揺れた気がした。

——花の魔術師

「で、彼女？も回収つと」

「あーた、私達を生かして、なにする気なの」

「で、生きていたワケダ」

不満そうなプレラーティは、花の空間で閉じ込められたカリオスト口を睨みながら、辺りを見渡す。

「脱出は？」

「試みたけど、一切合切だめなのよお〜もともと死んだふりするつもりでもあったけど、その前にそいつに捕まった」

「…………詐欺師が」

「仲間の為なら、なんだってやるわよ」

「君らって、仲間の為に自分の命賭けるんだね。まあ、だから最悪の時、動かせそうだけだ」

そう微笑む私は、一定の距離を取る。空間の感覚を狂わせ、近くにいて遠くにいる。攻撃は届かないし、何もできない。

二人の錬金術師は睨んでくる。

「あーた、あーしより胡散臭いわね」

「あの男と同類なワケダ」

「ひつどいなく…………私はただ一つ、グラウンド・オーダーに、しかるべき者として応えるだけだ。悪いも良いも関係なくね」

そう言いながら、静かに、魔術陣を作り出す。

「！」

「レイライン、いや、基本は錬金術じゃない」

「ああそうさ、これは魔術。魔術経路を利用したものさ」

それはいくつかと強く結びついて、一つの核に、六ヶ所の六角形の陣を作れるような形であり、これはこの世界のフォニックゲインと言う波長にも見える。

というか、そうしている。

「苦労したんだ、この世界の聖遺物と波長を合わせるため……っつと」

黒い闇から、死と共に現れたのは、同じ位を押し付けられた彼を感じ取る。

彼からも空間の距離を狂わせているのだが、意味が無い。

だけど、彼に斬られる気は無いけどね。

「汝、何が目的だ」

「知っているはずだ、私は星と霊長からのオーダーで、理想の聖杯を生み出すように動いている。ほんつと、いい加減にしてほしいね」

そう言うが、一粒の剣が放たれた。

黄金の、名の無き宝具。それは、

「これは、英雄王」

「ふん、花の魔術師。貴様、何を企てている？」

黄金の鎧を着こむ、英雄の王は静かに笑い、それだけですまない。

「……アサシン、いくらなんでもこれはいかかなものだろうか？」

「悪いが、骸と化し、すでに人の身では無い身。それ故にこそ、盟約は守らなければならぬッ」

おっと、いまだに彼にちよっかいかけていることが、彼の逆鱗に触れているようだ。

だからって、

「天文台の魔術師と契約した英霊を、こころも招き入れるなんて」

「それもまた、彼の魔術師の意向よ」

古きファラオが太陽の威光を放ちながら現れ、そして、

「がっはははははっ、あの若造もやはりと言うことよっ」

征服王と呼ばれし男が豪快に笑い、褐色の男は双剣を構えながら現れ、太陽と共に、施しの英雄も静かに槍を構える。

「すでに召喚された我らなら、如何に星と霊長であろうと、使えないよ

のう?」

「ああ。まったくもう、こころもおつかない人達を寄こすなんて……少しばかり予想外さ」

その瞬間、紅い槍が自分の心の臓を捕らえ、放たれる。

だがそれは花びらに張り、薔薇と成り散る。

「チツ、魔術か」

「影の女王、それに」

旗がついた槍をなびかせる、裁定者たる聖女が見据えて来る。

「ほんと、全員が全員、本気かい?」

「くつくつくつ、まあ、我にとつては^{オレ}どうでもいいが……我が宝物庫に理想の聖杯と言う物を置くのも悪くない」

「英雄王っ」

「しかるべき物をしかるべき者が得て何が悪い? だがいまはその話より、この男を殺すのが先だろう」

「……………ああ」

死の気配を放つ彼は、私の世界を死で満たす。

「やめてほしいねアサシン。私は星と霊長の名のもとで動いているんだ。そもそも乗る気なんてこれっぽっちも無いよ」

そう微笑みながら、

「だいたい、ただの人として生きていた彼を殺すと言うオーダー事態、本当にどうかって思うよ私も。うん」

私の言葉に、全員が驚き、征服王が聞く。

「貴殿、いまさらなにを言っておる? 余達は理想の聖杯の恩恵をかすめ取ろうとする貴殿らを止めに来たのだぞ?」

「えっ? それはそれは。ずいぶん遅い対応だよ」

それに全員が驚き、太陽のファラオは勘付き、嫌な笑みを浮かべた。「まさか、そもそも龍崎アスカが生まれ出たのは」

「そ。たかが聖杯の一つ二つ、それくらいで抑止から大事な魂が取られると思う?」

「ごりや、参った参った」

征服王は静かに、そして、血管が浮き出るほど怒りをこみあげて問う。

「貴様ら、初っから平行世界の娘っ子の純情を利用して、理想の抑止をこの世に生み出させたなっ。ご丁寧^{ゴテン}にその前の人間は、タイミングが合うように調整して殺した。違うか花の魔術師ッ」

「ああうん？ まさかと思うけれど、ただの携帯電話を通じて聖杯とアクセスできるとか、本当にできると思う？ 私がアクセスするパスを作ったんだ」

それには何名かの英霊か怒り狂いそうなほど、こちらを見る。

彼もまた、

「ならばなぜ初め、龍崎アスカの首を取れと命じたッ!? よもや」

「どうやらそのようだぞ、暗殺教団の始祖よ。星も霊長も、より強固な聖杯を作るために、あえて貴様らをけしかけたのだろう。成長、聖杯との繋がりを強くするために」

英雄王様の言葉に、死の殺気が一層強まり、他の英霊からも殺気を感じる。

「マーリンっ、まさか理想の聖杯と言うものを手にすると言う抑止のオーダーの為に、貴様はただの人を殺したのかっ!？」

「ああそうだ、『ただ』の人間さ。いてもいなくても、いいじゃないか?」

そう、彼は別に大成も何もしないだろう。淡々と生き、淡々と死ぬ。

「ま、それを私や抑止力が決めるのはどうかと思うけどね」

私が言うのもただけだ。

「君も知ってるはずだよ、古き王よ。理想の聖杯がどのようなものか」
「確かにな、だがそれ故に解せんナッ。あのような物、ウルクを初め、すでに世に出た聖杯に比べれば使いにくいはずだ」

「どういうことだ英雄王」

「言葉通りだ贗作者^{フェイカー}っ。あれは我^{オレ}のエアと同じ、あまりの威光により、最大は使用できぬ物。使用すれば抑止どもがしゃしゃり出る」

そう、それが理想の聖杯。

「りそうのせいはい？」

「話が読めないワケだ」

錬金術師の二人が困惑するから、仕方ないので、説明する。

「ここで分からない人がいるだろう。理想の抑止力、龍崎アスカが使う力。それは理想と言う概念を形にして振るうこと」

「そうだ、だからこそ龍崎アスカは、この世の聖剣、魔剣、魔槍、弓矢、盾も何もかも、全て利用し、いくつもの同じ物を持つ」

「ああ、だけどおかしいよね？都合良すぎる」

それにはアシンが前に出ながら、

「理想の抑止力、それは平行の世界で戦った、英霊になれなかった英霊の血と、彼らを慕う者達の涙を救う聖杯より生まれた物。では無かったか？」

「それ嘘」

死が放たれたため、少し焦って避けた。ああ分身が散ったよ。

「ではなんだ？」

姿を見せると斬られるなこれ。

『簡単さ、理想と言う概念全てが彼力なんだよ』

声だけ響かせ、全員が首をかしげながら、英雄王ギルガメッシュは静かに、

「我の知る理想の聖杯は、人が己が届かぬ願望を抱き、意味も無い戯言を口にする不愉快な物だったはずだ。他人に全てを押し付け、己は願望しか言わぬ。弱者ですら無い雑種ども、夢物語を糧にする幻霊の力」

『ああ、そうだとも……………』

私は、

『だからこそ永劫に在り続ける』

それに全員が驚き、ギルガメッシュ様は少し考え込み、ハツとなる。

「いや、まさか……………そのような、いや、だからこそソツ、故に欲するか世界よッ!!」

「どういうことだ英雄王ッ」

「理想の抑止力は、その辺りに息をする雑種どもが、勝手に作り上げ、勝手に崇め、勝手にねつ造し、己の都合に合わせた願望を力として存在する幻霊。それを殺すとしたら、それは」

「……………私と同じ、死の概念が無いのかッ」

『ああそうだよ、影の国の女王スカサハ。幻霊グランド・セイバーこと、理想の幻霊は死なない。死ねないが正しいかな？ だって理想なんだ。人が、世界が、生命がいる限り、理想はけして消えない。故に死ねない、ずっと在り続ける』

それを聞き、守護者は剣を構えながら、周りを見渡す。

「ならば、その幻霊が使う力は」

『この世と言う概念がある限り、永遠に底が無い神秘の塊。永久機関さ』

星が創り出した、神が創り出した。なんて優しいものではない。

『神も星ですら作れない、完全なる永久機関。永遠に神々達ですら扱えない純度の魔力を生み出し続け、保管するのが保管庫であり、理想の聖杯の正体さ』

「神々ですら扱えないだとッ」

「馬鹿なッ、神ですら手に余る物を、幻霊が扱っていると、いや、いまは人の身である龍崎アスカが利用していることなどできるはずがない!!」

その叫びに、そうなんだけどねと言いたいけど、

『いや、だって彼は』

——理想の聖杯の中身なんだもん——

「……………ああ」

「なるほど、確かに暴走も何もないな」

冷や汗を流しながら、つまるところはこうだ。

『理想の抑止力は、理想と言う概念を魔力に変換する一種のシステムさ。その結果、世界と言う『全』と言う意思がある限り、永劫に『一』

として、永劫に戦い、永劫に終われないモノのことを言うんだ』

「本人が聞いたら、またややこしいと愚痴りそうだ」

そう守護者が言う中、騎士王が呟く。

「永劫の全なる一として、永劫に世界の都合を、運命を調整する永久機関。神々の物語、英雄譚、世界史、人類史。全ての物語の調整者。狂っていると思えないシステムです」

「ああ、カウンター・ガーディアンと言う私の立ち位置ですら生易しく感じる。記憶のリセットがあるが、それがあろうが無かろうが、抑止は世界を抑制する為に永遠に使い続けるものだろうな」

忌々しく言う中、聖女は叫ぶ。

「なら星と霊長の目的は何ですかッ。別段、そのままにしても問題なく、それは機能しているシステムです。貴方は彼らに、何をオーダーされたのですか!?!」

『グランド・セイバーの創造、それが彼らのオーダーだよ』

『んーんーんーんーいい感じに筆が躍りますぞっ、花の魔術師殿っ』

おっと、共犯者の彼の声まで拾っちゃった。

「その声は、シエイクスピアッ!?!」

『数多ある全の為にある一である、幻霊理想。彼はいま独立した一に成るために動き出すッ。血の歌姫の戦慄によって!!』

「血の歌姫? 聖遺物を纏う、少女達か」

『ああそうだよ』

彼と共に姿を現す、彼はいま書き上げている。

「なにか書いてるワケダ」

「あれって」

「君達錬金術師と歌姫達の物語ッ、それに割り込みしは、けして人類悪の前では、別の登場人物として現れる幻霊理想!! だがしかし、それで世界を救えるか星と霊長は考えるのですよ?」

彼はオーバーに手振り、まるで司会者のように叫び続けた。

「そう、もっと安全策が欲しい、この力、永久機関の幻霊を使い続けるにはどうすればいいか!?! そうともッ、違う世界を犠牲に、英霊理想の幻霊を生み出せばいいッ」

その言葉に、合点が言ったと言う顔に成る。

「あ、貴方達は……彼を理想の聖杯に換えて、それを英霊の座に登録しておく気なんですか……魂の無い、力だけ吐き出す聖杯を」

「そうだよ、やれやれだ。つまるところ」

本来の世界では人類悪などが出る場合、すでに登場人物としている為、召喚されない冠位剣士。

それは世界と言う全があれば、永遠に戦い、永遠に力を使用できる永久機関を持つ一。

それをもう一つ用意できないか？

ならば異世界に器を生み落とさせ、聖杯に換え、我々が管理する。

彼が別の登場人物として居ようと、別の世界で作られた肉体なら問題ない。

魂は登場人物で、聖杯は別の世界でできた肉体で使用。聖杯はシンフォギア世界でできた、龍崎アスカと言う人間でできている。魂は要らない。

ただ蛇口として機能すれば、龍崎アスカで無くてもいい。

「肉体も結局、正史世界じゃただの人として処理される。平行世界では聖杯の中身に変換しなければいけない。だけど龍崎アスカはどちらでもないんだ、だから」

「だからと言って、好きに使っていいとでも!? ただ器として、人格が壊れながら聖杯の力を吐き出すだけに生まれたと言うのですかっ」

そう、いま作ろうと言うモノは、そういう聖杯なんだよね。

「そうだよね、私もそう思うよ? けど、オーダーだからさ、仕方ないし、第一ね」

静かに私はきつと変わらず微笑みながら、

「だって彼、私達の世界の人間じゃないじゃん? 最後がどうなろうと、無関係じゃないか」

それが星と霊長が私に定めたオーダーだ。

それに同じ冠位暗殺者である、彼が斬りかかる。

「やっぱ無理」

そう言った途端、無数の花びらが舞い上がり、逃げ出す。

「貴様アアアアアアアアアアアアアアアアア、この我に、彼の者に、偽りの保証を言い渡させたのかッ。首を出せええええええええええええええええ、マアアアアアアアアアアアアアアアア」

『怖い怖い。彼はいまのところ、聖杯化にだいぶ近づいてる。だって、もう四人の聖遺物によって、器が完成しつつある』

自分から流れ出る聖杯の中身。それが歌姫達を使い、この世界への入り口として機能している。

『いま絶刀・天羽々斬、魔弓・イチイバル、銀腕・アガート・ラーム、塵鋸・シユルシャガナが、彼から聖杯の力を引き出してるんだよ。このままじゃ、彼………』

この時、私はどんな顔してるんだろうね。

『聖杯の中身として、永遠に力を吐き出しながら戦う、物に成り果てるんだよ』

ガンツと言う扉が無理矢理閉じる音が鳴り響く。

「助かったよ、君らがいたから、変な空間じゃないって思ったみたいだ彼ら」

そう言い、錬金術師たちを開放する。もう興味ないからね。

「あーたまさか」

「私達は囷だったワケダ」

「ああ、おかげで厄介な者達は閉じ込められた。さあ」

彼はどんな最期を遂げるんだろうね？

——龍崎アスカ

「調？」

「あつ、ごめんアスカ」

「どうしたんだよ」

少しボーとしていた調。調神社の石碑を見ていたようだが、

「ああ、つきつて読んで調神社つてのが珍しいのか？」

「うん……………少し」

もらったお守りを見ながら、バイクに乗る準備をしている。

「なら全部終わったら、連れて来てやるよ。なんか引つかかるんだろ」
「うん……………えっと、いいかな？」

「いいよ、問題ないって」

そう言いながら、ぼりぼりと頬の傷をかく。それに少しだけ頬を赤くして見る調。

「まだ治らないの？」

「ああ。てか傷が最近治らないんだ」

「そうなの？」

「別に血が流れ出てるってことは無いけどさ」

そう言えばホント治りが悪い。

そう思いながら、ヘルメットをかぶる。

「ま、気にするな。どんなに血が流れ出ても」

その時、調の顔が、真っ青になっていた。

「オレは必ず、死んでも守り続けるさ」

いつものように言った。はずだ。

「あす、か？　なんか変だよ？」

「変？　なに言ってるんだよ、いつもと変わらないだろ？」

「なんて言うか、冷たいとかそう言うんじゃないかって」

それに服を掴みながら、

「本当に死んでも戦い続けそうで、怖い」

「あのな、んな」

「調——早くするデ——ス——よ——」

「ほら呼んでる」

「う、うん……………ごめんね、それじゃ」

顔を青ざめながら、ちらちらこちらを振り返る調。なんなんだか……………

「つたく、なに考えてる」
んなこと……………

(アタリマエだ、オレハ、死ニ続ケても、永劫にたたかう)
頭の片隅で、何かがずっと液体が流れる音が聞こえる。
なんだろう？ オレは最近、何か忘れちゃいけないこと……………
まあいいか……………

特別番外編、小日向未来の誕生日

私は龍崎アスカ、小日向未来の一日専属メイドです。

「アスカが女の子になったデス」

「本編無関係の番外編だからな、精神維持の為に現実逃避してるんだよ」

奏お嬢様がそんなことを言っておりますが、ワタシハミステタオマエラヲユルセナイ。

「アスカ、スカートの方、短くするよ」

「やめてくださいなお嬢様」

営業スマイル営業スマイル……………

——立花響？

「ここが平行世界か……………はあ」

ギャラルホルンのデータ集め、私はこっちの未来に会いに来たら、メイドがいた。

「響が二人っ♪ 誕生日バンザイツ」

「えっ、こっちの未来は誕生日だったの」

どうする、私はいつものパーカーだけど、未来は、

「別にいいよ響。もし……………着替えるのなら、アスカの替えがあるよ？」

「こ、このままでお願い」

「仲間仲間になろうよ未来」

そう言われても、彼女の着ているふりふりな物を着る気は無い。

そう言ったら、光が無い瞳のメイドが下がる。未来は嬉しそうに、周りの知らない人達が顔を背けた。

なんだ？

「ともかく、誕生日おめでどう未来っ♪」

「ありがとう響っ♪」

「こっちの私はなんていうか、暢気そう」

「えへへ〜褒められたよクリスマスちゃん〜」

ほめてないと言う顔で向こうの私を見る。こつちとこつち、なにがどう違うのだろうか？

紅茶がおいしい。あのメイドの友達が淹れたようだ。

「こつちはにぎやかだな」

「助けて……………」

時々メイドの子が助けてと呟く。彼女は私と同じで、ああいうの着ないのだろう。

けど料理はおいしい。もぐもぐ食べている。

「ほら二人とも、口回りに料理ついてるよ」

「いま拭きますね」

「ありがとうアスカっ」

「わ、私は自分で拭くよ」

完全にピンクの子はメイドだ。周りはずなかなんとも言えない顔になる。

どうしてこうなっているのか、翼さんしか分からないが……………生きている奏さんに聞こう。

「ああ、アスカは男だから」

……………はい？

この私より女子力の高そうな、いま翼さんの面倒を見ている子が男？

さすがにその嘘はどうかと思う。

そう言ったらすたすたと彼女に近づき、スカートをまくり上げた。

「……………なにをするの」

「この通り短パンだ」

「……………いやいやいやいや」

「そして」

私の手を取り、彼女の胸に当てさせられると、胸パットの感触。

そしてそれを静かに取ると……………

「……………」

なにか平べったいと言うか、その、女の子の胸ではない。それに、

「響、アスカは男の娘だよ♪」

満面の笑みでそう言った。

ということとは、えっ……………」

「ね、ねえ響達、アスカの服がまだあるのっ。私の誕生日の為に、みんなを着てほしいのっ」

「み、未来？」

そしてこっちの私を抱え、私の後ろに回るピンクの子。やはり男性だからか、力強い。

暗闇のような瞳で静かに、耳元で、

「君も着せ替え人形になろうね……………」

うわああああああああああああああああああ——

——小日向未来

今日は私の誕生日。向こうの響が来た為、予想外だったけど、幼なじみ二人と共に、可愛い服装になる。

ああ、三人とも可愛い。

写真も動画も取る。服も取っとく。

可愛い可愛いよ三人ともっ♪

今日はとっても幸せです。

——龍崎アスカ

助けて……………」

59話・星と霊長と理想

朝は早く、学校は休み、身体の調子を見たりする。

「最近傷の治りが遅いな」

病室から出て、司令室で休む。友里さんからあったかいものをもらいながら、静かに首を鳴らし、少しぼーとする。

「敵はレイラインを使って、地のオリオン座を門に見立てたレイラインから、神の力を作り出す。可能性はやっぱ高いよな」

「まあな、けん玉の錬金術師が高速道路移動してたけど、向かってた先に例の神社がある」

「となると、要石。レイラインの構造がカギを握りますね」

「ああ」

そう言いながら腕を組む司令。キャロルが眠そうな顔にコーヒーを飲みながら、

「風鳴弦十郎、要石によるレイライン妨害の準備はいいか」

「キャロルくんか、ああ。そちらは風鳴機関に任せてくれ」

「要石によるレイライン妨害は、俺の計画でも絶対に避けたい事態。必ず効果はある。奴らが俺の万象黙示録を利用しているのなら、必ずレイラインを利用する」

そう言う話をしながら、頬をかく。それにキャロルは不機嫌そうに、

「お前、まだ頬の傷も首の傷も治ってないのか」

「ん？ 全然。痕くつきり」

「チイツ」

舌打ちをしてコーヒーを一気に流し込む。

「ともかく俺とエルフナインはギアの調整に取り掛かる。神の力対抗策は、いまのところ神殺しに逸話にかかっている」

「あたしのロンの槍、アスカの無限なる夢幻、それと響か」

「立花響については今現在不明だがな。だがロンの槍とアスカの武器には神殺しは必ず付加されている」

「問題ないさ、また神を殺すだけだし」

そう言いながら、キャロルは僅かに眉を上げ、こちらに近づく。

「また？ なにを言ってるアスカ」

「またって、すでに神を殺した武器を取り出すだけだよ。そう言うこと」

それに僅かに考え込むが、そうかと言ってコーヒーを、

「空か」

「いま淹れるわね」

「すまないな友里あおい」

そのやり取りを見ながら、静かに、

「ともかく、響の誕生日が近いんだ。早く問題解決しなければ、オレは女装、キャロルは自分の身を渡さないといけなくなる」

「それはそれで嫌な話だ」

苦笑する司令室。そんな中首をさする。

(傷口がうずくな……………)

そんなことを考えながら、ミーティングまで時間を潰す。

——???

星と霊長は龍崎アスカを聖杯へと変換させ、英霊の座に登録して永遠に使用しようとしている。それを知るのはごくわずかであり、誰も本人に伝えることはできない。

「いいのかい、君はここで」

蒼穹の世界、聖杯を見つめる理想は、フォウにそう言われるが、
「俺が元来動ける立場じゃないから、今回の回りくどい事が起きてる。もとよりヒントは言った」

「それはアスカを理想の聖杯に換える気ってとこだけで、装者達を元
に利用していることだけだ。このままじゃ、龍崎アスカは理想の聖杯
として、英霊の座に強制登録される。その先にあるのは」

「無限に在り続けるカウンターガーデンだろうな」

魂の無いそれは、人形以下として動く。そう知りながらも、

「だからと言って、俺もお前もここから動けば、花の魔術師の思うつぼ

だ」

「はあ、後二人。撃槍・ガングニールと獄鎌・イガリマによって、完成してしまう」

「ん〜それはいけないですな〜」

シエイクスピアはそう髭を撫でながら、静かに考え込む。

正直言って、彼らは星と霊長に言われた通り、完成させる気は無い。だからと言って、無視だのなんだのもしない。ちゃんとは働いている。

「いい加減にさ、理想の聖杯に執着するのやめればいいのにね。まあ、如何なるモノであろうと、終わらせ始めさせる力は魅力的さ。だけど結局、彼は意味なんて無い」

「全くだ、このような三門芝居に付き合わされる身にもなってもらいたい」

アンゼルセンは書物を書きながら、静かに物語を書く。

交代制でまさに書いてる途中、だが休みも必要だ。やる気も無し故に。

彼らのシナリオは、六人の歌姫による涙から、龍崎アスカを器と中に換えて、幻霊英雄を生み出すことだ。

それは可能のところまで来てしまっている。

「シンフォギアが愛、彼ら理想が最も原動力にするエネルギーと密接しているところから、こんな事態になってしまった」

「装者達の愛が、一人の少年を最強にして最弱の幻霊英雄へと変えてしまう。あーいやだいやだ」

「我々からしてもそのような物書きは、少しばかり面白みは無いですな〜」

「ひねりが無い」

「全く」

そう言いながら、二人の作者は己の宝具にて、物事の流れを書き上げている。

いまのところ、大作になる気配すら無い物語を書いている。

「アサシン達もあの空間に閉じ込めながらだし、私はもう限界だよ……ああ、お寿司の皿は返しちやだめだからね」

「おっとそうでしたそうでした」

「トロを頼むとしよう、だがここの金は問題ないのか」

「あの組織に頼むから」

そう言いながら1000円寿司を堪能している。来たるべき時が来るまで……

そして時が来る。

「！」

バイクを走らせ、連絡を受けた場所に来る。ヘリポートで切歌と響、セレナと奏と共に、異変が起きた場所へ急ぐ。

「やっぱオリオン座を元に、神の力を引きずり出す気か」

「ならやっぱり、要石か」

「それに賭けるしかない」

「見るデスよ、凄いことになっているデスっ」

ヘリの外、それは鏡映しの神の門。

パヴァリア光明結社が神の力を得る為の儀式。

「このままじゃ、神の力を得るか」

「いや、旦那たちを信じるぞッ」

そう奏が言った瞬間、大地から一転へと向かうレイラインの力が遮断された。

「成功かつ」

「行くぞ全員ッ」

ヘリから飛び降り、ギアを纏い来ると、サンジェルマンがそこにいて、反射的に奏以外がアスカの目を潰しかける。

儀式の為か、裸だったサンジェルマンだが、アスカをかばう奏。

「いましている暇はねえッ」

「そうでしたっ」

「ごめんデス、つい反射的に」

「オレも終わる覚悟した……………」

だがすぐにローブを纏うサンジェルマン。すぐに全員が戦闘に入る。

切歌と響のユニゾンを軸に、イグナイトモジュールで押し出す、たった一人。サンジェルマンはけして折れず、こちらの攻撃に反撃する。

「信念の重さ無き者に、神の力をもってして、月遺跡管理者権限を掌握するッ！ これにより、パラルの呪詛より人類を開放し、支配の歴史に終止符を打つッ」

「だとしてもッ!! 誰かを犠牲にするやり方はッ」

「そうッ、32831の生贄と40977の犠牲!!」

左右から奏の槍とセレナの盾が迫るが、地面を銃で撃つと黄金のように岩が現れ、防がれる。

「背負った罪とその重さ……………心変わりなどもはや許されないッ」

銃弾が響に放たれたが、空間を飛び、別の方角から放たれ、それを受けた瞬間、接近され、刃を突き立てられたが、

「!？」

鎖がそれを掴み、刃を砕く。

「行けっ、響切歌!!」

二人のユニゾンの歌が響く。

すぐそばで待機する奏とセレナ。だが、

「!」

響と切歌のギアが歌を歌うと、アスカのギアが僅かに感電したような瞬間を、奏は見た。

「アスカ？」

そして二人のユニゾンの一撃が、サンジェルマンを穿って、奏は後回しにし、土煙立つ中、武器を構える。

「まだ終わってない」

イグナイトが解けている二人の前に立ち、サンジェルマンを睨む。

サンジェルマンはユニゾンによる一撃を受けながらも、なお立とう

としている。

「まだ立つつもりですか」

「この星の明日の為……誰の胸にも二度とツ、あのような辱めを刻まないために、私は支配を、革命する!!」

そう言う中、その時、響が側によつて、手を伸ばす。

「私もずっと正義を信じて握りしめてきた。だけど、拳ばかりが変えられないことを知っている。だから、握った拳を開くことを恐れない」

そう言つてサンジェルマンに手を伸ばす。

何も言わず、ただ側にいるだけにする。奏達に視線を送り、刀剣を消して側による。奏たちはそれを静かに見守る。

「あんたは支配から人を開放すると言うが、人は支配から解放されない。例え神の力をもつてしても……」

「なん、だと……」

それは静かに、分かる故に、静かに、

「オレは龍崎アスカと言う存在に縛られている。人がいまさら統一言語を取り戻そうと、あんたらが神の力で制御しようとしても。人の支配はあんたらに変わるだけだ」

「月遺跡による、パラルの呪詛が無ければ、人は統一言語を失わなかった。永劫に分かり合えたはずだ……」

「それは分からないことを分からないと言う意味だ」
「なに……」

驚愕し、こちらを見るサンジェルマン。それに静かに、

「オレはいろんな人を知っている。だからこそ、ならばこそ、それ故に、オレは声高らかに、はっきり言える」

分かるか？ 数年の命で、大切な者を守る偽りの人間が駆けつけた瞬間の時間の思いの重さ。

分かるか？ 愛する者を犠牲に、世界を救うと決めた。正義の味方になろうとした者の願いを。

分かるか？ 殺すことしか世界を救えない男の歩みを。

「オレならキレルね、たかが言語一つで、オレらの半生を、あの歩みの

半生を理解されたと言われること。理解できないだろ、理解されたくもない人生。あんたも、あんたが背負った人生を、言語一つで、理解されると、そんな軽いものか？」

「お前……………」

「オレには、オレ達にはきつと、理解できない苦難の中で、いまの選択を取ったんだろ？ それを言語、神の力程度で、あんたの歩みを全て理解できない。イカサマすんなよ錬金術師」

静かに、響の伸ばす手に乗せるように、

「神の力なんか頼らず、ほんの少しだけの繋がりで、支配に叛逆しろ。人は人のまま、支え合って世界を替えられる。オレはそれを知っているし、こいつはそれを信じている」

「アスカ……………」

微笑む響はサンジェルマンを見て、静かに見つめる二人に、サンジェルマンは静かに見つめる。

『だとしても』……………いっだって何かを変えていく力は、『だとしても』と言う不撓不屈の想いなのかもしれない」

「オレらは諦めないぞ、犠牲による世界を変えるなんて」

「……………」

静かにそれを聞き、その手を取ろうとした時、

「誰だッ」

アスカは振り返りながら、ハットが回転して炎を纏い来るため、魔剣をすぐに振り返りざま取り出し、弾く。

二人をかばうようにし、切歌達も武器を構える。

「茶番はそこまでにしてもらうよ」

「ローランリスペクト野郎ッ」

「アダムッ」

その問いかけに、星空のオリオン座が光り輝く。

「あれって」

「なにが起きてるデスカッ!？」

「星のレイラインッ、しまっ。天のオリオン座から神出門を作り出したかッ」

巨大なエネルギーがまたこの地に降り立ち、それに全員が身構える。

「教えてください統制局長ツ、この力で本当に、人類は支配の軛より解放されるのですか!!?」

「できる、んじゃないかなあ? ただ僕にはそうするつもりはないのさ、初めからね」

それに驚愕し、怒りをあらわにする。

「謀ったのかつ、カリオストロも、プレラーティも………革命の礎になつた全ての命をツ!!」

それに対して、

「! セレナ盾ツ」

「用済みだね、君も」

エネルギーの柱の中にいる人形から、レーザーが放たれ、巨大な城壁を張るが、

「ツ!」

「熾ロー! アイアス・ガーデン天覆う七つの花園!!」

「ロンの槍ツ」

爆炎が自分達を飲み込む中、三人が手を前に出し防ぐ。

「奏さんツ、セレナちゃんツ、アスカツ!!」

「お前達ツ」

「喋るなツ、まずいますまずいますツ、投擲ならともかくツ、すでに何枚も砕け散つたツ!! ロンの槍の塔はツ」

「砕け散つたツ、チャージ不足だクツソおおおおおおおお」

「任せてくださいツ、円卓の盾で防ぎ切りますツ」

弾かれたロンの槍、奏は膝を突き、炎がはまだ飲み込む。

バリンバリンと盾が砕ける音と共に、全員より前に出ているセレナが後ろに押され出す。

「くうううううううううう」

「一か八かツ、高エネルギー攻撃の軌道をそら、せねええええええええ。町中だこんちくしょうツ!!」

だから……………

救える力。

助ける力。

守る力を……………

オレに寄せせ。

ただの『人』なのは分かっている。

けど違うと言うのなら、寄せせ。

代価はオレの……………

フォニックゲインの波長をした紋章が囲む中、そんな歌を聞いた切歌から、イガリマが消えて、リンカーの力も消えた。

そして、

一人の少年は、

「あす……………かあ？」

無数の鮮血を巻き上げながら、片腕でエネルギーを掴み、空へと反射した。

「アスカ……………」

「……………」

その瞬間、血は流れ出て、翼と成り、剣が握られる。

【安心しろ響、切歌、奏さん、セレナ】

そして少年は、

【オレは幻想に溺死し続ける、無限の現実……………】

そう言った途端、それは笑い出し、無数の武器が身体から生え、イガリマの鎌を持ち、鮮血が刃を伝う。

【オれのモンに、手えエ出すんだ。終焉を、キサマにやろう】

全なる一はそう眩き、駆けだした。

歌姫達の叫び声が聞こえず……………

ただ前しか見えなかった……………

アスカの全身に神経のように何か光が浮き出ている。それは響達では分からないが、唯一知ることができた者がいた。

「魔力回路……………」

セレナが愕然とそれを見て眩き、奏はそれに振り返る。ギアが解けた切歌がいるため、前に出れないうえ、イガリマの絶唱をしかけたためか、気を失っている。

「まりよくかいろ……………向こうの技術か!？」

「はい、だけどそこまでしか」

「ともかくあたしは切歌を連れていく、セレナは周辺避難が終わるまで盾での防衛。響ッ、アスカのバカを頼むぞ!!」

そう叫ばれ、アスカは鮮血を流しながら、火の剣を持ち、響を見る。けして瞬きせず、目は紅く染まり、全身からどこからか血が流れる。それら全て、感電でもしているのか、光を放ち、力を秘めていた。

「アスカ、その姿はダメツ。イグナイトよりも酷いよ」

「気にするな、いまは頭はスツキリしている。だから……………」

邪魔だ……………」

地面から、空間から、無数の武器が乱雑に吹きだし、肉体からも流れ出るように刃物が流れ出て来る。

ペンダントは切歌の元にあるはずのイガリマらしい鎌も砕け変化し、それを持って飛ぶ。

「アスカッ」

「立花響ッ」

サンジェルマンの叫びに、響は静かに拳を握る。

「だとしてもッ、アスカだけ戦わせる気は、無いッ」

無数の武器を巧みに扱い、攻撃を避けながら、首を大きくかしげる。

【テメエ、まさか】

「チッ、なんなんだ……………なんなんだお前はアアアアアア」

その時、二人の攻撃に気づき、大きく飛びのく。その様子を見なが

ら、足元の槍を踏み、手元に持ち、鎌を捨てる。

二人の連携、それを見ながら、あつははと苦笑した。

【敵と仲良く連携って……………響らしいなあはははははははハハハハ】

そして響の拳を受け取るている間に斬られ、その切口を見せるアダム。

それを見ながら、やはりと笑う。

「錬金術師を統べるパヴァリア光明結社の局長が、まさかの」

「人形……………」

その傷口は人、生き物では無い。それを見ながら、

【どーりで対人宝具が反応が薄いと思った】

「人形……………人形だとおおおおおおおおおおお」

その錆に、光の柱にいた人形も叫び、そして光が辺りを包む。

二人の前に現れると共に、各武器の一部が反応し出す。

「神の力か」

光が収まると、巨大な力を秘めた存在へと変わる人形。

その核の側へと飛ぶアダム。

「神力顕現。持ち帰るだけのつもりだったんだけどね今日の所は」

『ごめんなさい……………あたち、アダムが酷い事されてたからつい……………』

「仕方ないよ、済んだことは……………だけど折角だから」

その瞬間、防衛の武器をいくつか呼び起こす。

「知らしめようかつ、完成した神の力ツ。デバイスンウエポンの恐怖を!!」

光の光弾が放たれるが、それに聖剣を無数呼び出し、全て同時に振り下ろす。

激突するエネルギーは爆音と成り、それに舌打ちしながら、空へとエネルギーを吹き飛ばす。

それと共に大量の血が流れ、傷が広がり塞がる。

その様子に風圧に耐える二人は見ていた。

(傷が生きているように脈動する………身体がレイラインのように、血流と共に流れている!?)

錬金術師であるサンジェルマンがアスカの異変を観察し、空に浮かぶ刀剣の異常さにも戦慄していた。全てが完全聖遺物レベルの、異常エネルギーの塊だ。

「アスカああああああ」

爆風全てが収まり、静かに睨む二人。

【オレもたいがいだが、テメエ、なんだ?】

「僕の方こそ聞きたいが、まあいいだろう………僕は作られたのさ、彼らの代行者として」

ここで代行者に上げられそうなのは、この世界の神として認識されるもんかと考え込む。

アダムは静かに、話を続ける。

「だけど廃棄されたのさ、試作品のまま。完全過ぎると言う理不尽極まる理由を付けられてツ!! 有り得ない………完全が不完全に劣るなぞ」

よく分からない事情がありそうだなと、もうすでに話の半分も眼中にはない。

「そんな歪みは正してやる、完全が不完全を統べることでね!!」

光が地上に放たれかけたとき、

【どーでもいいから消えろ人形】

地面から回転しながら現れるのは、知っている者からすればゾッとする光景。

回転する円筒は天、地、冥界を表し、合わせて宇宙を体現する宝具。本来一人の王のみに振るう事を許された天地を切り裂いた逸話を持つ、世界に一つしか無いはずの神秘。

幻想の無限にて、大量に取り出された。

【天地を裂け、乖離剣エア】

爆音を響かせ、紅と黒の渦を生み出す。轟くその数は、千個。

【これくらいあればうるさくないか………吠えろ】

もはや名も無く、天地裂いた偉業が世界を包み込む。

「いや待て……………これは」

「あーあ、だからやめておけばいいのにね」

マーリンは呆れながら、作者英霊達はその光景に冷や汗を流す。

「こればかりはさすがに、どういうことですか？」

「これが彼、理想の力だよ」

マーリンが気を付けて離れた位置でその光景を見ているが、彼もまたゾツとしている。

「彼はね、終わらす力と始める力を持つだけじゃなく、世界と言う概念がある限り、永久的に動く魔力を所持している。それが理想の聖杯なんだ」

「世界ですと？ つまりグラウンド・セイバーは」

「そうだよ、敵も味方も、世界そのものがある限り、不滅であり永劫に有り続ける。彼を倒すには、真なる無でしか、彼を倒すことはできない」

だって誰もが理想を抱き、それを持つて戦う。知能ある生命体、無機物すらも。故に心が、形が有る限り、それは消えない。

幻想とも言える神秘では、彼には絶対に勝てない。彼はその上を必ず行く、幻想で形作られた、またはそれが抱く幻想で作られた偽物なんだから。

「なるほど、だからこそグラウンド・セイバーは別の形でしか人の世に関われないと」

「そう言うことだよ。なのに星も霊長も、他世界だからって、彼にちよつかいかけると言う選択を選んだ。結果、龍崎アスカもとい、理想の聖杯は暴走している」

制御なぞしていない。いやしている。

どっちでもあり、ないのだ。矛盾もまた彼が司る意味と概念だ。

「正直に言えば、彼は理想なんだ。簡単に壊れるけどね、数が莫大なんだ」

「魔力のストックも、世界全ての理想と接続していると言うところで

すかな?」

「そうだよシエイクスピア。敵の魔力も、その辺に生きる生き物の魔力も、理想と言う概念を持つ者がこの世にいる限り、彼は死んでもすぐに蘇る。終わりを迎えて始まり、始まりと共に終わる。矛盾する概念だから彼は幻霊なんだ」

「なるほどね〜これってテメエらの仕業か」

その言葉に、マーリンはまずいとすぐに杖を構えると、回転する光の槍が振り下ろされ、殺されかけた。

「お前らは、お前らはッ。何度彼奴の人生を自分勝手に動かせば気が済むッ!?!」

天羽奏は激怒しながら、マーリンを睨む。それには何も言えない。「言えッ、アスカはどうすれば元に戻るッ!?!」

「それはごめん……………理想の聖杯に完全アクセスと言うより、融合状態なんだ彼。いま無限に夢幻の記録を取り込んで、エネルギーも使用中。このまま時が経てば肉体と精神は壊れる」

「それは死ぬってことだなッ」

「ちなみに私はその肉体を保存して回収して、英霊の座に置くのが目的……………そうすれば一部とはいえ、理想の聖杯を自由に世界に配置できることができる。魂は別にしてね」

「ん、ここの様子、カメラに映っているな」

「これは……………まずいですな」

作者英霊はもう気にせず、マーリンは現在、全ての装者に全て知られてしまう。

それにあーあと花の魔術師は、せっかく厄介なサーヴァントは疑似アヴァロン空間に閉じ込めたのに、これでは意味が無い。

ともかく、

「とりあえず私は、フォニックゲインを利用した聖遺物六の数にて陣を作り、聖杯の入り口を作り上げた」

「六だとッ!!? 翼達のギアにいつの間に」

「愚者の石だよ、血の接続で三つの関わりができた後、僅かでも血が付いた指で触れた愚者の石。それを他の三つにも加工したろ？ おかげで全員の聖遺物と聖杯を繋げる事ができたんだ」

それを聞いたエルフナインは愕然、キャロルは舌打ちする。そんな事は気にも留めず、天地裂く魔力の叫びが止まり、静かに、

「あれこそが如何なる事があるうと滅びることが無い、理想と言う幻霊の力。グラント・セイバーはまだ序の口さ」

一の個が抱く幻想から神秘の武器を取り出し、無限の数振るう存在。その魔力も無限だが、肉体は持つか分からない。

魂が定着せず壊れる。その肉体は聖杯の中身を取り出す入口になるだろう。

「いまのところ計画通りなんだよな〜これ」

「殺すぞ」

「私を殺したところで終わらないさ……ほんと、やんなっちゃうよ」
心無い言葉だった。だがそれでも悲しいとは思う。

今回ばかり奏はこれが不気味と思い、そして爆心地を見る。

『アダム………大丈夫？』

無数の平行世界。ダメージの無効化を発現させながら、アダムは驚愕しながらそれを見る。

それを放ったそれは、二人の女性より前に出ながら、使い捨てのようになり天地裂く剣を見る。

【粉々か。取り出したはいいが、やはり壊れる】

「貴様………なんなんだ、何者だ貴様ツ!! ティキの、神の力を超えるだど!? あり得ない、有ってたまるかツ、不完全な者の分際で」

【……………クッハ】

口元を吊り上げ、血を流しながら笑う。

響は愕然となりながら、アスカでは無いアスカを見る。

【不完全？ 完全風情が理想に敵うはずないだろう】

「なに!?!」

【完全が故に不完全だと言う事にも気づかない人形風情が、たかが力

を得ただけで支配するなど。神程度が理想の前に立ちふさがるなツ、大人しく壊れろガラクタ」

その言葉にアダムが炎をまき散らす、それに炎を無力化する為、炎の逸話を持つ幻想を取り出し、全てを使い捨てる。

「アスカ？」

響がサンジェルマンと共にいて、その様子を見て叫ぶ。だが答えはない。

【我は幻想、理想、不完全な形が無い担い手だ。世界有る限り有り、終わり始まり、始まり終わる矛盾。理想の聖杯足る我が力、まだ欲するか】

「!?」

それは、まるでいまここにいるのはアスカでは無いような言い方であり、それにこたえるように、神経が切れるような音が響き、血流がより流れ出て、身体を巡る光がより発光する。

【良いだろう、理想に溺れる人間……】

無数の刀剣が、折れた物が現れた瞬間、それが己を貫く。

「アスカ!」

「何をバカなっ」

二人が驚くが、光が刀剣を取り込み、血流や真剣が刀剣と一体化する。

【……………幻想投影】

トレース・オン

—— 幻想内容、神殺し。リストアップ ——

—— ミストルティン、十束剣、ロンギヌスの槍が概念として有り

—— 刀剣には天羽々斬、神度剣、布都御魂剣、天之尾羽張剣 ——

—— 保存庫より、閲覧解放、数 ——

—— 千 ——

【神殺しの草原】

エネルギー波の所為で広がった場所、一面刀剣を初めとした、神殺しの概念を持つ武器が取り出された。

「なっ!?!」

【ロンの槍の閲覽で、ガングニールもリストアップされていた。なるほど、あの日黄金鍊成での攻撃は、装者では無く、神殺しのリストを知られることを危惧しての行為か人形】

「くっ」

【まあ、響を前に出させる気は………無イッ】

無数の刀剣を持ち、ティキに迫る中、呼び寄せたチャリオットに乗り接近する。

それに腕を引き抜き、剣のように斬りかかるが、それをサンジェルマンが立ちふさがった。

「貴様ッ、邪魔をするなッ!!」

「いま動かずッ、いつ動くッ!?!」

その叫びの中、響も立ち上がり、ティキへ拳を握りしめ、接近する。

二人の攻撃を受けたティキ、一度は無力化の現象を引き起こすが、傷は癒えず、悲鳴を上げた。

【更なる幻想の閲覽を開始、原初のルーン並び、英霊より閲覽。ゲイ・ボルグ並び、捕縛の神殺しを顕現】

無数の鎖がティキを捕まえ、紅い槍を取り出し、それを投げ、貫く。

『イツヤアアアアア、アタシを縛っていいのはアダムだけなのおおおお』

【知るか、神殺しに怪物の力を顕現ッ】

巨大な剣を取り出し、響はそれを見て拳を構える。

「くっ、止まれ神殺しイイイイイイイ」

だが二人の攻撃が止まらないことを知り、その両腕を広げた。

「ハグだよティキッ、神の力を手放して!!」

その時、本体であるティキと言う人形が離れ、アダムの元に行こうとするが、

【逃がさんッ】

刀剣が巨大な肉体を切り刻み、響の拳がティキを砕く。

「やったかッ!?!」

サンジェルマンはそう叫び、響は地面に下り、すぐにアスカを見て

側に駆け寄る。

「アスカッ!!」

「ぶつぶつと何かを呟きながら、だがそれでも側により、そして抱きしめる。」

「アスカ、アスカッ。アスカアスカアスカアスカッ」

「……………」

「お願い、アスカッ。私の、私の知ってるアスカはアスカだけなんだよ!! 聖杯とかわかんないこと言わないで!!」

「……………」

「アスカああああああああああ」

その瞬間、力が消え、貫いていた刀剣も消え、血の流れは止まる。

「アスカっ!?!」

「ふうよかった、まだ自我があったのか」

マーリンと奏がその場に現れ、その言葉に響はアスカの顔を覗き込む。

「アスカあ?」

「……………悪い、少し頭ぶっ飛んでた……………」

その言葉にアスカの名前を呼び、抱きしめる響。それを抱きしめ返す。

「マーリン、聖杯とリンクして分かった。テメエ覚えてろよ」

「……………それでいいならいいよ」

そう微笑む中、

『アダム……………』

その言葉に全員が武器を構え、それを見る。

上半身だけのティキがアダムへ両腕広げていた。

『アダム好き好き大好きっ、アタチ達も愛し合おうっ、ハグハグしよ……………抱きしめて、ドキドキしたいのアダム……………』

そう言う中でアダムは、

「恋愛脳め、いちいち癪に障る……………だが間一髪間に合った」

そう言ってティキを蹴り飛ばし、己の引きちぎった腕を掲げた。

「人形に神の力をツ、この時こそ僕は至る!! 新たな雛型へと!!!」

粒子のように待っている神の力を見て、まずいと、

「マーリン仕置き嫌ならエネルギーを別に移せツ」

「無茶言うなツ、いくらなんでも私はただの魔術師だよ!」

「ならツ」

響達から離れ、二人はすぐに動く。一人は慣れない魔術で、一人は先ほどまで深淵にまで使っていた己の魂の力を取り出す。

だが、

「!? なぜだ………どういうことだ」

アダムに一向に宿る気配は無く、二人も怪訝な顔のまま攻撃を放つ。

舌打ちしてその場から飛び避け、二人は粒子を見ると、すぐに別の場所へ。

「へ?」

それは響のもとに集まり、そして、

「ああああああああああああ」

「なっ、響ツ」

駆け寄ろうとするが、光が輝き、アスカを吹き飛ばす。

ほぼギアが消し飛び、上半身が裸になりつつも、剣を取り出し、着地した。

「アスカツ、響ツ。おい!!」

「待ってくれ………こればかり、私も見ていないツ」

奏が睨みながらマーリンを見たが、マーリンも有り得ないものをいま見たような顔で驚き、その光景を見た。

「有り得ない、そんな」

「宿せないはずだ………穢れなき魂でなければ、神の力なぞ!!」

アダムがそう叫び、光が響を連れ、繭のようなものを作り出した。

「生まれながらに原罪を背負った人類に、宿るはずなぞ………」

その時、マーリンとアスカはお互いを見た。

「おいマーリン………響そう言えば、聖杯の水からオレと共に這い出た気があるんだが」

だがサンジエルマンと言う方に協力の礼など言ったりと、花の魔術師は無視された。

そこに、鎌倉から連絡が入る。

モニター越しに風鳴家独自が、災害認定した神の力を処分する気で、国連介入する話やら、危険な兵器を使用する。

なかなか熱く語るが、

「いやあれに変な事したら世界滅ぶよ」

ものすごく空気を読まず、花の魔術師はお菓子をどこから取り出しながら呟いた。

「アアツ？ どーいうこったよ」

クリスが菓子を取り上げ、マーリンは渋々大人しくしながら、

「いまあれは神の力、っていうか、まあ莫大なエネルギーを取り込んだだけじゃなく、龍崎アス力を取り込んだからね。もしも何かして、動き出したら」

滅ぶよ、世界。

それでもモニターの男は国連介入を断固として阻止するため、軍事を動かすが、側にいた奏が襟をつかむ。

「おい、マジか」

「本当さ、だって、あれは世界そのものだよ？ 世界が世界と戦って何が残る？」

その言葉に、全員が青ざめ、急いで作戦を移行する準備をする。

無論、これを持っていく奏であった。

「いやだからやめておいた方がいいって言ったのに」

「だな。くそっ」

神の力が攻撃を受け、繭から攻撃形態へ移行し、その様子に呆れていた。

「せっかく私が神封じの術して、一日くらい平気に保てるようにしていい」

オペレーター全てを含め、その話を聞いた全ての人間が、

『そう言うことは早く言えッ!!!』

全員が叫び声を上げたため、マーリンは耳を押さえ、耳栓を外して頭を痛める。

日本政府の指揮下の者たちは、サンジェルマンが戦えない理由を与えつつ、セレナたちは盾などを構える。

『よしッ、響くんのバーステーパーティーを始めるぞッ』

「ケーキの無い状態じゃ本人嫌がると思うよ?」

「いいから手を貸せ、防人の剣がその首を取らないうちに」

「先輩、私らの分も残してくれ」

全員が同意見で、全員動き出す。

「じゃじゃ馬ならしだッ」

作戦はアンチリンカーの応用で、神の力と彼女らの適合率を下げてはぎ取る。

その為に全員が動き、動きを封じる。

「さてと、私も。慌てず、騒がず、ゆっくりと。噛まないようにね」

そう言いながら、植物の蔦などが神の力を縛る。

バカ力ではあるが、妙に弱々しい。

「ふむ、やはりか。中で彼が気合い入れてるね」

『よしッ、セレナくん、奏エエッ!!』

「真名を開放しますッ」

盾の歌を歌い、自分のギアになっている力を開放する。

「祖はブリテンに語られる、栄光を囲む力ッ!!」

セレナは巨大化した盾を、とあるデミ・サーヴァント。彼女を真似るように掲げる。

(あの人たちを守る力を、貸してくださいッ)

大地へと突き立て、無数の城壁が現れ、神の力を囲み、

「奏さんッ」

星の光を集め、一柱の塔を生み出す。

「悪いが、中身にも英霊にもなる気はねえ」

「それでいい、ああ。やっぱりハッピーエンドはさい」

『太平洋より発射された高速の飛翔体を確認ッ、これは』

「えっ、なに？」

マーリンがそう呟くと、

「なにかあったか？」

「やばい兵器が発射されたらしい」

「マジで？」

未来と響が驚き、アスカは頭をかく。

「どうにかするか」

「はあ、バカだね。っていうか、タイミングが悪いね」

「なにのんきなことを言ってるんですかッ」

その時、三人の歌が歌われる。

それは、

「サンジェルマン、カリオストロ、プレラーティ」

三人の錬金術師が歌う。だが、それより気になることが、

「飛来物より、何よりも」

「ああ、私もこっちが恐ろしいし、君も出るんだろ？」

「……………ハハッ」

聖杯の力をまだ引きずり出そうと血流が流れる。

「いや、違うか……………」

そう呟き、

「響、未来」

「アスカ」

「オレは、あの三人組を助けたい」

いまここに撃たれた物を止めようとする三人へ、アスカはそう呟く。

「……………うん」

「アスカ」

「ああ……………この身は」

「サンジエルマンさん達、無事ですかっ」

響が叫び、翼達も驚いていた。

「キモが冷えたぞアスカッ」

「いつやくんッ、死ぬかと思ったわよっ。死ぬ気だったけどっ」

「有り得ないワケダ」

「ああ……………」

「初めて聖杯を使えるところまで使ったからな、やっぱり使い方わからねえ」

「当たり前だたわけッ、世界その物と言っているいい聖杯と言う名を借りた力だぞ!! 本来なら我が蔵に納めるべき秘宝を使いおってッ」

「あっはっは、使えるものを使ってこそっ。気にするとは懐が狭いぞ英雄王っ」

「抜かせッ、砂漠の王程度が、我を計るな」

サーヴァント達が叫び合いながら、それを無視して、これどう隠そうかと思いつながら、まだ飛び交う神の力を睨む。

「英雄王、その辺にある神の力上げるから、それで許してくれ」

「チッ、そんなものいらぬは雑種ッ」

「そうデスっ、神の力」

「分離した神の力」

調が周りを見たとき、空間からヒビが入り、一つの腕に集まる。

「あの腕は」

「あの男の腕なワケダっ」

二人が忌々しく叫ぶと、

「感謝しなければ……………君たちに」

「ローランリスペクト変態野郎ッ」

空間から現れる男、アダム・ヴァイスハウプト。

その腕に神の力を集める。

「……………」

その姿に、アスカは、

「……………殺すか」

爆発する魔力を纏う。

「行くぞ響ッ」

「応ッ」

アスカは竜の翼、響はブースターで飛ぶ。

「おおおおおおおおお」

翼達を止めたアダム。そして二人に気づき、アダムが叫ぶ。

「近づけないよ神殺しッ」

だがその足に、

『アダムッ』

ティキが張り付き、身体を倒してしまう。

「響、その力は呪いだッ。だけど、オレ達が必ず、なにがあってもどうにかし続けるッ。だから」

「あたしは歌でッ、ぶん殴るッ!!」

アダムが何か叫ぶ中、すでに覚悟を決めた二人は、

「ならオレは、無限なる夢幻で、理想歌う歌姫達を守り続けるッ!!」

竜は剣と成り、白亜と紅黒い剣と成り、神の力を取り込むアダムの腕を両断し、粉碎した。

「なんてことを……………貴様ああああああああ」

錬金術、それが響に放たれるが、その前に、

「させるか」

瞬間竜の翼が阻み、そして、

「いい加減にしろ、人形が……………」

「アスカ？」

響は自分の側に来たアスカ。その声が高い事に気づく。

「こいつや、翼、クリス、マリア、切歌、調、セレナ、奏さん。ついでに錬金術師の三人……………」

竜の魔力を解き放ち、その姿を現す。

それに全員が驚き、その姿は、

「えっ……………」

「前の姿」

「かっこいいアスカ!？」

燦然と輝く銀の刀と、黒と紅に染まった剣を持つ、竜の青年がそこに現れ、全員が驚き、心奪われる。

また聖杯に支配され出すが、いまは気にしない。そう彼は決めた。

「さあ、いまより神秘の時ツ。汝の終わりへの物語を語ろうツ」

まだ解放されていない者が、ここにいる……………

62話・神秘を振るう不完全

それは無数の宝具の乱舞だった。

「ふざけるな」

アダムはテイキを引き離し、その一撃が対軍に匹敵する一撃。

「ふざけるなふざけるなふざける」

「うるさい完全」

「ッ!?!」

息を飲み、背後に現れ、大剣を掴む青年。龍崎アスカは、

「完全風情が、オレらから逃れられると思うな」

大地を削る一撃。それに、

「貴様だけではないぞ、理想の抑止」

空を覆う黄金の波紋。そこから現れるのは、王の財宝。

「その人形を破壊するのは、この我^{オレ}だッ」

爆発するように一面に放たれる中、トップサーヴァント達が参戦する。

「馬鹿な有り得ない……この時代にあり得ない魔力を内方した武器、それにその姿ッ。貴様はなんだ、なんなんだ貴様はアアアアアアアアアアアア!?!」

その時、異形へと変わり果てるアダムの姿に、全員が見下し、くだらないものを見るように気にも留めない。

「不完全故に完全を超える、貴様には理解できないだろう人でなし」

「なんだとッ!?!」

「完全さお前は、ただそれだけだ。だが、定められた力を超えなければいけない、それ以上でなければいけない。神も世界も、この世に存在する不条理全てを超えなければいけない我が宿命、フェイトの前に貴様は終わりを告げる」

【貴様】

「まあオレにはなんもん関係ない」

世界も、国も、宿命も何もかもどうでもいい。

—
???

「アスカ、なに言ってるの」

「立花響」

その時、騎士王と守護者無銘が現れ、彼の様子に、無銘は舌打ちをする。

「おそらく本来の彼とほぼ融合状態なのだろう。もとより、抑止達により、聖杯の中身として使われかけたのを、何度も聖杯と繋がり、グランド・セイバーとほぼ融合に近い状態になってしまったらしい」
「このままではどうなりますか？」

「おそらく、龍崎アスカと言う人格はグランド・セイバーと融合して取り込まれる」

それに他の英霊達も現れると共に、ノイズを討つ。

三人の錬金術師達や、装者全員もまた、ノイズを倒し始めている。

「それはまずいね、この世界であれを再現する気かッ」

「あれってなんだマーリンッ」

奏の問いかけに、ガウエインが瞬時に辺りのノイズを吹き飛ばし、マーリンは静かにランスロットなどの側にいる。

「終わりを告げ、始まりを告げる一撃。彼は矛盾するんだ、終わりが始まりで、始まりが終わり。神々の世を終わらせ、人々の世を初めたり、現実の時を終わらせ、奇跡の時を始める。二面性を持ちながら両立するグランド・セイバーの一撃は、そう言うものなんだ」

「そんなこと可能なのッ」

「可能さ銀腕の歌姫さん、彼は世界が有る限り、無限に魔力を使用できる。形、意思、何かがある限り、それは枯渇することはしていない。だから抑止は英霊の座に魂の無いそれを置こうとしたんだ」

ローマの槍が全てのノイズを薙ぎ払う中、グランドの位を持つ暗殺者は僅かに前に出る。

「ならば、汝ら歌姫に賭けるしかあるまい」

「どういうことですかキングハサンさんッ」

響の言葉に、静かに骸の戦士は、八人の装者を見る。

「まだ終わってないッ」

その時、背後から響がアスカへ触れたとき、電流のようにエネルギーが繋がる。

「立花響」

「理想の抑止さんッ、アスカはまだいるんですよね!! なら私は諦めませんッ」

「それでも意味は無い、こいつは願う、全てを終わらす絶対の一撃。それを俺の意思では止められない。これは龍崎アスカが選んだ選択肢だ」

「だとしてもッ」

「たち、ッ!! ちっ」

エネルギーの塊を、炎が放たれ、それを片腕で止める。

その一撃を防いでいる時、歌を聴く。

「これは」

響が口紡ぐは、絶唱の歌。

血の歌声を聞き、悲しそうな顔をする。

「愚かだな、人はやはり。無理矢理ギアと俺を繋げたところで、俺と融合状態であるオレを取り出せたとしても、オレはまた、こうなるというのに」

「」「」「だとしてもッ!!」「」「」

その時、歌が重なる。歌姫、装者全員が響と手を合わせ、絶唱を口にする。

それには理想も驚き、焦る。

「待てやめろッ、このまま聖杯とリンクしている俺の力でギアと接続すれば、ギアが爆発するッ。いますぐ放せ!!」

「だとしてもッ」

「諦められるものかッ」

「彼奴には助けられてばっかなんだよッ」

「まだ言っていない、言葉がある!!」

「だからこそ、倒れてもらうわけにはいかないんデスッ」

「そいつは弟分なんでね、たまには姉御として支えなきやいけないんだ!!」

「まだまだ言い足りない言葉が、私達にはあるのよッ」

「絶対、絶対にッ。こんな終わり方は」

『認めないッ』

アダムの攻撃を防ぐ中、インカムからキャロル達の声が轟く。

『ダインスレイフッ、イグナイトの力で聖杯の力をカバーしてやるッ、気合い入れろ装者達!!』

『演算処理は任せてくださいッ』

『だああああああアスカくんには絶対に文句言ってやるからなッ』

『そうねッ、絶対よ!!』

『踏ん張りどころを間違えるなアスカッ、お前は、みんなと共に、俺達と共にあるんだッ!!』

『アスカさんっ、まだ終わりは早いですよ』

『アスカ!!』

その時、

「あーし達も混ぜてもらおうわよ♪」

「エネルギーの操作は得意分野なワケダ」

「皆さんっ」

「立花響っ、話はまだ分からない。だがそいつには先ほどの借りがある。手を貸させてもらおうぞ」

「ッ!! はいッ」

光が一色になる中、炎がアダムの手のひらに集まる。

「貴様、太陽をその手にッ」

理想の叫びに、アダムは、

【消えろッ、人類風情がッ!!】
小さな太陽の塊が叩き付けられる瞬間、光が、世界を包む。

「……………」

気が付けば地獄だった。

建物が燃え、瓦礫ばかりが広がり、一人の男が瓦礫の山を掘る。

あそこにいたアスカ以外の全員がいる。そして、

「ああ……………」

瓦礫の中、男は涙を流す。この地獄の中で、一人の生存者を、一人の少年を見つけた。

「僕はね、正義の味方になりたかったんだ」

その言葉に、少年は正義の味方を進む。

「その人生が機械的なものだったとしても」

それでも、偽善に満ち溢れた道であろうと、

「正義の味方を張り続ける」

「これは、俺が選んだ道だ！」

僅かにしか生きられない中、それでも生きる事、選び進む事を諦めなかつた命の叫び。

それと共に竜が咆哮する。

絶望的な状況で、絶望しかない局面でも、歩みを止めなかつたAIがいた。

そして英霊達と共に歩み、仲間として一つの存在とぶつかり合った青年がいた。

その中で、一つの行き先があった。

その男は、全てを取りこぼし、なにも救えなかつたと思った。

「爺さんの夢は……………」

助けた少年からそれを聞き、彼はやっと眠りにつく。

「それでも」

炎の中、燃えて、涙を流す大切な人達がいる中で、俺達は……………
その命を代価に、母と父の汚名を晴らす。

聖剣の所為で王になった、彼女の為に、鉄の武器にて全てを斬る。
僅かな時間の中、白銀のように命を散らす。

神々と対峙し、守ると決めた三姉妹の為に散った。

そして、歌姫達の為に、最強の自己犠牲を手に入れて、それを使う。

「やめて」

何故だ。

「私は、私達はそんな事、貴方に望んでいない」

そんな事は知らない。それがオレだ。

なんも力も無いはずのオレは、命を賭ける事しか、守れない。

なら、オレは一人で良い。孤独で良い。だからオレは全てを救いた
い。

「貴方は」

オレは、オレの理想は、

「お前の笑顔を、見ていたい」

そう静かに告げた。

だが、

「だとしても、私達はそんな救済は求めない」

その言葉に、静かに、

「……………そか」

「握った拳を広げて、貴方の手を取る。みんなと一緒に、アスカ」

「オレは、たぶん変わらない。どうしても、お前たちを守る為なら、何
度でも命を捨てる」

『だとしても』

その時、八人の手が伸びた。

それを見ながら、立ち上がる。

「いいのか、ここで命を捨てれば楽になるぞ」

「そんな事を選ぶオレではないのは、俺が一番分かっているだろ」

そう言われ、理想は何も言わず、静かに、

「ならば行け、偽善に満ちて、救済の無い道であろう」

「俺達はけして、いまの道しか選ばない」

爆発が轟く、炎が舞い上がる。

【なっ……………】

その瞬間、現れたのは、

「エ　ク　スツ、　ド　　ラアアアアアアアアア　イ

ブウウウウウウウウウウウツ」

響の叫びと共に、八人の装者はエクストライブ状態になり、その姿を現す。

響だけ、金色の姿で、全てを束ね、一つにする姿で現れ、龍崎アスカは、

「意識は渡さない、まだ響達を守り続けなきゃいけないんだ」

全身に鎧を纏い、竜の翼を広げ、アダムを睨む。

【黄金錬成、だどツ。小娘風情……………!!!】

その時、錬金術師三人も、

「これは、ラピス・フィロソフィカスが」

「シンフォギアと共鳴しているワケだ……………」

「これは……………」

黄金に輝くローブを纏うサンジェルマン達に、アダムは首を振る。

【有り得ない、あるはずがない……………バラルの呪詛で不平を、支配から逃れられない人類が、分かり合えるはずがないツ】

そう言うが、それにアスカは前が出る。

「支配か、生憎と、オレは世界に支配されている身なんでね。いまさら気にしてはいられるか」

そう言い、両手を広げると共に、一つは天、一つは地より、燦然と輝く銀色の光と、漆黒の紅を纏う光が立ち上がる。

「だがそれでもいいッ、オレは大切な者を守る力をくれるなら、永劫にこの魂の次をくれてやるッ。そのたびにオレは、大切な人を守り続ける道を選ぶのだから」

そして宝具を握りしめ、アダムに向けた。

瞬間、アダムは全身から寒気を覚え、警戒する。

【な、なんだそれは……………】

震える声、目が見る先には、黒の刀身、僅かに光に触れれば紅を宿す魔なる剣。

白銀に輝き、光に触れれば蒼に輝く剣を握りしめる。

「神秘を、神の世を、物語を、英雄を、怪物を、終わらせ、始める。新たな幕開けの宝具。神殺しならぬ、神秘殺しの宝具だよッ」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

響の咆哮で、全員が動く。

アダムはノイズを取り出すが、サンジェルマンとクリスが全て打ち抜くと共に、調とプレラーティがけん玉の鉄球と、ヨーヨーにて、アダムを吹き飛ばす。

【くっ!!】

それを振り払ったが、その瞬間、懐に入った翼とカリオストロが拳と斬撃を食らわすと共に、空へと吹き飛ぶ。

【いまさら、仲良しこよしをッ、するなあああああああああ】

錬金術の攻撃が放たれるが、巨大な盾と、光の渦がそれを吹き飛ばし、マリアと切歌が斬撃を飛ばし、空へと括り付けた。

【なっ】

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

一人黄金の響は、ただ拳のラツシュを叩き付ける。

その間、静かにアスカは、

「真名を解放する、その名は始まり、その名は終わり」

竜人と化したアスカの手に、始まりと終わりが咆哮し、光を放つ。

黄金の輝きの中、それに合わせ、

「振り下ろす、ただそれで全てが終わりは始まる」

そう静かに告げて、響が拳で貫いた瞬間、

「この一撃は、神代の終わり」

全ての色が合わさり、剣と成った時、静かに振り下ろす。

「そして生まれッ、新たな世界の幕開けよ!!」

アダムは静かに、全てを包む破滅を目にしながら、輝きに飲まれていった。

「あれが理想の抑止力、しかも本気ではない一撃か」

黄金の英霊、英雄王ギルガメッシュを初め、サーヴァント達はその輝きを見た。

自分達神秘を、問答無用に終わらせる一撃。まさに神秘殺し、神秘に語られるものを終わらす。最強の剣を見た。

「これで彼は」

「ああ、まだ星も霊長も、世界も諦めないさ。彼が彼、自分が守りたいと言う理由で命を捨てる、世界を救う者である限り」

聖杯を望む者は、永遠に彼の命を狙う。

英霊達は確信を得ながら、願うことしかできず、静かにその場から姿を消した……………

63話・終わりと始まり、その後

あの事件から三日経ち、響の誕生日会を遅れて行うことになる。事件の際、一国が神の力に対して、反応兵器なる物を使ったため、その独断がかなり尾を引いて会議になっっているらしい。

だがS・O・N・Gはそれよりも厄介な事実がある。

神秘の扉が開いた。

「それは本当か」

「ああ本当さ、そもそも星と霊長の考えなんて、私からすれば気にも留めないことだから、いまのうちに言っておくよさ」

そう白いローブを纏い、虹の髪の毛を持つ。花の魔術師マーリンが優雅にミカンを持ちながら、静かに語るは、神秘の物語。

「この世界の人は、少しばかり舐めている。神秘の世が再度訪れれば、それは神秘による滅びさ。神の傲慢、怪物が歩く世界。それは滅びの一步なんだよ。彼から一般魔術師が何してるか聞いてるだろ？」

そう言いながらミカンを食べつつ、キャロル、エルフナインは調べものの為に、誕生日会に参加せず、風鳴弦十郎は腕を組み、その話を聞く。

「此度の事変にて、神秘の門が開くと言うのか」

「おそらく、近く神秘の理が君らの頭を痛めるだろうね。会議の話、神の力に畏怖しながら、手にすればと思う輩に思い当たる節はあるだろ？」

それに何も言わず、キャロルは舌打ちする。今回の件は、大きな流れになり、世界を揺るがす。

だが対抗策として、彼もまた考え動く。

「緒川さんからの連絡で、パヴァリア光明結社の末端など、国連と協力の下捕縛し続けています。これには彼女達の協力で説得が一番聞いてますね」

藤堯の言葉に、静かに頷く。

「サンジェルマンさん、カリオストロさん、プレーヤーティさん。お三人方がこちらに協力してくれるのには助かります」

「彼奴らも最後には反応兵器に対して、活躍し、その後も協力したからな。腹の中は何考えているか分からないが」

「キャロルちゃん……………」

友里が少し苦笑するが、彼女達の支配からの人の解放は諦めていないとは、本人達からは聞いている。だが、

「あーし達はとりあえず、月遺跡の掌握で、神の力による支配からの解放は無意味だつてことは分かったのよね」

「あの男、龍崎アスカのおかげなワケだ」

「支配からの解放、統一言語を取り戻しても人は支配から解放されない。見せられた多くの存在、竜のホムンクルス、正義の味方、月の新王、天文台の魔術師。その生きざま、彼らの仲間を見て、それだけでは足りないことを痛感しただけだ」

そしてそれをもって、交渉の席で協力し、いまに至る。彼女達の自由は制限されているが、今現在は問題も無く、もしかすればキャロルのように監視の下なら、自由行動が可能になる日も来るかもしれない。

「それと響さんに神の力が宿った理由についてですが」

「まず彼女は、理想の聖杯、その中身に触れ過ぎた。それが第一さ、あれは神の力よりも強大な、生命の力だ。形有る存在よりも上になるし、それと」

「神獣鏡の光か」

「そう」

破邪の光を持つ聖遺物、その光を浴びた響は、原罪、バラルの呪詛を打ち払われた。

だがその光を浴びたのは、響だけでなく、小日向未来。二人の幼なじみもそうである。

「このことが知られば、彼女もか」

「だけど、本当に危険なのは、今回の件でこの世界、神秘が来やすくなっただことだね。私達の所為だけだ」

そう涼し気に言うマーリン。悪気も何も無く、事実だけ言う。

「…………星と霊長、アラヤとガイヤは、我々の世界で、理想の聖杯を創り出す気だと言うことだが、自分達の世界でしなかつた理由を聞こうか」

「答えは分かるだろう？ 危険過ぎるからだよ」

理想の聖杯は、世界が有る限り永久的な魔力を所持できる。

魂の無い聖杯を創り出せば、どのようなことが起きるか。少なくとも良い事は無い。だからこそ、異世界を選んだ。壊れてもどうなってもいい世界を。

「いまだに彼らは、龍崎アスカと聖杯の融合を目論み、完全に聖杯になれば、魂の無い身体を英霊の座に登録し、理想の聖杯を使用できる状態にしようと考えてる。かなり遠回りだけど、あれはそれくらいしないと危険な品物だからね」

触れれば神秘を殺せる武器、エネルギーである理想の聖杯。その力も神秘だというのにそのような概念の塊であるそれ。

それを聞きながら、やることは変わらないと、息を吐く。

「俺は子供達を守る、彼らよりも歳を取り、自らこの道を進んだ者としての責任だ」

「そうかい、私はハッピーエンドを望みながら動くよ。だから頼むよ」

それは敵にも味方でもあると言う宣言。それに文句を言う前に、いつの間にか友里に花を贈りながら、静かに去っている。友里はすぐに藤堯に渡した。

「調、また少し作るよ」

「うん」

「手伝いますね」

セレナと調と共に、誕生日会の料理を作りながら、みんなでわいわい楽しむ。

翼が食器洗いを進んでするが、すぐに無理矢理抑え込み下からせ

た。

奏は翼をあやししながら、響と切歌はすごい勢いで料理を食べ、いまはいまの結果に満足する。

「できればサンジェルマンさん達とも、こうしたかったんですけどね」
「響、これ以上マリア系を増やそうとするな」

「マリア系ってなにッ、サンジェルマンと私って似てるってことなのアスカ!!」

「……………」

「な、なにか言いなさいっ」

「まあまあ姉さん」

そんな会話の中、アスカはその様子を見て、なごんでいた。

「はあ」

家に帰ると一人であり、色々なことがあり、頭の中をリセットする。分かっていることがある。

「……………知らない知識がある」

爆弾解体など、少しばかり前世、前の記録が残っている。これは危険なことだと知りながらも、どうにもできないし、する気は無い。

「それはそれでどうかと思うけど」

「いたのかマリーリン」

そう言いながら、静かに座り、ジュースで我慢して飲んだりしている。

「この身体に魔力回路ができただろ」

「分かるかい？ ああできたね」

魔術師、いや使いの方での知識で分かる。それより多いが……………

「今回の件で俺の身体は、魔術師として改造された。みんなは気づいてないが」

また普通より遠ざかったこと、響には知られたくないと思う。

そう言いながら手製の薫製料理の余りを食べながら、静かに考える。

「このまま戦えば、オレはきつと自分を聖杯に変えて、響達を守るだろ

うな」

「そして私達は聖杯を手に入れると、まあそういう計画らしいよ」

「ずさんな」

「いいや、君は人の為なら命なんていらぬ存在だよ。グランド・セイバー」

何も言い返せない。

いつだって、いまだって、自分よりも他人の命。

己を犠牲に、全てを救う選択肢しか見えない。

「だから君って、誰も好きにならないのかい？」

「……………なんのことだ」

話を急に変えられたが、それにはそっぽ向きながら、缶ジュースを飲む。それに、

「昔の記憶があるから、昔の女……………アルトリアのことが忘れられないのかい？」

確かに一番強くある記憶ではあるが、それはアニメを見ている感覚だ。

「ご丁寧に知られたくない箇所は欠落している。他の記憶も。

「オレはどっちかと言うとモードレッドかアタランテのようなのがタイプだが」

「全然真逆じゃないかふざけてるのかッ!？」

少し怒鳴るが、そう言われても、

「装者達の中から選べってことだろ？　確かにみんな可愛い、一人除けばお嫁さんに来てほしい」

「ん、その一人はアイドルの子だろ。一番面倒見てる子だろ」

「……………オレはできれば料理作ってくれる人がいいんだ」

そう言いながら、卵の薫製を食いながら、

「だけどもあ、オレのことを好きな奴としか、んなこと考えられない」
それにマーリンがこの世の絶望を見たと言う顔でアスカを見る。

そして、

「あつ、ああうんそうかそうか……………君は全員分の無自覚が詰め込まれたようなものか」

「? なにを納得してるんだ」

「いや、いまサーヴァントごっこしてる、ボクのマスターである彼、天文台の魔術師並みではあ……いや、彼はギャラハツドのホームクルスとラブラブだから、彼より酷いのか」

「だからなんの話だ」

「君は最低だツ、みんなにチクってやるツ!!」

そう言っただけで帰っていった。

なんなんだと思いつつながら、作り置き料理を食べ続けた。

「…………へえ」

とある子が一斉メール送信。

アスカ、私達のこと女の子と見てない件とタイトルを付けて…………

理想の聖杯を置かれた場所で、グラランド・セイバーは静かにしている。

「よおセイバー」

「ビーストIVか、どうした」

白い耳と尻尾を持つ、アストルフオのような白い髪の少年。ビーストIVがグラランド・セイバーに取り込まれた結果の姿で現れ、文句を言いに来た。

「このままでいいのか? このままじゃ、あの世界に神秘が流れ込む。そうなれば全ての物理法則が壊れるぞ」

「それはその世界の結末だ」

「君は動かないのか、全く」

「いつの世も、俺は動かず、生者たる現世に生きる者に全てゆだねるのさ。破滅も救済もな」

けして興味なく、生きてる者が決めることだと受け入れる。

なにより、

「もう一人の俺、龍崎アスカに全て託すさ。なにかあれば、俺の力を貸す」

「それが問題になるのか?」

「それも、彼奴が決めたことだ」

そう言う性格なのは知っているため、何も言わずその場に座る。無限にそこにあり続ける夢幻。

何もかもできるのに、何もできない彼は、幸福か不幸か分からない。信じる事しかせず、信じる事しかできない。

最強であり最弱である彼は、結局何があるうと変わらないのだ。

「君はずっとそうしてろ、僕はいくぞ。できることがあるかもしれない」

「ピースト故か？」

「ああ、僕は人類悪。比較するIVの獣だからね」

そう笑い、静かに帰ろうとする。時だ。

空間にヒビが割れ、二人は戦闘態勢に入る。

「この空間に侵入者だとッ」

「誰だッ」

そこから、紅い眼光と、銀色の髪が見える。

「待っててくださいませ……………旦那様……………♪♪」

二人は別の意味で戦慄した。

空間を急いで補強するが、彼女は壊し始めている。

どんだん侵食し出す彼女に、

「すまない助けて」

「無理言うな」

「お前も食われるぞッ」

「無理言うなああああ」

泣き声と悲鳴が交差する。

彼女の笑い声だけは、静かに響いた。

最終回・彼女達の明日

それは、理想の終わりだった……………

「旦那様、わたくし、ついにやり遂げました……………」

抑止力を初め、数多くの存在でも、アクセスできない領域にある保存庫と言われる。存在しない歴史や情報、そしてそれで生まれた力を保存する場所。

ここは理想と言う幻想で生み出された、本物にして偽物、偽物にして本物と言う矛盾が共にある空間。

神々ですら関わる事ができない。はずだった……………

「……………清姫？」

その主である、生命が描いた理想と言う概念が姿形を取る幻霊。理想の抑止力、グランド・セイバーは困惑していた。

目の前の、美しき白銀の髪をなびかせる白竜でありながら、そうでない少女は微笑む。

「はい♪ 貴方の妻です♪♪」

彼は逃げ出した。自分が捕まれば、全ての自分が捕まるから。彼女は追いかけた。全ての愛しき人を捕まえるために……………

何か光が差し込む中、彼は起き上がる。

「んう〜」

背伸びをし、ベットから出ようとすると、ガシヤリと言う金属音が響く。

「えっ」

「起きたわね」

「ま、マリア……………」

「マリア、やめ……………いやああ……………」

「起こすか」

キャロルは兄に降りかかり、夢の中から助け出す。

——月詠調

「やっと傷が癒えた」

「そうなの」

私は頬の印が消えているので、内心残念です。

ですけど今日はアスカが私を調神社へ連れて行ってくれます。バイクの後ろに乗り、なるべく彼に抱き着き、彼を感じる。

私達を守るその背中には、見た目と違ってやっぱり大きく、それを感じると、私の中で時々妙な衝動に駆られそうだ。

いまは情報だけ集めるだけにとどめないといけない、がまんがまん
……………

けど……………

(アスカのこと、やっぱり好きなんだ……………)

独占したい、ごめん切ちゃん、セレナ。これだけは譲れないの。

いずれアスカを手に入れる。手段は選んでいる暇は無い、選んではたら行き遅れる。

(今度は逃がさない……………)

(調が強く抱き着いてくるが、なぜさつきから冷や汗が止まらない?)

——暁切歌

「デス〜」

いまから私は、アスカと二人つきりでデートデス。

調とお出かけしてからデスが、それはいいデス。

「遊園地デートデスっ♪」

って、

「デート……………お、男の人とデート」

アスカはやっぱり、大好き。心の中が温かくなる。

好きという思いがあふれて来る。好きなんだ、調にも渡せない。

「アスカ……………大好きデス」

アスカのデートは自分を心配して、自分から言い出したデート。

「例えフアンの人からお姉さまと言われて罵ってとか言う手紙とか、裏で百合姫とか言われたりして……………どーせ男の人と付き合っただけいっしょ。初恋も何もしてないわ、良い人が側に……………うわくくくんっ」

「ま、マリア……………」

そして私は、アスカを見る。

……………

確かに、このまま成長すればあの姿に成長するわね。

「アニユカアアアアアアアア」

「!?」

押し倒した、押し倒したッ。

「ううっ、そうよ。もうアスカしかいないもんっ、ご飯おいしいし、私のコト、ちゃんと見てくれるし……………」

「マリア？」

「アスカ、アスカはいや？ ねえ」

「いや、そのね。オレはそう言うのは」

「ううっ」

そうよね、無理矢理や、いないからとか、そんな理由は無いわよね。だけど……………

「私はそれでもいいのアスにやあああああああああ」

「!」

上着を脱ぎ、彼に覆いかぶさる。

服の中にも手を入れてにやるううううう。

「アスカしかいないの、女の子で、私のこと見てくれるの。アスカしかあああ」

そう叫んでいると、もうわけがわからない。このまま行こううん。

「お願い……………あなただけは私のこと、お姉さんでもなくでもないまま、私を見て……………」

そして私は倒れ込んだ……………

「……………寝た……………酔いが一気に。助かった」

——セレナ・カデンツァ・イヴ

ついに姉が暴走した。乙女の情報で知った。ついにやってしまった我が姉。

「アスカさん、来ちゃいました」

我が姉ながら、焦るあまり暴走して、結局何も無かったが、何度突撃するか悩んだ。

「セレナ、お塩は」

「はい」

お昼前でなに食べるか、一人で料理は面倒。そう呟いていたから、おすそ分けを少し持って尋ね、共にお昼を作る。

いまはこのままでいい、身体は13歳でそろそろ14。私は焦ったところで仕方ない。

私は料理や家事の腕前を上げよう。

「うんおいしいよセレナ」

「そうですか、嬉しいです」

いまは少しずつ好感度上げなきゃ……………

「あつ、食器は私が片付けますね」

「ん、ありがとう。ふう」

今のうちに情報を取るために設置もしないと。

私は必ず勝つ。姉さん、安心して。行き遅れても姉さんは姉さんだから。

最大の敵はお隣と調。頑張ろう。

後はあの人が暴走しないように、目を光らせないと……………

この人は、誰にも渡しません。

「セレナ？ 少し近くない？」

「あつ、すみません」

こうして少しずつ、そして確実に……………ふふっ。

——天羽奏

「翼、頑張ってるな」

真剣でろうそくの火を斬る翼。彼奴の覚悟が見える。

「ああ奏、久しぶりに覚悟を決めたよ」

「そうか……あたしもそろそろ本気を出すか」

「頑張るよ、そう」

静かに、

「アスカに名を書かせる……」

「……ああ」

少し前に使っていたホテルの部屋がえらいことになっていて、覚悟を決めたのだ。

「もうそのまま押し倒すッ」

「あくできるならしてみせろ」

「ああッ」

半泣きの翼が出ていく。

しばらくして後を付けて、様子を見る。

やっぱり翼は可愛いし、アスカも可愛いな♪

——エルフナイン

「それでアスカさんは」

「翼は緒川が回収したから無事だ、だが、そろそろ考えないとな」

「はひっ、そうですね」

それは、僕達の大切な家族のためにもしなければいけないこと。

そう……

「お兄ちゃんが間違いを起こさないようしないですね……」

「ああ……なにされてもいいように、今日にでも手術してでも治させないとな」

もうお兄ちゃんは病氣なんです。きつと、だからいつか響さん達の誰かに襲われます。

そうならないように、なつても責任を取るようなことにならないようにしないのです。

「問題はその後です、お兄ちゃんはお奥さんや家庭が作れなくなります」

「まあそれは問題ない、錬金術がある」

「ああそうですね」

そうでした、キャロルの言う通りです。

僕達には錬金術があります。これで問題解決です。

もしも、今度問題を起こしたら……………

「やるぞエルフナイン」

「はひ」

静かに覚悟を決めて、後は準備しておきます……………

——小日向未来

「アスカ、また色々無茶したね。まったく……………」

虚ろな目で私に髪を梳かされているアスカ。いまは可愛いロリータファッション。

また響を置いて無茶したのでおしおき中です。

だけど最近は筋肉がついてきて、着せられなくなってきた。

「……………」

「ん、未来？」

「アスカって男の人なんだね」

「泣くよ」

そう言うアスカ。うん、やっぱり可愛い。

けど、やっぱり男の子の幼なじみなんだよね……………

「アスカ」

座っているアスカに、私は後ろから話しかけた。

「なん」

その口をふさぐ。目を開けたらアスカが驚いている顔があった。

いまさらだよ。響も大事だし、アスカも大事。

「私、響以外許す気無いからね」

「…………え」

「いまの内緒ね」

そのまま続きをする間、アスカは放心している。ともかく、私は私、二人の大事な幼なじみ。

——龍崎アスカ

「…………はあ」

キャロルもエルフナインも仕事で、ベランダで月を見ながら、静かに麦茶を飲む。

未来が妙なことを言ったし、みんな変だ。

もしかすれば、オレが生き急いでいるせいでみんなもそうなのだろうか？

「…………」

目を閉じると、色々な人々、記憶、関係が垣間見える。

時には目の前の人の恋人、愛する人、家族。

または部下など、様々な俺の記憶。それを知れば知るほど、龍崎アスカと言う存在が真っ白に消えていく気がする。

この感覚は知っている。前の俺、一人、ただ淡々と何も思わず、周りに合わせるだけの人生の、なにも無い人生。

最後の一瞬でしか色が無いとも言える人生だと、はっきり言える。

「…………マーリン、テメエは一応、耐性ができている人選を選んで殺したな」

下されたグラント・オーダーを引き延ばすことはできる。だが拒否はできない。

冠位である我らグラントは、抑止の指令を完全無視はできない存在。

正直に言えば、聖杯になってもいいと思っている。

だって、俺は常日頃思うのだ。なぜそこに俺はいないのか。

何故別の俺をそこに置く？ その俺はただの人間だ。

決めたのは俺だ、けどなぜ大切な者を秤にかけ続けなければいけ

ない。

地獄を見た。

地獄を見続けている。

救われた俺や、大切な人達に囲まれる俺がいる。だがもう一つの一面、俺は全てを失う。

繰り返す。

助けてくれ。

これが現実に砕け散る理想であり、現実を乗り越える理想。そう言うモノ。

「……………」

また味わうぐらいなら、オレは俺の為に自我を壊し、保存庫の一人にならず、壊れたただ魔力を吐き出す人形になった方が救われる。

辛い。

大事なものを裏切り、救えず、守れず、傷つける。

助けてくれ。

俺達理想を助けてくれるのは、いつだって人間なんだ。

だが壊すのも、また……………」

「……………寝よ」

そう言い、布団に入る。

正しい選択は、なんだ……………」

——???

ピンポーンと鳴り響くインターホン。

今日は休み、休日の中で静かに過ごしていたアスカ。誰だろうと思いい、扉を開けた。

「はいはいどな」

瞬間、抱き着かれ、唇を奪われる。

いきなりなことだと思は停止し、鼻孔をくすぐる良い香り。

自分よりも小さく、柔らかい、軽い身体。

そして視界に広がる。

「アスカ……………」

上目遣いで目をうるうるさせたと………

アストルフオがそこにいた。

「!」

音楽を聴いていたのか、イヤホンを付けていた調とセレナが立ち上がり、女だけの集まりの中で周りを見る。

「みんなアスカの下に急ぐよっ」

「ど、どうしたデス調?」

「急がないと大変なんです姉さん!!」

「せ、セレナ?」

急いで装者全員がアスカ家へ急ぐ。

「んうううううううううううう」

「ん♪ はあはあ……………アスカ♪♪」

唇を奪われ、押し倒されたアスカ。お互い全力で抵抗し、腕を抑えられたアスカは、唇を舐め、頬を赤く染めたアストルフオを見る。

「アスカ、来やすくなったから、来ちゃった♪」

「襲いに来たの間違いだろツ、やめろおおおアストルフオ!」

息が荒く、顔を胸に埋めるアストルフオ。無理矢理引き離そうとす

るアスカ。

「アスカ、好きだよ……ボク、君のことが大好き。前の君も、いまの君も。アスカ」

「オレは友人としか見てないんだよっ、結婚するなりなんなりするのなら、女の子がいいんだよっ!!」

「いいじゃないかつ、そんな女の子いないじゃないか!!」

それに何も言えなくなる。

そしてまた顔を近づけて来た。

「やめ、やめてくれアストルフオ」

「アスカ好き……」

ドカツと言う音が鳴り響くと、静かに崩れるアストルフオ。

「た、助かつ……」

助けてくれたのが、

「ジャ、ンヌ」

「アスカさん」

真剣な顔、静かに片手でアストルフオを掴み、追い出したと共に、玄関の鍵を閉める。

「大丈夫、大丈夫ですよアスカさん」

「な、なに、なにが……」

しりもちついたまま、静かにジャンヌから距離を取るが、ジャンヌはすぐに覆いかぶさり、その顔が近くにあり、胸が身体を押しつぶす。

「痛いのは私ですのぞ」

「ジャンヌさんっ」

「マシユさんに渡すしかないんですっ、まだフリーならいいですよねっ」

そう言っつて今度はジャンヌと、扉がガンガン叩かれ、声が響く。

『アスカアアアアアアアアアアア』

「クリスっ、たすぶっ」

そのままジャンヌに押し倒され、クリスはそれと共に扉を蹴り破る。

しばらく味わってから、ジャンヌは殺気に気付いて、その場から離

れ、アスカは取り出した剣で防ぐ。

「…………アスカ、無事？」

「し、調？　なんでカッターなんて持ってるの？」

「買ったの」

そして全員がジャンヌを見ると、こほんど少し口元をぬぐいながら、

「わ、私も女です。好きな人の来世ですから……………」

「……………」

空気が苦しくなる。

「てか、なんでそれで抵抗しなかった」

クリスが静かにアスカが持つ剣を見る。アスカは震えながら、
「き、傷つけられるかつ。どんなことされようと、それだけはできないっ」

「アスカさん……………」

「アスカ……………」

アストルフオも頬を赤く染め、静かにセレナがスタンガンを構える。

そして、

「だめ……………」

響がすぐに近づき、飛び込むようにアスカに抱き着こうとする。

「アスカは渡さないっ」

そう言っって抱き着こうとした拍子に、

「あっ」

「！」

足を滑らし、少し体制が崩れる響。それを支えようと、反射的に動くアスカ。

ゴンツと言う音と共に、空気が凍り付く。

唇を抑えるアスカと響。

その瞬間、

「デッスううううううう、それは卑怯デスううううううう」

「アスカッ」

「アスカさんっ」

こうして騒ぎが起き、アスカはいやああああああと悲鳴を上げる。

のちに許しを得る為に女装する羽目になるが、だが、

「オレらしいのだろうか……これが……」

そう泣く泣く言いながら、みんなの機嫌がよくなるのを待つ……

——
???

「私、アスカとキスしたんだ……」

嫌では無く、胸がどきどき鼓動する。

そうか私は……

少女の自覚が始まり、この先の物語はどうか誰にもわからない

……